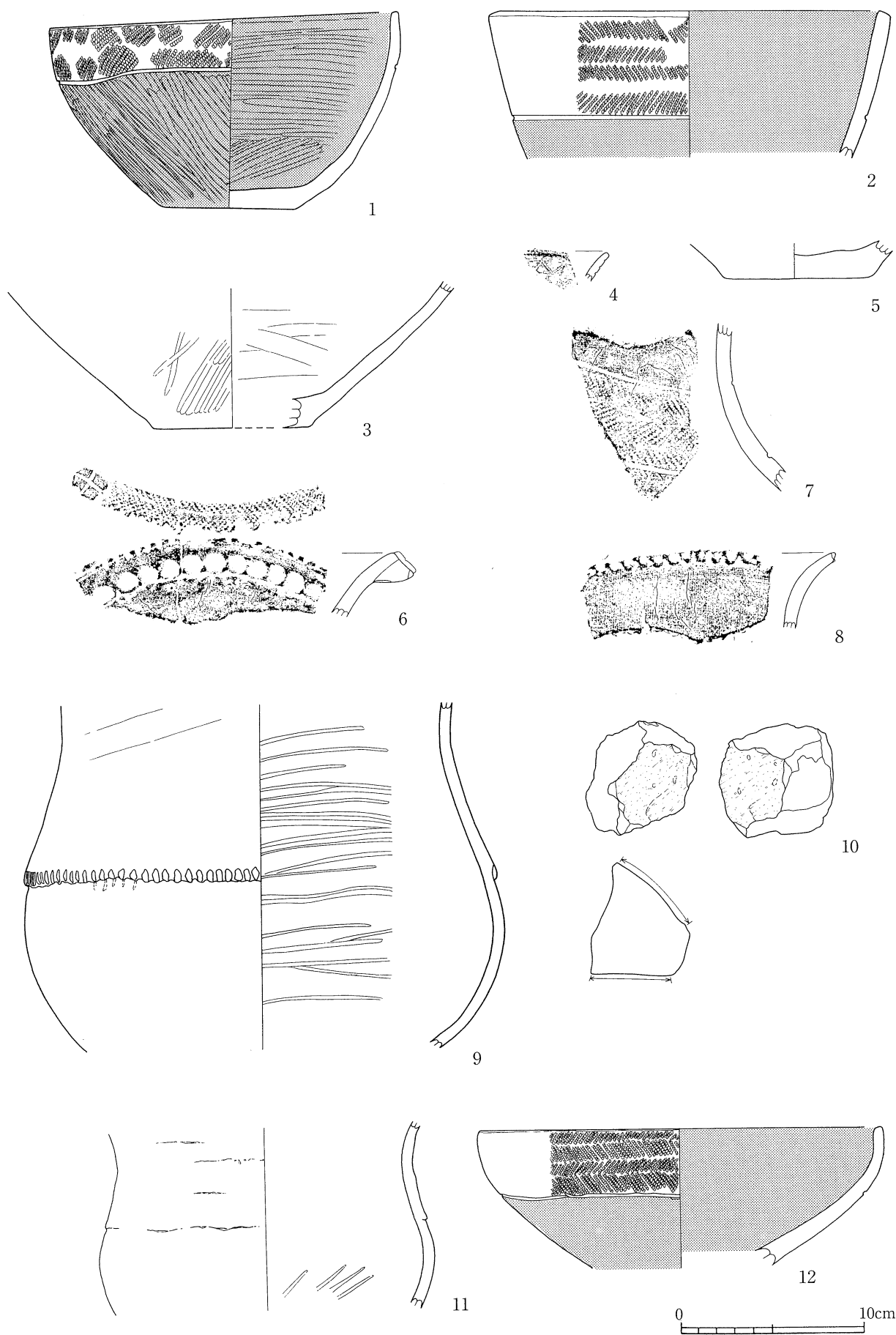
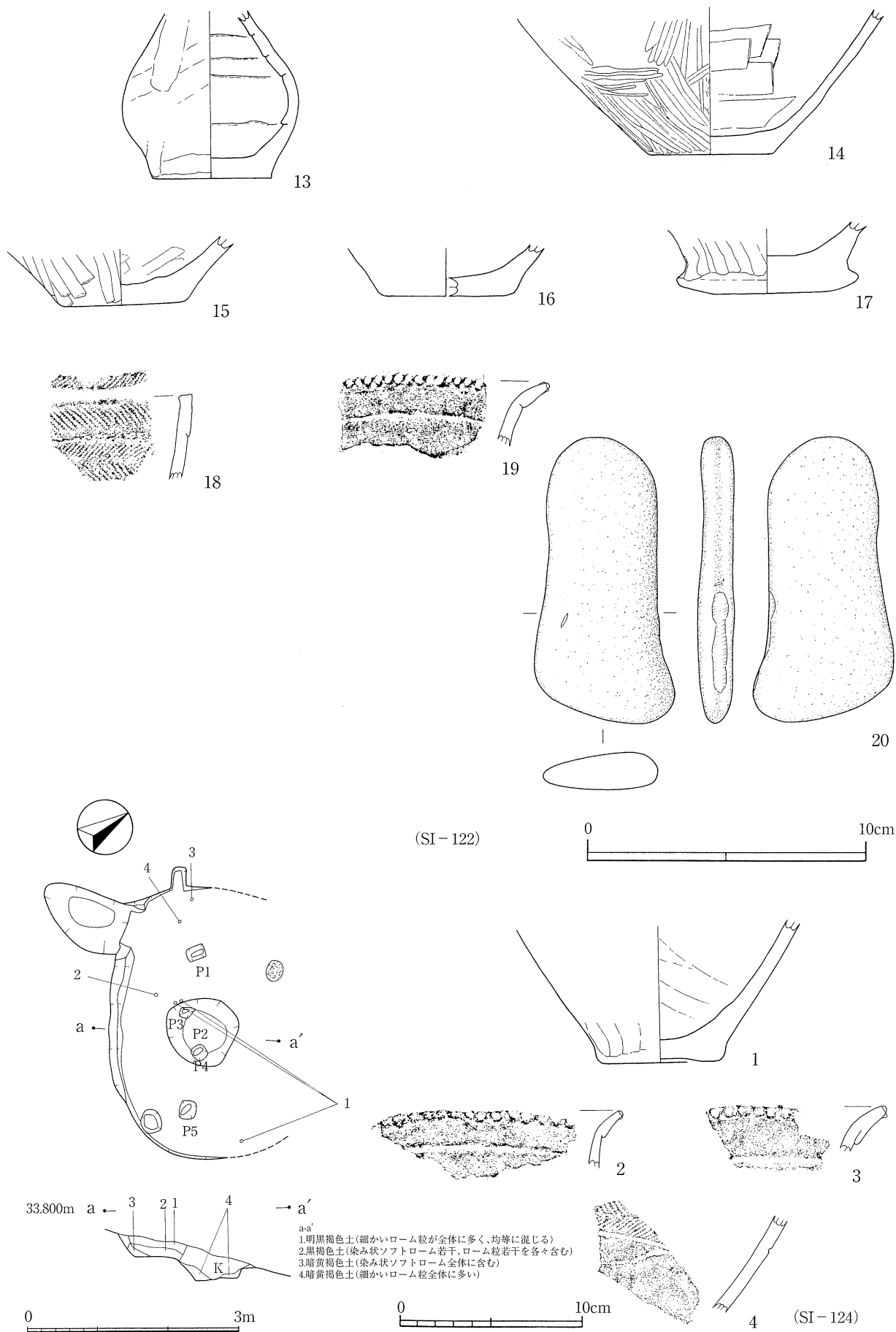
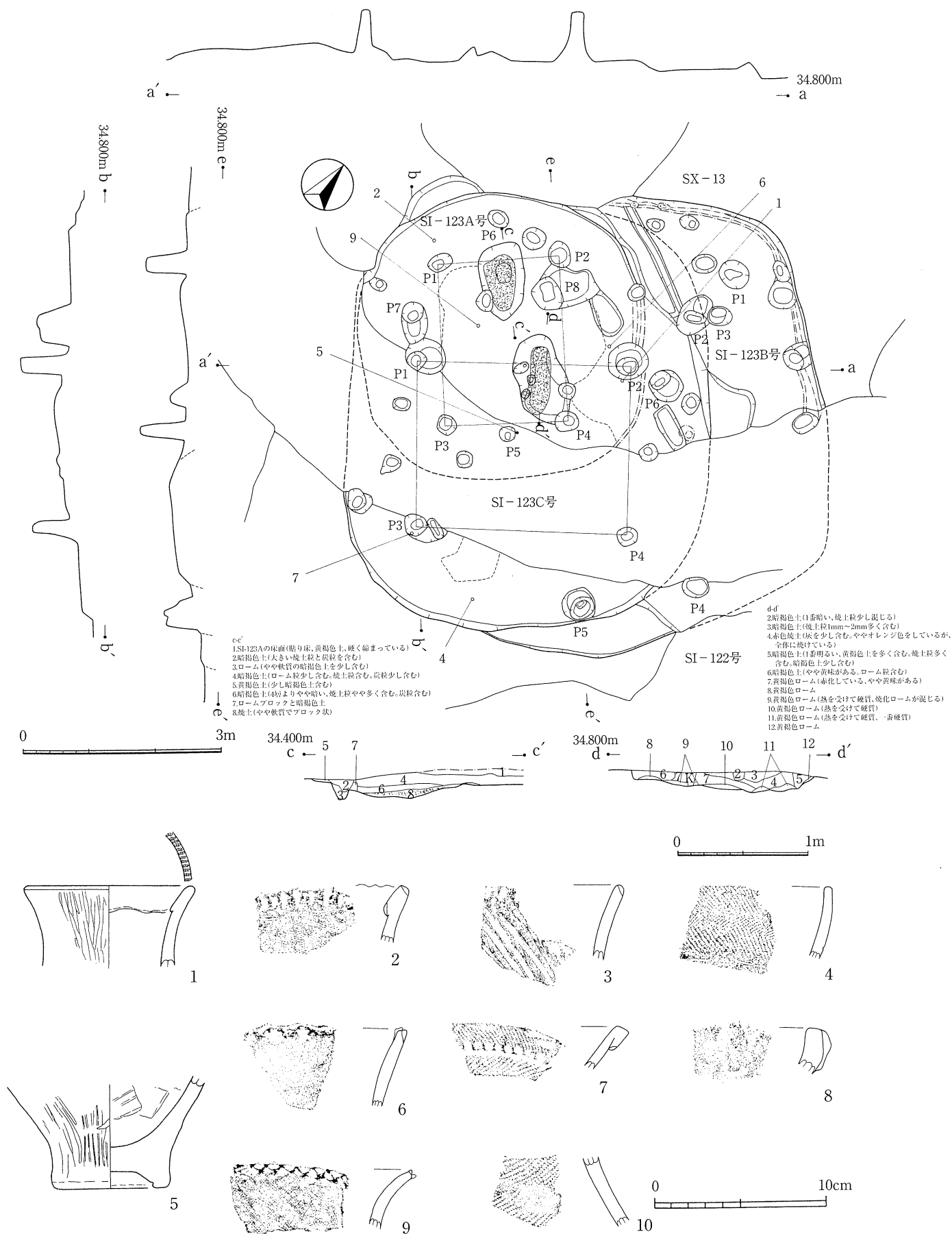




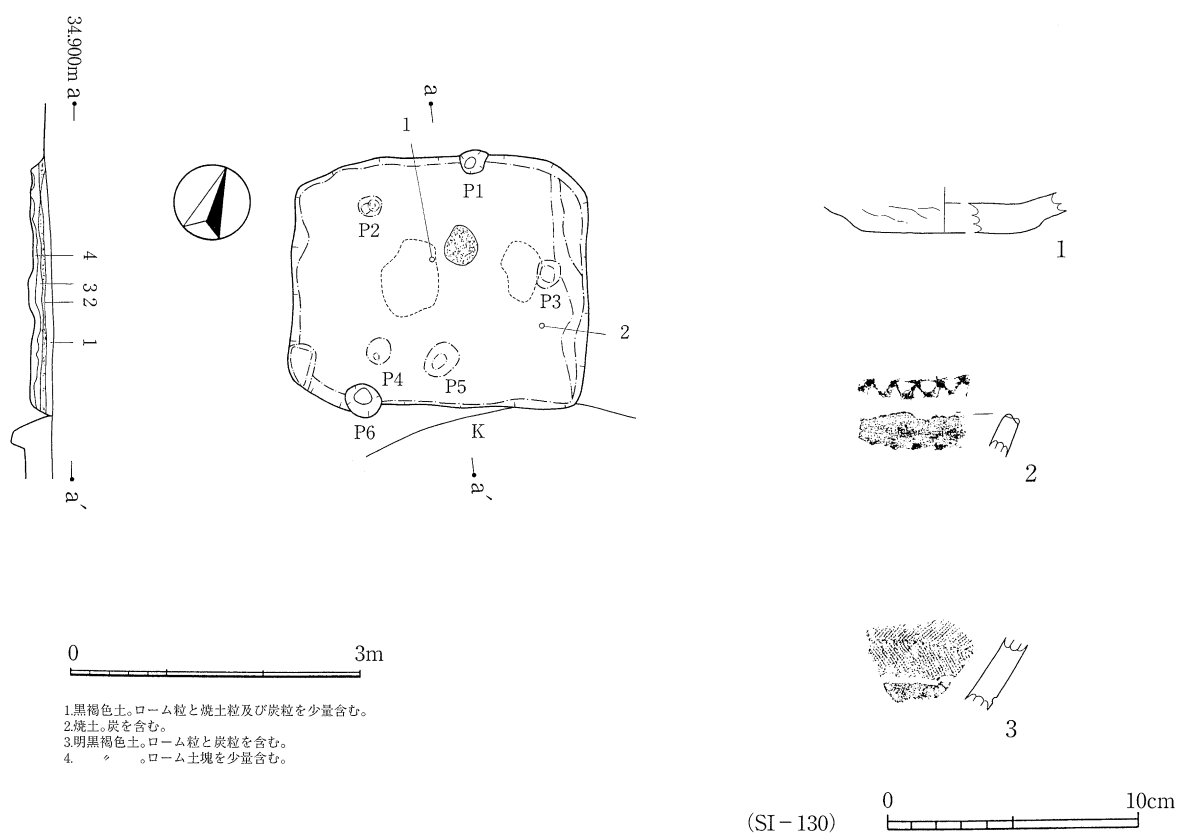
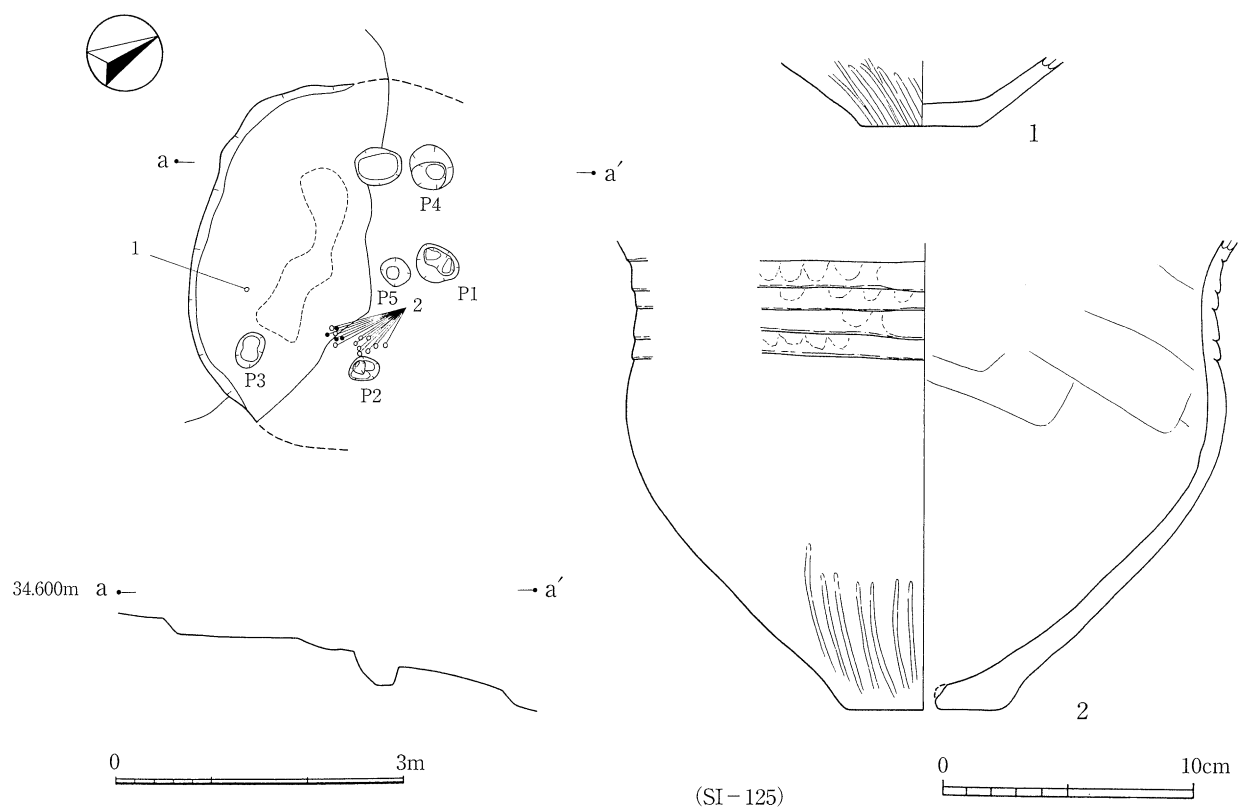
第116図 121号・122A・B号住居跡 遺物実測図
(1～8 = 121号、10、12 = 122A号、9、11 = 122B号)



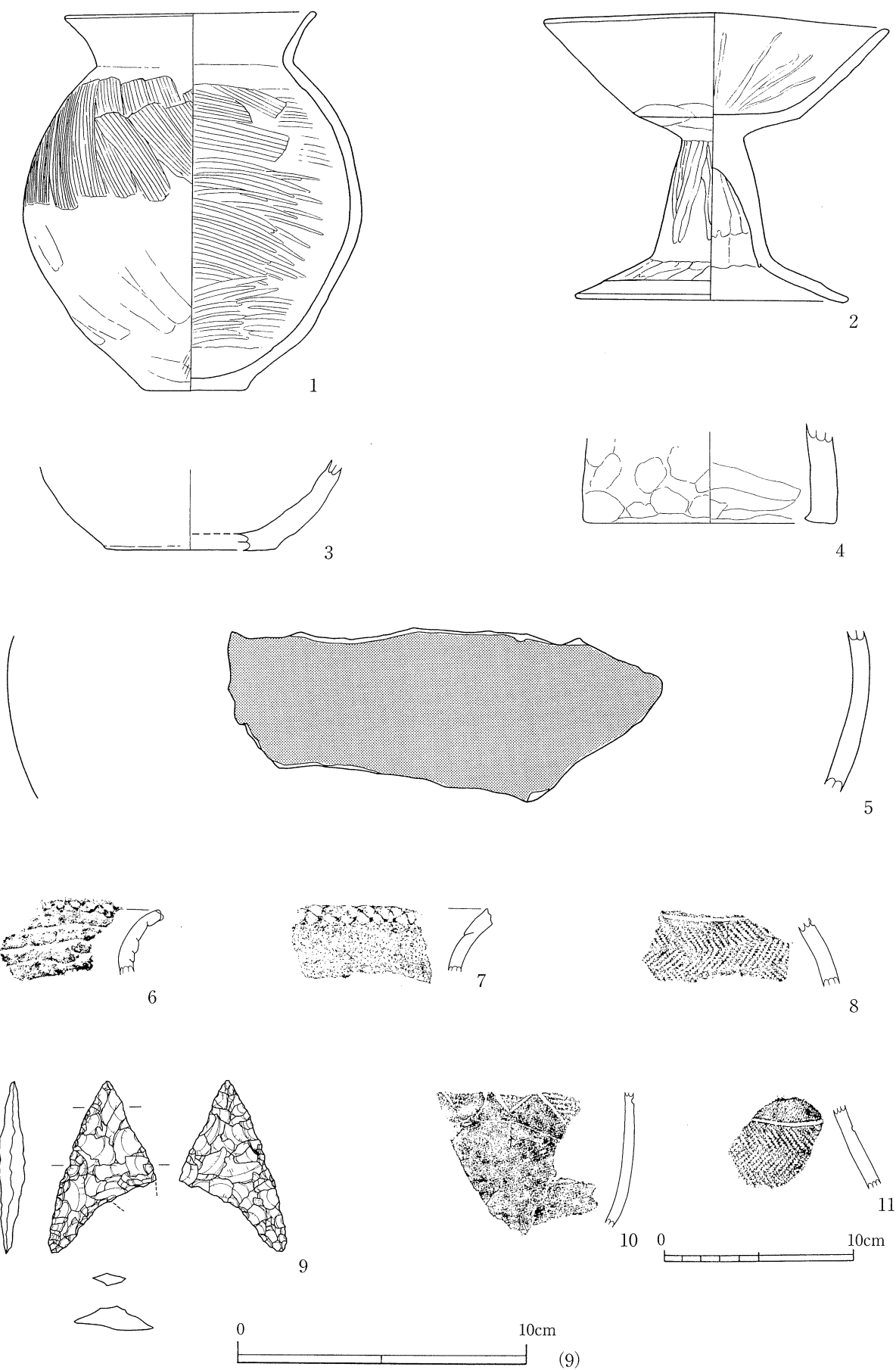
第117図 122号・124号住居跡 遺構・遺物実測図



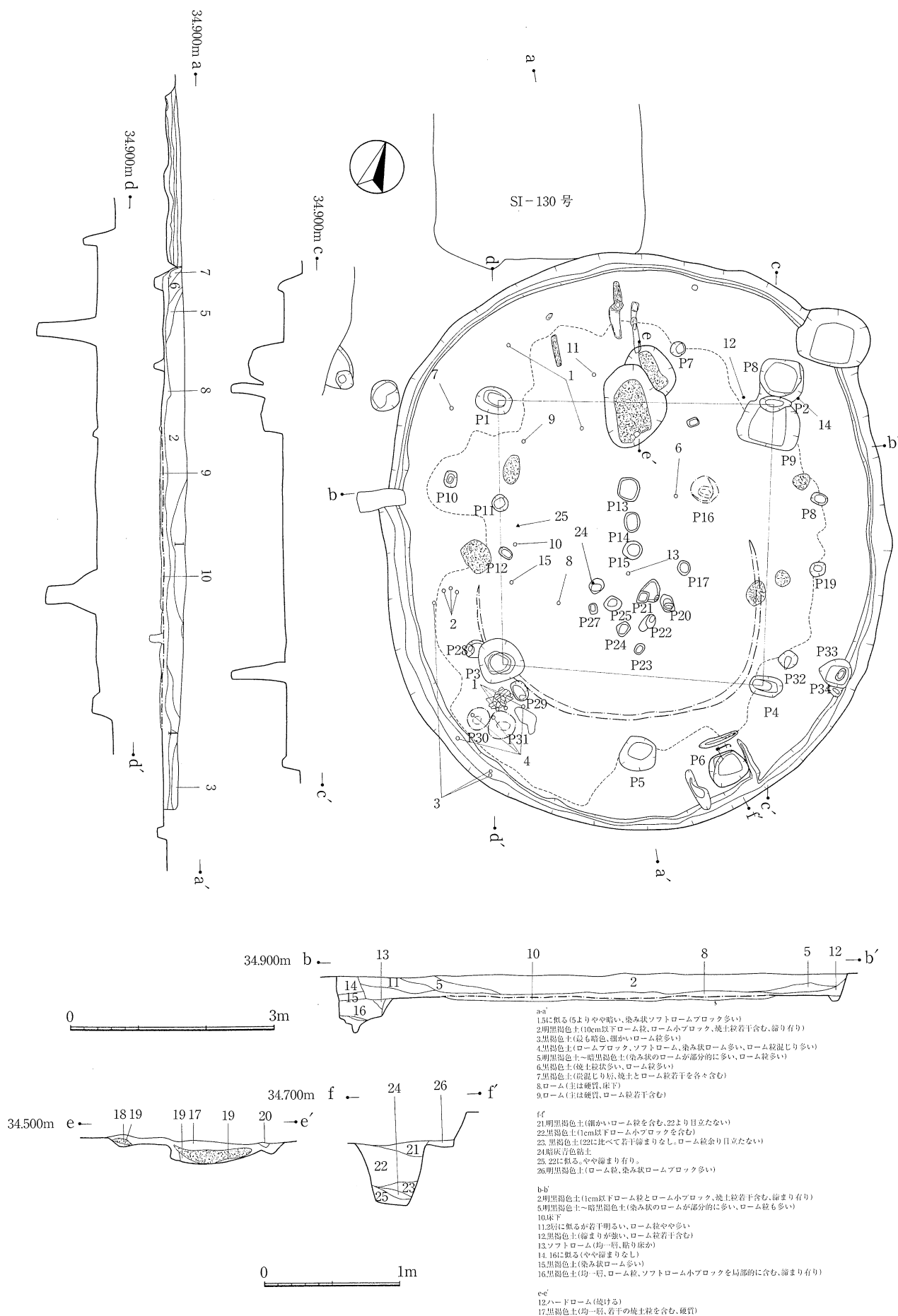
第118図 123号A・B・C住居跡 遺構・遺物実測図 (4、7 = 123C号)



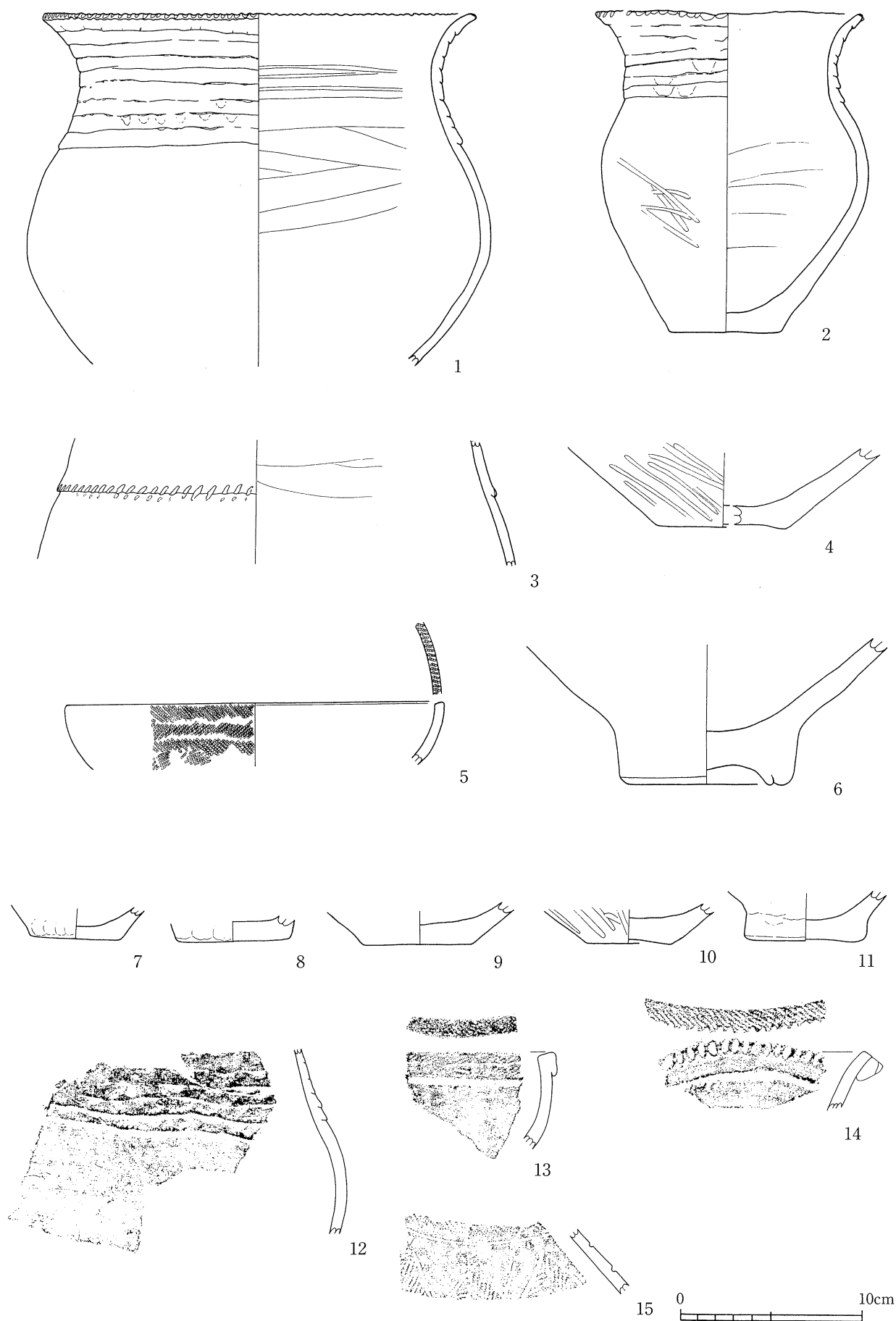
第119図 125号・130号住居跡 遺構・遺物実測図



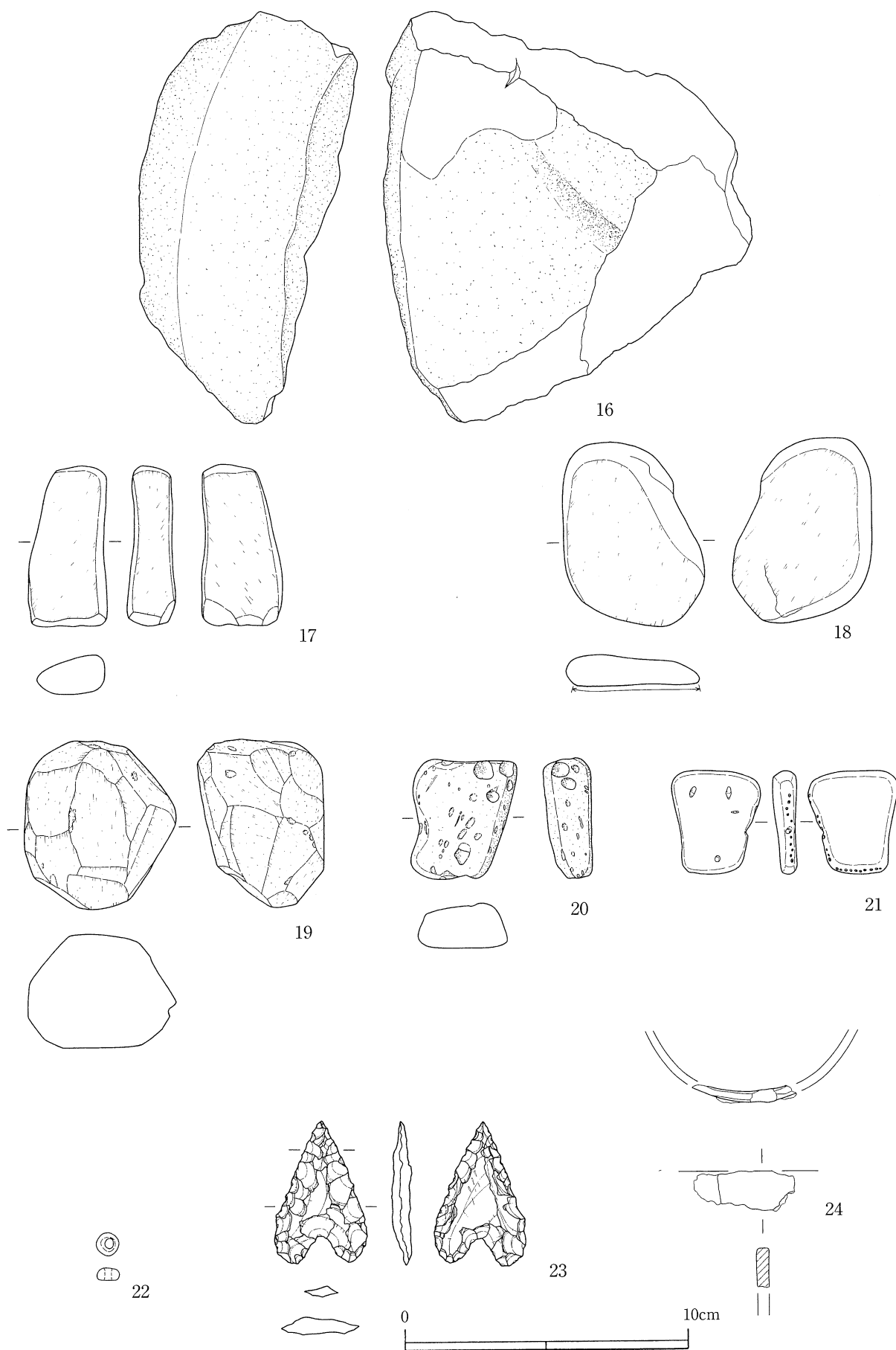
第121図 127A・B号・128号住居跡 遺物実測図
 (1、2、9 = 127A号、3、5 ~ 8 = 127B号、4、10、11 = 128号)



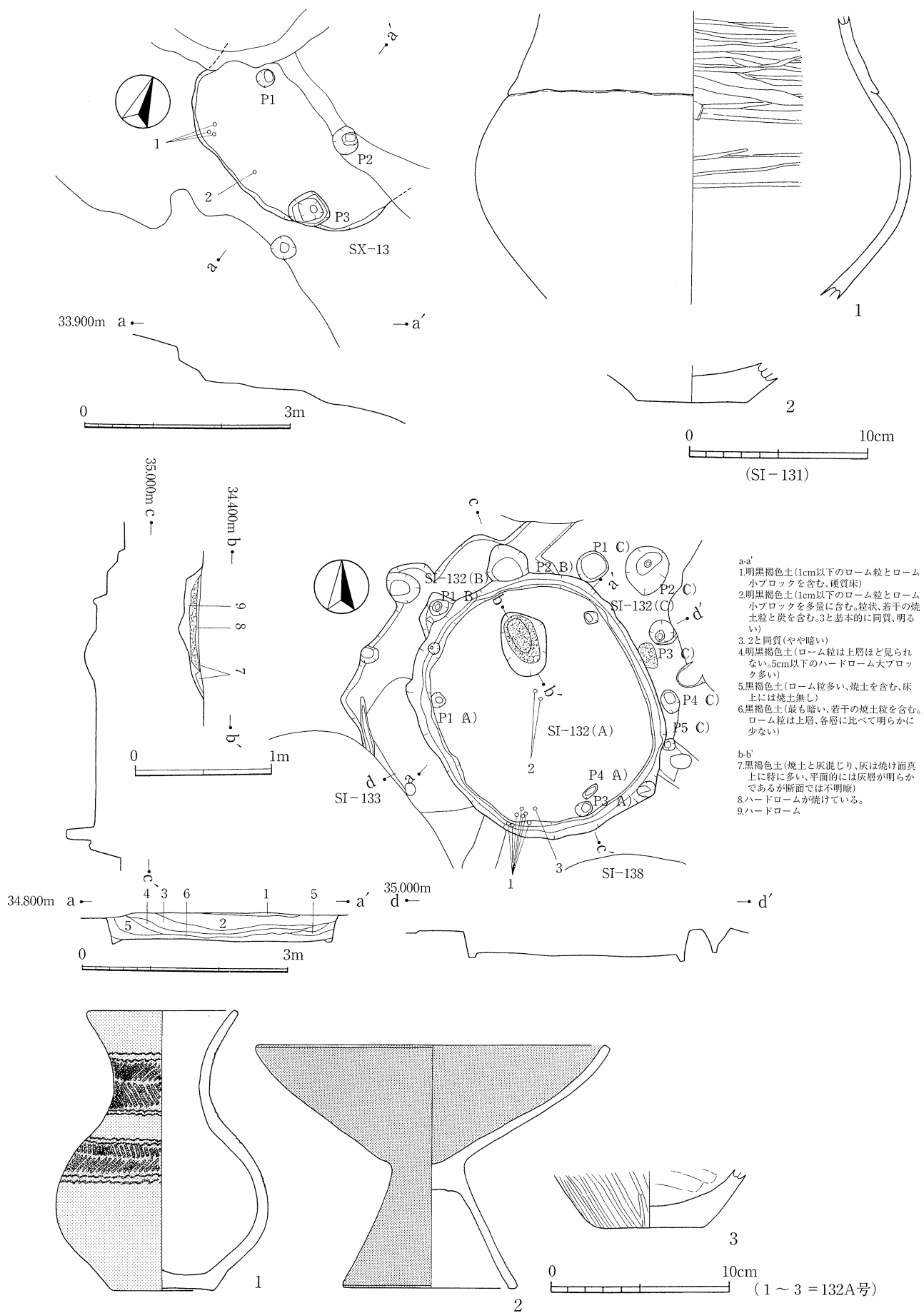
第122図 129号住居跡 遺構・遺物実測図



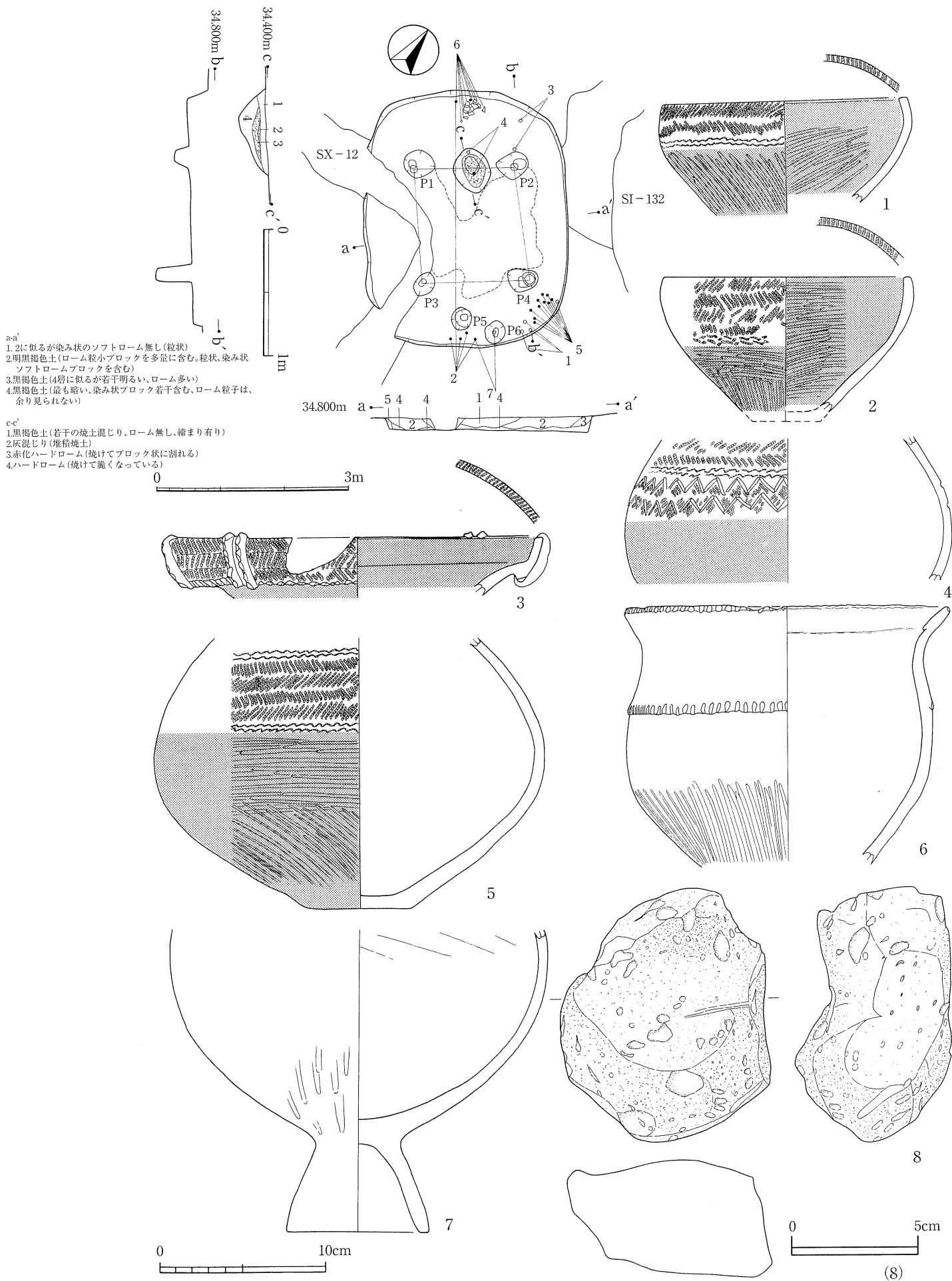
第123図 129号住居跡 遺物実測図(1)



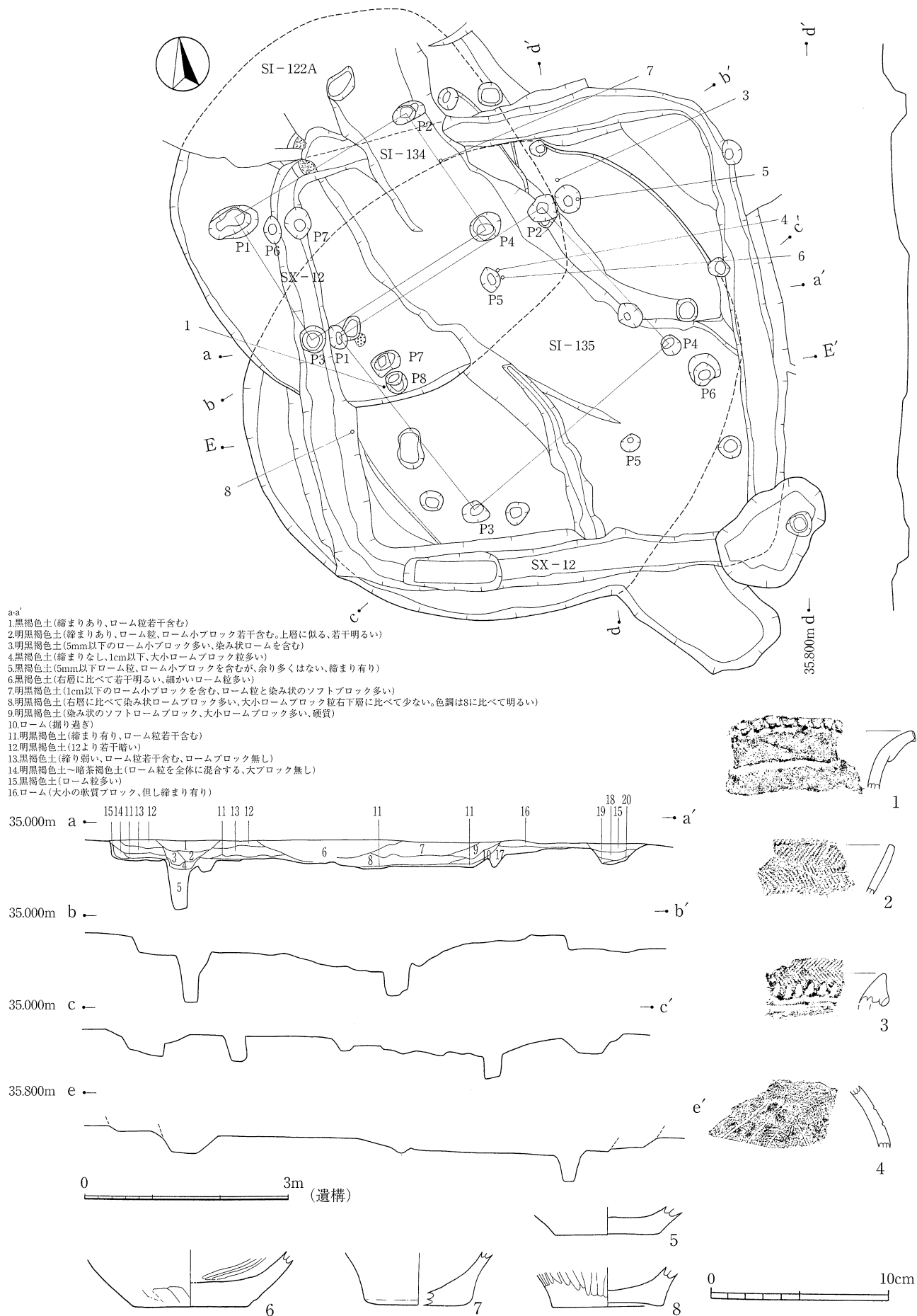
第124図 129号住居跡 遺物実測図(2)



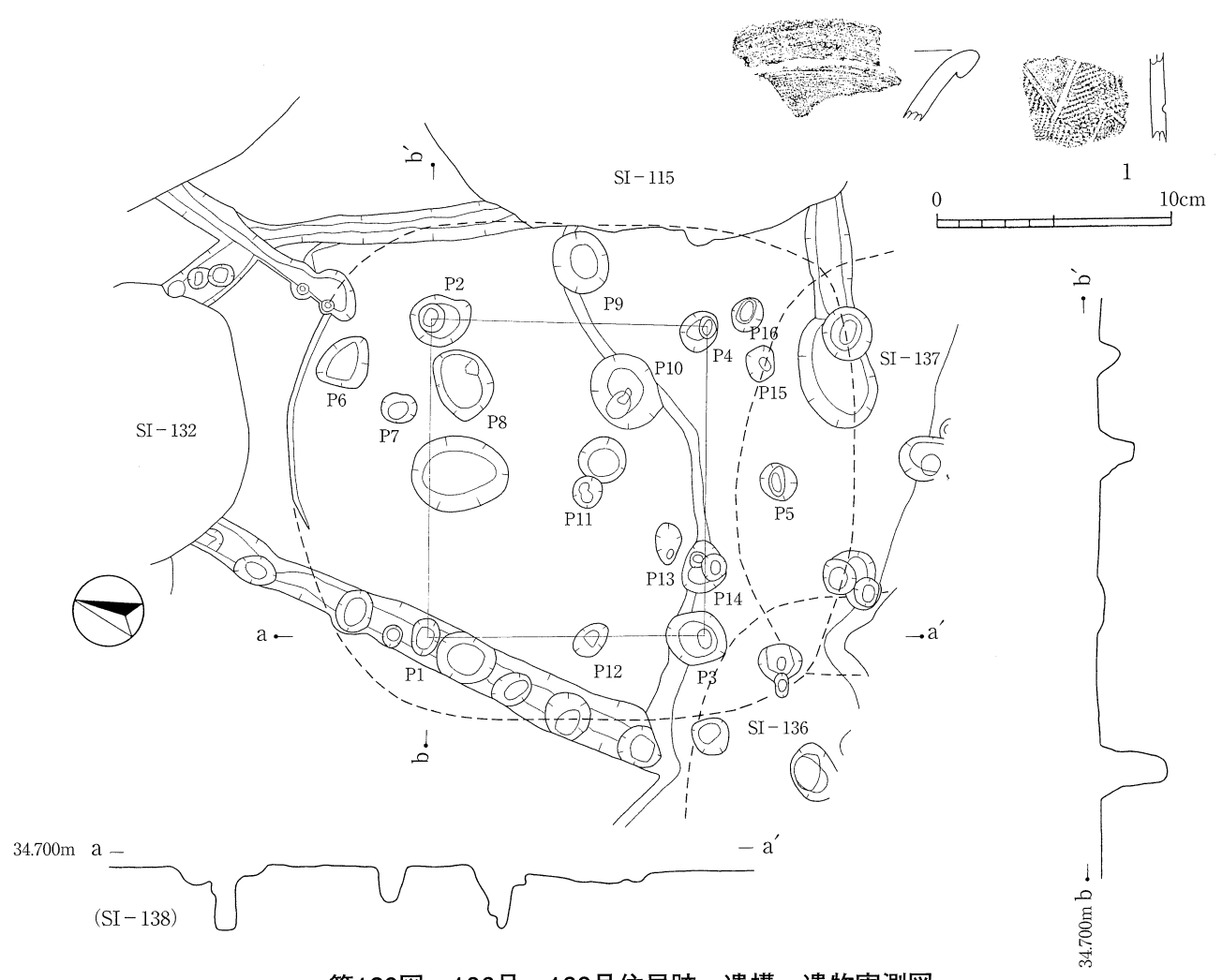
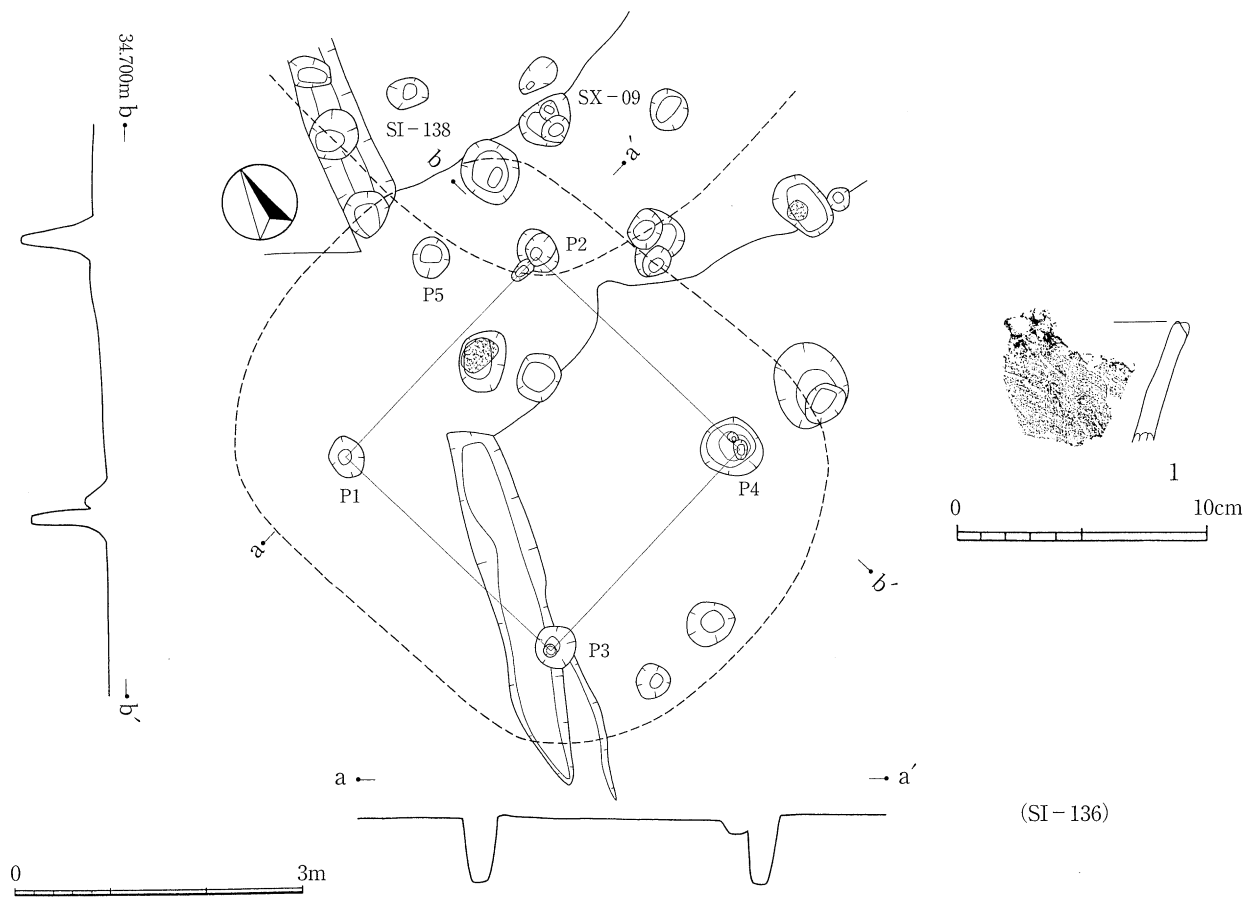
第125図 131号・132A・B・C号住居跡 遺構・遺物実測図



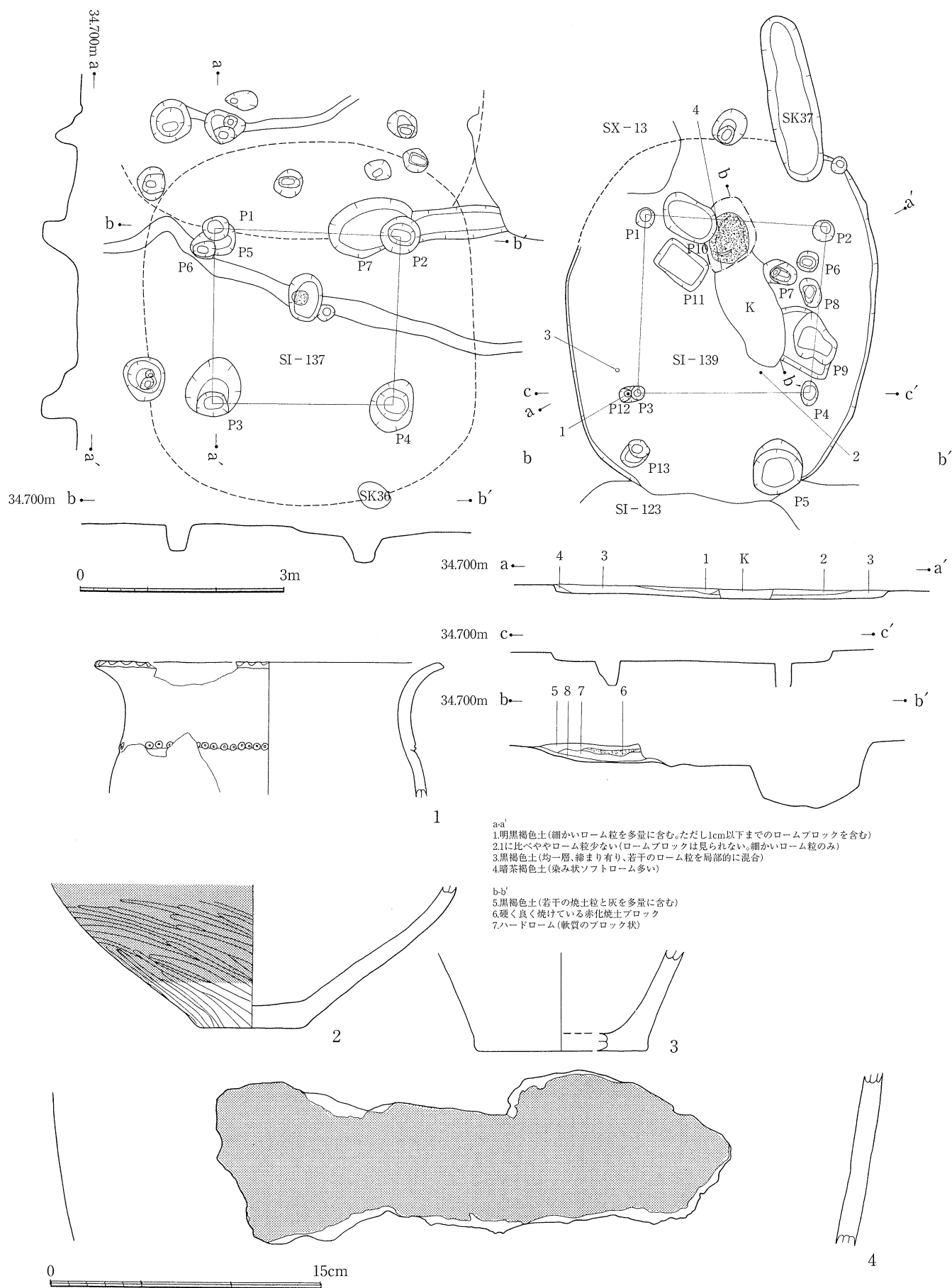
第126図 133号住居跡 遺構・遺物実測図



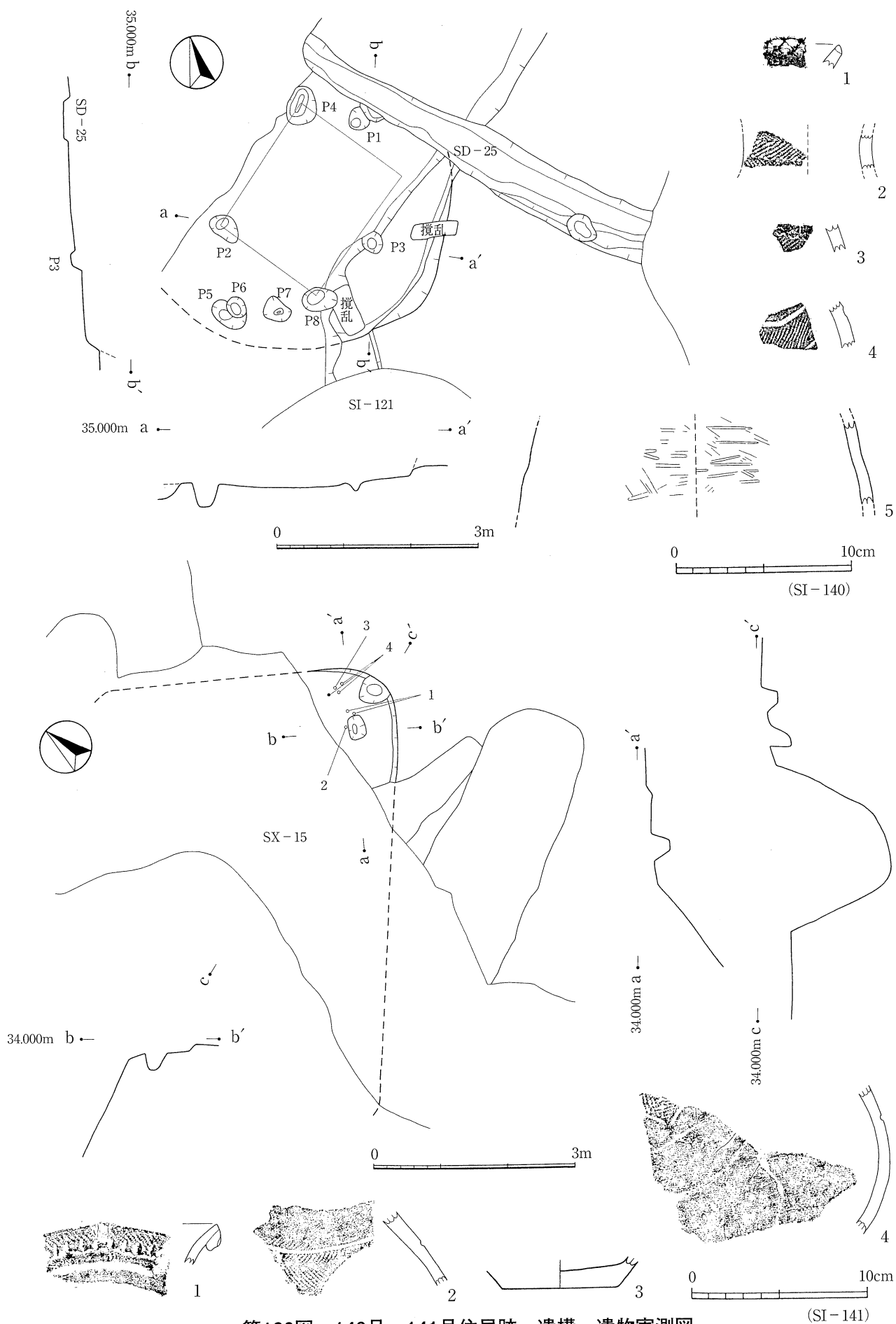
第127図 134号・135号住居跡 遺構・遺物実測図 (1、2 = 134号、3～8 = 135号)



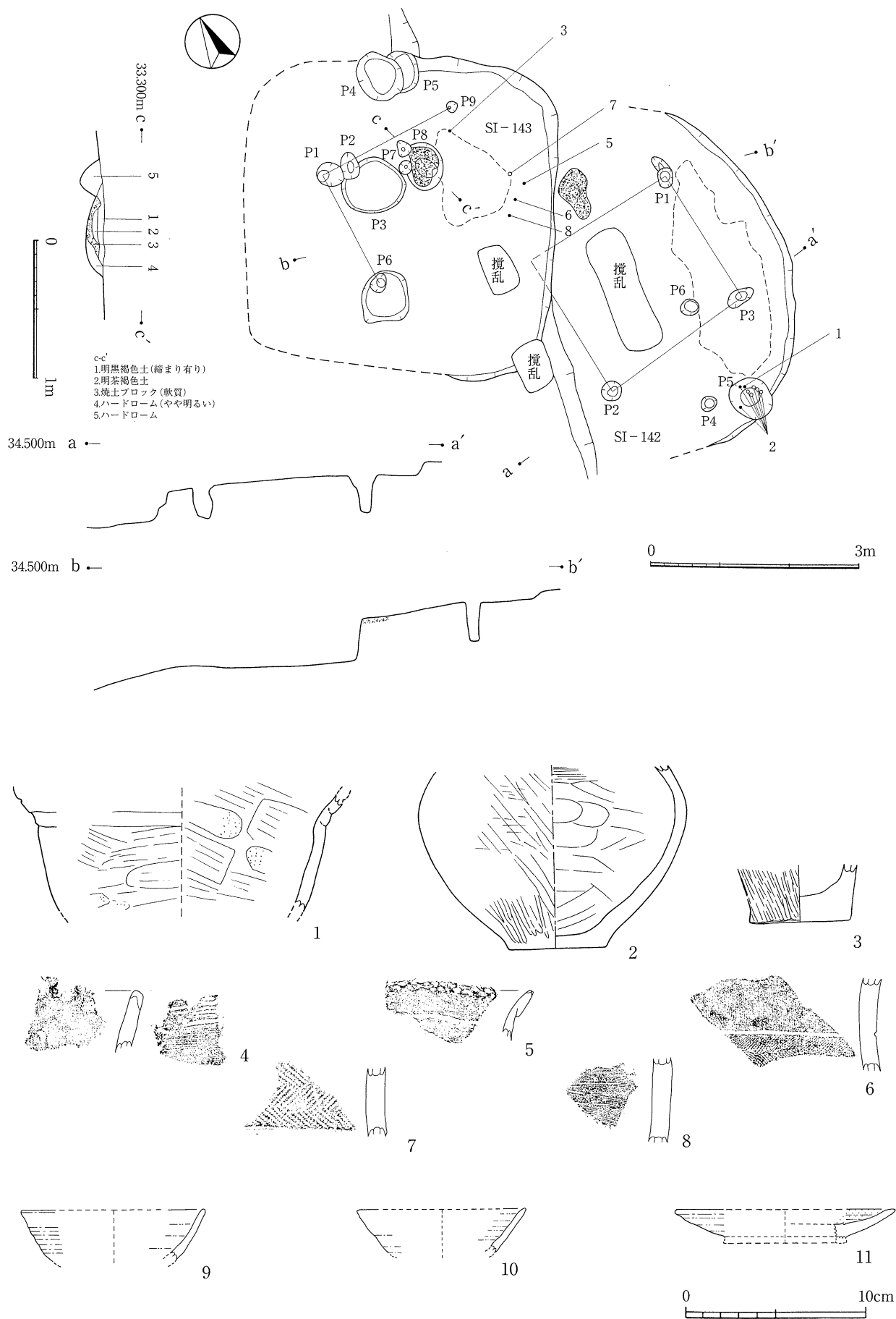
第128図 136号・138号住居跡 遺構・遺物実測図



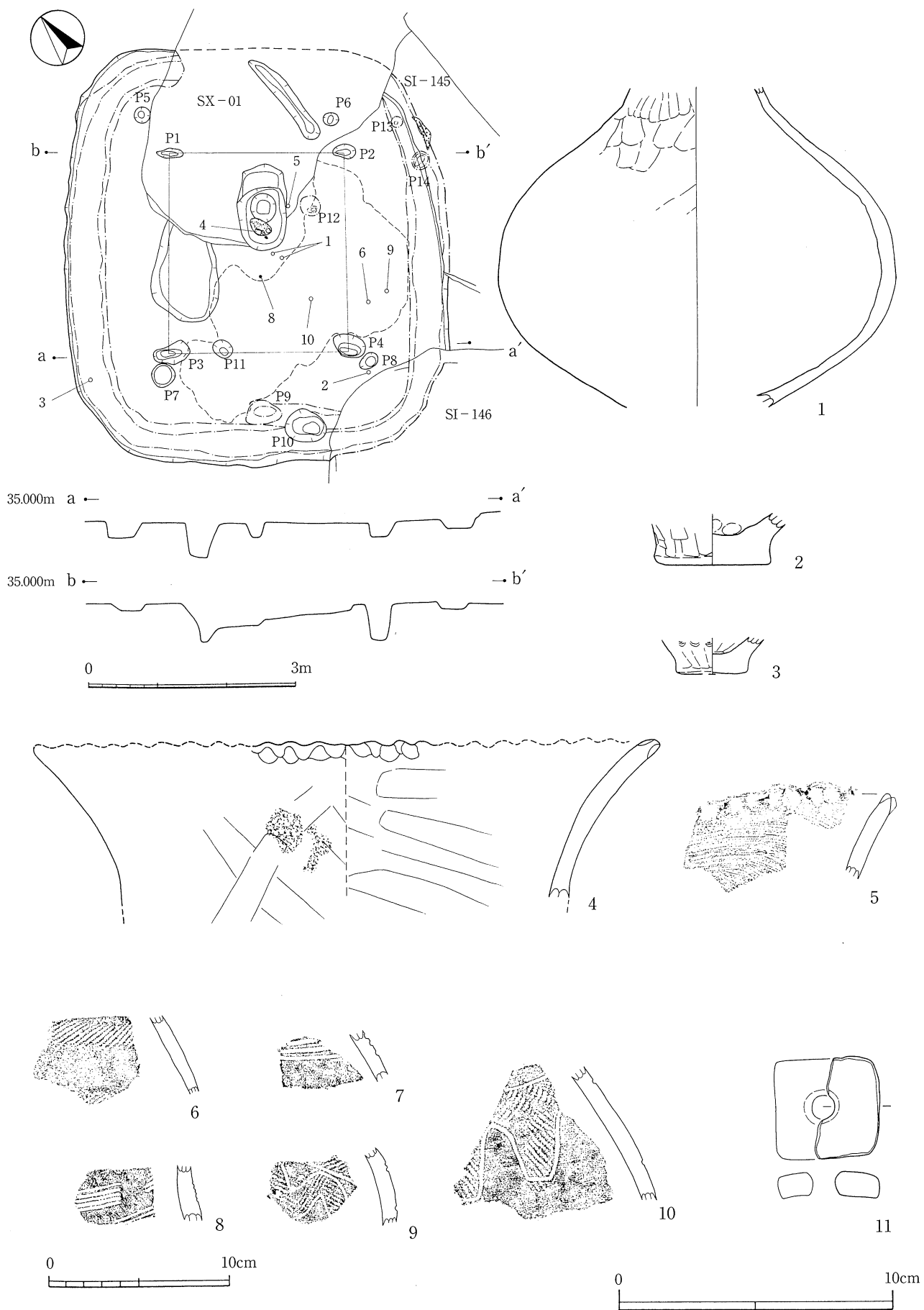
第129図 137号・139号住居跡 遺構・遺物実測図 (遺物は139号)



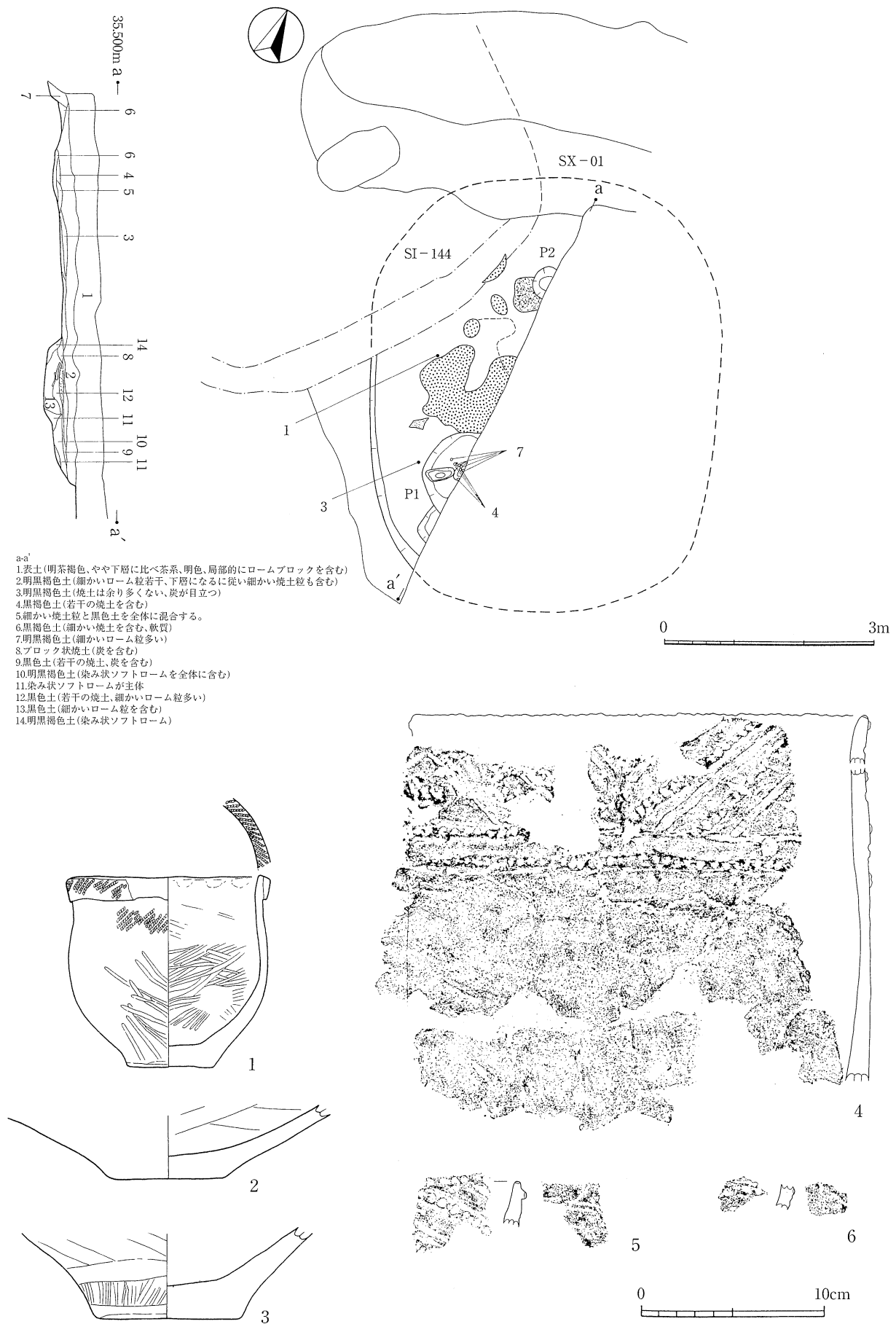
第130图 140号・141号住居跡 遺構・遺物実測図



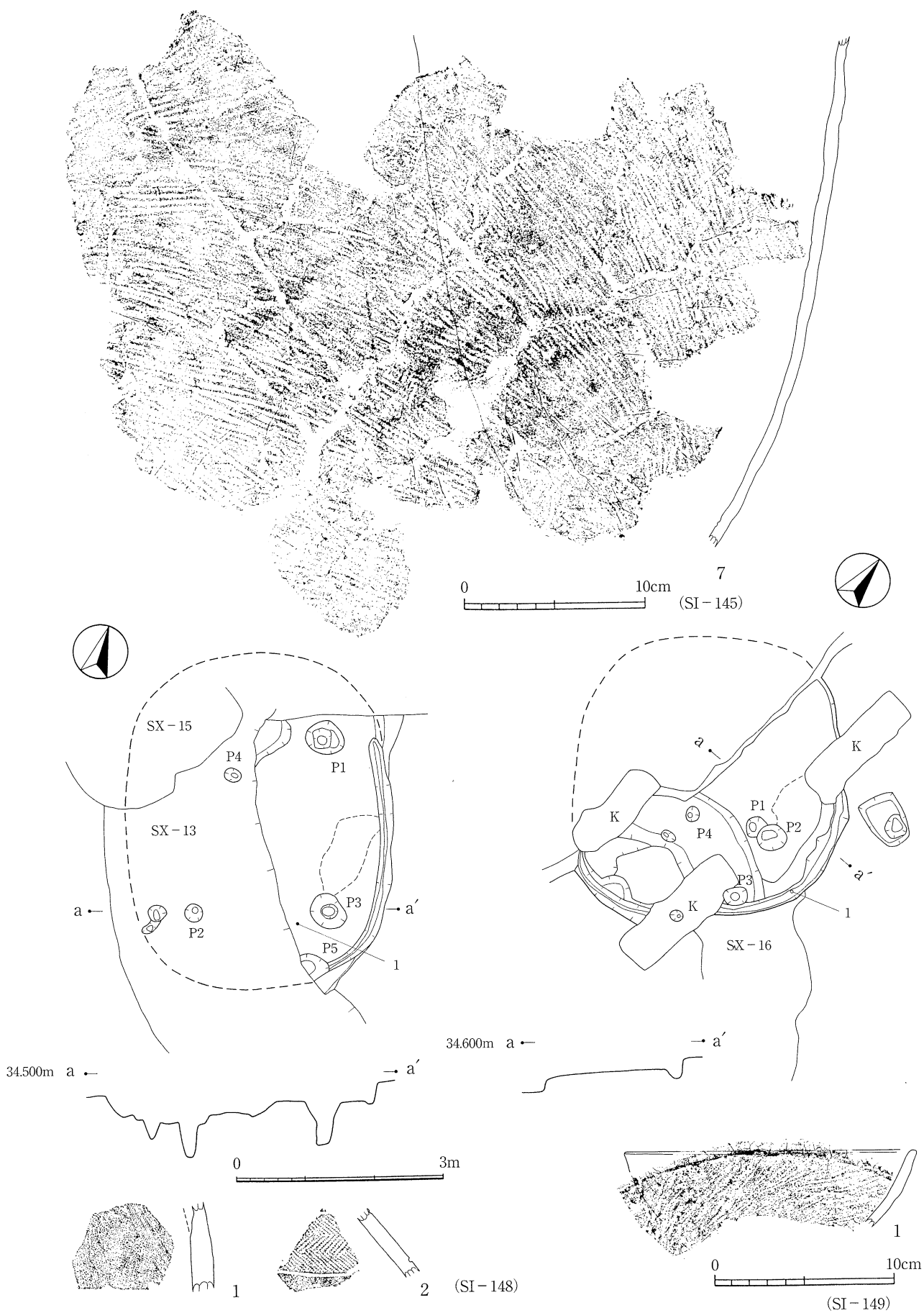
第131図 142号・143号住居跡 遺構・遺物実測図 (1、2 = 142号、3 ~ 11 = 143号)



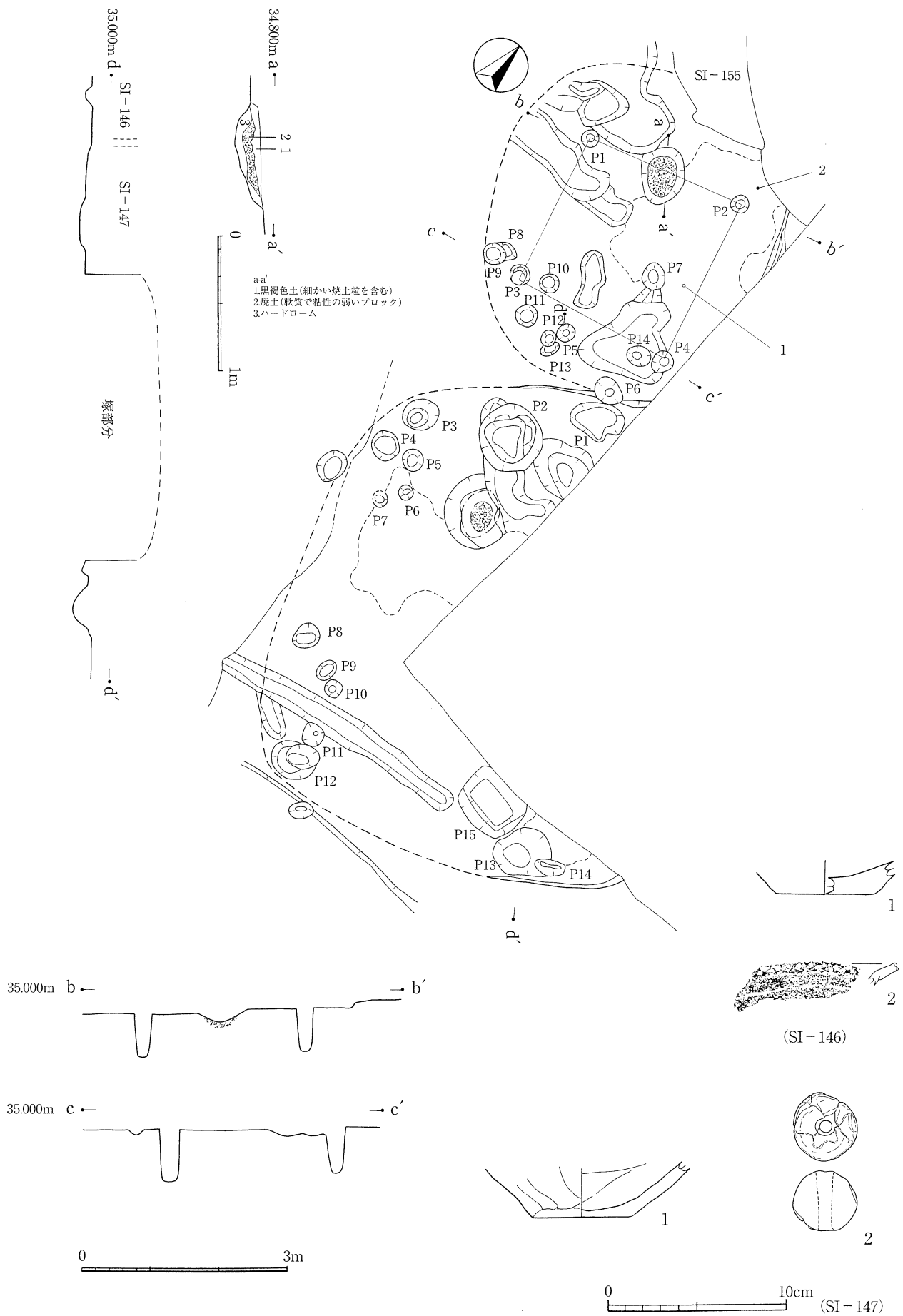
第132図 144号住居跡 遺構・遺物実測図



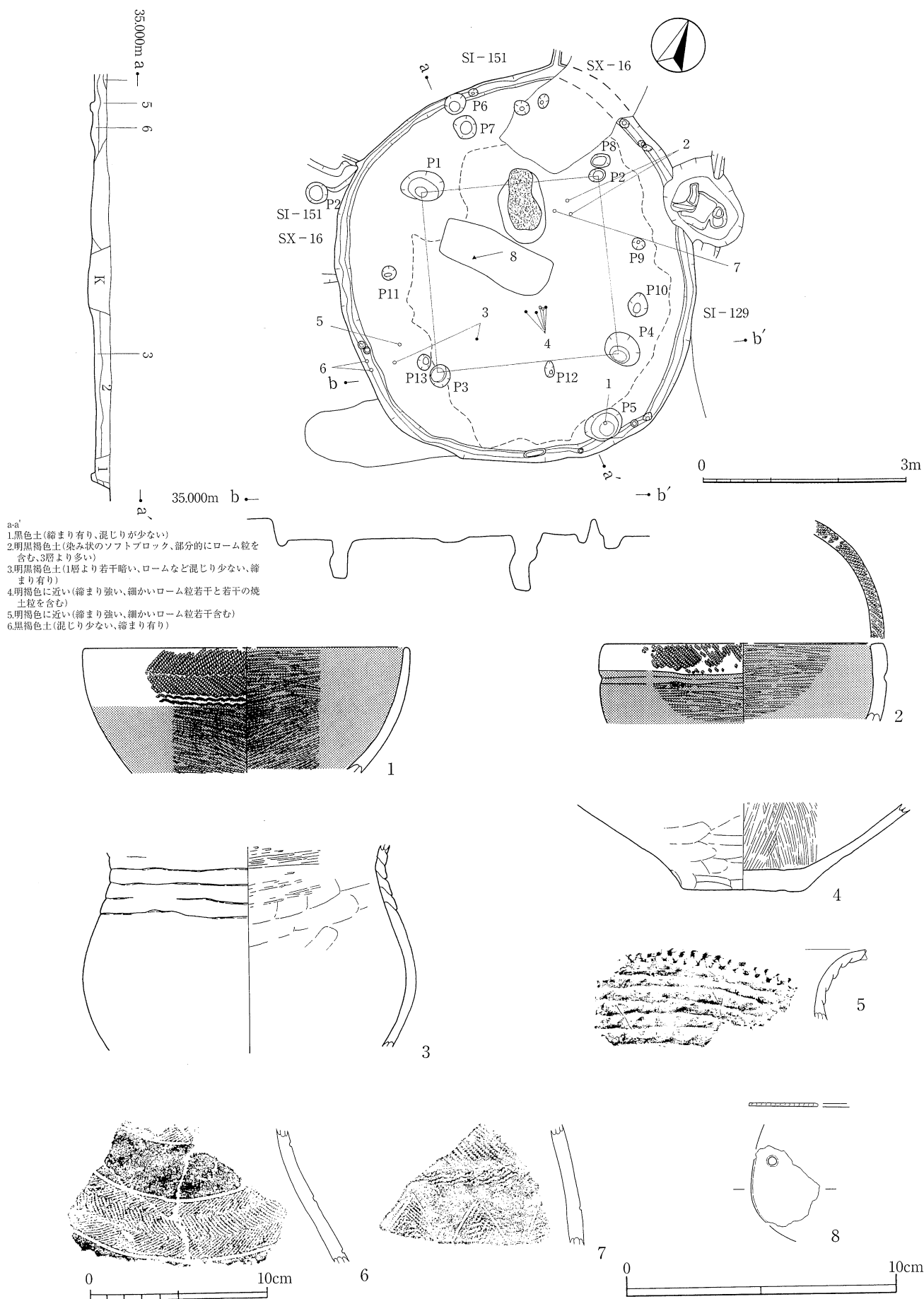
第133図 145号住居跡 遺構・遺物実測図



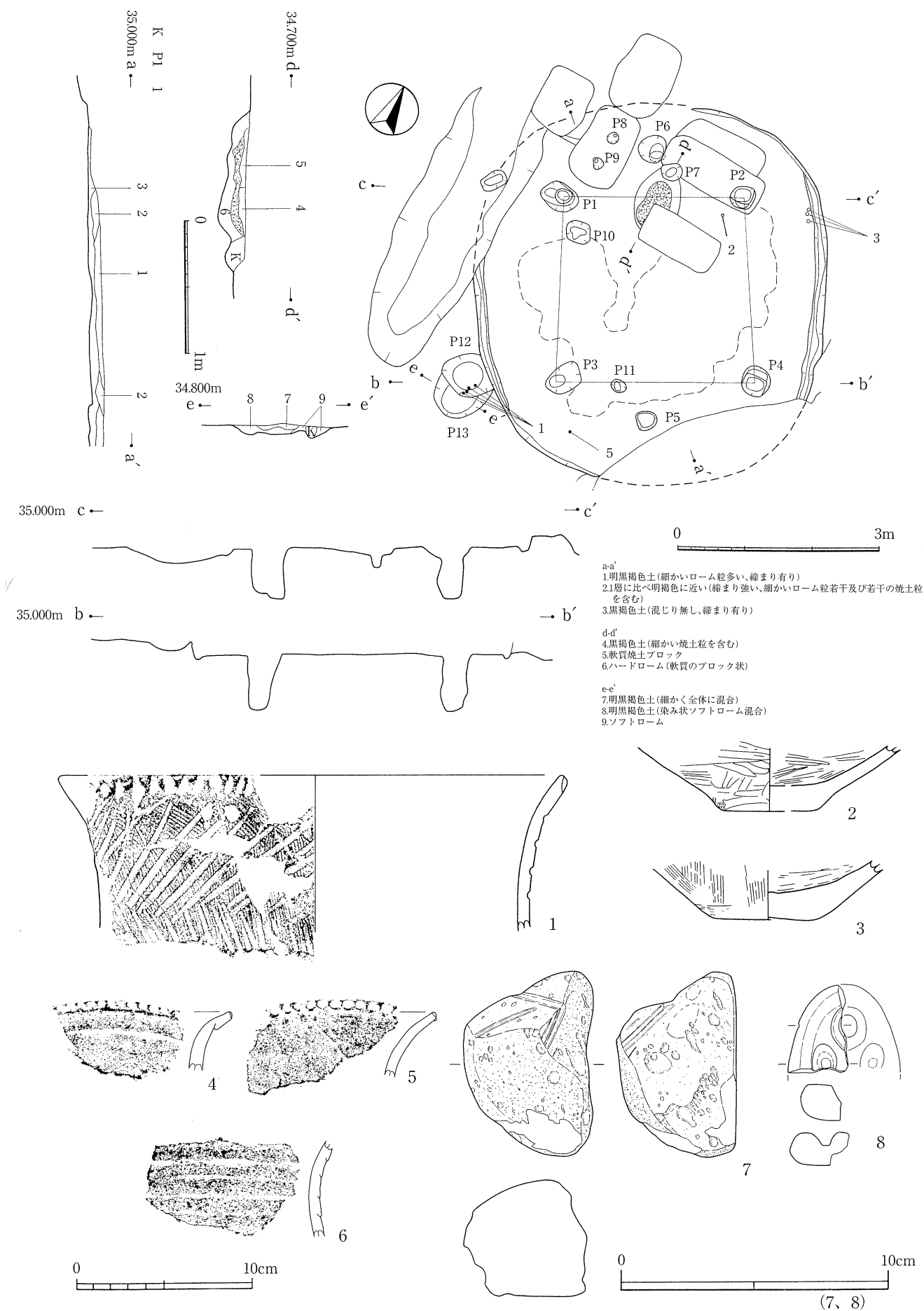
第134図 145号・148号・149号住居跡 遺構・遺物実測図



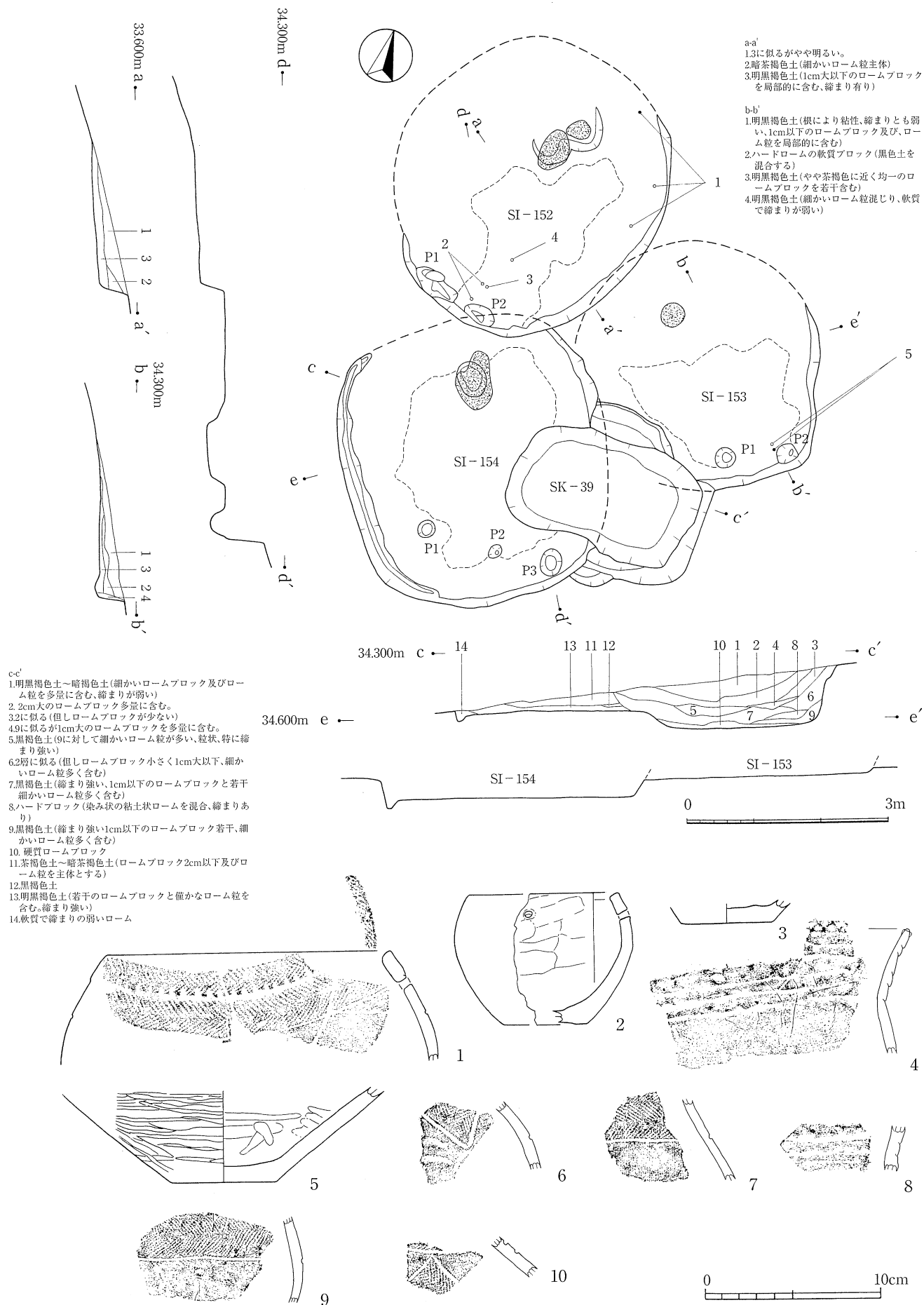
第135図 146号・147号住居跡 遺構・遺物実測図

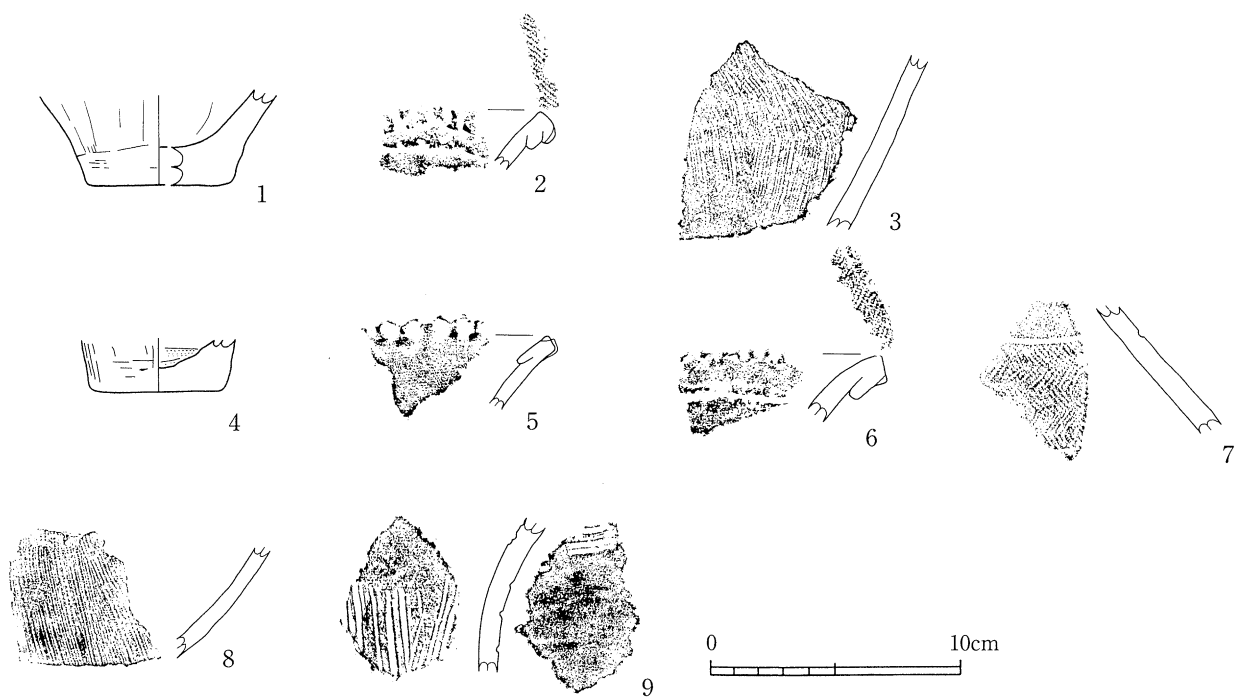
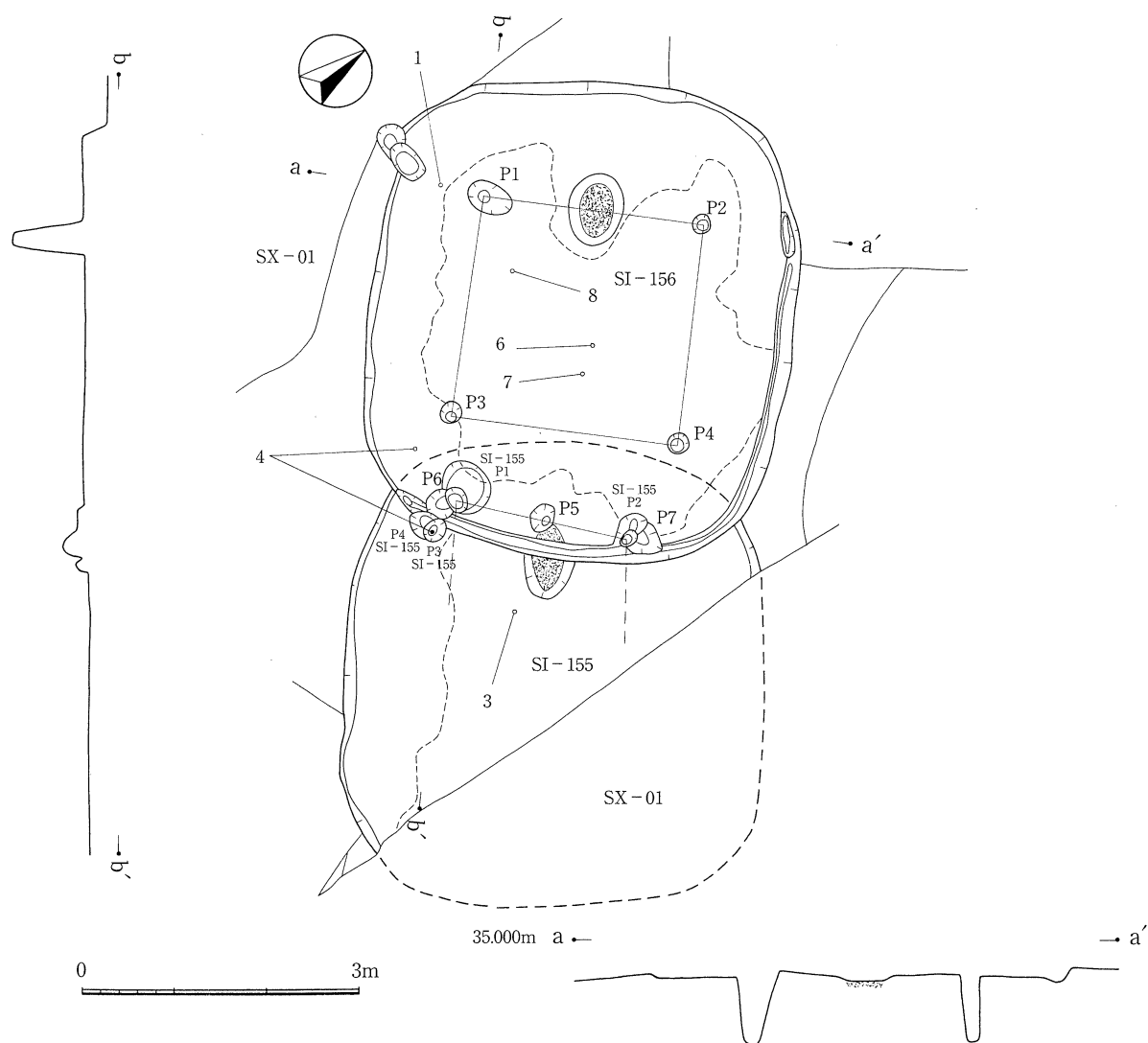


第136図 150号住居跡 遺構・遺物実測図

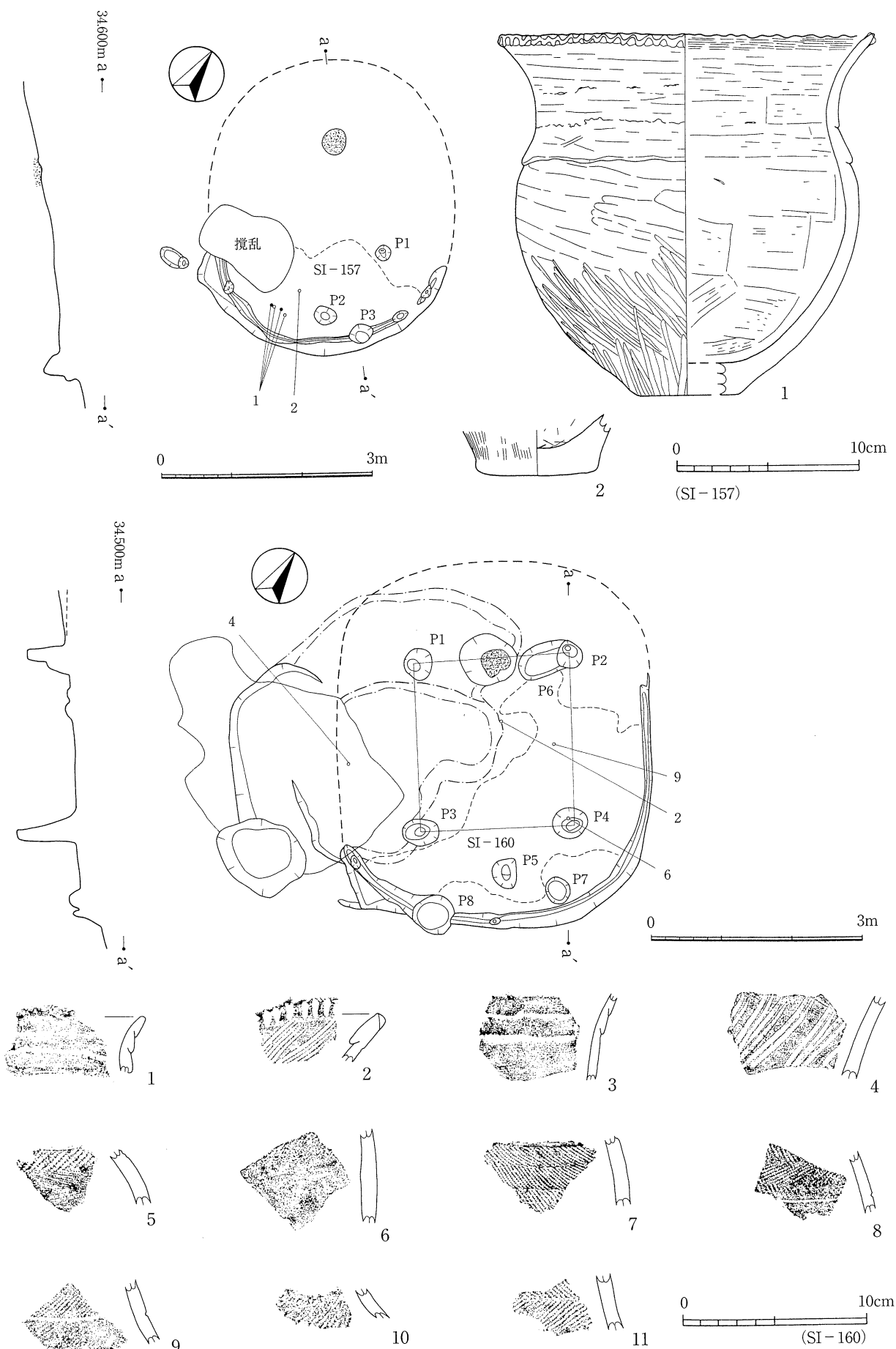


第137図 151号住居跡 遺構・遺物実測図

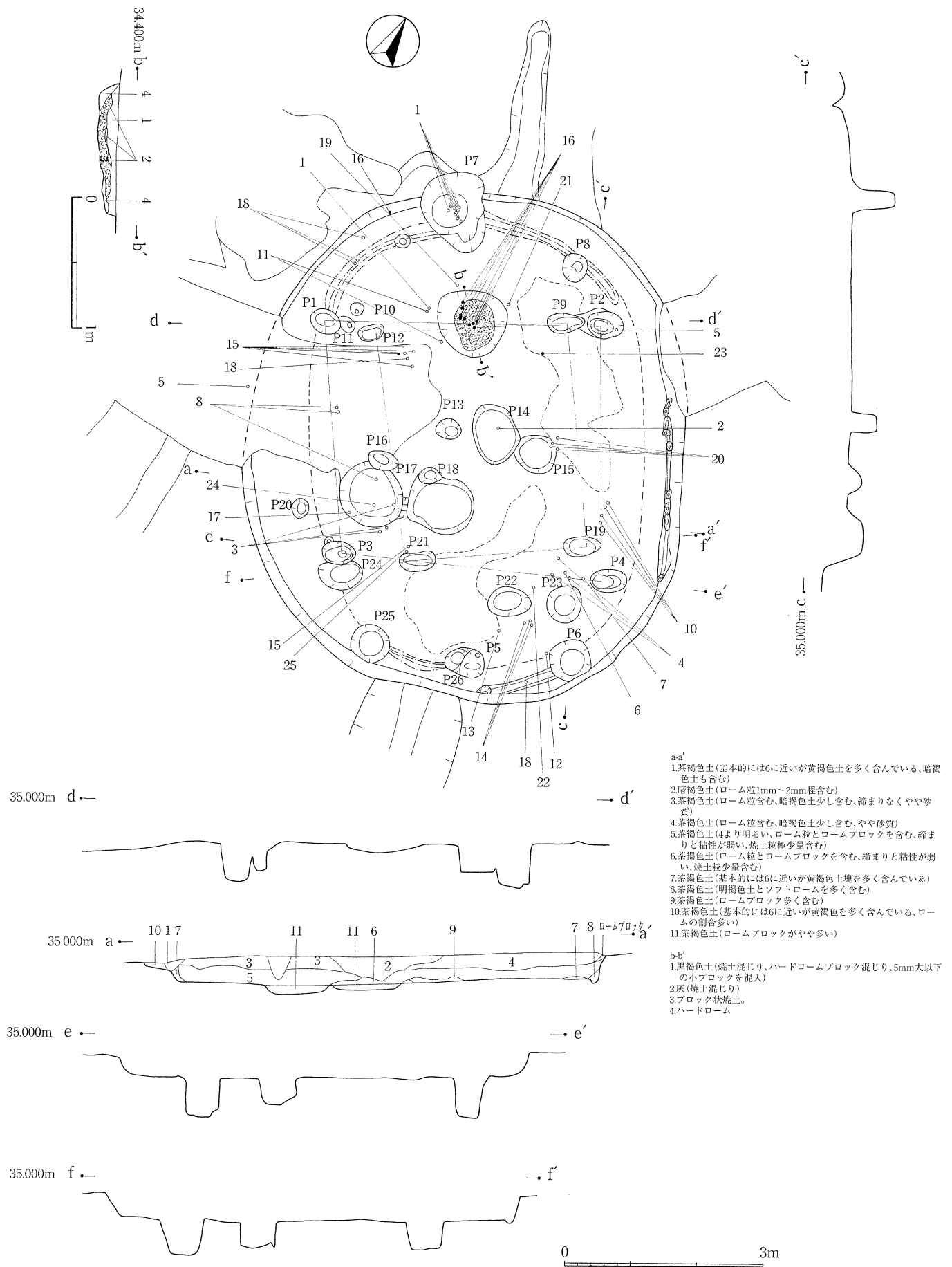


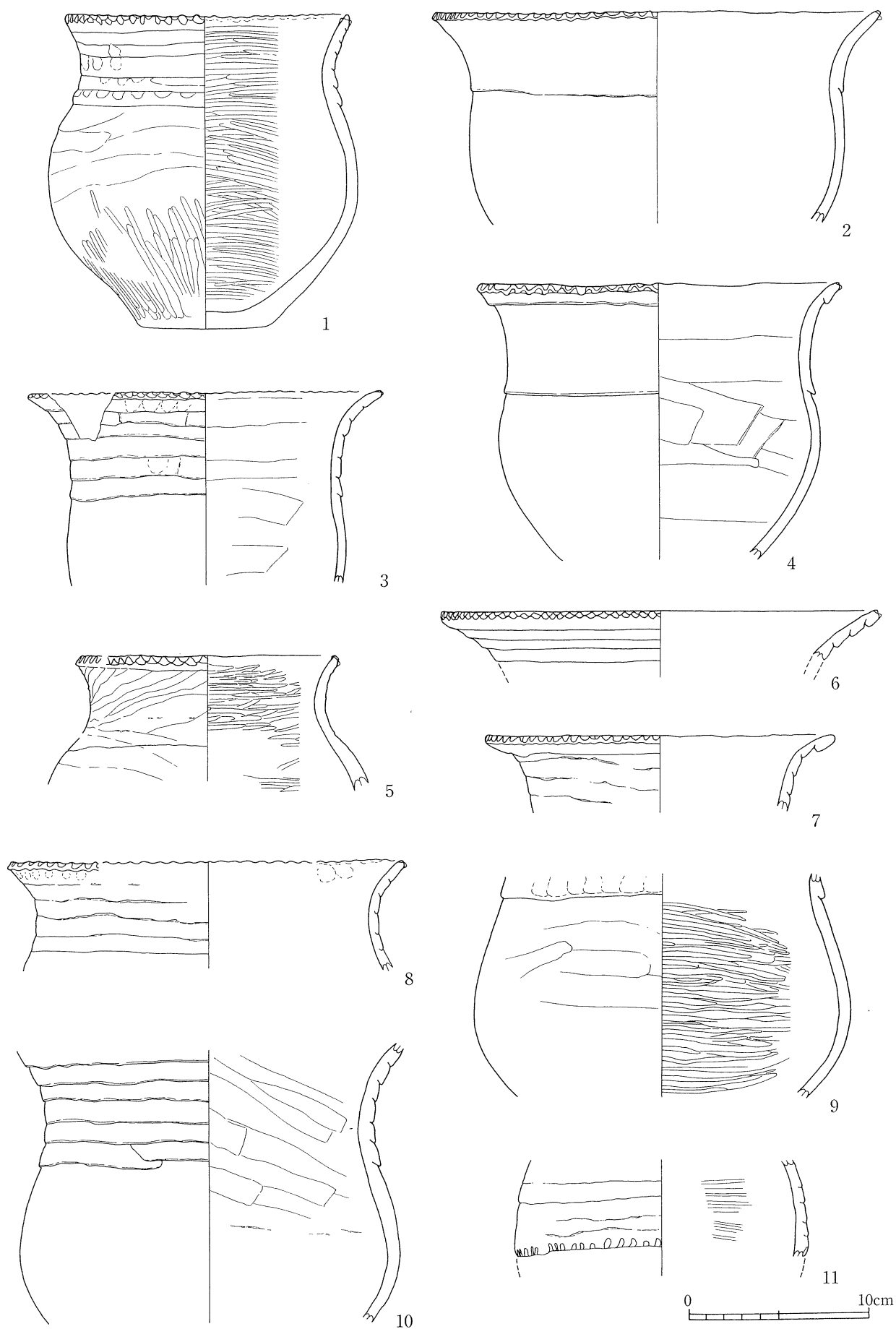


第139図 155号・156号住居跡 遺構・遺物実測図 (1～3 = 155号、4～9 = 158号)

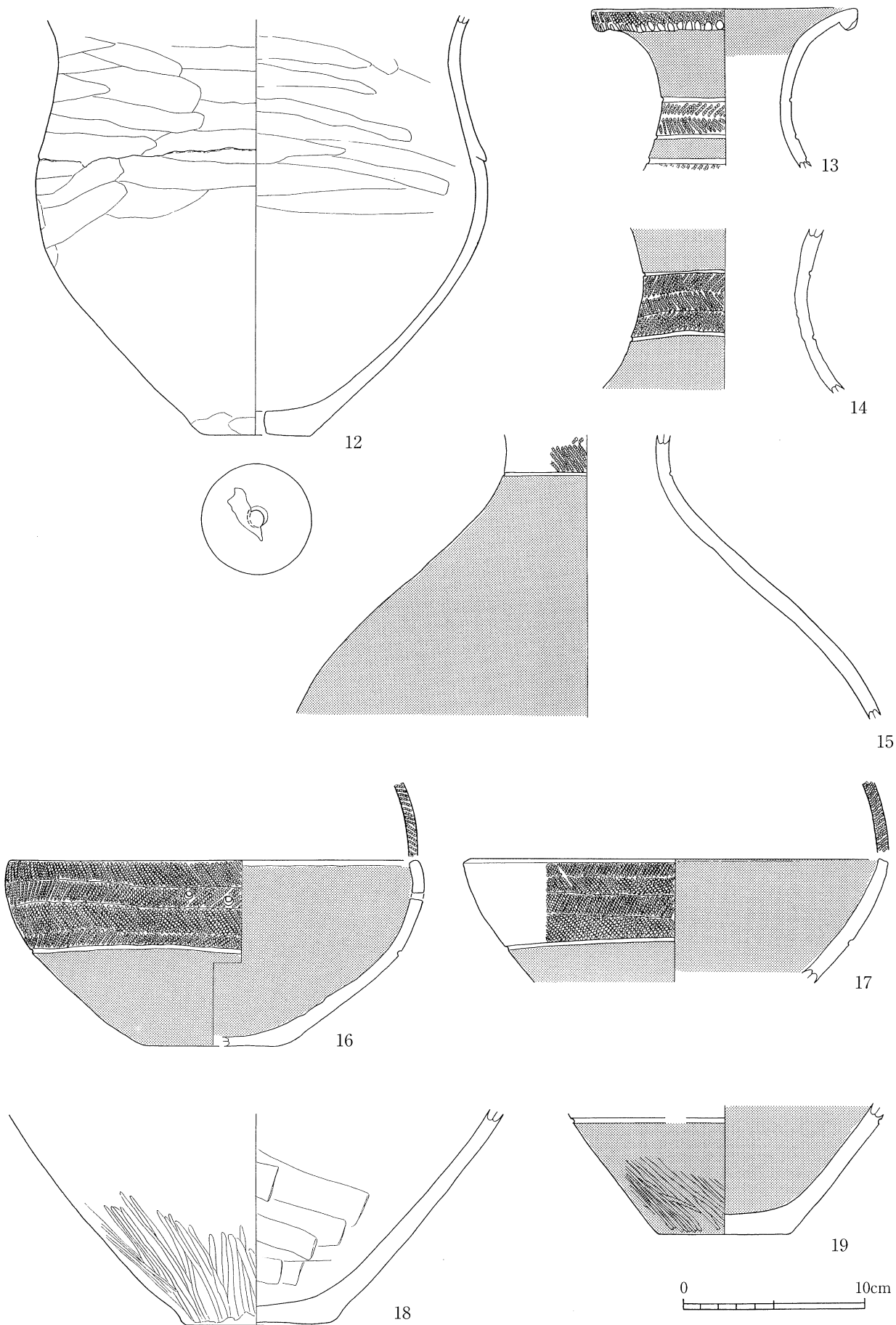


第140图 157号・160号住居跡 遺構・遺物実測図

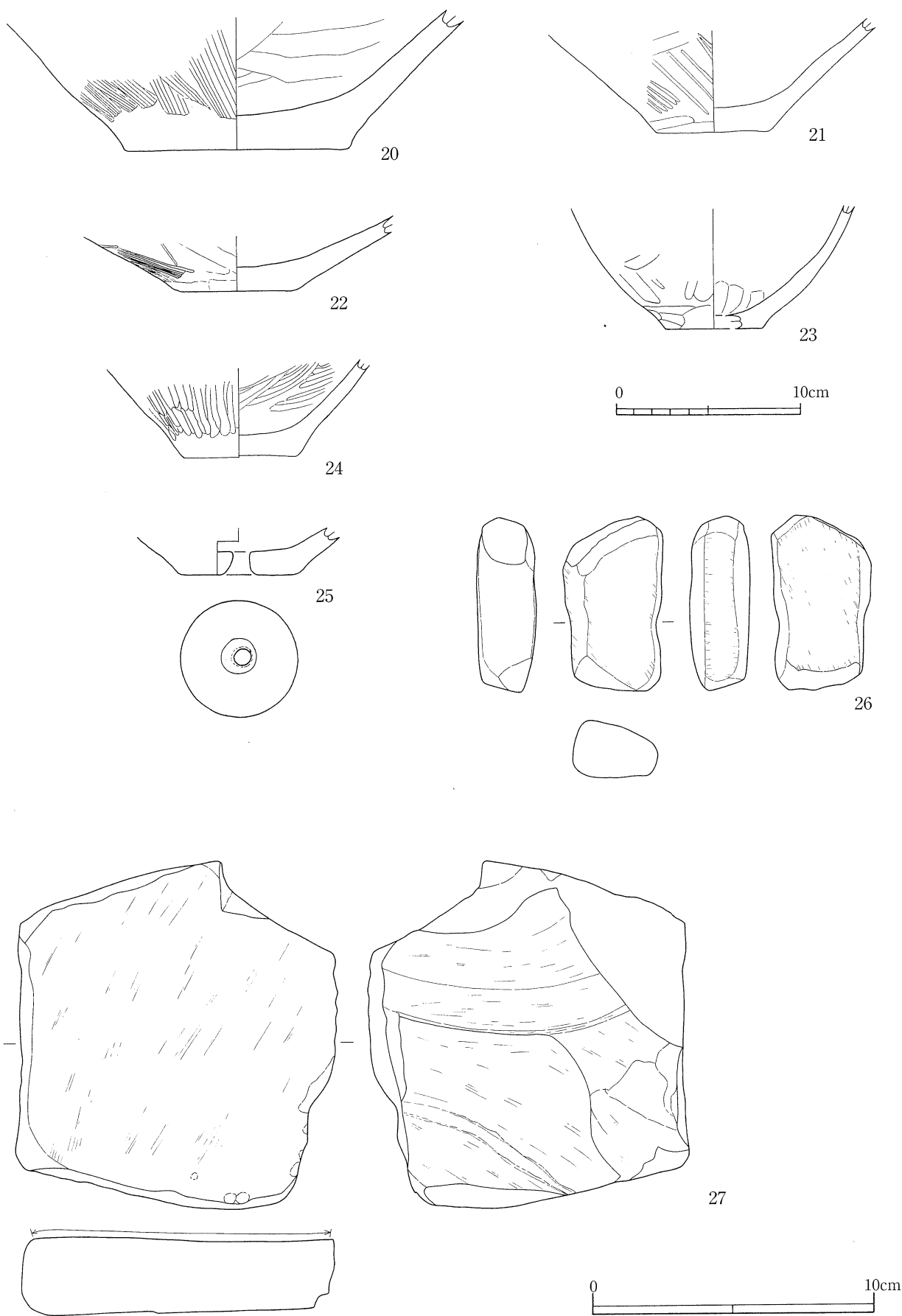




第142图 158号住居跡 遺物実測図(1)

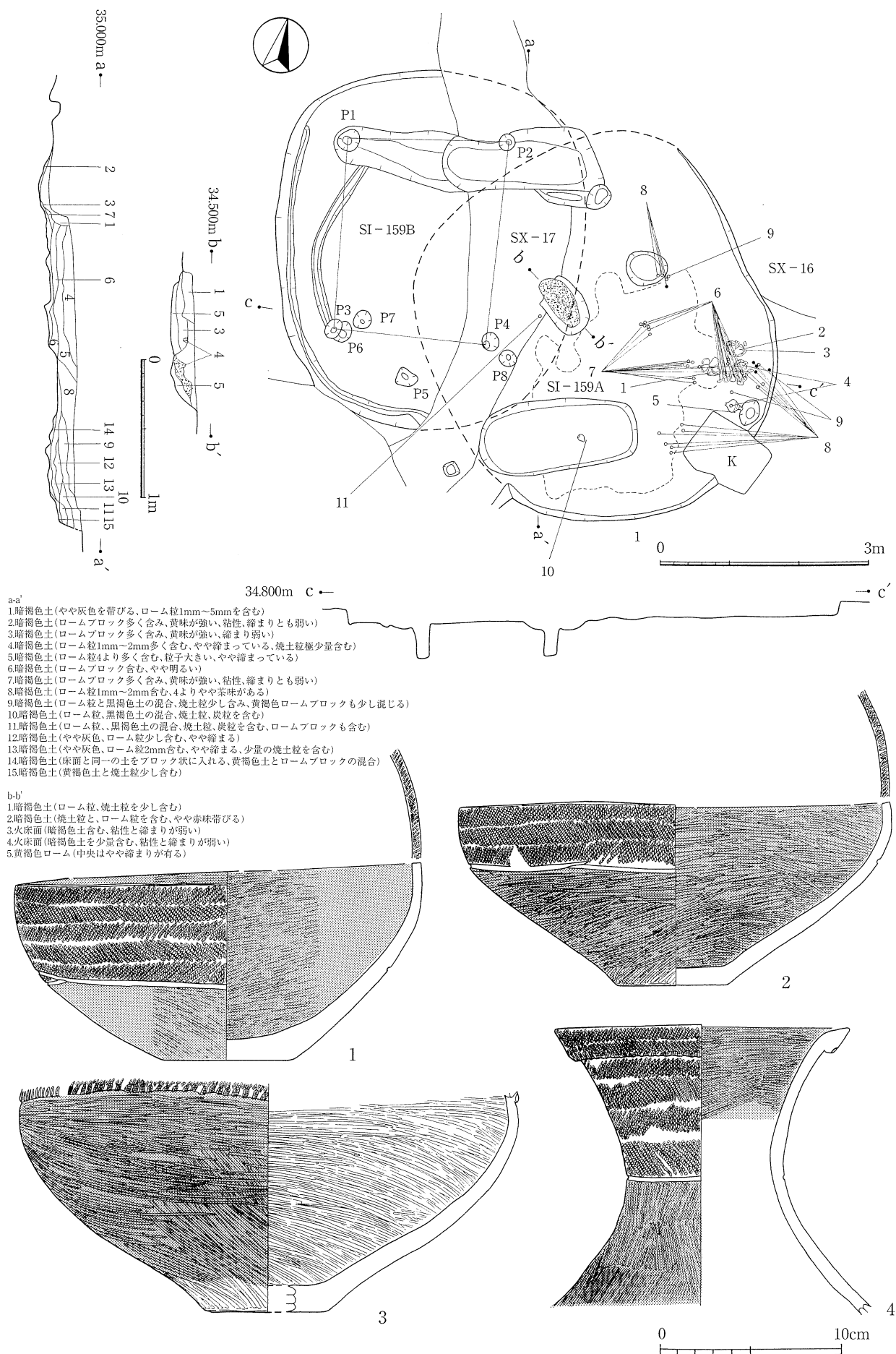


第143図 158号住居跡 遺物実測図(2)

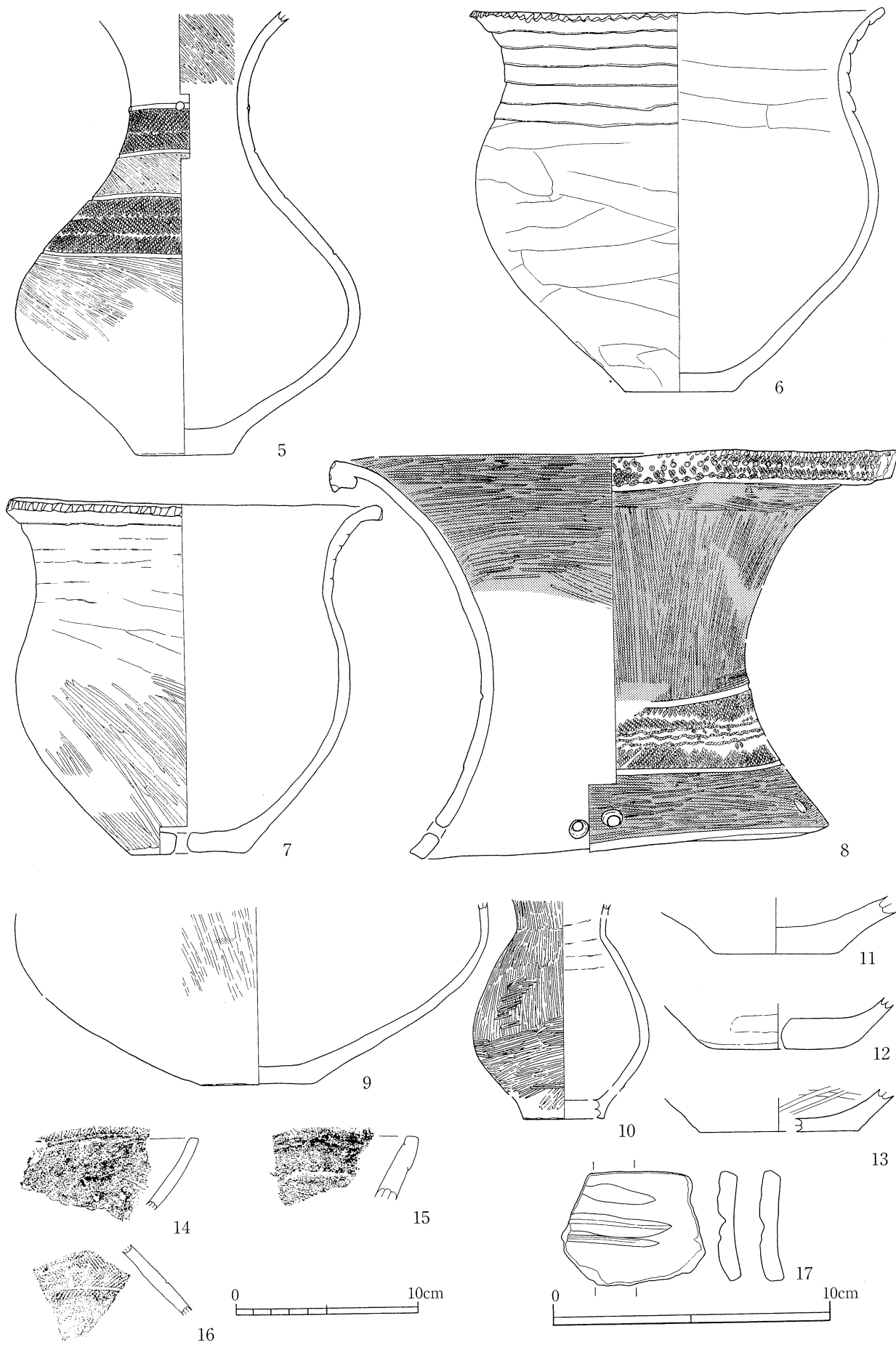


第144図 158号住居跡 遺物実測図(3)

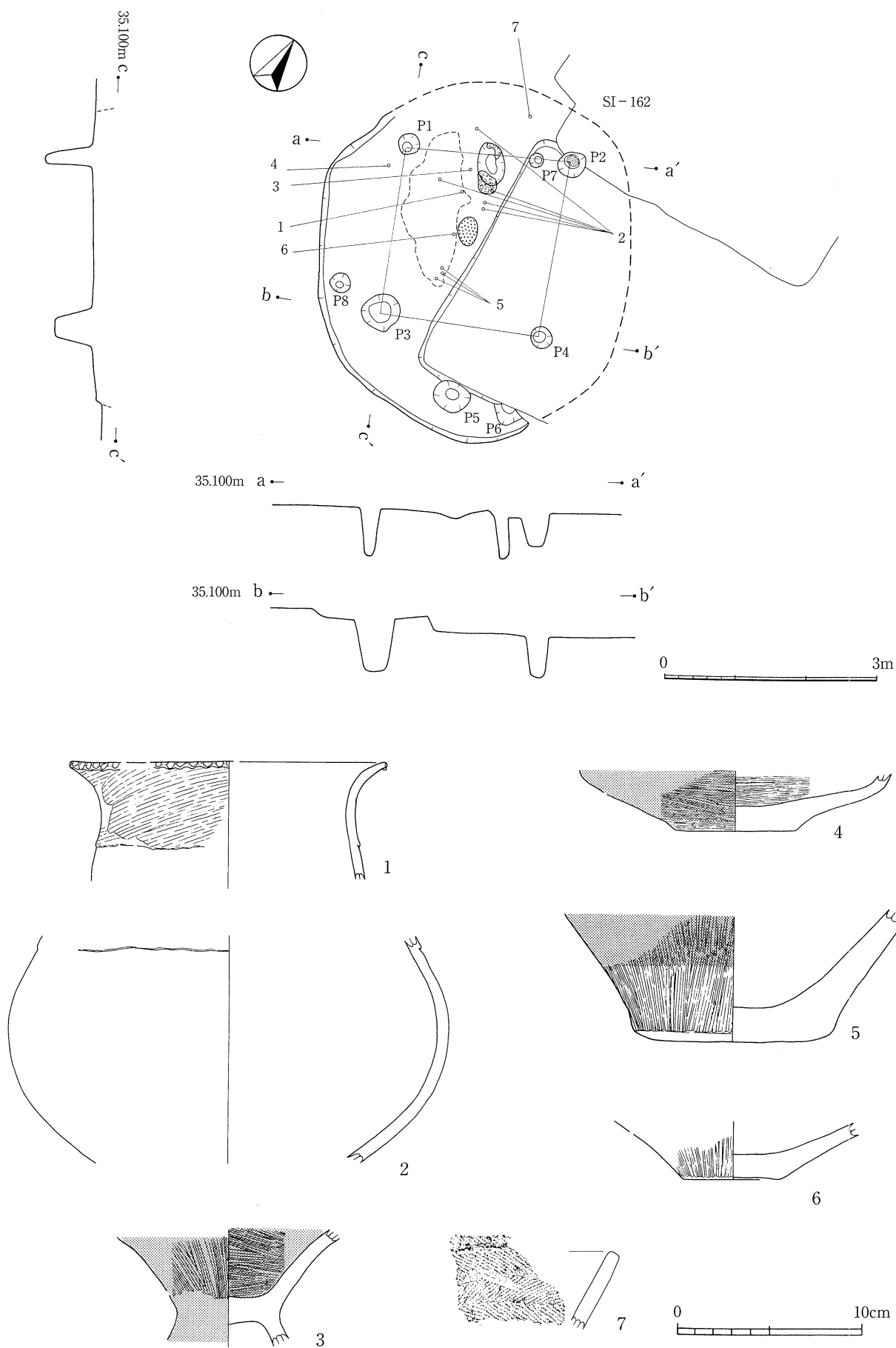
(26、27)



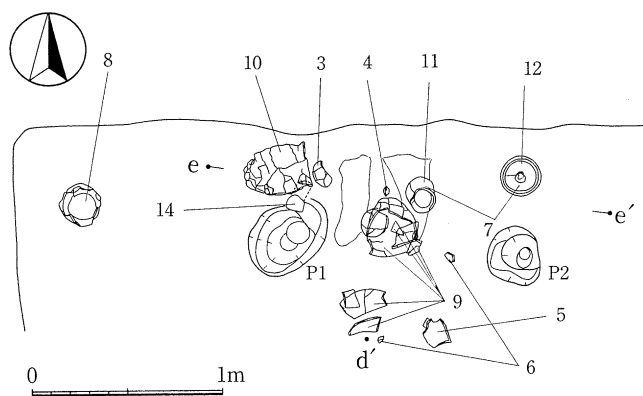
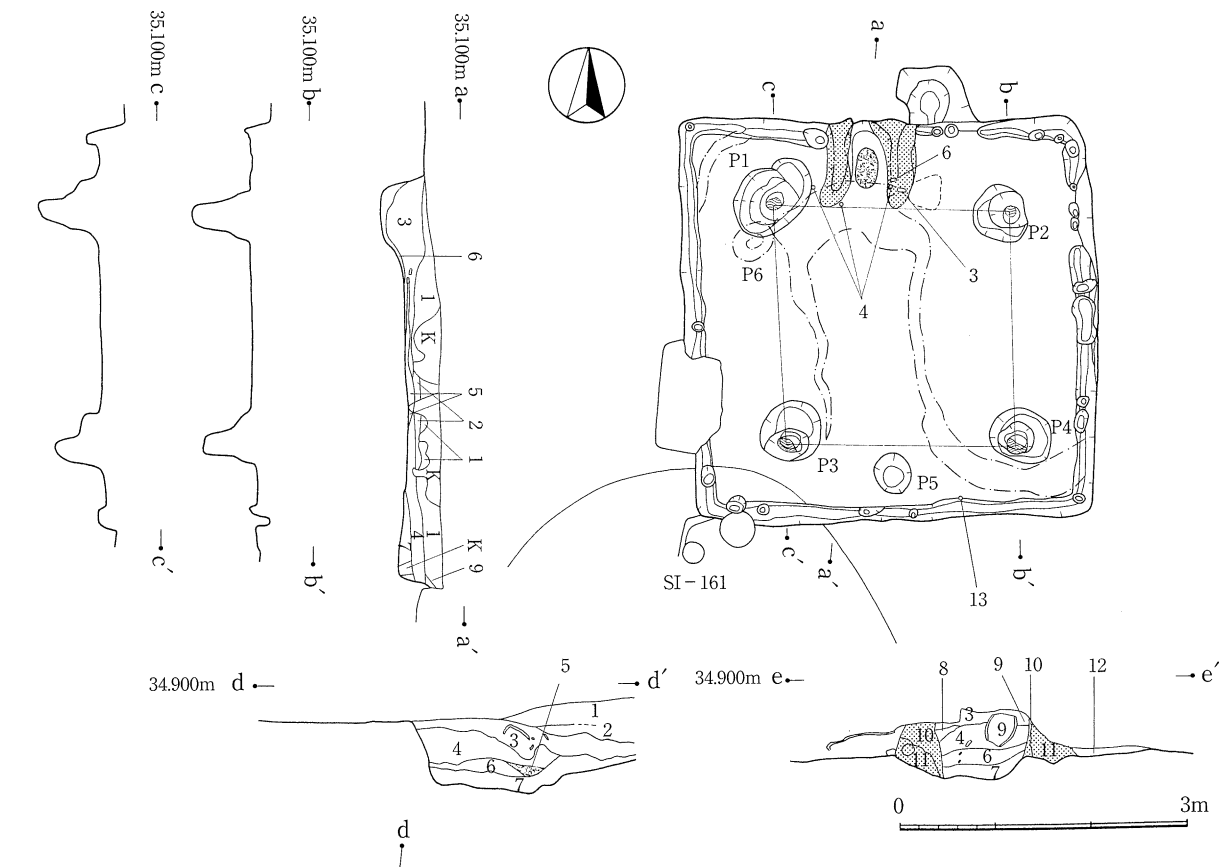
第145図 159A・B号住居跡 遺構・遺物実測図 (遺物1~4はA号)



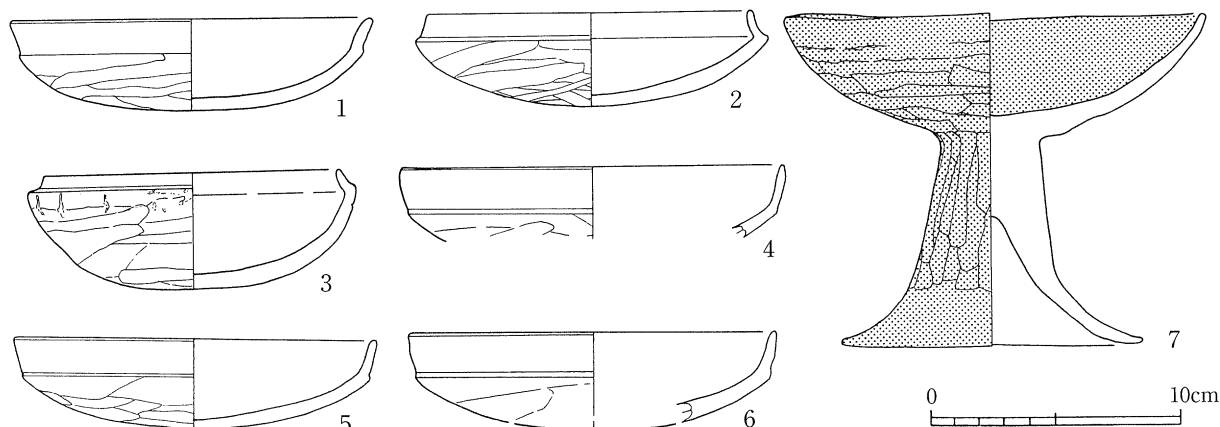
第146図 159A・B号住居跡 遺物実測図 (遺物 5～11はA号、12～17はB号)



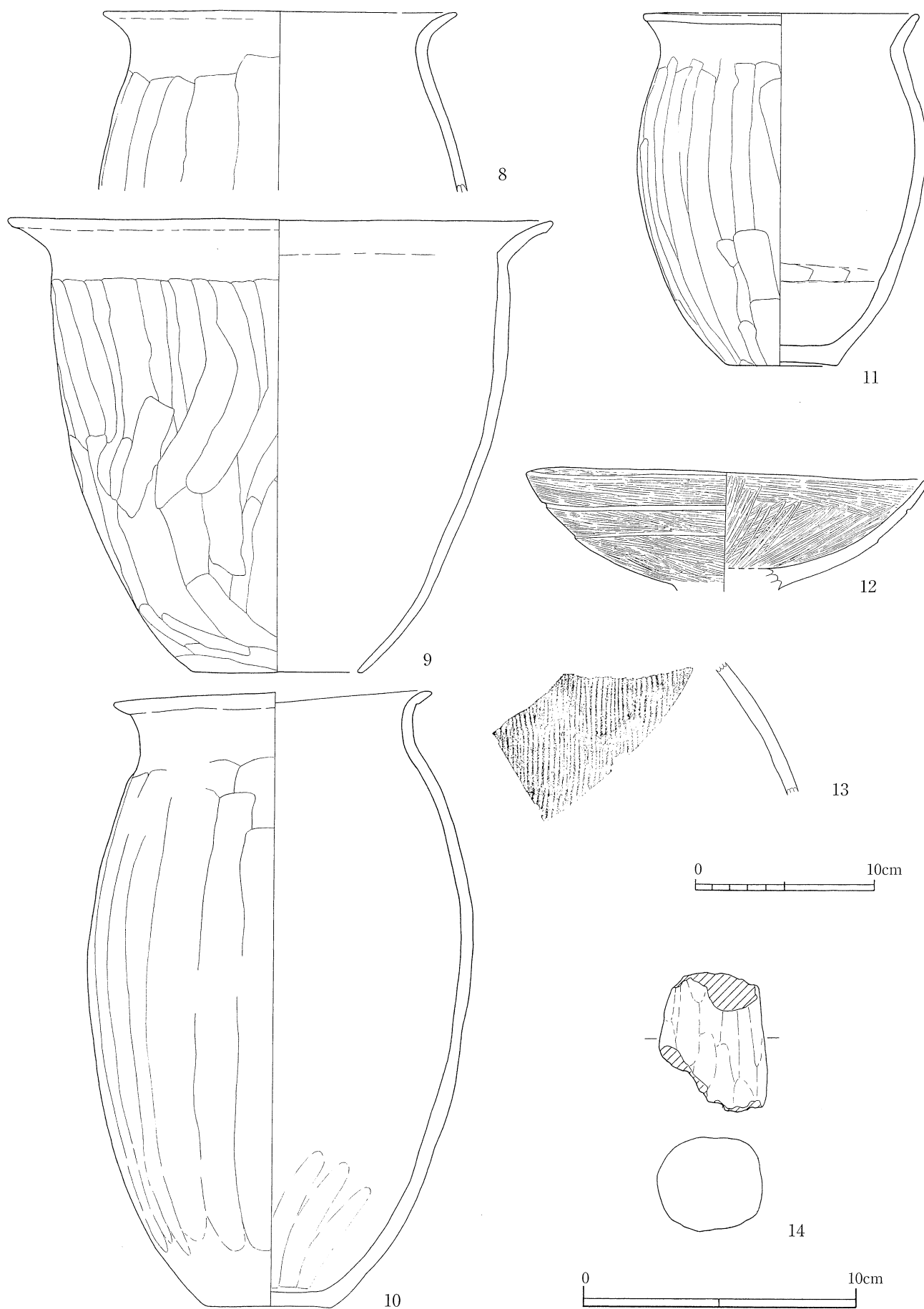
第147図 161号住居跡 遺構・遺物実測図



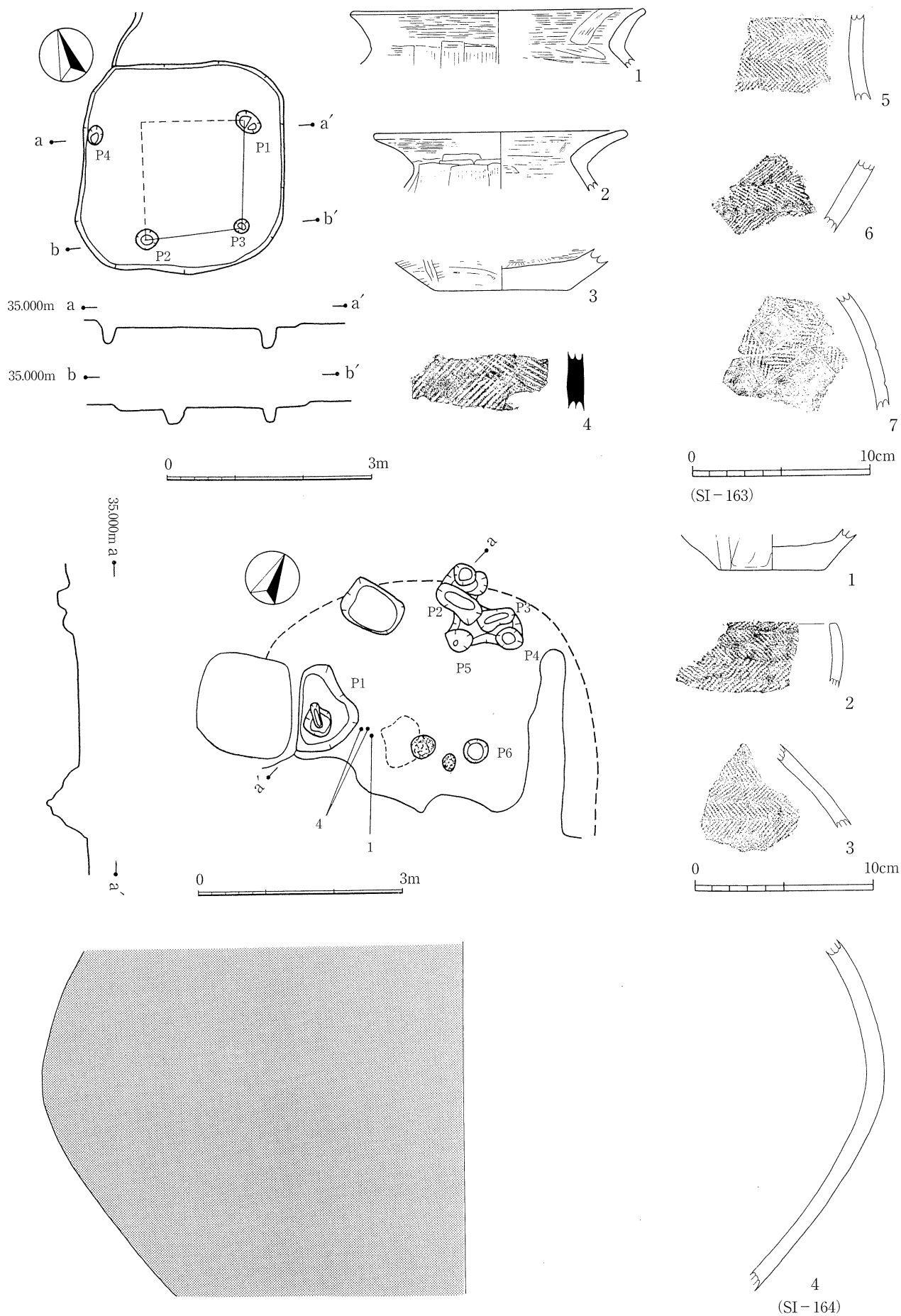
- a-a'
 1.暗褐色土(有機質性強い、2mm~5mm大のロームブロック少量含む)
 2.暗赤褐色土(有機質性強い、焼土粒を不規則に多く含む部分的に赤み強い)
 3.暗褐色土(1よりやや褐色味帯びる。ローム粒および1mm~2mm大のロームブロック散る。カマド付近に微量の焼土粒と粘土粒散る。カマド上面は若干赤みを帯びローム粒を部分的に多く含む。土師器片と坏を含む)
 4.暗褐色土(色調は3に似る。ローム粒を不規則に含む、部分的に褐色味強い)
 5.暗赤褐色土(褐色味強い、ローム粒を多量に含む。カマド付近に土器含む。カマド内には少量の焼土粒散る)
 6.色調は12に近い(褐色味強く、割と締まっている。目立たないが2mm~1cm大のロームブロック散る、貼り床の上である)
 7.色調は12に近い(褐色味強く、締まっている。2mm~1cmのロームブロック散る、貼り床の上である)
- d-d'
 1.暗褐色土(有機質性強い、2cm~5mm大のロームブロック少々散る)
 2.暗褐色土(1よりやや褐色味帯びる。ローム粒及び1mm~2mm大のロームブロック散る。カマド付近に微量の焼土粒と粘土粒散る。カマド上面は若干赤みを帯びローム粒を部分的に多く含む。土器片と坏を含む)
 3.暗赤褐色土(ローム粒、および多量の粘土粒、山砂粒を含む。1mm~1cm大の焼土ブロック含む。カマド天井の崩落土と思われる)
 4.赤褐色土(焼土層で強く焼けている。粘性、締まりとも弱い)
 5.茶褐色土(ローム粒多量に含む、褐色味強い、焼土粒、山砂粒多く散る)
 6.暗赤褐色土(褐色味強い。ローム粒を多量に含む。カマド付近に土器含む。カマド内には少量の焼土粒散る)
- e-e'
 2.暗褐色土(1よりやや褐色味帯びる。ローム粒および1mm~2mm大のロームブロック散る。カマド付近に微量の焼土粒と粘土粒散る。カマド上面は若干赤みを帯びローム粒を部分的に多く含む。土器片と坏を含む)
 3.暗赤褐色土(ローム粒および多量の粘土粒、山砂粒を含む。1mm~1cm大の焼土ブロック含む。カマド天井の崩落土と思われる)
 5.茶褐色土(ローム粒多量に含む褐色味強い、焼土粒、山砂粒多く散る)
 6.暗赤褐色土(褐色味強い、ローム粒を多量に含む。カマド付近に土器含む。カマド内には少量の焼土粒散る)
 7.カマド内の覆土とも思われる(暗褐色だがローム粒を部分的に多量含む、3より褐色味強い)
 8.カマド内の覆土とも思われる(褐色だがローム粒を部分的に多量含む、6より褐色味強い)
 9.暗褐色土(有機質性強い、山砂粒多く含む)
 10.褐色土(部分的に有機質土混じる。ローム粒、粘土粒、山砂粒多量に含む、締まっている)
 11.色調は5に近いがより褐色味強い



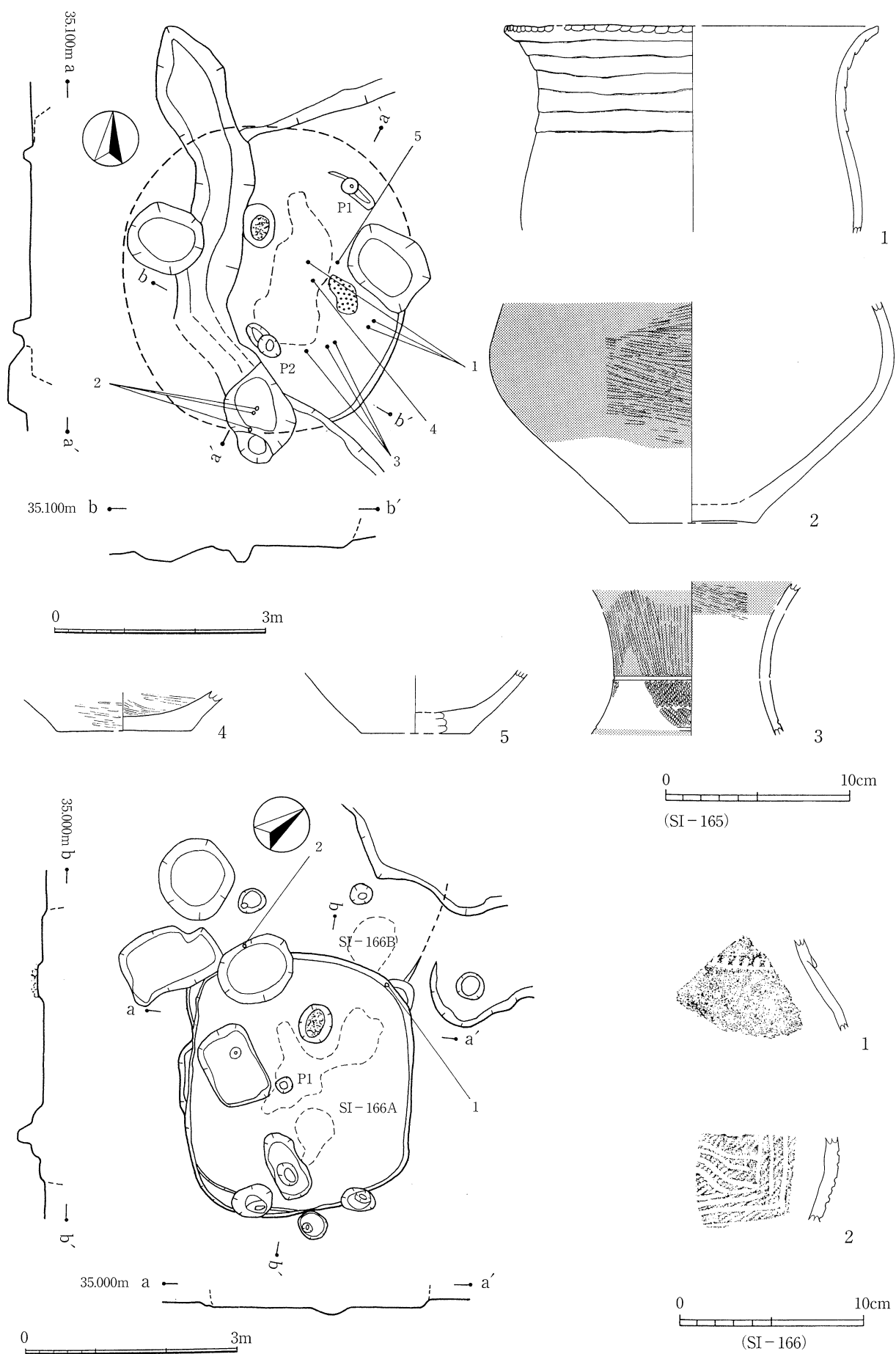
第148図 162号住居跡 遺構・遺物実測図



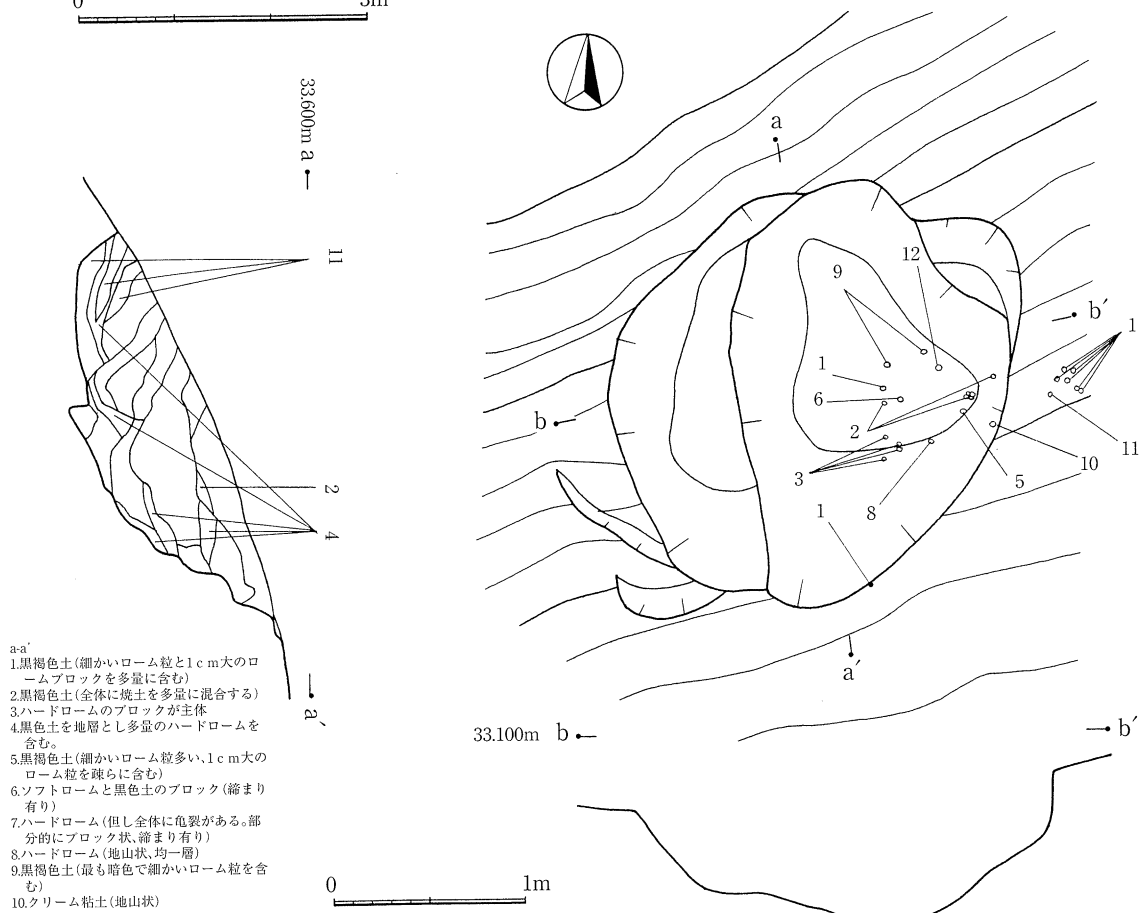
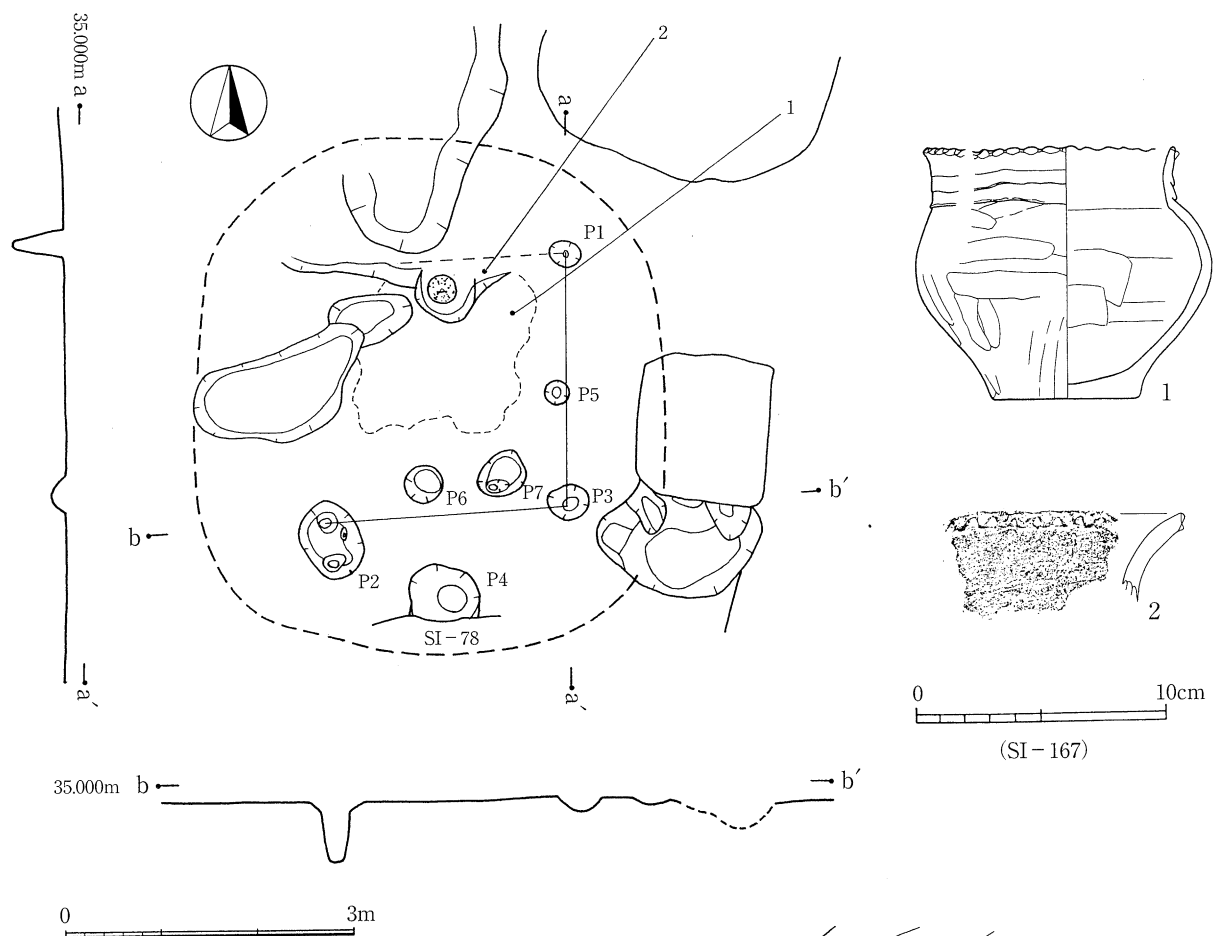
第149図 162号住居跡 遺物実測図



第150図 163号・164号住居跡 遺構・遺物実測図

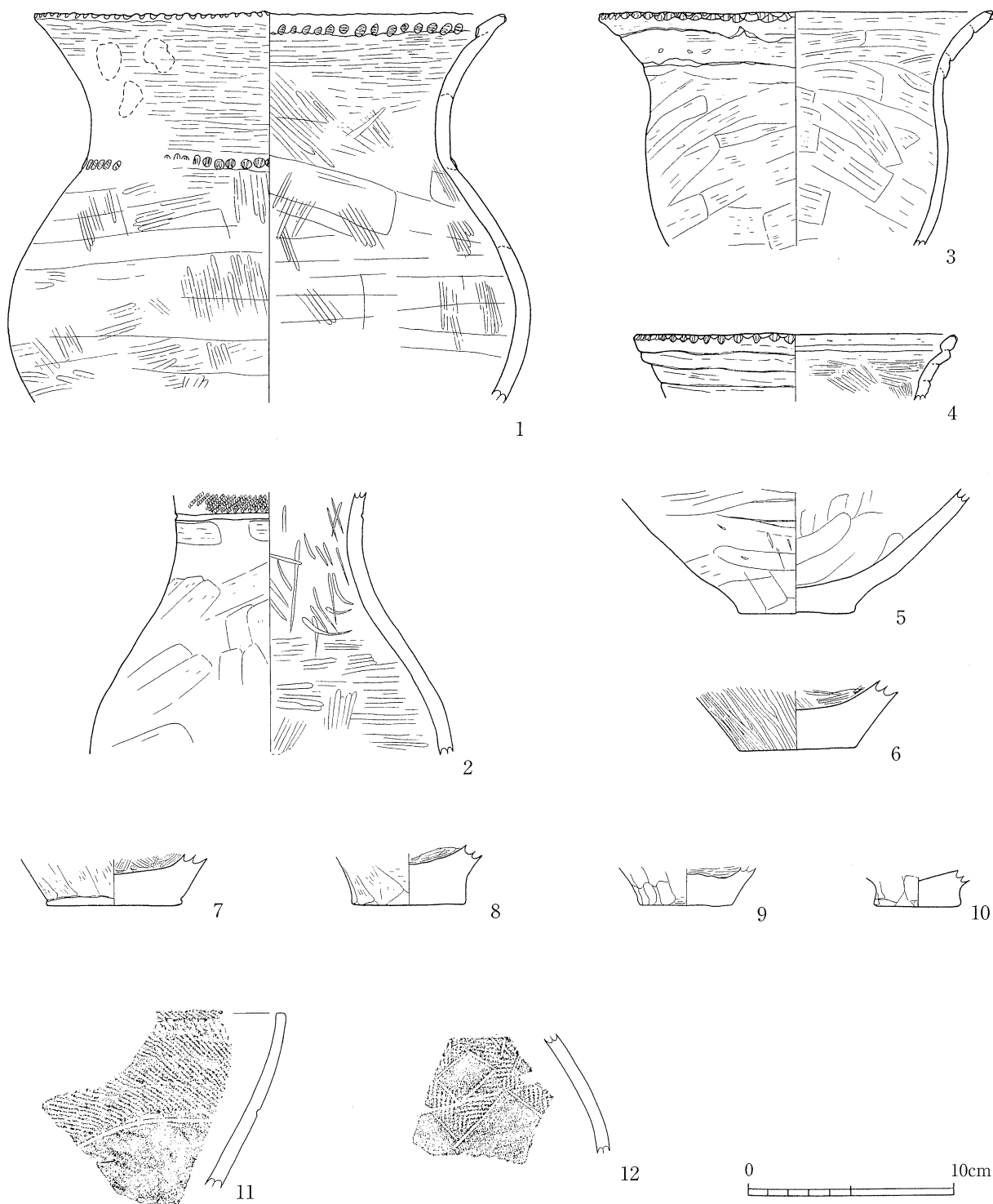


第151図 165号・166号住居跡 遺構・遺物実測図

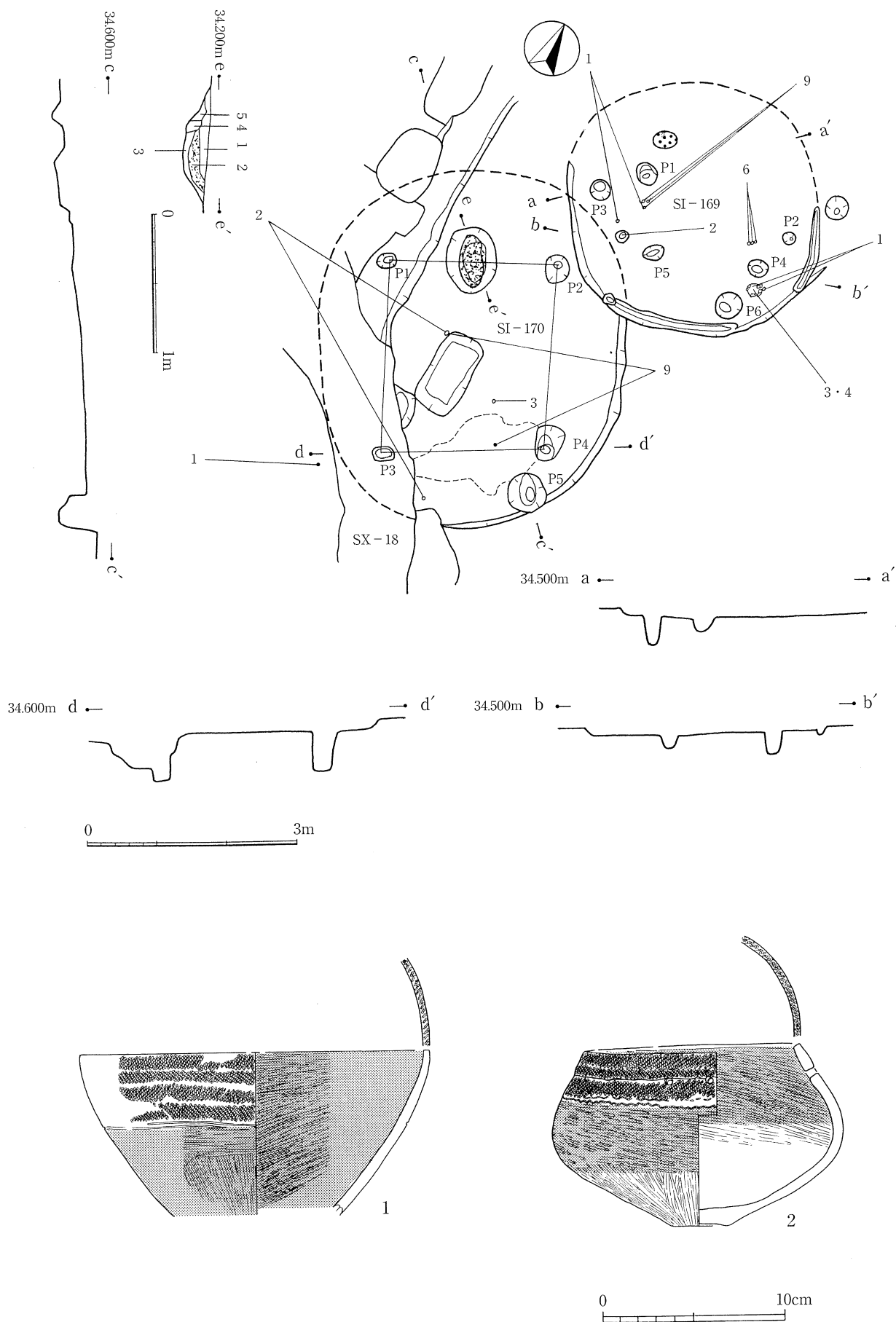


- a-a'
- 1.黒褐色土(細かいローム粒と1cm大のロームブロックを多量に含む)
 - 2.黒褐色土(全体に焼土を多量に混合する)
 - 3.ハードロームのブロックが主体
 - 4.黒色土を地層とし多量のハードロームを含む。
 - 5.黒褐色土(細かいローム粒多い、1cm大のローム粒を疎らに含む)
 - 6.ソフトロームと黒色土のブロック(締まり有り)
 - 7.ハードローム(但し全体に亀裂がある。部分的にブロック状、締まり有り)
 - 8.ハードローム(地山状、均一層)
 - 9.黒褐色土(最も暗色で細かいローム粒を含む)
 - 10.クリーム粘土(地山状)

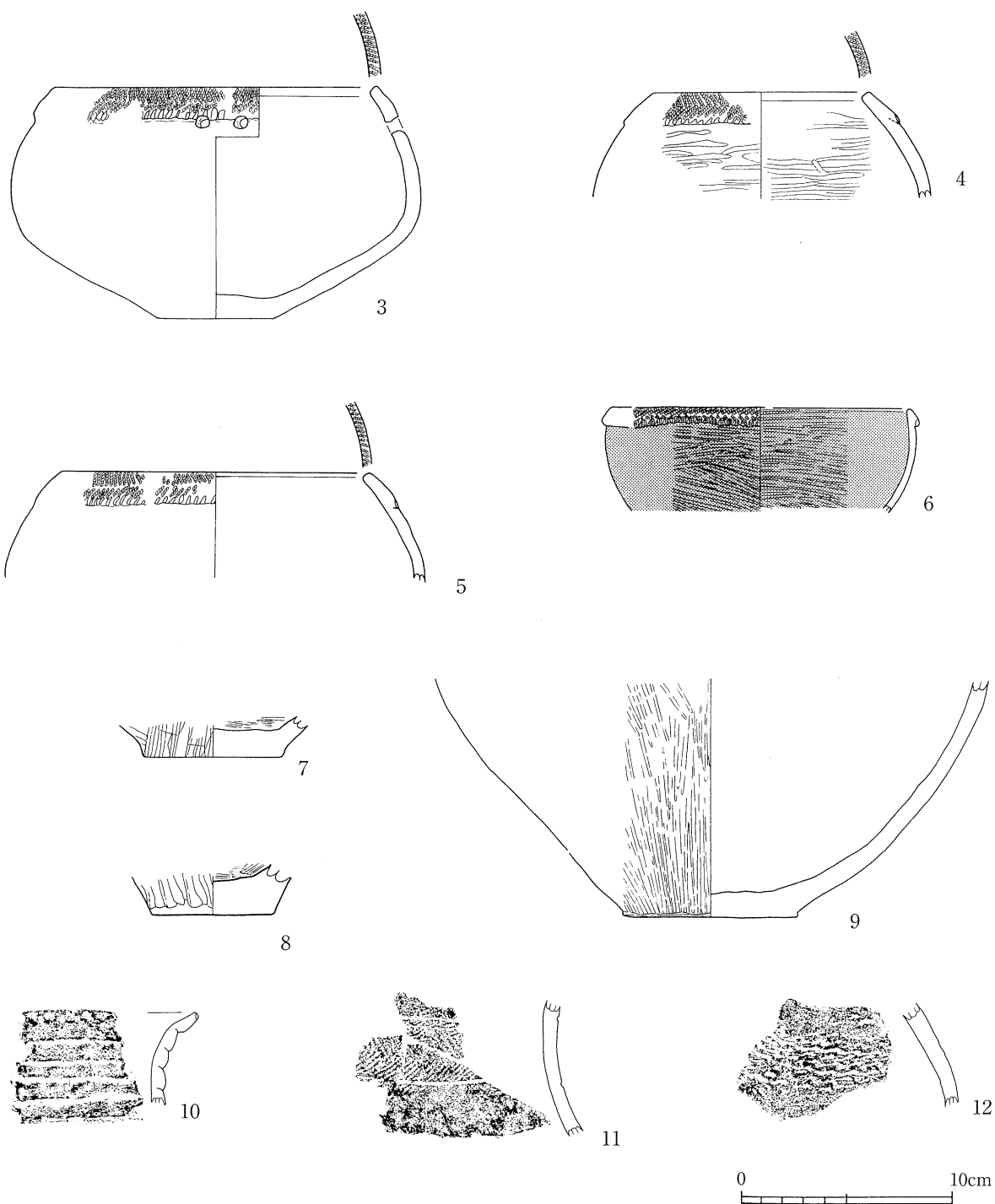
第152図 167号住居跡・50号土坑 遺構・遺物実測図



第153图 50号土坑 遺物実測図

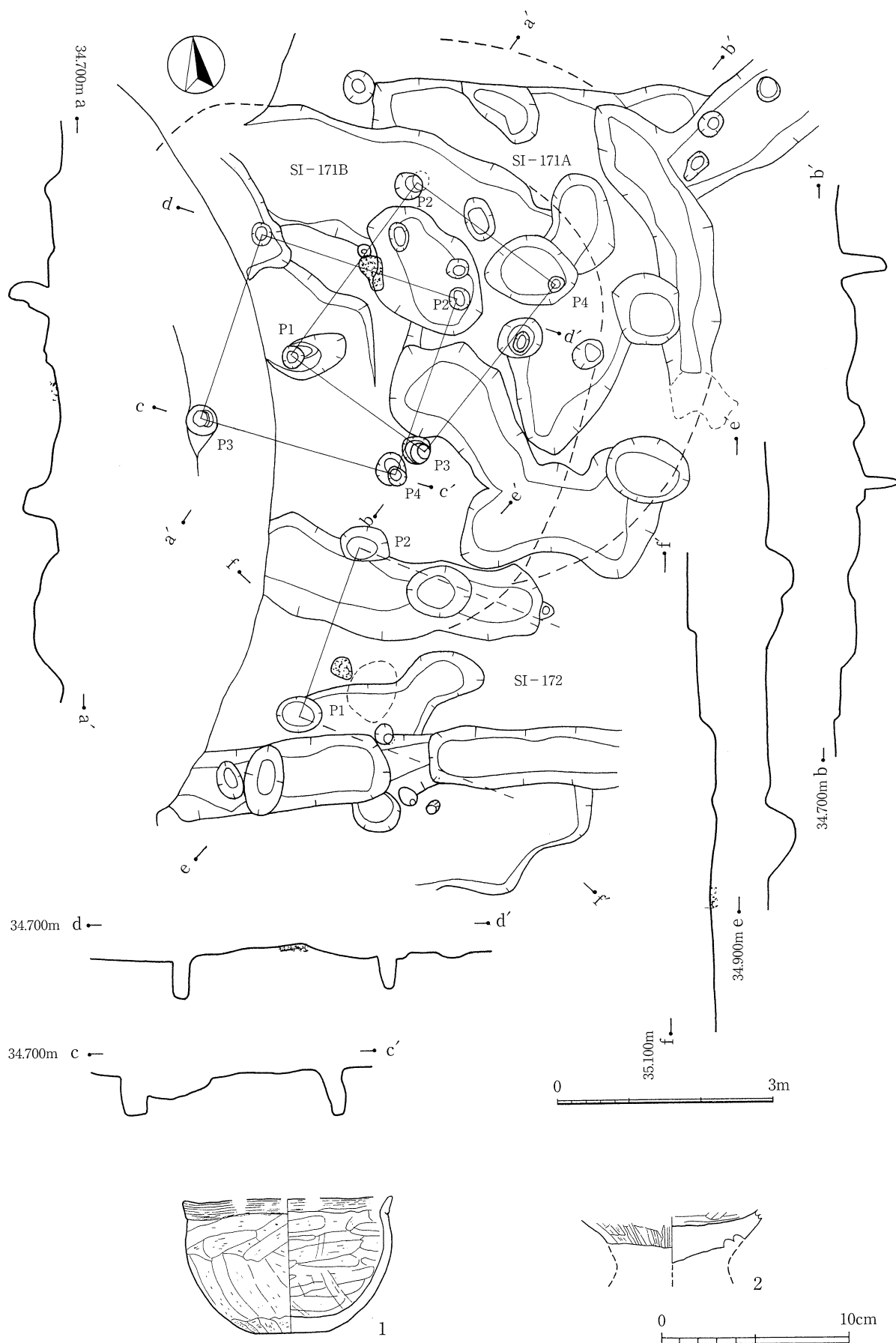


第154図 169号・170号住居跡 遺構・遺物実測図（遺物は169号）

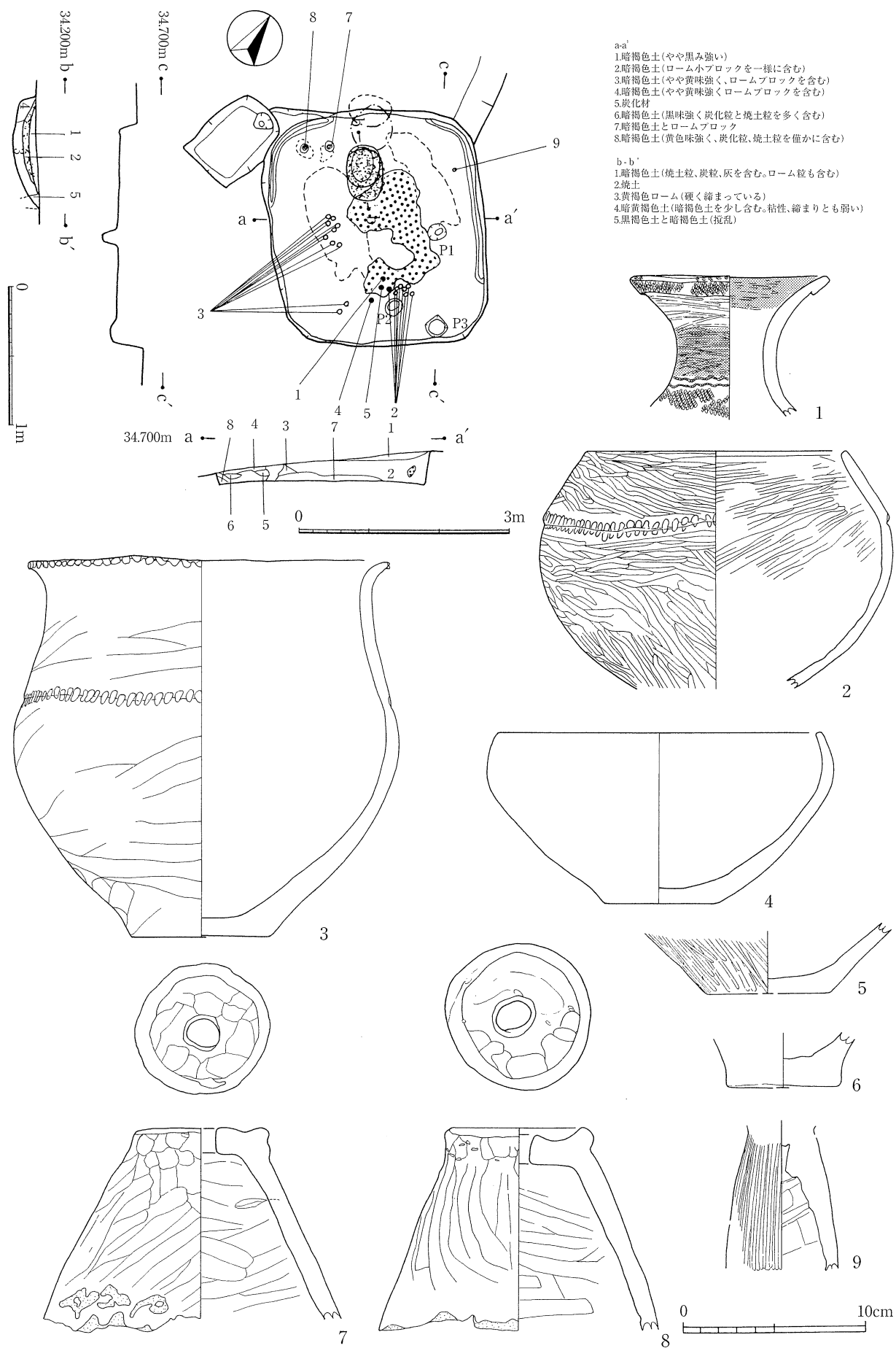


(3 ~ 6、9 = 169号、7 ~ 8、10 ~ 12 = 170号)

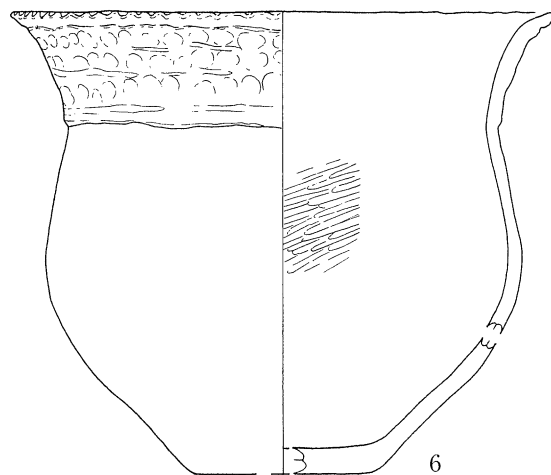
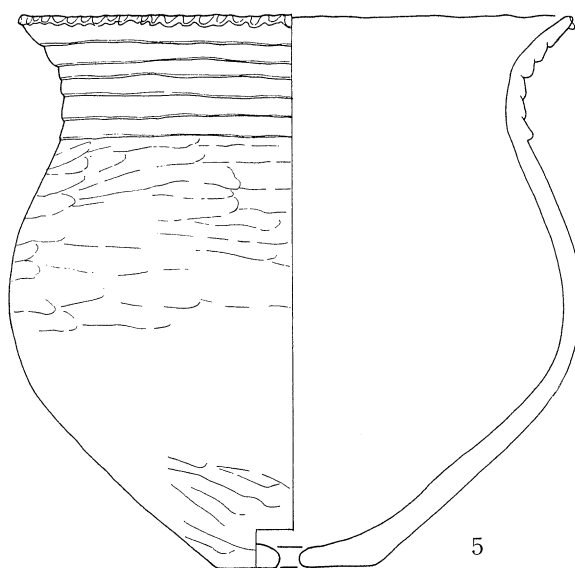
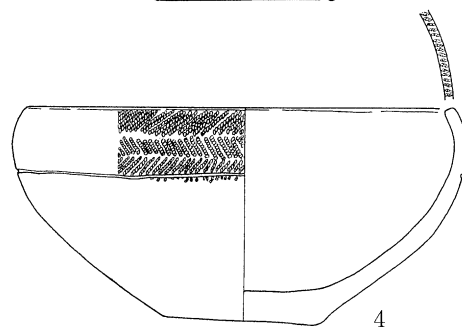
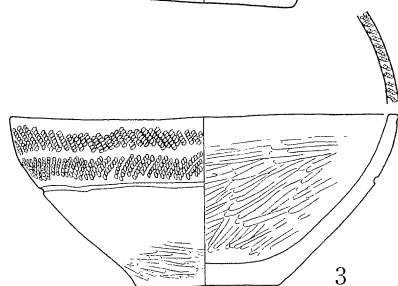
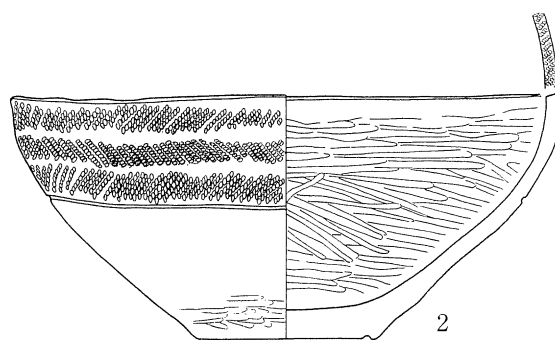
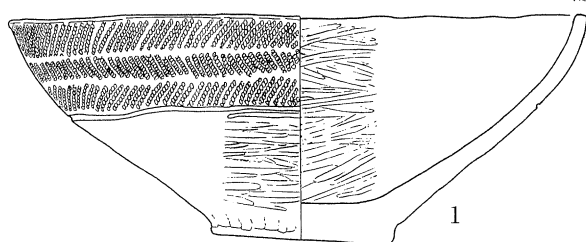
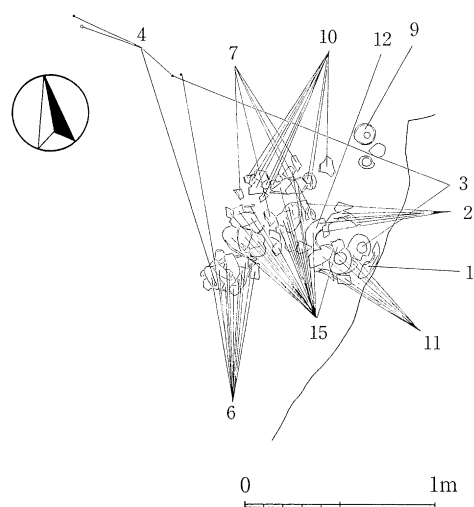
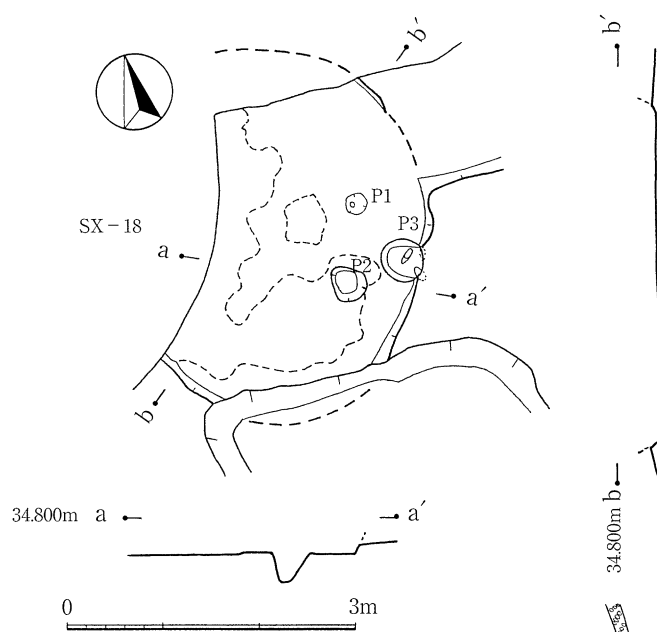
第155図 169号・170号住居跡 遺物実測図



第156図 171A・B号・172号住居跡 遺構・遺物実測図
(1 = 171A・B号、2 = 172号)

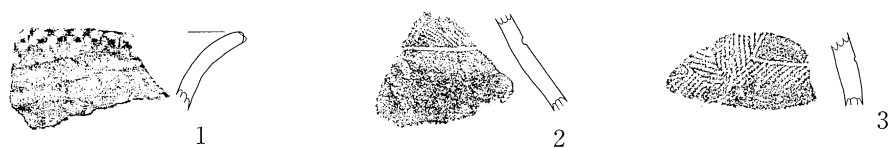
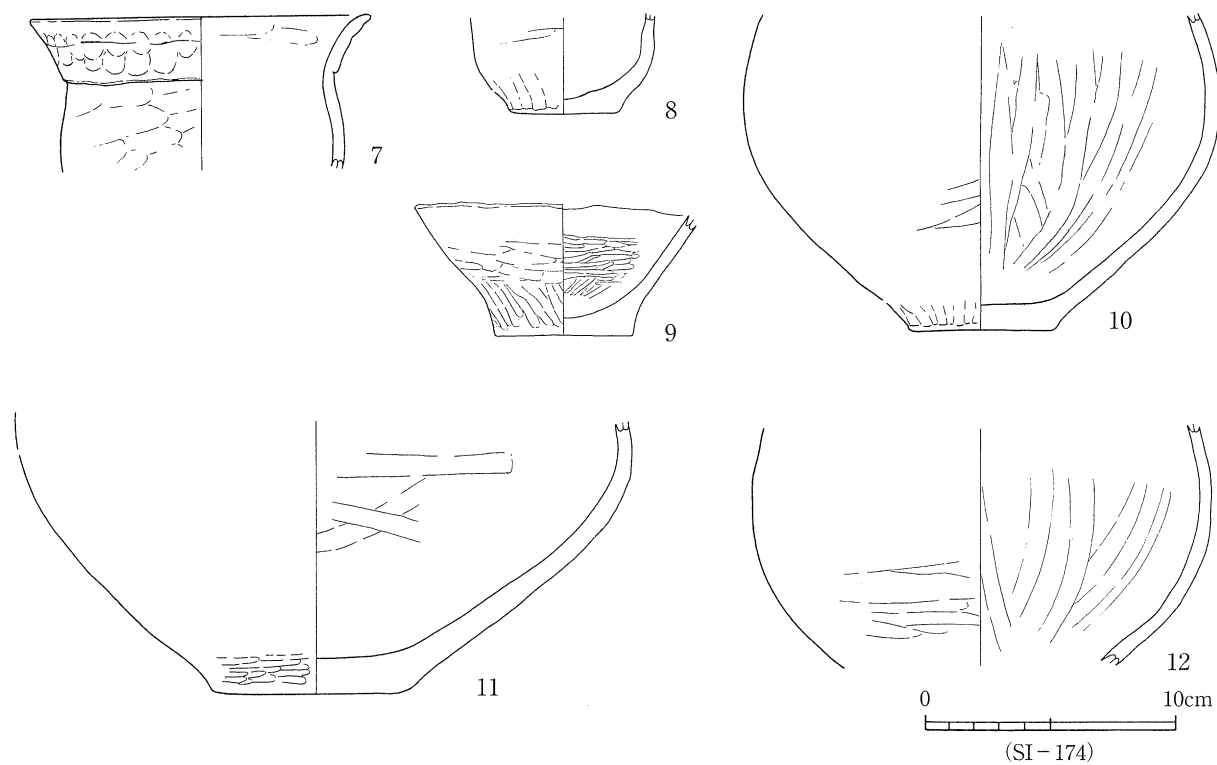


第157図 173号住居跡 遺構・遺物実測図

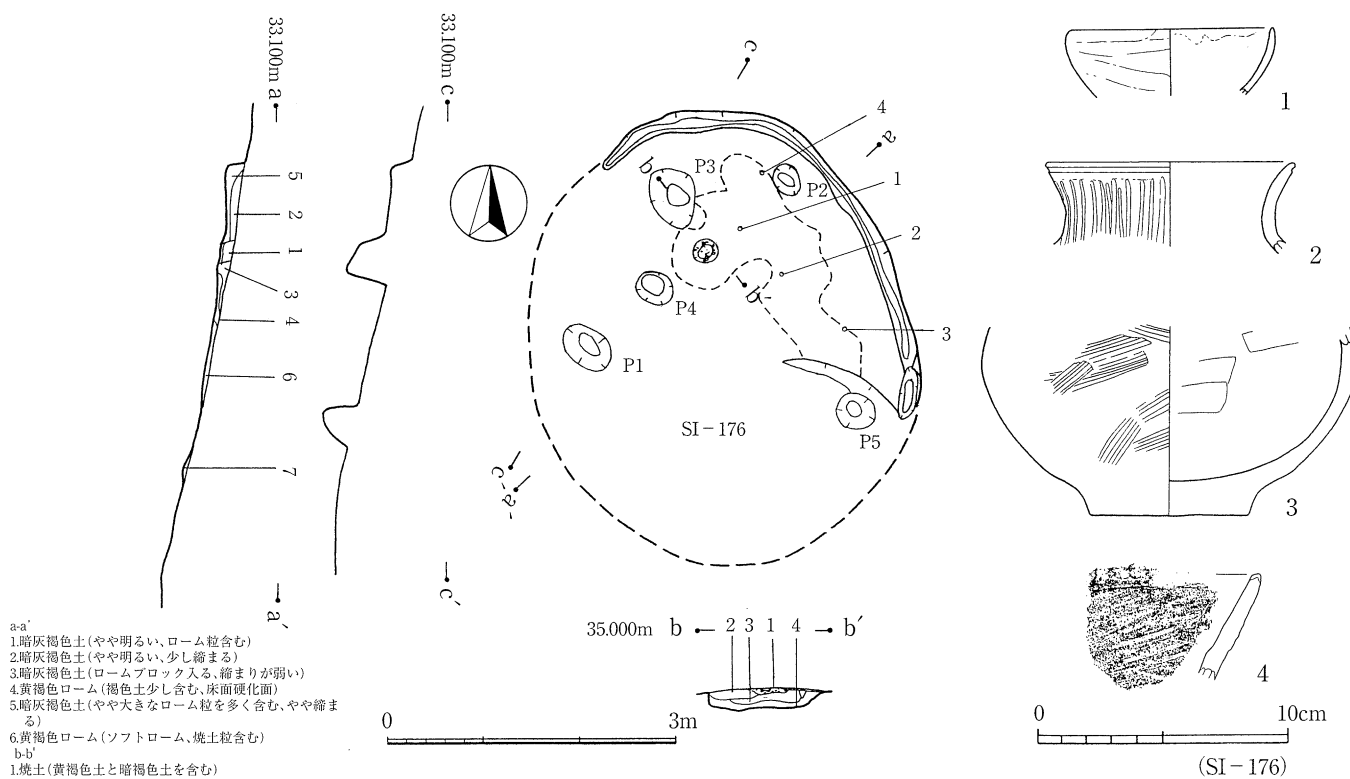


0 10cm

第158図 174号住居跡 遺構・遺物実測図



※SI-175は、SX-01の北側トレンチ内に確認。(SX-01全体図参照)



第159図 174号・175号・176号住居跡 遺構・遺物実測図

SI-177

a-a'

9.暗褐色土(ローム粒、ローム小ブロックを含む)

13.暗褐色土(焼土粒を多く含む)

29.暗褐色土(炭化粒、焼土粒を僅かに含む)

30.暗褐色土(焼土粒、ローム粒をやや多く含む)

c-c'

8.暗褐色土(ローム粒を僅かに含む)

9.暗褐色土(焼土粒を多く含む)

10.暗褐色土(ローム小ブロックを含む、やや締まり弱い)

11.暗褐色土(黒味強く、ローム小ブロックを少し含む)

12.暗褐色土(ローム小ブロック焼土粒を少し含む)

13.暗褐色土(ローム小ブロック焼土粒を含む)*

SI-179

b-b'

31.黒褐色土(締まり弱い、攪乱)

32.暗褐色土(ローム粒を一樣に含む、ロームブロックも含む)

33.暗褐色土(ローム粒、焼土粒を僅かながら一樣に含む)

34.暗褐色土(黄色味帯び、焼土粒含む)

35.暗褐色土と暗褐色土(焼土粒多く含む)

36.暗褐色土(やや黄色味帯び、ローム粒やや多く含む)

37.暗褐色土(やや黒味強いローム粒含む)

38.暗褐色土(僅かに焼土粒を含む)

39.暗褐色土(ローム小ブロックを含む、攪乱)

SI-180

b-b'

1.暗褐色土(ロームブロック、焼土粒僅かに含む)

42.黒褐色土(攪乱)

SI-181

c-c'

15.暗褐色土とローム

16.暗褐色土(ローム粒、ローム小ブロックを含む)

17.暗褐色土とソフトローム

SI-182

a-a'

19.暗褐色土(焼土を僅かにブロック状に含む)

20.暗褐色土(黒味強くやや締まり悪い、攪乱)

21.暗褐色土(黒味やや強い)

22.暗褐色土(ローム粒を僅かに含む)

23.暗褐色土(黒味強くローム小ブロック含む。焼土粒を含む)

24.暗褐色土(ロームを斑に含む)

25.暗褐色土(ロームを斑に多く含む)

26.貼り床(黒色土とローム大ブロックの混合)

27.黒褐色土(細かいローム粒を含む)

SI-183

b-b'

1.暗褐色土

3.暗褐色土(焼土を多く含む)

4.貼り床(硬化黒色土とロームをブロック状に混合させる(5cm大以下))

39.暗褐色土(やや赤色味帯びる。ローム粒、炭化粒を僅かに含む)

40.暗褐色土(焼土粒、焼土ブロックを含む)

41.床残り良好

42.暗褐色土(黒味やや強く、焼土を斑状に含む、攪乱)

c-c'

1.暗褐色土(ローム粒を僅かながら一樣に含む)

2.床(全面的に硬質)

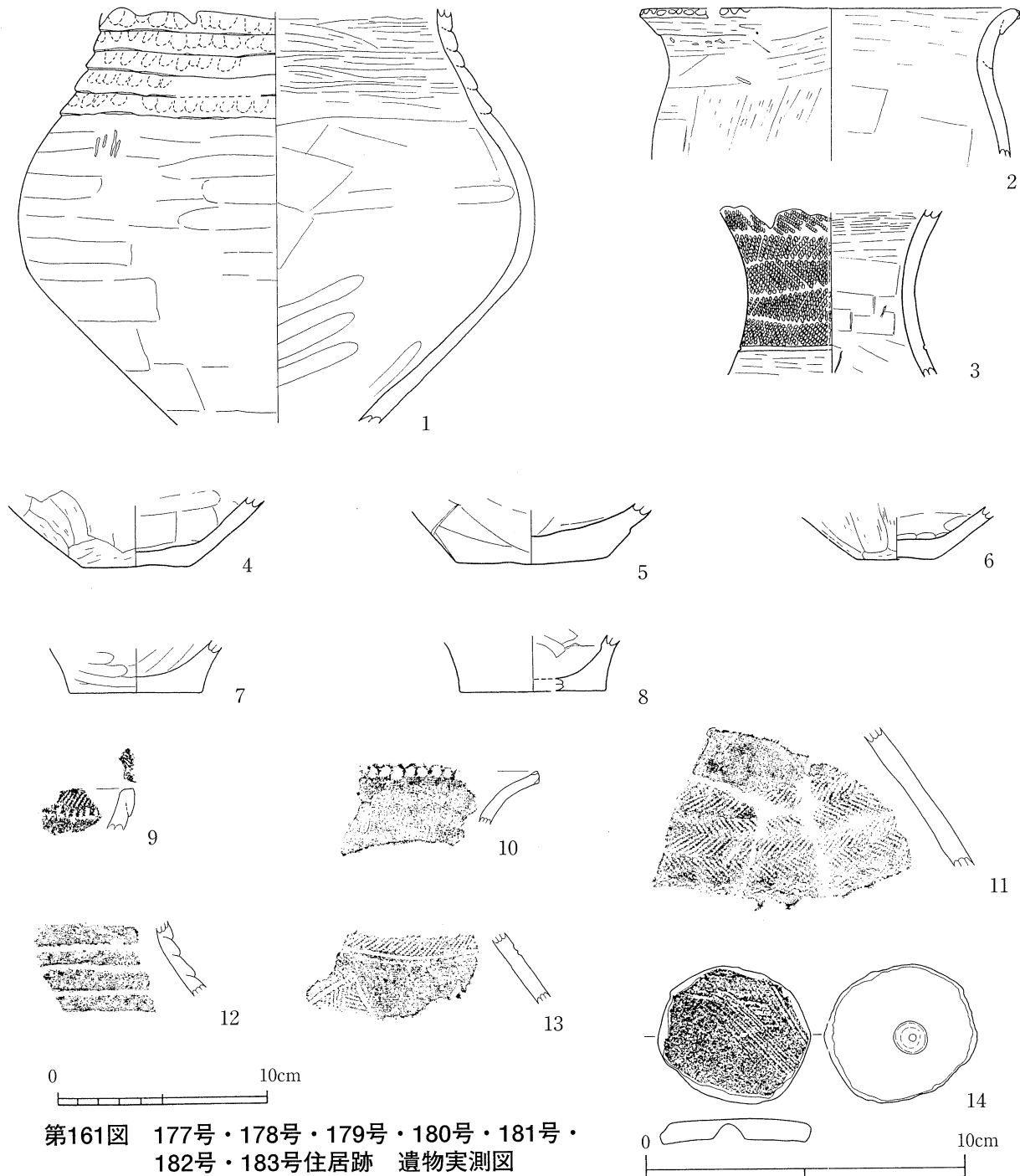
3.暗褐色土(焼土粒)

4.焼土を多く含む。

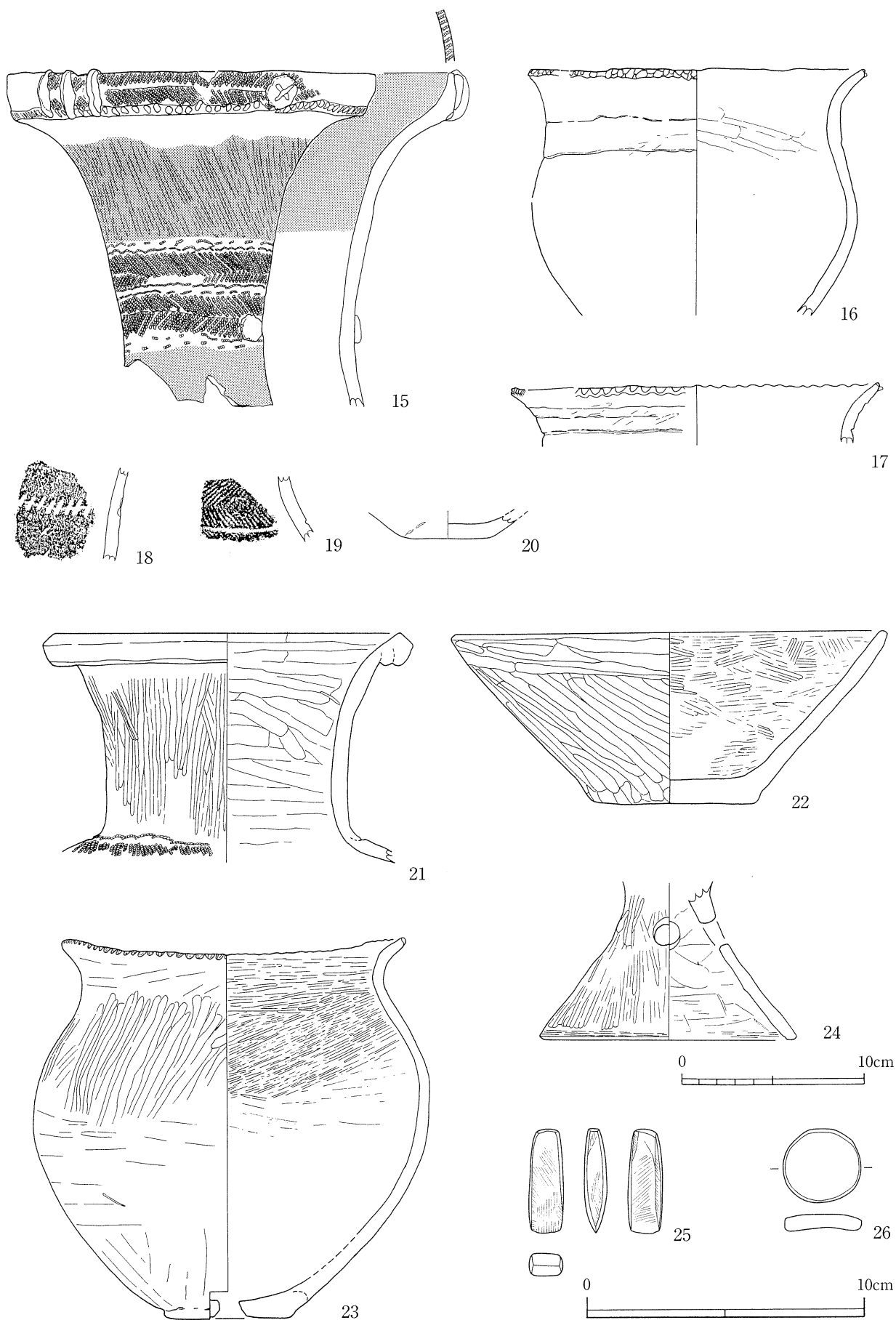
5.貼り床

6.床下。住居下のたちあがり。

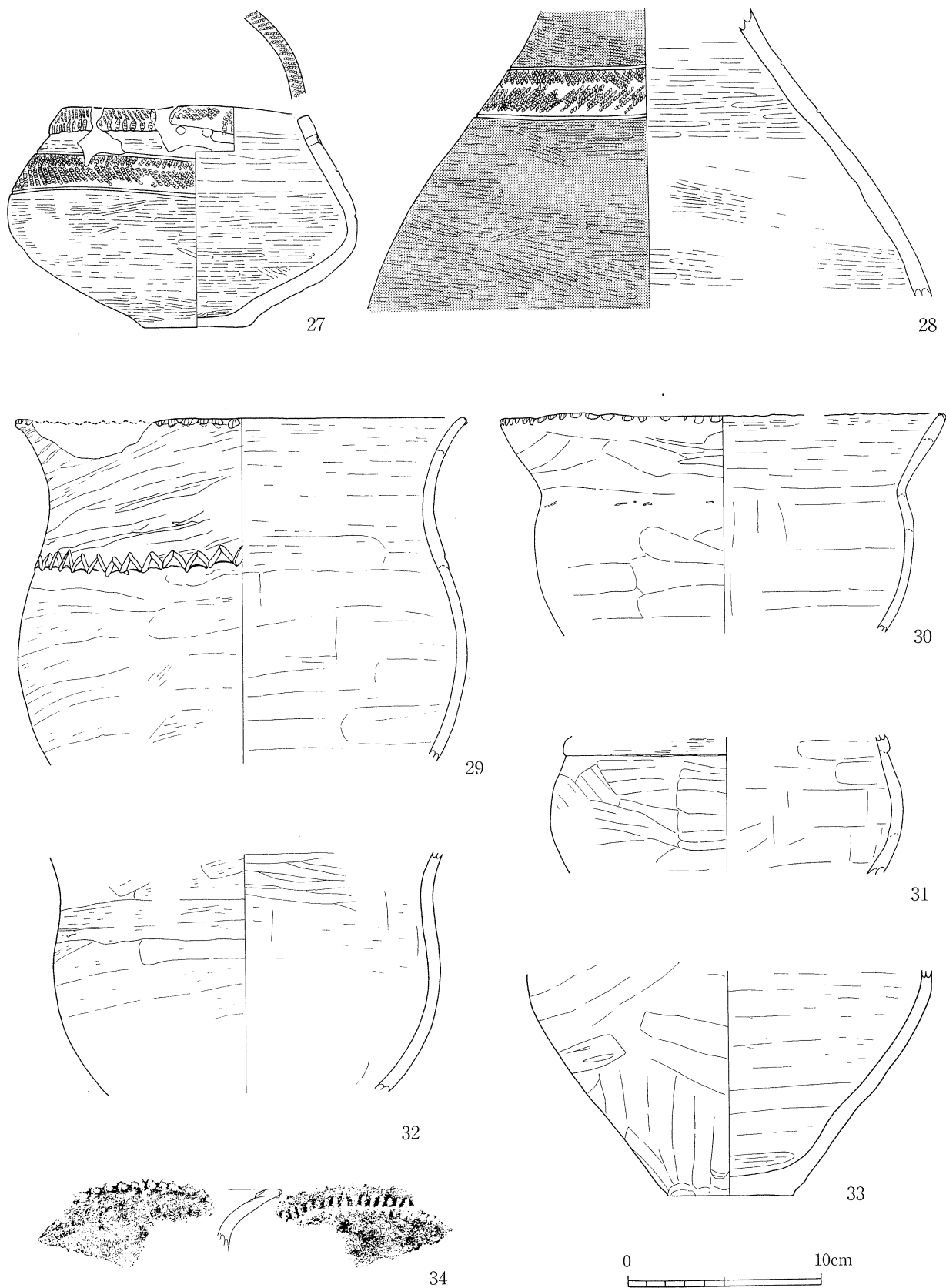
7.ローム



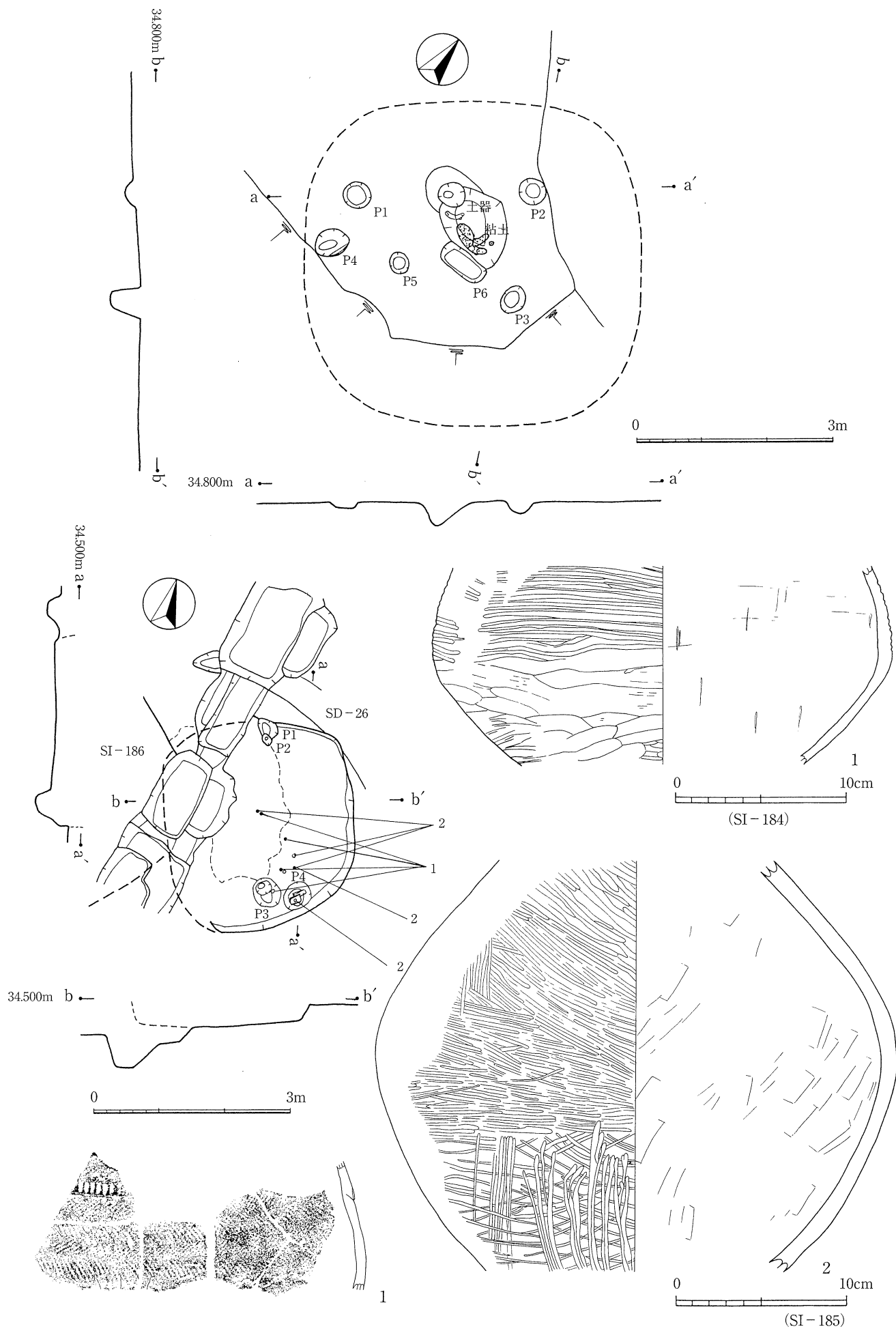
第161図 177号・178号・179号・180号・181号・
182号・183号住居跡 遺物実測図
(1～6=177号、7、8、10～13=179号)



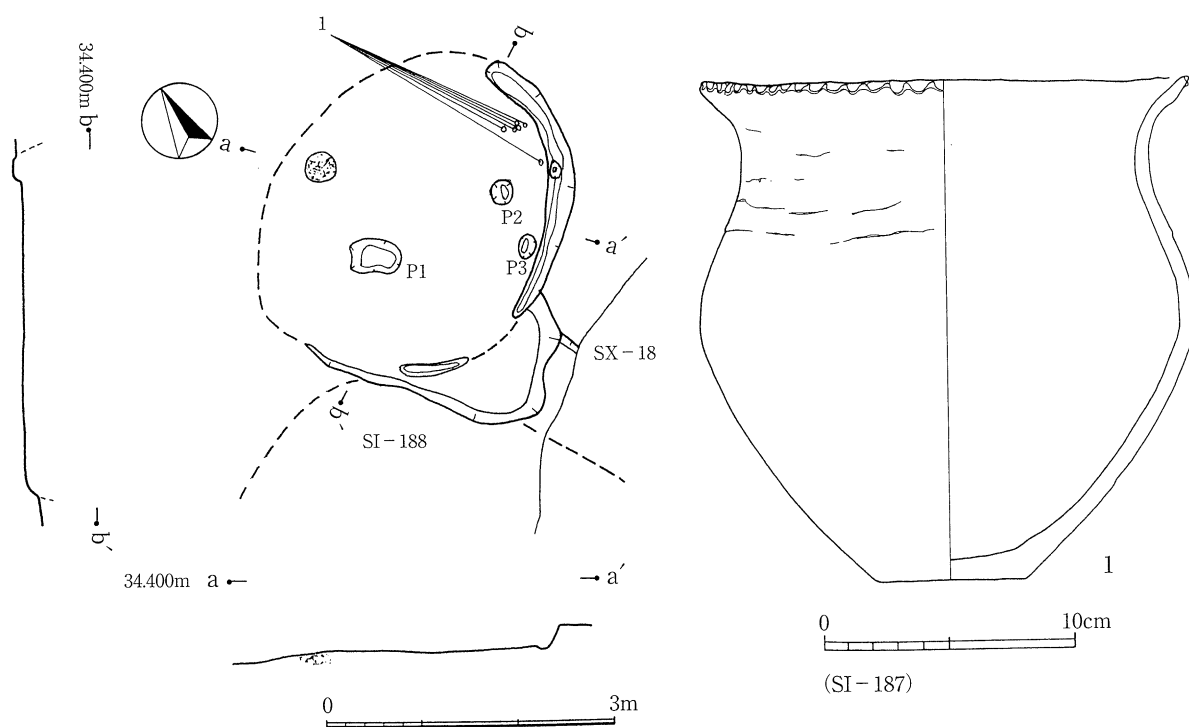
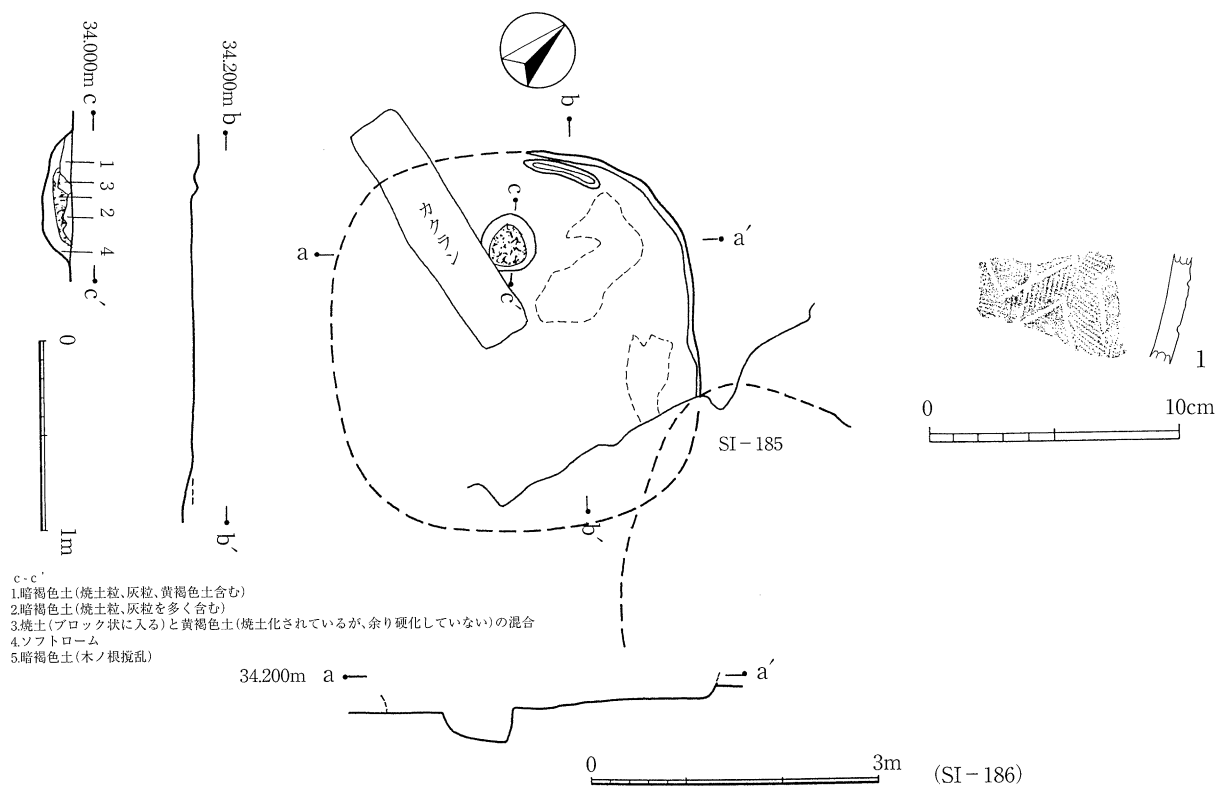
第162図 180号・181号・182号住居跡 遺物実測図
 (19、20=180号、15~17、18=181号、21~24、25=182号)



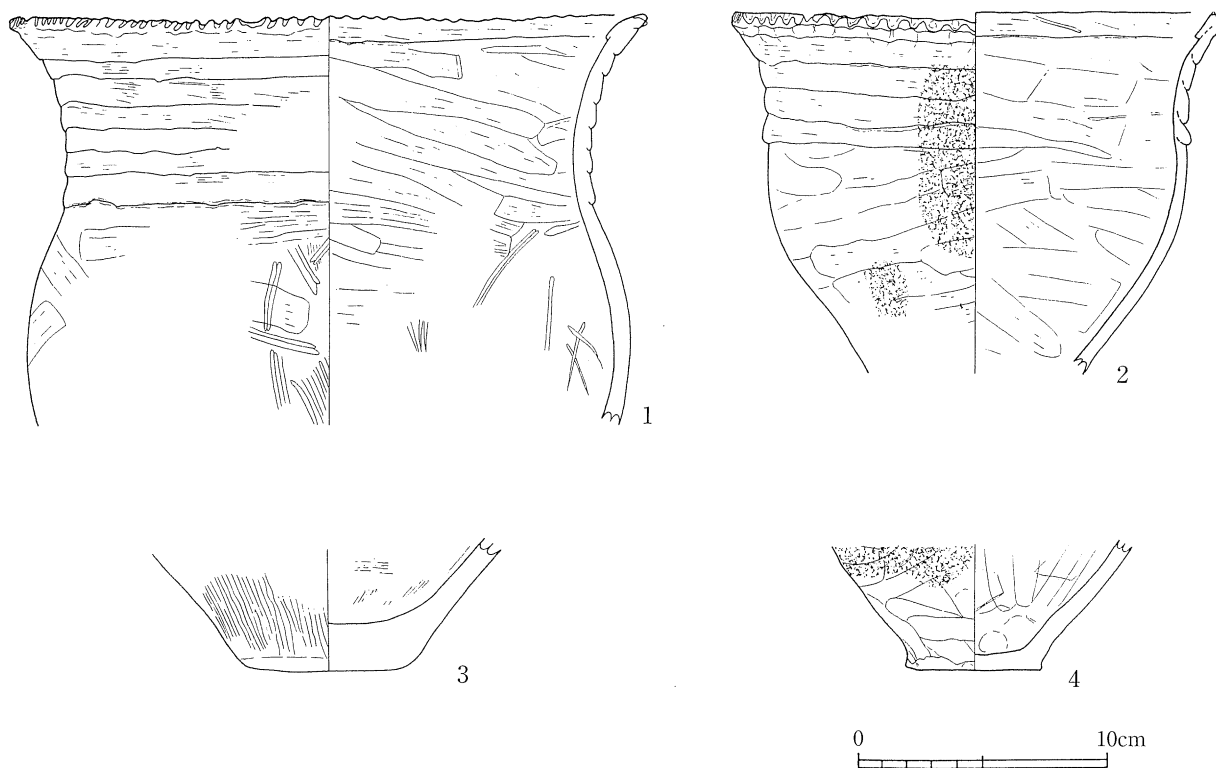
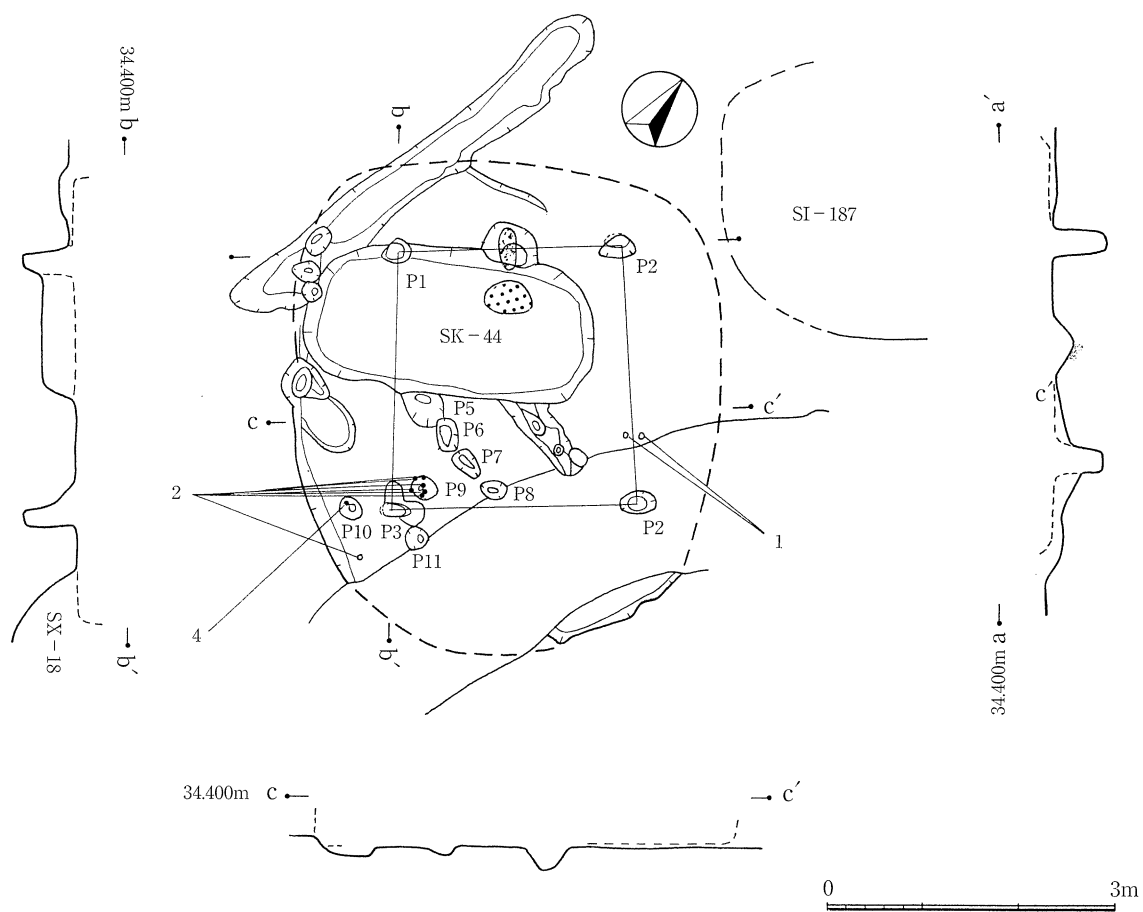
第163図 183号住居跡 遺物実測図



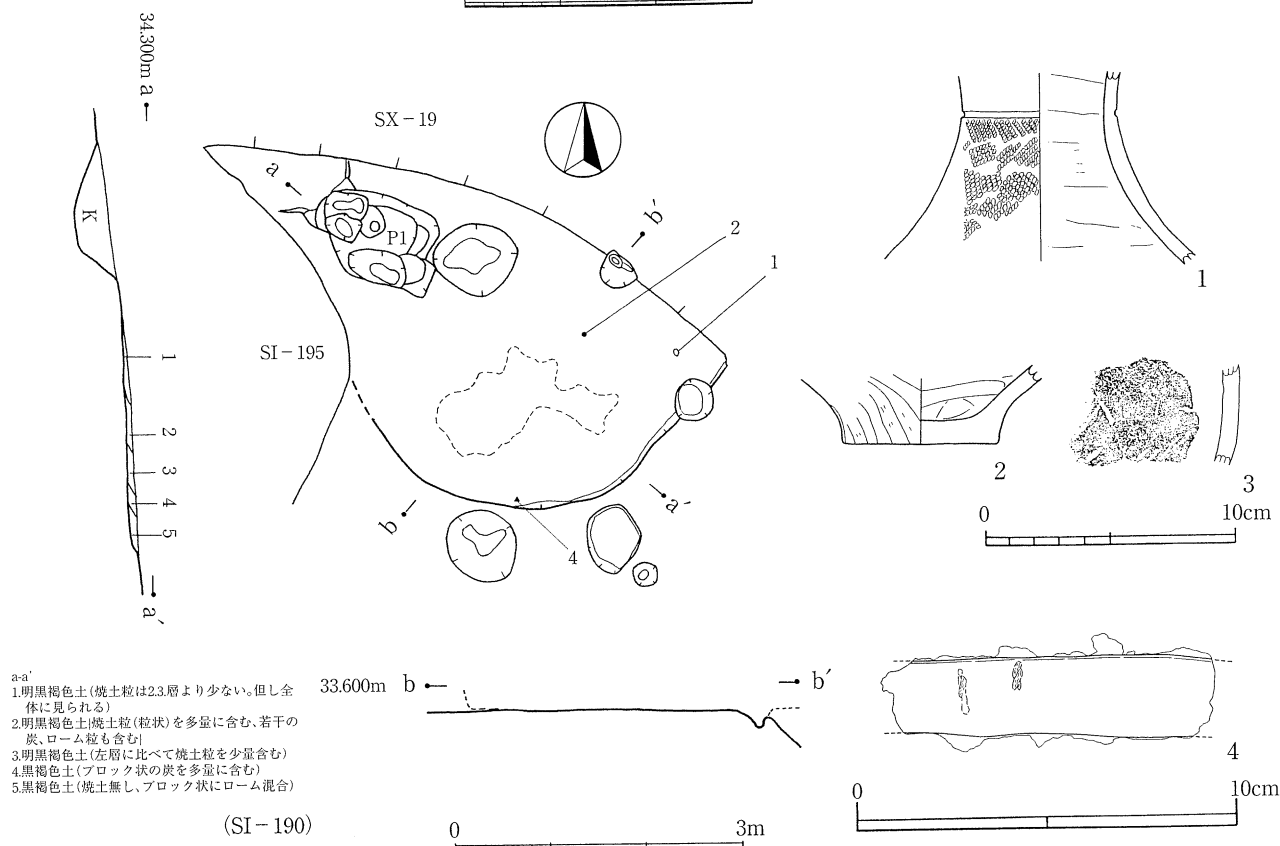
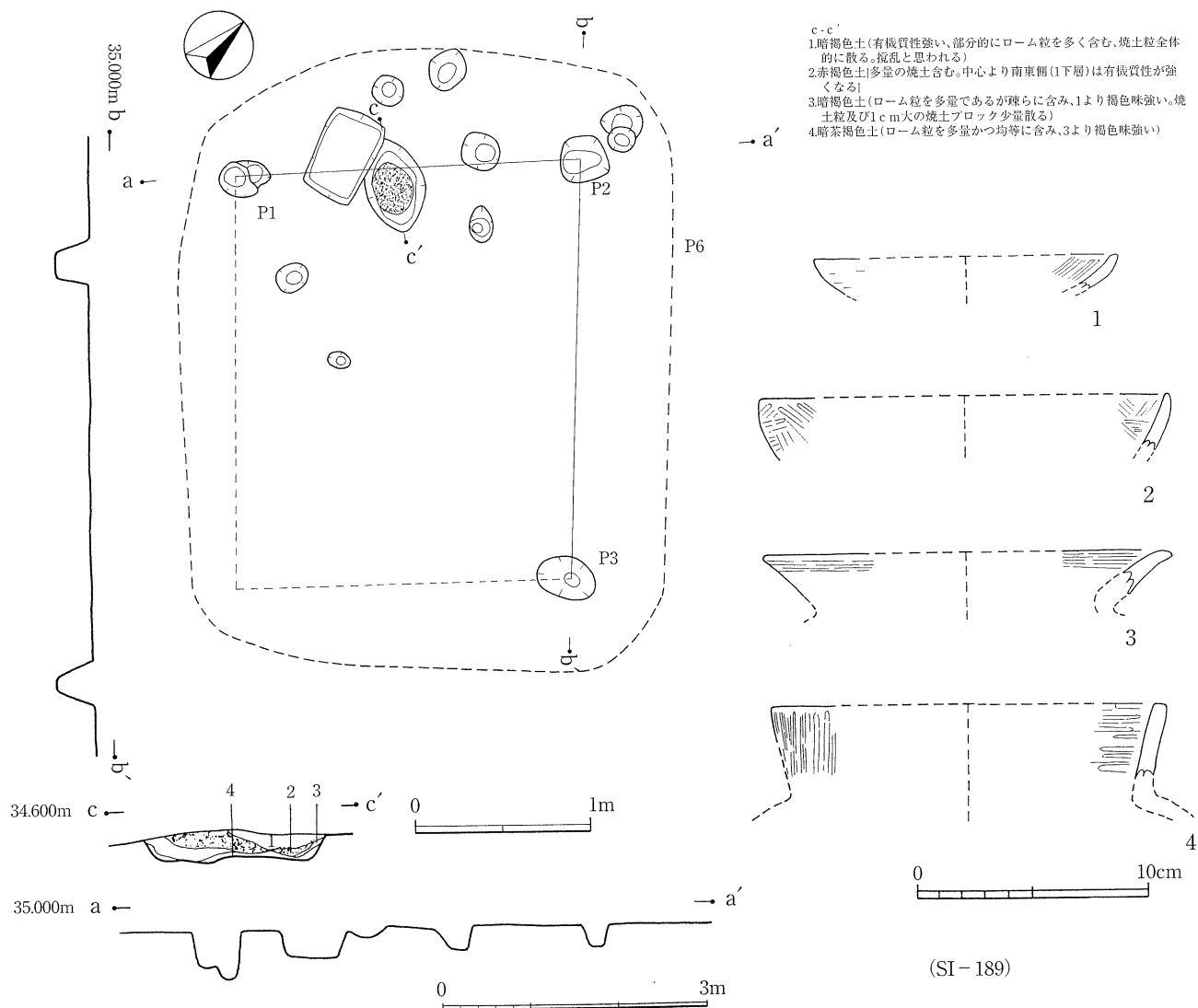
第164図 184号・185号住居跡 遺構・遺物実測図



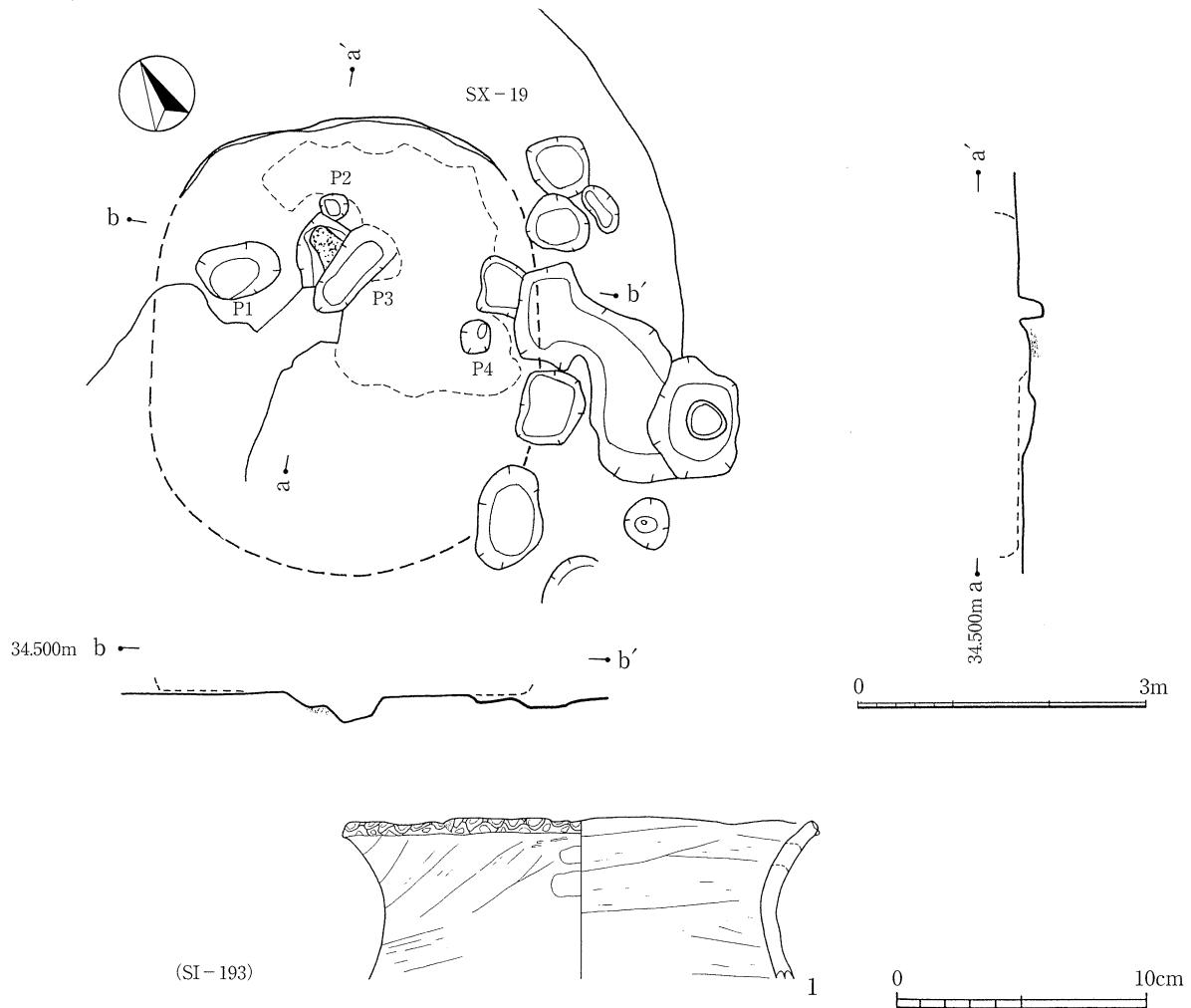
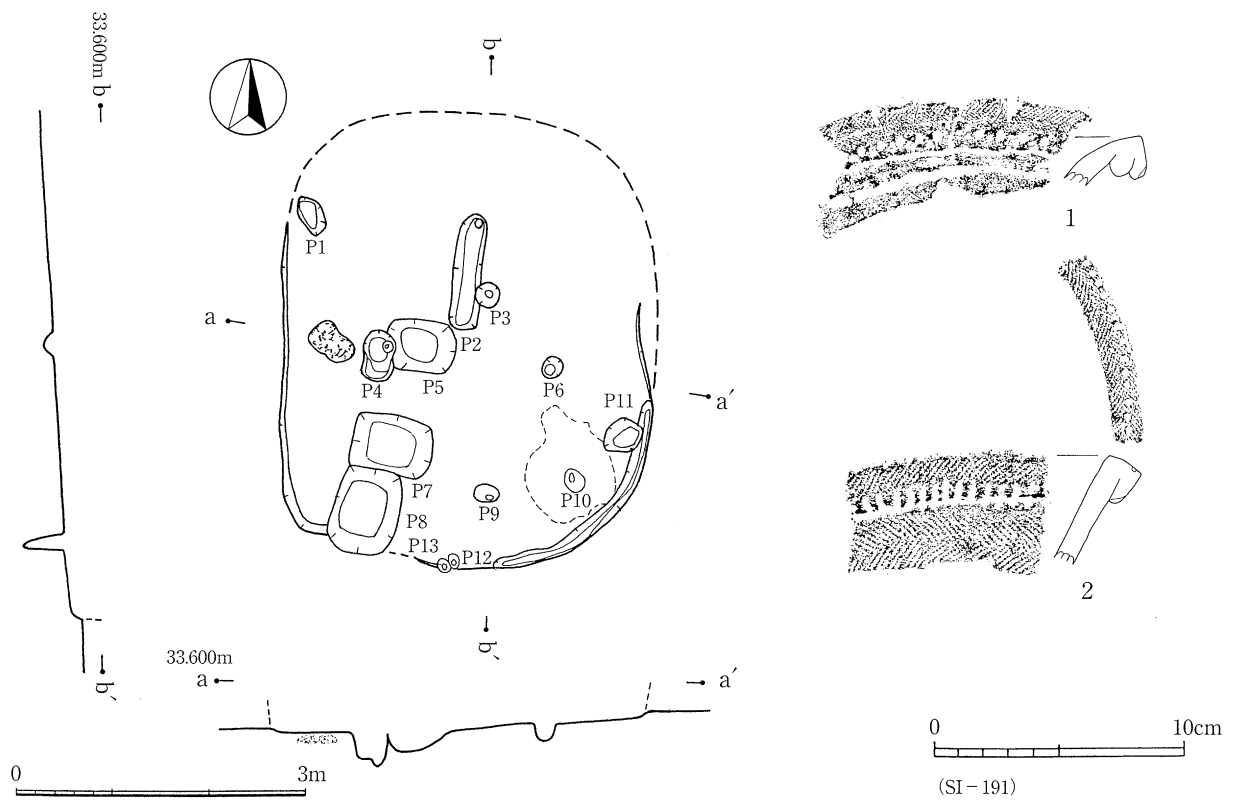
第165図 186号・187号住居跡 遺構・遺物実測図



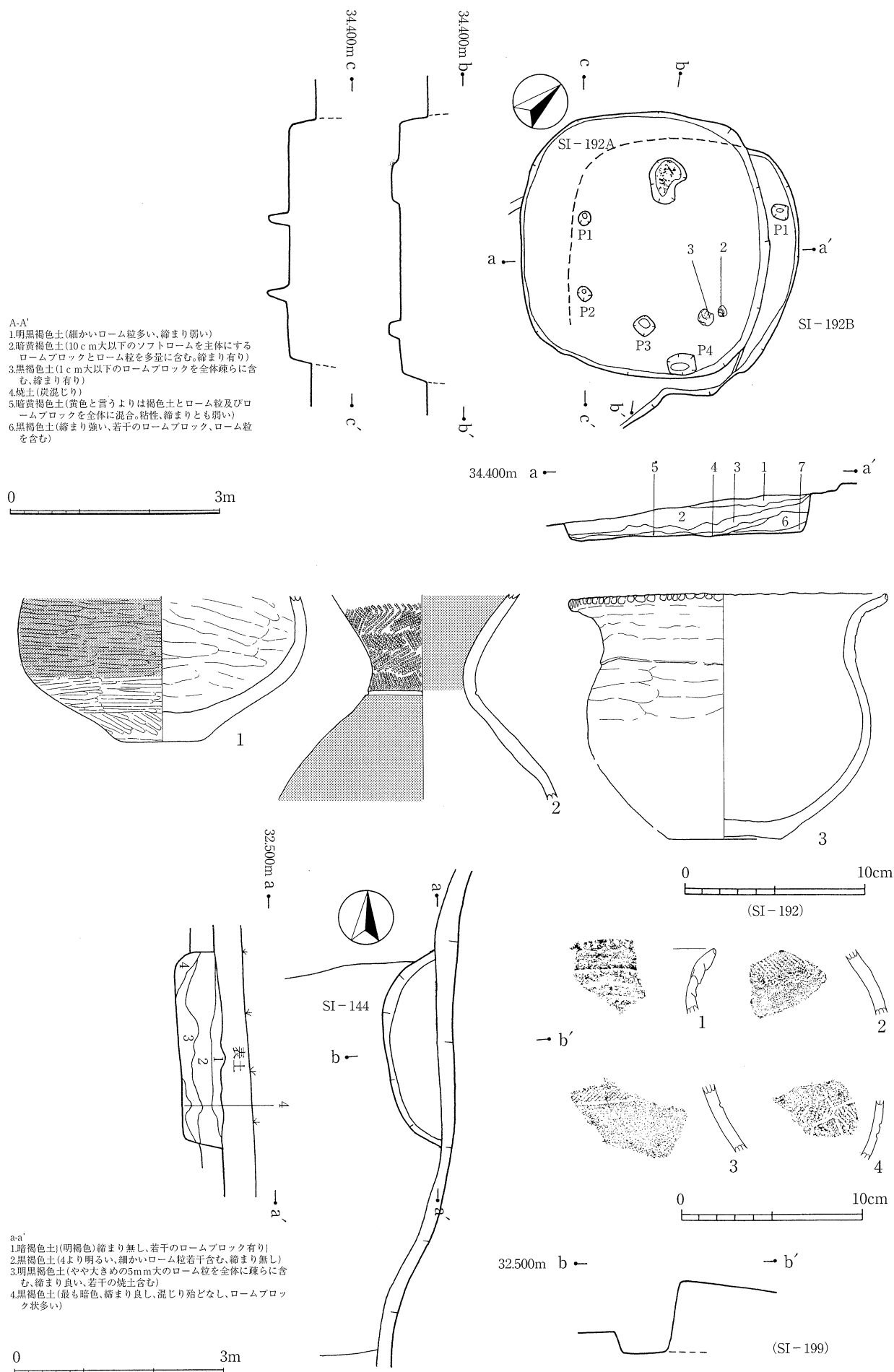
第166図 188号住居跡 遺構・遺物実測図

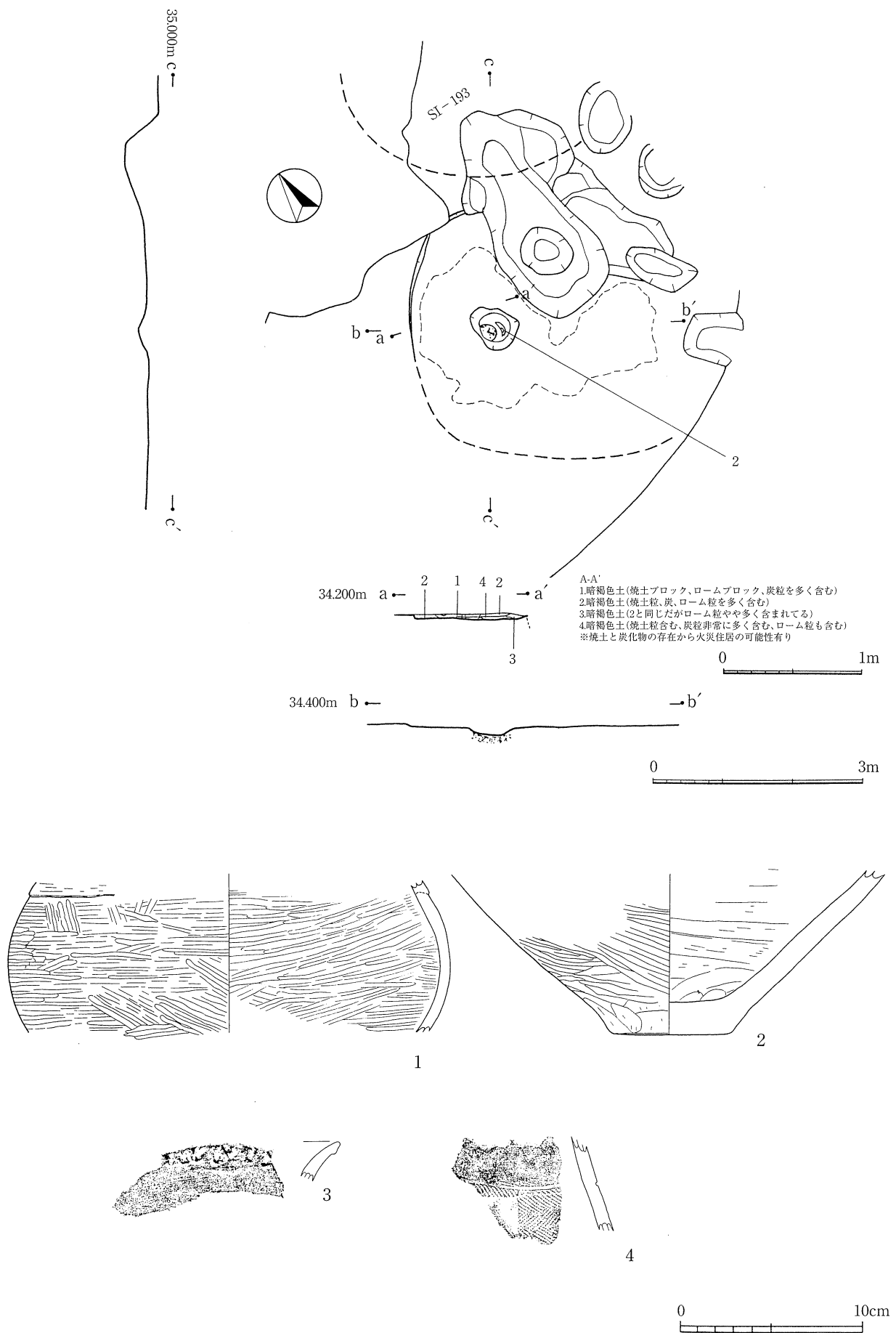


第167図 189号・190号住居跡 遺構・遺物実測図

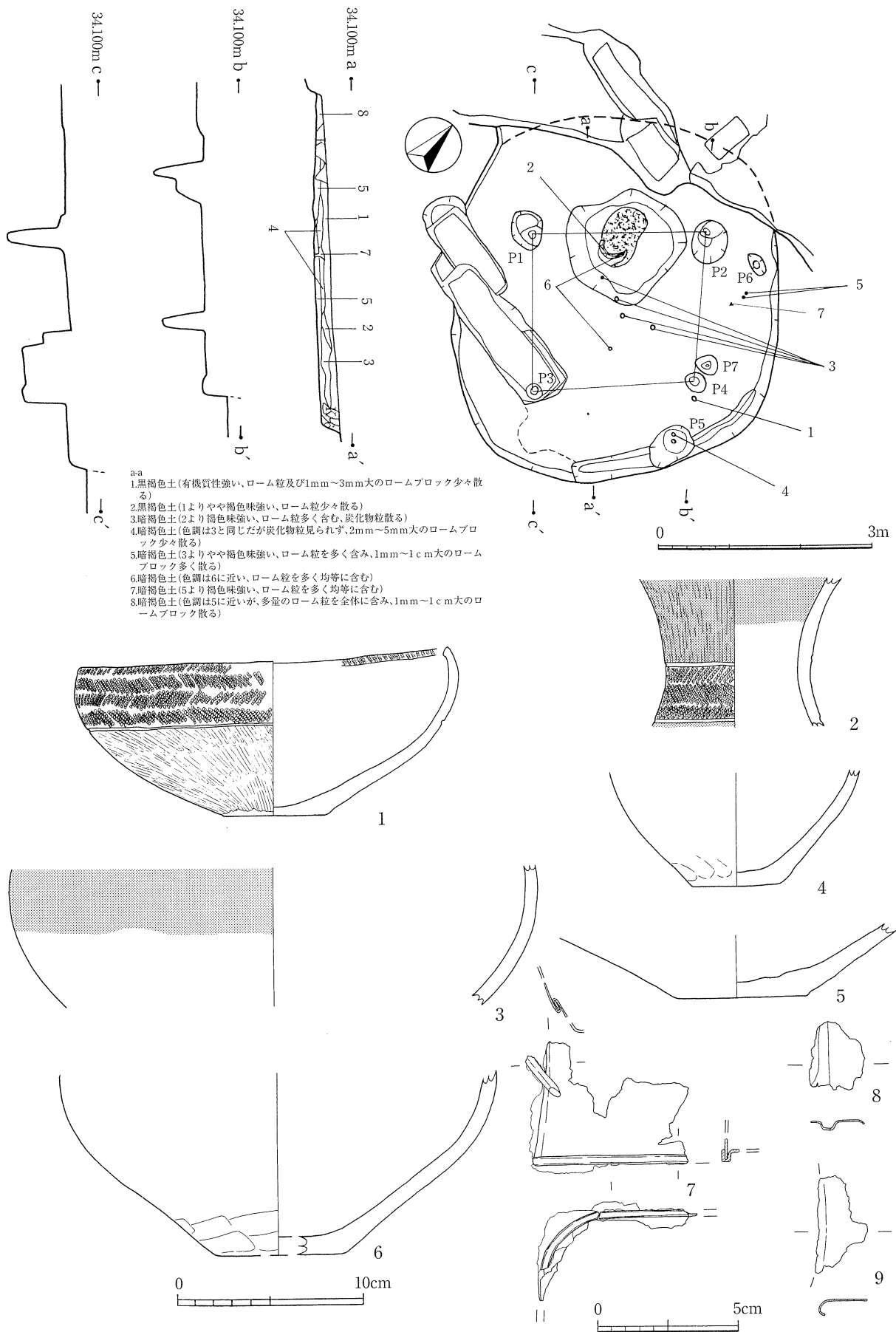


第168図 191号・193号住居跡 遺構・遺物実測図

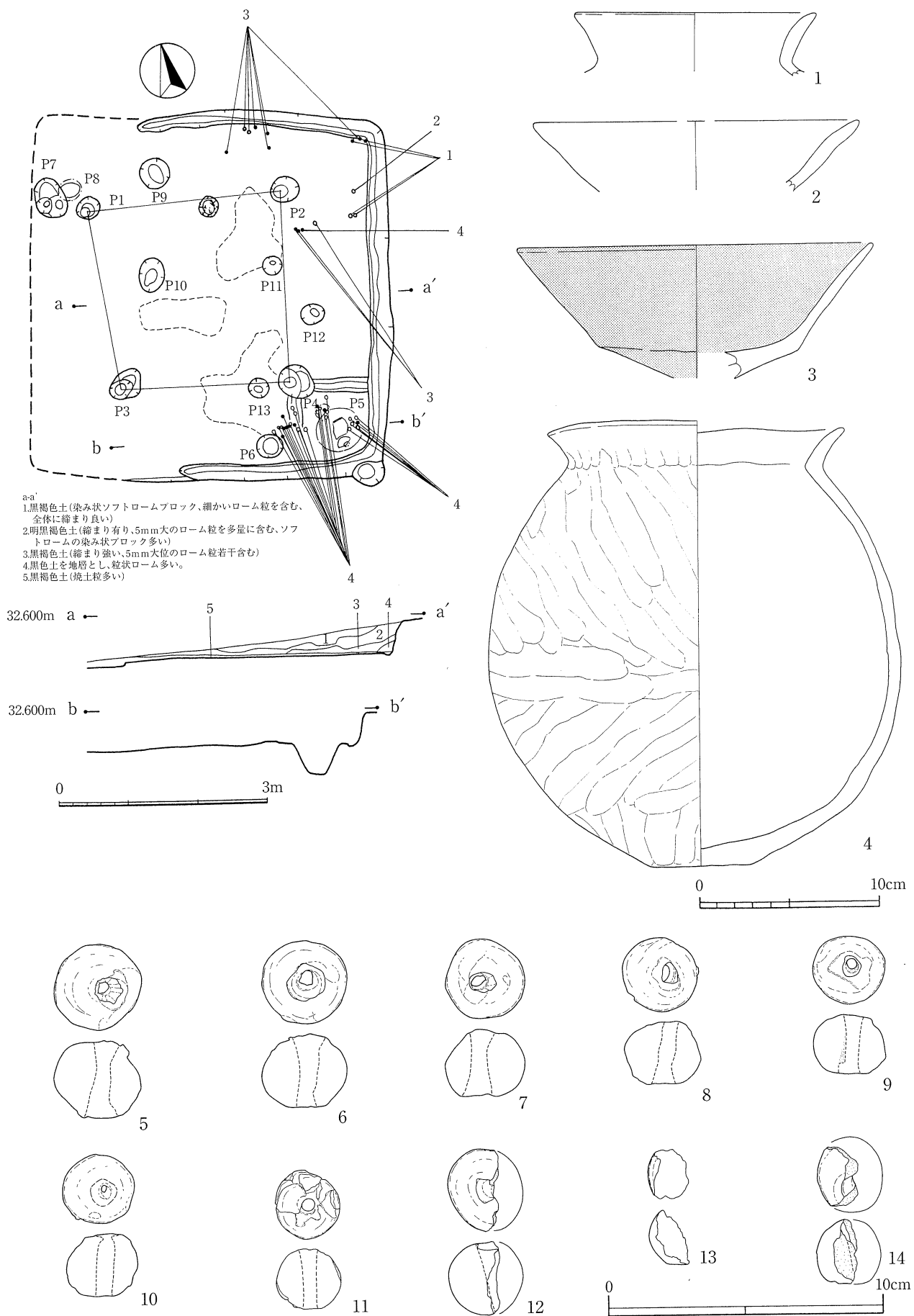




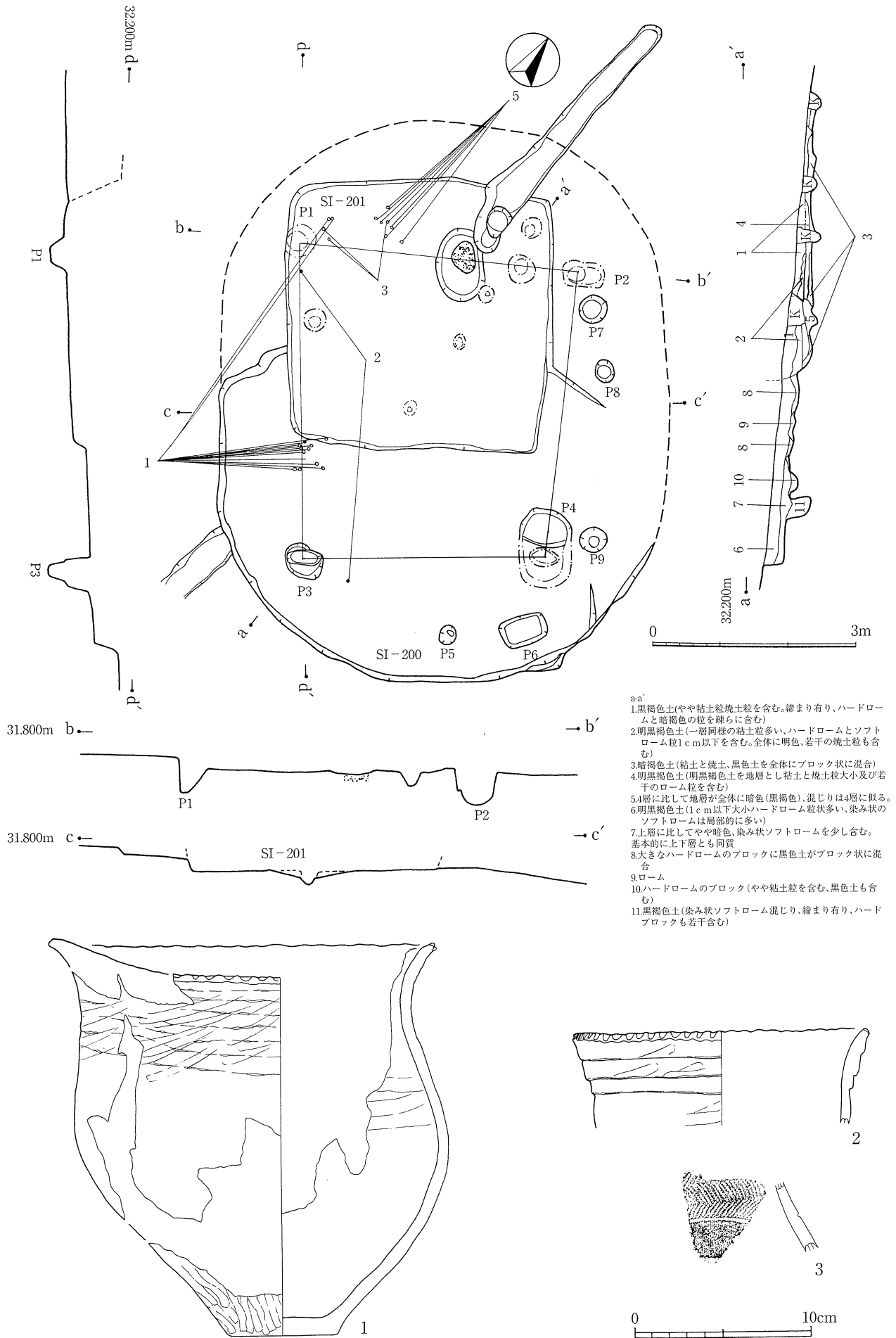
第170図 194号住居跡 遺構・遺物実測図



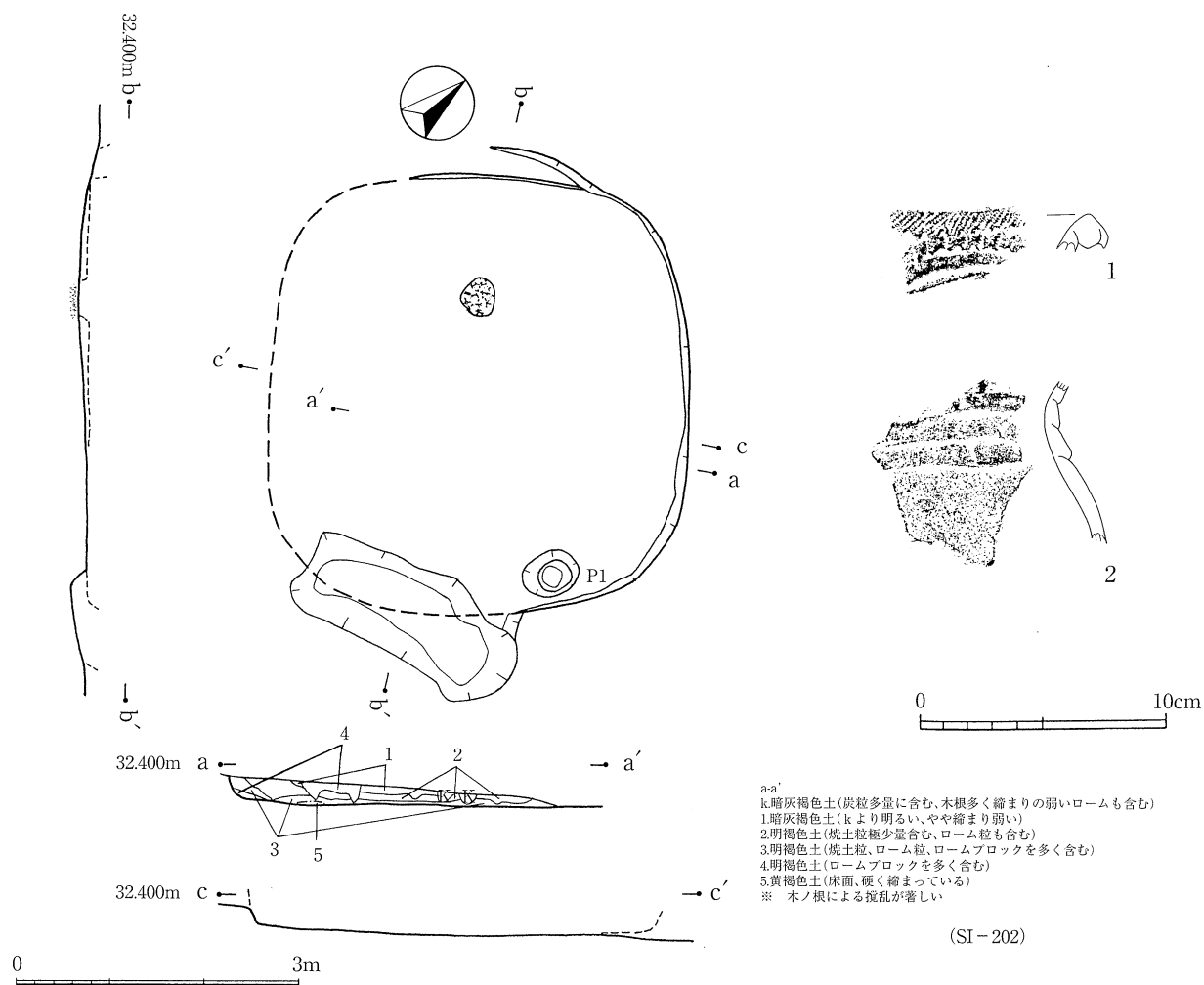
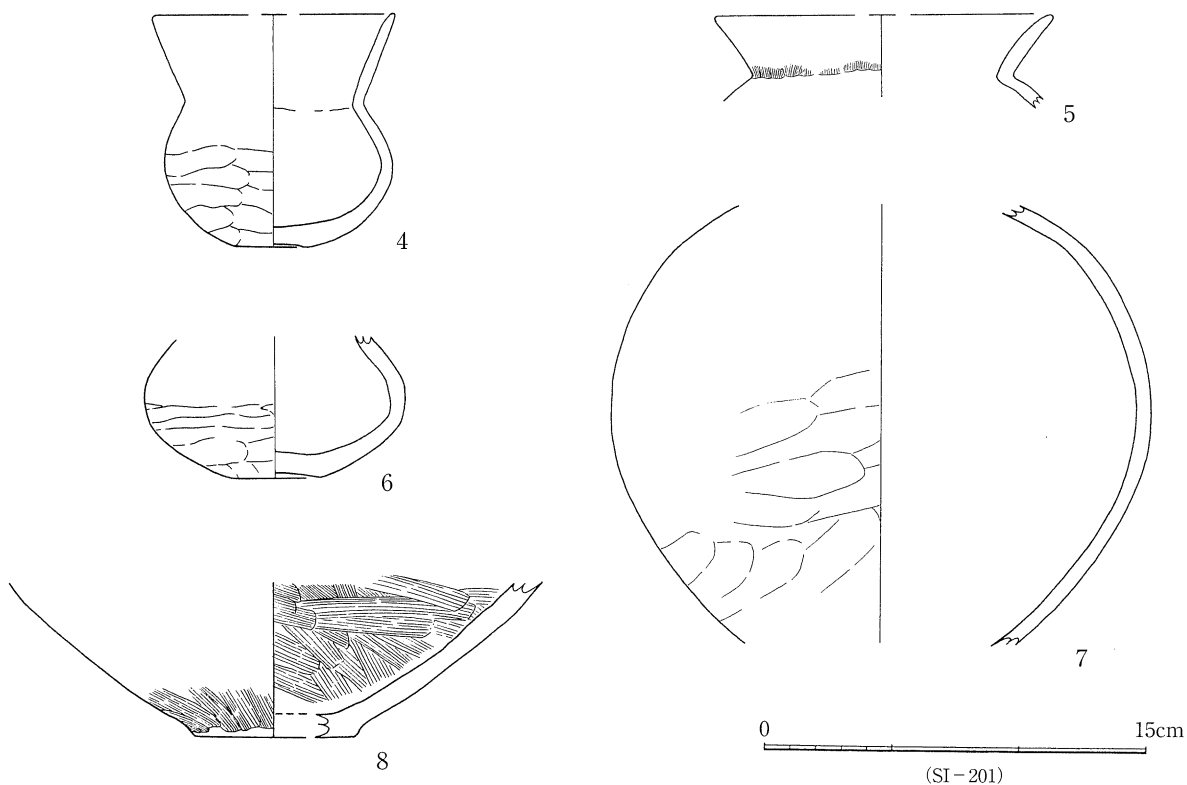
第171図 195号住居跡 遺構・遺物実測図



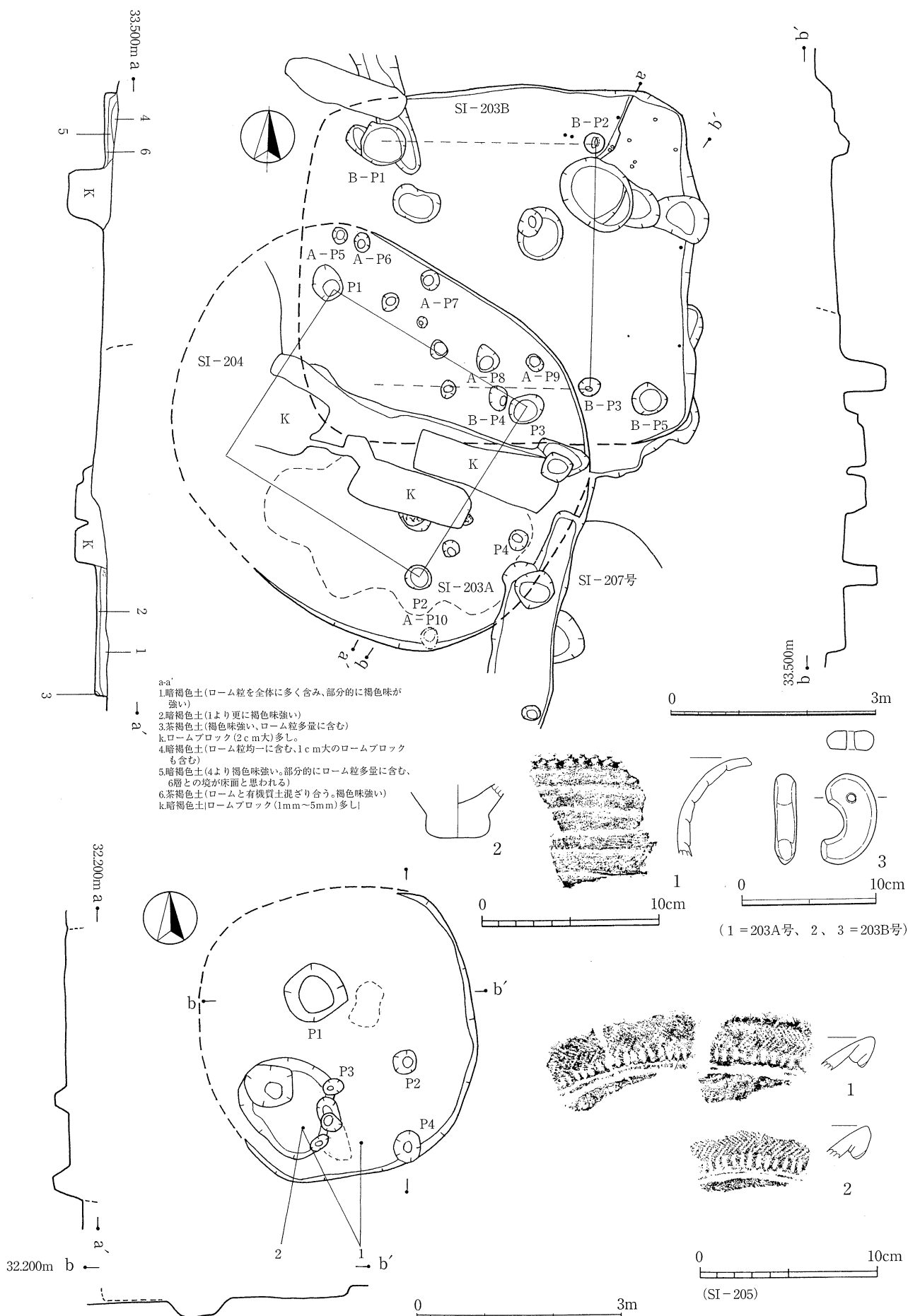
第173図 197号住居跡 遺構・遺物実測図



第175図 200号・201号住居跡 遺構・遺物実測図 (遺物は200号)

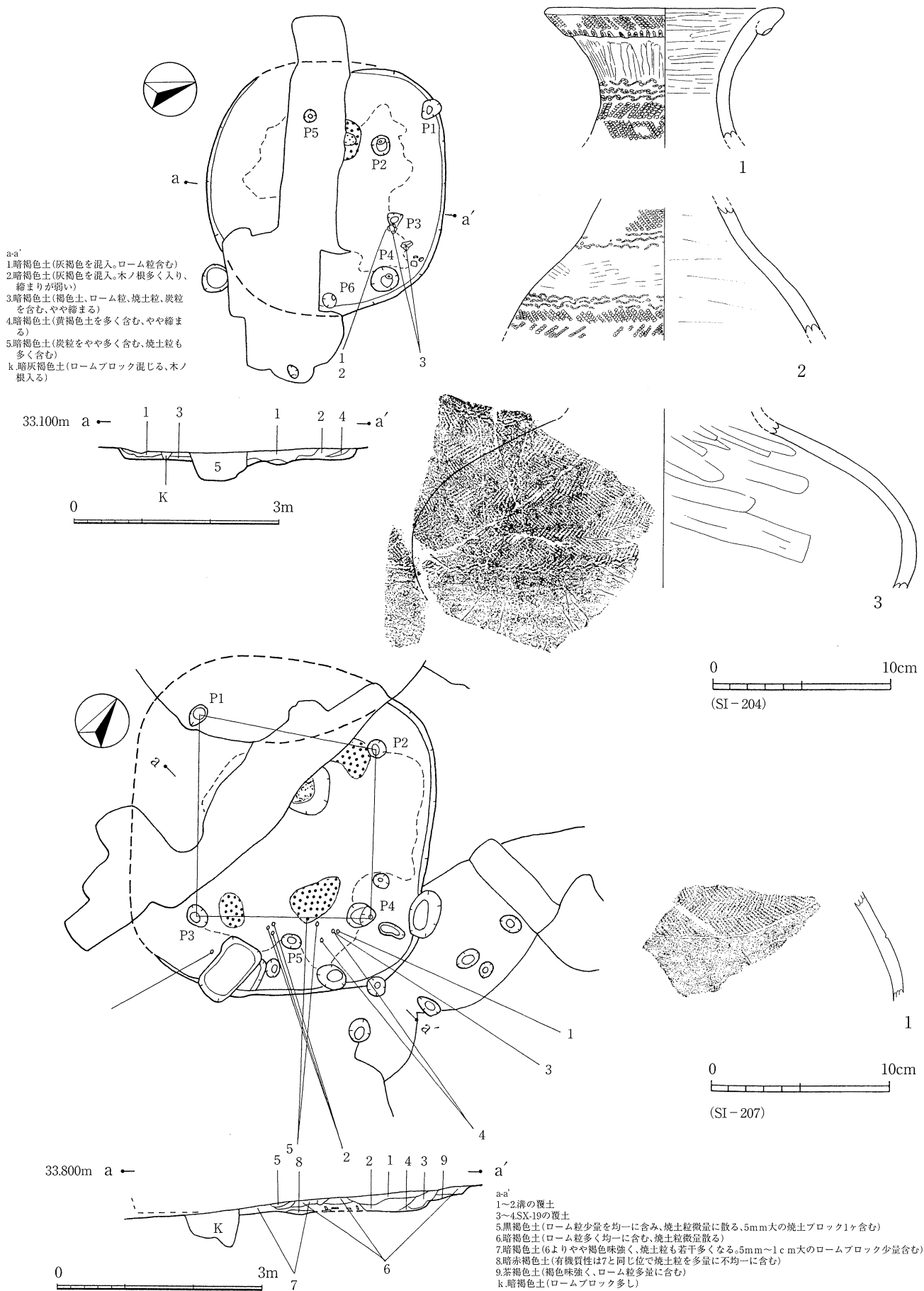


第176図 201号・202号住居跡 遺構・遺物実測図

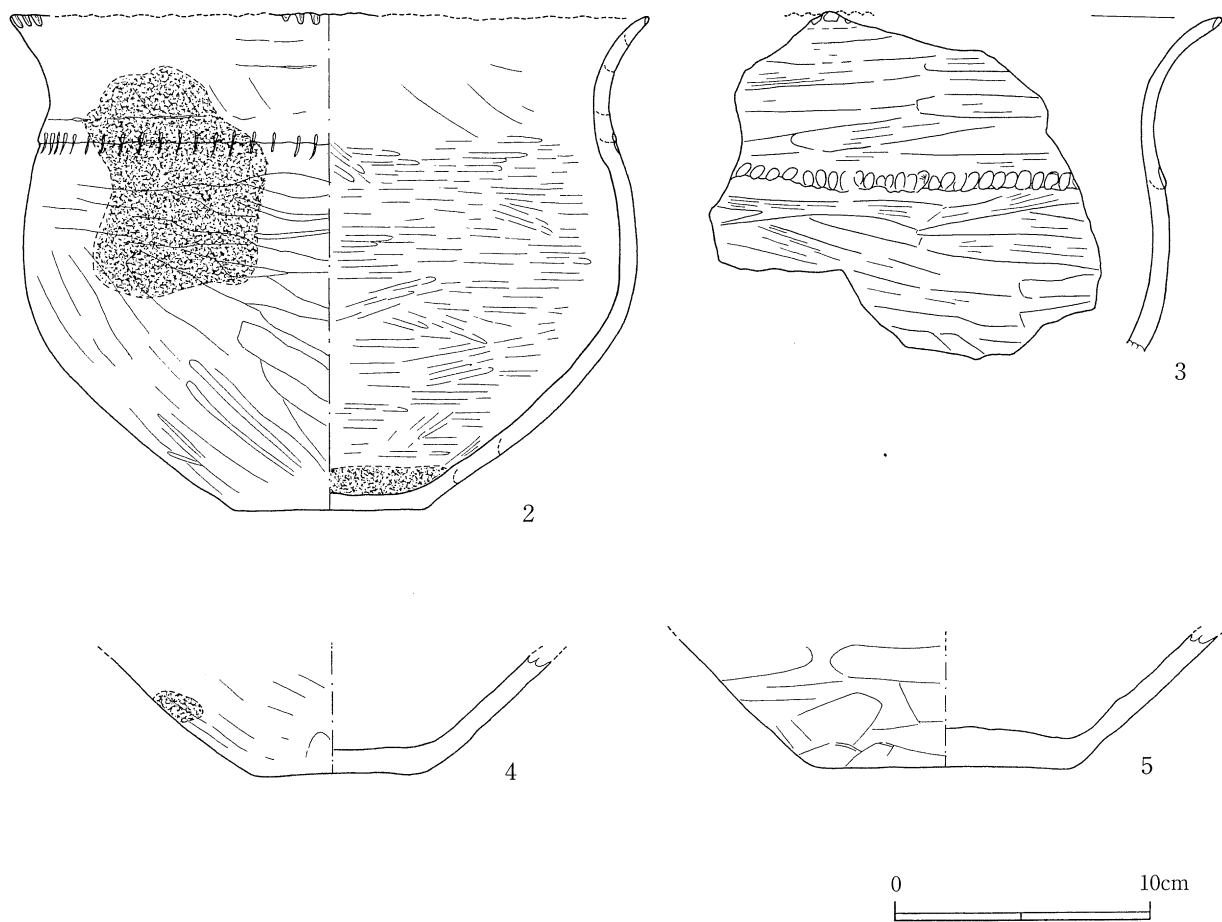


- a-a'
- 1.暗褐色土(ローム粒を全体に多く含む、部分的に褐色味が強い)
 - 2.暗褐色土(1より更に褐色味強い)
 - 3.茶褐色土(褐色味強い、ローム粒多量に含む)
 - k.ロームブロック(2cm大)多し。
 - 4.暗褐色土(ローム粒均一に含む、1cm大のロームブロックも含む)
 - 5.暗褐色土(4より褐色味強い、部分的にローム粒多量に含む、6層との境が床面と思われる)
 - 6.茶褐色土(ロームと有機質土混ざり合う。褐色味強い)
 - k.暗褐色土|ロームブロック(1mm~5mm)多し|

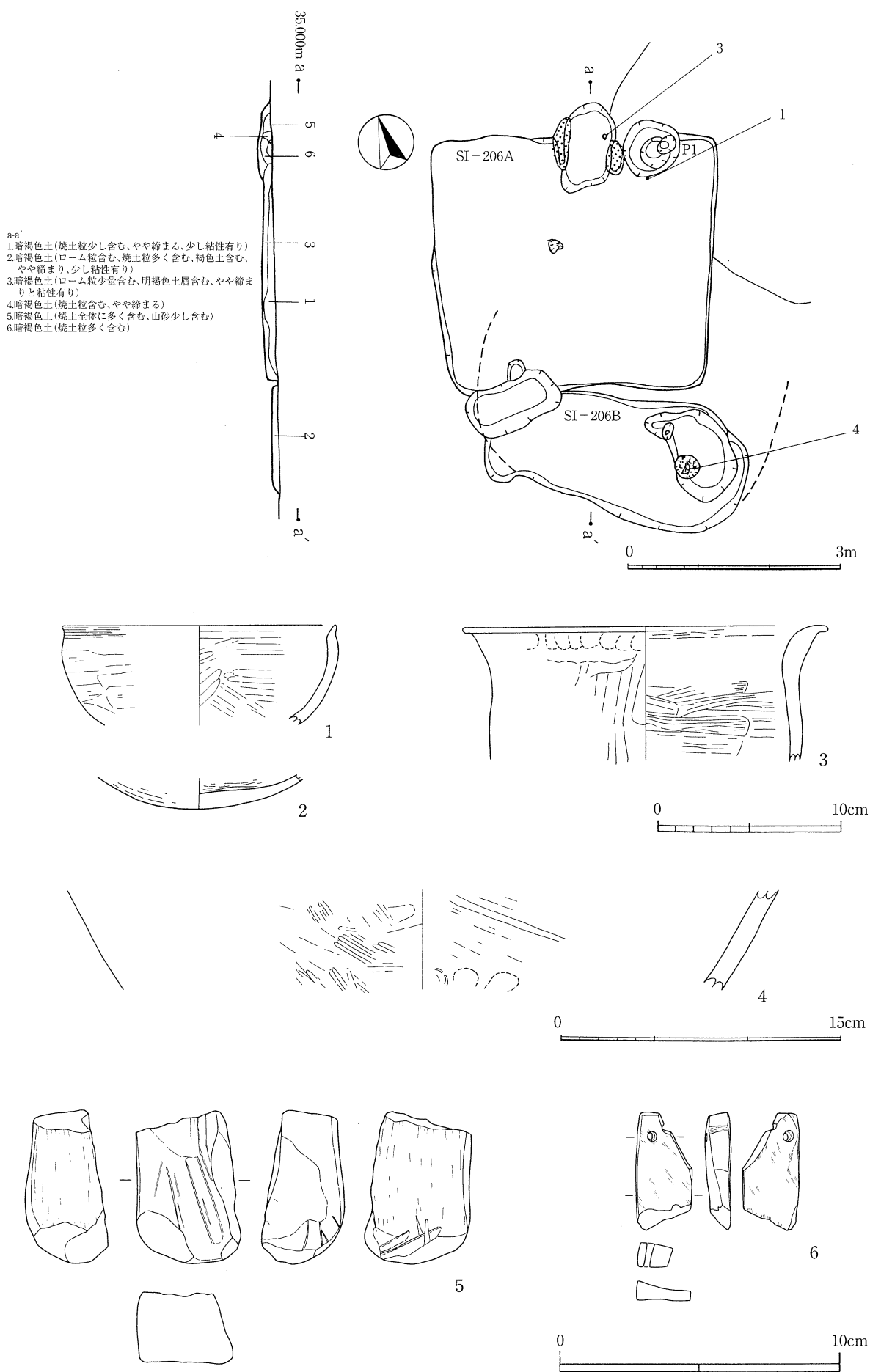
第177図 203A・B号・205号住居跡 遺構・遺物実測図



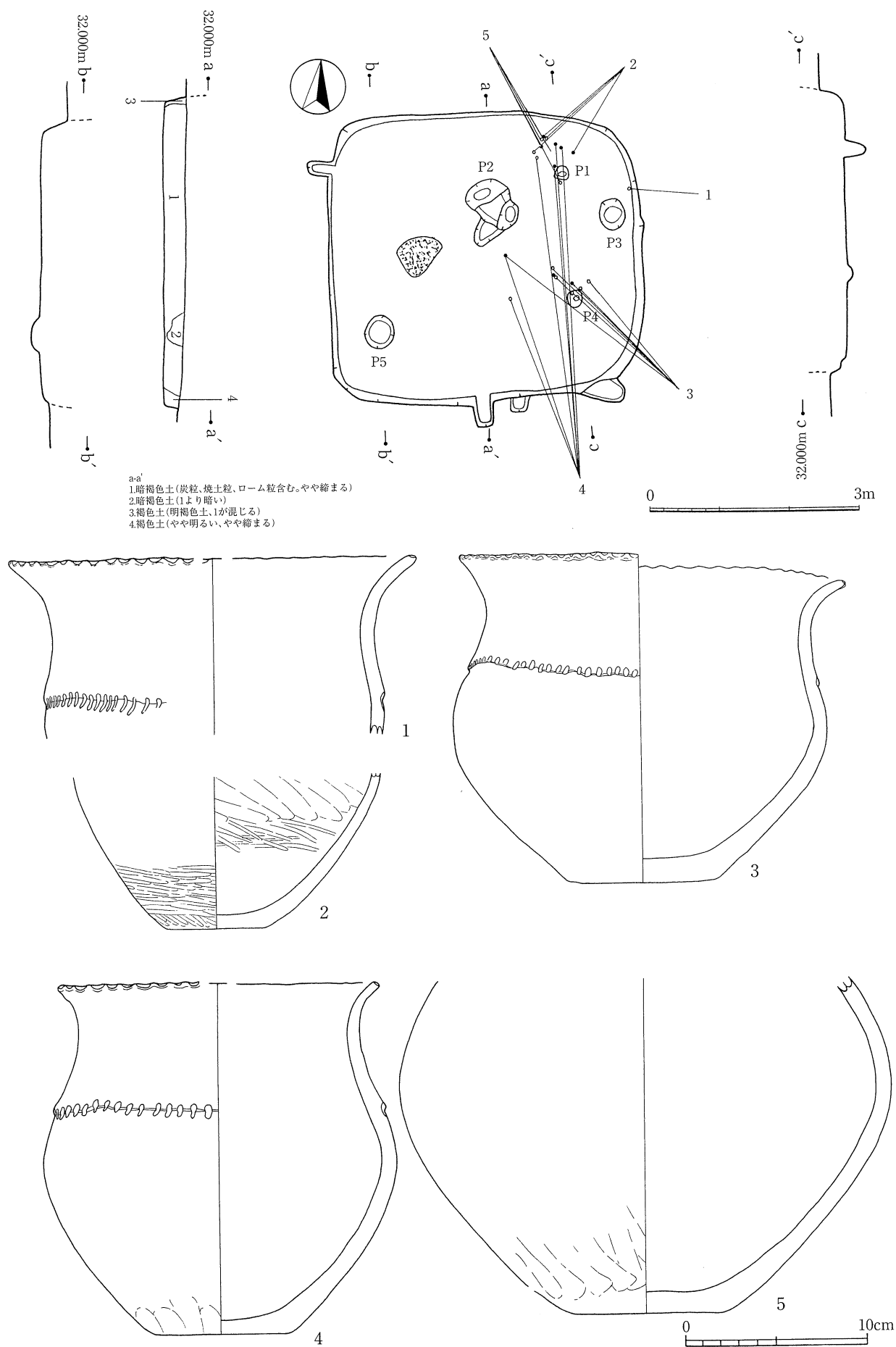
第178図 204号・207号住居跡 遺構・遺物実測図



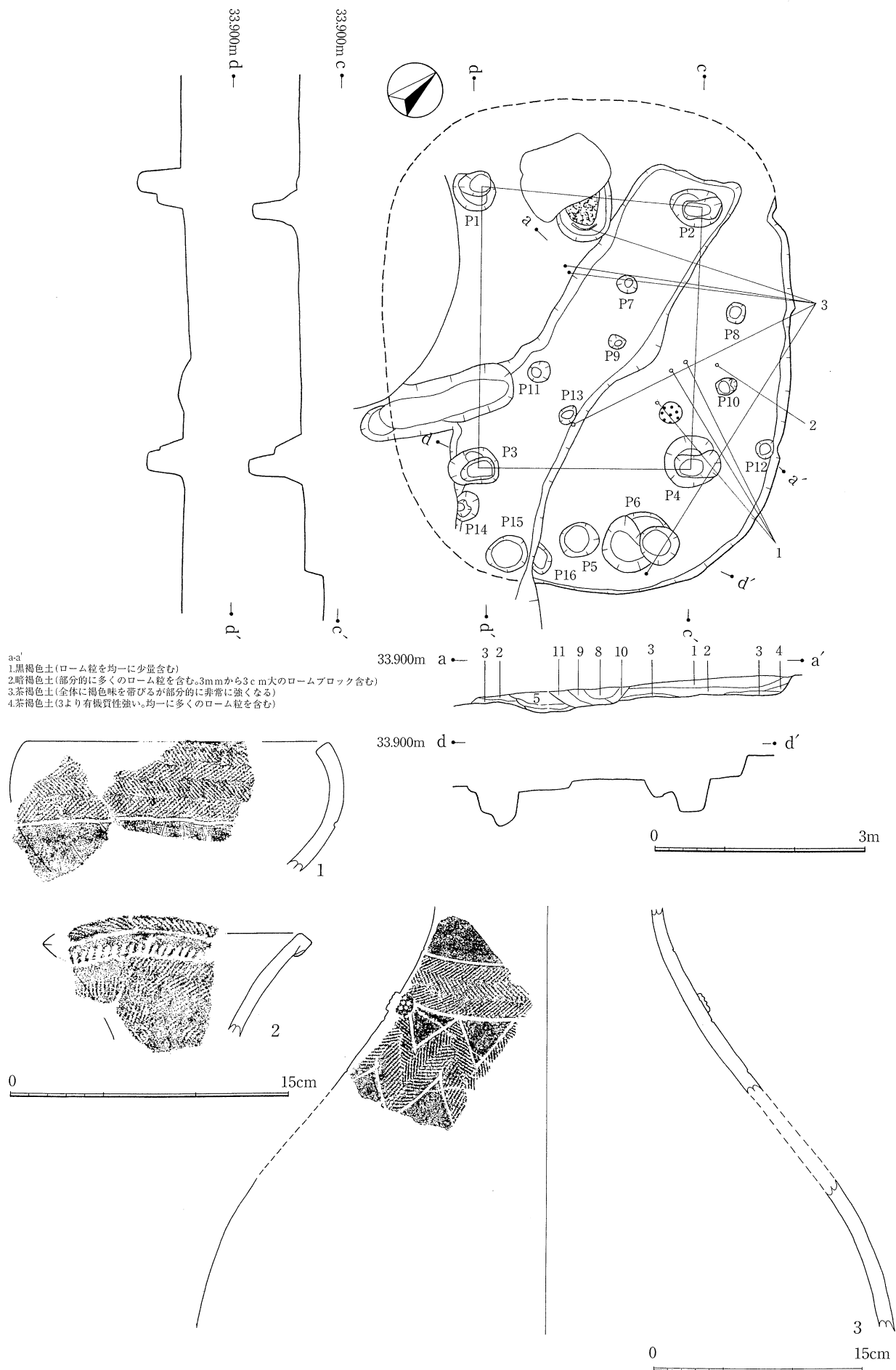
第179図 207号住居跡 遺物実測図



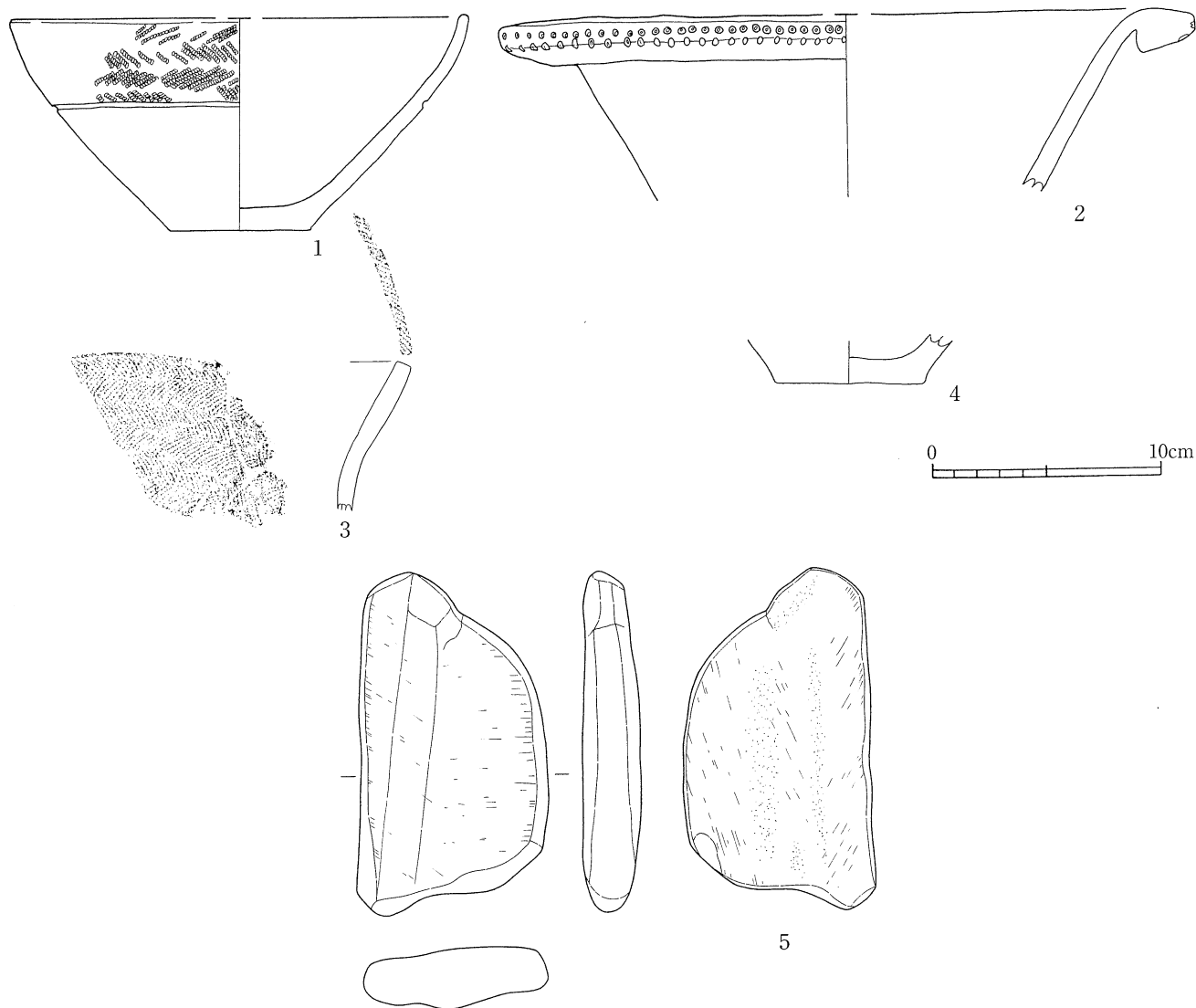
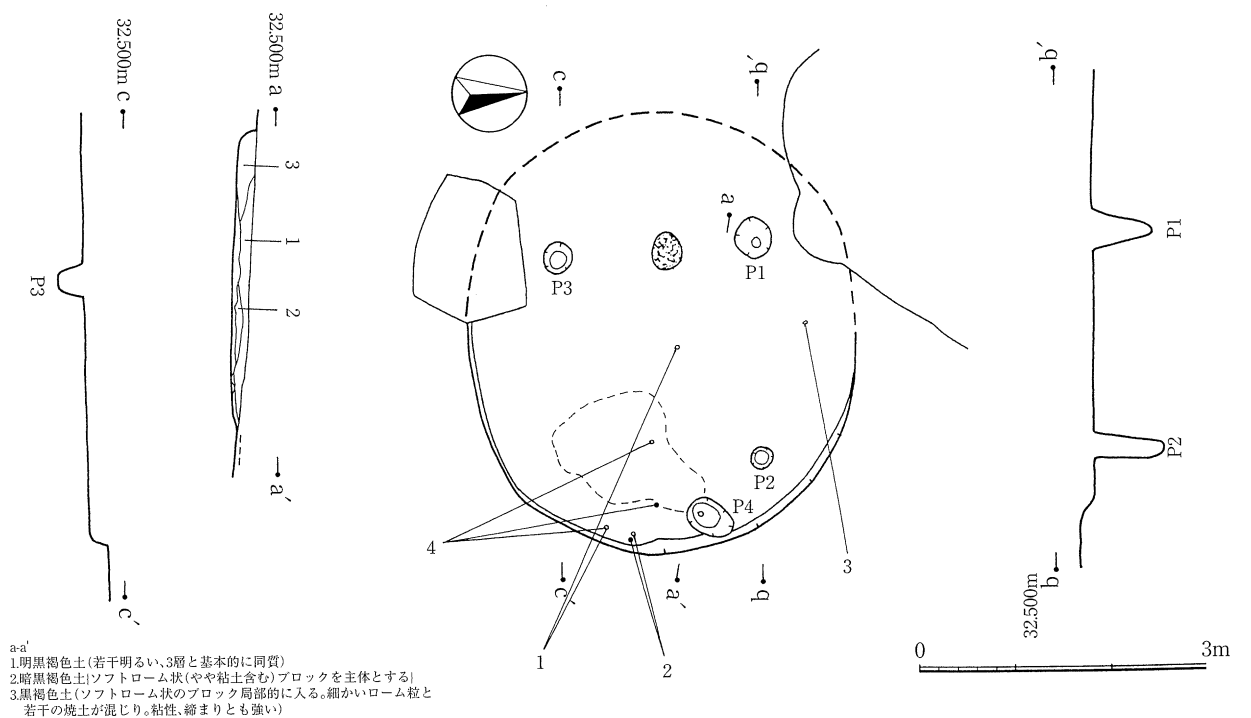
第180図 206A・B号住居跡 遺構・遺物実測図 (1～3、5、6 = A号、4 = B号)



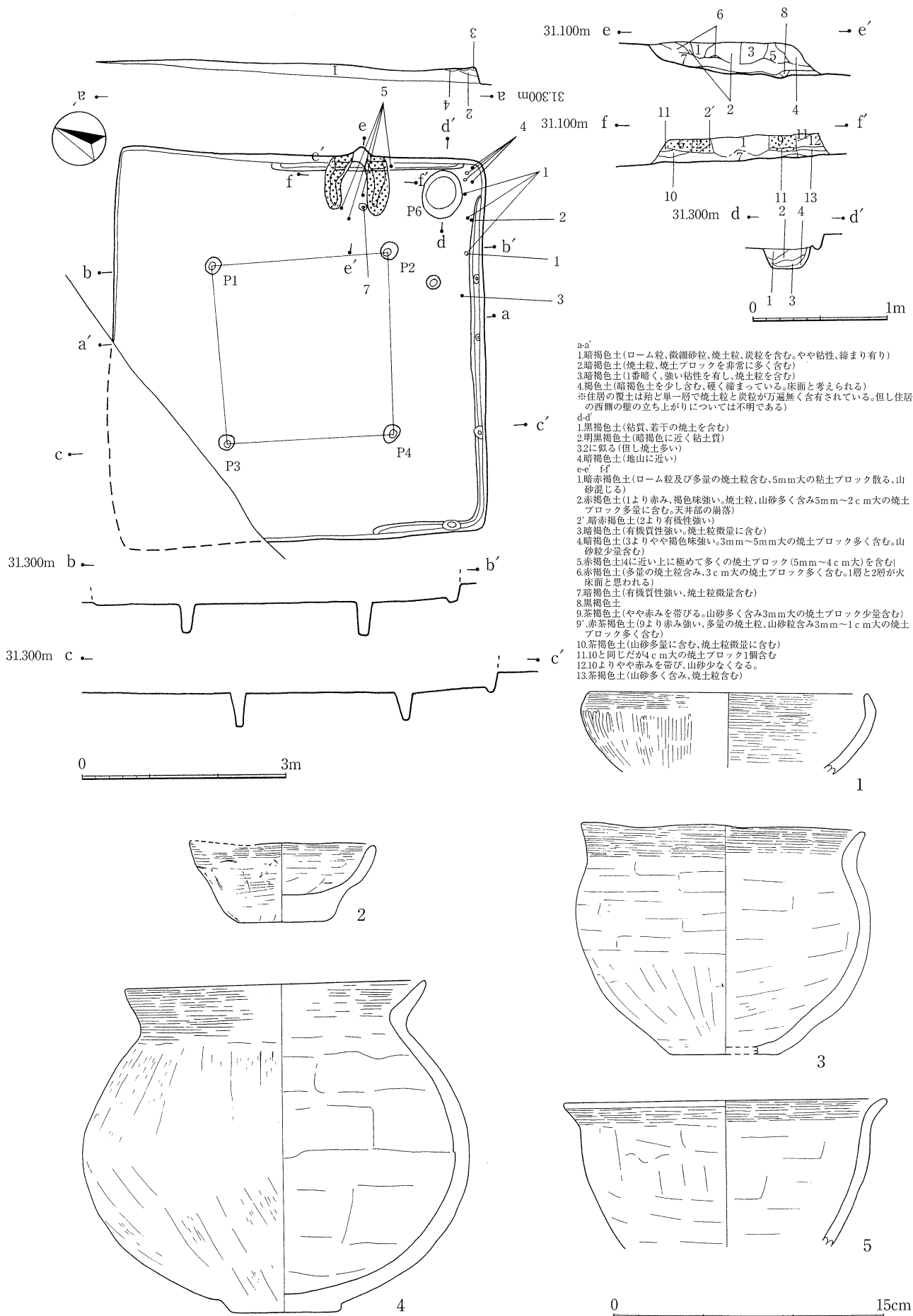
第181図 208号住居跡 遺構・遺物実測図



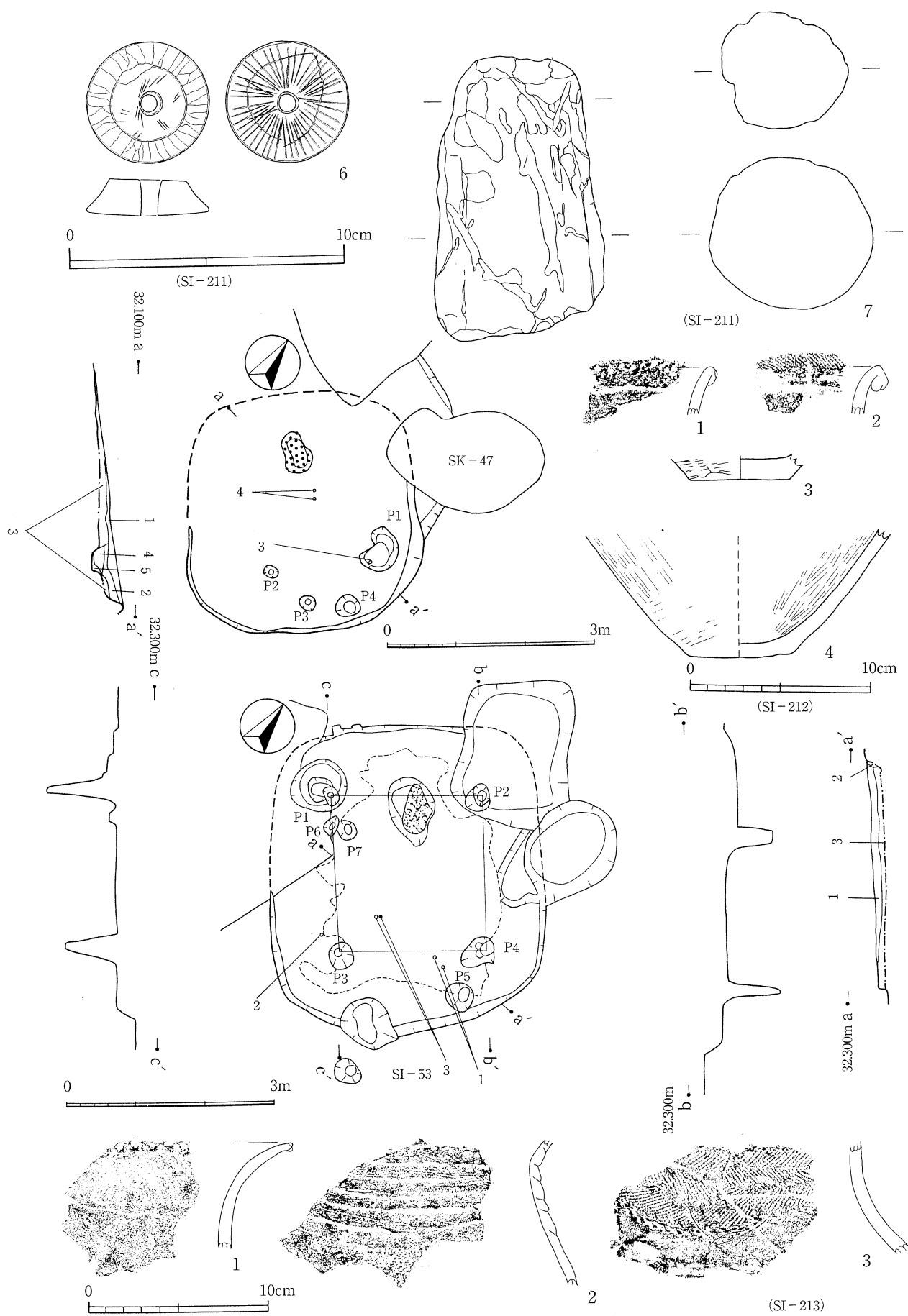
第182図 209号住居跡 遺構・遺物実測図



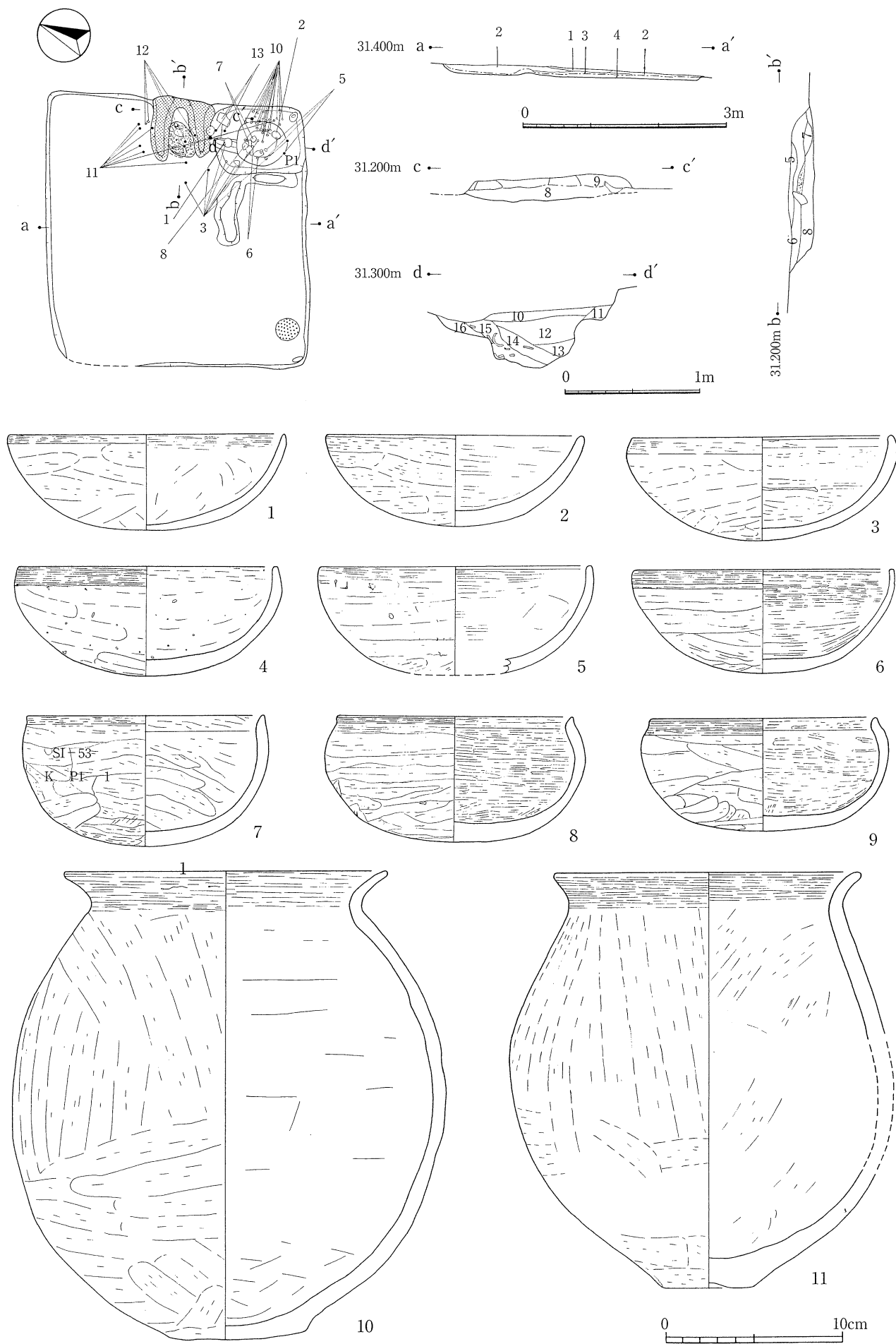
第183図 210号住居跡 遺構・遺物実測図



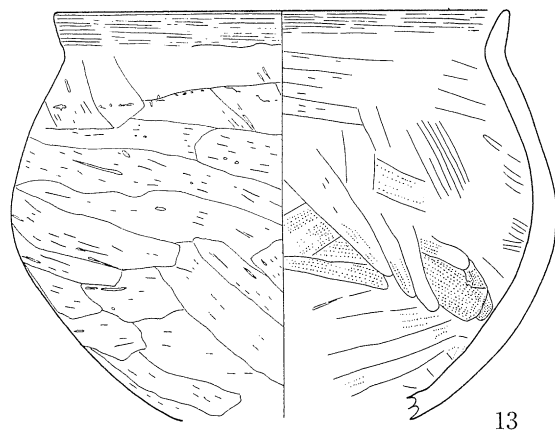
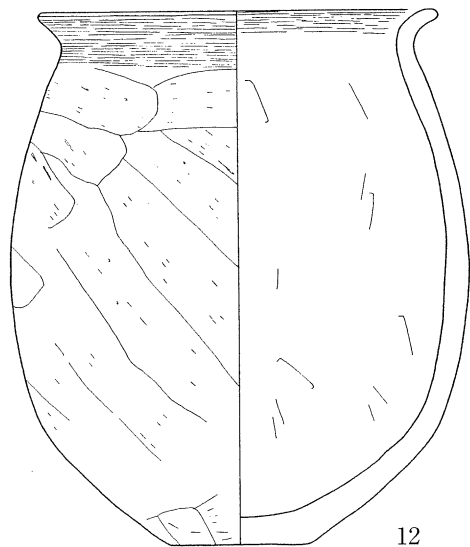
第184図 211号住居跡 遺構・遺物実測図



第185図 211号・212号・213号住居跡 遺構・遺物実測図

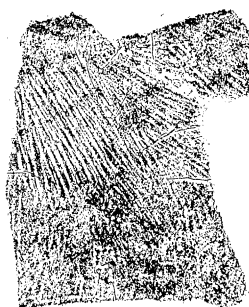
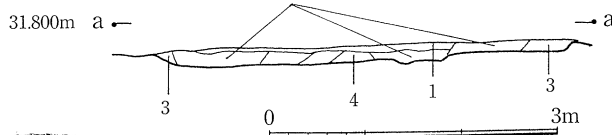
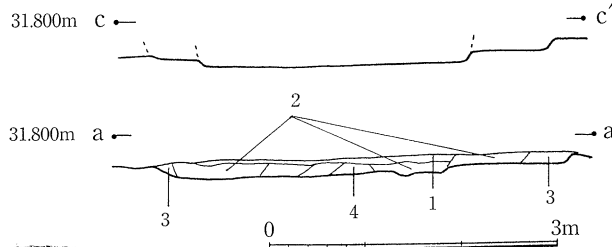
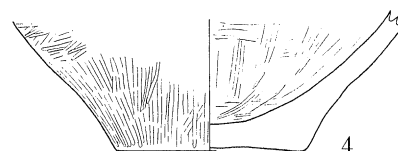
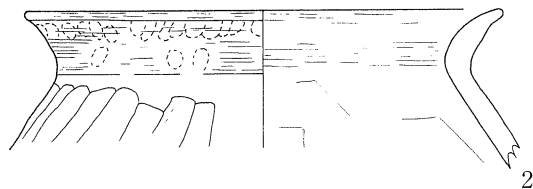
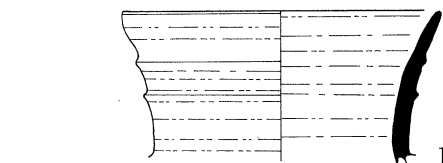
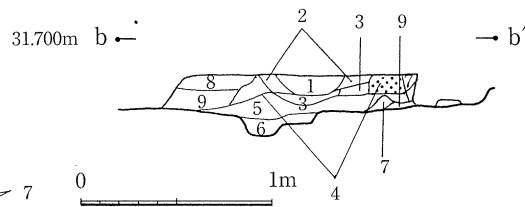
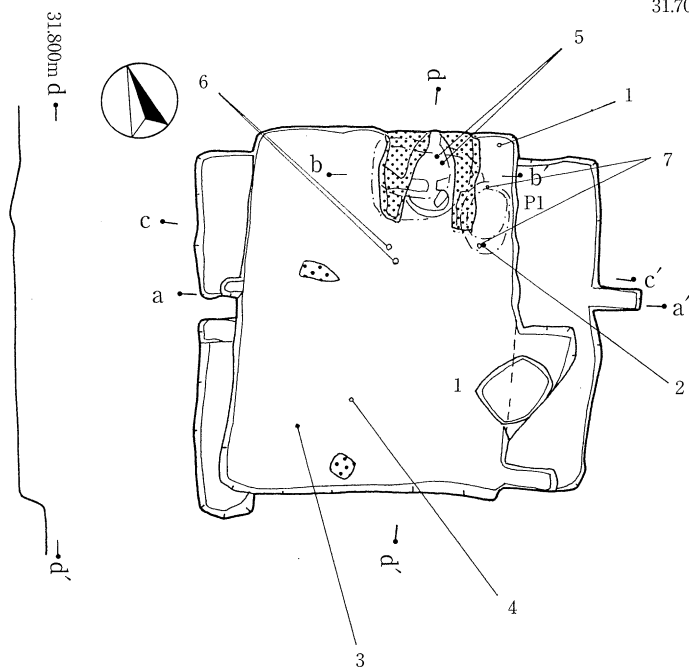


第186図 214号住居跡 遺構・遺物実測図



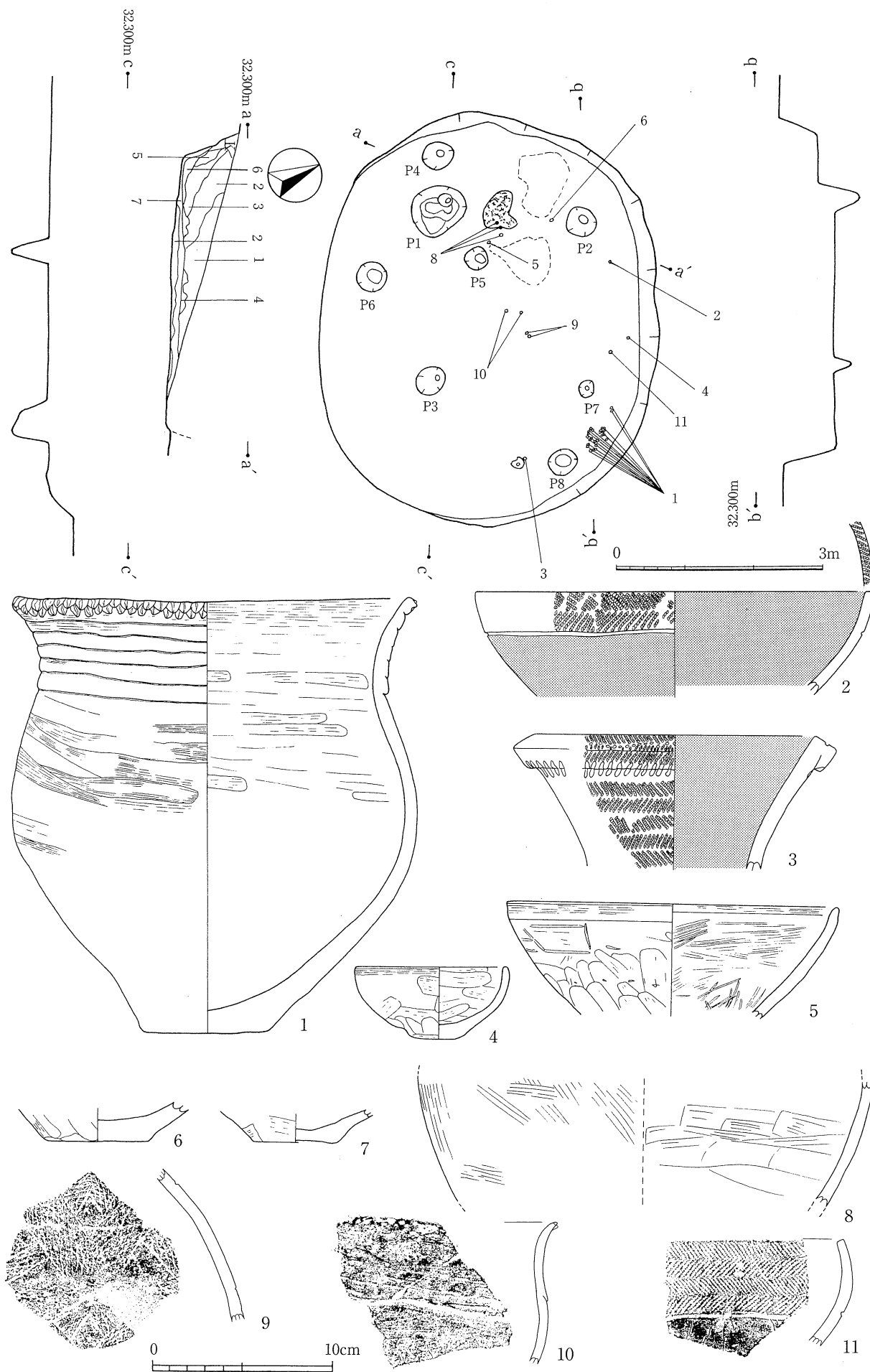
0 10cm

(SI-214)



0 10cm (SI-215)

第187図 214号・215号住居跡 遺構・遺物実測図



第188図 216号住居跡 遺構・遺物実測図

SI-212 土層セクション説明

a-a'

- 1.暗褐色土（明褐色土含む、ローム粒含む、焼土粒極少量含む）
 - 2.暗褐色土（ローム粒含む、1より暗い）
 - 3.暗褐色土（明褐色土多く含む。焼土粒、炭粒極少量含む。やや締まる）
 - 4.暗褐色土（明褐色土多く含む。やや締まりが弱く暗い。硬質な明褐色土ブロックを含む）
 - 5.褐色土（締まりが有り粘性を帯びている。地山層）
- ※床面の硬質な面は所々に散見するが不明瞭である。おそらく3層下が床面と考えている）

SI-213 土層セクション説明

a-a'

- 1.暗褐色土（ローム粒、黄褐色土を所々に含む）
 - 2.ロームブロック
 - 3.暗褐色土（ローム粒、黄褐色土、褐色土の硬化した塊、焼土粒を少量含む）
- ※S I - 2 0 6 によって南西の壁が壊されている。床面硬化は見られる。

SI-214 土層セクション説明

a-a'

- 1.黒褐色土（有機質性強い、暗褐色の粘土質土少量含む）
 - 2.暗褐色土（1より明るい、暗褐色粘土質土多く含む、焼土粒微量に含む）
 - 3.暗褐色土（2より明るい、2層との間が床面と思われる。暗褐色の粘土質土多量に含む）
 - 4.暗褐色土（暗褐色の粘土質土多量に含む。締まり強い。焼土粒少量含む。5層と2層、3層の間が床面となる）
- b-b'
- 5.暗褐色土|山砂微量含む、1mm大のロームブロック少量（1cm大1個含む）散る|
 - 6.暗褐色土（山砂少量含む、焼土粒多量を不均一に含む、1mm～2cm大の焼土ブロックを部分的に含む）
 - 7.黒褐色土（有機質性強く締まりやや弱い、焼土粒少量含む、1mm～5mm大の焼土ブロックを微量に含む）
 - 8.暗褐色土（暗褐色の粘土質土多量に含む、締まっている）

c-c'

- 9.暗褐色土（8より有機質性強い）

d-d'

- 10.暗褐色土（焼土粒若干含む、締まり強い）
- 11.暗褐色土（10より大きい焼土粒を均等に含む）
- 12.暗黒褐色土（10より締まり弱い、3cm大の炭化物含む、焼土粒、粘土質土含む）
- 13.暗褐色土（12より有機質性強い、12より締まり有り、粘土質土粒、炭化粒若干混じる）
- 14.暗褐色土（炭化粒、焼土粒、粘土質土粒均等に混じる。12より締まり有り）
- 15.赤褐色土（大量に焼土含む。炭化粒、粘土質粒共に含む。締まりは10より弱い）
- 16.暗褐色土（10より明るい、粘土質土ブロック混じる、締まり有り）

SI-215 土層セクション説明

a-a'

- 1.暗褐色土（ローム粒含む、焼土粒少し含む、褐色土も含み、少し粘性有り）
- 2.暗褐色土（ローム粒含む、黄褐色土含む、粘性有り）
- 3.明褐色土（やや締まる、地山層）
- 4.暗褐色土|（ローム粒と焼土ブロック多く含む）山砂を少し含んでいるのかやや砂質で軟質|

b-b'

- 1.暗褐色土（焼土粒、炭粒少ない）
- 2.暗褐色土（焼土粒、炭粒含む）
- 3.橙色焼土ブロック
- 4.暗褐色土|全体に赤く焼土化している。砂質土を多く含むが、殆ど暗褐色土と混じり合っている（袖部）|
- 5.暗褐色土（全体に暗い、砂質土を少し含む）
- 6.暗褐色土（5より少し明るい）
- 7.褐色土（ロームブロック）
- 8.暗褐色土（暗く、焼土粒、炭粒を含む）
- 9.暗褐色土（焼土、炭ともに極少量含む。砂粒を少し含む）

SI-216 土層セクション説明

a-a'

- 1.黒褐色土|1mm大以下のローム粒（クリーム粘土粒）を全体に疎らに含む。部分的にクリーム粘土ブロックを含む|
- 2.明黒褐色土（クリーム粘土粒、ローム粒、若干の焼土を含む）
- 3.クリーム粘土が全体に入る。全体に（各層とも）ローム粒との混じりが薄い均一層。
- 4.クリーム粘土性のブロック
- 5.クリーム粘土粒主体
- 6.黒色土（若干灰色さみ）とクリーム粘土質層の混合

第20表 竪穴住居跡出土土器観察表(1)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-01 -1	SI01-2	弥生土器	甕	胴上部片1/8 の残存					胴部最大径より口縁部径 が小さい筈で、胴上部位に 粘土紐接合痕を残して段を つくり、棒状工具による刻 目がなされる。両面ともヘ ラナデ(内面はミガキ)	橙色粒 (1mm以下) を少量含む。	両面ともにぶい 黄褐色、また内 面の一部は黒褐 色	普通	
SI-01 -2	SI01-8	弥生土器	壺	口縁部片					短い複合口縁。外側は、 羽状縄文(下端は押捺によ る刻目で波状)の棒状浮文 が貼付される。内面は、上 部が押捺され刻目。その下 には、二重の沈線が周る。 他は両面ともヘラミガキ。	小礫(1mm以 下)多く含む。	両面とも鈍い黄 褐色 内面の一部明褐 色	少し不良	内面赤彩
SI-01 -3	SI01-1	弥生土器	壺	口縁部片					短い複合口縁、外側の上 端と下端が押捺され刻目。 外側は、羽状縄文が施され る。他は両面ともヘラミガ キ。	小礫(1mm以 下)多く含む。	両面とも赤褐色、 また外面の一部 は黄褐色、内面 の一部は暗赤褐 色	やや不良	両面とも赤 彩。
SI-01 -4	SI01-11	弥生土器	甕	口縁部片					外反し、口唇部は指頭押 捺による波状。	橙色粒 (1mm以下) を多く含む。	両面とも褐灰色 と鈍い黄褐色	少し不良	両面ともや や摩耗。
SI-01 -5	SI01-3	弥生土器	壺	頸部片					弧状に内反している。2段 のS字状結節文と縄文原体 圧痕文の間に斜縄文(RL) を施文する。	緻密	外面は灰黄色 内面は黒褐色と にぶい黄褐色	少し不良	
SI-01 -6	SI01-3	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文が施される。	緻密	両面ともにぶい 黄褐色	少し不良	
SI-01 -7	SI01-11	弥生土器	壺	胴上部片					2段横位のS字状結節文 の下に斜縄文(RL)が施 される。	黄褐色粒 (1mm以下) を少量含む。	外面は橙色と灰 黄褐色 内面はにぶい黄 褐色	少し不良	
SI-01 -8	SI01-5,10	弥生土器	甕	胴部上位片					粘土紐接合痕を一ヶ所残 し段をつくり、指頭押圧に よる押捺がなされる。	緻密	両面とも明黄褐 色とにぶい黄褐 色。	やや不良	
SI-02 -1	SI02-1.70. 71.72.14	弥生土器	甕	口縁部から 胴中部まで 1/8の残存	(20.2)		胴部 (21.4)		口縁部径と胴部最大径が 近似する。口唇部は指頭押 捺による波状。胴部はヘラ ナデ、外面下半はヘラミガ キ。	小礫(1mm大 以下)少量含 む。	両面とも黄褐色 とにぶい黄褐色、 内面の一部は橙 色	普通	
SI-02 -2	SI02-74	弥生土器	甕	口縁部から 胴上部まで 1/2弱の残存	(21.0)		胴部 (21.4)		口縁部径と胴部最大径が 近似する。口唇部は指頭押 捺による波状。胴最上位は 粘土紐接合痕を残し段をつ くり、押捺による刻目がある。 両面ともヘラミガキが 施される。	小礫(1mm以 下)多く含む。	両面とも橙色と 明褐色	良好	
SI-02 -3	SI02-28.35. 36	弥生土器	甕	口縁部片の み1/8の残存	(27.0)				少し開いて立ち上がり、 口唇部は直立する。また、 指頭による押圧で波状を呈 する。	緻密	両面とも明褐色、 黒色、灰黄色	少し不良	
SI-02 -4	SI02-31.33. 39.40.43. 49.50.51. 52.53.54. 61.65	弥生土器	甕	胴下部から 底部片70% の残存	6.9				外面は横方向のヘラミガ キ、内面はヘラナデの後指 横ナデ。	小礫(2mm以 下)を少量含 む	両面とも橙色外 面の一部黒褐色、 内面の一部にぶ い黄褐色	やや不良	
SI-02 -5	SI02-6	弥生土器	壺	口縁部片					複合口縁で口縁部は羽状 縄文が施される。残りが悪 い。	小礫(1mm以 下)非常に多 く含む。(特 に白色粒が 多い)	外面は明褐色 内面は暗赤褐色	不良	両面とも赤 彩。
SI-02 -6	SI02-46	弥生土器	鉢	口縁部片					少し丸味をもって直立す る。両面とも丁寧な横方向 のヘラミガキが施される。	橙色粒 (2mm以下) を多く含む。	両面とも赤褐色、 外面の一部にぶ い黄褐色、内面 の一部は浅黄橙 色	良好	両面とも赤 彩。
SI-02 -8	SI02-11	弥生土器	甕	肩部片					胴上部に縄文原体による 押捺が施される。	小礫(2mm以 下)を少量含 む。	両面とも黄褐色	少し不良	

第21表 竪穴住居跡出土土器観察表(2)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-02 -9	SI02-34.55. 62.67	弥生土器	甕	胴上部片					胴上部に粘土紐接合痕を残し段をつくり、指頭押捺による刻目がなされる。外面は荒いヘラナデ。	緻密	両面橙色、外面の一部黄褐色、内面の一部明赤褐色	不良	
SI-02 -11	SI02-69	弥生土器	壺	胴部片					羽状縄文が沈線で区画される。	黄褐色粒(1mm以下)を多く含む。	外面は明赤褐色と明黄褐色、内面は橙色	少し不良	外面の一部は赤彩。
SI-03 -1	SI03-7.21	土師器	坏	底部90%欠損、他は1/2強の残存	10.4	3.3			小形で開きぎみに立ち上がる。ロクロ成形。底部は回転糸切り離し成形。	緻密	両面とも橙色と褐灰色	少し不良	
SI-03 -2	SI03-2	土師器	坏	底部欠損、他は1/2強の残存	(14.4)				直線的に開いて立ち上がる、ロクロ成形。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面ともにぶい褐色と褐色	少し不良	
SI-03 -3	SI03-14	土師器	坏	高台部欠損、他は1/2強の残存	12.5	(5.0)			高台付でやや浅い碗形。ロクロ成形。内面の底部付近は横方向のヘラミガキ。	緻密	外面は明黄褐色と明赤褐色、内面はぶい黄褐色	普通	外面の一部は赤彩。
SI-03 -4	SI03-17	土師器	坏	高台部欠損、底部から体下部の破片1/2の残存					高台付でロクロ成形。	小礫(1mm以下)を極少量含む。	外面は灰黄褐色と橙色、内面はぶい橙色と黒色		内面黒色処置。
SI-03 -5	SI03-8.9. 18.22.24. 26.27.28. 29	土師器	甕	胴下位に下欠損、1/8の残存	(18.9)				長胴の甕で口径部が最大径を持つ、少し荒いつくりである。外面の胴部は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデの後指ナデ。	小礫(3mm以下)を含む。	両面とも橙色、外面の一部は灰褐色、内面の一部は黒褐色	不良	外面は擦過痕多い。
SI-04 -1	SI04-2.12. 42	土師器	高坏	胴下部欠損70%の残存	22.2				坏部体下位に稜を持ち、体部は大きく弧を描いて立ち上がる。両面とも縦方向の丁寧なヘラミガキ。胴部中に円形の穿孔が3ヶ所ある。胴部外面も縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリの後丁寧な指ナデ。	小礫(3mm以下)を極少量含む。	両面とも明赤褐色と橙色と黒褐色	良好	
SI-04 -2	SI04-3.4. 7.8.53	土師器	高坏	坏部のみ残存95%	22.2				坏部体下位に稜を持ち、体部は大きく弧を描いて立ち上がる。両面とも縦方向の丁寧なヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を多く含む、特に白黄色粒が多い。	両面とも黒褐色と明褐色	良好	
SI-04 -3	SI04-17	土師器	鉢	底部欠損、1/4残存	(13.41)				球状の体部を持ち、口径部は短く外反する。両面とも体部は縦方向の丁寧なヘラミガキ。	緻密	両面ともにぶい黄褐色、外面の一部は明黄褐色、内面一部は褐灰色	良好	
SI-04 -4	SI04-6.52	土師器	壺	底部片90%残存	9.6				両面ともヘラナデの後指ナデ。	緻密(特に白色粒が多い)	両面とも褐灰色とぶい黄褐色	少し不良	
SI-04 -5	SI04-21. 63	土師器	鉢	口径部片					複合口径で複合部と口径部に斜縄文(RL)、体上部にも3段の斜縄文が残る。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は黄褐色と灰黄褐色、内面は明赤褐色と明黄褐色	少し不良	内面赤彩。
SI-04 -6	SI04-14	土師器	甕	胴部片					細い刷毛目がなされる。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は褐色と暗褐色、内面は、ぶい橙色と灰褐色	少し不良	
SI-05 -1	SI05-20～ 26.7.11. 15.16.18. 19.20	弥生土器	壺	80%の残存	11.3	18.6	13.8	5.6	口径部は短い複合口径で、頸部は細長い、胴部は下位に最大径をもち、大きく張っている。 口径部は、斜縄文(RL)が施され、円形貼付文がみられる。胴部と胴中には、沈線で区画された羽状縄文が施される。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも明黄褐色と浅黄褐色、内面の一部は褐灰色	不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-05 -2	SI05-2. 31.35	弥生土器	壺	胴上部片					上部に並行沈線で囲まれた羽状縄文、下部に沈線で区画された羽状縄文が山形文を作っている。	小礫(1mm以下)を多く含む。特に黄褐色粒が目立つ。	外面は赤褐色と明赤褐色、内面は、橙色と黄褐色	不良	外面は赤彩。

第22表 竪穴住居跡出土土器観察表(3)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-05-3	SI05-1.5.9.10~14	弥生土器	甕	口縁部から胴中位の破片、1/4弱の残存	(24.4)				胴部より口縁径がやや広い。口唇部は指頭の押捺による波状、頸部に粘土継接合痕が残る。内外面ともヘラナデの後指ナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は灰褐色と明黄褐色 内面はにぶい黄褐色と浅黄橙色	少し不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-05-4	SI05-2.32.33	弥生土器	甕	頸部付近					頸部は粘土継接合痕が3段残り、最下位の段には、縄文原体押圧により刻目がある。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色と褐灰色 内面は橙色と灰褐色	良好	
SI-06-1	SI06-6	弥生土器	壺	底部から体中位まで残存				3.6	少し小形の壺で、体部はやや細長い球状。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は指ナデ。	小礫(2mm以下)を極少量含む。	外面は黒褐色、褐色、明褐色 内面は、暗褐色、褐色、にぶい褐色	良好	
SI-06-2	SI06-2	弥生土器	台付甕	台部分と甕の底部のみ残存					台部口径12.4cm	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも明褐色 外面の一部は明褐色と黒色 内面の一部はにぶい褐色	少し不良	
SI-07-1	SI07-105.140	土師器	甕	底部と胴下半部欠損、1/4の残存	(21.4)		(21.2)	胴上部	胴部最大径が上部にある長胴甕で、口唇部内面が僅かに窪む。 胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデの後指ナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黒色、黒褐色、にぶい褐色 内面は褐灰色と褐色	良好	外面に煤と擦過痕がみられる。
SI-07-2	SI07-145	須恵器	甕	口縁部から棚中位まで残存、1/4以下の残存	(28.8)				胴部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は微厚して外反する。 外面は縦方向のタタキ目、内面は指頭押圧痕が残る。	小礫(2mm以下)極少量含む。	両面ともオリブ黒色、外面の一部は黒色	良好	
SI-07-3	SI07-147.155	土師器	甕	口縁部片1/8の残存	(23.6)				口縁部は大きく外反する。 胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデの後指ナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも褐灰色、外面の一部は褐色、内面の一部は黒褐色	普通	外面の胴部は擦過痕が多い。
SI-07-4	SI07-24.116.122	土師器	甕	肩部から口縁部片1/4弱の残存	(19.2)				中型の長胴甕で口縁部は少し厚く、外反する。胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は褐色と明褐色と黒褐色 内面は褐色と褐灰色	わずかに不良	
SI-07-5	SI07-14	土師器	甕	胴中位より口縁部の1/4弱が残存	(13.0)				小型の甕で胴部最大径(中位)と口径が近似する。口縁部は外反。 外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデの後、ユビナデ。	白色粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも黒褐色、外面の一部は黒色、内面の一部は黄褐色	良好	
SI-07-6	SI07-45.48	土師器	甕	口縁部片1/4弱の残存	(19.0)				口縁部はやや大きく外反する。	小礫(2mm以下)を極少量含む。	両面とも黒褐色、外面の一部がにぶい黄褐色、内面の一部は褐色	わずかに不良	
SI-07-7	SI07-K14-9-2	土師器	台付甕	台部から胴中位まで、台部は60%の残存	台部口径5.8				少し小型の台付甕で短く「ハ」の字状に開く台部を持ち、胴部は球状である。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも黒褐色、外面の一部は赤褐色、内面の一部は褐灰色	良好	
SI-07-8	SI07-41	土師器	甕	口縁部片1/8の残存	(25.4)				口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は短く直立し細い。胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面がヘラナデの後指ナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい褐色、黒褐色 内面は灰褐色	良好	
SI-07-9	SI07-37.56.57.58.70.71.99.	土師器	甕	底部から胴中位までの破片、70%の残存				(6.6)	やや広めの底部をもち、胴部は少し細長い球状。	小礫(2mm以下)を極少量含む。	外面は黒色と暗褐色 内面は褐色とにぶい黄褐色	良好	外面の胴部は擦過痕が多い。
SI-07-10	SI07-K14.9-2	土師器	甕	肩部から口縁部片1/4残存	(20.6)				最大径は口縁部にあると考えられる長胴甕、口唇部内側が僅かに窪む。 胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデの後指ナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	両面とも明褐色、外面の一部は黒色、内面の一部が褐色	良好	外面に煤と擦過痕が多く見られる。
SI-07-11	SI07-K14-a-2	土師器	坏	底部中央を欠損、1/4以下の残存	(14.0)	3.9		(9.0)	体部は丸みをもち、口縁部は僅かに外反する。底部切り離しは、回転ヘラ切り離し。	酸化鉄粒(3mm以下)などを含む。	両面とも明黄褐色、褐色、にぶい褐色	少し不良	

第23表 竪穴住居跡出土土器観察表(4)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-07 -12	SI07-87. 130.144	須恵器	坏	完形	11.6	3.7		6.7	底部は幅広く、体部は直線的に開く。底部切り離しは、右回転ロクロ糸切り離しの後周辺のヘラケズリ。	小礫(2cm以下)極少量含む。	両面とも白灰色	わずかに不良	両面に火摺き痕が残る。
SI-07 -13	SI07-141. 142	須恵器	坏	1/4欠損	11.7	3.75		5.4	僅かに上げ底さみで、体下半は丸みを帯びている。口縁上部はやや外反する。	小礫(2cm以下)極少量含む。	両面とも白灰色	良好	両面に火摺き痕が残る。
SI-07 -14	SI07-68	須恵器	坏	口縁部から体中位まで残存1/8の残存	(13.0)				体部は僅かに外反気味に開く。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は灰黄色 内面は白灰色	良好	
SI-07 -15	SI07-4.93	須恵器	坏	口縁部から体中位まで残存1/6の残存	(11.7)				体部は直線的に開く。	白色粒(1mm以下)を少量含む。	両面とも灰オリーブ色と灰色	良好	両面に火摺き痕が残る。
SI-07 -16	SI07-69	須恵器	長頸壺	口縁部片1/8残存	(11.8)				口縁部は外反し、口唇部付近の外面は直立する。つまみ出して、断面が三角形状になる。	緻密。	外面は灰オリーブ色 内面はオリーブ黄色	良好	両面とも自然釉がかかる。
SI-07 -17	SI07-20	須恵器	蓋坏	紐部分は欠損する、1/2残存、口唇部は10%の残存	10.2				口縁部は短く直立、体部は少し丸みを帯びた扁平である。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は灰オリーブ色 内面はオリーブ褐色	良好	外面に自然釉がかかる。
SI-07 -18	SI07-139	須恵器	甕	胴部片					外面はタタキ目、内面はアテ目をヘラナデとヘラケズリで消している。	緻密	外面は灰白色 内面は浅黄色	良好	
SI-07 -19	SI07-19	須恵器	甕	胴部片					外面はタタキ目、胴下位はヘラケズリされる。内面は指頭による丁寧なナデ。	緻密	両面ともオリーブ黒色	良好	
SI-08 -1	SI08-7	土師質土器	かわらけ	95%の残存	9.4		2.1	5.9	ロクロ成形、底部は回転糸切り離し、体部の立ち上がりは、やや直線的に開く。	酸化鉄(3mm以下)を少量含む。	両面とも黄灰色で、一部外面が浅黄色	不良	
SI-08 -2	SI08-4	土師質土器	かわらけ	ほぼ完形	10.2		2.3	4.1	ロクロ成形、底部は右回転糸切り離し、やや大きく、体部は丸みをもって立ち上がる。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも明褐色と褐灰色	不良	
SI-08 -3	SI08-8	土師器	坏	底部片				5.4	底部切り離しは回転糸切り。	緻密	外面はにぶい黄褐色と灰黄褐色 内面は黒褐色と黒色	少し不良	内面黒色処理。
SI-08 -4	SI08-25	土師器	坏	底部片1/2弱の残存				6.0	底部切り離し不明。内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	外面は橙色と灰黄色 内面は黒色	少し不良	内面黒色処理、外面は摩耗している。
SI-08 -5	SI08-21	土師質土器	高台付埴	底部付近のみ残存	高台部径5.4				高台部は低く、「ハ」の字状に開く。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は明褐色と橙色 内面は赤褐色と灰褐色	少し不良	
SI-08 -6	SI08-5	土師質土器	高台付埴	底部付近のみ、70%の残存				5.8 高台部径	高台部は細く、「ハ」の字状である。	緻密	外面は橙色と黄褐色 内面はにぶい黄褐色	普通	
SI-08 -7	SI08-3	土師器	高台付坏	底部片1/4弱の残存				高台部径5.8	高台部は低い。	緻密	外面は橙色とにぶい黄褐色 内面は黒色	不良	内面黒色処理。

第24表 竪穴住居跡出土土器観察表(5)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-08 -8	SI08-8	土師器	足高 高台付 碗	台部付近の 破片1/4残存		(2.8) 台部高		(8.4) 台 部 口 径	台部は少し厚手で内傾し ながら立ち上がり、碗部分 も少し厚い。	緻密	外面は黄褐色と 明黄褐色、内面 の碗部は明黄褐 色、台部は橙色 とにぶい黄褐色	少し不良	
SI-08 -9	SI08-19	須恵器	甕	底部片 1/16 の残存				(12.6)	胴下位はヘラケズリ、胴 下位内面は指ナデ。	小礫(1mm以 下)を極少量 含む。	外面は灰色と灰 オリーブ色 内面は浅黄褐色	わずかに 不良	
SI-08 -10	SI08-14	須恵器	甕	胴部片					外面は平行タタキ目、内 面は指ナデ整形。	緻密、白色 粒 (1mm 以 下)を極少量 含む。	外面はオリーブ 黒色 内面は灰色	良好	
SI-08 -11	SI08-10	須恵器	甕	胴部片					外面は平行タタキ目、内 面は指ナデ整形。	緻密	両面とも灰色	良好	
SI-08 -12	SI08-9	須恵器	大甕	胴上部破片					外面は平行タタキ目、内 面は丁寧な指ナデにより、 アテ目が消されている。	小礫を(2mm 以下)多く含 む、特に白 色粒が目立 つ。	外面は灰色、灰 オリーブ色、暗 オリーブ色 内面はオリーブ 褐色と浅黄色	良好	
SI-09 -1	SI09-5	弥生土器	鉢	底部片 1/16 の残存				(5.6)	外面胴下位は縦方向のヘ ラケズリ後横及び斜め方向 のヘラミガキ (ナデ)、内面 はヘラミガキ。	小礫(1mm以 下)を含む。	外面は灰褐色、 にぶい橙色と黒 色 内面は明赤褐色 とにぶい褐色	普通	内面は赤彩 がなされる。
SI-09 -2	SI09-15	弥生土器	壺	頸部片					斜縄文とS字状結節縄文 の横位の組み合わせ。	小礫(1mm以 下)を少量含 む。	外面は赤褐色と にぶい赤褐色 内面は明赤褐色	普通	外面の無文 部は赤彩。
SI-09 -3	SI09-2	弥生土器	甕	胴上部片					段部を縄文原体による押 捺。	小礫(2mm以 下)を含む。	外面は赤褐色、 内面はにぶい黄 褐色	やや不良	
SI-09 -4	SI09-3	弥生土器	甕	胴部片					外面は刷毛目調整 (幅 1.3cm)。	橙色粒(1mm 以下)を少量 含む。	外面はにぶい褐 色 内面は褐灰色	わずかに 不良	
SI-10 -1	SI10- 20. 61	弥生土器	甕	底部から口 縁部 70% 残 存	18.0				少し厚手で丸みを持った 胴部から口縁部は外反、肩 部に粘土紐接合痕を1段残し 上部に指頭押圧を横位に加 える。口唇部は指頭による 押捺を両面より加えて波状 口縁となる。	小礫(1mm以 下)を多く含 む。	両面ともにぶい 黄褐色と明赤褐 色、外面の一部 は褐灰色	良好	
SI-10 -2	SI10-1. 3. 53.54.59. 70.71.78. 79	弥生土器	甕	全体の1/2強 の残存	23.4	22.8	24.0	7.8	球状に近い甕で口径と胴 部最大径(中位)が近似す る。口縁部は外反する。 口唇部は指による両面か らの押圧で波状、胴部下位 は縦方向のヘラミガキ、他 は指ナデ。	小礫(2mm以 下)を含む。	外面は黒褐色、 浅黄褐色、橙色 内面はにぶい黄 褐色、褐灰色	良好	
SI-10 -3	SI10-1.83	弥生土器	甕	底部片1/4以 下の残存				(6.7)	両面ともヘラナデ (外面 は縦方向、内面は横方向)	小礫(1mm以 下)を含む。	外面は橙色と明 黄褐色 内面は黒色と褐 灰色	良好	
SI-10 -4	SI10-42	弥生土器	埴	底部片	3.2				外面に刷毛目、内面底部 は少し盛り上がる。	白黄色粒 (1mm以下) を含む。	外面は褐灰色、 一部明赤褐色 内面は黒褐色と にぶい橙色	普通	(土師器か)
SI-10 -5	SI10-1. 3. 33.34.66. 85.89	弥生土器	鉢	全体の1/2強 の残存	10.0	9.7	13.0	(5.0)	小型の球状で、口縁部は 内傾する。口縁部は複合口 縁で端部は縄文原体による 押捺により刻目がある。ま た円形の穿孔がみられる。 両面とも横方向のヘラミガ キがなされる。	緻密	両面とも褐灰色 と赤褐色	少し不良	全体に剝離 がある、両 面に赤彩痕 あり。
SI-10 -6	SI10-LI3- 6-1.25	弥生土器	浅鉢	全体の1/8強 の残存					厚手で少し丸みをもって 開いて立ち上がる。	小礫(1mm以 下)を多く含 む。	外面は黒色、明 黄褐色、褐灰色 内面は赤褐色と 赤灰色	少し不良	両面とも赤 彩が成され る。

第25表 竪穴住居跡出土土器観察表(6)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-10 -7	SI10-8.39	弥生土器	浅鉢	体部から口縁部片1/4以下の残存	(18.8)				碗状に大きく立ち上がる。両面とも横方向を主とするヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は浅黄褐色 内面は橙色	少し不良	
SI-10 -8	SI10-26.29	弥生土器	浅鉢	体部から口縁部片1/8強の残存	(21.2)				碗状に大きく立ち上がる。両面とも横方向を主とするヘラミガキ。	緻密	外面は赤褐色とにぶい黄褐色 内面は橙色とにぶい橙色	やや不良	両面とも摩耗している。
SI-10 -9	SI10-18.19	弥生土器	甕	肩部から口縁部片					口縁部は大きく胴部より外反している。また、粘土紐接合痕を3段残す。両面とも指によるナデ。	小礫(2cm以下)少量含む。	外面は黒褐色とにぶい黄色 内面は浅黄色	普通	
SI-10 -10	SI10-44	弥生土器	壺	口縁部片					複合口縁、複合部は指横ナデ、他は横方向のヘラミガキ。	緻密	両面ともににぶい黄褐色と橙色	良好	
SI-10 -11	SI10-16	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部にヘラ状工具による刻目。	緻密	両面とも明黄褐色	少し不良	
SI-10 -12	SI10-1	弥生土器	壺	頸部片					横位2段のS字状結節縄文と羽状縄文、また円形浮文(中央に円形刺突文がある)が1ヶ所みられる。	緻密	外面は橙色 内面は赤褐色	普通	両面とも赤彩される。
SI-11 -1	SI11-1.14	土師器	坏	全体の1/2弱の残存	15.8	(5.2)		(8.0)	底部は広く、体部は丸みを持って開く、両面とも丁寧な横方向のヘラミガキ。	緻密	外面は、明赤褐色と橙色 内面は橙色と明褐色	良好	
SI-11 -2	SI11-9.10	土師器	坏	全体の1/2強の残存	12.9	4.4		6.6	少し小型で底部は若干丸みがあり、体部もやや丸みをもって開く。外面は手持ちヘラケズリ、内面は丁寧なヘラミガキがなされる。	小礫(3mm以下)少量含む。	外面はにぶい黄褐色と褐灰色 内面は橙色と一部灰褐色	良好	体上部外面に墨書「山〇寺?」
SI-11 -3	SI11-1.11	土師器	坏	底部欠損1/6の残存	(16.4)				少し大形で碗状に立ち上がる。外面はロクロによるユビナデ、内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	外面は明黄褐色 内面は橙色	良好	
SI-11 -4	SI11-1	土師器	坏	1/4弱の残存	(14.2)	(2.5)		(8.4)	底部は広く、体部は丸みを持って少し短めに立ち上がる。両面ともロクロによる指ナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は浅黄色、黒色、にぶい黄褐色 内面は黒色	良好	内面に黒色処理、少し摩耗している。
SI-11 -5	SI11-1.12	土師器	坏	口縁部片1/6残存	(12.4)				丸みを持って碗状に立ち上がる。両面ともロクロによるユビナデ。	酸化鉄粒を少量含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は黄褐色	少し不良	外面に煤付着。
SI-11 -6	SI11-5	土師器	坏	底部片				6.6	底部は右回転ロクロヘラ切り離し、体部下位は手持ちヘラケズリ。	緻密、やや小礫(1mm以下)を含む。	外面は黄褐色と明黄褐色 内面は橙色と褐灰色	良好	
SI-11 -7	SI11-18	土師器	坏	底部から体下部片1/3の残存				(6.8)	底部切り離しは回転ヘラ。体下部は横方向のヘラケズリ。	緻密	外面は黄褐色 内面は暗黄色	やや不良	
SI-11 -8	SI11-29.30	須恵器	坏	口縁部片1/4弱の残存	(11.8)				丸みをもって、少し直立気味に立ち上がる。口唇部は少し細い。	緻密	外面はにぶい黄色 内面は灰黄色	良好	外面に火押き痕あり。
SI-11 -9	SI11-31	土師器	甕	底部から胴下位				4.6	やや長胴の甕と見られ、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデがなされる。粘土紐接合痕が残る。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は明褐色と灰褐色と黒色 内面は褐灰色と明黄褐色	良好	外面全体に煤付着。

第26表 竪穴住居跡出土土器観察表(7)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-11-10	SI11-1.28	土師器	瓶	口縁部片1/6残存	(22.0)				内側に丸みを持って外反する。外面の口唇部付近は短く直立する。	緻密、小礫(1mm以下)を極少量含む。	外面はにぶい黄橙色と黒色 内面は褐色、褐灰色、にぶい橙色	良好	
SI-11-11	SI11-2	土師器	甕	口縁部から胴上部片1/4弱の残存	(29.2)				やや丸みを帯びて立ち上がり口縁部は粘土紐を折り曲げて厚くし、短く直線的に外反する。外面はタタキ目、内面は指によるオサエがみられる。また、内面は粘土紐接合痕が少し残る。	緻密、酸化鉄(3mm以下)を含む。	両面明赤褐色、外面の一部灰赤色、内面の一部褐灰色	良好	
SI-13-1	SI13-24	弥生土器	甕	胴部から口縁部まで1/4の残存	(23.0)				胴部は球状で、口縁部はやや大きく外反する。口縁部には4段の粘土紐接合痕があり、指による押圧がみられる。口唇部は指による押擦。両面とも横方向のナデ、外面は擦過痕あり。	小礫を(1mm以下)多く含む。	両面とも橙色、内面の一部はにぶい黄褐色	普通	外面には擦過痕多い、一部に煤付着。
SI-13-2	SI13-4.22.28.31.32.37	弥生土器	甕	胴部片1/2弱の残存			胴部最大径(17.5)		胴部は球状、外面の上部に粘土紐接合痕を2段残し指で押圧している。外面は荒い横方向のヘラナデ、内面は丁寧なナデ。	小礫を(1mm以下)多く含む。	外面は浅黄褐色、明褐灰色、黒色 内面は橙色とにぶい黄褐色	良好	外面には擦過痕多い、一部に煤付着。
SI-13-3	SI13-11.21	弥生土器	甕	口縁部片1/4の残存	(18.8)				口縁部は少し直立気味で外反する。口唇部は両面からの指押圧による波状。口縁部両面はナデ。	緻密	両面とも橙色	わずかに不良	
SI-13-4	SI13-8	弥生土器	甕	口縁部片					複合口縁で口唇部は指による押圧波状文。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい黄褐色と褐灰色	やや不良	
SI-13-5	SI13-41	弥生土器	壺	口縁部片					複合口縁で斜縄文(LR)が施され、段部に刻目がなされる。	緻密	両面ともにぶい黄褐色、外面の一部は橙色	少し不良	
SI-13-6	SI13-39	弥生土器	鉢	口縁部片					複合口縁で内傾する。外面は羽状縄文で複合段部には刻目がなされる。	緻密	両面とも橙色、内面の一部は明赤褐色	少し不良	内面は赤彩。
SI-13-7	SI13-2	弥生土器	壺	胴上部片					横位のS字状結節縄文と斜縄文の組み合わせ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は明赤褐色と褐灰色 内面は褐色	不良	外面赤彩。
SI-13-8	SI13-47	弥生土器	鉢	口縁部片					複合口縁で細かい斜縄文が施され、段部には刻目がなされる。	緻密	外面は褐色、一部明赤褐色 内面は褐色	少し不良	内面は赤彩。
SI-14-1	SI14-1.7~11.14.16.17.19.23.24.29.30	弥生土器	甕	肩部から口縁部片1/2の残存(口唇部はわずか)	(29.8)				肩部に指頭による押圧、口唇部は指による両面からの押圧により波状。両面とも横方向の指ナデ。	小礫(1mm以下)多く含む。	両面とも灰褐色と明褐色	不良	
SI-14-2	SI14-1.19	弥生土器	甕	底部片1/2残存				(7.0)	球状に開く胴部をもつと考えられる。	小礫(1mm以下)多く含む。	外面は褐色とにぶい橙色 内面は黒褐色とにぶい褐色	少し不良	
SI-15-1	SI15-11	弥生土器	壺	底部片				7.8	外面はヘラケズリ。	酸化鉄粒(2mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色、一部は黄褐色 内面は灰白色、一部は明褐灰色	不良	
SI-15-2	SI15-17	弥生土器	壺	口縁部片					短い複合口縁で、斜縄文(RL)が施され、下端には刻目がなされる。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は明黄褐色、内面は褐色と浅黄色	少し不良	
SI-15-3	SI15-17	弥生土器	甕	口縁部片					外反する口縁部をもち、口唇部は指押擦による波状。	黄褐色粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも明褐色、外面の一部は褐色、内面の一部は黒褐色	不良	

第27表 竪穴住居跡出土土器観察表(8)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器 種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-16 -1	SI16- 25. 34	弥生土器	壺	口縁部片1/4 残存	(19.7)				複合口縁で羽状縄文を配し、1本単位の棒状浮文が貼付される。また下端部は刻目がなされる。	黄橙色粒を含む。	両面とも黄橙色、外面の一部はにぶい黄褐色、内面の一部は暗赤褐色	少し不良	
SI-16 -2	SI16-17	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は刻目による波状。	緻密	両面とも橙色と黄褐色	不良	両面とも少し摩耗。
SI-16 -3	SI16- 31. 36	弥生土器	甕	胴部片1/4弱 の残存			(24.0) 胴部最大径		球状の胴部をもち頸部は少し長い。肩部に粘土紐接合痕により段をつくり、縄文原体による押捺がなされる。	酸化鉄粒(3mm以下)を少量含む。	両面とも黄褐色、外面の一部はにぶい橙色、内面の一部は橙色		両面とも少し摩耗。
SI-16 -4	SI16-9	弥生土器	甕	口縁部片					複合口縁で、口唇部は両面からの指押圧で波状口縁。	小礫(2mm以下)多く含む。	両面とも橙色、外面の一部は明黄褐色	普通	
SI-16 -5	SI16-22	弥生土器	(甕)	底部片(底部中央は欠損)1/4残存				7.2	体部は球状に張ると考えられる。	緻密	外面は黄褐色、褐色、橙色 内面は灰黄褐色	少し不良	
SI-17 -1	SI17-3.4. 12~14	弥生土器	甕	胴部から口縁部片1/3の 残存	(21.4)		(24.5) 胴部最大径		球状の胴部を持ち、頸部は少し長く、口縁部は弧を描いて外反する。肩部に粘土紐接合痕を残し段を作り、縄文原体による押圧刻目を施す。口唇部は指による押圧で波状とする。両面ともヘラミガキ。	小礫(1mm以下)少量含む。	両面とも黒色と黒褐色、内面の一部は赤褐色	普通	
SI-17 -2	SI17-.6. 9.10	弥生土器	甕	胴下部から底部片1/6の 残存			(7.4)		胴部の張りは若干弱いと考えられる。両面ともヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は灰褐色と黒褐色 内面は黒褐色と暗赤褐色	普通	内面は剝離が多い。
SI-17 -3	SI17-1	弥生土器	台付甕	台部のみ1/3 残存	(9.4) 台裾部口径				台部は張りが弱く内傾して立ち上がる。内面はナデ、外面はヘラミガキ(縦方向)。	小礫(1mm以下)少量含む。	外面は黒褐色と褐灰色	普通	
SI-17 -4	SI17-15. 17.18.20	弥生土器	鉢	体部から口縁部片					碗状に立ち上がり、口縁部は直立する。口縁部は横位の沈線と上部は斜縄文を施す。他は両面ともナデ。	小礫(1mm以下)少量含む。	外面は黄褐色と褐色 内面は明黄褐色と灰黄褐色	少し不良	
SI-18 -1	SI18- 16. 26.44	弥生土器	甕	胴中位から口縁部片1/4 の残存	(25.3)		(24.4) 胴部中央		球状の胴部で頸部は少し長く、大きく外反する口縁部をもつ。胴部最大径より口径がわずかに大きい。肩部に粘土紐接合痕を残して段を作り、縄文原体による刻目を入れる。口唇部も両面からの指による押圧波状となる。内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	外面は黄褐色と黒褐色 内面は明黄褐色と明褐色	普通	
SI-18 -2	SI18-27	弥生土器	甕	胴部から口縁部片1/2残 存	(14.0)				小型の甕で少し口縁部が胴部より開く、頸部に粘土紐接合痕を5段残し、最下段には縄文原体による刻目が施される。口唇部は指による押圧で波状となる。	緻密	外面は黄褐色、浅黄褐色、橙色 内面は橙色	不良	外面は少し摩耗する。
SI-18 -3	SI18-13	弥生土器	鉢	口唇部がわずかに欠損	8.5	10.0	16.0 (体部中央)	7.0	体下部は少し窪んで中位は強く球状に張る。口縁部は内傾し羽状縄文を施し、2単位の穿孔が2ヶ所に認められる。また口縁部は粘土紐接合痕を残し、段をつけ、縄文原体による刻目が成される。両面とも丁寧な横方向のヘラミガキ。	緻密	外面は黄褐色明褐色、浅黄褐色、明赤褐色 内面は明赤褐色と黒褐色	良好	
SI-18 -4	SI18- 14. 15	弥生土器	鉢	体部から口縁部片1/4の 残存	(16.6)				碗状で口縁部は短く直立する。両面とも横方向のヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は黄褐色、黒色、橙色、明褐色 内面は明褐色と灰黄色	わずかに不良	
SI-18 -5	SI18-21	弥生土器	甕	底部片				6.0	底部は木ノ葉底。	酸化鉄粒(3mm以下)を含む。	両面とも明黄褐色、褐灰色	不良	
SI-19 -1	SI19-1	弥生土器	壺	胴部片					横位に斜縄文と沈線を施す。	黄褐色粒(1mm以下)含む。	外面は明黄褐色 内面はにぶい黄褐色	少し不良	

第28表 竪穴住居跡出土土器観察表(9)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-19 -2	SI19-5	弥生土器	壺	胴部片					横位の沈線を施し、斜縄文を配する。	緻密	外面は明黄褐色、内面はにぶい黄褐色	少し不良	
SI-19 -3	SI19-22	弥生土器	壺	胴部片					羽状縄文と横位の沈線。	緻密	外面は明黄褐色、内面はにぶい黄褐色	少し不良	
SI-19 -4	SI19-8	弥生土器	壺	胴部片					羽状縄文を沈線で区画している。	緻密	外面はにぶい黄褐色と赤褐色、内面は黄褐色	少し不良	
SI-19 -5	SI19-20、 21	弥生土器	壺	胴部片					斜縄文を沈線で区画し、三角文?を施す。無文部はヘラミガキされる。	白色粒(1mm以下)を含む。	外面はにぶい赤褐色とにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-20 -1	SI20-29	弥生土器	壺	口縁部片					短い複合口縁で、下端はヘラによる刻目。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面とも浅黄褐色	少し不良	外面は赤彩。
SI-20 -2	SI20-26	弥生土器	壺	口縁部片					短い複合口縁で、下端はヘラによる刻目。	緻密	外面は褐色、内面は褐灰色	不良	
SI-20 -3	SI20-1	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は両面からの指押圧による波状。	小礫(2mm以下)を少量含む。	両面とも橙色	やや不良	
SI-20 -4	SI20-12	弥生土器	壺	胴部片					羽状縄文と沈線により三角文。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面とも明黄褐色、外面の一部は黄褐色と褐色	少し不良	一部外面に赤彩。
SI-20 -5	SI20-1	弥生土器	壺	胴部片					羽状縄文が施される。	白色粒(1mm以下)を含む。	外面は黄褐色、内面は黄褐色と明赤褐色	少し不良	内面に少し赤彩が残る。
SI-21 -1	SI21-81	弥生土器	甕	底部から胴部1/2の残存				8.4	大型の甕で球状に大きく張る胴部を持つ。肩部に粘土紐接合痕を残し段をつくり、指頭による浅い刻目がなされる。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも淡黄褐色、褐灰色、黄褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-21 -2	SI21-65	弥生土器	壺	口縁部片					口唇部外側に斜縄文(LR)が施される。口唇部の断面は三角形。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は明黄褐色、内面はにぶい黄褐色	不良	
SI-21 -3	SI21-3.83	弥生土器	甕	胴上部から口縁部1/3の残存	(25.1)				頸下部に粘土接合痕を段として残り、指頭による押圧、口唇部は指押圧による波状。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は浅黄褐色と褐色、内面は黄褐色と褐色	不良	両面とも摩耗が激しい。2と同一個体と考えられる。
SI-21 -4	SI21-13.20. 23.25.26.29. 33.36.37.39. 30.41~43.45 ~47.55.56. 64.86~88.91	弥生土器	壺	胴下位から口縁部片1/2の残存	21.4		(42.2) 胴部中央		大型の壺で最大径は胴部中央にあり、頸部は細く長い。口縁部は短い複合口縁。肩部と頸部中央に上下2段のS字状結節縄文に囲まれた横位の羽状縄文。 口縁部は斜縄文(LR)と下端は刻目が施される。頸部外面は指ナデ。	酸化鉄(3mm以下)を少量含む。	外面は明赤褐色、明黄褐色、黒褐色、内面は暗褐色とにぶい黄褐色	不良	胴部両面は摩耗している。外面の無文部は赤彩と考えられる。
SI-23 -1	SI23-41	弥生土器	(甕)	底部片1/2残存				6.4		小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は黒褐色と暗褐色、内面は黒褐色と黒色	不良	摩耗激しい。
SI-23 -2	SI23-39	弥生土器	(甕)	胴部片					外面はヘラナデ、内面に刷毛目が残る。	緻密	外面はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄褐色	やや不良	

第29表 竪穴住居跡出土土器観察表(10)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-24 -1	SI24-7	弥生土器	甕	胴部片					肩部に粘土紐接合痕を残し段を作る。	黄橙色(1mm以下)を多く含む。	外面は褐灰色 内面は浅黄橙色	やや不良	
SI-24 -2	SI24-1	弥生土器	壺	胴部片					横位3段の羽状縄文が配される。	黄橙色(1mm以下)を多く含む。	両面とも黄橙色、 内面の一部は明赤褐色	少し不良	内面は赤彩。
SI-25 -1	SI25-5	弥生土器	壺	口縁部片1/4弱の残存	(8.4)				少し小型で口径が小さく細く短い頸部を持つ。胴部は口径より大きい球状と考えられる。	緻密	外面は灰黄褐色 とにぶい黄褐色 内面は灰黄褐色と褐色	不良	両面とも剝離が激しい。
SI-26 -1	SI26-4	弥生土器	壺	胴上部片10%欠損					球状の胴部をもつ、やや大きめの壺と思われ、胴上部に上から3段横位のS字状結節縄文、羽状縄文(LR, RL)、斜縄文を沈線で囲んだ山形文が配されている。	橙色粒(3mm以下)を多く含む。	両面とも明黄褐色、 外面の一部は灰黄褐色と明褐色	不良	内面は剝離が激しい。
SI-26 -2	SI26-43	弥生土器	壺	胴上部片1/4弱の残存			(27.0) 胴中央部		球状の大きな胴部をもつと考えられ、肩部は羽状縄文(LR, RL)と3段横位のS字状結節文がみられる。両面とも胴部はヘラナデ。	緻密	外面は黄褐色、 にぶい黄褐色、 灰黄褐色 内面は明黄褐色	少し不良	外面の無文部は赤彩、 内面は剝離が激しい。
SI-26 -3	SI26-48	弥生土器	甕	胴部から口縁部片1/4の残存	(8.0)				小型の甕で、胴中位から直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。口径が最大径を示す。口唇部は指による押圧で波状。	橙色粒(2mm以下)を多く含む。	外面は浅黄色と 褐灰色 内面は浅黄色と 暗褐色	やや不良	
SI-26 -4	SI26-45	弥生土器	(壺)	底部片1/3の残存				(4.1)	小型の壺。外面はヘラケズリ。	明褐色粒(1mm大以下)を含む。	両面とも橙色	良好	両面赤彩される。
SI-26 -5	SI26-17. 24.27	弥生土器	甕	底部から胴下部片1/2弱の残存				6.0	やや丸みをもった小さい底部から大きく球状に立ち上がる胴部をもつ。底部中央に穿孔有り(焼成後)。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は褐灰色と 明赤褐色 内面は灰褐色と 褐色	不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-26 -6	SI26-21	弥生土器	壺	口縁部片					短い複合口縁で、下端に縄文原体による押捺がなされる。口縁部全体は直線的に開く。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。	緻密	外面は橙色 内面は明黄褐色	やや不良	
SI-26 -7	SI26-12	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は両面から指押圧により波状、口縁部は両面とも指による横ナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色 内面は明黄褐色	良好	
SI-26 -8	SI26-14	弥生土器	甕	胴上部片					肩部に縄文原体による押圧がみられる。(段部上)	緻密	外面は橙色 内面は浅黄褐色	やや不良	
SI-26 -9	SI26-10	弥生土器	壺	胴上部片					上位から横位2段のS字状結節縄文。斜縄文を沈線で区画した山形文が施される。	緻密	両面ともにぶい黄褐色、 外面の一部は明赤褐色	やや不良	無文部赤彩。
SI-27 -1	SI27-1.3. 6.7.9.45. 13~18	弥生土器	甕	胴部片1/2強残存			(20.8) 胴中央		胴部は球状で、肩部に粘土紐接合痕を1段残し、指頭による押捺が加わる。	緻密、一部に酸化鉄粒(2mm以下)を極少量含む。	外面は橙色と明褐色 内面は明褐色と黄褐色	やや不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-27 -2	SI27-23	弥生土器	(甕)	底部片				6.6	胴下位はわずかに窪む。胴下位は縦方向のヘラケズリ。	白色粒を多く含む。	両面とも橙色と にぶい褐色	少し不良	
SI-27 -3	SI27-1	弥生土器	鉢	口縁部片					横位の羽状縄文。	緻密	外面は橙色 内面は明褐色	不良	内面の一部に赤彩有り。

第30表 竪穴住居跡出土土器観察表(11)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-28 -1	SI28-1.22	弥生土器	甕	胴部から口 縁部片1/4強 の残存	(17.0)		(21.8) 胴 部 中 央		肩部に粘土紐接合痕を残し段を作り、ヘラにより刻みがなされる。口縁部は指による押圧により波状、内面はヘラナデの後指ナデ。	小礫(3mm以下)を極少量含む。	外面はにぶい褐色、明赤褐色、黒褐色 内面は、黒褐色、黒色、にぶい橙色	不良	2と同一個体、両面とも摩耗が多い。
SI-28 -2	SI28-4.5. 11.15~ 17.20.21. 28	弥生土器	甕	底部から胴 部片1/2強の 残存				(7.3)	胴部はやや長胴さみ。外面は横方向のヘラナデ、内面はヘラナデの後指ナデ。底部中央に穿孔有り(焼成後)。	〃	〃	〃	1と同一個体。
SI-29 -1	SI29-4. 15.12.11. 14	弥生土器	甕	胴上部から (1/3残存)、 口縁部片 (10%残存)	(15.6)				球形の胴部から短く直立気味に外反する口縁部を持つ。胴部最大径(中位)が口径より大きい。肩部に粘土紐接合痕を残し段をつくり、刻みがなされる。口唇部は指押圧による波状。	黄橙色の粒が目立つ。	外面は橙色、黄褐色、黒褐色 内面は明赤褐色、にぶい褐色、黒色	少し不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-29 -2	SI29-1	弥生土器	壺	頸部片95% 残存					細い頸部をもち、中位に刺突のある円形浮文を横位に連続して貼り付けている。	黄橙色粒(1mm以下)多く含む。	両面とも橙色、赤褐色、褐灰色、黒褐色	不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-30 -1	SI30-23. 26	土師器	坏	口縁部を 10%欠損	13.8	4.3		7.0	底面は広く、体部は少し丸みをもって開く。底部から体部下位は回転ヘラケースリ、他は両面ともロクロ指ナデ。	緻密	両面とも灰黄褐色、にぶい黄褐色、黄褐色	少し不良	
SI-30 -2	SI30-4.5	土師器	高台付坏	底部中央欠 損、1/4の残 存	(15.9)	4.1		(7.5)	短く開く高台付きで底部は広く、体部は大きく開く。外面はロクロ指ナデ、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色、黄褐色 内面は黒色、橙色	不良	内面黒色処理。
SI-30 -3	SI30-22. 24	須恵器	長頸 壺	頸部から口 縁部片	12.4				やや太めの頸部をもち、口唇部外面は面をもって直立する。	白色粒(3mm以下)を含む。	両面とも暗灰黄色と灰黄色、内面の一部灰オレンジ褐色	良好	
SI-30 -4	SI30-9. 12.18	土師器	甕	胴部から口 縁部片1/4強 の残存	(18)				胴部は少し長く直線的に立ち上がり、口縁部は粘土紐接合痕が少し残り、口唇部外面は面を持ち直立し、内面は若干窪んでいる。両面ともナデ。	小礫(1mm以下)含む。	外面はにぶい黄褐色、明黄褐色 内面には灰黄褐色 明黄褐色	不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-30 -5	SI30-25	須恵器	甕	口縁部片					一本の波状沈線と2本の平行沈線及び円形浮文が貼り付けられている。	白色粒(1mm以下)を少量含む。	外面は黄灰色 内面は浅黄色	良好	
SI-30 -6	SI30-2.3. 6.8.9.13. 21	須恵器	甕	体部片					胴部上位は肩をもつ。外面はタタキ目、内面は同心円形のアテ目が残る。	緻密	外面は暗褐色、一部浅黄色 内面は灰黄色	良好	
SI-31 -1	SI31-2.4.7.8. 10.12.13.14. 15.20.24.25. 26.27.28.31. 32.33.36.37. 38.40.41.42. 43.45.46.47. 48.49	弥生土器	壺	底部から胴 上部1/2強の 残存			27.6 胴 部 中 央		大きい球状の胴部であるが更にかなり張っている。肩部より下位へ、2段のS字状結節縄文に挟まれた羽状縄文、上部を山形の沈線に区画された羽状縄文、3段のS字状結節縄文、斜縄文(RL)が施されている。	小礫(2mm以下)少量含む。	外面は橙色と褐灰色 内面はにぶい黄褐色、黒褐色	少し不良	外面は赤彩されている可能性が高い。両面とも摩耗している。
SI-31 -2	SI31-10. 24.62.64	弥生土器	壺	胴部から口 縁部1/4弱の 残存			(24.4) 胴 部 中 央		大きい球状の胴部から細い頸部をもつ。肩部より下位、斜縄文(RL)、S字状結節縄文、沈線で囲まれた斜縄文により構成される2段の山形文が配されている。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黄褐色と灰褐色 内面は明赤褐色と灰褐色	不良	外面は赤彩されている可能性が高い。両面とも摩耗している。
SI-32 -1	SI32-5	須恵器	坏		(12.4)				碗形で内面は横と斜め方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以下)少量含む。	外面は黒色(口縁部)と褐灰色(口縁部)、浅黄褐色 内面は黒色	やや不良	内面は黒色処理。
SI-32 -2	SI32-9	土師器	台付鉢	台部のみ	14.4 台 部 下 端口径				広く大きい台部で短く直線的に立ち上がる。両面とも指ナデ。	緻密	外面は明赤褐色、黄色にぶい黄褐色 内面は浅黄褐色、にぶい黄褐色 台内側はにぶい黄褐色、暗褐色、口縁部褐色	少し不良	
SI-32 -8	SI32-8	須恵器	甕	胴部片					外面は平行タタキ目の後横方向のカキ目、内面は同心円アテ目にスリケシ調整がなされている。	小礫(1mm以下)と白色粒(3mm以下)少量を含む。	外面にぶい赤褐色、暗赤灰色、灰色 内面は灰白色	良好	

第31表 竪穴住居跡出土土器観察表(12)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-33-1	SI33-1. K11-a-1	弥生土器	壺	口縁部1/3の残存	(17.3)				頸部から大きく外反する形体とみられ、口縁部は短い。複合口縁で、下端は刻目がなされる。	小礫(1mm以下)を含む。	両面共に明赤褐色、一部黒色	不良(補強済)	両面とも摩耗が激しい。
SI-33-2	SI33-1.10	弥生土器	(甕)	底部付近のみ				7.0		小礫(5mm以下)多く含む。	外面は赤褐色、にぶい赤褐色、暗赤灰色 内面は暗赤灰色と赤黒色	不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-35-1	SI35-1. 25.32.53	弥生土器	鉢	口縁部片1/3の残存	(18.8)				やや大型で丸みを帯びて開き、口縁部は直立する。	小礫(2mm以下)を含む。	両面共に明赤褐色と赤褐色、外面の一部黄褐色、内面の一部暗赤褐色	不良(補強済)	甕の胴部以下を再使用した可能性がある。
SI-35-2	SI35-27	弥生土器	(甕)	底部片				6.2	やや小型で底部は狭く厚い。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は明赤褐色と褐色 内面は赤褐色	不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-35-3	SI35-48	弥生土器	(甕)	底部片1/3の残存				5.8		橙色粒(1mm強)を多く含む。	外面は明褐色と暗褐色 内面は褐灰色と一部橙色	不良(補強)	
SI-35-4	SI35-1.53	弥生土器	(甕)	胴下部から底部の破片、胴下部は1/8の残存				6.6	胴下位はやや窪んで立ち上がり、胴部は大きな球状と考えられる。	橙色粒(1mm以下)多く含む。	外面は明赤褐色と暗赤灰色 内面は赤黒	不良(補強)	両面とも摩耗が多い。
SI-35-5	SI35-35	弥生土器	高坏	脚部片、裾部は欠損					脚は細身、坏部は厚手と思われる。脚部の外面は縦方向のヘラケズリ、内面はナデ。	酸化鉄粒(1mm以下)を少量含む。	両面とも褐色、脚の内側に、にぶい黄褐色	不良	
SI-35-6	SI35-39	弥生土器	甕	口縁部片					やや大型の甕と思われる。口唇部は刻目がなされ波状。内面は横方向のヘラナデ。	緻密	外面は褐色と明黄褐色 内面は黄褐色と褐色	不良(樹脂補強)	
SI-35-7	SI35-15	弥生土器	甕	胴上部片			23.5 (胴部中央)		胴部は丸みを持った鉢形で口縁部は外反し、最大径は口径と考えられる。胴上部には段をつくり、刻目がなされると思われる。	緻密	外面は黒色と暗褐色 内面は黒褐色と褐色	不良(樹脂補強)	両面とも摩耗が激しい。
SI-36-1	SI36-2	弥生土器	甕	80%残存	16.3	18.5		6.7	底部中央は焼成後の穿孔がなされ、胴部は球状、頸部は5段の粘土紐接合痕を少し残し、口唇部は指押圧による波状口縁と考えられる。外面の口縁部は指押圧とナデ、胴部は一部に刷手目が残る。他はヘラナデ。内面は、横方向の指ナデ。	小礫(5mm以下)を含む。	外面は黒色、黒褐色と赤褐色 内面は褐色、黒褐色と赤褐色	少し不良	
SI-36-2	SI36-21	弥生土器	甕	底部と口縁上部を欠損	(20.4)				短い複合口縁で下端は縄文原体による刻目、直立する外面は斜縄文(RL)がなされる。	小礫(3mm以下)を含む。	外面は赤色、極暗赤褐色、褐色 内面は黒褐色、褐色、明褐色	少し不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-36-3	SI36-5	弥生土器	甕	底部片60%の残存				5.0	やや丸みを持った小さめの底部を持つ。	小礫(3mm以下)を含む。	外面は褐色と明赤褐色 内面は明赤褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-36-4	SI36-7	弥生土器	壺	口縁部片1/8の残存	(20.4)				短い複合口縁で、下端は縄文原体による刻目、直立する外面は斜縄文(RL)がなされる。	褐色粒(2mm以下)多く含む。	外面は浅黄褐色、 内面は褐色	不良	
SI-36-5	SI36-1	弥生土器	器台	90%残存	9.4	12.0		14.8 裾部口径	「ハ」の字状の台部と短く開く底部を持つ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面はにぶい黄褐色と一部褐色 内面は褐色	不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-37-1	SI37-27. 28.31.32.53	土師器	葦	全体の1/4強の残存					少し浅めの碗で、口縁部は短く直立。	緻密、少し酸化鉄粒(1mm以下)を含む。	外面は褐色、明赤褐色と黒褐色 内面は明赤褐色と暗赤褐色	不良(補強済)	両面とも赤彩がなされる。

第32表 竪穴住居跡出土土器観察表(13)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-37 -2	SI37-1. 17.28.20	土師器	(甕)	底部から胴 下位片1/3強 の残存				(7.2)	球状の大きめの胴部を持 つと考えられる。両面とも ヘラミガキと考えられる。 (外面は縦方向)。	橙色粒(1mm 大以下)を多 く含む。	外面は赤褐色と 暗赤灰色 内面は黒色と暗 赤灰色	不良(補強 済)	両面とも摩 耗が多い。
SI-37 -3	SI37-29	土師器	(壺)	底部片				6.4	底部は短く突出する。	小礫(1mm以 下)多少含む。	外面はにぶい黄 褐色と赤灰色 内面は褐色	少し不良	
SI-38 -1	SI38- 1. 11.19.21	土師器	甕	胴上部から 口縁部片1/6 の残存	(21.8)				少し薄手の甕で、口縁部 は横ナデ、胴部外面は縦方 向のヘラケズリ、内面はナ デ。	小礫(1mm以 下)多く含む。	外面は橙色、黒 色とにぶい赤褐 色 内側は橙色とに ぶい赤褐色	少し不良	
SI-38 -2	SI38- 1. 18.26	土師器	甕	口縁部片1/2 弱の残存	(19.6)				少し薄手の甕で、口縁部 は横ナデ、胴部外面は縦方 向のヘラケズリ、内面はナ デ。	緻密(1mm以 下)少量含む。	外面は橙色とに ぶい黄褐色 内面は橙色と灰 黄褐色	不良	
SI-39 -1	SI39-1.5. 8.9.10	土師器	甕	胴部(1/4)か ら口縁部片 (10%)	(15.4)		(21.8) 胴 部 中 央		球状の胴部をもち、口縁 部は外反する。口唇部は内 傾き面に短く面取りされる。 肩部両面に粘土紐接合痕を 残す。	小礫(3mm以 下)極少量、 酸化鉄(2mm 以下)多く含 む。	外面はにぶい黄 褐色、灰黄褐色 と浅黄褐色 内面は褐色と 橙色	良好	胴上部に煤 付着。
SI-39 -2	SI39-11. 12.15.19	土師器	甕	胴下部から 底部1/4の残 存				(8.0)	やや長胴ぎみの甕と考え られる。胴下部内面に粘土 紐接合痕を少し残す(1段)。	酸化鉄(3mm 以下)極少量 含む。他は 緻密。	外面は明褐色 とにぶい橙色 内面は褐色	普通	
SI-39 -3	SI39-4	土師器	坏	口縁部欠損 60%の残存			10.7 (体上部)		丸底で丸みをもった体部 で口縁部は内傾する。内面 はヘラミガキ。	酸化鉄(1mm 大以下)多量 に含む。	外面はにぶい黄 褐色 内面は褐色と 黒色	やや不良	外面は摩耗 が激しい。 内面は黒色 処理。
SI-41 -1	SI41-21	土師器	甕	口縁部欠損 1/2強の残存			18.4 (胴部中 央)	5.4	胴下位の立ち上がりは、 わずかに窪み、胴部は大き な球状である。両面に刷毛 目が残る、内面の一部には ヘラミガキが認められる。	小礫(2mm以 下)含む。	外面は黒褐色と 褐色 内面は黄褐色と にぶい橙色	少し不良	両面とも摩 耗が多い、 胴上部に煤 付着。
SI-41 -2	SI41-21	弥生土器	手捏ね 土器 高坏	坏部片のみ で底部は欠 損	(9.6)				小型の坏部で厚手である。	小礫(1mm以 下)を含む。	両面とも橙色	普通	
SI-41 -3	SI41-10	弥生土器	高坏	脚部片で5 %の欠損				9.4 脚 裾 部 口径	脚部は「ハ」の字状に立 ち上がり、裾部は複合口縁 上端はヘラによる刻目、裾 上部に羽状縄文1段、また、 脚部中央に三角形の穿孔が3 ヶ所存在する。	小礫(2mm以 下)少量含む。	外面は橙色とに ぶい褐色 内面は灰褐色、 台内部は外面と 同じ	やや不良	
SI-41 -4	SI41-21	弥生土器	甕	口縁部片					外反する口縁をもち、外 面は刷毛目、上端の口唇部 付近は沈線状に窪む。	小礫(2mm以 下)極少量含 む。	外面は明黄褐色、 内面は灰黄褐色 と明黄褐色	少し不良	
SI-41 -5	SI41-21	弥生土器	壺	口縁部片					3段を示す複合口縁で上部 に斜縄文(RL)、その下端に ヘラによる刻目がなされる。	小礫(2mm以 下)多く含む。 (特に黄褐色 粒目立つ)	外面は褐色 内面は赤褐色	普通	内面は赤彩。
SI-41 -6	SI41-9	弥生土器	鉢	口縁部片					複合口縁で複合部と体上 部に續けて羽状縄文が2段な される。	酸化鉄粒 (1mm以下) 少し多く含 む。	両面とも黄褐色	少し不良	
SI-42 -1	SI42- 46. 86.139. 175.138	須恵器	坏	全体の60% の残存	12.2	4.1		6.8	広い底部を持ち、切り離 しは回転糸切り、体部はや や丸みをもって開く。	緻密	両面とも黄褐色 と黄灰色	不良	両面ともか なり摩耗し ている。
SI-42 -2	SI42-43. 69.120	土師器	坏	全体の60% の残存	13.3	4.4		7.2	3に酷似するがやや体部 に丸みをもつ。	酸化鉄(3mm 以下)を少量 含む。	両面とも黄褐色 と浅黄褐色	少し不良	

第33表 竪穴住居跡出土土器観察表(14)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調(外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-42-3	SI42-116	土師器	坏	全体の1/3の残存	(12.6)	3.9		7.6	広い底部を持ち、直線的に開いて立ち上がる体部をもつ、いわゆる箱形の坏である。底部は手持ちヘラケズリがなされる。	緻密 酸化鉄(3mm以下)少量含む。	両面ともにぶい黄橙色と浅黄橙色	普通	
SI-42-4	SI42-11. 17.31.33	土師器	坏	底部欠損60%の残存	13.2				やや丸みをもって開きぎみに立ち上がる体部をもつ。	酸化鉄粒(1~2mm)を少量含む。	外面は浅黄橙色と褐色 内面は黄褐色	不良	
SI-42-5	SI42-200. 202.204	土師器	甕	胴部から口縁部片1/4の残存	(20.0)		(11.1) 胴部上位		長胴の甕で最大径は胴上位にもつ、口縁部は外反。	小礫(3mm以下)を少量含む。	外面は橙色、黒褐色と褐色 内面は褐色とにぶい褐色	少し不良	外面は擦過痕が多い。
SI-42-6	SI42-12. 14.18.23. 47.206	土師器	甕	胴部から口縁部片1/4の残存	(20.0)		(19.2) 胴部上位		少し長胴さみの甕、厚手である。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ。	小礫(1mm以下)少量含む。	外面は浅黄褐色、黒褐色とにぶい褐色 内面は褐色、灰褐色と黒褐色	普通	
SI-42-7	SI42-53. 60.81	土師器	甕	胴上部から口縁部片1/4弱の残存	(21.7)				やや球状にちかい胴部を有すると考えられ、口縁部は外反する。外面の口縁部には粘土紐接合痕を少し残す。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は褐色と灰褐色 内面はにぶい赤褐色、褐色	少し不良	
SI-42-8	SI42-25. 65	土師器	(甕)	胴上部から口縁部片1/4弱の残存	(17.6)				やや丸みをもって直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。最大径は口径である。口唇部の外面がわずかに窪む。	小礫(1mm以下)少量含む。	両面ともにぶい褐色と褐色	少し不良	
SI-42-9	SI42-136. 163	土師器	甕	胴上部から口縁部片1/6の残存	(19.8)				長胴の甕と考えられ、口縁部は外反、上部がやや厚みを持つ。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ。	小礫(1mm大)を少量含む。	両面とも浅黄褐色、褐色、にぶい黄褐色	少し不良	
SI-42-10	SI42-3. 61.127. 157.166	土師器	甕	胴部上位から口縁部片70%の残存	12.0		12.7 胴上部		小型の甕で、胴部は球状にちかい。口唇部外面には僅かに窪みがある。	酸化鉄粒(2mm以下)を含む。	外面は褐色、黒褐色と浅黄褐色 内面は浅黄褐色、黒褐色とにぶい黄褐色	少し不良	外面には煤が付着する。
SI-42-11	SI142-201	土師器	甕	底部から胴下部1/3の残存				(4.8)	外面は斜め方向のヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は黒色 内面は黒褐色	普通	外面は擦過痕が多くある。
SI-43-1	SI43-34	土師器	坏	体上部から口縁部は20%の残存	(10.8)	4.0		6.2	手捏ねによって作られ、やや小型で、体部は丸みをもつ。	緻密	外面は黒褐色と褐色、明褐色 内面は褐色とにぶい褐色	不良	
SI-43-2	SI43-42. 43.78.79. 80	土師器	坏	全体の1/2強の残存	13.4	4.25		5.6	やや小さめの底部から丸みをもって開きぎみに立ち上がる。底部及び体下部は静止ヘラケズリ。	小礫(2mm以下)多く含む。	外面は赤褐色と暗赤褐色 内面は暗赤褐色	普通	
SI-43-3	SI43-77	土師器	坏	体部は40%欠損	12.5	4.1		(6.8)	底部は回転ヘラ切り離し、体下部は丸みをもってやや大きく開く、体下部もヘラケズリ。	緻密	外面は黄褐色と褐色 内面は褐色とにぶい褐色、黄褐色	不良	
SI-43-4	SI43-102. 114	土師器	坏	口縁部は10%欠損	13.0	3.7		6.3	底部は回転糸切り離し後、静止ヘラケズリ。体部は丸みを持ってやや大きく開く、体下部もヘラケズリ。	緻密	外面は灰褐色と褐色、にぶい褐色 内面は灰褐色と褐色	少し不良	
SI-43-5	SI43-96	土師器	坏	全体の1/6の残存	(12.0)	(4.6)		(4.2)	底部は小さく、体部は僅かに丸みを持って大きく開いて立ち上がる。	小礫(1mm大)少量含む。	外面は明褐色とにぶい黄褐色 内面は明褐色と褐色	不良	
SI-43-6	SI43-14.33. 61.66	土師器	坏	全体の3/4強の残存	12.5	4.7		6.8	底部は回転糸切り離し、体部は開きぎみに直線的に開く、やや厚手。	緻密	外面は浅黄褐色とにぶい黄褐色 内面は明黄褐色とにぶい黄褐色	少し不良	

第34表 竪穴住居跡出土土器観察表(15)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-43 -7	SI43-18. 30	土師器	坏	体部から口 縁部の破片 1/4弱の残存	(13.0)				体部は大きく開く。	緻密	外面は橙色と灰 褐色 内面は黄橙色と 灰褐色	少し不良	
SI-43 -8	SI43-1	土師器	坏	底部は90%、 体下部は 20%の残存				6.0	底部回転糸切り離し。	緻密	両面とも橙色と 褐灰色	不良	両面とも摩 耗が多い。
SI-43 -9	SI43-192	灰釉陶器	灰釉 皿	底部欠損1/8 弱の残存	(16.0)	(1.6)			肩平な形で内面に灰釉が 施される。底部はやや厚手 で高台が付いていたと考え られる。	緻密	外面は白灰色 内面はにぶい黄 色	良好	
SI-43 -10	SI43-27. 111. 160. 173	須恵器	短頸 壺	口縁部と底 部中央は欠 損、他は1/3 の残存			(25.0) 胴上部	(13.2) 高台径	底部は広めで、厚い高台 をもつ。胴部は肩を張った 球状である。	小礫1mm大 (特に白色) 多く含む。	外面は暗オリー ブ色、暗オリー ブ褐色、暗灰黄 色 内面は黄灰色	良好	肩部に自然 釉がかかる。 胴部はヘラ による擦過 痕を残す。
SI-43 -11	SI43-141. 142.192	土師器	甕	胴部から口 縁部片1/8の 残存	(26.0)				口径に最大径をもち、胴 部は下に向かって細くなる 形である。胴部外面は縦方 向のヘラケズリ、内面はヘ ラ横ナデの後ユビ横ナデ。	小礫(1mm以 下)少量含む。	外面は赤褐色、 黒褐色、暗褐色、 明黄褐色 内面は灰黄褐色、 にぶい黄橙色、 暗褐色	やや不良	外面胴部は 擦過痕多い。
SI-43 -12	SI44-1 (SI43- 155.156)	土師器	甕	胴上部から 口縁部片1/8 の残存	(16.8)				少し小型の甕で、やや細 身の胴から口縁部は短く直 線的に開く。	小礫(1mm以 下)を含む。	外面はにぶい橙 色と褐灰色 内面は褐色と灰 褐色	少し不良	
SI-43 -13	SI43-104	土師器	甕	胴上部から 口縁部片1/8 の残存	(21.2)				やや丸みをもって直線的 に立ち上がる胴部をもち、 口縁部は短く水平ぎみに外 反する。胴部外面は縦方向 のヘラケズリ、内面はユビ ナデ痕が認められる。	小礫(1~ 2mm)を含む。	外面浅黄橙色と 灰褐色 内面は橙色とに ぶい褐色	普通	外面にヘラ ケズリによる 擦過痕あり。
SI-43 -14	SI43-135. 136.139	土師器	坏	底部は80%、 体部は20% の残存、口 縁部欠損				6.8	底部は右回転クロ糸切 り離し、体部は丸みをもつ て開きぎみに立ち上がる。 内面は横方向の丁寧なヘラ ミガキ。	緻密	外面はにぶい黄 橙色と褐灰色 内面はにぶい褐 色	わずかに 不良	
SI-43 -15	SI43-56	土師器	甕	底部付近1/2 の残存				5.9	外面はすべてヘラケズリ、 内面はヘラナデ。	緻密	外面は黒色とに ぶい黄褐色 内面はにぶい黄 褐色	普通	外面に煤付 着。
SI-44 -1	SI44-12. 13 (SI43-62)	土師器	坏	全体の1/2強 の残存	10.6	4.8		6.8	底部はわずかに丸みをも つ。いわゆる箱形の坏であ る。外面はヘラケズリ、内 面はヘラミガキ。	酸化鉄粒 (3mm以下) 多く含む。	外面は浅黄褐色 と褐灰色 内面は浅黄褐色	わずかに 不良	
SI-44 -2	SI44-102	須恵器	坏	口縁部片1/8 の残存	(12.2)				直線的に開く体部と考え られる。	白色粒(1mm 以下)を含む。	外面は灰オリー ブ色と黒色 内面は灰色	良好	両面に火押 痕有り。
SI-44 -3	SI44-30	土師器	碗	体下部から 底部片1/3の 残存				(5.2) 高台径	小型で底部は高台が付く。 両面とも丁寧なヘラミガキ がなされる。	緻密	外面は黒色とオ リーブ黒色 内面は黒色	少し不良	黒色処理。
SI-44 -4	SI44-30	須恵器	坏	底部から体 下部片1/3強 の残存				(8.6)	底部が広く、切り離しは 回転ヘラ切り。	白色粒(1mm 以下)を少し 含む。	外面は灰黄色 内面は灰色	普通	外面に火押 痕有り。
SI-44 -5	SI44-29.1 (SI43-62. 63)	土師器	甕	胴上部から 口縁部破破 片1/2の残存	(21.4)				胴部最大径を上部にもち、 口縁部はやや短く外反する。	酸化鉄粒 (1mm以下) 少量含む。	外面は浅黄褐色 と褐灰色 内面は浅黄褐色 とにぶい褐色	少し不良	
SI-44 -6	SI44-1	須恵器	蓋坏	鈕部分の破 片	鈕の径 2.6				少し扁平な鈕。	緻密	外面は浅黄褐色、 内面は黒色と褐 灰色	やや不良	

第35表 竪穴住居跡出土土器観察表(16)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-45 -1	SI45-17	土師器	坏	全体の1/2の 残存	(12.4)	4.6		6.2	底部は回転口ヘラ切り 離し。体最下部もヘラケ ズリ。 体部は丸みをもって開く。	小礫と酸化 鉄粒(2mm以 下)を含む。	両面ともぶい 黄褐色、浅黄 褐色と明褐色	少し不良	
SI-45 -2	SI45-4.16	須恵器	坏	全体の1/2の 残存	(12.8)	3.9		7.8	底部は広く、右回転口 ヘラ切り離し。体部は直線 的に開く。	小礫(3mm以 下)を極少量 含む。	両面とも浅黄色 と黄灰色	普通	
SI-45 -3	SI45-22	須恵器	高台付 杯	底部付近の み70%の残 存				8.0 高台径	高台部は細く直立する。 底部は比較的広い。	暗褐色粒 (1mm以下) を少量含む。	外面は灰白色と 浅黄色、内面は 灰白色	不良	
SI-45 -4	SI45-20. 41.47	土師器	甕	胴部から口 縁部片1/3の 残存	(20.6)				胴部最大径は上部にあり、 口縁部は短く直線的に開く。 少し薄手である。	小礫(1mm以 下)を少量含 む。	外面は明赤褐色 と黒褐色 内面はぶい赤 褐色と黒色	良好	
SI-45 -5	SI45-12	須恵器	甕	胴部から口 縁部片					胴部はやや丸みをもって 直線的に立ち上がり、口縁 部は短く直線的に開く。口 縁部は粘土を折り曲げて複 合口縁状に微厚している。	小礫は少な いが砂状の 1mm以下の 粒有り。	外面は灰黄褐色 とぶい黄褐色 内面はぶい黄 褐色	やや不良	いわゆる赤 焼きの須恵 器。
SI-46 -1	SI46	弥生土器	鉢	体下部から 底部欠損、 他は40%の 欠損	15.0		20.7 体部中 央		球状の体部をもち、口縁 部は複合口縁で丸みをもっ て内傾する。口縁部は羽状 縄文。下端は縄文原体によ る刻目。両面とも横方向の ヘラミガキ。	赤褐色粒 (1mm以下) を含む。	外面は明黄褐色、 ぶい黄褐色、 内面はぶい赤 褐色、ぶい黄 褐色、黄褐色	不良	両面とも赤 彩。
SI-46 -2	SI46-10	弥生土器	鉢	口縁部40%、 体部20%、 の欠損	18.7	8.8		5.6	体部はやや丸みをもって 立ち上がり、口縁部は直立 きみで、下部は横位の沈線 によって区画され、羽状縄 文が施される。	褐色粒(1mm 以下)を含む。	両面とも褐色、 黄褐色と灰褐色	少し不良	両面とも摩 耗が多い。
SI-46 -3	SI46-10	弥生土器	高坏	脚部80%、 坏部10%の 残存				10.2	脚部は複合口縁で斜格 子文が施され、上端部には 円形の脚突文がなされる。 胴中央には三角形の透かし が2ヶ所認められる。脚部と 坏部の境にはヘラによる刻 目をつけた突帯がある。脚 内面は刷毛目、坏両面はヘ ラミガキがなされる。	小礫(1mm以 下)を含む。	外面は褐色とぶ い褐色 内面は赤褐色	良好	両面とも赤 彩。
SI-46 -4	SI46-9	弥生土器	(甕) 底 部片					6.8		褐色粒(2mm 以下)を多く 含む。	外面は褐色、褐 灰色と浅黄褐色 内面は浅黄褐色 と褐灰色	少し不良	
SI-47 -1	SI47-42. 51.67.71. 98	弥生土器	壺	頸部から口 縁部片90% の残存	13.4				細く長い弧状の頸部をも ち、口縁部は短い複合口 縁をもつ。	小礫(3mm以 下)を少量含 む。	外面は黄褐色、 ぶい褐色と灰 褐色 内面は黄褐色と 褐灰色	良好	
SI-47 -2	SI47-1. 30~32. 87~89. 91.92	弥生土器	埴	体上部から 口縁部は 20%の残存	(10.2)				体部は球状と考えられ、 口縁部は少し「く」の字状 で少し長く直線的に開く、 両面ともヘラナデで内面 体部は後に指ナデ。	酸化鉄粒 (2mm)を多 く含む。	外面は明赤褐色 と浅黄褐色 内面は褐灰色、 暗赤褐色	普通	両面とも赤 彩。
SI-47 -3	SI47-1.7. 8.10.11. 13.15.94 ~96.111. 121	弥生土器	鉢	全体の60% の残存	16.6	10.9		6.0	少し大型の碗状で口縁部 は直立、体部外面と内面の 一部は縦方向のヘラミガキ。	小礫(2mm以 下)を含む。	両面とも浅黄橙 色と褐灰色	やや不良	両面とも摩 耗多い。
SI-47 -4	SI47-48	弥生土器	高坏	脚部1/4の残 存				(9.8) 脚部部 口径	太い脚部で裾部は短い複 合口縁で上端は縄文原体に よる刻目がなされる。外面 は縦方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以 下)を少量含 む。	外面はぶい橙 色と赤褐色 内面は褐色と黒 褐色	良好	外面は赤彩。
SI-47 -5	SI47-1. 76.79. 114	弥生土器	壺	底部から胴 中部片70% の残存			19.8 胴部や や下位	7.0	球状に大きく張り出す胴 部をもち、最大径は胴部 中部のやや下位にある。胴 下部外面は縦方向のヘラミ ガキ、上面は沈線と羽状縄 文による山形文が施される。 内面は指ナデ。	酸化鉄粒 (2mm以下) を含む。	外面は浅黄褐色、 黄褐色、黒褐色、 明赤褐色	良好	外面は赤彩。

第36表 竪穴住居跡出土土器観察表(17)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-47 -6	SI47- 46. 59	弥生土器	甕	口縁部片					下部に粘土紐接合痕を4段残し、口唇部は両面からの指押圧による波状。	橙色粒(1mm以下)を少量含む。	両面とも黒褐色とにぶい橙色 内面の一部は明赤褐色	良好	一部外面に煤付着。
SI-47 -7	SI47-72	弥生土器	壺	胴上部片					沈線と斜縄文による山形文が施され、無文部は赤彩される。	小礫(2mm以下)を含む。	外面はにぶい黄褐色 内面はにぶい黄褐色と灰黄褐色	不良	一部赤彩。
SI-47 -8	SI47-108	弥生土器	壺	胴上部					2段の斜縄文(燃糸)を施し、無文部は赤彩。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色と赤褐色 内面は浅黄褐色と褐灰色	少し不良	一部赤彩。
SI-47 -9	SI47-62	弥生土器	壺	口縁部片					複合口縁で2段の斜縄文(LR)と下端は縄文原体による刻目。	小礫(2mm以下)を極少量含む。	外面は赤褐色と明赤褐色 内面は赤褐色とにぶい赤褐色	やや不良	両面赤彩。
SI-47 -10	SI47-49	弥生土器	甕	胴上部片					粘土紐接合痕が2本残し、下段端部に指押圧による刻目がなされる。	橙色粒(1mm以下)を少量含む。	外面は褐灰色とにぶい黄褐色 内面は浅黄褐色と褐色	やや不良	外面の一部に煤付着。
SI-47 -11	SI47-112	弥生土器	甕	胴上部片					粘土紐接合痕を残し段を作り、縄文原体による刻目がなされる。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面はにぶい褐色と褐灰色 内面はにぶい褐色	良好	
SI-47 -12, 13	SI47-1	弥生土器	壺	胴部片					薄手で細い沈線と斜縄文により、意匠文が施される。	小礫(2mm以下)を含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は明赤褐色	少し不良	2片。
SI-49 -1	SI49-4.5	弥生土器	壺	頸部から口縁部片					やや細い頸部をもち、口縁部は複合口縁で直立する。頸部下部はS字状結節縄文に上下を挟まれた羽状縄文(斜縄文3段)、上部は縦方向のヘラミガキ、複合部は羽状縄文(斜縄文3段)、下段部は刻目。	粗く赤色粒多く含む。	両面ともにぶい赤褐色と橙色	良好	外面の一部赤彩。
SI-49 -2	SI49-1	弥生土器	浅鉢	口縁部片					少し丸みをもって直立する口縁部に羽状縄文が施され、口唇部にも斜縄文(RL)がみられる。	赤色粒少量含む。	外面は明黄褐色、内面は褐色	良好	
SI-50 -1	SI50- 23. 27	弥生土器	台付甕	台裾部欠損、他は60%の残存	16.9	(27.0)	20.2	胴中央	台部立ち上がりは「ハ」の字状、胴部は球状、口縁部は外反する。外面の台部と胴上部に刷毛目が残る。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも赤褐色と灰褐色、黒褐色	少し不良	全体に摩耗している。
SI-50 -2	SI50-26	弥生土器	台付甕	台部欠損他は70%の残存	18.6		19.0	胴上部	最大径は胴上部にあり、肩部から口縁部までは粘土紐接合痕を5段残し、最上部が開いて短い口縁部とする。口唇部は波状。胴下部は両面ともヘラミガキ。台部欠損後、底部を穿孔する(甕)。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は明赤褐色と暗赤褐色、灰褐色 内面は褐色とにぶい黄褐色、灰褐色	不良	全体に摩耗している。
SI-52 -1	SI52- 16. 17	弥生土器	甕	口縁部片					外面は縦方向のヘラナデと刷毛目、内面は横方向の刷毛目、口唇部は両面からの指押圧による波状。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は灰黄褐色 内面はにぶい黄褐色	わずかに不良	
SI-52 -2	SI52-1	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文(LR)と無文部はヘラミガキ。	小礫(3mm以下)を少量含む。	外面は浅黄褐色と、明赤褐色 内面は黄褐色	やや不良	外面無文部は赤彩される。
SI-52 -3	SI52-1.11	弥生土器	壺	胴上部片					ヘラ描き沈線文。	白黄色粒(1mm以下)を含む。	両面ともにぶい黄褐色	少し不良	
SI-53 -1	SI53-44~ 47.59~61. 63.64.67. 69.70.79. 82.83.91. 92.97.109	土師器	甕	全体の60%の残存	15.7	29.0	19.9	胴部中央	長胴の甕で、最大径は胴中央部、口縁部はやや長く直線的に開く。胴外面はヘラケズリ、下部は一部に横方向のヘラミガキ、内面はヘラナデの後指ナデ。内面の一部に粘土紐接合痕を残す。	緻密	外面は橙色と褐灰色 内面は灰褐色と褐色、にぶい褐色	少し不良	外面は摩耗する。

第37表 竪穴住居跡出土土器観察表(18)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器 種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-53 -2	SI53-58. 84.114. 117.62. 96.120	土師器	甕	底部から胴 下部1/2弱の 残存				(7.6)	長胴の甕と思われ、外面 は縦方向のヘラケズリ、内 面はヘラナデの後指ナデ。	緻密	外面は黄橙色と 灰褐色、黒褐色 内面は褐灰色と 橙色	少し不良	外面の一部 は剥離して いる。
SI-54 -3	SI54- 42. 52	土師器	坏	底部欠損1/8 の残存	(14.0)	(4.2)			体部はやや丸みをもち、 口縁部は少し外反する。体 部外面はヘラケズリ、内面 はナデ。	小礫を(1mm 以下)少し含 む。	両面とも橙色と 一部黒褐色	少し不良	
SI-54 -4	SI54-27. 49.52	土師器	坏	体上部から 口縁部片1/4 以下の残存	(11.8)		(17.1) 稜部分		体部はやや薄く、口縁部 は明確な稜をもち、直立す る。両面とも体部はヘラミ ガキ。	酸化鉄粒 (2mm以下) を多く含む。	外面は橙色、黒 褐色と褐灰色 内面はにぶい橙 色、黒褐色と褐 灰色	少し不良	
SI-54 -5	SI54-34	土師器	高坏	脚部片、裾部 は欠損					外面は縦及び横方向のヘ ラミガキ、内面はヘラケズ リダシ。	酸化鉄(1mm 以下)を多く 含む。	外面はにぶい黄 褐色、明黄褐色 と明赤褐色 内面は黄褐色と 橙色	普通	
SI-54 -6	SI54-1.4. 30.33.51. 52	土師器	甕	底部から胴 下部1/3の残 存				(6.2)	長胴の甕でやや小型、底 部はわずかに上げ底、外面 はヘラケズリ、内面はヘラ ナデの後指ナデ。	小礫(1mm大 以下)を多く 含む。	外面は黒褐色と 明褐色 内面は褐色、明 褐色とにぶい褐 色	普通	
SI-56 -1	SI56-3.4	弥生土器	(高坏)	坏部上部1/8 の残存	(22.6)				やや大きめで浅い体部を もち、外面はヘラナデ、内 面はヘラミガキがなされる。 口唇部は斜縄文(RL)が施さ れる。	小礫(2mm以 下)を含む。	両面ともにぶい 黄褐色と明黄褐 色	やや不良	
SI-56 -2	SI56-1.6. 12	弥生土器	鉢	体上部から 口縁部片1/6 の残存	(17.6)				体部はやや直線的に開き、 口縁部はわずかに丸みをも って直立する。口縁部は横 位のヘラ描き沈線と羽状縄 文がなされる。	緻密	両面とも橙色と 暗赤灰色	不良	両面とも摩 耗が多い。
SI-56 -3	SI56-3	弥生土器	甕	口縁部片					外反し、上部に粘土紐接 合痕を一段残す。口唇部は 両面からの指押圧による波 状。	緻密	外面は浅黄褐色、 内面はにぶい橙 色	やや不良	
SI-56 -4	SI56-1	弥生土器	鉢	口縁部片					口縁部と口唇部に斜縄文、 口唇部端部は縄文原体によ る刻目。	小礫(1mm以 下)を含む。	外面は橙色 内面は灰褐色	やや不良	
SI-56 -5	SI56-1	弥生土器	鉢	口縁部片					下位に横位のヘラ描き沈 線と羽状縄文、口唇部も斜 縄文(RL)がなされる。	小礫(1mm以 下)を少量含 む。	外面は浅黄褐色 と赤色 内面は赤色	普通	両面赤彩。
SI-57 -1	SI57-1.6. 7	弥生土器	鉢	体部から口 縁部片1/4弱 の残存	(22.0)				体部はやや直線的に開き、 口縁部から直立ぎみに立ち 上がる。口縁部は複合口縁 で羽状縄文が施され、下端 部は縄文原体による圧痕が なされる。口唇部も斜縄文 がある(LR)。	緻密	両面とも明赤褐 色、外面の一部 は赤褐色	やや不良	両面赤彩。
SI-58 -1	SI58-1	土師器	(甕)	口縁部片 1/10 くらい の残存	(18.2)				外側に少し丸みをもって 大きく開く、両面とも横ナ デ。	小礫(1mm以 下)を含む。	外面は赤褐色と にぶい橙色 内面はにぶい褐 色	良好	
SI-58 -2	SI58-1	土師器	坏	口縁部片1/6 くらいの残 存	(13.6)				わずかに丸みをもって直 線的に開く。外面はヘラケ ズリ、内面はヘラミガキ。	小礫(2mm以 下)を多く含 む。	外面は明赤褐色、 内面は明赤褐色 と黒褐色	良好	
SI-58 -3	SI58-1	土師器	(甕)	底部片1/6の 残存					外面は横方向のヘラケズ リ、内面は指ナデ、底部は 太い繊維状の圧痕が残る。	小礫(1mm以 下)を少量含 む。	外面はにぶい褐 色 内面は橙色	良好	外面に粘土 塊が付着。
SI-59 -1	SI59-1.3	土師器	甕	胴部(80%残 存)から口縁 部(20%)の 残存	(22.8)		(34.2) 胴部中央		胴部は球状で最大径は胴 中央にある。口縁部は外反 する。外面の胴部(一部口 縁部)と内面の口縁部に刷 毛目が存在する。内面はナ デであるが、粘土紐接合痕 が残る。	小礫(2mm以 下)を少量含 む。	外面は灰褐色、 橙色、にぶい橙 色 内面は明黄褐色 と灰黄褐色	不良	

第38表 竪穴住居跡出土土器観察表(19)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-59-2	SI59-1	土師器	甕	底部から胴下端の破片				(8.0)	両面に刷毛目が認められる。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は灰褐色、橙色、にぶい橙色 内面は明黄褐色と灰黄褐色	不良	SI-59-1.3と同一個体。
SI-59-3	SI59-3	弥生土器	壺	胴上部片					2本単位で2段施されるヘラ描き沈線による波状文、下部には斜縄文(LR)がなされる。	白黄色粒(1mm以下)を多く含む。	外面は黒褐色と灰黄褐色 内面は褐灰色	少し不良	
SI-60-1	SI60-1	土師器	坏	体上部から口縁部片	(8.0)				小型で体部はやや直線的に開く。	酸化鉄粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも黄褐色	少し不良	
SI-60-2	SI60-3	土師器	(甕)	胴部から口縁部片1/12の残存					やや小型で、胴部最大径は上部にあり、口縁部は短く外反する。外面はヘラケズリ、内面はナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は灰黄褐色 内面は褐灰色、にぶい黄褐色と灰黄褐色	少し不良	
SI-61A-1	SI61A-1.15.16.18~20.31~33	弥生土器	壺	胴上部から口縁部1/4の残存	(25.1)				大型の壺で球状の胴部をもつと考えられ、頸部は太めでやや長く、口縁部は小さく外反する。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラナデ後指ナデ。	緻密	外面は明赤褐色と黒褐色、黄褐色 内面は黄褐色と黒色、褐灰色	普通	
SI-61B-2	SI61B-4	弥生土器	鉢	全体の1/3弱の残存	(12.4)	(6.2)		(4.6)	やや丸みをもって直線的に開く。口縁部は下部に2段のS字状結節縄文、上部に羽状縄文を配する。口唇部は斜縄文(RL)がみられる。	緻密	両面とも黄褐色と浅黄褐色、赤色	少し不良	両面とも赤彩。
SI-61A-3	SI61A-21	弥生土器	壺	胴部片					斜行櫛描き文。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は黒褐色と灰黄褐色 内面は灰黄褐色	やや不良	
SI-61B-4	SI61B-1	弥生土器	壺	胴部片					櫛による波状文と円形刺突文がみられる。	白色粒(1mm以下)を多く含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は黒褐色	少し不良	
SI-62AB-1	SI62AB-1.26.61.62.76.78.93.94.96.97	弥生土器	壺	胴部のみ1/4の残存			(36.8)		大型の壺で胴部は球状、下部は横方向のヘラミガキ、上部には斜縄文を沈線で区画し山形文を2段に施文している。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黒色、暗褐色、赤褐色、黄褐色 内面は黒色と黄褐色	不良	外面の無文部は赤彩。
SI-62AB-2	SI62AB-35	弥生土器	壺	底部から胴下部1/6の残存				(7.8)	胴部は下位がわずかに窪んで上位にむかって大きく張り出す。また底部周辺の外面はヘラケズリ、他は両面ともヘラミガキ。	酸化鉄粒(2mm以下)を少量含む。	両面とも橙色、浅黄褐色と赤褐色、内面の一部黒褐色	少し不良	
SI-62AB-3	SI62AB-1.33.34.38.51.85	弥生土器	鉢	口縁部欠損1/6の残存				(7.4)	やや丸みをもって開いて立ち上がる。両面ともナデ。	小礫(1mm大以下)を含む。	外面は浅黄褐色、灰褐色とにぶい橙色 内面は橙色と黒色	普通	
SI-62AB-4	SI62AB-91	弥生土器	鉢	ほぼ完形	19.9	9.5		6.6	やや丸みをもって開いて立ち上がる。両面ともヘラミガキ。外面の口縁部はナデ。	緻密	両面とも黒色と黄褐色、外面の一部は橙色	わずかに不良	
SI-62AB-5	SI62AB-26	弥生土器	鉢	鉢の1/4弱の残存	(12.1)	(6.3)		(4.0)	少し小型で底部はやや狭く、体部は下部がやや窪んで、丸みをもって碗状に立ち上がる。体下部はヘラナデツケ、上部は横方向のヘラナデ、内面はヘラナデ後指ナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	両面とも橙色と黒褐色、灰褐色	良好	
SI-62AB-6	SI62AB-24	弥生土器	甕	口縁部1/6の残存	(21.0)				外反して大きく開き、口唇部は両面からの指押圧による波状。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも橙色、外面の一部は浅黄褐色	普通	
SI-62AB-7	SI62AB-1.9.66	弥生土器	台付甕	脚部片				10.6 脚部 口径	少し小型の台付甕と思われる、脚部は、両面ともナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも橙色と褐灰色、外面の一部は明黄褐色	良好	

第39表 竪穴住居跡出土土器観察表(20)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-62AB-8	SI62AB-17	弥生土器	壺	頸部片					羽状縄文。	緻密	外面は黒褐色と浅黄褐色 内面は褐灰色と灰黄褐色	良好	
SI-62AB-9	SI62AB-145	弥生土器	壺	胴上部片					櫛描き沈線で波状文や弧状文を施文する。	黄褐色粒(1mm以下)を含む。	両面とも褐灰色	不良	
SI-62AB-10	SI62AB-1	弥生土器	壺	胴上部片					櫛描き波状文。	緻密 白色粒(1mm以下)が少し目立つ。	外面はにぶい黄褐色と黄褐色 内面は明褐色	不良	
SI-62AB-11	SI62AB-25	弥生土器	甕	胴上部片					櫛描き沈線。	緻密 白色粒(1mm以下)を含む。	両面ともにぶい褐色	良好	
SI-62AB-12	SI62AB-1	弥生土器	壺	胴上部片					櫛描き沈線で波状文や平行線文を施文する。	黄褐色粒(1mm以下)を含む。	外面はにぶい褐色 内面は褐灰色	不良	
SI-62AB-13	SI62AB-29	弥生土器	壺	胴上部片					斜行縄文を沈線で区画した文様。	緻密 白色粒(1mm以下)が少し目立つ。	外面はにぶい黄褐色と黄褐色 内面は明褐色	不良	
SI-62AB-14	SI62AB-68	弥生土器	甕	胴上部片					5本単位の櫛描き羽状文を施す。	緻密	両面とも黄褐色、外面の一部は黒褐色と明褐色	良好	
SI-62AB-15	SI62AB-45	弥生土器	甕	胴上部片					櫛描き斜行沈線。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は黒色とにぶい黄褐色 内面は灰黄色と黄灰色。	少し不良	
SI-64-1	SI64-1	弥生土器	甕	頸部片					粘土紐接合痕が3段認められ、指ナデがなされる。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも明赤褐色	普通	
SI-64-2	SI64-3	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文。	緻密	外面は浅黄褐色と褐灰色 内面はにぶい黄褐色	少し不良	
SI-64-3	SI64-3	弥生土器	壺	胴上部片					櫛描き沈線で波状文と平行線文を施文する。内側はヘラナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は黒褐色と暗赤褐色	やや不良	
SI-64-4	SI64-3	弥生土器	壺	胴上部片					3と同一個体。	〃	〃	〃	
SI-65A-1	SI65A-56	弥生土器	壺	(頸部片)					羽状縄文。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は明黄褐色、内面は浅黄褐色	良好	
SI-65A-2	SI65A-56	弥生土器	甕	口縁部片					外反する口縁部片で口唇部は両面から指押圧により波状をなす。	緻密	両面とも黄褐色	少し不良	
SI-65B-1	SI65B-27	土師器	坏	全体の1/2弱の残存	(11.6)	(3.8)		(4.8)	丸底の底部から浅く碗状に立ち上がり、口縁部は短く直立する。体部は外面が横方向のヘラケズリ、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黒色と黄褐色、明褐色 内面は黒褐色とにぶい黄褐色	良好	内面に煤が少し付着する。

第40表 竪穴住居跡出土土器観察表(21)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-65B-2	SI65B-40. 41.47	土師器	坏	全体の1/2弱の残存、底部中央を欠損	(12.8)	(3.6)			丸底の低部から浅く碗状に立ち上がる。体部は外面がヘラケズリ後ヘラミガキ、内面はヘラミガキがなされる。	緻密	外面は明黄褐色と黄褐色 内面は橙色と明褐灰色	少し不良	外面は摩耗している。
SI-65B-3	SI65B-21	土師器	器台	脚部から受部下位1/4の残存				(11.0) 脚裾部口径	少し小型で開きぎみの脚をもち、中央に円形の透かし(穿孔)がある。脚部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ。	小礫(1mm以下)で特に白黄色粒を少量含む。	外面は黒色、褐灰色、にぶい黄褐色、明赤褐色 内面はにぶい褐色とにぶい赤褐色、脚内面は一部黒褐色	良好	
SI-65B-4	SI65B-4	弥生土器	鉢	口縁部片					複合口縁で口縁部は直立ぎみに羽状縄文、口唇部は斜縄文(LR)がそれぞれなされる。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面とも明黄褐色と褐灰色	良好	
SI-65B-5	SI65B-49	弥生土器	鉢	口縁部片					複合口縁で口縁部は直立、外面に羽状縄文、下端には縄文原体による刻目、口唇部は斜縄文(LR)が施される。	緻密	外面は黒褐色 内面は暗赤褐色	普通	
SI-65B-6	SI65B-7	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を沈線で区画している。	小礫(3mm以下)を極少量含む。	外面は明黄褐色と赤色 内面は明褐色	少し不良	無文部を赤彩。
SI-66-1	SI66-121	弥生土器	壺	胴部片1/4の残存			(18.3) 胴部最大径		少し小型の壺で、胴部はやや張った球状をもち、胴下部は無文で縦方向のヘラミガキ、胴中部は上下2本横位の沈線に挟まれた斜縄文(LR)、上部は1本横位の沈線に区画された斜縄文(LR)が施される。	小礫(3mm以下)を含む。	外面は明黄褐色と橙色、褐灰色 内面は黒色	少し不良	内面は剥離がみられる。
SI-66-2	SI66-60. 64.70.81. 86.87	弥生土器	甕	胴上部から口縁部片70%の残存	18.8				球状の胴部と考えられ、口縁部は外反し下部に粘土紐接合痕を1段残す。外面はナデ、内面の胴部はヘラミガキ。	酸化鉄粒(1mm以下)を含む。	両面とも黒褐色と暗褐色	良好	
SI-66-3	SI66-32	弥生土器	鉢	体上部から口縁部片1/8の残存	(11.4)				丸みをもった体部をもち、口縁部は複合口縁で無文、少し内傾する。内面は丁寧な横方向のヘラミガキ。	黄橙色粒(5mm以下)を極少量含む。	両面とも浅黄橙色	少し不良	
SI-66-4	SI66-25	弥生土器	甕	口縁部片、口唇部欠損					頸下部にS字状結節縄文を数段残す。	小礫(2mm以下)少量含む	両面とも橙色とにぶい褐色	普通	
SI-67-1	SI67-1.3	弥生土器	鉢	体部から口縁部片、1/4残存	(14.0)				やや丸みをもって開く。外面の体部中程には、縄文原体を回転させた様な沈線、口縁部にはヘラ描き沈線による山形文、口唇部は斜縄文(RL)を施文する。 内面はヘラによるミガキがなされ、口縁部に粘土紐接合痕をわずかに残す。	緻密	外面は橙色と褐灰色、内面は橙色と黒褐色	やや不良	
SI-67-2	SI67-1.4. 7~9.15	弥生土器	壺	底部から胴下部60%の残存				7.0	大きく球状の胴部をもつ。	酸化鉄粒(1mm強)を多く含む。	外面は赤褐色と橙色 内面は明黄褐色	良好	外面は赤彩。
SI-67-3	SI67-12. 14	弥生土器	壺	口縁部片					口唇部は内面から指押圧による波状。	橙色粒(1mm以下)を多く含む。	外面は赤褐色と褐色 内面は明黄褐色	良好	
SI-67-4	SI67-16	弥生土器	壺	胴部片					球状の胴部をもち、上部にS字状結節縄文(数段)と上に斜縄文(LR)を残す。	酸化鉄粒など小礫(2mm以下)を含む。	外面は明黄褐色と赤褐色 内面は浅黄色	少し不良	下部の無文部は赤彩。
SI-67-5	SI67-1.26 (SX08-98)	弥生土器	壺	胴上部片					球状で大きめの胴部をもつと考えられ、上部に2段のS字状結節縄文に上下を挟まれた2段の羽状縄文が施されている。	白色粒、酸化鉄粒など小礫(1mm~2mm)を少量含む。	外面は黄褐色と明赤褐色 内面は橙色とにぶい褐色	少し不良	
SI-67-6	SI67-1.19 ~21.23~ 25.28	弥生土器	壺	胴下部片					球状で大きめの胴部をもつと考えられ、上部は、2段のS字状結節縄文と少し小さくまばらな斜縄文を配している。	酸化鉄(2mm以下)を多く含む。	外面はにぶい褐色と赤色、橙色、内面は黄褐色と明黄褐色	普通	外面の無文部は赤彩。

第41表 竪穴住居跡出土土器観察表(22)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-68 -1	SI68-21	弥生土器	甕	口縁部片					口縁上部にヘラによる刻目、口唇部は両面から指押圧による波状をなす。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は灰黄褐色、内面は橙色	少し不良	
SI-68 -2	SI68-3.5.6	弥生土器	甕	胴上部片					少し小型で球状の胴部をもつと考えられ、胴上部は粘土紐接合痕を残し、端部に縄文原体による刻目がなされる。他は横方向のユミナデ。内面は丁寧なヘラミガキ。	緻密	両面共に明黄褐色	良好	
SI-68 -3	SI68-10.14.15.25.31.36.40	弥生土器	壺	胴下部から底部片1/8の残存				(6.4)	底部は小さく、胴部は大きく張る大型の壺と考えられ、両面ともヘラミガキがなされる。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は橙色、内面はにぶい黄褐色	良好	
SI-69 -4	SI69-36	弥生土器	壺	(胴中位)					地文を斜縄文として、1本の沈線の波状文と櫛描きの波状文が施される。内面は荒いヘラナデ。	小礫(3mm以下)を多く含む。	外面は明赤褐色と褐灰色、内面は灰褐色とにぶい赤褐色	良好	
SI-69 -1	SI69-173.176~178.191 (SI68-1)	弥生土器	壺	頸部から口縁部片 60%の残存	9.4				細く長い頸部をもち、口縁部はやや短い複合口縁である。外面は縦方向の荒い刷毛目。	小礫(3mm以下)を極少量含む。	外面は浅黄褐色、一部明赤褐色と黒色、内面は橙色と黄褐色	普通	
SI-69 -2	SI69-101~103.152.168 (SX07-203)	弥生土器	甕	胴上部から口縁部片1/4の残存	(24.0)				わずかに肩部をもち、太く長い頸部をもつ形体で、口縁部は外反し、上部に短い段をもつ。頸部は櫛描きの羽状縄文が施される。口唇部は縄文原体による押圧波状文。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は黒褐色、浅黄褐色と橙色、内面はにぶい黄褐色、褐灰色	やや不良	
SI-69 -3	SI69-13~15	弥生土器	壺	口縁部片 70%の残存、口唇部欠損					細い頸部から外反して立ち上がる。両面に刷毛目が残っている。	小礫(1mm)を少量含む。	外面は黒褐色と橙色、内面は褐灰色と褐色	少し不良	
SI-69 -4	SI69-144.145.175	弥生土器	甕	口縁部片1/4の残存					やや開いた口縁部をもち、外面の口唇部は縄文原体押圧による波状、口縁部最上面は短い段をもち、端部を少し細い縄文原体による刻目がなされる。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黒褐色と黄褐色、内面は浅黄褐色と褐灰色	やや不良	
SI-69 -5	SI69-86	弥生土器	壺	底部から胴下部 60%の残存				7.2	少し突出する厚手の底部をもち、胴部は小型の球状と考えられる。外面はヘラナデ、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を多く含む(白色粒が多い)。	外面は黒褐色(底部)と褐色、内面は黒色と褐色、褐灰色	良好	
SI-69 -6	SI69-48	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は両面からの指押圧による波状文。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色、内面は灰黄褐色	少し不良	
SI-69 -7	SI69-155	弥生土器	甕	口縁部片					外面は刷毛目、内面はナデ、口唇部外面端部はヘラによる刻目。	小礫(2mm以下)を少量含む。	両面とも褐灰色、内面の一部は、にぶい褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-69 -8	SI69-107	弥生土器	甕	口縁部片					ヘラ描き羽状文が施文され、口唇部は両面からの指押圧による波状となる。	小礫(3mm以下)を含む(浅黄褐色粒が目立つ)。	両面とも褐色	良好	
SI-69 -9	SI69-158	弥生土器	壺	胴中位から下部片					胴中位に少しまばらな斜縄文を配している。	小礫(2mm以下)少量含む。	外面は黄褐色、褐灰色と褐色、内面は黒褐色と褐色	普通	
SI-69 -10	SI69-162.194.199	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を並行する上下の沈線で区画する。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は褐色と黄褐色、内面は灰黄褐色	少し不良	
SI-69 -12	SI69-66.89	弥生土器	壺	胴上部片					胴上部に斜縄文を沈線で区画し、舌状文などをつくり、その上にヘラ状工具による刺突文がなされている。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面とも褐色	少し不良	

第42表 竪穴住居跡出土土器観察表(23)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-69 -14	SI69-31	弥生土器	壺	胴上部片					少し小型の壺で、胴上部に斜縄文を沈線と円形竹管文で区画した意匠文を配する。	小礫(3mm以下)を含む。	外面は黒褐色 内面は明褐色	良好	
SI-69 -15	SI69-10	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を沈線と円形刺突文で区画し、紐結文を構成する。	小礫(3mm以下)を少量含む。	両面とも明黄褐色と黒褐色	普通	
SI-69 -16	SI69-34. 102	弥生土器	甕	頸部片					ヘラ描き羽状文(ヘラの種類は細い例と太い例がみられる)。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は黒褐色 内面は明赤褐色	少し不良	
SI-70 -1	SI70-50	弥生土器	鉢	全体の1/4の残存	(20.4)	(7.9)		(6.8)	やや浅い鉢で、体部は丸みをもって開き、口縁部は複合口縁で丸みをもって直立する。口縁下端部は縄文原体の押捺による刻目。口縁部はS字状結節縄文が横位に10条以上施文される。また口唇部は斜縄文(RL)がみられる。 体部外面はヘラナデ、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)底部に多い。	外面は浅黄褐色、灰黄褐色、にぶい黄褐色、赤色 内面はにぶい赤褐色、赤色(低)にぶい黄褐色	やや不良	両面とも赤彩。
SI-70 -2	SI70-67. 77.87.89.	弥生土器	甕	胴上部から口縁部片1/4の残存	(24.2)		(21.0) 胴部最大径(上位)		丸みがあるがやや鉢形に近い胴部をもち、短い頸部を挟んで、口縁部は外反する。口唇部は両面からのヘラ刻みによる波状。 外面はミガキにちかいヘラナデ。内面はヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は橙色とにぶい橙色 内面は橙色	良好	
SI-70 -3	SI70-68	弥生土器	壺	口縁部片					口縁は外反し、上部は短い複合口縁となる。縄文原体により中央を刻目とし、上端は斜縄文(RL)が施文される。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は橙色とにぶい橙色 内面は明褐色と褐色	不良	内外面赤彩。
SI-70 -4	SI70-83	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文を横位の沈線で区画。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は褐色とにぶい褐色 内面は明褐色と褐色	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-70 -5	SI70-24	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を沈線で区画する。また沈線を格子状に配する。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は褐灰色と明赤褐色 内面は暗赤褐色	やや不良	外面の無文部は赤彩。
SI-70 -6	SI70- 44. 60.91	弥生土器	壺	頸部1/4の残存					頸部中央下位は羽状縄文を横位の沈線で区画。	小礫(2mm以下)を含む(黄褐色粒はかなり多い)。	両面とも明黄褐色と赤褐色	良好	外面の無文部と内面の頸部上半が赤彩される。
SI-71 -1	SI71- 12. 13	弥生土器	鉢	体部から口縁部1/4の残存	(17.6)				やや浅い碗状で、口縁部は少し内傾する。外面の口縁部は3本のS字状結節縄文、上部は羽状縄文、口唇部は斜縄文(LR)、体下部は横方向のヘラナデ、内面は丁寧なヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は明黄褐色と褐灰色、内面は褐灰色と褐色	良好	
SI-71 -2	SI71-1	弥生土器	甕	頸部片					横位の沈線で結束斜行縄文を区画する。	緻密	外面は明黄褐色、内面は褐色	普通	
SI-71 -3	SI71- 15. 17	弥生土器	甕	胴上部片					粘土紐接合痕を残し、指押圧による刻目、他はユビナデ。	酸化鉄粒(2mm以下)を含む。	外面は黒褐色 内面は暗褐色	普通	
SI-72 -1	SI72-33	弥生土器	甕	口縁部のみわずかに欠損	15.2	18.0	19.2 胴部最大径(中位)	7.4	広めの底部をもち、胴部は球状。口縁部はわずかにまるみをもって直線的に開く、口縁部内面上端は沈線状に窪む。外面の胴部と内面の胴上部はヘラナデの後ユビナデ、内面の胴中位は縦方向のヘラミガキ。	小礫(5mm以下)を極少量含む。	外面は赤色、灰赤色、灰褐色 内面は赤色と黒色	良好	
SI-72 -2	SI72-36	弥生土器	甕	完形	15.9		18.8	8.0	胴部は球状で、口縁部は3段の粘土紐接合痕を残し、指押圧(オサエ)痕がよく残る。 両面ともヘラナデの後ユビナデ。 底部は焼成後の穿孔がなされる。	小礫(1mm以下)を含む。	外面はにぶい赤褐色、赤黒、褐色、黒褐色 内面は明赤褐色、褐色、黒褐色	良好	
SI-72 -3	SI72-35	弥生土器	甕	全体の80%の残存			12.0 胴部最大径(中位)		小型で少し歪んでいる。体部は球状、口縁部は開き、粘土紐接合痕を2本残す。 外面の体部は荒いヘラケズリ、口縁部はユビナデ、内面はヘラナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黒褐色、明黄褐色、浅黄褐色 内面は褐灰色、褐色、浅黄褐色	普通	

第43表 竪穴住居跡出土土器観察表 (24)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-72 -4	SI72- 41. 43	弥生土器	台付 甕	全体の70% の残存	21.6	27.0	23.2 胴 部 最 大径 (上 位)	9.3 脚 裾 部 口径	台部(脚部)は丸みをもった「ハ」の字状、胴部は球形だが最大径は上部、口縁部は比較的小さく外反。 両面ともヘラによる成整形で、外面脚部は縦方向のヘラミガキ、胴部は横方向のヘラミガキ、口縁部は斜めと横方向のヘラミガキ、内面の口縁部は横方向のヘラミガキ、脚部と胴部はヘラナデ。	小礫(1mm以下)少量含む。	外面は黒色、明赤褐色、明黄褐色 内面は明赤褐色、赤灰色、明黄褐色	普通	
SI-72 -5	SI72- 31. 47	弥生土器	壺	胴部1/4強の 残存			(22.2) 胴 部 最 大径		ほぼ球状の胴部をもち、両面ともヘラナデがなされる。内面の下部はユビナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は赤褐色、黒褐色、暗赤褐色 内面は明赤褐色、にぶい橙色、暗褐色、黒褐色	良好	
SI-72 -6	SI72-36- 38.45	弥生土器	壺	底部から胴 中部付近 70%の残存			24.6 胴 部 最 大径	7.8	底部より胴下端はやや窪み、胴部は下位に最大径をもち、強く張っている。外面はヘラナデの後縦方向のヘラミガキ、内面はヘラナデ。	小礫(4mm以下)を極少量含む。	外面は赤、にぶい橙色、黒色、赤褐色 内面は赤褐色、赤黒色、にぶい赤褐色	普通	外面は少し 摩耗。
SI-72 -7	SI72- 30. 40	弥生土器	高坏	脚 部 90% 坏 部 50% 弱 の 残存				12.5 脚 裾 部 口径	脚部は広く開き、中位に円形の穿孔が3ヶ所ある。上位は細くなる。坏部は下位に稜をもち水平で立ち上がりは少し丸みをもって大きく開く。 脚内面はヘラとユビナデ、他はヘラミガキがなされる。	小礫(2mm以下)を含む(白黄色粒が多い)。	外面は明褐色、暗褐色、明赤褐色 内面は明赤褐色と黒色、脚内部は灰褐色	良好	
SI-72 -9	SI72- 21. 42	弥生土器	鉢	全体の70% の残存	9.8	5.0		3.2	小型の鉢で底部はやや上げ底、体部は碗状、口縁部は小さく外側に直立ぎみにふくらむ。体部外面は粗いヘラケズリ、内面はユビナデ。	小礫(1mm以下、酸化鉄、白黄色粒目立つ)を含む。	外面は黒色、橙色、褐灰色 内面は黄褐色、橙色、褐灰色	良好	底部に靫の 圧痕がある。
SI-72 -10	SI72-23	弥生土器	鉢	底部～体上 部片				4.0	小型で底部は小さく、やや不安定、体部は球状で外面は横方向のヘラミガキ(部分的)、内面はナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は黒色、にぶい橙色、赤褐色 内面は黒色と黒褐色	普通	
SI-72 -11	SI72-46	弥生土器	鉢 手捏ね	完形	7.8	6.0		2.8	小型の鉢であり、手づくねのためやや凹凸があるが、体部はやや丸みをもって開く。口縁部はわずかに内傾する。口唇部外面は縄文原体による押圧刻み。一部に粘土紐積み上げ痕が残る。 体下部は外面が指オサエ、内面はヘラナデ。	緻密	両面とも橙色と褐灰色	良好	
SI-73 -1	SI73-1.8. 10	弥生土器	壺	頸部片70% の残存					細く長めの頸部をもち、外面下位に無節横位の縄文を施文する。内面はナデ。	小礫(1mm以下)を多少含む。白黄色粒多い。	外面は明黄褐色とにぶい黄褐色 内面は橙色と黄褐色	少し不良	
SI-74 -1	SI74-6 (SX08-98)	弥生土器	壺	胴上部から 口縁部1/8の 残存	(17.8)				やや長胴さみと考えられ、頸部も少し長い。頸部下位に横位の沈線で挟まれた羽状縄文とS字状結節縄文がある。また、口縁部はやや短い複合口縁で斜縄文が施され、上端部は刻目。	小礫(5mm以下)を少量含む。	外面は明褐色、褐灰色と明赤褐色 内面は赤褐色とにぶい赤褐色	普通	両面とも赤 彩がみられる (外面は無文 部、内面は 口縁部)
SI-74 -2	SI74-6	弥生土器	鉢	口縁部片					複合口縁で、立ち上がりは丸みをもって少し開いて立ち上がる。下部(RL)、複合部(LR)、口唇部(RL)に各々斜縄文が施されている。内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	両面とも褐灰色	良好	
SI-74 -3	SI74-4	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は両面からの指押圧による波状。	緻密	外面は黄褐色とにぶい黄褐色 内面は黄褐色と黒褐色	普通	
SI-75 -1	SI75-1	弥生土器	(鉢)	口縁部片					開きぎみの口縁で外面は羽状縄文(下よりLR、RL、LR)、口唇部もRLの斜縄文が施される。内面は横及び斜め方向のヘラミガキ。	小礫(3mm以下)を多く含む。	外面は明黄褐色とにぶい黄褐色 内面は赤色と暗赤灰色	普通	
SI-76 -1	SI76-13. 14.16.21. 22.24.26. 36	弥生土器	鉢	全体の90% の残存	21.7	9.5		5.8	少し大きめで体部は直線的に大きく開き、口縁部はやや丸みをもって直立する。少し薄い複合口縁で、下端は縄文原体による刻目、複合部外面は羽状縄文。口唇部も斜縄文(LR)が施される。内面は横及び斜め方向の丁寧なヘラミガキ。	酸化鉄粒(1mm以下)を含む。	外面は黒色、黄褐色、橙色 内面は黄褐色、橙色、にぶい赤褐色	少し不良	両面とも赤 彩。
SI-76 -2	SI76-18	弥生土器	壺	頸部(1/6)から 口縁部 (1/8)の破片	(20.0)				頸部は細く、口縁部は短い複合口縁で大きく外反する。下頸部にはヘラによる刻目、頸部には2本のS字状結節縄文に上下を挟まれた羽状縄文と3～4ヶの円形刺突文が押された円形浮文が貼られる。	小礫(1mm強以下)を含む。	外面は浅黄褐色、黄褐色と褐灰色 内面は橙色と黄褐色	少し不良	両面とも赤 彩 両面とも剝 離が激しい。
SI-76 -3	SI76- 35. 36	弥生土器	壺	胴上部片 60%の残存					少し厚手で胴部は球状を示し、外面は2本ずつのS字状結節縄文に挟まれた羽状縄文、内面は横方向のヘラナデ。	酸化鉄粒(2mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色と褐色 内面は黄褐色	普通	外面の無文 部は赤彩。

第44表 竪穴住居跡出土土器観察表(25)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-76 -4	SI76-34. 36	弥生土器	壺	底部から胴下部80%の残存			(22.5) 胴下部最大径	(8.0)	下部上位に5段(5本)横位のS字状結節縄文を施す。	酸化鉄粒(3mm以下)非常に多く含む。 黄橙色粒(3mm以下)多く含む。	外面は黒色、明黄褐色と橙色 内面は黄褐色と褐灰色	少し不良	両面とも剝離が激しい。
SI-77 -1	SI77-1.9. 39.46	弥生土器	壺	頸部から(80%)口縁部(1/2弱)の残存	17.2				頸部は少し細く長い。下部に羽状縄文を横位の沈線で区画する。上部は縦方向のヘラミガキ、口縁部は大きく外反し、短い複合口縁で下端は縄文原体の押圧による刻目、他は斜縄文(LR)がなされる。内面は横方向のヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を多く含む。特に白褐色と赤褐色	外面は明黄褐色とにぶい橙色 内面はにぶい赤褐色と赤褐色	普通	
SI-77 -2	SI77-7. 10.39	弥生土器	甕	胴部から頸部の破片1/4強の残存					胴部は球状、頸部はやや厚く長い。粘土紐接合痕が6段以上認められ、エビによるオサエとナデがある。また、外面胴下部は縦方向のヘラミガキが一部にあり、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい橙色と褐灰色、明黄褐色	良好	
SI-77 -3	SI77-37. 38.62	弥生土器	甕	頸部片1/6の残存					大型の甕で、粘土紐接合痕を5段以上残す。最下段には縄文原体による押圧がみられる。外面はユビナデ、内面はヘラミガキがなされる。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は褐灰色とにぶい橙色 内面は橙色とにぶい褐色	良好	
SI-77 -5	SI77-36	弥生土器	壺	胴部から頸部の破片1/4強の残存			(18.8) 胴部中央最大径		2本のS字状結節縄文により上下を挟まれた羽状縄文を2段以上配していると考えられる。	酸化鉄粒と白黄色粒(1mm以下)を含む。	外面は黄褐色 内面は明黄褐色と橙色	やや不良	
SI-77 -6	SI77-51 ~53	弥生土器	壺	底部から胴下部片1/4弱の残存				(10.2)	大型の甕で、胴下部の立ち上がりは大きく開いている。外面は縦及び横方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を多く含む。特に浅黄褐色粒が目立つ。	外面は褐灰色、暗褐色、一部明赤褐色 内面は褐灰色、浅黄褐色とにぶい褐色	不良	内面は摩耗が多い。
SI-78 -1	SI78-1.3 ~5.8.15	弥生土器	台付甕	全体の60%の残存			5.8 脚裾部口径		小型で少し厚手、脚部は小さく「ハ」の字状に開き、胴部は最大径が下位にあり、外面の頸部から口縁部は粘土紐接合痕を4段残す(指頭圧痕もみられる)。	酸化鉄粒(2mm以下)多く含む。	外面は浅黄褐色と灰白色 内面は黄褐色と灰白色	普通	外面の胴部に接合痕有り。
SI-78 -2	SI78-49. 52~54	弥生土器	甕	口縁部片1/4強の残存	(21.6)				粘土紐接合痕を9段残し、内面は横方向のヘラミガキ。口唇部は指刺突による波状。	酸化鉄(3mm以下)を含む。	両面とも浅黄褐色と灰白色	良好	
SI-78 -3	SI78-64	弥生土器	鉢	体下部から口縁部片40%の残存	(16.2)				大きな碗状(半球状)の体部をもち、外面の口縁部に5~6段のS字状結節縄文を横位に施文する。	酸化鉄(3mm以下)を含む。	外面は黄褐色と橙色 内面は黄褐色と灰褐色	少し不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-78 -4	SI78-30	弥生土器	甕	胴部片1/4の残存			(19.5) 胴部中央最大径		胴部は球状にちかい。頸部が太くやや長めで、頸部下位に粘土積痕を1段残し、ヘラ状工具による刻目がなされる。外面胴下部は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラとユビによるナデ。	緻密	両面とも黄褐色と橙色	不良	両面とも少し摩耗有り。
SI-78 -5	SI76-36	弥生土器	甕	底部片1/3の残存			(6.0)		焼成後に底部を穿孔、甕に転用。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は橙色 内面は褐灰色	大変不良	
SI-78 -6	SI78-1.5 8~61	弥生土器	(壺)	胴下部60%の残存			(8.8)		少し小型で胴部はやや長胴きみ、両面ともヘラミガキ(外面は縦方向、内面は横方向)。	緻密	外面は明褐色と浅黄褐色 内面は明褐色と浅黄褐色、橙色、褐灰色	良好	
SI-79 -1	SI79-97~ 100	弥生土器	壺	胴上部から頸部1/3の残存					球状の胴部と細い頸部をもつとみられ、頸下部には接合痕を残し、段があり、ヘラによる刻目がなされる。外面胴部はナデと一部にヘラミガキ、内面はナデ(ヘラとユビ)。	白黄色粒非常に多い。	両面とも黒褐色と暗灰黄色、外面の一部は浅黄色	普通	
SI-79 -2	SI79-1. 47.56	弥生土器	鉢	底部中央欠損、全体の1/2の残存	10.8	4.9	4.2		小型で体部は下位が窪んだ後、碗状に立ち上がる。外面はユビナデ、内面はヘラミガキ。	小礫(2mm以下)多く含む。	両面とも黒色と暗褐色	良好	
SI-80 -1	SI80-14	弥生土器	甕	口縁部片					直線的に開く、口唇部は両面からの指オサエによる波状、両面とも刷毛目が残る。	緻密	外面は黒褐色 内面はにぶい黄褐色	少し不良	

第45表 竪穴住居跡出土土器観察表(26)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-80 -2	SI80-10	弥生土器	鉢	口縁部片					複合口縁と思われ、丸みをもって立ち上がり、下端は縄文原体に刻目がなされる。	黄褐色粒(2mm以下)を多く含む。	外面は橙色と明黄褐色 内面は黒褐色	普通	
SI-80 -3	SI80-5	弥生土器	(壺)	口縁部片					複合口縁と思われる。下に縄文原体による押圧がみられる。	緻密	両面とも橙色	やや不良	
SI-80 -4	SI80-26	弥生土器	壺	胴上部片					少し薄手で、櫛状工具による波状文などが横位に施文されている。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は明黄褐色、 内面は褐灰色	普通	
SI-80 -5	SI80-26	弥生土器	壺	胴上部片					S字状結節縄文2本と斜縄文の組み合わせ。	酸化鉄粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも黄褐色	少し不良	
SI-80 -6	SI80-20	弥生土器	壺	胴上部片					少し薄手で、櫛状工具による波状文などが横位に施文されている。	小礫(3mm以下)を含む。	外面は明褐色とにぶい褐色 内面は黒褐色	普通	
SI-82 -1	SI82-P-6	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文。	白色粒(1mm以下)多く含む。	外面は褐灰色 内面は灰黄褐色	普通	
SI-83 -1	SI83-65	土師器	坏	全体の60%の残存	12.5	6.8		3.8	底部は広く、器高は少し高いが体部は少し丸みをもって開く。底部は回転糸切り離し後手持ちヘラケズリ、体下部もヘラケズリがなされる。	小礫(3mm以下)極少量含む。 酸化鉄粒(2mm以下)少し目立つ。	外面は橙色、にぶい黄褐色、黄褐色、内面は橙色と褐灰色	不良	
SI-83 -2	SI83-5. 16.70	土師器	坏	全体の80%の残存	12.0	4.0		6.2	底部は広く、器高は少し高いが、体部はやや丸みをもって開く。底部から体下部はヘラケズリ。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも橙色、にぶい黄褐色と褐灰色	不良	
SI-83 -3	SI83-72	土師器	坏	全体の1/3の残存	(12.4)	(3.7)		(6.6)	底部は広く、体部は直線的に開く、底部は右回転クロコ糸切り離し。	小礫(3mm以下)極少量含む。	外面浅黄褐色、 灰黄褐色と橙色 内面はにぶい黄褐色、橙色	少し不良	
SI-83 -4	SI83-22. 23	土師器	坏	底部中央欠損、全体の1/8の残存	(11.5)	4.45		(6.0)	やや小型で器高が高い。体部は丸みをもって立ち上がる。底部切り離しは回転糸切り。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は浅黄褐色 内面は暗褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-83 -5	SI83-1.64	土師器	高台付皿	全体の70%の残存	13.9	2.6		6.4 高台口径	小型で浅く、体部に穿孔がある(3ヶ所と考えられる)。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は褐灰色 内面は褐灰色とにぶい黄褐色	不良	両面に一部煤付着。
SI-83 -6	SI83-88	灰釉陶器	高台付坏	底部から体下部1/2弱の残存				(6.2)	断面が細い長方形の高台が付く。	酸化鉄粒(2mm以下)を含む。	外面は灰色 内面は灰白色と浅黄色、一部オリープ色	良好	内面は灰釉、重ね焼き痕残る。
SI-83 -7	SI83-30. 62	土師器	坏	体上部から口縁部片1/6の残存	(11.6)	(4.4)		(6.0)	体部は少し丸みをもって開く。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黄褐色と浅黄褐色 内面は黒色	少し不良	内面は黒色処理。
SI-83 -8	SI83-13	灰釉陶器	高台付皿	口縁部片1/8の残存	(7.8)				体部は丸みをもって浅い形で立ち上がり、口縁部上位は少し水平につまみ出ししている。	白色と黒色粒(1mm以下)が若干目立つ。	外面は灰白色 内面は浅黄色、一部オリープ黄色	良好	内面は灰釉。
SI-83 -9	SI83-46	土師器	甕	胴上部から口縁部片	(20.2)				胴部最大径は上位にあると思われ、口縁部は短く外反、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデの後エビナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は暗褐色、 は暗褐色と灰黄褐色	普通	外面は胴部に擦過痕がみられる。

第46表 竪穴住居跡出土土器観察表(27)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-83 -10	SI83-68	土師器	甕	胴部から口縁部1/3弱の残存	(22.0)		19.8 胴部最大径(上位)		胴部最大径は上位、口縁部は少し短く外反。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は橙色と褐色、内面は黄褐色と橙色	不良	
SI-84 -8	SI84-77. 80.83.99	土師器	甕	胴部から口縁部片1/3の残存	(20.6)				長胴きみの甕と思われる。最大径は口径にある。胴部最大径は上位で、口縁部は短く外反する。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(4mm以下)を多く含む。	両面とも灰黄褐色、褐色と黄褐色、内面の一部橙色	不良	
SI-84 -9	SI84-11. 17.21.25. 81.100	須恵器	甕	胴部から口縁部1/2弱の残存	(28.0)				胴部はやや丸みをもって開ききみに立ち上がり、最大径は口径にある。胴上部には方形の把手が2ヶ所付き、口縁部は微厚し短い丸みをもった面をつくる。外面胴部は縦方向のタタキ目、内面は丁寧なタタキ目。	白色粒(1mm以下)極少量有り。	両面とも黄褐色と明黄褐色	普通	
SI-84A -1	SI84A- 6. 49	土師器	坏	全体の1/2弱の残存	(11.8)	4.0		7.0	胴部は広く、器高は比較的高い、体部は少し丸みをもって立ち上がる。底部から体部外面は、手持ちヘラケズリ。内面はユビナデ。いわゆる箱形の坏である。	小礫(1mm以下)比較的多く含む。	外面は橙色と褐色、内面は黄褐色と橙色	普通	
SI-84A -2	SI84A- 90 ~92	土師器	坏	口縁部が50%欠損	12.4	4.6		7.6	少しゆがんでいる。底部は広く器高も比較的高い。体部は丸みをもって立ち上がる。底部から体部の外面は手持ちヘラケズリ、いわゆる箱形の坏。	小礫(1mm以下)と酸化鉄粒(2mm以下)目立つ。	外面は黒色と褐色、内面は黄褐色と褐色	不良	全体に摩耗している。
SI-84A -3	SI84A- 54.55	土師器	坏	全体の80%の残存	13.0	3.9		7.3	底部は広く、体部立ち上がりは直線的、底部から体下部はヘラケズリ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は褐色、黄褐色と黄褐色、内面は褐色と黄褐色	少し不良	両面上部に煤付着。
SI-84A -6	SI84A-48	須恵器	坏	底部中央欠損1/8の残存	(11.6)	2.9		(8.2)	底部は広く、器高は浅い、体部はやや丸みをもって立ち上がり、口唇部付近はわずかに外反する。	緻密	両面とも灰白色	やや不良	火摺痕がみられる。
SI-84A -7	SI84A-94. 96.97	土師器	甕	全体の1/2弱の残存	(11.2)	19.1	(15.0) 胴部中位	5.2	長胴の甕で最大径は胴中位、口縁部は、短く外反し、粘土紐接合痕を2本残す。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は褐色と灰褐色、に黄褐色、内面は褐色と明赤褐色、一部浅黄褐色	少し不良	外面は少し摩耗、内面底部に煤状の炭化物付着。
SI-84B -4	SI84B-1.7	土師器	坏	底部中央を欠損	(15.8)	6.2		(7.2)	少し大型で、器高もやや高い。体部は丸みをもって開ききみに立ち上がる。口唇部付近はわずかに外反。	緻密	外面は黄褐色と黄褐色、内面は黒色	少し不良	内面は黒色処理。
SI-84B -5	SI84B-6	土師器	坏	底部片60%の残存				6.4	外面は底部から胴下位が手持ちヘラケズリ、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黒色、褐色と黄褐色、内面は褐色	普通	外面は擦過痕多い。
SI-85 -1	SI85-50	土師器	坏	全体の60%の残存	(12.8)	4.8		6.4	底部は比較的大く、わずかに上げ底きみ、体部はやや丸みをもって開く。底部切り離しは不明。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は褐色と黄褐色、内面は褐色、明褐色	不良	少し摩耗している。
SI-85 -2	SI85-39	土師器	坏	全体の1/3の残存	(13.4)	(3.95)		(7.6)	底部は広く、器高は低い、扁平な形である。立ち上がりは直線的に開く。厚手である。底部は回転ヘラ切り離し、体部は手持ちヘラケズリ。	酸化鉄粒(2mm以下)を多く含む。	両面とも黄褐色と黄褐色	不良	
SI-85 -3	SI85-1.12	土師器	坏	底部は付近60%の残存				6.2	底部は回転糸切り離し、体部はやや開ききみに立ち上がる。	酸化鉄粒(1mm以下)を少量含む。	両面とも浅黄褐色	不良	
SI-85 -4	SI85-42	土師器	坏	底部から体下部(20%の残存)の破片				6.2	やや小ぶりの坏と考えられ、底部は右回転クロ糸切り離し、体部はやや丸みをもって立ち上がる。	小礫(1mm以下)を極少量含む(酸化鉄粒も有り)。	両面とも黄褐色	不良	
SI-85 -5	SI85-5	須恵器	坏	底部付近1/8の残存				(6.2)	底部は回転糸切り離し、体部は少し丸みをもって立ち上がる。	白色粒(1mm以下)を少量含む。	両面とも灰オリープ色	普通	外面に火摺痕が残る。

第47表 竪穴住居跡出土土器観察表(28)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-85-6	SI85-53. 55.57.60.	土師器	(甕)	底部付近欠損、他は70%の残存	(23.0)		21.6 胴部最大径(上位)		胴部はやや長胴さみ、胴部最大径は上位、口縁部は短く直線的に外反。 胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色、灰褐色、黒色、にぶい黄褐色 内面は黒褐色、橙色とにぶい黄褐色	普通	外面は擦過痕が多い。 外面肩部に煤付着。 内面の下部に煤付着。
SI-85-7	SI85-18. 23.30.33. 53	土師器	甕	胴部下部(10%)から口縁部(90%)の破片	20.0		(19.2) 胴部最大径(中位)		やや長胴さみで、胴部最大径は中位、口縁部は短く外反、口唇部外面が沈線状に窪む。 胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデ後ユビナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも黒色、黒褐色、灰褐色、褐色	普通	外面は擦過痕多い。
SI-85-8	SI85-1.27 ～ 29.32. 33.52.53. 59.62	土師器	(甕)	胴下部から底部欠損、他は1/3の残存	(21.6)		(20.5) 胴部最大径(上位)		胴部は上位に最大径があり、口縁部はやや短く外反、胴部は外面上部が横方向のヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(1mm以下)少量含む。	外面は明黄褐色、黒褐色、褐灰色、にぶい黄褐色 内面はにぶい黄褐色と明黄褐色	やや不良	
SI-85-9	SI85-6	土師器	(甕)	口縁部片1/6の残存	(25.6)				少し大型で、最大径は口径である。 胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は縦方向のヘラナデの後ヘラミガキ。	緻密(酸化鉄粒2mm以下を少量含む)	外面は黄褐色と褐色 内面は橙色とにぶい褐色	やや不良	
SI-85-10	SI85-16. 51	土師器	(鉢)	体下部1/3の残存					半球状の体部と考えられ、上部はやや内傾する。外面は横方向のヘラケズリ、内面は回転具によるユビナデ。	酸化鉄粒(5mm以下)を極少量含む。	外面は橙色と赤灰色 内面は橙色と褐灰色	不良	
SI-85-11	SI85-4	須恵器	甕	胴部片					外面は平行タタキ目、内面は同心円文(青海波文)のアテ目。	白色～白黄色粒(1mm以下)を少量含む。	外面灰色、内面灰オリーブ色	良好	
SI-86-1	SI86-22	土師器	坏	口唇部が20%欠損	13.0	4.4		6.7	体部は丸みをもって立ち上がり、口唇部はわずかに外反する。底部から体下部は手持ちヘラケズリ。	酸化鉄粒(2mm以下)を少量含む。	外面は黄褐色、褐色と褐灰色 内面は明黄褐色	普通	
SI-86-2	SI86-21	土師器	坏	口縁部が10%欠損	13.0	3.7		7.0	底部は広く、体部はわずかに丸みをもって開く。 また底部から体下部はヘラケズリ。	酸化鉄粒(2mm以下)を少量含む。	外面はにぶい褐色、明赤褐色と黄褐色 内面は褐色と明赤褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-86-3	SI86-7.17	土師器	坏	体部から口縁部片1/4弱の残存	(17.2)	(4.9)			薄手で少し大型の坏。体部はやや丸みをもって大きく開く。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は黄褐色	不良	
SI-86-4	SI86-8	須恵器	坏	底部中央付近欠損1/4弱の残存	(14.0)	(3.6)		(4.2)	底部は広く、体部は直線的に開き、やや浅い。また底部切り離しは回転糸切り。	酸化鉄粒を少量含む。	外面は黒褐色、灰黄色、浅黄色、オリーブ褐色 内面はにぶい黄色と黒褐色	少し不良	内面に火押痕が残る。
SI-86-5	SI86-27～ 33.35～ 38.40	土師器	甕	胴部から(30%欠損)口縁部片	22.1		(21.7) 胴部最大径(上位)		胴部最大径は上位で、口縁部はやや丸みをもって短く外反。胴部外面は上部が縦方向、下部が斜め方向のヘラケズリ、内面は横と斜め方向のヘラナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は黒褐色、褐色、灰褐色、にぶい赤褐色 内面は褐色、一部に黒色、にぶい褐色	普通	
SI-86-6	SI86-3.5. 18.24～26	土師器	甕	胴部から口縁部片1/3の残存	(21.6)		20.1 胴部最大径(上位)		胴部最大径は上位で、口縁部は短く外反。胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(1mm以下)少量含む。	外面は褐色、褐灰色と黒褐色 内面は褐色と黒褐色	普通	
SI-87-1	SI87-1.71	土師器	坏	全体の1/8の残存	(12.0)	(4.4)		(5.6)	底部はややせまく、器高はやや高い。体部は少し丸みをもって開く、底部は手持ちヘラケズリ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい黄褐色	不良	両面とも摩耗している。
SI-87-2	SI87-31	土師器	坏	全体の60%の残存	12.4	3.7		7.5	底部は広く厚手、体部は直線的に開く、また底部は回転糸切り離した後、手持ちヘラケズリ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黒色、褐色と黄褐色 内面は灰黄褐色、黄褐色とにぶい黄褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-87-3	SI87-46. 51	土師器	甕	胴上部から口縁部片1/6の残存	(21.2)		(20.8) 胴部最大径(上位)		胴部最大径は上位で、口縁部はやや長く外反、口唇部外面に沈線状の窪みがある。口縁部両面に粘土紐接合痕が1～2本わずかに残る。 胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面は(ヘラナデ)の後ユビナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は褐色と黒褐色 内面は明褐色とにぶい褐色	やや不良	外面肩部に煤付着。 内面は剝離が多い。

第48表 竪穴住居跡出土土器観察表(29)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-87 -4	SI87-1. 30.49	土師器	甕	胴下部から 口縁部片1/8 の残存	(20.4)		(20.3) 胴部最 大(上位)		胴部最大径(上位)と口 径が同じ大きさで、口縁部 はやや長く外反し、粘土紐 接合痕を2本残している。 胴部は外面が縦方向のヘ ラケズリ、内面は横方向の ヘラナデの後ユビナデ。	小礫(1mm以 下)を含む。	外面は褐色と黒 褐色 内面は明褐色と 灰褐色	少し不良	
SI-87 -5	SI87-26	須恵器	甕	胴上部片1/4 の残存			(30.5) 胴部最 大(上位)		やや肩をもった甕で最大 径も胴上位にある。外面は 平行タタキ目、内面は指オ サエ痕が残る。	小礫(2mm以 下)を多く含 む。	外面は灰色と灰 オリーブ色 内面はオリーブ 黄色	良好	
SI-89 -1	SI89-3	土師器	(鉢)	底部から体 下部片1/4弱 の残存				(8.5)	やや大きめで、底部は回 転糸切り雕し、体部両面は 回転具(ロクロ)によるユ ビナデ。	小礫(2mm以 下)を多く含 む。	外面は明赤褐色、 褐色と褐灰色 内面は褐灰色と にぶい褐色	不良	両面とも摩 耗が多い。
SI-90 -1	SI90-5.6	弥生土器	壺	胴部片1/4弱 の残存			(24.1) 胴部最 大(下位)		胴下部が最も張り出す形 で胴上部には斜縄文が沈線 で区画され山形文を構成す る。	小礫(1mm強 以下)を含む。 特に白黄色 粒を極めて 多く含む。	外面は黄褐色と 褐色 内面はオリーブ 褐色	大変不良	外面の無文 部は赤彩と 考えられる。 かなり両面 とも摩耗し ている。
SI-91 -1	SI91-26	土師器	坏	底部中央を 欠損1/4弱の 残存	(15.8)	(4.4)		(8.4)	底部は広く、器高は低い。 体部はやや丸みをもって開 いて立ち上がる。底部から 体下部は手持ちヘラケズリ。	酸化鉄(3mm 以下)を多く 含む。	両面とも黄褐色、 褐色と明黄褐色	少し不良	
SI-91 -2	SI91-4.5	土師器	坏	体上部から 口縁部片1/4 弱の残存	(13.6)				体部は丸みを帯び碗状に 立ち上がる。	緻密	外面は明黄褐色 とにぶい黄褐色 内面は褐色とに ぶい黄褐色	やや不良	
SI-91 -3	SI91-7	土師器	坏	体上部から 口縁部片1/6 の残存	(12.6)				小ぶりの坏で体部はやや 丸みをもって大きく開く。	酸化鉄(2mm 以下)を少量 含む。	両面とも褐色と にぶい黄褐色	やや不良	
SI-91 -4	SI91-11	灰釉陶器	高台付 坏	底部片				6.7 高台口 径	高台は断面がやや長い台 形で、しっかりしている。	緻密	両面とも灰白色 と淡黄色	良好	
SI-91 -5	SI91-9	土師器	高台付 坏	底部片60% の残存				(6.0) 高台口 径	高台は断面三角形で小さ い。内面はヘラミガキで植 物の枝と葉の様な意匠文を 暗文として描く。	緻密	外面は褐灰色と 明黄褐色 内面は黒色	やや不良	内面黒色処 理。
SI-91 -6	SI91-12. 17.31.39. 40	土師器	甕	胴部から口 縁部片1/4の 残存	(21.8)		(20.2) 胴部最 大径(上 位)		胴部最大径は上位にあり、 口縁部は短く外反。外面口 縁上部に粘土紐接合痕をわ ずかに残す。 胴部外面は縦方向のヘラ ケズリ、内面はヘラナデの 後ユビナデ。	小礫(1mm大 以下)を含む。	外面は明褐色、 褐色とにぶい黄 褐色 内面は黄褐色、 にぶい褐色と褐 灰色	普通	外面胴部に 煤とカマド 粘土附着。
SI-91 -7	SI91-30	土師器	甕	胴部から口 縁部片1/4の 残存	(21.0)		(19.6) 胴部最 大径(上 位)		胴部最大径は上位にあり、 口縁部は短く外反。胴部外 面は縦方向と横方向(下部) のヘラケズリ、内面はヘラ ナデの後ユビナデ。	小礫(1mm以 下)を含む。	両面とも明黄褐 色と褐色、内面 の一部はにぶい 黄褐色	良好	外面は擦過 痕が多い。
SI-91 -8	SI91-13. 27.31.34. 47	土師器	甕	底部から胴 下部1/2弱の 残存				(6.4)	長胴の甕と思われる。 胴下部は横方向のヘラケ ズリ、内面はヘラナデの後 ユビナデ。	緻密	両面とも黄褐色 とにぶい黄褐色、 外面の一部は橙 色	不良	両面とも摩 耗多い。
SI-93 -1	SI93-17	弥生土器	壺	口縁部片					短い複合口縁をもち、上 端部は刻目、口唇部は斜縄 文(LR)がなされる。	小礫(2mm以 下)を多く含 む。特に白 色粒が多い。	両面ともにぶい 黄褐色	不良	
SI-93 -2	SI93-2	弥生土器	甕	胴上部片					胴部最大径は上部にあり、 粘土紐接合痕を残し、端部 に縄文原体による刻目がな される。	小礫(1mm以 下)を含む。	外面は褐灰色と にぶい黄褐色 内面は浅黄褐色	普通	
SI-93 -3	SI93-24	弥生土器	(壺)	胴上部片					斜縄文が2段横位に認めら れる。	小礫(3mm以 下)を少量含 む。	外面は褐色 内面は明褐色と 褐灰色	普通	

第49表 竪穴住居跡出土土器観察表 (30)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-93-4	SI93-19	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を沈線で区画している。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は橙色 内面は灰褐色	普通	
SI-93-5	SI93-30.41	弥生土器	壺	底部片1/2の残存				(4.6)	細く、上げ底の底部で、外面は縦方向のヘラミガキ、内面はユビナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい黄橙色	良好	
SI-94-1	SI94-1	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は刻目、外面は横方向のエビナデ、内面は横方向の刷毛目。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面とも明赤褐色	普通	
SI-95-1	SI95-2.14.15	土師器	坏	全体の1/2強の残存	11.0	4.0		5.6	やや小ぶりの坏で底部から体下部は手持ちヘラケズリ。体部はわずかに丸みをもって開きぎみに立ち上がる。	緻密	外面は明黄褐色 内面はぶい黄褐色	やや不良	
SI-95-2	SI95-12	土師器	坏	口縁部は40%欠損	13.0	4.7		6.6	底部から体下部は手持ちヘラケズリ、また体部は丸みをもって開きぎみに立ち上がる。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は明黄褐色 とぶい黄褐色 内面はぶい黄褐色、一部橙色	やや不良	
SI-95-3	SI95-5.7	土師器	甕	口縁部片	(12.2)			(6.2)	胴部最大径は上位で、口縁部は短く外反。胴上部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデの後ユビナデ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	両面とも浅黄褐色と黒褐色、外面の一部はぶい橙色、内面の一部は褐色	良好	煤付着。
SI-95-4	SI95-1.3.13	須恵器	甕	底部から胴下部片、底部は90%欠損				(15.4)	底部は広く、胴下部の立ち上がりは急傾斜である。外面は平行タタキ、下部は横方向のヘラケズリ。	酸化鉄(4mm以下)を極少量、白色粒(2mm以下)を含む。	外面は黒褐色、黄灰色、浅黄褐色 内面はぶい黄褐色と淡黄色	やや不良	いわゆる土師質須恵器。内面は剝離が多い。
SI-97-1	SI97-1.5.19	弥生土器	鉢	体部から口縁部片1/4の残存	(20.6)				少し大型で体部は丸みをもって開き、口縁部は複合口縁で丸みをもって直立する。複合部は斜縄文(LR)、下端部は刻目。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は橙色とぶい橙色 内面は明赤褐色とぶい黄褐色	不良	両面とも赤彩とみられる。
SI-97-2	SI97-1.16	弥生土器	甕	底部から胴部片1/2の残存			14.9 胴部最大径(下位)	6.6	少し小型で胴部はやや細長く、胴部最大径は下位にある。外面胴下半部は横方向のヘラミガキ、内面はナデ。	緻密	外面は橙色、褐灰色、浅黄褐色 内面は黒褐色と褐色	普通	
SI-97-3	SI97-6.7.10.18	弥生土器	壺	頸部片1/2の残存					細い頸部で、S字状結節縄文に上下を挟まれた羽状縄文(斜縄文3段)が施される。	小礫(1mm以下)をやや多く含む。	外面は灰褐色と褐色 内面はぶい褐色	少し不良	
SI-97-4	SI97-15	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は指による押圧波状、口縁部両面はユビヨコナデ。	酸化鉄粒と橙色粒(2mm以下)を非常に多く含む。	外面はぶい褐色とぶい橙色 内面は褐灰色とぶい褐色	普通	
SI-98-1	SI98-40	弥生土器	壺	口縁部片					やや丸みをもって立ち上がり、上部は短い複合口縁となる。外面は斜縄文が施され、下部よりLR、RL、RL(口唇部)、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも浅黄褐色とぶい黄褐色、内面の一部は赤褐色	普通	内面は赤彩。
SI-98-2	SI98-6	弥生土器	甕	頸部片					粘土紐接合痕が3段みられ、最下端は刻目がなされる。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも黄褐色	良好	
SI-98-3	SI98-43	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文を沈線で区画している。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は灰黄褐色、一部暗赤褐色 内面は赤褐色	普通	外面の無文部と内面は赤彩。
SI-99-1	SI99-1	弥生土器	壺	口縁部片					短い隆帯を縦に貼り付けた複合口縁で上段端部に刻目がなされる。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも橙色、内面の一部はぶい褐色	少し不良	
SI-99-2	SI99-33	弥生土器	鉢	体上部片					羽状縄文を沈線で区画。	緻密	両面とも褐色	普通	
SI-99-3	SI99-60	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文をやや細い沈線で区画している。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は褐色と褐灰色 内面は灰褐色とぶい赤褐色	普通	
SI-99-4	SI99-54	弥生土器	壺	胴上部片					やや不明瞭であるが、S字状結節縄文を5段以上横位に配している。	小礫(2mm以下)を多く含む。特に橙色粒が多い。	外面は黒色と褐灰色 内面は褐色	少し不良	
SI-100-1	SI100-1	弥生土器	高坏	脚上部付近1/2弱の残存					脚部と坏部の接合部に刻目を施した突帯を周らしている。	黄橙色粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも明褐色と褐色	普通	
SI-100-2	SI100-36	弥生土器	(鉢)	体上部片					斜縄文を沈線で区画。	緻密	両面とも褐色	やや不良	

第50表 竪穴住居跡出土土器観察表(31)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-102 -1	SI102-1	須恵器	甕	胴上部片					外面は平行タタキ目、内面はユビナデ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	両面とも褐灰色	良好	
SI-103 -1	SI103-12.15.16	土師器	坏	全体の50%の残存	(11.2)	(3.6)		(4.4)	底部は少し小さい。また右回転ロクロ糸切り離し。体部は少し丸みをもって開く。	緻密	両面とも橙色、内面の一部はにぶい橙色	不良	
SI-103 -2	SI103-1.19.20.23	土師器	坏	全体の70%の残存	12.1	3.8		5.3	底部は右回転のロクロ糸切り離し、体部は丸みをもって開く。	小礫(1mm以下)を極少量含む。	両面とも褐灰色と橙色	やや不良	
SI-103 -3	SI103-21	土師器	高台付坏	高台部5%欠損、体部40%欠損、口縁部80%欠損	(13.4)	5.1		6.1 高台径	少し高く断面三角形の高台を付け、体部は丸みをもって大きく開く、内面は丁寧なヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を極少量含む、白色粒(1mm以下)が目立つ。	外面はにぶい褐色、黒色と明褐色、内面は黒色、明赤褐色、明黄褐色	良好	
SI-103 -4	SI103-9 ~ 11. 25. 26	土師器	坏	底部欠損、他は90%の残存	11.8				体部は丸みをもって開く。	小礫(1mm以下)を含む。特に白色粒が目立つ。	外面は黒褐色とにぶい黄褐色、内面は黒褐色と褐色、灰黄褐色	やや不良	
SI-103 -5	SI103-1.12~14.22	土師器	足高 高台付坏	脚部(50%)から坏下部(80%)残存				9.8 脚 裾 部 口径	薄手で、脚裾部はやや開き、脚体部はややふくらみをもって立ち上がり、坏部は大きく開く。 すべてロクロによるユビナデ。	小礫(3mm以下)を多く含む、特に酸化鉄粒が目立つ。	外面はにぶい黄褐色、橙色と灰褐色、内面は褐色とにぶい褐色、脚内面は褐色とにぶい黄褐色	普通	
SI-103 -6	SI103-29	土師器	甕	口縁部片1/8の残存	(12.2)				口縁部は小さく直線的に外反する。 胴上部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はユビナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は黒色と黒褐色、内面は灰黄褐色と褐色	良好	外面に煤付着、また、擦過痕も多い。
SI-104 -2	SI104-34	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部はユビによる押圧波状となる。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は灰褐色、内面は褐色と褐色	普通	
SI-104 -3	SI104-1	弥生土器	甕	胴上部から頸部片					頸部に粘土紐接合痕が3段残る。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色、内面は明黄褐色	良好	
SI-104 -4	SI104-46	弥生土器	甕	胴部片					外面に細い刷毛目がなされる。	緻密	外面は褐色、内面はにぶい黄褐色	少し不良	
SI-104 -5	SI104-20	弥生土器	甕	胴上部片					細い刷毛目の後、3本単位の櫛描き文がみられる。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも褐色	やや不良	
SI-104 -6	SI104-1	弥生土器	壺	底部片1/3の残存				(8.0)	厚手の底部で立ち上がりは細い、外面は縦方向のヘラナデ、内面はナデ。	小礫(3mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい黄褐色、外面の一部は灰黄褐色	少し不良	
SI-105AB -1	SI105AB-13. 15 ~ 17.27.30.31.33.37	弥生土器	壺	胴下部から頸部 70% の残存			24.8 胴 部 最 大 径 (中位)		球状の胴部をもち、頸部は長く細く立ち上がる。肩部から頸部にかけて、横位の沈線で上下を区画された羽状縄文が、無文部を挟んで2段認められる。無文部は横方向のヘラミガキ。	黄褐色粒(2mm以下)を多く含む。	外面は灰色、明黄褐色、黒褐色、にぶい赤褐色、内面は黄褐色	少し不良	外面の無文部は赤彩。
SI-106 -1	SI106-1.71.72.109	弥生土器	甕	底部を欠損他は1/3の残存	(15.0)		(13.4) 胴 部 最 大 径 (上位)		少し小型の甕で胴部は球状だが最大径は上位。頸部から口縁部は外反、肩部に粘土紐接合痕を1段残す。 外面はヘラナデ、一部ヘラミガキ。 内面は胴部がヘラミガキ、頸部の一部は刷毛目がなされる。	明黄褐色粒(2mm以下)を少量含む。	外面は黄褐色と明褐色、内面はにぶい黄褐色、明褐色、にぶい褐色	良好	
SI-106 -2	SI106-4	弥生土器	甕	口縁部片1/6の残存	(25.8)				粘土紐接合痕を7段以上残す。 口唇部は両面からの指頭押圧による波状。 両面ともユビナデ。	小礫(3mm以下)を含む。	外面は黄褐色、にぶい黄褐色と明褐色、内面は明黄褐色と明褐色	良好	

第51表 竪穴住居跡出土土器観察表(32)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-106 -3	SI106- 46.49.51	弥生土器	鉢	体部から口 縁部片1/4の 残存	(21.4)				やや浅い碗状の体部を持ち、口縁部は羽状縄文をS字状結節縄文で横位に区画する。	白黄色粒(3mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色と黄褐色、内面は明赤褐色と黒褐色	少し不良	両面とも赤彩、内面は少し剥離有り。
SI-106 -4	SI106-5	弥生土器	壺	底部から胴中央60%の残存			26.0 胴部最大径 (下位)	9.4	胴部は大きく張り、胴部最大径は上位にある。外面は横方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は黄褐色、明黄褐色と浅黄色、内面は明黄褐色	不良	両面とも摩耗が多い。外面は赤彩。
SI-106 -5	SI106-103	弥生土器	壺	底部から胴下部片				7.6	胴部は球状に大きく張り出すと考えられる。胴下部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向の丁寧なヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	両面とも明黄褐色と灰黄褐色	良好	
SI-106 -6	SI106-84	弥生土器	(甕)	底部片70%の残存				6.8	両面ともヘラナデ痕が残る。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は橙色と褐灰色、内面はにぶい黄褐色と褐灰色	普通	
SI-106 -7	SI106-123	弥生土器	甕	底部90%残存				5.4	両面ともナデ。	緻密	両面ともにぶい黄褐色、内面の一部は黒色	少し不良	内面に炭化物(コケカ)が付着。
SI-106 -8	SI106-67	弥生土器	壺	底部片1/3の残存				(4.2)	内面はヘラナデ痕が残る。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は褐灰色、内面はにぶい黄褐色	少し不良	両面とも少し摩耗する。
SI-106 -9	SI106-64	弥生土器	高坏	坏部と脚部の接合部分90%の残存					両面ともヘラミガキ、脚部内面はナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は明黄褐色とにぶい黄褐色、内面は浅黄褐色とにぶい赤褐色、脚内面は浅黄褐色	普通	脚内部を除き赤彩される。
SI-106 -10	SI106-95	弥生土器	壺	口縁部片					棒状浮文を貼付、内面には粘土紐接合痕を残し段をつける。	小礫(2mm以下)を少量含む。	両面とも明黄褐色	普通	
SI-106 -11	SI106-107	弥生土器	甕	口縁部片					複合口縁で、複合部は2段で厚い。上段の下部部に刻目がなされる。	黄褐色粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも褐色	良好	
SI-106 -12	SI106-85	弥生土器	壺	胴上部片					沈線で区画された斜縄文。	小礫(2mm以下)を非常に多く含む。	外面は褐灰色と赤褐色、内面は灰黄褐色	良好	無文部は赤彩。
SI-107 -1	SI107- 3.15.28	弥生土器	甕	胴上部片					肩部付近の破片で粘土紐接合痕の段部に縄文原体により押捺が施される。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は橙色とにぶい褐色、内面はにぶい褐色と明赤褐色	良好	
SI-107 -2	SI107-26	弥生土器	甕	胴上部片					胴部はかなり張っていると考えられる。上位に粘土紐接合痕の段部を縄文原体による押捺が施される。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は黒色、内面は灰黄褐色	普通	外面は煤付着。
SI-108 -1	SI108- 20.22.23	弥生土器	甕	全体の60%残存	24.2	23.8	24.7 胴部最大径 (中位)	(7.0)	胴部は球状、最大径は中央にある。頸部は太くやや長い。口縁部は外反、口唇部は指押圧による波状。外面は荒いヘラナデ、一部はヘラミガキ、内面はナデ。	黄褐色粒(3mm以下)を多く含む。	外面は明黄褐色と黒褐色、内面は明黄褐色と灰黄褐色と灰色	少し不良	両面とも摩耗有り、特に内面は多い。
SI-108 -2	SI108- 1. 15.16	弥生土器	甕	底部付近欠損、他は60%の残存	16.0		14.6 胴部最大径 (上位)		やや小型で胴部は半球状、頸部をもち、口縁部は小さく外反する。やや厚手、口唇部は両面からの指押圧による波状。外面はヘラナデの後ユビナデ、内面はヘラナデ。	緻密	外面は暗褐色と黒色、にぶい黄褐色、内面は暗褐色と明黄褐色	やや不良	外面胴上部に煤付着。
SI-108 -3	SI108-19. 23	弥生土器	鉢	体部から口縁部片1/4の残存	(14.8)		(16.1) 体最大径 (上位)		やや浅いが体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は少し内傾きみとなる。口縁部外面は単節縄文原体を本ずつ押し付けて、間隔をあげた斜行と横位の交差する縄文を施す。	緻密	外面は橙色と赤褐色、内面は明黄褐色と赤褐色	少し不良	外面の体部と内面は赤彩。

第52表 竪穴住居跡出土土器観察表(33)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-108-4	SI108-24.25	弥生土器	甕	口縁部片1/3強の残存	(24.4)				やや大型で頸部は比較的長い。口唇部は指による押圧で波状。外面はヘラナデの後ユビナデ、内面はヘラナデの後ヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。特に黄橙色粒が目立つ。	外面は明赤褐色、黒色とにぶい黄褐色 内面は黄褐色と褐色	やや不良	
SI-108-5	SI108-15.16.20	弥生土器	壺	口縁部片1/2弱の残存	(17.0)	(4.5)			頸部は細く長い。口縁部は厚く短い複合部が付き、下端は縄文原体による刻目、上部は斜縄文(RL)がなされる。他は両面ともヘラミガキ。	緻密	外面はにぶい黄褐色と浅黄褐色 内面は淡黄色と浅黄色	少し不良	両面とも赤彩。
SI-108-6	SI108-24.25	弥生土器	甕	胴部片60%の残存			16.8 胴部最大(中位)		やや小型で胴部は球状、頸部は少し長いと考えられる。肩部に粘土紐接合痕を1段残す。両面ともナデ。	緻密	外面は明黄褐色と黒色とにぶい黄褐色 内面は黄褐色と褐色	やや不良	
SI-108-7	SI108-15.16	弥生土器	台付甕	脚下部片				7.4 脚部裾部口径	ハの字状に開く脚で、内面には粘土紐接合痕を2段残す。両面とも指ナデ。	緻密	外面は明黄褐色、黒褐色、褐色 内面は褐色と黄褐色	少し不良	
SI-108-8	SI108-4.16	弥生土器	壺	底部から胴下部片60%の残存				6.6	少し小型で胴部は球状と考えられる。胴下位には斜縄文とS字状結節縄文、さらに下位は縦方向のヘラミガキ、内面も横方向のヘラミガキがなされる。	緻密	外面は暗赤褐色と黒色と褐色 内面は赤褐色と褐色	やや不良	両面とも赤彩。
SI-109-1	SI109-3	弥生土器	甕	胴部片(下位?)					両面ともユビナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は灰黄褐色とにぶい黄褐色 内面は明黄褐色	普通	
SI-109-2	SI109-1	弥生土器	壺(頸部片)						斜縄文が施されている。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色と褐灰色 内面はにぶい黄褐色	不良	
SI-110-1	SI110-30	土師器	坏	口縁部片1/2の残存					直線的に開く体部をもち、内面は横方向を主とするヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい赤褐色 内面は赤褐色	少し不良	
SI-110-2	SI110-26	土師器	甕(甑)	胴上部から口縁部片1/8の残存	(22.6)				胴部はわずかに丸みをもった直線的に立ち上がり、口縁部はわずかに外反、口唇部外縁は、わずかに窪んで面をつくる。口縁部は横ユビナデ、胴部は外面が縦方向のヘラケズリ、内面はユビコナデ。	小礫(1mm以下)を極少量含む。	両面とも明赤褐色	やや不良	内面は剥離が多い。
SI-110-3	SI110-12.19	土師器	甑	胴上部から口縁部片1/8の残存	(24.4)				胴部はわずかに丸みをもった直線的に開くと考えられ、口縁部はわずかに外反。少し厚手である。両面ともユビナデ調整。	小礫(1mm以下)を極少量含む。	外面は黒色、褐色、褐灰色 内面は黒色、灰黄褐色、明赤褐色	良好	
SI-110-4	SI110-39	土師器	(甑)	口縁部片					胴部は丸みをもった鉢形で、口縁部はわずかに外反。少し厚手。両面ともユビナデ。	小礫(3mm以下)を少量含む。	両面とも黒褐色、褐灰色、褐色	普通	
SI-111-1	SI111-1	土師器	(壺)	口縁部片1/8の残存	(18.0)				直線的に開く、両面ともナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも黄褐色、内面の一部は褐灰色	普通	外面は赤彩。
SI-111-2	SI111-1	土師器	(壺)	底部片1/6の残存				(11.0)	大型で球状の胴部をもつ壺と考えられる。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は黄褐色 内面はにぶい褐色と褐色	少し不良	
SI-114-1	SI114-1.14.16.18.22	弥生土器	壺	全体の1/2弱の残存	(12.6)	(25.8)	(17.6) 胴部最大径(下位)	(5.0)	最大径を胴下位にもち、全体に細長い。頸部は細く、口縁部は単純口縁で長く外反する。頸部中位から口縁部は横位の沈線で区画された羽状縄文3段が施文され、口唇部も斜縄文(RL)がみられる。	黄褐色粒(3mm以下)を非常に多く含む。	外面は明赤褐色、黒色と褐色 内面は明赤褐色、にぶい褐色、黒褐色	不良	外面の胴部は赤彩、両面とも摩耗が多い。
SI-114-2	SI114-9.19	弥生土器	壺	底部から胴下部80%の残存				8.2	やや大型で球状の胴部をもつと考えられる。	黄褐色粒(1mm以下)を多く含む。	外面は黄褐色と明褐色、一部赤色 内面は黄褐色	少し不良	外面赤彩。

第53表 竪穴住居跡出土土器観察表(34)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-114-3	SI114-6, 11	弥生土器	甕	底部から胴下部80%の残存				5.6	底部はやや狭く、胴下部は直線的に開く。両面ともナデ調整。	小礫(4mm以下)を多く含む。	両面とも橙色と浅黄褐色、黒褐色	普通	
SI-114-4	SI114-1	弥生土器	ミニチュア土器	脚部から体下部60%の残存				3.4 脚部口径	台付甕を模しており両面とも指によるナデが明確に残る。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも明黄褐色、脚部内面は灰褐色	普通	
SI-114-5	SI114-24	弥生土器	ミニチュア土器	底部片				3.4	鉢形土器を模したと考えられる。かなり厚手、外面の一部はヘラミガキ。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	両面とも明褐色	良好	
SI-115A-1	SI115A-143	土師器	甕	口縁部片					くの字状の口縁、両面とも刷毛目調整。内面の一部はヘラナデ。	小礫(2mm以下)を少量含む、特に橙色粒が目立つ。	外面は赤黒色と暗赤灰色、内面は黄褐色	良好	
SI-115A-2	SI115A-1	弥生土器	甕	口縁部片					両面ともヘラによる横方向のナデ、口唇部は両面からの縄文原体による押捺。	酸化鉄(2mm以下)を含む。	外面は灰黄褐色とにぶい黄褐色、内面は淡黄色と浅黄色	普通	
SI-115A-3	SI115A-82	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部はヘラ状工具による刻目。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は橙色と灰褐色、内面は橙色と明黄褐色	やや不良	
SI-115A-4	SI115A-1	弥生土器	壺	口縁部片					直立する複合口縁で、下半部は2段にわたりヘラによる刻目、上半部は羽状縄文、口唇部は斜縄文(LR)、また、ヘラによる刻目のある棒状浮文を一部に貼り付けている。内面は横方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む、特に橙色粒が目立つ。	外面は明黄褐色、内面は灰黄褐色	普通	内面は少し剥離がある。
SI-115A-5	SI115A-11, 118	弥生土器	壺	胴上部片					細い槽位の沈線で区画された羽状縄文。外面の無文部は横方向のヘラミガキ、内面はユビナデ。	黄褐色粒(2mm以下)を多く含む。	両面とも浅黄褐色と、外面の一部は明赤褐色	少し不良	外面の無文部は赤彩。
SI-115A-6	SI115A-154	弥生土器	壺	胴上部片					下部より、羽状縄文と一部に6本単位の縦位櫛描き文、横位のS字状結節縄文、赤彩の無文部に少し太めの4本単位の縦位櫛描き文、S字状結節縄文と斜縄文、及びその上に斜行する2本のヘラ描き沈線文が各々施されている。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黄褐色とにぶい黄褐色と暗赤褐色、内面は橙色と浅黄褐色	普通	無文部は赤彩。
SI-115A-7	SI115A-77	弥生土器	壺	胴上部片					下位より横位のS字状結節縄文を3本、羽状縄文(RL, LR)が認められる。内面はユビナデ調整で粘土紐接合痕が残る。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色と浅黄褐色と、一部赤色、内面は浅黄褐色	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-115A-8	SI115A-71, 89	弥生土器	甕	底部から胴下位片60%の残存				7.2	両面ともナデ。	緻密	両面ともにぶい黄褐色と黄褐色、内面の一部は褐灰色	少し不良	
SI-115A-9	SI115A-181	弥生土器	(壺)	底部から胴下位片1/5の残存				(6.7)	やや薄手、外面は縦方向のヘラミガキ、内面はユビナデ。焼成後の穿孔が胴下位より1ヶ所開けられている。	橙色粒(2mm以下)を多く含む。	両面とも明黄褐色、外面の一部は橙色	やや不良	
SI-115A-10	SI115A-132	弥生土器	壺	底部から胴下位片1/6の残存				(8.0)	少し厚手、外面はヘラナデとヘラミガキ、内面はユビナデ。	黄褐色粒(1mm大以下)を少量含む。	両面とも浅黄褐色と、外面の一部は赤色	少し不良	外面は赤彩。
SI-115B-11	SI115B-334	弥生土器	鉢	体上部から口縁部片40%の残存	(20.2)				体部は碗状に立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。外面はS字状結節縄文を3段と羽状縄文(斜縄文3段)、口唇部は斜縄文(LR)を各々施す。	緻密	両面とも暗赤色、外面の一部は浅黄色	少し不良	外面の無文部と内面は赤彩、少し両面とも摩耗している。

第54表 竪穴住居跡出土土器観察表(35)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-115B-12	SI115B-466~468, 457, 470, 471, 477, 480, 482	弥生土器	鉢	全体の3/4の残存	23.5	7.3		6.7	大型でやや浅い形体である。体部は丸みを持って開いて立ち上がり、口縁上部はほぼ直立する。口縁部は横位の沈線で区画された羽状縄文(下位よりRL, LR, RL, LR)、口唇部はRLの斜縄文が各々施文される。	緻密	外面は浅黄橙色と暗赤褐色 内面も暗赤褐色	少し不良	外面の無文部と内面は赤彩される。両面とも少し摩耗している。
SI-115B-13	SI115B-162, 165, 220	弥生土器	壺	胴部片1/8の残存			(26.5) 胴部最大径		大きく張り出す胴部を持ち、最大径は下位にあると考えられる。羽状縄文が沈線で区画され山形文を作る。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は暗赤褐色と褐色 内面は橙色と黄褐色	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-115B-14	SI115B-179	弥生土器	甕	口縁部片					粘土紐接合痕を5段残す。口唇部は刻目。	酸化鉄(2mm以下)を含む。	外面は黒褐色と浅黄褐色 内面は浅黄褐色と褐灰色	普通	外面一部煤付着。
SI-115B-15	SI115B-279	弥生土器	鉢	体上部から口縁部片					体部は碗状に立ち上がり、口縁部は丸みをもって内傾する。外面はS字状結節縄文8段、口唇部も施文されている。	緻密	両面とも褐色、内面の一部はにぶい褐色	普通	
SI-115B-16	SI115B-333	弥生土器	壺	口縁部片					細い口縁部で口唇部は外面より縄文原体による刻目、両面ともナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも褐色と浅黄褐色	普通	
SI-115B-17	SI115B-536	弥生土器	(壺)	底部片				7.7	外面はヘラミガキ、内面はナデ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	両面とも浅黄褐色	普通	
SI-115B-18	SI115B-442~424, 432, 443, 448, 452~455, 458, 461, 465, 473, 474	弥生土器	(壺)	底部から胴下部80%の残存				6.1	胴部は球状と考えられ、両面とも胴下位はヘラミガキ、やや上部はヘラナデ。	緻密	両面とも暗褐色と黄褐色	良好	
SI-115B-19	SI115B-339	弥生土器	壺	底部から胴下部80%の残存				7.4	胴部は大きく張り出す。外面胴下部の一部は横方向のヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は浅黄褐色と暗赤褐色 内面は黄褐色	少し不良	外面は赤彩
SI-116-1	SI116-22, 40, 110	弥生土器	甕	頸部から口縁部片1/4強の残存	(22.0)				頸部は少し長く、口縁部は粘土紐接合痕を1段残し、複合口縁となり外反する。口唇部は指押圧による波状。両面ともナデ調整。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色とにぶい黄褐色 内面は明黄褐色、にぶい黄褐色と褐灰色	良好	
SI-116-2	SI116-1	弥生土器	甕	口縁部片1/3弱の残存					粘土紐接合痕を6本残す。口唇部は押圧波状、外面は指頭ナデ、内面もユビナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面とも明黄褐色とにぶい黄褐色	少し不良	
SI-116-3	SI116-1, 12	弥生土器	壺	口縁部片1/4弱の残存	(11.4)				細い頸部で口縁上部は短く厚い粘土を貼付けて複合口縁となる。上部は斜縄文(RL)が施文される。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	両面とも浅黄褐色とにぶい褐色	不良	両面とも赤彩され、少し摩耗している。
SI-116-4	SI116-1, 145	弥生土器	鉢	底部から体下部1/3強の残存				(6.4)	体部はやや丸みをもって開きぎみに立ち上がる。両面ともヘラミガキ。	小礫(3mm大以下)を含む。	外面は暗赤褐色とにぶい黄褐色 内面は暗赤褐色と浅黄褐色	普通	両面とも赤彩、少し摩耗がある。
SI-116-5	SI116-60	弥生土器	鉢	底部から体下部1/3の残存				(6.8)	体部は少し開いて立ち上がる。両面ともヘラミガキがなされる。少し厚手である。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい赤褐色、外面の一部はにぶい黄褐色	良好	両面とも赤彩。
SI-116-6	SI116-101	弥生土器	壺	底部から胴下位片1/2弱の残存				(5.8)	少し小型で胴部は直線的に開く。外面はヘラミガキ、内面はナデ。	小礫(2mm大以下)を多く含む。また、白色粒も目立つ。	外面は黒褐色とにぶい赤褐色、褐色 内面は明黄褐色	普通	外面は赤彩、両面とも少し摩耗している。
SI-116-7	SI116-74, 78, 80, 81	弥生土器	甕	胴部から頸部片1/8強の残存			(21.7) 胴部最大径(中位)		胴部最大径を中央にもち、頸部は長く、粘土紐接合痕を6本以上残す。両面ともヘラナデの後丁寧なユビナデ。	小礫(2mm大以下)を多く含む。	外面は褐色 内面は明黄褐色	良好	

第55表 竪穴住居跡出土土器観察表(36)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-116-8	SI116-1. 46.55.62. 94.97.98. 100.102. 104	弥生土器	甕	底部(90%)から胴部中央(1/4強)残存			(36.9) 胴部最大径(中位)	10.0	大型で胴部は球状、両面ともナデ。	緻密	外面は黄橙色と明黄褐色 内面はにぶい黄褐色	良好	
SI-116-9	SI116-1	弥生土器	(甕)	底部片				10.0	やや広めの底部である。	小礫(2mm以下)を含む、酸化鉄(5mm以下)を多く含む。	外面は橙色と明黄褐色 内面は浅黄褐色と明黄褐色	不良	両面とも摩耗している。
SI-116-10	SI116-14. 66	弥生土器	甕	底部(1/2)から胴下位(1/8)の破片				(8.4)	やや丸みをもって直線的に開く。	小礫(2mm以下)を非常に多く含む。	外面は黄褐色とにぶい黄褐色 内面は褐灰色と黄褐色	普通	両面とも摩耗している。
SI-116-11	SI116-1. 35.39.41. 42.65.75. 76.84.86. 87	弥生土器	壺	底部から胴部片			24.0 胴部最大径(下位)		胴部下位が大きく張り出す形体と考えられる。外面の胴部下位は縦方向のヘラミガキ、他は両面ともナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は橙色、にぶい黄褐色と明褐色 内面は褐灰色とにぶい黄褐色	普通	
SI-116-12	SI116-122	弥生土器	壺	胴上部片					ヘラ描き沈線によって区画された羽状縄文と斜縄文を区画した沈線により山形文をつくっている。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は明黄褐色と赤色 内面は明黄褐色とにぶい黄褐色	普通	無文部は赤彩。
SI-116-13	SI116-13	弥生土器	壺	頸部片					細い横位の沈線に区画された2段以上の羽状縄文。	小礫(1mm大以下)を少量含む。	外面は明褐色と赤褐色 内面は明褐色とにぶい褐色、赤褐色	少し不良	両面とも赤彩有り。
SI-117-1	SI117-1	弥生土器	(壺)	底部片				4.2	やや小型と考えられ、底部は狭く、体部は細め。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも褐灰色と橙色	不良	
SI-117-2	SI117-1	弥生土器	甕	口縁部片					粘土紐接合痕を2本残す。	酸化鉄粒(1mm以下)を多く含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は浅黄褐色	少し不良	
SI-117-3	SI117-1	弥生土器	(壺)	口縁部片					丸みをもって開いたのち内傾する。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は灰黄褐色 内面は赤褐色	普通	内面は赤彩される。
SI-117-4	SI117-7	弥生土器	甕	頸部片(口唇部に近い)					粘土紐接合痕を2本残す	小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面は暗褐色 内面はにぶい黄褐色	良好	
SI-118A-1	SI118A-1.15	弥生土器	甕	胴上部から口縁部片1/8強の残存	(18.8)				少しゆるやかな「く」の字口縁。外面の一部に刷毛目が残る。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面は褐灰色と橙色 内面は橙色とにぶい黄褐色	普通	両面とも摩耗。
SI-118A-2	SI118A-1	弥生土器	甕	口縁部片1/8弱の残存					口唇部は縄文原体による刻目。	緻密(酸化鉄粒を少量含む)。	両面とも浅黄褐色と褐灰色	少し不良	
SI-118A-3	SI118A-14	弥生土器	壺	底部片60%の残存				7.6	外面は縦方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色と灰黄褐色 内面は黒褐色と暗褐色	少し不良	
SI-118B-4	SI118B-32	弥生土器	手づくね土器小鉢	体部片1/3の残存			(5.5) 体部最大径(下位)		小型で球状の体部をもつ、壺のミニチュアか。	緻密	外面は褐灰色 内面はにぶい黄褐色	少し不良	
SI-119-1	SI119-2	弥生土器	(甕)	底部片1/4の残存				(6.8)	胴最下部は直立きみでその後開いて立ち上がる。	小礫(4mm以下)を多く含む。	外面は暗灰黄色 内面は明黄褐色	不良	内面は剥離。

第56表 竪穴住居跡出土土器観察表(37)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-119 -2	SI119-1	弥生土器	甕	底部片やや 胴下位有り、 1/4強の残存				(5.0)	やや胴部は開きぎみに立 ち上がる。両面はナデ。	黄橙色粒 (1mm以下) を含む。	外面は明赤褐色 と褐灰色 内面はにぶい赤 褐色	わずかに 不良	
SI-119 -3	SI119-2	弥生土器	甕	胴上部片					細い(2本単位)櫛描き羽状 文。	緻密	外面は褐灰色と にぶい黄褐色 内面は灰褐色	普通	
SI-120 -1	SI120-6. 11~13. 15.16	弥生土器	壺	口縁部片1/2 弱の残存	(20.9)				細い頸部から大きく外反 し、口縁部は複合口縁で直 立する。複合部外面には斜 縄文(LR)と縦の沈線がみら れる。両面とも無文部はミ ガキがなされる。	小礫(1mm以 下)を少量含 む。	外面は浅黄褐色と 明黄褐色、内 面は明黄褐色と 橙色	不良	無文部は赤 彩。
SI-120 -2	SI120-17. 36	弥生土器	甕	頸部から口 縁部片1/6の 残存	(23.0)				頸部はやや短く、下端に は段を持ち縄文原体による 刻目、口唇部にも同様の刻 目がなされる。	浅黄褐色粒 (1mm大以 下)を含む。	外面は褐灰色と にぶい黄褐色。 内面は明黄褐色 と黒褐色	少し不良	
SI-120 -3	SI120-5	弥生土器	壺	頸部上位か ら口縁部片 1/4弱の残存	(15.0)				頸部上位は細かく不規則な斜 縄文を下地に網目文を配する。口縁 部は短い複合口縁で下縁は縄文 原体による刻目。上部は斜行縄文 (LR)、口唇部もLRの斜行縄文、 内面は横方向ヘラミガキ。	小礫(1mm以 下)を含む	両面とも明黄褐 色とにぶい黄橙 色	少し不良	
SI-120 -4	SI120-1	弥生土器	甕	底部片1/3強 の残存				(8.0)	少し厚手で、胴下部は少 し開いて立ち上がる。	小礫(2mm以 下)を多く含 む。	外面は、橙色、 黒色、灰褐色、 内面は黄褐色と 灰黄褐色	不良	両面とも摩 耗が多い
SI-120 -5	SI-120-1	弥生土器	甕	底部片1/3の 残存				(6.2)	細めの底部で、胴下部は 急角度で立ち上がる。外面 は刷毛目状の文様が成され る。	小礫(2mm以 下)を多く含 む。	外面は明赤褐色 と灰褐色、内面 は灰褐色と明褐 色	不良	
SI-120 -6	SI120-1	弥生土器	鉢	底部から体 下部の破片				5.7	少し開いて立ち上がる。	灰白色粒 (2mm以下) を含む。	外面は赤褐色と 浅黄色、内面は 浅黄褐色と灰黄 褐色	やや不良	両面とも赤 彩
SI-120 -7	SI120-1	弥生土器	甕	底部から胴 最下部1/3の 残存					少し細い胴部、立ち上が りは直線的、外面は縦方向 のヘラミガキ、内面はナデ。	緻密	外面は橙色とに ぶい黄褐色 内面は褐灰色と にぶい黄褐色	少し不良	
SI-120 -8	SI120-1	弥生土器	甕	底部から胴 最下部1/2の 残存				(7.0)	少し細い胴部で、外面は 縦方向の刷毛目、内面はナ デ。	小礫(3mm以 下)を含む。	外面は橙色とに ぶい黄褐色 内面は黄褐色と にぶい黄褐色	不良	
SI-120 -9	SI120-20	弥生土器	甕	底 部 片 90% の残存				6.1	両面ナデ。	酸化鉄(2mm 以下)を含む。	両面とも黄褐色 と橙色	少し不良	
SI-120 -10	SI120-20	弥生土器	甕	底 部 (60%) から胴最下 位(1/8)の残 存					胴部立ち上がりはやや大 きく開く。	小礫(1mm以 下)を含む。	両面とも黄褐色 と明黄褐色	やや不良	
SI-120 -11	SI120-1	弥生土器	甕	底部片1/4の 残存				(9.2)	底部は厚い。	小礫(2mm以 下)を含む。	外面は橙色、内 面はにぶい黄橙 色	不良	両面とも摩 耗が多い。
SI-120 -12	SI120-19	弥生土器	台付 甕	脚部片で脚 榎部40%欠 損				6.3 脚榎部 口径	「ハ」の字状の脚。全面 ヘラナデの後エビナデ。	酸化鉄(2mm 以下)を多く 含む。	外面は黄褐色と 浅黄褐色 内面はにぶい黄 褐色とにぶい橙 色 脚内面は黄褐色	少し不良	
SI-120 -13	SI120-1	弥生土器	壺	胴上部片					細かい斜縄文を不規則に 配置している。	小礫(2mm以 下)を多く含 む。	外面は橙色と褐 灰色 内面はにぶい黄 褐色、一部明黄 褐色	やや不良	

第57表 竪穴住居跡出土土器観察表(38)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-121 -1	SI121-53	弥生土器	鉢	全体の70% の残存	18.7	10.8		6.0	やや大型で体部は半球状である。口縁部は直立にちかく外面は斜縄文を横位の沈線で区画している。他は両面ともヘラミガキ(外面は縦方向、内面は横及び斜め方向)を施す。	黄橙色粒(2mm以下)を多く含む。	外面は黄橙色と赤色 内面は浅黄橙色、褐灰色、黒褐色、赤褐色	普通	両面に赤彩(外面は無文部のみ)。
SI-121 -2	SI121-66 (SX09-5)	弥生土器	鉢	体上部から口縁部片1/8の残存	(21.8)				少し大型で直線的に開いて立ち上がる。口縁部には2段の羽状縄文が沈線で区画されている。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は暗赤褐色と明黄褐色 内面は暗赤褐色と灰黄褐色	少し不良	外面の無文部と内面は赤彩、両面とも少し磨耗している。外面下部にわずかに煤付着。
SI-121 -3	SI121-18. 36.38	弥生土器	(甕)	胴下部片1/4以下の残存				(8.4)	やや薄手で大きく開く。外面は一部に縦方向のミガキがなされる。	酸化鉄粒(1mm以下)を多く含む	両面とも黄褐色	少し不良	
SI-121 -4	SI121-1	弥生土器	(壺)	口縁部片					薄手で、外面は下位より細かい間隔のある斜行縄文。上位は並行する沈線で区画した山形文(いずれも細い沈線)が施される。	緻密	両面ともいぶき黄褐色、一部橙色	少し不良	両面とも赤彩か。
SI-121 -5	SI121-43	弥生土器	甕	底部片				6.4	やや厚手。	緻密	外面の一部は黒褐色と橙色、明黄褐色 内面は黄褐色	不良	
SI-121 -6	SI121-33	弥生土器	壺	口縁部片					頸部より大きく開き、短い複合口縁をもつ。複合部の断面は三角形で、下端に指頭押捺痕、中位突出部にヘラによる刻み、上部は羽状縄文、また、その上に十字の沈線を刻んだ円形浮文も貼られている。	黄橙色粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも浅黄褐色	普通	両面とも赤彩有り。
SI-121 -7	SI121-19	弥生土器	壺	頸部片					羽状縄文を沈線で区画している。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は浅黄褐色と一部明赤褐色 内面は明黄褐色	不良	無文部外面は赤彩。
SI-121 -8	SI121-16. 84	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は指押圧による液状、また、両面ともヘラによる横方向のナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面とも灰黄褐色と橙色	少し不良	
SI-122 -9	SI122-68. 104	弥生土器	甕	胴部から頸部90%の残存			(25.8) 胴部最大径 (上位)		やや大型の甕で胴部は半球状であり、最大径は上位。胴部に比して頸部が長い。下位に粘土紐接合痕を1段残し、縄文原体には刻みがなされる。他は両面ともヘラナデとヘラミガキ。	緻密	外面は明赤褐色、黄褐色、明黄褐色 内面は黄褐色、明赤褐色	少し不良	両面とも磨耗している。
SI-122 -11	SI122-105.106	弥生土器	甕	胴部から頸部片1/2弱の残存			(18.0) 胴部最大径 (上位)		胴部最大径は上位、頸部はやや長く粘土紐接合痕をわずかに残す。外面は広いヘラナデ。内面はヘラナデとヘラミガキ。	酸化鉄(2mm以下)を含む	外面は明黄褐色と橙色 内面はいぶき黄褐色と橙色	やや不良	
SI-122 -12	SI122-5. 13.92. 一括	弥生土器	鉢	体部から口縁部片70%の残存	21.8				体部は直線的にやや大きく開いて立ち上がり、口縁部は少し丸みをもって直立する。やや厚手。口縁部は2段の羽状縄文を横位の沈線で区画する。	白色粒と黒色粒(1mm以下)を多く含む。酸化鉄粒(1mm以下)も少量見られる。	外面は黄色と黄褐色 内面は明黄褐色とにぶき橙色、赤灰色	不良	両面とも赤彩される。
SI-122 -13	SI122-151	弥生土器	小型壺	口縁部欠損、他は90%の残存			9.6 体部最大径 (下位)	6.4	底部は広く厚い。体部最大径は下位。頸部は長い形体である。内面は粘土紐接合痕を4本残している。	小礫(3mm以下)を多く含む。	外面は黄褐色とにぶき黄褐色、一部褐灰色 内面は黄褐色	良好	
SI-122 -14	SI122-45 ~47.一括	弥生土器	甕	胴下位(50%)から底部				6.4	胴部はやや丸みをもって少し開いて立ち上がる。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ。	緻密 酸化鉄粒が極少量入る。	外面は黄褐色、明黄褐色、黒色、にぶき橙色 内面は橙色	わずかに不良	
SI-122 -15	SI122-17	弥生土器	(甕)	底部片上位は40%の残存				6.8	胴部は開いて立ち上がる形体である。外面はヘラナデとヘラミガキ、内面はヘラナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は黄褐色と橙色 内面は褐灰色と灰黄褐色	良好	
SI-122 -16	SI122-43	弥生土器	(甕)	底部片1/2弱の残存				(7.4)	両面ともナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は橙色と灰褐色 内面は淡黄色	良好	

第58表 竪穴住居跡出土土器観察表(39)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-122-17	SI122-33	弥生土器	(甕)	底部片1/2の残存				9.8	底部周辺は外側に突出している。両面ともナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は灰黄褐色と明褐色 内面はにぶい褐色	少し不良	両面とも摩耗している。
SI-122-18	SI122-73	弥生土器	鉢	口縁部片					口縁部は薄い複合口縁で段は小さい。頸上部は羽状縄文、口縁部は斜縄文(RL)口唇部も斜縄文(LR)が施される。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面ともににぶい黄褐色、内面の一部は赤色	やや不良	
SI-122-19	SI122-20	弥生土器	甕	口縁部片					小片であるが1本の粘土紐接合痕を残す。口唇部は突出した棒状工具による刺突、他は指によるナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は浅黄褐色	良好	外面に煤付着。
SI-123-1	SI123-78	弥生土器	壺	口縁部片1/4弱の残存	(9.8)				細い頸部から少し外反する形体で、口縁部内面は粘土紐接合痕を1段残す。口唇部は斜縄文(LR)がある。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ。	小礫(4mm以下)を少量含む。	外面は褐色、一部黒色 内面はにぶい褐色と明褐色	普通	
SI-123-2	SI123-20	弥生土器	甕	口縁部片					口縁部内面に粘土紐接合痕を残して段をつくり、縄文原体による刻目を施す。また、口唇部も刻目がなされる。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色と暗褐色 内面は明褐色	少し不良	
SI-123-3	SI123-14	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は縄文原体による押捺、口縁部外面はやや太い斜行する櫛描羽状文。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は黒褐色 内面はにぶい黄褐色	普通	
SI-123-4	SI123-7	弥生土器	鉢	口縁部片					口縁部片はわずかに丸みをもって直立し、外面は細い横位の沈線で区画された羽状縄文、口唇部は斜縄文(RL)が施される。	小礫(1mm以下)をかなり多く含む。	外面はにぶい赤褐色と褐灰色 内面は赤褐色とにぶい褐色	良好	外面の無文部は赤彩。
SI-123-5	SI123-57	弥生土器	(台付甕)	台部から胴下位(20%)					脚部は欠損。胴部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラナデとミガキ(一部刷毛目)。	緻密	外面は赤褐色、明赤褐色、一部はにぶい黄褐色 内面は褐色にぶい黄褐色 脚部内面はにぶい褐色	少し不良	両面とも摩耗している。
SI-123-6	SI123-73	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は外面からの指押圧による波状。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色とにぶい黄褐色 内面は褐色	やや不良	
SI-123-7	SI123-6	弥生土器	壺	口縁部片					開いて立ち上がり、短い複合口縁をもつ。頸部上位は斜縄文(LR)、複合部も斜縄文(RL)で下端は押圧による押捺、口唇部も細かい斜縄文(LR)がそれぞれ施される。	緻密	両面とも黄褐色	少し不良	
SI-123-8	SI123-1	弥生土器	壺	口縁部片					少し厚手の複合口縁で、棒状浮文を貼りつけている。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は黒褐色と明褐色 内面は暗赤褐色	やや不良	両面とも少し摩耗している。
SI-123-9	SI123-31	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は両面から指押圧による波状、他はユビナデ。	酸化鉄粒(2mm以下、一部に4mmもあり)を多く含む。	両面とも黄褐色、内面の一部は褐色	少し不良	
SI-123-10	SI123-100	弥生土器	壺	胴上部片					無文部を挟んで上下に斜縄文がみられる。	小礫(4mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色と暗赤褐色 内面は褐灰色とにぶい黄褐色	少し不良	外面の無文部は赤彩。
SI-124-1	SI124-26.60	弥生土器	甕	底部から胴下部1/3の残存				(6.4)	少し小型で、底部はわずかに丸みをもって立ち上がる。外面はヘラナデ、内面はユビナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黄褐色、浅黄褐色、褐灰色 内面は褐灰色と灰白色	普通	
SI-124-2	SI124-28	弥生土器	甕	口縁部片					外面に粘土紐接合痕を1段残す。口唇部は指押圧による波状、他は横方向のユビナデ。	小礫(2mm以下)を非常に多く含む。	外面は浅黄褐色と黒褐色 内面は褐色と黒褐色	良好	外面に煤付着。

第59表 竪穴住居跡出土土器観察表(40)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-124 -3	SI124-51	弥生土器	甕	口縁部片					外面は粘土紐接合痕をやや幅広く1段残す。口唇部は指押圧による波状、他はユビナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は褐灰色	良好	
SI-124 -4	SI124-6	弥生土器	鉢	体部片					体上部は横位の沈線で区画された羽状縄文(下よりLR,RL)。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は赤色と浅黄褐色 内面は赤色とにぶい黄褐色	普通	外面の無文部と内面は赤彩。
SI-125 -1	SI125-28	弥生土器	甕	底部から胴下位片 60%の残存				4.6	少し小型で、胴下部は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも橙色と褐灰色、外面の一部は黒褐色	良好	両面とも摩耗している。
SI-125 -2	SI125-1. 3-6.8- 12.15-18. 26.35.36	弥生土器	甕	底部から頸部1/3の残存			23.4 胴部最大径	(6.2)	胴部最大径は上位で、頸部は少し長く、口縁部は外反する。頸部には粘土紐接合痕が5段残る。胴下位は縦方向のヘラミガキ、頸部には指頭圧痕がみられる。内面はナデ、また底部は焼成後の穿孔がみられ、甕に転用している。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色、黒色、橙色、褐灰色 内面は灰黄褐色、明黄褐色、黒褐色	普通	両面とも摩耗している。胴上部に煤付着。
SI-126 -1	SI126-1	弥生土器	甕	口縁部片					口縁部はやや直線的に開く。口唇部は両面からの指押圧による波状、外面は縦方向のユビナデ、内面は刷毛目。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は灰黄褐色とにぶい黄褐色 内面は灰黄褐色と黄褐色	普通	
SI-127 -2	SI129-1. 24.36.46	弥生土器	甕	全体の60%の残存(口唇部は20%の残存)	(14.4)	17.4	14.5 胴部最大径上位	6.2	少し小型で長胴、胴部最大径は上位、頸部は少し長く、粘土紐接合痕を7段残す。口唇部は指による押圧で波状。両面ともナデ。外面は若干のヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は黒褐色、橙色、黄褐色 内面は褐灰色と黄褐色	普通	
SI-127 -3	SI129-20. 23.183	弥生土器	甕	胴上部片1/4の残存					胴部最大径は中位と考えられ、頸下部には粘土紐接合痕を1段残し、縄文原体による押捺で刻目をつくる。	小礫(2mm以下)を含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は明黄褐色	良好	
SI-127 -4	SI129-9. 15.16.105	弥生土器	甕	底部から胴下位1/3の残存				(7.0)	胴下部は開きぎみに立ち上がる。外面はヘラミガキ、内面はナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は褐灰色と浅黄褐色 内面は浅黄褐色	良好	
SI-127 -5	SI129-1	弥生土器	鉢	口縁部片1/6の残存					やや大型で体部は碗状、外面は羽状縄文が2段、口唇部も斜縄文(LR)が施される。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は灰黄褐色とにぶい黄褐色 内面は明黄褐色、一部灰黄褐色	やや不良	
SI-127 -8	SI129-41	弥生土器	甕	底部片1/2の残存				6.3	外面はヘラナデ。	小礫(1mm大以下)を含む。	外面は明赤褐色と褐灰色 内面は黄褐色と浅黄褐色	少し不良	
SI-127 -10	SI129-50	弥生土器	甕	底部片 90%の残存				4.6	底部はわずかに上げ底きみ、外面はヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色とにぶい黄褐色 内面は明黄褐色と褐灰色、一部黒褐色	良好	
SI-127 -11	SI129-207	弥生土器	(壺)	底部片 10%の残存				(6.6)	胴下位は底部付近が直立したのち開いて立ち上がる。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は橙色と灰黄褐色 内面は橙色と褐灰色	少し不良	
SI-127 -12	SI129-1. 160	弥生土器	甕	胴上部から頸部片					胴部最大径は上位にあり、頸部には5段以上の粘土紐接合痕が残る。	小礫(3mm以下)を極少量含む。	両面とも黄褐色とにぶい橙色	普通	
SI-127 -13	SI129-140	弥生土器	鉢	体上部から口縁部片					碗形の体部をもち、口縁部は短い複合口縁で直立する。口縁外面は斜縄文(LR)、口唇部も斜縄文(RL)がそれぞれ施される。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は暗赤褐色と淡黄褐色 内面は暗赤褐色	普通	両面とも赤彩。
SI-127 -14	SI129-158	弥生土器	壺	口縁部片					太く短い複合口縁で、上端部は刻目がなされる。	黄橙色粒(3mm以下)が多く含まれる。	外面は橙色、明赤褐色 内面は赤褐色	普通	両面に赤彩。

第60表 竪穴住居跡出土土器観察表(41)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-127-15	SI129-143	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を沈線で区画し、下部は山形文をつくっている。	黄橙色粒(2mm以下)をかなり多く含む。	外面は赤褐色、黒褐色、にぶい黄褐色 内面は浅黄褐色	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-127A-1	SI127A-26	土師器	甕	全体の80%の残存	13.1	19.6	17.6 胴部最大径 (中位)	4.8	胴部最大径は中央にあり、口縁部は「く」の字状。胴下半部外面はヘラケズリ。内面はヘラナデ。胴上部外面は横方向の刷毛目、内面も横方向の刷毛目、口縁部は両面とも横ナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は明赤褐色、黒色、黒褐色、褐灰色 内面は橙色、黒褐色褐灰色	普通	
SI-127A-2	SI127A-27	土師器	高坏	脚のみ1/3欠損	17.9	14.9		14.2 脚裾部口径	脚裾部は大きく開く。脚柱部は丸みをもって内傾する。坏下部は稜をもち、上部は大きく開く。 外面の脚裾部下位はヨコナデ。上位はヘラナデ。脚柱部はヘラミガキ。坏部は下部がヘラケズリ、上部はユビナデ。内側は脚部がナデとヘラケズリグシ。坏部はヘラナデの後若干の縦方向のヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は褐色、明褐色、赤褐色 内面は褐灰色と褐色土 脚内面は一部橙色とにぶい黄褐色	良好	
SI-127A-3	SI127A-1	土師器	甕	底部から胴下位1/3の残存				(7.8)	胴下位の立ち上がりは丸みを帯びている。	緻密	外面は明赤褐色と橙色、一部黒色 内面は明赤褐色と黒褐色	不良	内面の剥離が著しい。
SI-127B-5	SI127B-29	弥生土器	壺	胴中位片			(44.9) 胴部最大径		大型の壺を炉体土器に転用している。 外面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は明黄褐色、一部赤褐色 内面は黄褐色と褐灰色	少し不良	外面は赤彩。
SI-127B-6	SI127B-3	弥生土器	甕	口縁部片					粘土紐接合痕を4段残し、口唇部は両面からの指による押圧がなされ波状。 内面は横方向のヘラナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面とも褐灰色、内面の一部はにぶい黄褐色	やや不良	
SI-127B-7	SI127B-6	弥生土器	甕	口縁部片					内面に粘土紐接合痕を1段残し、口唇部は上下から指による押圧がなされ、鋭角になる。両面とも指による横方向のナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも橙色	良好	
SI-127B-8	SI127B-17	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文を横位の沈線で区画している。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は橙色 内面は明赤褐色	普通	
SI-128-10	SI128-2	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文をやや細い横位の沈線で区画している。	酸化鉄粒(4mm以下)を含む。	両面とも浅黄褐色、外面の一部は赤色	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-128-4	SI128-3	弥生土器	(器台)	脚部片1/6の残存				(17.2) 脚口径	丸みをもってやや内傾しながら立ち上がる。 外面はユビオサエ、内面はユビナデが残る。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は褐灰色とにぶい褐色 内面は暗赤褐色	普通	
SI-128-9	SI128-1	弥生土器	壺	胴下部片					薄手で、下位は横方向のヘラミガキ、中位に斜縄文を横位細めの沈線で区画した山形文がわずかに残る。	小礫(2mm以下)を極少量含む。 酸化鉄(2mm以下)を含む。	外面は赤褐色と褐灰色 内面は浅黄褐色	やや不良	
SI-129-1	SI129-16, 17, 19, 35, 70, 76, 204	弥生土器	甕	胴下部から口縁部片90%残存	23.7		(25.3) 胴部最大径 (中位)		胴部は球状で最大径も中央にある。頸部は少し長く弧状に立ち上がり口縁部で外反する。粘土紐接合痕を9段残す。口唇部は縄文原体の押圧による波状。	緻密	外面は橙色、灰褐色、黒色 内面は浅黄褐色とにぶい黄褐色	良好	胴部に煤付着。
SI-129-6	SI129-142	弥生土器	台付甕	脚上部(1/6)から胴下部					脚上部は直立、内部は少し広い。甕の胴部は丸みをもって開いて立ち上がる。外面はヘラナデ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	緻密	両面、脚内面とも明黄褐色と浅黄褐色、内面の一部は黒褐色	少し不良	
SI-129-7	SI129-65	弥生土器	甕	底部片95%の残存				5.0	やや小さめの甕か。 外面はヘラナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は暗赤褐色と褐灰色 内面は浅黄褐色	普通	
SI-129-9	SI129-62	弥生土器	甕	底部片60%の残存				6.0	胴下部は開いて立ち上がる。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は暗赤褐色とにぶい黄褐色 内面は灰黄褐色	良好	

第61表 竪穴住居跡出土土器観察表(42)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-130 -1	SI130-7	弥生土器	(甕)	底部片1/3弱 の残存				(6.8)	外面は横方向のヘラケズ リ、内面はヘラナデ。	小礫(1mm以 下)を多く 含む。	外面は褐灰色と にぶい黄褐色 内面はにぶい黄 褐色	わずかに 不良	
SI-130 -2	SI130-1	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は指押圧による波 状。	小礫(1mm以 下)を含む。	外面はにぶい橙 色 内面は橙色	やや不良	
SI-130 -3	SI130-2	弥生土器	鉢	体下部片					羽状縄文が横位の沈線で 区画される。	小礫(3mm以 下)を多く含 む。	外面は浅黄褐色 とにぶい赤褐色 内面はにぶい赤 褐色	普通	両面赤彩。
SI-131 -1	SI131-1 ~3.11	弥生土器	甕	胴部から頸 部片1/4弱の 残存				(23.9) 胴部最大 径(中位)	胴部最大径は中位にあり、 頸部下位に粘土紐接合痕を 残し段をつくる。 外面はユビナデ、内面は 上部からヘラミガキ、下部 はナデ。	小礫(2mm以 下)を含む。 特に明褐色 粒が目立つ。	外面は黒褐色と にぶい黄褐色 内面は浅黄褐色 と灰黄褐色	良好	
SI-131 -2	SI131-4	弥生土器	甕	底部片				6.1	やや小型で厚手である。	小礫(3mm以 下)を極少量 含む。	外面は明黄褐色 とにぶい黄褐色 内面は橙色	少し不良	
SI-132 -1	SI132-1. 20.21.24. 29.30.34. 35.37	弥生土器	壺	全 体 の 60% の残存	8.4	20.5	11.7 胴部最大 径中位	5.6	少し小型の壺で、胴部は 球状、頸部は細長く、口縁 部は外反する。 胴上位と頸部は羽状縄文 を2段のS字状結節縄文で上 下より挟んでいる。	橙色と黄橙 色の粒(2mm 以下)を多く 含む。	外面は橙色と赤 褐色 内面は赤褐色と 褐灰色	普通	両面とも赤 彩。
SI-132 -2	SI132-1. 10.25	弥生土器	高坏	坏口縁部は 40%欠損	19.4	8.45		9.6 脚 裾 部 口径	やや高い「ハ」の字状の 脚部。体部はやや丸みをも って大きく開く。脚部内面 はヘラナデ、他は両面とも ヘラミガキ。	小礫(2mm以 下)を含む。	両面とも黄褐色、 橙色、灰色 脚部内面はにぶ い黄褐色、橙色、 浅黄褐色	やや不良	両面とも赤 彩。
SI-132 -3	SI132-22	弥生土器	(壺)	底部片				6.0	やや丸みをもって立ち上 がる。外面は縦方向のヘラ ミガキ、内面はナデ。	橙色と黄橙 色の粒(2mm 以下)を多く 含む。	外面は黒褐色、 橙色、灰褐色 内面は灰褐色と 浅黄褐色	普通	
SI-133 -1	SI133-1. 35.37.38. 42.52.53	弥生土器	鉢	体下部から 口 縁 部 80% の残存	14.5		15.0 体部最大 径上位		体下部はやや直線的に開 いて立ち上がり、口縁部は 少し内傾する。 口縁部外面は2段のS字状 結節縄文の上に羽状縄文が 施される。体下部と内面は 縦方向のヘラミガキ。	緻密、 酸化鉄粒 (3mm以下) を極少量含 む。	両面とも明赤褐 色と浅黄褐色、 内面の一部は褐 灰色	わずかに 不良	
SI-133 -2	SI133-1. 3~6.9.26	弥生土器	鉢	底部欠損1/8 の残存	(14.6)				体下部はやや直線的に開き、 体上部は丸みをもって立ち上 がり、口縁部は丸みをもって直立 する。 体部から口縁部は2段のS字状 結節縄文と羽状縄文2段が施文 される。他は丁寧なヘラミガキ。	緻密、 酸化鉄粒 (3mm以下) を極少量含 む。	外面は赤褐色と にぶい黄褐色、 灰白色 内面は赤褐色と 浅黄褐色	良好	両面とも赤 彩(無文部)。
SI-133 -3	SI133-1. 7.9.19.20	弥生土器	壺	口縁部片 50%強の残 存	23.0				複合口縁で、内面は上部が直 立ぎみに立ち上がる。複合下 端部は指による押圧押捺、複合部 は外面が羽状縄文、また指押圧 された2本の棒状浮文が貼り付 けられる。内面は横方向のヘラ ミガキ。	酸化鉄粒 (1mm以下) を少量含む。	外面は淡黄褐色 と明赤褐色 内面は橙色	良好	両面赤彩。
SI-133 -4	SI133-1. 10.17.34	弥生土器	壺	胴部片1/2強 の残存			19.3 胴部最大 径中位		胴中位から上位にかけて、 下位より羽状縄文(LR、RL) の上に沈線で山形文、2 段の山形文、羽状縄文(R L、LR)を各々施している。 。	緻密	外面は明褐色、 にぶい黄褐色、 褐色 内面は明黄褐色 と黄褐色	少し不良	内面は摩耗 している。 外面無文部 は赤彩。
SI-133 -5	SI133-1. 40.46~51. 53.55	弥生土器	壺	底部から胴 上部まで 70%の残存			23.0 胴部最大 径下位	6.2	胴部は大きく張り、胴部 最大径はやや下位にある胴 上部には2段のS字状結節縄 文に挟まれた羽状縄文が施 されている。胴下部はヘラ ミガキ。	緻密、 酸化鉄粒 (3mm以下) を極少量含 む。	両面とも浅黄褐 色と黄褐色、外 面の一部は褐灰 色	少し不良	胴部無文部 は赤彩、内 面は摩耗し ている。
SI-133 -6	SI133-1. 26.56. 58~64	弥生土器	甕	胴下部から 口縁部片 80%の残存	19.1		胴部最大 径(上位)		胴部最大径は上位にあり、 頸下部に粘土紐接合痕を1段 残し、ヘラによる刻みが入 る。口縁部は上位内面に粘 土紐接合痕を1段残す。口唇 部はヘラによる刻目、外面 の胴下位は縦方向のヘラミ ガキ。	酸化鉄粒 (3mm以下) を少量含む。	外面は明黄褐色、 黒褐色、褐色 内面は橙色と褐 灰色	少し不良	
SI-133 -7	SI133-5. 65	弥生土器	台付 甕	脚部(20%) から胴部中 位(40%)の 残存			(23.3) 胴部最大 径中位	(8.4) 脚 裾 部 口径	脚部は丸みを持ったハの 字状で胴部は球状である。 脚部外面は縦方向のヘラナ デ、胴部は縦方向のヘラミ ガキ、内面は横方向のヘラ ナデ。	緻密、 酸化鉄粒 (2mm以下) を少量含む。	外面は黒褐色、明 黄褐色、黄褐色 内面は明黄褐色、 浅黄褐色、黄褐色 脚内面はにぶい黄 褐色	少し不良	

第62表 竪穴住居跡出土土器観察表(43)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-134 -1	SI134-3	弥生土器	甕	口縁部片					外面は複合口縁に粘土紐接合痕を1段残す。口唇部は指による押圧で波状。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも黒褐色とにぶい黄褐色、内面の一部は黄褐色	普通	
SI-134 -2	SI134-13	弥生土器	鉢	口縁部片					羽状縄文(RL,LR)、口唇部も斜縄文(LR)。	緻密	外面は浅黄褐色、内面は、明黄褐色	少し不良	
SI-135 -3	SI135-5	弥生土器	壺	口縁部片					複合口縁で断面は三角形状。下端に刻目がなされる。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は橙色、内面は暗赤褐色と黒色	良好	
SI-135 -4	SI135-18	弥生土器	壺	胴上部片					細かい斜縄文の上に格子状の沈線が配されている。	酸化鉄粒(2mm以下)を少量含む。	外面は黄褐色と褐灰色、内面は橙色	良好	外面の無文部を主として赤彩。
SI-135 -5	SI135-6	弥生土器	(甕)	底部片				5.6	胴部はやや開いて立ち上がると考えられる。	黄褐色粒(2mm以下)を多く含む。	外面はにぶい黄褐色と灰黄褐色、内面は黒色	良好	内面が剥離している。
SI-135 -6	SI135-17	弥生土器	(甕)	底部から胴部最下部1/2の残存				6.2	胴部はやや丸みをもって立ち上がる。胴部最下部外面はヘラナデ、内面はヘラミガキ。	小礫(5mm以下)を極少量含む 酸化鉄粒(2mm以下)を含む。	外面は浅黄褐色、内面は明黄褐色	やや不良	
SI-135 -7	SI135-15	弥生土器	(壺)	底部から胴部最下部1/3強の残存				(4.6)	少し小型の壺と考えられ、胴最下部はわずかに窪んだ後に球状に立ち上がると考えられる。	小礫(3mm以下)を含む。	外面は赤褐色とにぶい黄褐色、内面は橙色とにぶい褐色	少し不良	内面は剥離している。
SI-135 -8	SI135-1	弥生土器	壺	底部片1/2弱の残存				(6.2)	底部はやや上げ底ぎみ、胴部最下部は、わずかに窪んだ後、球状に立ち上がると考えられる。胴部外面は縦方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は褐色、黒褐色、にぶい黄褐色、内面は黒褐色と褐灰色	良好	
SI-136 -1	SI136-1	弥生土器	甕	口縁部片					口縁部で直線的に少し開いて立ち上がる。口唇部は指による押圧波状。外面はユビナデ。	緻密 黄褐色粒(1mm以下)を少量含む。	外面は明黄褐色、一部にぶい黄褐色、内面は褐色と灰黄褐色	不良	両面とも剥離と摩耗が激しい。
SI-138 -1	SI138-2	弥生土器	壺	口縁部片					短い複合口縁で口唇部にS字状結節文が施される。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は灰黄褐色、内面は赤褐色と褐色	やや不良	
SI-138 -2	SI138-1	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は指による押圧波状。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は浅黄褐色、内面は黄褐色	少し不良	
SI-138 -3	SI138-8	弥生土器	壺	胴部片					羽状縄文を沈線で区画し、山形文をつくる。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は灰褐色と赤褐色、内面はにぶい黄褐色	やや不良	無文部は赤彩。
SI-139 -1	SI139-1.3	弥生土器	甕	胴上部から口縁部片1/4弱の残存	(19.4)				胴部最大径は上位と考えられ、頸部は短く、口縁部は外反、胴上部には粘土紐接合痕を1段残し、端部に円形竹管による刺突文が周る。口唇部は指による押圧波状。	小礫(4mm以下)を含む。	両面とも黄褐色、にぶい黄褐色、内面の一部は明黄褐色	やや不良	両面とも摩耗が激しい。
SI-139 -2	SI139-28.48	弥生土器	壺	底部から胴下部90%の残存				6.0	胴最下部がわずかに窪み、胴上部に向かって球状に立ち上がる。 外面はヘラミガキ、内面はナデ。	小礫(3mm以下)を少量含む。	外面は褐色、にぶい赤褐色、明赤褐色、褐灰色、内面は褐色、明赤褐色、黒色	少し不良	
SI-139 -3	SI139-4	弥生土器	(壺)	底部から胴下部1/4の残存				(9.6)	広めの底部をもち、胴最下部はわずかに窪み、胴部は直線的に開いて立ち上がる。 両面ともナデ。	小礫(3mm以下)を含む。	外面は赤褐色、内面はにぶい赤褐色	良好	

第63表 竪穴住居跡出土土器観察表(44)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-139 -4	SI139-33	弥生土器	壺	胴部片					大型の壺で、外面はヘラミガキ、内面はユビナデ。転用して炉体土器として使用。	黄橙色粒など(2mm以下)を非常に多く含む。	両面とも赤色と橙色	不良	両面とも赤彩剝離多い。
SI-140 -1	SI140-1	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は指押圧による波状。他は両面ともユビナデ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	両面ともぶい橙色	少し不良	
SI-140 -2	SI140-1	弥生土器	壺	頸部片					斜縄文3段(羽状縄文)。	緻密	両面ともにぶい黄橙色	やや不良	
SI-140 -3	SI140-1	弥生土器	壺	胴上部片					S字状結節縄文2段と斜縄文。	緻密	外面は浅黄褐色 内面はぶい黄褐色	やや不良	
SI-140 -4	SI140-1	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を沈線で区画し山形文をつくる。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は灰褐色 内面は黒色	やや不良	
SI-140 -5	SI140-1	弥生土器	甕	胴部上位1/8の残存					両面ともヘラナデの後荒いヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面ともにぶい褐色	やや不良	
SI-141A -1	SI141A-10.11	弥生土器	壺	口縁部片					やや厚く短い複合口縁で、下端は縄文原体による押捺、外面は斜縄文(RL)。	小礫(1mm以下)を含む。	外面はぶい黄褐色と浅黄褐色 内面は赤褐色	良好	赤彩有り(内面)。
SI-141A -2	SI141-12	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文を横位の沈線で区画する。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は明黄褐色とぶい赤褐色 内面は橙色	やや不良	外面無文部に赤彩。
SI-141A -3	SI141A-20	弥生土器	甕	底部片90%の残存				6.6		小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色と黄褐色 内面は浅黄褐色と灰黄褐色	少し不良	
SI-141A -4	SI141-2~4	弥生土器	壺	胴部片 中位					胴部は球状、胴上部に羽状縄文を沈線で区画し山形文をつくる。	緻密	外面は橙色と黄褐色 内面は橙色と明黄褐色	不良	
SI-142 -1	SI142-9	弥生土器	甕	胴上部片					胴部は丸みをもって鉢形に開き、頸部は粘土継接合痕が3段まで認められ、さらに開く。両面ともヘラナデとユビナデ調整。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面はぶい橙色 内面は浅黄褐色、明黄褐色、褐灰色	良好	
SI-142 -2	SI142-3.6.8.10.11.13.14.22	弥生土器	壺	底部90%から胴上部(30%)の残存			(14.6)胴部最大径 中位		少し小型の壺で胴最下部はわずかに窪み、胴部は球状、外面の胴下位は縦方向のヘラミガキ、他はヘラナデ、内面はヘラナデとユビナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は褐灰色と橙色 内面はぶい黄褐色と明黄褐色	わずかに不良	
SI-143 -3	SI143-7	弥生土器	壺	底部片90%の残存				5.5	全体に細く、胴最下部はわずかに窪み、直立ぎみに立ち上がる。外面は縦方向のヘラミガキ。	白色粒(1mm以下)を少量含む。	両面とも橙色	良好	
SI-143 -4	SI143-1	弥生土器	甕	口縁部片					口縁部の立ち上がりは直線的で両面は刷毛目調整。口唇部は指による押圧で波状。	緻密	外面は褐灰色 内面はぶい黄褐色	少し不良	摩耗が両面に多い。
SI-143 -5	SI143-12	弥生土器	甕	口縁部片					少し小型の甕口縁部と思われる、複合口縁で粘土継接合痕を1段残す。口唇部は両面からの指押圧による波状。両面とも横方向のユビナデ調整。	小礫(1mm以下)を含む。	両面ともにぶい黄褐色	やや不良	外面に煤付着。

第64表 竪穴住居跡出土土器観察表(45)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-143-6	SI143-13	弥生土器	壺	頸部片					細い羽状縄文を横位の沈線で区画する。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも赤色と明黄褐色	少し不良	両面とも赤彩。
SI-143-7	SI143-11	弥生土器	壺	頸部片					羽状縄文(3段の斜行縄文)を横位の沈線で区画。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は橙色 内面は赤色と浅黄褐色	少し不良	
SI-143-8	SI143-14	弥生土器	甕	胴上部片					外面は刷毛目、内面は横方向のユビナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は褐灰色 内面は明赤褐色とにぶい黄褐色	少し不良	
SI-143-9	SI143-18.30	土師器	坏(碗)	体部から口縁部片1/3の残存	(13.5)				碗状の体部をもち、開きぎみに立ち上がる。	緻密	外面は橙色と褐灰色 内面は橙色と褐灰色、にぶい褐色	わずかに不良	
SI-143-10	SI143-33	土師器	坏	1/6の残存	(12.3)				体部は直線的に開く形。	緻密 わずかに酸化鉄粒(2mm以下)を含む。	外面は明黄褐色 内面はにぶい褐色	わずかに不良	ロクロ成形。
SI-143-11	SI143-192	灰釉陶器	高台付坏	底部欠損1/8の残存	(16.0)	(2.5)		(9.0)高台口径	皿状で内面に灰釉、また、内面にトチン跡がみられる。外面の体下端はヘラケズリ。	緻密 白色粒(1mm以下)をわずかに含む。	外面は灰黄色 内面は浅黄色	良好	
SI-144-1	SI144-28.30.34	弥生土器	壺	胴部片1/3強の残存			(21.7)胴部最大径		胴部中央は大きく張りだし、上部はヘラナデ、頸部は細く長い。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも明黄褐色	良好	両面とも剥離多い。
SI-144-2	SI144-37	弥生土器	壺	胴上部片					横位にヘラ状工具で櫛状の文様を施す。	緻密	外面は灰黄褐色 内面はにぶい黄褐色	少し不良	内面は少し摩耗。
SI-144-3	SI144-66	弥生土器	壺	底部から胴最下部60%の残存				3.9	小型の壺と考えられ、体最下部はわずかに窪んだ後に開いて立ち上がる。	小礫(2mm以下)を多く含む。 白色粒が目立つ。	外面は橙色 内面は明褐色	良好	
SI-144-4	SI144-84	弥生土器	甕	口縁部片					大きく長く外反し、口唇部は両面からの指押圧による波状。外面はヘラナデ、内面はユビナデ調整。	小礫(3mm)を含む。	外面は灰黄褐色と明黄褐色 内面はにぶい黄褐色と明黄褐色	少し不良	外面は少し摩耗し、煤付着。
SI-144-5	SI144-1.6	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は両面からの指押圧による波状。両面とも刷毛目調整。	緻密	両面とも橙色	少し不良	
SI-144-6	SI144-37	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文が上下に横位で見られる。	緻密	両面ともににぶい黄褐色	不良	
SI-144-7	SI144-7	弥生土器	壺	胴上部片					横位の櫛描き文。	緻密	外面は灰黄褐色 内面はにぶい黄褐色	やや不良	
SI-144-8	SI144-47	弥生土器	壺	胴上部片					横走する櫛描文。	緻密	両面とも明褐色と褐灰色	少し不良	内面は剥離が多い。
SI-144-9	SI144-38	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を沈線で区画して波状文を施している。 内面はミガキにちかいヘラナデ。	緻密	両面ともににぶい褐色	やや不良	

第65表 竪穴住居跡出土土器観察表(46)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-144-10	SI144-21	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を沈線で区画し、舌状文などをつくる。	緻密小礫(1mm以下)を極少量含む。	外面は褐灰色、内面はにぶい黄褐色	少し不良	
SI-145-1	SI145-7	弥生土器	壺	全体の1/2の残存 (口唇部は1/8の残存)	(10.9)	10.4	10.7 体部最大径下位	4.6	小型で体部最大径を下位にもち、頸部は直立気味、口縁部は複合口縁で外反しない。頸部には斜縄文(LR)が部分的にみられ、複合口縁と口唇部も斜縄文(LR)が施される。 体部下両面にはヘラミガキがなされ、口唇部内面には指頭痕が残る。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも黄褐色、褐灰色、明黄褐色	良好	
SI-145-2	SI145-22	弥生土器	甕	底部片60%の残存				5.8	大きく開く、両面ともナデ調整。	小礫(2mm以下)を含む。	両面ともにぶい黄褐色と浅黄褐色	やや不良	
SI-145-3	SI145-8	弥生土器	(甕)	底部片70%の残存				7.8	少し厚手で大きく開き、外面はユビナデとヘラミガキ。内面はユビナデ。	小礫(1mm大以下)を含む。	両面とも黄褐色と橙色、一部褐灰色	良好	
SI-145-4	SI145-18	縄文土器	深鉢	胴中位から口縁部片1/4弱の残存	(32.4)				やや丸みをもって直立する。 外面胴下半部は条痕がナデによって消されている。 外面胴上部から口縁部は、円形の刻目をもつ突帯と斜行する沈線の組み合わせ。 内面は条痕が残る。	繊維を含む。	外面は赤褐色、黒褐色、灰黄褐色 内面は暗褐色とにぶい黄褐色	少し不良	
SI-145-5.6	SI145-18	縄文土器	深鉢	口縁部と胴上部					両面とも貝殻条痕文、外面に突帯があり、縄文原体による刻目がなされ、口唇部は棒状工具による刻目。	繊維を含む。 小礫(1mm以下)を極少量含む。	外面はにぶい黄褐色と灰褐色 内面は黒褐色	良好	2点有り。同一個体として扱う。
SI-145-7	SI145-1. 16. 17. 19. 20	縄文土器	深鉢	胴部片1/3弱の残存					やや丸みをもって開いて立ち上がる。 両面とも貝殻条痕文で内面にはユビナデも残る。	繊維を含む。	外面は褐灰色、にぶい黄褐色、明褐色 内面は黒色、にぶい黄褐色、褐色	少し不良	
SI-146-1	SI146-7	弥生土器	(甕)	底部片1/4の残存				(3.4)		小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色と明黄褐色 内面はにぶい黄褐色	少し不良	
SI-146-2	SI146-3	弥生土器	甕	口縁部片					外面に粘土紐接合痕を1段残し、複合口縁とする。口唇部は指による押圧波状。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面は黒褐色とにぶい黄褐色 内面は灰褐色と褐色	少し不良	
SI-147-1	SI147-3	弥生土器	甕	底部(1/2強)から胴最下部(1/4)の残存				(5.4)	少し薄手で胴最下部はわずかに窪んでから丸みをもって開いて立ち上がる。 外面はヘラナデ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は灰黄色と浅黄褐色 内面は浅黄褐色とにぶい黄褐色	やや不良	
SI-148-1	SI148-5	弥生土器	甕	胴上部片					少し厚手(大型と考えられる)。外面にはユビナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は赤褐色と褐灰色 内面は明赤褐色	少し不良	内面に剝離が多い。
SI-148-2	SI148-1	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文(斜斜3段)を横位の沈線で上下から挟んで区画している。	黄褐色粒(1mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい黄褐色、外面の一部は赤色	少し不良	外面の無文部は赤彩。
SI-149-1	SI149-2	(弥生土器)	鉢	口縁部片1/2弱の残存	(16.0)				外面には斜めの条痕状の文様が施されている。内面はナデ。	小礫(3mm以下)を含む。	両面とも明褐色と明黄褐色、内面の一部は灰黄褐色	良好	
SI-150-1	SI150-122	弥生土器	鉢	体部から口縁部片1/4の残存	(17.8)				体部は施状に立ち上がり、口縁部は丸みをもって直立。口縁部には下位に2段横位のS字状結節縄文、上位に羽状縄文(下からRL, LR)が施される。外面の体部と内面全体に横及び斜め方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。 白色粒が目立つ。	両面とも橙色と赤褐色	良好	外面の体部と内面全体は赤彩されているとみられる。
SI-150-2	SI150-74	弥生土器	鉢	口縁部片1/4の残存	(15.4)		(15.8) 口縁部中位		体部は半球状と考えられ、口縁部は横位の沈線で斜縄文(RL)が区画され、口唇部も斜縄文(LR)が施されている。 体部の外面と内面全体は横方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも明黄褐色と赤褐色	良好	外面の体部と内面全体は赤彩されているとみられる。

第66表 竪穴住居跡出土土器観察表(47)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-150 -3	SI150-1. 22.38	弥生土器	甕	胴部から頸 部片1/2の残 存			18.3 胴部 最 大径 中位		胴部は球状、頸部は長く、 粘土紐接合痕を5段残す。	緻密	両面とも橙色	良好	
SI-150 -4	SI150-55 -59	弥生土器	壺	底部から胴 下部				6.6	胴最下部はわずかに窪ん でから大きく開いて立ち上 がる。 外面は横方向のヘラナデ、 内面は縦方向のヘラミガキ。	小礫(2mm以 下)を多く含 む。 白色粒が目 立つ。	両面とも褐色	良好	
SI-150 -5	SI150-23	弥生土器	甕	口縁部片					粘土紐接合痕を6段残し外 反する。口唇部は指による 押圧波状。	小礫(3mm以 下)を極少量 含む。	両面ともい い黄褐色	良好	
SI-150 -6	SI150-27. 76	弥生土器	壺	胴上部片					下位は羽状縄文(斜縄文3 段)を横位の沈線で挟み区 画し、上位も斜縄文を横位 の沈線で区画している。	小礫(3mm以 下)を多く含 む。 黄褐色粒が目 立つ。	外面は灰黄褐色、 黒色、暗赤褐色 内面はいい黄 褐色	普通	外面の無文 部は赤彩。
SI-150 -7	SI150-72	弥生土器	壺	胴上部片					下位より羽状縄文を沈線 で区画した山形文。 2段のS字状結節縄文、斜 縄文(RL)。	緻密	両面とも明黄褐 色、外面の一部 は赤彩	少し不良	外面の無文 部は赤彩。
SI-151 -1	SI151-61. 63.68.69	弥生土器	甕	頸部(1/4弱) から口縁部 (1/8)	(28.8)				頸部は長めで外反はやや 少ない。刷毛目を地文とし て羽状のヘラ描き沈線が施 される。口唇部は縄文原体 による刻目、内面は刷毛目 痕が残る。	緻密	外面は明赤褐色 と橙色 内面は褐色	不良	
SI-151 -2	SI151-51	弥生土器	(壺)	底部から胴 最下部1/4の 残存				(5.6)	胴最下部は、わずかに窪 んだ後、大きく開いて立ち 上がる。外面はヘラナデと ヘラミガキ、一部に指頭痕 がある。内面はミガキにち かいヘラナデ。	緻密	外面は褐色 内面は黒褐色、 褐色、にい赤 褐色	良好	
SI-151 -3	SI151- 4. 49.50	弥生土器	(甕)	底部から胴 最下部1/2強 の残存				5.8	少し厚手で、外面は下端 が横方向のヘラケズリ、下 部は縦方向のヘラミガキ、 内面はヘラナデ。	小礫(2mm以 下)を多く含 む。	外面はいい橙 色と褐色 内面はいい橙 色	不良	両面とも摩 耗が多い。
SI-151 -4	SI151-64	弥生土器	甕	口縁部片					粘土紐接合痕を1段残し、 複合口縁となり、口唇部は 指による押圧波状。 両面ともユビナデがなさ れる。	小礫(2mm以 下)を少量含 む。	両面とも灰黄褐 色、内面の一部 は黄褐色	良好	
SI-151 -5	SI151- 1. 36	弥生土器	甕	口縁部片					外反し、口唇部は指によ る押圧波状、両面とも横方 向のユビナデ。	小礫(1mm以 下)を少量含 む。	外面は灰黄褐色 内面は浅黄褐色 とにい黄褐色	普通	
SI-151 -6	SI151-42	弥生土器	甕	頸部片					少し長い頸部と考えられ、 粘土紐接合痕が5段まで認 められる。両面ともユビナ デ。	小礫(5mm以 下)を含む。	外面はいい黄 褐色 内面は灰黄褐色 と黒褐色	良好	
SI-152 -1	SI152-18. 19.24	弥生土器	鉢	胴上位から 口縁部1/4弱 の残存	15.8				大型の鉢で、胴部は球状 で口縁部は内傾する。口縁 部は複合口縁で下端には縄 文原体による刻目、複合部 と体上部は羽状縄文(体上 部は細い横位の沈線で区画 される)。	小礫(1mm大 以下)を多く 含む。	外面は黒褐色、 赤褐色、暗赤灰 色 内面は褐灰色	普通	
SI-152 -2	SI152-4.5	弥生土器	鉢	全体の1/4の 残存	(8.4)		(9.9) 体部 最 大径 上位	(4.6)	小型で碗状で口縁部は内 傾する。口縁部に焼成前の 穿孔が一点みられる。 体部外面は横方向のヘラ ナデ。	小礫(1mm以 下)を多く含 む。	外面は褐色と明 黄褐色 内面はいい黄 褐色と明黄褐色	良好	
SI-152 -3	SI152-6	弥生土器	(甕)	底部片 60% の残存				5.2		小礫(1mm大 以下)を多く 含む。	外面は黒褐色、 黄褐色、暗赤褐 色 内面は褐灰色	普通	
SI-152 -4	SI152-9	弥生土器	甕	頸部から口 縁部片 口縁部は5% の残存					上部に粘土紐接合痕を5段 残している。口唇部は両面 からの指押圧による波状。	小礫(1mm以 下)を多く含 む。	外面はいい黄 褐色とにい黄 褐色 内面は明黄褐色 とにい黄褐色、 一部黒褐色	やや不良	

第67表 竪穴住居跡出土土器観察表(48)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-153-5	SI153-2.3	弥生土器	甕	底部から胴下部1/4の残存				(6.0)	胴下部は大きく直線的に開いて立ち上がる。外面は横方向のヘラミガキ、内面はユビナデ。	橙色粒(2mm以下)を多く含む。	外面は橙色と黒褐色 内面は褐灰色、黒褐色、黄褐色	普通	
SI-153-6	SI153-1	弥生土器	壺	胴上部片					ヘラ描き沈線と斜縄文を沈線で区画し山形文をつくる。	淡黄色粒(1mm大以下)を多く含む。	外面は橙色と赤色 内面は浅黄褐色	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-153-7	SI153-1	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文を横位の沈線で区画。	淡黄色粒(2mm大以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色と暗赤色、一部は褐灰色 内面は浅黄褐色	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-153-8	SI153-1	弥生土器	甕	頸部片					粘土紐接合痕が3段みられる。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は褐灰色 内面はにぶい黄褐色	少し不良	
SI-154-9	SI154-1	弥生土器	壺	胴部片					羽状縄文を少し細い横位のヘラ描き沈線で区画する。	酸化鉄粒(5mm以下)を少量含む。	外面は明黄褐色と黄褐色と赤褐色 内面は明黄褐色、灰黄褐色	やや不良	
SI-154-10	SI154-1	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を沈線で区画し、山形文などをつくる。	淡黄色粒(2mm以下)を含む。	外面は浅黄色と赤色 内面は浅黄褐色	少し不良	
SI-155-1	SI155-8	弥生土器	(甕)	底部から胴最下部片1/3の残存				5.8	底部はやや小さく、厚手、胴部外面は横方向のヘラケズリと縦方向のヘラナデ、内面はヘラナデ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は黒褐色、にぶい褐色 内面はにぶい褐色とにぶい橙色	やや不良	両面とも摩耗が多い。
SI-155-2	SI155-1	弥生土器	壺	口縁部片					複合口縁で、粘土紐を2段貼りつけ、上部に縄文原体による刻目を施す。断面三角形となり外面にはLRの斜縄文がある。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は浅黄褐色 内面は暗赤色	少し不良	内面は赤彩。
SI-155-3	SI155-3	弥生土器	甕	胴下部片					斜めに開いて直線的に立ち上がる。 両面とも刷毛目調整がなされる。	緻密 灰白色粒(2mm以下)を極少量含む。	外面は橙色と黒褐色 内面は褐灰色と浅黄褐色	普通	外面に煤付着。
SI-156-4	SI156-5	弥生土器	(甕)	底部片90%の残存				5.4	少し小型の底部で厚手、胴最下部は直線的に開いて立ち上がる。 外面はヘラナデ、内面はユビナデがみられる。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は黒褐色とにぶい褐色 内面は橙色	やや不良	
SI-156-5	SI156-1	弥生土器	甕	口縁部片					両面に粘土接合痕を1段残し、口唇部は両面からの指による押圧波状、両面ともユビナデ。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面は灰黄褐色 内面は橙色	やや不良	
SI-156-6	SI156-16	弥生土器	壺	口縁部片					短い複合口縁で、口唇部は断面三角形。複合部突出面に縄文原体による刻目を施す。上面はRLの斜縄文。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は橙色と浅黄褐色 内面は赤色	やや不良	両面赤彩。
SI-156-7	SI156-18	弥生土器	壺	胴上部片					2段の羽状縄文を横位のヘラ描き沈線で上下より区画している。内面は横方向のユビナデ。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	両面とも褐灰色 外面は赤灰色	少し不良	
SI-156-8	SI156-7	弥生土器	甕	胴下部片					外面は縦方向の細い刷毛目調整。	緻密	両面とも褐灰色とにぶい黄褐色	普通	外面に煤付着。
SI-156-9	SI156-9	弥生土器	甕	頸部片					外面と内面の一部にヘラによる櫛状の沈線が施される。(外面は縦方向、内面は横方向)	小礫(2mm以下)を含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は明黄褐色	普通	

第68表 竪穴住居跡出土土器観察表 (49)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-157-1	SI157-4 ~6.10.15	弥生土器	甕	全体の1/3の残存	(20.2)	(19.4)	(18.5) 胴部最大径上位	(5.4)	胴部は半球状、最大径は上部、頸部下位に粘土紐接合痕を1段残す。また上位に2ヶ所接合痕がわずかに認められる。口唇部は両面からの指頭押圧による波状を示す。外面胴下部は縦方向のヘラミガキ。胴上部から頸部はヘラナデ。内面の胴部はヘラナデ。頸部はミガキに近いヘラナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は黒褐色と褐色 内面は灰褐色、褐色とにぶい褐色	良好	内面は擦過痕が多い。
SI-157-2	SI157-12	弥生土器	(甕) 底部片					6.6	胴最下部がわずかに窪み、胴部は少し開いて立ち上がる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラナデツケの後、ユビナデ。	小礫(2mm以下)を極少量含む。	外面は褐色 内面は灰褐色とにぶい褐色	やや不良	
SI-158-1	SI158-8 ~13.222~224	弥生土器	甕	全体の90%の残存	15.5	17.0	16.7 胴部最大径中位	7.0	胴部は球形、頸部はやや短くなる。頸部には粘土接合痕が6段ある(指頭痕が残る)。口唇部は両面からの指頭押圧による波状。外面の胴下半部は縦方向のヘラミガキ。内面も全体が横方向のヘラミガキ、他はナデ。	小礫(3mm以下)を含む。	外面は黒色と黒褐色、一部明赤褐色 内面は褐色、褐灰色、一部明黄褐色	良好	
SI-158-2	SI158-60	弥生土器	甕	胴部中位から口縁部1/4弱の残存	(24.4)		(20.5) 胴部最大径上位		胴部最大径は上位にあり、口縁部は外反、頸部は短く下端に粘土接合痕を1段残す。口唇部は、両面からの指頭押圧による波状、両面ともナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	両面ともににぶい黄褐色、外面の一部は褐色	わずかに不良	
SI-158-3	SI158-1.115.118.119	弥生土器	甕	胴上部から口縁部1/4の残存	(19.2)		(15.2) 胴部最大径上位		胴部最大径は中位で、張り弱い。頸部から口唇部は、両面からの指頭押圧により波状、両面ともユビナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は灰黄褐色 一部は褐色 内面は黄褐色と褐灰色	普通	
SI-158-4	SI158-162.164.166.187.284	弥生土器	甕	胴下部から口縁部まで1/2強の残存	19.8		17.5 胴部最大径上位		胴部最大径は上位で、頸部は少し長く、口縁部は少し外反し最大径を計る。頸部下位には粘土紐接合痕で1本の段をつくる。口縁部も段をつくり複合口縁。口唇部は両面からの指頭押圧による波状、両面ともユビナデ調整。	小礫(1mm以下)を極少量含む。	両面とも褐色、外面の一部はにぶい黄褐色	少し不良	
SI-158-5	SI158-22.105	弥生土器	甕	胴上部から口縁部片1/4弱の残存	(14.4)				胴部は球状と考えられ、頸部は短くなり、口縁部は少し外反する。口唇部は両面からの指頭押圧で波状。外面は荒いヘラツケズリ、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも黒色、にぶい黄褐色、一部明赤褐色 内面の一部はにぶい赤褐色	良好	
SI-158-6	SI158-252.284	弥生土器	甕	口縁部片1/6の残存					大きく外反し、粘土紐接合痕が明瞭に4段まで認められ、口唇部は両面からの指頭押圧による波状。両面ともユビによる横方向のナデ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は暗褐色と黒褐色 内面はにぶい黄褐色	普通	
SI-158-7	SI158-1.168	弥生土器	甕	口縁部片1/4弱の残存					外反し、粘土紐接合痕は5段まで認められるが、少し不明瞭な部分もある。口唇部は外面からの指頭押圧による波状。両面ともユビによる横方向のナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は浅黄褐色	わずかに不良	
SI-158-8	SI158-94.98.99	弥生土器	甕	頸部から口縁部片1/8の残存	(21.8)				頸部から外反する口縁部に粘土紐接合痕を6段までみられる。口唇部は指による押圧波状文。	緻密	両面ともににぶい黄褐色と灰黄褐色	普通	
SI-158-9	SI158-157.159	弥生土器	甕	胴部1/4弱の残存			(20.5) 胴部最大径下位		球状の胴部であるが最大径はやや下位にある。胴上位に粘土紐接合痕を段として残している。胴部外面はナデ、上部接合痕部分は指頭痕が残る。内面は全体に横方向のヘラミガキがなされる。	小礫(2mm以下)を含む。	両面とも褐灰色と黒褐色一部赤褐色	良好	
SI-158-10	SI158-3.5.138.139.142.246.284	弥生土器	甕	胴下部から頸部まで1/4の残存			20.7 胴部最大径中位		胴部は球状で長い頸部には粘土紐接合痕を6段残す。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色と褐灰色 内面は明黄褐色とにぶい黄褐色	良好	
SI-158-11	SI158-43.54.284	弥生土器	甕	胴中位から胴上位片1/2弱の残存					やや小型で丸みを帯びる。粘土紐接合痕を5段まで認められるが少し不明瞭な部分もある。最下段には縄文原体による押圧刻みが施される。外面はユビによる横方向のナデ、内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	外面は褐色、にぶい黄褐色、黒褐色 内面は明黄褐色とにぶい黄褐色	少し不良	
SI-158-12	SI158-189	弥生土器	甕	底部から頸部1/2の残存			21.5 胴部最大径上位	6.0	胴部最大径よりわずかに口径が大きいと推定される。肩部には粘土紐接合痕を残し段をつくる。頸部は少し長い。両面ともユビナデ、特に外側は丁寧なナデ。底部中央に焼成後の穿孔がある。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面はにぶい黄褐色、褐色、一部は褐灰色 内面は黒褐色と褐色	やや不良	胴上部外面に煤付着。甕に転用している。
SI-158-13	SI158-186	弥生土器	壺	頸部から口縁部100%の残存	14.5				頸部は細く長い。口縁部は大きく外反し、短く少し厚い複合口縁をもつ。文様は下位より斜縄文を横位の沈線、区画、羽状縄文を横位の沈線、上下を挟んで区画、複合部では下端に縄文原体による刻目、上部は斜縄文(RL)が各々施される。無文部及び上位はヘラミガキ。	緻密	両面とも黄褐色と赤色	わずかに不良	外面の無文部と内面の口縁上部には赤彩がみられる。

第69表 竪穴住居跡出土土器観察表 (50)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-158-14	SI158-219 ~221	弥生土器	壺	頸部片 70%の残存					細く長い頸部で中央に羽状縄文(斜状3段)が上下を横位の沈線で挟まれて区画されている。無文部はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも橙色 内面の一部は浅黄褐色	不良	外面の無文部は赤彩、内面はかなり摩耗している。
SI-158-15	SI158-69 ~71. 211~213. 284	弥生土器	壺	胴上部から 頸部中位片 60%の残存					胴部は球状で大形の壺と考えられ、頸部に羽状縄文を横位の沈線で区画した文様が施される。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は赤色とに ぶい黄褐色 内面は橙色	不良	外面の無文部に赤彩、両面とも摩耗が多い。
SI-158-16	SI158-29. 30.31.35. 36.47.147. 148.230. 231.233. 284	弥生土器	鉢	全体の1/2強 の残存					大型で少し浅めである。体下位から中位は直線的に開き、体上部は丸みを持つて内傾して行く。外面は羽状縄文(2段)を横位の沈線で区画する。また、口頸部も斜縄文(LR)がなされる。また、羽状縄文内に焼成前の穿孔が2点みられる。無文部は両面ともヘラミガキ。	橙色粒(2mm以下)を多く含む。	外面はにぶい黄褐色と暗赤褐色 内面は黒色と明赤褐色	やや不良	両面とも赤彩。
SI-158-17	SI158-20. 284 (SX-17-2 J-08.a-7)	弥生土器	鉢	体上部から 口縁部片1/4 以下の残存				(23.0)	やや厚手で丸みをもって開く。口縁部外面は羽状縄文2段。口唇部も斜縄文(RL)が施される。他はユビナデ。	緻密	外面は浅黄褐色 と赤色	良好	両面とも無文部は赤彩。
SI-158-18	SI158-48. 52.72.190	弥生土器	甕	底部から口 縁部片1/2強 の残存				8.2	少し大型で、胴下部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は橙色、明黄褐色、黒褐色 内面は浅黄褐色、明黄褐色、黒褐色	良好	
SI-158-19	SI158-41	弥生土器	鉢	口縁部欠損 底部から (100%)体上部 片(40%) の残存				7.2	やや大型で、体部は直線的に開く。体下部外面は縦方向のヘラミガキ、上部には横位の沈線がみられる。	小礫(2mm以下)を非常に多く含む。 特に白黄色粒が目立つ。	外面は明赤褐色、明黄褐色、黒褐色 内面は明赤褐色、黒色、黒褐色	不良	両面とも赤彩。
SI-158-20	SI158-124. 125.126. 241	弥生土器	甕	底部から胴 下位(40%) の残存				11.7	かなり大型で厚手である。外面は刷毛目、内面はユビナデ痕が残る。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は黄褐色と 浅黄褐色 内面はにぶい黄褐色と浅黄褐色	やや不良	
SI-158-21	SI158-18	弥生土器	甕	底部から胴 下部1/4の残 存				(5.8)	胴部は直線的に大きく開く。外面はヘラナデとヘラミガキ、内面はユビナデ。	小礫(3mm以下)を多く含む。	外面は明黄褐色、一部褐灰色 内面は黒褐色とにぶい黄褐色	普通	
SI-158-22	SI158-169	弥生土器	甕	底部(100%) から胴下位 (40%)				6.4	胴部は大きく開き、外面はヘラナデとヘラミガキ、内面はナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも黄褐色、 外面の一部はにぶい黄褐色と黒褐色	少し不良	
SI-158-23	SI158-25	弥生土器	壺	底部から胴 下部1/3の残 存				(6.2)	胴部は丸みをもって立ち上がる。外面はヘラナデとヘラミガキ、内面はヘラナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は黄褐色と 浅黄褐色 内面は橙色とにぶい黄褐色	良好	
SI-158-24	SI158-116	弥生土器	甕	底部から胴 下部1/4の残 存				(6.0)	胴部下位はやや直線的に開く。両面ともヘラミガキがなされている。	明褐色粒(2mm以下)を多く含む。	両面とも橙色と 浅黄褐色	少し不良	両面とも摩耗している。
SI-158-25	SI158-197	弥生土器	甕	底部片100% の残存				5.8	底部中央が焼成前に穿孔される。	浅黄褐色粒(1mm以下)を含む。	外面は浅黄褐色とにぶい黄褐色 内面は灰黄褐色と浅黄褐色	不良	
SI-159A-1	SI159A-59	弥生土器	鉢	全体の80% の残存	22.2	10.4	22.2 口縁部	7.0	体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は直立する。体上部から口縁部にかけて、下位に横方向の斜縄文(LR)がみられる。他は丁寧なヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも明黄褐色と橙色	良好	両面とも赤彩有り。
SI-159A-2	SI159A-1.60	弥生土器	鉢	全体の90% の残存	23.4	9.9	23.5 口縁部	6.1	体部は直線的に開き、口縁部は丸みをもって直立する。口縁部に下位を横方向の沈線で区画された羽状縄文(斜縄文3段)と口唇部に斜縄文(RL)が施される。他はすべて丁寧なヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を含む。 白色粒を多く含む。	両面とも明黄褐色と赤褐色	良好	両面とも赤彩有り。
SI-159A-3	SI159A-1.16~18. 38.39.61. 65.66.68. 70~72.75 ~79.81	弥生土器	鉢	口縁部付近 を欠損			27.1	6.7	少し厚手、大型で少し丸みをもって大きく張り、口縁部は内傾すると考えられる。体上部外面は縦方向のヘラミガキ。 口縁部は複合口縁で下端に縄文原体による押捺、複合部は斜縄文、他は両面とも丁寧なヘラミガキ。	酸化鉄粒(2mm以下)を含む。	外面は黄褐色と 赤褐色 内面はにぶい黄褐色	良好	外面の無文部と内面は赤彩。

第70表 竪穴住居跡出土土器観察表(51)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-159A-4	SI159A-43.61	弥生土器	壺	頸部から口縁部片	16.0				頸部は細く長い、口縁部は短い複合口縁、文様は、頸部上位に2段の羽状縄文を横位の沈線で下位を区画、複合部も羽状縄文、下端を縄文原体による刻目。 外面の無文部と内面の口縁部は丁寧なヘラミガキ、他の内面はナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	両面とも明黄褐色と明赤褐色	良好	両面赤彩あり。
SI-159A-5	SI159A-58	弥生土器	壺	底部から頸部までの破片			18.7 胴部最大径 下位	5.3	胴部下位が大きく張り出し、最大径をもつ、頸部は細く長い、文様は胴上部下位より横位の沈線で上下を区画された羽状縄文があり、頸部上位の沈線上に円形浮文が4ヶ所貼り付けられる。模様の間と胴下部、内面の口縁部付近は、丁寧なヘラミガキ、外面の口縁部付近はヘラナデ。	小礫(2mm以下)を含む。 特に白色粒を含む。	両面とも橙色	良好	
SI-159A-6	SI159A-1.16~18.39.61.65.69~72.75.77.78	弥生土器	甕	全体の90%の残存	22.0	20.8	21.7 胴部最大径 上位	6.0	胴部最大径は上位にあり、頸部から口縁部にかけて6段の粘土紐接合痕を残す。口唇部は指による押圧で波状。両面ともナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色と褐灰色、内面は褐灰色とにぶい黄褐色	普通	外面胴上部に煤付着。
SI-159A-7	SI159A-1.3.12~14.29~32.34~36.52.56.61.89	弥生土器	甕	全体の60%の残存	20.2	19.0	18.1 胴部最大径 上位	6.2	胴部最大径は上位で、頸部から口縁部は、粘土紐接合痕6段をわずかに残す。最上段は複合口縁に段を明瞭に残す。口唇部は外面からの指押圧による波状。 外面の胴下半はヘラミガキ、他はナデ。 また、底部中央に焼成後の穿孔が成される(甕に転用)。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黒色と褐色、内面は褐灰色と明黄褐色	やや不良	胴上部から頸部は煤が付着、内面は剥離が多い。
SI-159A-8	SI-159A-1.5~9.20~23.44.45.50.51.53.54.56.67.80(159B-56)	弥生土器	壺	口縁部から頸部片	30.3				細く長い頸部を持ち、口縁部は複合口縁、頸下部に2次的な穿孔(5ヶ所)がみられる。頸下位は、羽状縄文とその上中央に3段のS字状結節文が施される。また、上下並行する沈線で区画される。複合部は羽状縄文が施され、中央に円形竹管文、一部に円形浮文が貼られている。下端は縄文原体による刻目。無文部は両面とも横と縦方向のヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を含む。 白色粒が目立つ。	両面とも橙色と明赤褐色	良好	両面とも無文部は赤彩が成される。器台に転用。
SI-159A-9	SI159A-1.21.41.47.88	弥生土器	鉢	口縁部付近を欠損			25.6 体部最大径 上位	6.1	大型で少し丸みをもって大きく張り、口縁部は内傾すると考えられる。体上部外面は縦方向のヘラミガキ。	白色粒(1mm以下)を多く含む。	外面は橙色、内面はにぶい黄褐色	良好	両面とも摩耗が激しい。
SI-159A-10	SI159A-2	弥生土器	壺	口縁部と底部を欠損			9.6 体下部	4.4	小型で最大径は体下部にあり、頸部は細い。外面は丁寧なヘラミガキ、内面はユビナデ、頸部付近内面には粘土紐接合痕をわずかに4本残す。	小礫(3mm以下)を少量含む。	両面とも橙色	良好	
SI-159A-11	SI159A-26	弥生土器	甕	底部片70%の残存				6.6	胴最下部は窪みをもち、その後開きぎみに立ち上がる。	小礫(2mm以下)を多く含む。 黄褐色粒が目立つ。	外面はにぶい黄褐色と明黄褐色、内面はにぶい黄褐色と浅黄褐色	やや不良	
SI-159B-12	SI159B-56	弥生土器	甕	底部付近1/4の残存				(6.8)	胴最下部は少し丸みをもって立ち上がる。底部中央は焼成前の穿孔、少し厚手。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は褐色と黒褐色、内面は黒褐色と明赤褐色	少し不良	
SI-159B-13	SI159B-56	弥生土器	甕	底部付近1/4の残存				(8.6)	胴最下部の立ち上がりは直線的。外面は横方向のヘラミガキ、内面は後縦方向のヘラミガキ、底部に木ノ葉痕。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は褐色、内面は黒褐色	少し良好	
SI-159B-14	SI159B-56	弥生土器	鉢	口縁部片					碗状に立ち上がる。口唇部に斜縄文(LR)。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黄褐色と明黄褐色、内面は褐灰色とにぶい黄褐色	良好	
SI-159B-15	SI159B-56	弥生土器	(甕)	口縁部片					上部に粘土紐接合痕を1本残し段をつけ複合口縁になっている。両面ともユビナデ。	酸化鉄(3mm以下)を含む。	両面とも明黄褐色	少し不良	外側は少し摩耗。
SI-159B-16	SI159B-56	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文上に横位の細い沈線を配する。内面はユビナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は褐灰色、灰黄褐色、赤褐色、内面は褐色	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-160-1	SI160-1	弥生土器	甕	口縁部片					3段まで粘土紐接合痕が認められる。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は褐色とにぶい黄褐色、内面は褐色	少し不良	
SI-160-2	SI160-15	弥生土器	甕	口縁部片					口縁部は開いており、内面に粘土紐接合痕を残し段をつくる。口唇部はヘラによる刻目。口縁部外面は櫛描き文(5本単位)、内面はナデ。	小礫(2mm以下)を含む。 褐色粒が目立つ。	外面は黒褐色、内面は暗赤褐色	良好	

第71表 竪穴住居跡出土土器観察表(52)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-160 -3	SI160-1	弥生土器	甕	頸部片					粘土紐接合痕が2段認められる。両面ともユビナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は褐灰色とにぶい黄橙色 内面はにぶい黄橙色	不良	両面とも少し摩耗している。
SI-160 -4	SI160-32	弥生土器	甕	胴部片					外面はユビナデ後、ヘラによる櫛描き文、内面はユビナデ。	小礫(1mm大以下)を極少量含む。	外面は灰黄褐色 内面は橙色	普通	
SI-160 -5	SI160-1	弥生土器	壺	胴上部片					細かい羽状縄文(斜縄文3段)を細い横位の沈線で区画する。	黄橙色粒(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄橙色 内面は浅黄橙色	少し不良	外面は少し摩耗する。
SI-160 -6	SI160-6	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文と2段のS字状結節縄文。	小礫(1mm大以内)を含む。	外面は暗赤褐色、にぶい黄褐色 内面は褐灰色、にぶい橙色	やや不良	無文部は赤彩。
SI-160 -7	SI160-1	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文。無文部はユビナデ、内面もユビナデ。	小礫(1mm以下)を極少量含む。	外面は橙色 内面は灰黄褐色	普通	
SI-160 -8	SI160-1	弥生土器	壺	胴上部片					結束羽状縄文(結束斜縄文3段)、内面はユビナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。 白灰色粒が目立つ。	両面とも明黄褐色	少し不良	
SI-160 -9	SI160-12	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を横位の沈線で区画する。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも黄橙色とにぶい黄橙色	不良	
SI-160 -10	SI160-1	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は褐灰色と橙色 内面は橙色	普通	
SI-160 -11	SI160-1	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文。	小礫(2mm以下)を多く含む。 白色粒が目立つ。	両面とも明黄褐色	少し不良	内面は摩耗が多い。
SI-161 -1	SI161-9	弥生土器	甕	胴上部から 口縁部片	(16.6)				胴上部はあまり張っていない。口縁部は外反し、口唇部は指による押圧波状。口縁部から頸部外面は刷毛目、内面は横方向のナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも橙色	良好	
SI-161 -2	SI161-6. 21.34.35. 38	弥生土器	甕	胴部片			23.1 胴 部 最 大 径 中 位		球状の胴部を持つ。胴上部に粘土紐接合痕を残して段が見られる。外面は斜方向のヘラナデ、内面はナデ。	酸化鉄粒(1mm以下)を少量含む。	外面は褐色 内面は明褐色	良好	
SI-161 -3	SI161-13	弥生土器	(高坏)	胴上部と坏 体下部					脚部はやや幅広い。坏下部も直線的に開く、坏部の両面はヘラミガキ(外面は縦方向、内面は横方向)	白色粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも明赤褐色と橙色	良好	外面は赤彩。
SI-161 -4	SI161-2	弥生土器	壺	底部から胴 下部片				6.4	胴最下部はわずかに窪んだ後に大きく開いて立ち上がり、しだいに球状になると考えられる。両面とも横方向のヘラミガキ。	小礫(2mm大以下)を多く含む。 特に白色粒が目立つ。	外面は明赤褐色と明黄褐色 内面はにぶい黄褐色	良好	外面は赤彩。
SI-161 -5	SI161-42	弥生土器	壺	底部から胴 下部片				10.6	大型の壺と考えられ、厚手で、胴最下部がわずかに窪んだ後に開いて立ち上がる。外面は丁寧な縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のナデ。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面は暗赤褐色と明黄褐色 内面は浅黄橙色	良好	外面は赤彩。
SI-161 -6	SI161-41	弥生土器	壺	底部から胴 下部片				5.1	胴下部はかなり開いて立ち上がる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のナデ。	小礫(1mm大以下)を少量含む。	外面は明黄褐色 内面はにぶい黄褐色	良好	

第72表 竪穴住居跡出土土器観察表(53)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-161 -7	SI161-22	弥生土器	鉢	口縁部片					口縁部は直線的に開く、外面は結束羽状縄文(結束斜縄文3段)、口唇部も斜縄文、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は暗赤褐色	少し不良	内面は赤彩(外面の無文部も赤彩の可能性有り)。
SI-162 -1	SI162-30	土師器	坏	全体の90%の残存	14.2	3.6			浅く幅広い、体上部に稜をもち、口縁部は外反。体部の外面は横方向のヘラケズリ、内面はユビナデ。	緻密 酸化鉄(3mm以下)をわずかに含む。	外面は黒色と明黄褐色、一部橙色	やや不良	
SI-162 -2	SI162-33	土師器	坏	全体の70%の残存	12.8	3.7	体部	13.9	やや浅く幅広い、体上部に稜をもち、口縁部は内傾。体部外面は横方向のヘラケズリ、内面はユビナデ。	緻密 酸化鉄(5mm以下)を少量含む。	外面は淡黄色と黄灰色 内面は淡黄色と黒褐色	やや不良	
SI-162 -3	SI162-42. 45	土師器	坏	全体の70%の残存	11.6	4.6	12.8 体上部		少し深く、小さめで、体部は丸みを帯びて、上部には稜をもち、口縁部は短く内傾する。 体部外面は荒いヘラケズリ、内面はユビナデ、体部上位には粘土紐接合痕が2段わずかに残る。	緻密	外面は黒褐色、一部橙色と黄灰色 内面はにぶい黄褐色と褐色	やや不良	
SI-162 -4	SI162-4. 32.42. 115	土師器	坏	体下部から底部欠損	15.2				体上部に稜をもち、口縁部は丸みをもち、口縁部は外反。 体部外面ヘラケズリ、内面はナデ。	緻密 酸化鉄(3mm以下)をわずかに含む。	外面は黒色と明黄褐色、一部橙色	やや不良	
SI-162 -5	SI162-22	土師器	坏	全体の50%の残存	14.2	3.6			浅く幅広く、体上部に稜をもち、口縁部は外反。体部外面は横方向のヘラケズリ、内面はユビナデ。	緻密 (5mm以下)を少量含む。	外面は灰黄色、暗灰黄色、黄灰色 内面は淡黄色、黒褐色、灰黄色	やや不良	
SI-162 -6	SI162-1. 8.21.43	土師器	坏	底部欠損	14.4				浅く幅広い、体上部に稜をもち、口縁部は外反。体部の外面はヘラケズリ、内面はナデ。	緻密 酸化鉄(3mm以下)をわずかに含む。	外面は暗灰黄色、明黄褐色 内面は淡黄褐色、一部橙色	少し不良	内面は少し剝離している。
SI-162 -7	SI162-27. 35	土師器	高坏	完形	16.6	13.0		11.8 脚 裾部 口径	全体的に少し小型で、脚裾部は大きく開き、柱状部はやや丸みをもち、細い。坏部は浅い碗状。脚柱状部は縦方向のヘラケズリ、坏体部は横方向のヘラケズリ、坏口縁部には粘土紐接合痕をわずかに残す。 坏部内面と脚内面は横方向のナデ。	緻密 酸化鉄粒を少量含む。	両面とも橙色	良好	
SI-162 -8	SI162-37	土師器	甕	胴上部から口縁部片	19.4				長胴の甕と考えられ、最大径は胴部上位であろう。外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は橙色 内面は明褐色	良好	
SI-162 -9	SI162-20. 25.26.29. 31.39	土師器	甕	ほぼ完形	29.8	24.9		9.3 孔径	丸みをもち、鉢状に開いて立ち上がり、口縁部は外反、口唇部は丸みを帯びる。外面の胴部はヘラケズリ、内面はナデ。	酸化鉄粒 (2mm以下)を多く含む。	両面とも橙色	良好	
SI-162 -10	SI162-28	土師器	甕	ほぼ完形	17.4	33.7	2.1 胴 上 部 最大径	6.9	長胴の甕で最大径は胴上部、口縁部は外反し、口唇部少し厚い。 胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のナデ。	小礫(3mm以下)を多く含む。	外面は灰黄褐色 内面は褐色	良好	
SI-162 -11	SI162-35	土師器	甕	80%強の残存	15.1	14.3	15.7 胴 部 最 大 径 上 位	6.1	少し小型で胴部はやや長く、胴部最大径は上位、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、坏体部は横方向のナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面ともにぶい黄褐色	良好	両面とも黒色処理。
SI-162 -12	SI162-24	土師器	高坏	坏部のみ	22.2				やや浅い碗状で、体中位下に稜をもち、また口縁部下にヘラ描き沈線が横位に存在する。 外面と内面の口縁部は横方向のヘラミガキ、内面は縦方向のヘラミガキ。	緻密 酸化鉄粒を少量含む。	両面とも橙色	良好	
SI-163 -1	SI163-1	土師器	甕	口縁部片1/8の残存	(16.3)				口縁部は外反、胴部外面は縦方向のヘラケズリ、内面はユビナデとヘラミガキ。	小礫 (2mm以下)を少量含む。	外面は黒褐色と褐色 内面はにぶい赤褐色と赤灰色	良好	
SI-163 -2	SI163-1	土師器	甕	口縁部片1/10の残存	(14.1)				口縁部は大きく外反する。外面の胴部は縦方向のヘラケズリ、内面は口縁部から横方向のヘラナデ。	小礫 (1mm以下)を少量含む。	外面は黒褐色と褐色 内面はにぶい赤褐色と褐色	良好	

第73表 竪穴住居跡出土土器観察表(54)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-163 -3	SI163-1	土師器	(甕)	底部片 1/3強の残存				(7.3)	少し厚手で、両面ともヘ ラミガキ。	酸化鉄粒 (3mm以下) を少量含む。	外面は明黄褐色 と灰黄褐色 内面はにぶい黄 褐色	やや不良	
SI-163 -4	SI163-2	須恵器	甕	胴部片					外面は平行タタキ目、内 面は円形のアテ目をユビナ デで消している。	橙色粒 (2mm以下) を含む。	外面は灰色、オ リーブ黒色 内面は灰オリ ブ色	良好	
SI-163 -5	SI163-1	弥生土器	壺	頸部片					羽状縄文2段。	小礫 (1mm以下) を多く含む。	外面は黄褐色 内面は橙色	やや不良	
SI-163 -6	SI163-2	弥生土器	壺 (胴下部片)						結束羽状縄文 (結束斜縄 文3段)、内面は縦方向のヘ ラミガキ。	小礫 (2mm以下) を含む。	外面はにぶい黄 褐色 内面は赤色	普通	内面は赤彩
SI-163 -7	SI163-32	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を細い沈線で区画 し菱形文を形成する。 内面はヘラナデ。	小礫 (1mm以下) を多く含む。	両面ともにぶい 黄褐色と灰黄褐 色、外面の一部 は赤色	わずかに 不良	外面の無文 部は赤彩、 内面は擦過 痕多い。
SI-164 -1	SI164-5	弥生土器	甕	底部片 60%の残存				6.0	外面はヘラナデ、内面は ユビナデ。	小礫 (1mm以下) を含む。	外面は橙色、一 部褐灰色 内面は灰黄褐色	やや不良	外面は摩耗 している。
SI-164 -2	SI164-1	弥生土器	鉢	口縁部片					口縁部は丸みをもって直 立する。羽状縄文 (下より LR、RL) 口唇部に斜縄文 (LR) がそれぞれ施される。	橙色粒 (2mm以下) を多く含む。	外面は明黄褐色 と黒色 内面は赤色と一 部黄褐色	わずかに 不良	内面は赤彩。
SI-164 -3	SI164-1	弥生土器	壺	胴上部片					上下をS字状結節縄文に 挟まれた2段の羽状縄文。	小礫 (1mm以下) を含む。	外面は灰黄褐色、 にぶい黄褐色 内面は橙色	やや不良	
SI-164 -4	SI164-7.8	弥生土器	壺	胴部片 1/4弱の残存			(46.8) 胴 部 最 大 径 中 位		大型で胴部はかなり張る。 外面はヘラミガキ、内面は ヘラナデの後ユビナデ。	橙色粒 (3mm以下) を含む。	外面は赤色一部 浅黄褐色 内面は浅黄褐色 と灰黄褐色	やや不良	外面は摩耗 している。
SI-165 -1	SI165-2. 3.19	弥生土器	甕	胴上部から 口縁部片	(19.9)				胴部最大径は上位と考え られ、頸部はやや長く、粘 土紐接合痕が6段認められる。 口唇部は指押圧による波状。 外面の胴部は横方向のヘ ラナデ、内面は斜め方向の ヘラケズリ。	小礫 (1mm大以 下)を含む。 特に白色粒 を含む。	外面はにぶい黄 褐色 内面は褐色	良好	
SI-165 -2	SI165-20 ~22.25	弥生土器	壺	底部から胴 中位		21.6 胴 下 半 部 最 大 径			胴部最大径は胴部下位と みられる。外面はヘラミガ キとヘラナデ、内面は横方 向のヘラナデ。	小礫 (1mm以下) を含む。 酸化鉄と白色 粒も含む。	外面は暗赤褐色 と暗褐色 内面はにぶい黄 褐色	良好	外面の一部 に赤彩が見 られる。
SI-165 -3	SI165- 5. 6.8	弥生土器	壺	頸部片					細く長い形で、下位は横 位の沈線で上下を挟まれて 区画された羽状縄文、上部 から口縁部及び内面の口縁 部はヘラミガキ、内面は横 方向のナデ。	白色粒 (1mm以下) を含む。	外面は赤褐色と 明黄褐色 内面は赤褐色	良好	
SI-165 -4	SI165-12	弥生土器	(壺)	底部片				(7.1)	両面とも横方向のヘラミ ガキ。	小礫 (1mm大以 下)を含む。 特に白色粒 を多く含む。	外面はにぶい黄 褐色 内面は黄褐色	良好	
SI-165 -5	SI165- 1. 16	弥生土器	甕	底部と胴最 下部				(5.8)	やや丸みをもって立ち上 がる。	小礫 (1mm大以 下)を含む。 特に白色粒 を多く含む。	外面は暗赤褐色 内面は黒褐色	良好	
SI-166 -1	SI166-7	弥生土器	甕	胴上部片					胴上部に粘土紐接合痕を 残し段として、縄文原体に よる刻目を入れる。	小礫 (2mm以下) を含む。	両面とも褐色、 内面の一部は明 赤褐色	普通	

第74表 竪穴住居跡出土土器観察表(55)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-166-2	SI166-10	弥生土器	壺	胴部片					斜縄文の上に数条の沈線が施される。	明褐色粒(1mm大以下)を含む。	外面は橙色と浅黄褐色 内面は淡黄色	少し不良	内面は摩耗している。
SI-167-1	SI167-1.3.4	弥生土器	甕	口縁部(20%)他は60%の残存	(11.0)	9.9	11.6 体上部	5.8	小型で体上部に最大径をもつ。頸部は直立し、粘土紐接合痕を3段残す。口縁部の外反はわずかで口唇部は両面からの指押圧により波状。両面ともナデ調整(特に外面は荒い)。	黄褐色粒(2mm以下)を多く含む。	外面は黄褐色、暗褐色、一部橙色 内面は灰黄褐色と黒褐色	良好	
SI-167-2	SI167-8	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は両面からの指押圧による波状。両面とも横方向のナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい黄褐色 内面の一部は黄色と浅黄色	良好	
SI-168-1	SI168-48.98.126.128.130.131.135.136.141	弥生土器	甕	胴中位から口縁部1/5の残存	22.6		25.0 胴部最大径中位		やや大型の甕で胴部最大径は中位、頸部が長く外反する。口縁部は内面が粘土紐接合痕を残し、縄文原体による刻目を入れる。胴上部にも粘土紐接合痕を残した段に縄文原体の刻みを入れる。胴部外面は、ヘラナデの後ヘラミガキ、内面はヘラナデとユビナデの後ヘラミガキ、頸部から口縁部はヨコナデ。	緻密	両面とも灰黄褐色とぶい黄褐色、外面の一部は黒褐色	良好	
SI-168-2	SI168-46.76.77.107.111.140.141	弥生土器	壺	胴上部から頸部1/2弱の残存					頸部は細長い。中位は斜縄文を沈線で区画している。外面の体部はヘラナデ、内面はヘラナデの後、少し雑なヘラミガキ。	白色粒(1mm大以下)を多く含む。	外面は明褐色と黒褐色 内面はぶい黄褐色と暗褐色	やや不良	
SI-168-3	SI168-8.9.92.94.142	弥生土器	甕	胴中位から口縁部1/3の残存	(18.9)				最大径は口縁部にある。胴部最大径は上位、口唇部は両面からの指による押圧波状。口縁部に粘土紐接合痕を3段残す(やや不明瞭)。外面の胴部は斜め方向のヘラケズリ、口縁部はヘラナデ、内面も横方向のヘラナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	両面ともにぶい黄褐色	良好	
SI-168-4	SI168-142	弥生土器	甕	口縁部片	(15.5)				外反する。粘土紐接合痕を4段認められる。口唇部はヘラによる刻目、外面はヘラナデ、内面はヘラミガキ。	白色粒(2mm以下)を多く含む。	両面とも黄褐色とぶい褐色	良好	
SI-168-5	SI168-64	弥生土器	甕	底部から胴下部50%の残存				5.6	胴最下部はわずかに窪み、上部は丸みをもって開いて立ち上がる。外面はヘラナデの後ユビナデ、内面はユビナデ。	小礫(3mm以下)を多く含む。	外面は明赤褐色、灰褐色、ぶい赤褐色 内面は黒褐色と黄褐色	良好	
SI-168-6	SI168-95	弥生土器	壺	底部片				5.6	胴最下部の立ち上がりはあまり開かない。外面はヘラミガキ(縦方向)、内面もヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも明赤褐色、内面の一部は黒褐色	良好	
SI-168-7	SI168-142	弥生土器	壺	底部1/2の残存				6.5	やや広い底部をもち、底部外周が少しふくらむ。胴最下部の立ち上がりは直線的に開く。外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は橙色 内面はぶい黄褐色と褐灰色	良好	
SI-168-8	SI168-12	弥生土器	壺	底部片				5.4	胴最下部は直立、その後開いて立ち上がる。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの後ヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面はぶい赤褐色と橙色 内面は明赤褐色と褐灰色	良好	
SI-168-9	SI168-17	弥生土器	壺	底部				4.6	両面ともヘラナデ(外面は一部がケズリ)。	緻密	両面ともにぶい橙色、外面の一部は褐色	良好	
SI-168-10	SI168-50	弥生土器	壺	底部				4.1	小型で、胴最下部は少し直立した後に開いて立ち上がる。外面はヘラケズリ。	緻密	外面は赤色、ぶい褐色、ぶい黄褐色 内面は赤色他	やや不良	両面とも赤彩 内面は摩耗する。
SI-168-11	SI168-125	弥生土器	鉢	体上部から口縁部片					口縁部に4段の斜縄文(RL3段とR)、口唇部にRLの斜縄文が施される。他はヘラミガキ。	緻密	外面は赤褐色、ぶい黄褐色 内面は褐色とぶい黄褐色、一部黒褐色	良好	両面とも赤彩有り。
SI-169-1	SI169-1.8	弥生土器	鉢	体部から口縁部	19.0				体部は鉢状に立ち上がり、口唇部で直立する。口縁部付近は2段の羽状縄文を1本のやや細い横位の沈線で区画する。口唇部はRLの斜縄文、他は両面ともヘラミガキ。	白色粒(1mm大以下)を多く含む。	外面は暗赤褐色と褐色 内面は赤褐色と褐色	良好	両面とも無文部に赤彩。

第75表 竪穴住居跡出土土器観察表 (56)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-169-2	SI169-2	弥生土器	鉢	完形	11.6	9.6	15.1 体中位	3.0	底部は小さく、体中部は大きく張る。口縁部は下よりS字状結節縄文2段、羽状縄文(斜縄文3段)。その中程に焼成前の穿孔4ヶ所、口唇部は斜縄文(LR)が施される。他は内面も含めヘラミガキ。	酸化鉄粒(3mm大以下)を含む。	外面は明赤褐色と明黄褐色 内面は赤褐色と明褐色	良好	両面とも無文部に赤彩有り。
SI-169-3	SI169-5	弥生土器	鉢	体上部から口縁部片	(15.0)	10.8	19.0 体上部	5.4	体部最大径は体上部、口縁部は内傾する。複合口縁で下端は刻目、複合部は羽状縄文、口唇部も斜縄文(LR)が各々施される。また複合端部に円形の穿孔(焼成前)がみられる。	黄褐色粒(1mm以下)を多く含む。	外面は赤色、一部黒色、明赤褐色 内面は赤色、一部黒色、褐灰色	少し不良	両面とも無文部に赤彩。
SI-169-4	SI169-5	弥生土器	鉢	体上部から口縁部	10.0				体上部より内傾して立ち上がる。やや小型で複合口縁をもち、下端部は刻目。複合部斜縄文、口唇部もLRの斜縄文が各々施される。他は両面とも横方向のヘラミガキ。	白色粒(1mm大以下)を多く含む。	外面は暗赤褐色と褐色 内面は赤褐色と褐色	良好	両面とも無文部に赤彩。
SI-169-5	SI169-1.4.5	弥生土器	鉢	全体の60%の残存	(14.5)				体上部より内傾して立ち上がる。口縁部は複合口縁、下端部は刻目、複合部は羽状縄文、口唇部もLRの斜縄文が各々施される。	白色粒(1mm大以下)を多く含む。	外面は暗赤褐色と褐色 内面は赤褐色と褐色	良好	両面とも無文部に赤彩。
SI-169-6	SI169-1.16.19.18.20~22	弥生土器	鉢	体上部から口縁部	(13.8)		(14.7) 複合口縁部		体部は半球状、口縁部は短い複合口縁でわずかに内傾する。複合口縁部に縄文原体による押捺がなされる。上は羽状縄文、他は両面とも横方向のヘラミガキ。	白色粒(1mm以下)を含む。	両面とも暗赤褐色	良好	両面とも無文部に赤彩有り。
SI-169-9	SI169-1.8.9.11.13	弥生土器	甕	底部から胴下部				8.2	底部部がわずかに突出し、胴下部は丸みをもって開いて立ち上がる。 胴部外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のナデ。	白色粒(1mm大以下)を多く含む。	両面とも暗赤褐色	良好	
SI-170-7	SI170-2.14	弥生土器	(壺)	底部片				6.4	胴最下部は短く直立ぎみに立ち上がった後、大きく開く。外面はヘラクスリ後ヘラミガキ、内面もヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は明黄褐色とにぶい黄褐色	良好	
SI-170-8	SI170-25	弥生土器	(壺)	底部片				5.6	胴最下部は直線的に開く。外面はヘラクスリとナデ、内面はヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は褐灰色 内面はにぶい褐色	やや不良	
SI-171-1	SI171-1	弥生土器	鉢	全体の1/2弱の残存	(11.0)	7.0	10.8 体部最大径上位	3.8	小型の鉢で底部は平底、体部は半球状で最大径は上位、口縁部は短い複合口縁でやや外反、体部外面はヘラクスリの後ユビナデ、内面はヘラナデの後ユビナデ。口縁部は両面とも横方向のユビナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は黒褐色とにぶい褐色 内面は黒褐色と褐灰色	良好	
SI-172-2	SI172-2	弥生土器	高坏	坏下部片1/2強の残存					体下部は直線的に開く、外面はヘラクスリ後ヘラミガキ、内面はユビナデとヘラミガキ。	緻密	外面は赤褐色と一部はにぶい赤褐色 内面は赤褐色	良好	両面とも赤彩有り。
SI-173-1	SI173-57	弥生土器	壺	頸部から口縁部片	10.7				頸部は細長い、口縁部は外反し、短い複合口縁である。頸下部は、斜縄文と上に2段のS字状結節縄文、口縁部外面はLRの斜縄文、口唇部は少し外側に下がり、同じく斜縄文が施される。頸中位から上部と内面の口縁部は横方向のヘラミガキ。	白色粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも明赤褐色と黄褐色	良好	
SI-173-2	SI173-1.12.16~21.53~55.49.50.58.60.61	弥生土器	鉢	体下部から口縁部60%強の残存	14.0		19.0 体上部		体部は半球状、口縁部は長く直線的に内傾、粘土紐接合痕を1段残し(複合口縁状)、縄文原体による刻目、両面とも斜め方向のヘラミガキ。	緻密	外面は褐色と明黄褐色 内面は褐色と褐灰色、浅黄褐色	少し不良	内面は剥離が多い。
SI-173-3	SI173-1.11.33.36.37.39.40.46	弥生土器	甕	全体の60%の残存	19.5	20.3	20.7 胴部最大径中位	7.5	胴部は半球状、頸部は長くやや内傾する。口縁部は少し外反。胴上部に粘土紐接合痕を残し、縄文原体による刻目を施す。口唇部は指による両面からの押圧波状。 胴部は外面がヘラナデ、内面は横方向のヘラナデの後丁寧なユビナデ。	緻密	両面とも褐色とにぶい黄褐色、外面の一部は黒色	良好	胴上部に煤付着。
SI-173-4	SI173-54	弥生土器	鉢	全体の50%の残存(口縁部は10%の残存)	17.3	9.2	18.6 体上部	6.1	体部は鉢状に立ち上がり、口縁部は丸みをもって内傾する。 両面ともヘラナデ。	黄褐色粒(2mm以下)を含む。	外面は暗赤褐色と赤褐色、黒褐色 内面は褐灰色と黒褐色	少し不良	
SI-173-5	SI173-56	弥生土器	壺	底部から胴下部片				(6.6)	胴部下部は直線的に開いて立ち上がる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のナデ。	酸化鉄粒(3mm大以下)と白色粒(1mm以下)を含む。	両面とも褐色	良好	

第76表 竪穴住居跡出土土器観察表(57)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-173-6	SI173-34	弥生土器	(壺)	底部から胴最下位				(6.2)	少し底部は狭い。胴最下位はわずかに窪んだ後に開いて立ち上がる。底部には木ノ葉痕が残る。外面は縦方向のヘラナデ、内面は斜め方向のナデ。	小礫(2mm大以下)を多く含む。	外面は明赤褐色 内面は明褐色	良好	
SI-173-7	SI173-62	弥生土器	器台	裾下端欠損	7.3 受部径				ハの字状で受部は内傾、口縁部が窪む。中心部は穿孔されている。脚部外面は斜め方向のヘラナデ、上部はユビオサエ、脚内面はユビナデ、一ヶ所粘土接合痕が残る。受部内面はユビオサエ(成形痕)。	小礫(3mm以下)を含む。白色粒が目立つ。	両面とも褐色 内面の一部はにぶい赤褐色	良好	外面脚部には剥離が多い。
SI-173-8	SI173-63	弥生土器	器台	裾部欠損	8.0 受部径				脚部はハの字状で、受部は内側縁部が窪む。受部中央は穿孔され、脚部外面はヘラナデ、内面はユビナデがなされる。内面はユビナデ。	小礫(3mm大以下)を極少量含む。	外面は明赤褐色 内面は明褐色	良好	
SI-173-9	SI173-30	弥生土器	高坏	脚部片裾部欠損					丸みをもって柱状に立ち上がる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	両面とも橙色	良好	両面ともヘラミガキ部分は赤彩。
SI-174-1	SI174-31	弥生土器	鉢	90%の残存	22.8	9.0		7.0	大型で、体最下部はわずかに窪む。体部は少し丸みをもって開いて立ち上がる。外面の体最下位は縦方向のヘラナデ、体部は横方向のヘラミガキ、口縁部は横位の沈線で羽状縄文(斜縄文3段)を区画し、口唇部も斜縄文が施される。	緻密	両面とも橙色	良好	
SI-174-2	SI174-33.34.36	弥生土器	鉢	80%の残存	21.6	9.6		7.0	体下部はやや直線的に開き、上部は丸みを持って直立する。口縁部は羽状縄文(斜縄文3段)を横位の沈線で区画している。口唇部も斜縄文が施される。外面の無文部と内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	両面とも橙色	良好	
SI-174-3	SI174-38.46	弥生土器	鉢	完形	15.4	6.8		5.6	少し小型で、体下部はやや直線的に開き、上部は丸みをもって立ち上がる。口縁部は横位の沈線で区画された羽状縄文。口唇部は斜縄文が各々施される。外面の無文部と内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	両面とも灰褐色	良好	
SI-174-4	SI174-37.38.40.41.48.50	弥生土器	鉢	全体の3/4の残存	16.9	8.6	17.9 口縁部	6.2	体下部はやや丸みをもって大きく開き、体上部から口縁部は内傾してゆく。口縁部は羽状縄文(斜縄文3段)を細い横位の沈線で区画、口唇部は斜縄文を施す。	小礫(2mm以下)を少量含む。	両面ともいぶい 橙色と黒褐色	良好	
SI-174-5	SI174-1.12.19.20.23.25~27.30~34.42.50	弥生土器	甕	全体の80%の残存	21.5	21.9	22.5 胴部最大径 中位	6.2	胴部最大径は中位、頸部から口縁部は外反し、粘土紐接合痕を6段残す。口唇部は指押圧による波状。胴部外面は横方向のナデ、底部中央は焼成後穿孔される。	酸化鉄粒を少量含む。	両面とも橙色	良好	甕に転用。
SI-174-6	SI174-1.2.3.4.49	弥生土器	甕	底部中央は欠損、他は70%の残存	(21.4)	(18.3)	(18.2) 胴部最大径 中位	(7.0)	胴部最大径は中位、頸下部には粘土紐接合痕を残し段とする。また上位に4段ほどわずかに接合痕が残っており、ユビオサエ痕が明瞭、口唇部は指押圧による波状。外面の頸部はユビナデ、ユビオサエ、内面の胴中央にはわずかにヘラミガキが認められる。	黄橙色粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも橙色	良好	
SI-174-7	SI174-1.11.21.22.28.29	弥生土器	甕	胴上部から口縁部片	13.4				小型で、胴上部は少し丸みをもって立ち上がり、口縁部は外反し、粘土紐接合痕を2段残す。外面は胴部が斜め方向のヘラナデ、口縁部はユビオサエ。	白色粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも黄褐色	良好	
SI-174-8	SI174-1	弥生土器	ミニチュア土器	底部から体部片				4.3	小型で体下部は丸みをもって開き、中位は直立ぎみ、両面ともヘラナデ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は橙色 内面は褐灰色	良好	
SI-174-9	SI174-6	弥生土器	甕	底部から胴下部片				15.5	少し小型で、胴最下部は少し窪んだ後に開きながら立ち上がる。外面は横及び縦方向のヘラナデ、内面はヘラミガキ。	黄橙色粒(2mm大以下)を少量含む。	両面とも明赤褐色	良好	
SI-174-10	SI174-1.9.10.13.15~17	弥生土器	壺	底部から胴中位片			(28.8) 胴部最大径 中位	5.5	胴部は球状で最大径は中位、両面ともヘラナデ調整。	酸化鉄粒を(2mm以下)含む。	両面とも橙色	良好	
SI-174-11	SI174-32.43~45	弥生土器	壺	底部から胴中位片			(24.0) 胴部最大径 (下位)	8.1	やや大型で、胴部は大きく張る。最大径は胴下位と考えられる。胴下位は横方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも橙色	良好	

第77表 竪穴住居跡出土土器観察表 (58)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-174 -12	SI174-34	弥生土器	壺	胴下半部片			18.0 胴部最大径 中位		球状の胴部で外面は横方向のヘラナデ、内面は縦方向のヘラナデ。	緻密	両面とも橙色	良好	
SI-175 -1	SI175-1	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は両面からの指押圧による波状。	小礫 (1mm以下) を含む。	両面とも橙色	普通	
SI-175 -2	SI175-1	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を横位の沈線で区画。	緻密	外面は橙色と暗赤褐色 内面は淡黄褐色	良好	外面の無文部は赤彩。
SI-175 -3	SI175-1	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文と横位の沈線の組み合わせ。	緻密	外面は暗赤褐色、黄褐色 内面は橙色	良好	外面の無文部は赤彩。
SI-176 -1	SI176-8	土師器	ミニチュア土器	体部から口縁部片1/4の残存	(8.0)				鉢を模したミニチュア土器と思われ、薄手で塊状。両面とも荒いユビナデ。	緻密	両面ともいぶい黄褐色と明黄褐色	わずかに不良	
SI-176 -2	SI176-6	土師器	壺	口縁部片1/4の残存	(9.6)				外反する少し長い口縁部で、口唇部下は横位の沈線状に窪む。 外面は縦方向の丁寧なヘラミガキ、内面は横方向のナデ。	緻密	両面とも明黄褐色とにぶい黄褐色	良好	
SI-176 -3	SI176-5	土師器	甕	底部(80%)から胴下部(25%)残存				5.4	少し小型で、胴最下部はわずかに窪み、他は半球状。外面は刷毛目、内面はヘラナデ。	小礫 (1mm以下) を多く含む。	外面は灰黄褐色 内面は黒色と黒褐色	普通	底部に靦の圧痕がある。
SI-176 -4	SI176-10	弥生土器	甕	口縁部片					ヘラ状の沈線が斜めに施される。擦過痕も少し見られる。	小礫 (2mm以下) を少量含む。	両面とも暗褐色	少し不良	
SI-177 -1	SI177-1～ 4.5.7.8. 11.12～ 14.16.23. 24.29.52. 53.56.59. 62.63	弥生土器	甕	胴下部から頸部片1/3の残存			24.3 胴部上位		大型の甕で、胴部は上位で大きく張り、最大径を胴部にもつと思われる。頸部は長く、粘土紐接合痕が5段残っている。 外面胴下位はヘラケズリ、中位はヘラナデの後ユビナデ、内面はユビナデ、外面の頸部はユビオサエ、内面はヘラナデ。	緻密	両面とも明黄褐色、褐灰色、にぶい黄褐色	良好	
SI-177 -2	SI177-10. 22.29.53. 55	弥生土器	甕	胴上部から口縁部片1/4くらいの残存	(17.8)				胴部はやや長胴さみと考えられる。口縁部は外反し、粘土紐接合痕を1段残す。口唇部は指押圧による波状。 外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。	小礫 (2mm以下) を多く含む。	両面ともいぶい黄褐色、外面の一部は橙色	良好	外面は少し擦過痕が多い。
SI-177 -3	SI177-50. 67.68	弥生土器	壺	頸部片1/2の残存					細く長い頸部をもち羽状縄文(斜縄文5段)を横位の沈線で区画、外面の無文部と内面の上部はヘラミガキ、内面の下部はヘラナデの後ユビナデ。	小礫 (1mm以下) を多く含む。	外面はにぶい橙色とにぶい褐色 内面は明赤褐色と橙色	良好	
SI-177 -4	SI177-28. 31	土師器	甕	底部から胴下部1/3くらいの残存				(5.2)	外面はヘラケズリ、内面はヘラナデとユビナデ。	小礫 (2mm以下) を少量含む。	両面ともいぶい黄褐色と灰黄褐色	良好	
SI-177 -5	SI177-33	土師器	甕	底部から胴下部70%の残存				(7.2)	厚手で、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。	小礫 (2mm以下) を多く含む。	外面は明黄褐色、灰黄褐色、にぶい黄褐色 内面は灰黄褐色	不良	外面は摩耗が激しい。
SI-177 -6	SI177-48	土師器	甕	底部から胴下部1/3くらいの残存				(3.6)	底部は狭く、外面はヘラケズリ、内面はユビナデ。	小礫 (2mm以下) を極少量含む。	外面はにぶい褐色とにぶい橙色 内面はにぶい橙色	良好	
SI-179 -7	SI179-5	弥生土器	壺	底部片1/2の残存				6.1	両面ともナデ。	緻密 酸化鉄(2mm以下)をわずかに含む。	外面は橙色、明黄褐色、褐灰色 内面はにぶい黄褐色と褐灰色	わずかに不良	

第78表 竪穴住居跡出土土器観察表(59)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-179-8	SI179-2	弥生土器	壺	底部片1/3の残存				(6.8)	両面ともナデ。	緻密	外面は黒褐色と暗褐色 内面は灰黄褐色とにぶい黄褐色	少し不良	
SI-179-10	SI179	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は指による押圧波状。	緻密	外面は暗褐色 内面は黄褐色	普通	
SI-179-11	SI179-18	弥生土器	壺	胴上部片					2段横位の羽状縄文を上1段と下2段のS字状結節縄文で区画する。	緻密	両面とも橙色と暗黄褐色	少し不良	
SI-179-12	SI179-1	弥生土器	甕	頸部片					粘土紐接合痕が4段認められる。	緻密	両面とも橙色	普通	
SI-179-13	SI179-16	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を横位や山形の沈線で区画する。	緻密	外面は浅黄褐色と暗赤色 内面は橙色	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-180-1	SI180-1	弥生土器	甕	胴上部片					胴上部に粘土紐接合痕を1段残り、縄文原体による刻目がなされる。	緻密	外面はにぶい黄褐色 内面は褐灰色とにぶい黄褐色	少し不良	
SI-180-19	SI180-6	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文を横位の沈線で区画している。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は淡黄褐色 内面は明黄褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-180-20	SI180-3	弥生土器	甕	底部片1/2弱の残存				(4.6)	胴部は丸みをもって開いて立ち上がると考えられる。	緻密	両面とも明黄褐色と灰黄褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-181-15	SI181-28	弥生土器	壺	頸部から口縁部片	(19.9)				大型の壺で、頸部は細く長い。口縁部は外反し、上部は直立する複合口縁。頸部中位はS字状結節縄文2段と羽状縄文を上下に交互に配置する。下段には4ヶ所に円形浮文が貼り付けられる。口縁部は下端が棒状工具による刻目、上部は羽状縄文、また棒状浮文と十字形に沈線を刻まれ円形浮文を上部に貼り付けている。無文部は縦方向のヘラミガキ。	緻密	両面ともにぶい橙色	良好	
SI-181-16	SI181-30.36	弥生土器	甕	胴下部から口縁部	18.4		17.5 胴部最大径		胴部最大径は上位にあり、頸部はやや短いが粘土接合痕を2段残す。口唇部は上下からの指による押圧で波状。内面はヘラナデ。	緻密	両面ともにぶい橙色	良好	
SI-181-17	SI181-25.26	弥生土器	甕	口縁部片	20.2				粘土紐接合痕を4段残り、口唇部は指押圧による波状。	緻密	両面ともにぶい橙色	良好	
SI-182-21	SI182-14.20	弥生土器	壺	胴最上部から口縁部片1/4の残存	(20.0)				胴部は球状と考えられ、頸部はやや長く直立きみ、口縁部は短い折り返しの複合口縁である。胴最上部(肩部)に斜縄文と1段のS字状結節縄文、頸部は縦方向のヘラミガキ。内面はユビナデ、一部にヘラミガキ。	緻密	外面は明褐色とにぶい褐色 内面は褐灰色と灰褐色	やや不良	
SI-182-22	SI182-17	弥生土器	鉢	体下部を10%欠損	23.6	9.4		8.6	大型の鉢で底部は広く、体部は直線的に開く。外面の体部は斜め方向のヘラケズリ、口縁部は横方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	両面とも褐灰色と橙色、外面の一部は黒褐色	良好	
SI-182-23	SI182-10～13.15.16.56	弥生土器	甕	全体の1/3欠損	18.6	21.7	21.6 胴部最大径中位	7.0	やや大型の甕で胴部は大きな球状、口縁部は小さく外反し、口唇部は刻目による波状。外面の胴下半部はヘラケズリ、上半部は縦方向のヘラミガキ、内面の胴下半部はヘラナデの後ユビナデ、胴上半部から口縁部はヘラミガキ。焼成後底部を穿孔し、甕に転用。	小礫(3mm以下)を極少量含む。	外面は黒褐色、にぶい黄褐色 内面は黒褐色、灰褐色、にぶい褐色	普通	胴下半部外面に煤付着。
SI-182-24	SI182-33.38	弥生土器	高坏	胴部80%の残存				14.0 胸 裾部口径	胴部はハの字状に開き、上部に円形の穿孔が4ヶ所みられる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラナデ。	緻密	両面とも明赤褐色と橙色	良好	

第79表 竪穴住居跡出土土器観察表 (60)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-183-27	SI183-23, 25, 26, 36	弥生土器	鉢	全体の80%の残存	12.6	10.8	17.8 体部最大径 中位	5.6	体下部は直線的に開き、最大径は中位、体上部から口縁部は直線的に内傾する。口縁部は粘土紐接合痕を残し、接合口縁状。体上部は羽状縄文を横位の沈線で上下を区画している。口縁部は下段を縄文原体による刻目、上部は斜縄文(RL)。口唇部はLRの斜縄文。外面の無文部と内面は横方向のヘラミガキ(一部ヘラナデ)。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい橙色、内面は褐灰色とにぶい褐色	不良	
SI-183-28	SI183- 7, 9, 10, 18 (SI182-10 H8-6-1)	弥生土器	壺	胴上部片					大型の壺で胴部は大きく張る球状(最大径はやや下位か)、上位ほど細くなり、頸部は細長い形と考えられる。胴上位に横位の沈線で上下を挟まれた羽状縄文、外面の無文部と内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	外面は赤褐色と暗赤褐色、黒褐色、にぶい褐色、内面は黒褐色、にぶい褐色	やや不良	外面の無文部は赤彩。
SI-183-29	SI183- 23 ~ 25 (SI182-1. 58 SX18-5)	弥生土器	甕	胴中位から口縁部片1/4の残存	(23.0)		22.9 胴部最大径 上位		胴部最大径(上位)と口径がほぼ同じで、頸部は長い。頸下端に粘土紐接合痕を残し段をつくり、ヘラによる山形文が描かれる。口唇部は指頭による押圧波状。胴上部はヘラケズリの後丁寧なヘラナデ、頸部から口縁部はヘラナデの後ユビナデ、内面は横方向のヘラナデの後ユビナデ。	小礫(1mm)を僅かに含む。	両面ともににぶい黄褐色と黒褐色	良好	
SI-183-30	SI183-28, 29, 34 ~ 36, 38	弥生土器	甕	胴中位から口縁部片1/4の残存	(22.7)		(19.4) 胴部最大径 上位		最大径は口径にある。胴部は半球状であるがやや張りが弱い。口縁部は直線的に開く。口唇部は指による押圧波状。外面は胴部が横方向のヘラケズリ、口縁部はヘラナデ、内面もヘラナデ。	小礫(2mm位)を含む。	外面は黒褐色と褐色、明赤褐色、内面は灰褐色と褐色	やや不良	
SI-183-31	SI183-15, 16	弥生土器	甕	胴中位片1/6の残存			(18.0) 胴部最大径 (中位)		胴部は球状と考えられ、頸部には粘土紐接合痕の最下段が認められる。両面ともヘラミガキとユビナデ調整。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は明黄褐色と灰黄褐色、内面はにぶい黄褐色	良好	
SI-183-32	SI183-4 ~ 6	弥生土器	甕	胴下部から頸下部まで1/6の残存			(19.0) 胴部最大径 上位		胴部最大径は上位であるが、全体の最大径は口径と考えられる。胴部外面には横及び斜めの方向のヘラケズリ、内面はヘラナデとユビナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は黒褐色とにぶい黄褐色、灰黄褐色、内面はにぶい黄褐色とにぶい黄褐色	やや不良	
SI-183-33	SI183-1, 11 ~ 13, 31, 32	弥生土器	甕	底部から胴下部1/2の残存				6.2	胴下位は直線的に開いて立ち上がり、しだいに丸みをもつ。外面はヘラナデ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(1mm以下)少量含む。	外面は褐色と暗赤灰色、灰赤色、内面は褐色と灰赤色	やや不良	
SI-183-34	SI183-27	弥生土器	甕	口縁部片					口縁部は外反、内面に粘土紐接合痕を残し段として、縄文原体による刻目を入れる。口唇部も刻目が入る。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも浅黄褐色	やや不良	
SI-184-1	SI184-3, 4	弥生土器	壺	胴中位片			(26.4) 胴部最大径 (下位)		胴下部が張っており、外面は上位が横方向のヘラミガキ、下位はヘラケズリ、内面はヘラナデの後、ユビナデ	小礫(1mm以下)を含む。	外面は暗褐色、内面はにぶい褐色	普通	
SI-185-1	SI185- 8, 11	弥生土器	(甕)?	胴上部片					胴上部下位より2段のS字状結節縄文、羽状縄文(斜縄文3段)、粘土紐接合痕を残し段として刻目が入る。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも浅黄褐色	やや不良	
SI-185-2	SI185-21	土師器	壺	胴部片1/6の残存			(30.0) 胴部最大径 中位		大型の壺で、胴部の張り出しは強い(中位)、外面の胴下位は横及び斜め方向のヘラミガキ、他は丁寧な横及び斜め方向のヘラミガキ、内面はヘラナデのあとユビナデ。	緻密	外面はにぶい黄褐色と黒褐色、内面は、明黄褐色と灰黄褐色	良好	
SI-186-1	SI186-1	弥生土器	壺	胴上部片					斜縄文を沈線で区画し菱形文を構成する。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黄褐色、内面は浅黄褐色	やや不良	
SI-187-1	SI187-1 ~ 4, 7, 10, 11, 13, 15, 16, 19 (SI188-30)	弥生土器	甕	全体の1/2弱の残存	(19.2)	(19.7)	(19.4) 胴部最大径 (上位)	(6.0)	胴部最大径(上位)と口径がほぼ同じで、頸部はやや長く粘土紐接合痕をわずかに残す。口唇部には指押圧による波状。胴部外面はヘラナデ、内面はユビナデ調整。	緻密	両面とも明黄褐色、褐色、灰赤色、にぶい黄褐色	普通	両面とも剝離が多い。内面の一部に炭化物有り。
SI-188-1	SI188-27, 28	弥生土器	甕	胴上部から口縁部片1/8の残存	(25.0)		(23.6) 胴部最大径 (上位)		最大径は口径にあり、胴上部の張りは弱い。頸部は長く、粘土紐接合痕を7段残す。口唇部は縄文原体の刻目。外面の胴部はヘラナデとヘラミガキ、頸部から口縁部はユビヨコナデ、内面の胴部はヘラナデの後ヘラミガキとユビナデ調整、頸部から口縁部はヘラナデ。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも灰褐色と褐色	良好	
SI-188-2	SI188-12, 13, 17, 29, 30, 33 ~ 36, 39	弥生土器	甕	底部欠損他は80%の残存	18.8				胴部は丸みをもって鉢状に立ち上がり、頸部には4段の粘土紐接合痕が残る。口縁部は内面に粘土を折り返している。口唇部は指押圧による波状。外面の胴部はヘラナデ、頸部から口縁部はユビナデ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は黒褐色とにぶい褐色、内面は褐灰色とにぶい褐色	良好	外面に煤付着。

第80表 竪穴住居跡出土土器観察表(61)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-188-3	SI188-30	弥生土器	(甕)	底部から胴下部片				7.0	少し厚手で大型の甕と思われる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヘラナデの後ヘラミガキとユビナデ。	黄白色粒(2mm以下)を多く含む。	外面はにぶい赤褐色とにぶい橙色 内面は黄灰色	やや不良	
SI-188-4	SI188-31	弥生土器	壺	底部から胴下部片				5.3	胴最下部は少し窪み、上部は丸みを帯びて開く。外面はヘラケズリの後ユビナデ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(2mm以下)を極少量含む。	外面黒褐色とにぶい褐色、内面は褐色とにぶい褐色	良好	外面は煤付着。
SI-189-1	SI189-3	土師器	坏	口縁部片1/8	(13.0)				少し浅い坏と考えられ、口唇部は面をもってわずかに内傾する。外面は横方向のヘラナデ、内面は縦方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は褐色とにぶい橙色 内面はにぶい赤褐色	やや不良	外面は摩耗が多い。
SI-189-2	SI189-3	土師器	鉢	口縁部片1/12の残存	(17.4)				大型の鉢と考えられ、体部は直線的に開いて立ち上がり、口縁部は丸みをもって短く直立、外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキとユビナデ。	緻密	外面は赤褐色 内面は灰白色	良好	両面とも赤彩される。
SI-189-3	SI189-3	土師器	甕	口縁部片1/6の残存	(19.4)				くの字に外反する口縁部と考えられ、両面ともヨコナデがなされる。	緻密	外面は黒褐色と灰褐色 内面はにぶい橙色	良好	
SI-189-4	SI189-3	土師器	壺	口縁部片1/8の残存	(16.8)				胴部は大きな球状と考えられ、口縁部は直線的で斜めに立ち上がる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	外面は褐色 内面はにぶい橙色	良好	
SI-190-1	SI190-1.2.6.11.12	弥生土器	壺	頸部片					細く長い頸部と考えられ、羽状縄文を横位の沈線で区画する。内面はヘラナデとユビナデ。	小礫(2mm以下)を含む。特に白色粒が目立つ。	外面はにぶい黄褐色とにぶい橙色 内面は褐色とにぶい橙色	不良	
SI-190-2	SI190-5	弥生土器	甕	底部片1/2の残存				6.2	胴最下部は内側に窪んだ後開く、外面はヘラケズリ、内面はユビナデ。	緻密	両面ともにぶい黄褐色	良好	
SI-190-3	SI190-11	弥生土器	壺	胴上部片					S字状結節縄文2段。両面ともヘラナデ(外面は無文部のみ)。	灰白色粒(2mm以下)を多く含む。	両面とも浅黄褐色	少し不良	
SI-191-1	SI191-1	弥生土器	壺	口縁部片					口縁部は短く厚い複合口縁で3段となり、複合部下端は棒状工具の刺突による刻目、上部は羽状縄文。	小礫(1mm以下)を含む。	両面ともにぶい黄褐色と赤褐色	やや不良	両面とも赤彩。
SI-191-2	SI191-1	弥生土器	壺	口縁部片					口縁部は短くやや厚い複合口縁で、頸上部に羽状縄文、複合部下端部に刻目、上部に羽状縄文(LR)。口唇部は外側に傾斜し羽状縄文と円形刺突文がなされる。	緻密	外面は褐色とにぶい黄褐色	わずかに不良	内面は赤彩わずかに外面が摩耗
SI-192-1	SI192-1	弥生土器	壺	底部から胴下半部				4.8	やや小型で胴部最大径は下位にある。外面は横方向の丁寧なヘラミガキ、内面は斜め方向のヘラナデ。	緻密	両面ともにぶい褐色	良好	
SI-192-2	SI192-10	弥生土器	壺	胴上部から頸部片					頸部は羽状縄文(2段以上)を横位の沈線で区画する。	酸化鉄粒(2mm以下)と白色粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも暗赤褐色	良好	内面の剥離が激しい。
SI-192-3	SI192-9	弥生土器	甕	全体の3/4の残存	27.3	13.4	15.4 胴部最大径中位	6.2	やや小型で胴部は球状、頸部は少し短く、下位に粘土接合痕を残し段をつくる。また粘土紐接合痕もわずかに4段上位に残る。口唇部は指押圧による波状。胴部外面はヘラナデ、頸部から口縁部はユビヨコナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい褐色	良好	
SI-193-1	SI193-1	弥生土器	甕	口縁部片1/8の残存	(18.8)				頸部に粘土紐接合痕をわずかに残す。口唇部は両面からの指押圧による波状、外面は斜め方向のヘラケズリ、内面はユビナデとヘラナデ。	酸化鉄粒(2mm以下)を含む。	両面とも褐色とにぶい褐色	良好	

第81表 竪穴住居跡出土土器観察表(62)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-194-1	SI194-7	弥生土器	甕	胴中位片1/5の残存			(23.8) 胴部最大径		球状に張る胴部で、上部には粘土紐接合痕が1段みられる。両面とも胴部は丁寧なヘラミガキ、上部(頸部)はユビナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい橙色、外面の一部は灰褐色、内面の一部は明褐色	良好	
SI-194-2	SI194-1.2	弥生土器	(甕)	底部から胴下部80%の残存				6.4	胴下部は直線的に大きく開く。大型である。	白色粒(2mm以下)を多く含む。	外面は明赤褐色、黒褐色と明褐色、内面は褐色とぶい黄褐色	やや不良	
SI-194-3	SI194-2	弥生土器	甕	口縁部片					口唇部は両面からの指押圧による波状。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面はぶい黄褐色、内面は明黄褐色と一部はぶい黄褐色	良好	
SI-194-4	SI194-2	弥生土器	壺	胴上部片					羽状縄文を横位の沈線で区画。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は暗赤褐色とぶい黄褐色、内面は浅黄褐色	わずかに不良	外面の無文部は赤彩。
SI-195-1	SI195-28	弥生土器	鉢	全体の3/4の残存	20.1	8.9	20.4 口縁部中位	5.5	やや浅く、体下部は丸みをもって大きく開き、口縁部は丸みをもって内傾する。口縁部は2段の羽状縄文を横位の沈線で区画する。口唇部は内傾し斜縄文が施される。外面の無文部と内面はヘラミガキ。	橙色粒(2mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい黄褐色	良好	
SI-195-2	SI195-30	弥生土器	壺	頸部片					頸下部には横位の沈線で上下を区画された羽状縄文(斜縄文3段)が施文され、他の無文部はヘラミガキ。	黄褐色粒(1mm大以下)を多く含む。	両面とも赤色と橙色	普通	両面とも赤彩がみられる。
SI-195-3	SI195-37	弥生土器	壺	胴中位から下部片					球状に大きく張る胴部で、外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ。	緻密	外面は赤色とぶい黄褐色、内面は浅黄褐色	良好	両面とも少し摩耗している。外面は赤彩。
SI-195-4	SI195-33-3.37-3	弥生土器	甕	底部から胴下部片				7.0	胴下部は直線的に大きく開く。両面ともヘラナデ。	白色粒(1mm大以下)を多く含む。	外面はぶい橙色、内面は明黄褐色	良好	両面とも少し摩耗している。
SI-195-5	SI195-23.34	弥生土器	甕	底部から胴下部片				4.8	少し小型で、胴下部は直線的に開いて立ち上がり、しだいに丸みを帯びてくる。両面ともヘラナデ。	酸化鉄粒(3mm以下)を多く含む。	両面とも橙色	良好	
SI-195-6	SI195-13.15.16.118	弥生土器	鉢	底部中央と口縁部欠損				(6.8)	胴下位は直線的に開いて立ち上がり、しだいに丸みをもつ。両面ともヘラナデ。	緻密	外面はぶい橙色、内面はぶい黄褐色	やや不良	
SI-196-1	SI196	弥生土器	鉢	ほぼ完形	14.8	6.7		5.2	小型で、体部は直線的に開く。厚手である。口縁部付近は横位の沈線で区画した羽状縄文(斜縄文3段)、口唇部は斜縄文、外面の無文部と内面はヘラミガキ。	浅褐色粒(2mm以下)を多く含む。	両面とも暗赤褐色	良好	両面とも赤彩。
SI-196-2	SI196-12.13	弥生土器	壺	頸部片					細く長い頸部で、上部に横位の沈線で区画された羽状縄文、下部の無文部には縦と横方向のヘラミガキ。	黄褐色粒(3mm以下)を多く含む。	外面は暗赤褐色、内面は橙色	普通	
SI-196-3	SI196-7.9-11	弥生土器	高坏	全体の1/4の欠損	21.6	16.0		8.7 脚裾部口径	胴部はやや短いハの字状、脚部と坏部の接合部は縄文原体押圧による刻目をもった突帯が付く。坏部は大きな碗状。脚部と坏下部の外面は縦方向のヘラミガキ、坏上部は横及び斜め方向のヘラミガキ、脚部内面はナデ、坏部がヘラミガキ。	緻密	外面は橙色、内面は赤褐色	良好	脚外面と坏内面は赤彩。
SI-196-4	SI196-1.3-6.14	弥生土器	壺	底部から胴下部2/3の残存				7.2	少し大型の壺で大きな球状の胴部を持つと考えられる。胴下部はヘラナデとヘラミガキ(内面はユビナデ)。焼成後の穿孔が2ヶ所存在し、浅鉢として転用している。	黄褐色粒(3mm以下)を多く含む。	外面は橙色、内面はぶい橙色	良好	
SI-197-1	SI197-2.4.11.12	土師器	甕	口縁部片1/2の残存	13.2				少し小型の甕と考えられ、口縁部は「く」の字状に短く外反。	緻密	両面とも暗赤褐色	良好	

第82表 竪穴住居跡出土土器観察表(63)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-197 -2	SI197-10	土師器	高坏	坏部の体上部から口縁部片1/4の残存	(17.8)				逆ハの字状に直線的に開く。両面ともヘラミガキ。	緻密	外面は赤褐色 内面は明赤褐色	良好	両面とも赤彩。
SI-197 -3	SI197- 1. 3.16.17. 19. 20. 22 ~26	土師器	高坏	坏部片	19.3				下部に稜をもち、立ち上がりは直線的に開く。調整は両面ともヘラミガキ。	緻密	両面とも明赤褐色	良好	両面とも(坏部)は赤彩。
SI-197 -4	SI197- 1. 30. 31. 33 ~40. 47. 49. 52 ~ 56. 62. 63. 66. 68~75	土師器	甕	完形	16.6	24.5	22.6 胴部中央	5.4	やや長い大きな球状に張った胴部をもち、口縁部は「く」の字に短く外反。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ、外面の頸部は縦方向のヘラナデ。	緻密	両面とも赤褐色	良好	
SI-198 -1	SI198- 1. 3.4	弥生土器	鉢	体中位から口縁部片1/2弱の残存	(27.4)				大型で、体部は直線的に開き、口縁部は短く厚い複合口縁である。 体上部は2段の羽状縄文を横位の沈線で区画、口縁部は下端が縄文原体による刻目、上部は斜縄文(RL)、口唇部も斜縄文が各々施される。 外面の無文部と内面はヘラミガキ。	黄橙色粒(1mm以下)を少量含む。	外面は赤色、橙色、明黄褐色 内面は明赤褐色、黒色、褐灰色	良好	外面の無文部と内面は赤彩。
SI-198 -2	SI198-2	弥生土器	鉢	体下部から口縁部片					口縁部に細めの横位沈線で区画された羽状縄文(2段)、口唇部はやや内傾し、斜縄文(RL)が施される。 外面の無文部と内面はヘラミガキ。	黄橙色粒(1mm大以下)を多く含む。	外面は浅黄褐色とにぶい黄褐色 内面は黒色と明褐色	不良	外面の無文部と内面は赤彩。
SI-198 -3	SI198-2	弥生土器	甕	胴上部片					胴上部に粘土紐接合痕を残し段をつくる。段には縄文原体による刻目を入れる。 両面ともユビナデ調整がみられる。	小礫(1mm以下)を含む。	両面ともにぶい黄褐色と褐灰色	良好	外面に煤付着。
SI-199 -1	SI199-1	弥生土器	甕	口縁部片					粘土紐接合痕を残し(4段まで残存)、内面にも1段存在し、縄文原体による刻目がなされる。口唇部は指による押圧で波状となる。	灰白色粒(1mm大以下)を非常に多く含む。	両面とも黄灰色と暗灰黄色	少し不良	
SI-199 -2	SI199-1	弥生土器	壺	胴上部片					細い斜縄文を2段横位のS字状結節縄文で区画。	灰白色粒(1mm以下)を含む。 酸化鉄粒(2mm以下)を少量含む。	外面は暗赤褐色と浅黄褐色 内面は灰黄褐色と浅黄褐色	少し不良	
SI-199 -3	SI199-1	弥生土器	壺	胴上部片					細い斜縄文を横位の沈線で区画。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも黄褐色と一部赤色	不良	外面の無文部と内面の一部に赤彩が残る。
SI-199 -4	SI199-1	弥生土器	壺	胴上部片					薄手で小型と思われ、斜縄文を沈線で区画し、山形文を構成していると考えられる。	黄橙色粒(1mm以下)を多く含む。	両面とも橙色	不良	両面とも少し摩耗。
SI-200 -1	SI200- 1. 46~49. 53. 57 ~ 60. 62. 65 (SI201-1. 23)	弥生土器	甕	全体の1/3欠損	(21.2)	22.4	(20.9) 胴部最大径上位	6.0	胴部最大径は上部にあり、張りはやや弱い。頸部は長く、粘土紐接合痕を7段残す。口唇部は両面からの指押圧による波状。 外面胴下部は縦方向のヘラナデ、頸部は斜め方向のヘラナデにより接合痕を少し消している。内面は横方向のヘラナデ。	緻密	両面ともにぶい橙色	良好	かなり歪んでいる。
SI-200 -2	SI200- 1. 63	弥生土器	甕	頸部から口縁部片1/6の残存	(16.4)				頸部には粘土紐接合痕が2段残る。口縁部の外反は少ない。口唇部は指押圧による波状。 外面は斜め方向のユビナデ、内面はヘラナデのあとユビナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい橙色	普通	
SI-200 -3	SI200-1	弥生土器	壺	胴上部片					細い羽状縄文(斜縄文3段)を横位の沈線で区画。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも橙色、外面の一部は赤褐色	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-201 -4	SI201- 1. 2.29	土師器	埴	全体の2/3の残存	(9.4)	9.2	体部最大径中位	2.4	底部は小さな平底で体部は球状、口縁部は直線的に開く。体部外面は横及び斜め方向のヘラナデ。	緻密	両面とも暗褐色	良好	
SI-201 -5	SI201-1	土師器	甕	頸部から口縁部片	(13.2)				く字状の口縁で頸部付近に縦方向の刷毛目が残る。	緻密	両面とも暗褐色	良好	

第83表 竪穴住居跡出土土器観察表(64)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-201 -6	SI201-1.6	土師器	埴	体部残存			(10.3) 体部最大径 中位	3.6	少し厚手。底部は平底で体部は大きく張る。体部外面は横方向のヘラケズリ。内面はヘラナデ。	緻密	両面とも暗褐色	良好	
SI-201 -7	SI201- 1. 12.15～ 18.20.30	土師器	甕	胴部片1/4の 残存			(21.2) 胴部最大径 中位		胴部は大きな球状、最大径は中位にある。両面ともヘラナデ。	緻密	両面とも灰褐色	良好	
SI-201 -8	SI201- 1. 3.4.16	土師器	甕	底部から胴 下位				6.4	胴最下部は少し窪み、その後、丸みをもって大きく開く。外面は縦方向の刷毛目。内面も横及び斜め方向の刷毛目。	緻密	両面とも明赤褐色	良好	
SI-202 -1	SI202-2	弥生土器	壺	口縁部片					厚く短い複合口縁で口唇部の外面は単節の斜縄文、口縁下端部は縄文本体を押捺して、刻目を施す。	小礫(1mm以下)を含む。	外面はにぶい黄褐色と橙色 内面は褐色	良好	内面の口縁部付近に赤彩がある。
SI-202 -2	SI202-2	弥生土器	甕	胴上部から 頸部片					頸部に粘土紐接合痕を3段残す。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黒色とにぶい黄褐色 内面は明黄褐色と灰黄褐色	普通	外面に煤付着。
SI-203A -1	SI203A-1 B-27	弥生土器	甕	頸部から口 縁部片					頸部に粘土紐接合痕(6段)を残し、口唇部は両面からの指押圧で波状。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも浅黄褐色	普通	
SI-204 -1	SI204-1.4	弥生土器	壺	頸部から口 縁部片	13.3				頸部が細く、やや小型の壺で、口縁部は複合で、やや開いている。頸部は羽状縄文と上に3段のS字状結節文、口縁部は斜縄文(RL)が施され、下端は縄文本体による押圧刻目がなされる。無文部は両面ともヘラミガキ(内面は横方向)。	緻密	外面はにぶい赤褐色とにぶい黄褐色、内面は暗赤灰色と暗赤褐色	わずかに不良	SI-204-2と同一個体か。無文部は赤彩。
SI-204 -2	SI204-3.4	弥生土器	壺	胴上部片					細かい羽状縄文(斜縄文7段)を2段のS字状結節縄文が上下から区画する。無文部はヘラナデ。	緻密	外面暗赤褐色、浅黄褐色 内面は黄褐色	普通	無文部は赤彩される。
SI-204 -3	SI204-3	弥生土器	壺	胴中央から 上部片			28.1		大型で大きく張り出す胴部をもち、胴上部は3～4段の羽状縄文を横位2段のS字状結節縄文で区画している。	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面は暗赤褐色、赤灰色、橙色、明赤褐色、内面は橙色と黄褐色	やや不良	無文部は赤彩。
SI-205 -1	SI205-3.4	弥生土器	壺	口縁部片					複合口縁で下端部は縄文本体押捺による刻目、上部は細かい羽状縄文。	緻密	外面はにぶい黄褐色 内面は浅黄褐色	普通	
SI-205 -2	SI205-3	弥生土器	壺	口縁部片					複合口縁で下端部は縄文本体による刻目、上部は斜縄文。	緻密	外面はにぶい黄褐色 内面は浅黄褐色	普通	
SI-206A -1	SI206A-11	土師器	鉢	体下部から 口縁部片1/5 の残存	13.8		13.9 口径上 部径		半球状の体部を持ち、口縁部は小さく外反。体部外面は横方向のヘラナデ、内面はヘラミガキ。	緻密	両面とも浅黄褐色、一部明赤褐色	不良	両面とも少し摩耗している。両面とも赤彩。
SI-206A -2	SI206A-10	土師器	甕	底部付近1/8 の残存					底部は丸底、両面とも丁寧なヘラミガキ。	緻密	両面とも暗赤褐色	良好	両面とも赤彩。
SI-206A -3	SI206A-2	土師器	(甕)	胴上部から 口縁部片1/4 の残存					胴上部はやや丸みをもって直立、口縁部は微厚してわずかに外反し、口唇部は逆に薄くなり、わずかに水平に開く。外面の胴部は縦方向のヘラケズリ、口縁部には指頭痕が残る。内面は横方向のヘラナデ。	緻密	外面は橙色 内面はにぶい橙色	やや不良	内面は少し擦過痕が残る。
SI-206B -4	SI206B-4	土師器	甕	胴下部片1/8 の残存					大型の甕で、球状に大きく開いてゆくとみられる。外面は横及び斜め方向のヘラミガキ、内面は横方向のナデ。	緻密	外面は、にぶい黄褐色 内面は暗黄褐色	やや不良	内面は摩耗が多い。一部に指頭痕がある。

第84表 竪穴住居跡出土土器観察表(65)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-207-1	SI207-13	弥生土器	壺	胴上部片					細かい羽状縄文(斜縄文3段)を細い横位の沈線で区画。無文部はヘラミガキ。	緻密	外面は暗赤褐色と明黄褐色。内面はにぶい橙色。	普通	外面の無文部は赤彩。
SI-207-2	SI-207-38	弥生土器	甕	全体の60%の残存	(25.3)	(19.7)		7.5	胴部は半球状、頸部は短く下端に粘土紐接合痕を残し、ヘラによる刻目を入れ、口縁部は少し外反。わずかに粘土紐接合痕が見られる。口唇部はユビ押圧による波状。また、外面は横及び斜め方向のヘラナデ(一部ミガキ)、内面はヘラナデ(ミガキに近い)。	小礫1mm以下を含む。	外面は灰黄褐色と黒色。にぶい黄褐色。内面はにぶい黄褐色と黒色。	普通	胴上部から頸部の一部に煤付着。
SI-207-3	SI-207-21	弥生土器	甕	胴上部から口縁部片					胴部は半球状と考えられ、頸部下端に粘土紐接合痕を残し段をつくり、ユビによる押圧刻みを加える。口縁部は外反し、最大径は口唇部にもち、ユビ押圧による波状。両面ともユビナデ(外面は荒い)。	緻密	外面は明黄褐色とにぶい黄褐色。内面は黒褐色とオリーブ褐色。	普通	
SI-207-4	SI-207-32.41	弥生土器	甕	底部から胴下部片				6.5	胴下部は少し開いて立ち上がる。外面は縦方向のヘラナデ、内面はユビナデ。	緻密	外面はにぶい黄褐色と灰黄褐色。内面はにぶい黄褐色と黒色。	やや不良	外面の一部に煤付着。内面も炭化物付着。
SI-207-5	SI-207-25.27	弥生土器	甕	底部から胴下部				10.1	少し大型で、底部中央は盛り上がり厚い。胴下部の立ち上がりは大きく開く。外面はヘラナデの後ユビナデ。	緻密	両面ともににぶい黄褐色。	やや不良	内面は剝離が多い。
SI-208-1	SI208-15	弥生土器	甕	体上部から口縁部片	(22.1)				胴上部から頸部は丸みをもって直線的に立ち上がり、頸下位には粘土紐接合痕を残し段をつくり、ヘラによる刻目を入れる。口縁部は外反し、口唇部には指による押圧波状。	緻密	両面とも明黄褐色	良好	
SI-208-2	SI208-21.25.28.33	弥生土器	(壺)	底部から胴下部片				5.4	やや小型で、胴部の立ち上がりは急傾斜である。両面とも下部は横方向のヘラミガキ、上部はヘラナデ。	酸化鉄粒(3mm以下)を多く含む。	外面はにぶい橙色。内面は橙色	良好	
SI-208-3	SI208-1~3.18.24.30.31	弥生土器	甕	全体の3/4残存	20.9	17.8	20.2 胴部最大径上位	8.0	底部は厚い。胴部は半球状で最大径は上位、頸部は少し長く、下位に粘土紐接合痕を残し段を作る。また、ヘラによる刻目が入る。口縁部は外反し、口唇部は指による押圧波状。両面とも横方向のヘラナデ。	白色粒(1mm以下)を多く含む。	外面はにぶい橙色。内面は灰赤色	良好	
SI-208-4	SI208-1.3.5.7.9.12~14.32.34	弥生土器	甕	全体の1/2の残存	(17.2)	19.1	19.2 胴部上位	7.2	胴部は半球状で、最大径は上位、頸部は長く、下位に粘土紐接合痕を残し、棒状工具による刻目が入る。口縁部は外反し、両面ともヘラナデ。	酸化鉄粒(3mm以下)を多く含む。	外面は灰黄褐色。内面はにぶい橙色。	良好	
SI-208-5	SI208-1.22.26.27.35	弥生土器	壺	底部から胴上部片1/3の残存			26.8 胴部最大径中位	(8.6)	大型で、胴部は球状。両面とも横方向のヘラナデとヘラミガキが残る。	緻密	両面とも暗赤褐色と橙色	不良	両面ともかなり摩耗している。
SI-209-1	SI209-44.45	弥生土器	壺	胴上部から頸部片					大型の壺で、胴部は半球状であるが、頸部は長い。胴上部には斜縄文を沈線で区画した山形文、頸部下位には羽状縄文を沈線で区画して、山形文と横帯文が施され、刺突文をもつ円形浮文も貼り付けられている。無文部は横方向のヘラミガキ、内面はヘラナデと一部ユビナデ。	小礫(1mm以下)を多く含む。特に黄褐色粒が目立つ。	外面は赤色と一部褐色。内面は褐色	少し不良	外面は擦過痕が少し有る。内面は少し摩耗している。外面の無文部は赤彩か。
SI-210-1	SI210-8.21	弥生土器	鉢	全体の2/3の残存	(19.6)	9.2		6.0	体部はわずかに丸みをもって開いて立ち上がる。口縁部には羽状縄文2段を横位の沈線で区画している。他は両面ともヘラミガキ。	緻密	外面は褐色。内面はにぶい褐色	良好	
SI-210-2	SI210-4	弥生土器	壺	頸部から口縁部片	30.0				大型の壺で頸部は鉢状に直線的に開く。口縁部は短く厚い複合口縁で、外面は円形竹管の刺突文、下端部にはヘラによる刻目がなされている。	黄褐色粒(2mm以下)を含む。	両面とも明褐色	良好	両面ともかなり摩耗している。
SI-210-3	SI210-8	弥生土器	壺 (広口蓋)	口縁部片					3段横位の羽状縄文。口唇部にも斜縄文(LR)が施されている。内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	外面は灰黄褐色と明黄褐色。内面は灰黄褐色と赤褐色	少し不良	内面は赤彩。
SI-210-4	SI210-7.27	弥生土器	(壺)	底部片				6.4	やや小型の壺として考えられる。	緻密	両面ともににぶい褐色	良好	

第85表 竪穴住居跡出土土器観察表(66)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-211-1	SI211-7. 8.11	土師器	鉢	体部から口 縁部片	15.6		16.4 体上部		体部は丸みを持ち、開いて立ち上がり、口縁部は短く内傾。外面体部は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラミガキ、口縁部片は両面ともヨコナデ。	緻密	両面とも赤橙色	やや不良	両面とも摩耗が多い。 両面とも赤彩。
SI-211-2	SI211-9	土師器	ミニチュア土器	口縁部が40%欠損	10.4	4.4		5.0	底部は厚い。体部は低く、少し丸みを持って開く。体部は両面ともミガキにちかいヘラナデ、口縁部はヨコナデ。 外面上部に粘土紐接合痕がわずかに残る。	緻密	外面は暗褐色と赤褐色 内面は橙色と暗褐色	良好	
SI-211-3	SI211-1. 13	土師器	甕 (鉢)	底部から体部は40%欠損	15.8	12.8	16.3 体上部	6.0	体部は半球状で口縁部はわずかに外反する。外面の体部はヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	緻密	外面は赤褐色 内面は黒褐色、にぶい褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-211-4	SI211-2.4 ~6	土師器	甕	全体の1/3を欠損	16.7	18.5	21.5 胴 部 中 位	6.2	底部はわずかに突出、胴部は球状、口縁部は短く直線的に外反する。 外面胴部は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(3mm以下)を極少量含む。	外面は橙色 内面は黒褐色	やや不良	
SI-211-5	SI211-25. 2730.31	土師器	(甕)	体下部から口縁部片60%の残存	18.0				少し小型で、胴部は少し丸みをもって鉢状に開く。口縁部は小さく外反。胴部外面は縦及び横方向のヘラケズリ、内面は、ヘラナデの後ユビナデ。	緻密	両面とも橙色	やや不良	外面は摩耗が多い。 外面上部に粘土付着。
SI-212-1	SI212-1	弥生土器	壺	口縁部片					短い複合口縁で端部に縄文原体による刻目。外面無文部はヘラミガキ、内面はユビナデ。	緻密	外面は明褐色と浅黄褐色 内面は浅黄褐色	不良	外面の無文部は赤彩。 両面とも少し摩耗。
SI-212-2	SI212-1	弥生土器	壺	口縁部片					短く太い複合口縁で、斜縄文(LR)が施される。下部外面と内面は赤彩。	浅黄色粒(1mm以下)を多く含む。	両面ともにぶい黄色と暗赤色	少し不良	外面の複合部以外は両面とも赤彩。
SI-212-3	SI212-2	弥生土器	甕	底部片				5.5	外面はヘラケズリ、内面は丁寧なヘラナデ。少し厚手。	白黄色粒(2mm以下)を多く含む。	外面は橙色と黒色 内面は灰褐色と黒褐色	良好	外面は擦過痕多い。
SI-212-4	SI212-1.5	弥生土器	(甕)	底部から胴下部片1/3強の残存				(5.7)	胴下部の立ち上がりは、やや丸みをもって細めに開く。	緻密	外面は灰褐色と橙色 内面は黄褐色と褐灰色	少し不良	
SI-213-1	SI213-10. 11	弥生土器	甕	口縁部片					口縁部は大きく外反し、口唇部は両面からの指押圧による波状。	緻密	外面は黄褐色、一部褐灰色 内面は黄褐色、一部浅黄色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-213-2	SI213-1	弥生土器	甕	頸部片					粘土紐接合痕を6段残し、両面ともユビナデ調整がなされる。	小礫(5mm以下)を多く含む。	外面はにぶい橙色、一部黒褐色 内面は明黄褐色、一部灰黄褐色	少し不良	外面に煤付着。
SI-213-3	SI213-1. 14.15	弥生土器	壺	頸部片					横位2段の羽状縄文と横位2段のS状結節縄文。 内面はナデ。	緻密	両面とも橙色と黄褐色	不良	
SI-214-1	SI214-12	土師器	鉢	全体の80%の残存	14.6	5.8	15.2 体上部		丸底で体部はやや浅い碗状、口縁部は小さく内傾。体部は外面がヘラナデ、内面はヘラミガキ。	緻密 黒褐色粒が目立つ。 (1mm大以下)	両面とも明黄褐色とにぶい黄褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-214-2	SI214-64	土師器	坏	全体の70%の残存	14.2	5.1			底部は丸底で、体部はやや浅い碗状。少し厚手である。体部は外面が横方向のヘラケズリ、内面は横ナデ。	緻密 酸化鉄粒が少し目立つ。	外面は黒褐色と浅黄褐色 内面は浅黄褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-214-3	SI214-12. 26.40.41 ~43	土師器	鉢	全体の95%の残存	13.2	7.0	14.5 体上部 (やや中位に近い)		底部は丸底。少し厚手で体部は横に張る。口縁部は少し内傾し、口唇部は尖っている。 外面体部は横方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	外面は黒色、褐色、明赤褐色 内面は明赤褐色	良好	

第86表 竪穴住居跡出土土器観察表(67)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-214 -4	SI214-38	土師器	坏	全体の90% の残存	14.4	6.1	14.9 体上部		丸底で体部は球状、口縁部付近は直立、体部外面は横方向のヘラケズリ、内面はヘラナデ。	緻密 酸化鉄粒が目立つ。	外面は灰褐色と 棕色 内面は棕色	不良	
SI-214 -5	SI214-47. 52.54	土師器	鉢	底部欠損1/3 の残存	(15.2)	(6.1)	(15.4) 口縁部		丸底で体部は碗状に立ち上がり、口縁部はわずかに内傾する。体部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ、一部ヘラミガキ。外面の一部に粘土接合痕が残る。	緻密 小礫(1mm以下)極少量含む。	外面は黒褐色、 灰褐色、明赤褐色 内面は黒褐色と にぶい棕色	やや不良	
SI-214 -6	SI214-50. 51	土師器	坏	全体の90% の残存	14.4	5.0			丸底で体部は碗状、口縁部はわずかに丸みをもって直立する。外面の体部はヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキとヘラナデ。	緻密	外面は黒褐色、 灰褐色、にぶい 棕色 内面は明黄褐色、 明赤褐色、棕色	やや不良	外面の体部に 擦過痕がある。 内面の一部に 赤彩が残る。
SI-214 -7	SI214- 2. 62.89.91. 104	土師器	鉢	完形	13.2	7.3	13.7 体上部		底部は丸底で半球状の体部をもち、口縁部はわずかに内傾する。口唇部は尖っている。	緻密 わずかに酸化 鉄粒を含む。	外面は黒褐色、 赤褐色、にぶい 棕色 内面はにぶい棕色 と明黄褐色	やや不良	両面とも少し 摩耗 外面は赤彩。
SI-214 -8	SI214-56	土師器	鉢	全体の90% の残存	15.4	5.3	15.6 口縁部		丸底で体部はやや浅い碗状のつくりで薄手、口縁部は短く直立、口唇部は尖っている。体部は外面がヘラケズリ、内面はヘラナデ。	緻密 黒褐色粒が目立つ。 (1mm大以下)	外面は浅黄棕色と 棕色 内面は黄棕色と 一部棕色	不良	両面とも摩 耗が多い。
SI-214 -9	SI214-10	土師器	鉢	完形	12.6	6.3	13.8 体上部		底部は丸底、体部はやや横長で張っている。口縁部はわずかに稜をもち内傾し、口唇部は尖っている。体部外面は横方向のヘラケズリ、内面はヘラミガキ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は明赤褐色、 黒褐色、にぶい 棕色 内面は明赤褐色	良好	
SI-214 -10	SI214- 1. 59.62.63. 65-67.72. 76.77.80- 84.86.88. 94.~98. 101-103. 100.104	土師器	甕	全体の3/4の 残存	18.0	26.2	24.1 胴 部 中 位	7.6	胴部は、やや長い球状で最大径は中位、口縁部は小さく外反。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は黒褐色と にぶい黄棕色 内面は暗褐色	やや不良	
SI-214 -11	SI214- 1. 13.16.22 ~ 24.35. 38.75	土師器	甕	全体の3/4の 残存	17.0	23.2	21.3 胴 部 下 位	5.0	少し厚手で、底部中央は少し窪む。胴部は、やや長い球状で最大径は下位、口縁部は小さく外反。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。	緻密 小礫(1mm以下)を極少量含む。	外面は棕色と暗 褐色 内面は棕色	不良	両面とも摩 耗が多い。
SI-214 -12	SI214-2. 15.30.31. 33	土師器	甕	全体の1/3の 残存	(15.7)	(21.0)	(18.0) 胴 部 最 大 径 下 位	(5.3)	長胴甕で胴部最大径は下位、口縁部は小さく外反、胴部は斜め方向のヘラケズリ、内面はヘラナデの後丁寧なナデ(指か布)。	緻密 小礫(1mm以下)極少量含む。	外面は棕色と暗 褐色 内面は暗褐色	やや不良	両面とも摩 耗が多い。
SI-214 -13	SI214- 3. 7.9	土師器	甕	全体の3/4の 残存	(17.8)		21.4 胴 部 中 位		胴部は球状、口縁部は短く直線的に開く。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ、一部ヘラミガキ。	酸化鉄粒 (3mm以下) を多く含む。	外面は浅黄棕色、 一部黒褐色 内面はにぶい黄 褐色	やや不良	外面上部に 粘土接合痕 がわずかに 残る。 外面は擦過 痕が多い。
SI-215 -1	SI215-56	須恵器	甕	口縁部片1/5 の残存	(12.5)				口縁部は長くわずかに外反する。中程に稜を横位に2段持つ。	白色粒 (1mm以下) を極少量含む。	外面は青灰色 内面は灰白色	普通	
SI-215 -2	SI215-19	土師器	甕	胴上部から 口縁部1/2の 残存	(18.7)				球状の胴部をもった、やや大型の甕と考えられ、口縁部は外反。胴上部の外面は縦方向のヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ、口縁部は両面ともヨコナデ、外面には指頭痕が残る。	小礫(2mm以下)を極少量含む。	外面は暗褐色と 黄棕色 内面は暗褐色と 棕色	やや不良	
SI-215 -3	SI215-5	土師器	甕	胴上部から 口縁部1/2の 残存	(17.4)				口縁部は「く」の字状に外反する。内面上部にユビナデ、口縁部は両面ともヨコナデ、外面の頸部に粘土紐接合痕が残る。	小礫(2mm以下)を少量含む。	外面は暗褐色と 棕色 内面は棕色とに ぶい黄棕色	不良	
SI-215 -4	SI215-4	土師器	壺	底部から胴 下部片1/2の 残存				7.4	胴部最下部はわずかに窪んでから丸みをもって開く形で、外面はヘラミガキ、内面はヘラミガキとユビナデが認められる。	緻密	外面は黒褐色と 極暗赤褐色 内面は明赤褐色	良好	
SI-215 -5	SI215-57	土師器	甕	胴上部から 頸部片					「く」の字状の口縁をもつと考えられ、外面には横及び斜め方向の刷毛目、内面はユビナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	両面とも灰褐色と にぶい黄棕色、 一部棕色	不良	7と同一個体の 可能性が ある。

第87表 竪穴住居跡等出土土器観察表

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SI-215 -6	SI215-26	土師器	甕	胴上部から 頸部片					「く」の字状口縁。外面に縦方向の刷毛目調整(1.6cm幅、6条単位)。内面はヘラナデ。	緻密	外面は黒褐色と褐色 内面は黒褐色と明赤褐色	不良	外面に煤付着。
SI-215 -7	SI215-33	土師器	甕	胴上部片					外面に横及び斜め方向の刷毛目(1.2cm幅、6条単位)。内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(1mm以下)を含む	外面は黒褐色、浅黄褐色、褐灰色 内面は褐灰色、にぶい橙色	不良	外面に煤付着。
SI-216 -1	SX20-100.103 ~ 105 (SI216-108 ~ 111.113 ~ 122.124 ~ 128.131 ~ 133.136)	弥生土器	甕	全体の3/5の 残存	22.0	24.9	22.2 胴部最大径 上位	7.0	胴部上位に最大径をもち、頸部は長く、粘土紐接合痕を6段残し、口縁部はヘラによる上下からの刻目により波状。胴部は横方向のヘラケズリ後、荒いユビナデ、内面は横方向のヘラナデの後ユビナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は明黄褐色と黒色 内面は黄褐色とにぶい黄褐色	良好	
SI-216 -2	SX20-1.3	弥生土器	鉢	体上部から 口縁部片1/8 の残存	(21.8)				大型で、丸みをもって大きく開く。口縁部外面は、羽状縄文が横位の沈線で区画される。 外面の無文部はヘラミガキ、内面は荒いナデ。	緻密	外面は褐灰色、にぶい黄褐色、にぶい赤褐色 内面は赤褐色とにぶい赤褐色	良好	外面の無文部と内面は赤彩。
SI-216 -3	SX20-38	弥生土器	壺	頸部から口 縁部片	(15.0)				細く長い頸部をもち、口縁部は短く厚い複合口縁、頸部には横位の羽状縄文(斜縄文5段まで)、複合下端部は縄文原体による刻み目。上部斜縄文(LR)と羽状縄文、中位に円形の刺突文を横位に各々施文する。 内面はヘラミガキ。	緻密	外面は橙色と浅黄褐色 内面は赤色とにぶい黄褐色	少し不良	内面が赤彩(SI191-1と同一個体か)。
SI-216 -4	SX20-1.30	弥生土器	鉢	全体の3/5の 残存	(8.5)	4.0		1.8	小型で体最下部はわずかに窪む。体部は施文に立ち上がり、口縁部付近は丸みをもって直立。	緻密 わずかに酸化鉄粒を含む。	両面ともににぶい黄褐色 外面の一部は黒褐色	良好	
SI-216 -5	SX20-12	弥生土器	鉢	体下部から 口縁部片1/5 の残存	(18.2)				大型で、体部は丸みをもって大きく開く。口縁部は短くわずかに直立ぎみ。下部に稜を持つ。 体部外面は下位はヘラナデ、上位は一部ヘラミガキ、内面はヘラミガキ。	緻密 小礫(1mm以下)を極少量含む。	両面とも暗褐色と明赤褐色	良好	
SI-216 -6	SX20-7	弥生土器	甕	底部片90% の残存				5.6	外面はヘラケズリ、内面はヘラナデとユビナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は暗赤褐色と暗褐色 内面は黒褐色	やや不良	内面は剝離が多い。
SI-216 -7	SX20-1	弥生土器	甕	底部片 60%の残存				4.6	少し薄手。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	緻密	両面ともににぶい黄褐色、外面の一部は暗褐色	やや不良	
SI-216 -8	SX20-149.151.154.155	弥生土器	壺	胴下部 1/2弱の残存					大型の壺で、外面はヘラミガキ、内面はヘラナデとユビナデ。	白色粒(1mm大)を多く含む。	外面は赤褐色、褐色、黒褐色 内面は赤褐色と灰赤褐色	やや不良	
SI-216 -9	SX20-32.40	弥生土器	壺	体上部片					網目状の捺糸文を沈線で区画し、菱形文などを複雑に組み合わせている。	緻密	外面は黄褐色とにぶい黄褐色 内面は褐色とにぶい黄褐色	不良	両面とも摩耗が多い。
SI-216 -10	SX20-28	弥生土器	甕	胴上部から 口縁部片					最大径は口径にあり、頸下部に粘土接合痕を1段残す。 口唇部は両面からの刻目による波状、両面とも横方向のユビナデ。	浅黄褐色粒(2mm以下)を多く含む	両面とも褐灰色と褐色、暗赤褐色	良好	
SI-216 -11	SX20-19.58.78.136	弥生土器	鉢	体下部から 口縁部片					体部は球状、口縁部には横位の羽状縄文2段と沈線を配置する。口唇部も斜縄文(LR)がある。 他は両面ともヘラミガキ。	緻密	外面は明赤褐色とにぶい黄褐色 内面は赤褐色	普通	外面の無文部と内面は赤彩。
SB-01 -1	SB-01-14	土師器	高台付 甕	高台部60% の残存				高台部 口径6.9	短く直立する高台部をもち、中央付近はやや尖出ぎみである。	緻密	両面とも褐色とにぶい褐色。	不良	全体に摩耗している。
SD-01 -1	SD-01-13	土師質土 器	内耳 鍋	口縁部の内 耳部分					体部はわずかに外反して短く立ち上がる。内耳部分は太く丸みを持つ。	緻密 酸化鉄粒を極少量含む。	両面ともににぶい黄褐色と灰黄褐色。	普通	

第88表 溝・土坑出土土器観察表

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SD-3-5 -10	SD-3-5- 10	須恵器	甕	胴部破片					外面は平行タタキ目、内面はナデがみられる。	緻密	外面は白灰色。 内面は灰色。	良好	
SD-3-5 -21	SD-3-5- 1	須恵器	長頸 壺	頸部片2/1弱 の残存	(6.3)頸 部径				体部は丸みをもった肩を有すると推定される。頸部は僅かに開きぎみに直立する。	緻密	外面は灰オリーブ色、一部暗オリーブ色。内面は黄灰色と浅黄色。	良好	外面に自然釉がかかる。
SD-11 -14	SD-11-1	土師器	坏	底部片				(6.5)	少し広い底部をもち、切り離しはヘラ切り離し。	小礫2mm以下を少量含む。	両面ともにおい黄橙色と灰黄褐色。	普通	
SD-15 -15	SD-15-1	土師器	高台付 埴	高台部から体下部40% の残存				(6.3)高台部 口径	高台部は、短くハの字状に開く。体部は丸みをもって開き、内面は黒色処理がなされる。	小礫1mm大以下を含む。	外面は黒色と黒褐色。 内面は黄橙色と明赤褐色。	やや不良	内面は少し摩耗する。
SD-15 -16	SD-15-21	土師器	高台 坏埴	高台部から体下部片1/2弱 の残存				(7.2)高台部 口径	高台部断面は三角形で、外面は短く直立する。体部はやや小型で内面は黒色処理がなされる。	緻密であるが、1mm以下の小礫を少量含む。	外面は黒褐色とにおい黄褐色。 内面は黒色。	普通	
SD-15 -20	SD-15-1	土師器	坏	底部中央は欠損。全体の1/4弱残存	(13.8)	(4.9)		(6.1)	体部は埴状に開く、少し薄手。底部切り離しは摩耗して不明。	酸化鉄粒3mm以下を多く含む。	両面とも浅黄橙色。	不良	全体に摩耗している。
SD-22 -22	SD-22-1	土師器	坏	底部付近1/6 の残存				(6.4)	底部は回転糸切り離して少し広め。薄手。	緻密	両面ともにおい黄橙色と浅黄褐色。	少し不良	
SD-25 -23	SD-25-1	土師器	高台 付埴	(高台部から体下部片1/6 の残存)				(4.8)高台部 口径	底部はせまく、高台断面は三角形で、外面は直立する。体部は埴状と考えられる。	緻密	両面とも橙色とにおい褐色。	やや不良	
SK-02 -1	SK-02-2	土師器	足高 高台付 埴	高台と坏部の接合部付近70%の残存					やや太く、高台部はハの字状に開く。	緻密	両面ともにおい黄褐色と橙色	やや不良	
SK-02 -2	SK-02-3	土師器	高台 付埴	高台部から幕下部残存				7.1高台部 口径	高台部は短くハの字に開く。体内面はヘラミガキの後、黒色処理がなされる。	小礫3mm以下を少量含む。	外面は灰黄褐色、におい橙色。内面は黒色	良好	
SK-03 -3	SK-03-3	土師器	高台 付坏	高台部から底部片1/2強 の残存				(6.8)高台部 口径	短い断面三角形の高台が付き、内面はヘラミガキで黒色処理がなされる。	緻密	外面は黒色と橙色。 内面は黒色。	普通	内側は少し摩耗している。
SK-06 -1	SK06-7	土師質土 器	かわ かけ	完形	9.1	2.2		4.9	底部は、右回転クロコ糸切り離し。	緻密	両面とも橙色とにおい褐色	やや不良	両面に煤付着。
SK-06 -2	SK06-10	土師質土 器	かわ かけ	完形	9.3	1.8		4.4	底部は厚く、右回転クロコ糸切り離し。	緻密	外面は明黄褐色と黒褐色、褐灰色 内面は黒褐色とにおい黄褐色	普通	内面と外面の一部に煤付着、また、粘土塊も付着。
SK-06 -3	SK06-9	土師質土 器	かわ かけ	95%の残存	9.6	2.3		4.5	底部は右回転クロコ糸切り離し。	緻密	外面は浅黄褐色と黒色 内面は明黄褐色とにおい褐色	やや不良	内面の2/3に煤付着、また剝離もみられる。
SK-06 -4	SK06-11	土師質土 器	かわ かけ	完形	8.8	2.1		4.8	底部の切り離しは静止糸切り。	小礫(1mm以下)を含む。白色粒も多く含む。		不良	内面に煤付着。

第89表 土坑等出土土器観察表

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SK-06 -5	SK06-8	土師質土器	かわらけ	完形	9.0	1.8		4.2	底部は右回転クロロ糸切り離し。	酸化鉄粒(1mm以下)を少量含む。	外面は灰黄褐色と明黄褐色 内面は橙色と灰褐色黒色	やや不良	内面の一部に煤付着。
SK-06 -6	SK06-5	土師質土器	かわらけ	底部付近1/4の残存				4.5	底部は摩耗していて不明瞭。(回転糸切りか)	緻密	外面は橙色と明褐色 内面は明黄褐色とにぶい黄橙色	やや不良	
SK-07 -1	SK07-3	土師器	甕	底部から胴下部欠損 他は2/3の残存	15.0		24.5 胴 部 中 位		胴部は大きな球状、口縁部は短く直線的に立ち上がる。 胴部外面はヘラケズリの後ヘラミガキ、頸部に刷毛目が残る。内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	外面は黒褐色と橙色 内面は黒褐色と暗赤褐色	良好	胴下部内面は剝離が多い。
SK-07 -2	SK07-1.5	土師器	甕	口縁部欠損 2/3の残存			24.8 胴 部 中 位	6.8	大型で、底部は比較的小さく、胴下端は少し窪み、胴部は大きく張り球状を示す。口縁部は短く直立する(少し厚手)。 胴部外面はヘラナデの後ヘラミガキ、内面はヘラナデの後ユビナデ。	小礫(3mm以下)を含む。	外面は橙色、にぶい橙色、明褐色 内面は橙色と灰褐色	わずかに不良	内面に粘土接合痕がわずかに残る。
SK-08 -4	SK-08-3	土師器	高台付碗	体上部から口縁部片1/8の残存	(13.1)				やや丸みをもって開く形体で、内面は黒色処理がなされる(ヘラヨコミガキ)。	緻密	外面は黒色と橙色。 内面は黒色。	良好	
SK-12 -5	SK-12-2	土師質土器	かわらけ	底部から体下部60%の残存				4.6	底部は右回転クロロ糸切り離し。体部は小さく丸みをもって開く。	緻密	外面はにぶい黄褐色と浅黄褐色、内面はにぶい黄褐色。	わずかに不良	一部に煤付着。
SK-15 -7	SK-15-1	須恵器	甕	底部から胴下部片(1/6)				(9.7)	胴部最下端は直立し、横方向のヘラケズリ、その上部は丸みをもって開いてゆく。 外面はタタキ目、内面はアテ目が残る。	小礫2mm以下を少量含む。	両面とも灰黄色。	良好	
SK-18 -6	SK-18-1	須恵器	甕	胴部破片					外面は平行タタキ目、内面はヘラナデとユビナデがみられる。 少し厚手。	小礫3mm以下を少量含む。	外面は灰色と浅黄色。 内面は明緑灰色とオリブ灰色。	良好	
SK-24 -11	SK-24-1.3	土師質土器(かわらけ)	坏	全体の90%の残存	10.0	2.5		6.7	小型で少し厚手。底部は広く、体部の立ち上がりは逆ハの字状に開く。 底部切り離しは摩耗して不明。	酸化鉄粒3mm以下を含む。	両面とも黄褐色と橙色。	不良	全体に摩耗している。
SK-34 -12	SK-34-10 ~12.-15	弥生土器	甕	底部から胴中位1/3の残存				(7.2)	やや小型で、胴部は半球状とみられ、外面は縦方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラナデ、一部ヘラミガキ。	酸化鉄粒3mm以下を含む。	外面は黒褐色と明黄褐色、灰黄褐色。 内面はにぶい黄褐色。	わずかに不良	外面の一部に煤付着。 内面の一部にも(煤)付着。
SK-42 -19	SK-42-1	土師器	高坏	脚下部と口縁部欠損					脚部はやや太く、開いている。坏部はやや丸みをもって開く。外面は縦方向のヘラナデが主体。内面は脚部がユビナデ、坏部がヘラミガキ。	小礫1mm以下を少量含む。	両面とも明赤褐色、黒褐色、にぶい褐色	良好	
SX-01 -1	SX-01	土師質土器	かわらけ	全体の1/6程度の残存	(5.2)	1.7			小型で底部は丸底。手づくね、少し雑なつくり。	緻密	外面は灰白色と浅黄色 内面は灰白色と灰オリブ色	普通	指頭痕残る。
SX-01 -2	SX-01	土師質土器	かわらけ	全体の1/6程度の残存	(6.2)	1.7			小型で底部は丸底。手づくね、少し雑なつくり。	緻密	外面は明黄褐色とにぶい黄褐色 内面はにぶい黄褐色	普通	指頭痕残る。
SX-01 -1	SX-01.61	土師器	埴	底部と口縁上部欠損			8.0 体 部 中 位		小型の埴で少し厚手。体部は球状、口縁部は「く」の字状。体部下位はヘラナデ、頸部は刷毛目。	酸化鉄粒(2mm以下)を多く含む。	外面は暗赤褐色 内面は暗褐色	良好	
SX-01 -2	SX01-79.81	土師器	壺	胴上部から口縁部片50%の残存	22.4				大型の壺で胴部は球状と考えられ、頸部から口縁部は直線的に開く。口縁部は複合口縁。外面の頸部は横方向のヘラナデ。	緻密	外面は橙色 内面はにぶい橙色	良好	

第90表 遺構出土土器観察表(1)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SX-01 -3	SX01-1. 5.7~11. 13.15~23. 25~38.40 ~47.79	土師器	甕	ほぼ完形	15.1	24.5	21.8 胴 部 下 位	5.6	全体的には球状の胴部であるが、最大径をやや下部にもち、下位の立ち上がりやや直線的、口縁部は「く」の字状。 外面の胴下部は縦方向のヘラミガキ、頸部は縦方向のヘラナデ。	緻密	両面とも暗褐色	良好	
SX-01 -4	SX01- 3. 79	土師器	壺	ほぼ完形	14.3	22.2	19.4 胴 部 中 位	6.0	胴部は球状で、頸部は短く直線的に開き、口縁部は複合口縁で直立する。 胴下位の外面はヘラケズリ、頸部はヘラナデ。	緻密	両面とも暗褐色	良好	
SX-04 -1	SX04-19	土師質土 器	かわ かけ	全体の1/2の 残存	8.7	2.4		4.1	体下位にわずかな窪みをもつ。底部は回転糸切り離し。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	両面とも明黄褐色	良好	
SX-04 -2	SX04-16	土師器	坏	底部欠損	(11.8)	3.5		(6)	やや薄手で、体部は丸みをもって立ち上がる。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は橙色 内面は明褐色	やや不良	
SX-04 -3	SX04-21	土師質土 器	かわ かけ	底部片				(5.7)		小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面はにぶい赤褐色 内面は暗赤褐色	良好	
SX-04 -4	SX04- 19. 21	土師器	高台 付塊	底部片				(6.3)	高台は低く小さい(断面は三角形状)。少し厚手。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は黄褐色 内面は橙色	良好	
SX-04 -5	SX04-21	土師器	高台 付坏	底部片				(6.7)	高台はやや細くハの字状。内面はヘラミガキ。	小礫(1mm大以下)を少量含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は黒色	やや不良	内面黒色処理。
SX-04 -6	SX04- 南 面包層	土師器	高台 付塊	底部片				(7.0) 高台口 径	高台は小さく断面台形状、体下部はヘラケズリ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は明褐色 内面は黒色	良好	内面は黒色処理。
SX-04 -7	SX04- 1. 2.28(南面 包層)	土師器	高台 付塊	底部片				(6.8) 高台口 径	高台はやや小さく、ハの字状。 内面はヘラミガキ。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面は黄褐色 内面は黒色	良好	内面黒色処理。
SX-04 -8	SX04-32 (南面包 層)	土師質土 器	かわ かけ	底部片				(6.0)	底部は少し厚く、切り離している。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	両面とも橙色	良好	
SX-04 -9	SX04-28	土師器	高台 付坏	底部から体 下部片				(7.2)	少し厚手。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	両面とも明黄褐色	良好	
SX-04 -10	SX04-16	土師器	坏	底部から体 下部片				7.9		小礫(1mm大以下)を多く含む。	両面とも橙色	良好	
SX-04 -11	SX04-21	土師器	塊	口縁部片		15.2			大型で薄手、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面は明褐色 内面は黒色	良好	内面黒色処理。
SX-04 -12	SX04- 33 (25.47)	土師器	鉢	体上部から 口縁部片	(22.3)				体上部は少し丸みをもって直線的に開き、口縁部との境に稜をつくる。口縁部は、内傾しながら直立する。体部外面はヘラケズリ、内面は横方向のヘラミガキ。	〃	〃	〃	〃
SX-04 -13	SX04-32 (南面包 層)	須恵器	長頸 壺	底部から体 下部片				(9.0) 高台部 口径	高台断面は方形、体最下部はヘラケズリ。	小礫(3mm以下)を少量含む。	両面とも灰白色	良好	

第91表 遺構出土土器観察表(2)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SX-04 -14	SX04-26 南面包層	土師器	甗	胴下部片 10%の残存				(11.5) 胴下 端 口径	胴下部の立ち上がりは直線的に開く。 胴部外面はヘラケズリ、内面はユビナデ。	小礫(2mm以下)を含む。	両面とも橙色	良好	
SX-04 -17	SX04-32 (南面包層)	土師器	(坏)	(底部片)					平坦	小礫(1mm以下)を少量含む。	外面はにぶい黄橙色 内面は黒色	良好	線刻土器。内面黒色処理。
SX-05 -1	SX-05-4	土師器	坏	体上部から 口縁部片1/8 の残存				体 稜 部 径 (13.6)	やや大型で、体下部に明瞭な稜がつくられ、口縁部は開いて立ち上がると考えられる。	緻密	外面はにぶい黄橙色と赤色。 内面はにぶい黄橙色。	良好	体上部から(口縁部)まで赤彩が認められる。
SX-07 -1	SX07-220	土師器	壺	口縁部片	(13.1)				薄手で、水平にちかく開き、口唇部はわずかに直立。	緻密 白色粒が少し目立つ。	両面とも橙色	良好	
SX-07 -2	SX07-22	弥生土器	壺	口縁部片	(15.9)				頸部は細く長いと考えられ、大きく外側に開く。口縁部は短い複合口縁である。内面は横方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。特に白色が目立つ。	外面は赤褐色 内面は橙色	良好	
SX-07 -3	SX07-203.215	土師器	罎	完形	12.4	16.0	15.2 体下位	(9.4)	底部は平底、体部は球状で、口縁部は「く」の字状に開く。 体下部はヘラケズリ、内面はヘラナデ。	小礫(2mm以下)多く含む。	両面とも明赤褐色	良好	
SX-07 -4	SX07-34	弥生土器	甗	完形	16.5	14.4	16.5 胴 部 上 位	6.2	小型の甗。胴部は半球状で頸部は比較的短く、口唇部は刻目。 外面の胴部はヘラケズリとナデ、両面はヘラナデ(横)とユビナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも赤褐色	良好	
SX-07 -5	SX07-52. 54.205	土師器	甗	胴上部が口 縁部片	(17.2)				胴部は半球状とみられ、口縁部は短く外反する。口縁部から胴部までヘラケズリ、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。白色粒を少量含む。	両面ともにぶい黄橙色	良好	
SX-07 -6	SX07-155	土師器	(甗)	底部片				(6.7)	少し小型の甗と思われる。底部中央が焼成後穿孔され、甗に転用されている。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面は橙色 内面は黒色	良好	
SX-08 -1	SX08-65.66.75	土師器	高坏	坏部片 口縁部欠損					体下部に稜をもつ。上部は直線的に開いて立ち上がる。	緻密	両面とも赤色	良好	両面に赤彩。
SX-08 -2	SX08-25	土師器	高坏	坏部片 口縁部欠損					体下部に稜をもち、直線的に開いて立ち上がる。	緻密	両面とも赤色	良好	両面とも赤彩。
SX-08 -3	SX08-56. 98	土師器	高坏	坏部片 口縁部欠損					体上部に明瞭な稜をもつ、直線的に開いて立ち上がる。	緻密	両面とも明赤褐色	良好	両面に赤彩。
SX-08 -4	SX08-51	弥生土器	壺	口縁部片					直線的に開き、複合口縁。	緻密	両面ともにぶい橙色	良好	口縁部に煤附着。
SX-08 -5	SX08-58	土師器	高坏	脚部片					丸みをもった柱状の脚部で、外面は縦方向のヘラミガキ。	緻密	両面とも黒褐色	良好	
SX-08 -6	SX08-44	土師器	高坏	脚部片					裾部が柱状部付近まで存在する。裾部はヘラナデ。	緻密	両面とも橙色	良好	

第92表 遺構出土土器観察表(3)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記番号	種別	器種	遺存度	計測値(cm)				器形及び整形の特徴	胎土	色調 (外・内)	焼成	備考
					口径	器高	最大径	底径					
SX-08-7	SX08-57.60.61	土師器	高坏	脚部片				16.4 裾部口径	裾部は大きく開き、脚部は丸みをもって棒状に立ち上がる。 外面は縦方向のヘラミガキ。	緻密	両面とも橙色	良好	
SX-08-8	SX08-96.98	弥生土器	壺	胴部から頸部			15.8 胴上部		胴部は少し細長い球状と考えられ、頸部は細く長い、頸部に羽状縄文を横位の沈線で区画している。 両面とも体部はヘラナデ。	黄橙色粒(3mm以下)を多く含む。	外面は暗赤褐色 内面はにぶい橙色	良好	
SX-08-9	SX08-3.98	弥生土器	壺	胴上部片					胴部は球状で頸部は細く長いと考えられる。文様は下位より、羽状縄文(RL, LR)、横位2段のS字状結節縄文、無文部(ヘラミガキ)、斜縄文(細い)を細い沈線で区画する。	緻密	両面とも橙色	良好	外面の無文部は赤彩。
SX-09-1	SX09-5	土師器	坏	口縁部片	(13.8)				体部は碗状、口縁部は短く、わずかに外反する。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラミガキ。 底部は平底か。	小礫	両面とも明赤褐色	良好	両面とも赤彩。
SX-09-2	SX09-24	土師器	壺	口縁部片	(13.8)				細い頸部から口縁部は黒く外反する。口唇部は外側斜めに面をもつ。 両面ともヘラミガキがなされる(外面は縦方向、内面は横方向)。	緻密 僅かに小礫(1mm以下)を極少量含む。	両面とも橙色と赤色	良好	両面とも赤彩。
SX-09-3	SX09-9	土師器	高坏	脚上部と坏体下部					脚部は丸みをもった「ハ」の字状、坏部も丸みをもって開く形と考えられる。 脚部外面は縦方向のヘラナデ、坏部内面と脚部内面はヘラミガキ。	緻密 白色粒(1mm以下)を少量含む。	両面とも橙色	良好	
SX-09-4	SX09-3	土師器	器台	脚上部から器受部片					脚部は「ハ」の字状に開く、器受部中央には、径8mmの穿孔がみられる。 脚部外面は縦方向のヘラミガキ、内面はユビナデ。	緻密 酸化鉄粒(1mm以下)を少量含む。	両面とも赤褐色	良好	両面とも赤彩。
SX-10-1	SX10-28.29.31.32.50.55.159.178	土師器	埴	口縁部片	(13.5)				丸みをもって長めに立ち上がる。薄手である。 両面とも縦及び斜め方向のヘラミガキ。	緻密 酸化鉄粒(1mm以下)を少量含む。	外面は浅黄褐色と赤褐色 内面は赤色	良好	両面とも赤彩。
SX-10-2	SX10-28.29.50	土師器	埴	体上部1/3の残存			(13.6) 胴中位		体部は球状、口縁部はやや直線的に開くと考えられる。 外面はヘラミガキ、内面はヘラナデとユビナデ、また内面の下部にわずかに刷毛目あり。	緻密 酸化鉄粒(1mm以下)を少量含む。	外面は赤色 内面は橙色と浅黄褐色	両面とも	外面全体と内面の口縁部は赤彩。
SX-10-3	SX09-168.201.202	土師器	甕	胴上部から口縁部					胴部は丸みもち、口縁部は外反、刷毛目調整が口縁部の中程までなされ、細い横位の沈線で区画されている。内面は頸部から口縁部に刷毛目が見られる。 胴部内面はナデ。	小礫(1mm以下)を含む。 白色粒が目立つ。	外面は黒褐色 内面は浅黄褐色	良好	外面に煤付着。
SX-10-4	SX09-46	土師器	高坏	脚上部から坏下部					脚部は「ハ」の字状に円形の穿孔が4ヶ所認められる。坏部は少し丸みをもって開く。 外面は縦方向のヘラミガキ、内面も横方向のヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を多く含む。	両面とも明赤褐色	良好	両面とも赤彩。
SX-10-5	SX10-65.114.181.207~209.S1106-1	弥生土器	壺	底部から胴上部			15.7 胴中位	6.2	やや小型で、胴部は球状、最大径は中位にある。胴上部にS字状結節縄文が2~3段横位に見られる。 他は横方向のヘラミガキ、内面は粘土紐接合痕がわずかに残る。	小礫(2mm以下)を多く含む。	外面はにぶい黄褐色 内面は明黄褐色	良好	
SX-11-1	SX11-5.7.11.13	土師器	埴	全体の1/2の残存	(16.3)	22.0	(19.1) 胴中位	(6.8)	底部は焼成前に穿孔され、胴部は球状、頸部から口縁部はくの字状に大きく外反する。口唇部は斜めに面取りされる。外面のほぼ全域と内面の口縁部付近に刷毛目が見られる。	小礫(1mm以下)と白色粒を少量含む。	両面とも橙色	良好	
SX-11-2	SX11-15	土師器	壺	底部片				3.6	小型の壺とみられ、両面ともヘラミガキがなされる。	緻密 白色粒をやや多く含む。	外面は橙色 内面は明赤褐色	良好	
SX-11-3	SX11-7	土師器	(壺)	底部片				(5.4)	底部は穿孔される。外面はヘラケズリ、内面はナデ。 少し小型である。	小礫(2mm以下)と白色粒をやや多く含む。	両面とも橙色	良好	

第93表 遺構出土土器観察表(4)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SX-11 -4	SX11-1	土師器	(壺)	底部片				(7.1)	底部は穿孔される。外面はヘラケズリ、内面はナデ。	緻密 白色粒を少量含む。	両面とも橙色	良好	
SX-11 -5	SX11-7	土師器	(壺)	底部片				(6.4)	底部は穿孔される。外面はヘラケズリ、内面はナデ。	小礫(2mm以下)と白色粒をやや多く含む。	両面とも橙色	良好	
SX-12 -1	SX12-1	土師器	坏	口縁部片 1/24の残存					直線的に開く。	緻密	両面とも橙色	やや不良	
SX-12 -2 ~6	SX12	須恵器	甕	胴部片					少し薄手で小型とみられ、ユビナデにより成形痕が調整されている。	小礫(1mm以下)を含む。	両面とも暗灰赤色、灰色	良好	
SX-13 -1	SX13-7	土師器	甕	胴中位から 口縁部	(13.5)		(14.7) 胴上位		胴はやや長い。最大径は胴上部、口縁部は外反、胴部外面は縦方向の刷毛目を横方向のナデで少し消している。内面は、胴下部は横方向のヘラナデ、上部は口縁部まで横方向の刷毛目。	小礫(2mm以下)を多く含む。 白色粒も含む。	外面は暗褐色 内面は橙色	良好	外面に煤付着。
SX-13 -2	SX13-44、 45、69	土師器	埴	口縁部片	(15.1)				直線的にやや長く大きく開く。上部は直立気味、薄手である。	小礫(1mm大以下)を含む。	両面とも橙色	良好	両面に赤彩。
SX-13 -3	SX13-21	土師器	甕	底部片中央 部欠損				(5.9)	底部は細く、胴下部より開いて立ち上がる。外面は刷毛目、内面はナデ調整。	小礫(2mm以下)を多く含む。 白色粒も含む。	両面とも橙色	良好	
SX-14 -1	SX14-B5	弥生土器	甕	胴上部から 口縁部	(21.4)		(19.0) 胴部最大 径(上位)		胴部最大径は上位、頸部は長く、粘土継接合痕を7段残す。口縁部は少し外反、口唇部は両面から指押圧による波状。胴部外面はヘラミガキ、頸部から口縁部は指頭痕が残る。内面はユビナデ。	小礫(1mm大以下)を含む。	外面は黒褐色 内面は明黄褐色	良好	
SX-14 -2	SX14-B3	弥生土器	甕	底部から胴 最下部			5.4		少し厚手で両面とも横方向のナデ。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面は黄褐色 内面は褐色	良好	
SX-14 -3	SX14-B3	弥生土器	甕	底部から胴 最下部			5.4		やや丸みを帯びて立ち上がる。外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のナデ。	小礫(1mm大以下)を多く含む。	外面は橙色 内面は明赤褐色	良好	
SX-14 -4	SX14-B3	土師器	埴	底部付近欠 損	(16.3)				体部はわずかに丸みを持つが直線的に開く。内面は横方向のヘラミガキ。	小礫(1mm大以下)を含む。 酸化鉄粒も含む。	外面はにぶい黄 褐色 内面は黒色	良好	内面黒色処理。
SX-14 -5	SX14-A1	弥生土器	甕	胴上部から 頸下部			(19.8) 胴部最大 径(上位)		胴部最大径は上位、頸部は長く、下位に粘土接合痕を残し段をつくり、縄文原体による刻目を入れる。外面胴部は横方向のヘラナデ、内面は横方向のヘラミガキ。	小礫(1mm大以下)を含む。	両面とも明黄褐色	良好	
SX-14 -6	SX14-A1	弥生土器	甕	胴上部から 頸下部					胴部最大径は中位か、頸下部に粘土組接合痕を残し、縄文原体による押捺が施される。胴部外面は横方向のナデ、内面は縦方向のヘラミガキ。	小礫(1mm大以下)を含む。	両面とも明黄褐色	良好	
SX-14 -7	SX14-A1	弥生土器	甕	底部から胴 最下部片				(6.2)	胴部は大きく直線的に開く。外面は縦方向のヘラミガキ、内面はナデ。	小礫(3mm以下)を多く含む。	両面とも明黄褐色	良好	
SX-15 -1	SX15-27	土師器	埴	底部付近欠 損1/4の残存	(11.7)				丸みをもって開いて立ち上がる。外面はクロコユビナデ、内面はヘラミガキ。	小礫(1mm以下)を含む。	外面は黒色と黒 褐色 内面は黒色	良好	内面黒色処理。

第94表 遺構出土土器観察表(5)

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値(cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SX-15 -2	SX15-4	土師器	坏	全体の1/6の 残存	(11.6)			(5.5)	少し厚手、直線的にわず かに外反ぎみに開く。 底部は左回転ロクロ糸切 り離し。	緻密	外面は橙色とに ぶい橙色 内面は橙色	やや不良	
SX-15 -3	SX15-2	土師器	坏	底部から体 下部片全体 の1/8の残存				(5.3)	底部は左回転のロクロ糸 切り離し。	酸化鉄粒を 少量含む。	外面はにぶい橙 色 内面は橙色	少し不良	
SX-15 -4	SX15-2	土師器	高台 付坏	底部から体 下部片全体 の1/4の残存				(7.4) 高台口 径	断面が円形で低い高台が 付き、体下部は直線的に開 く。 内面は横方向のヘラミガ キ。	緻密	外面はにぶい橙 色 内面は褐色と にぶい褐色	やや不良	
SX-16 -1	SX16-33	土師器	坏	全 体 の 90% の残存	14.2	5.3	14.5 口 縁 部 最大径		丸底で体部は浅い碗状に 立ち上がり、口縁部はわず かに内傾する。 体部外面はヘラケズリ、 内面はヘラナデ。	緻密	両面とも暗赤褐 色	良好	両面とも赤 彩。
SX-16 -2	SX16-27	土師器	坏	全体の3/4の 残存	15.0	5.2			丸底で体部は浅い碗状に 立ち上がり、口縁部はわず かに内傾する。 体部外面はヘラケズリ、 内面はヘラナデ。	緻密	外面はにぶい橙 色 内面は赤色	良好	内面は赤彩。
SX-16 -3	SX16-26	土師器	壺	全体の3/4の 残存	6.0	8.4	8.4 体 部 中 位	5.0	小型の壺で、底部は厚く 広い、体部は球状、口縁部 は直立ち。内面の頸部に 段をもつ。	緻密	両面とも黒褐色	良好	
SX-16 -4	SX16-31、 32	土師器	甕	口縁部片	(16.0)				やや厚手で外反する。	緻密	両面とも橙色	良好	
SX-16 -5	SX16-4	土師器	短頸 壺	胴上部から 口縁部片1/4 弱の残存	(11.4)				胴部は球状と考えられ、 最大径は胴中位にあり、口 縁部は短く直立する。	緻密	両面とも赤色	良好	両面とも赤 彩。
SX-17 -1	SX17-1	土師器	高坏	脚部から坏 最下部片				16.0 脚 裾 部 口径	脚部部は大きく広がり、 柱状部は丸みをもって立ち 上がる。坏部は厚手で、脚 外面は縦方向のヘラナデ、 脚部内面は縦方向のヘラケ ズリがみられる。	緻密	両面とも橙色	良好	
SX-18 -1	SX18-5	土師器	甕	口縁部片	(16.0)				やや短く直線的に開く。 内面の頸部付近に粘土接合 痕を残す。両面ともヨコナ デ。	小礫(1mm大 以下)を含む。	両面とも明赤褐 色	良好	
SX-18 -2	SX08-25	土師器	甕	ほぼ完形	14.3	22.4	21.5 胴 部 中 位	7.8	胴部はほぼ球状、頸部は 短く直立し、口縁部は外反。 胴外面はヘラケズリ、内 面は横方向のヘラナデ。	小礫(1mm大 以下)を含む。 酸化鉄粒も 含む。	両面とも橙色	良好	
SX-18 -3	SX18-7、 29	土師器	高坏	脚部中位片					柱状で、わずかに丸み を持って斜めに立ち上がる。 中位に円形の穿孔がみられ る。 外面は縦方向のヘラミガ キ、内面はヘラケズリ。	小礫(1mm以 下)を含む。 白色粒が目 立つ。	両面とも明赤褐 色	良好	両面とも赤 彩 (脚内面を 除く)。
SX-18 -4	SX18-1	土師器	高坏	脚最上部から 坏下部片					脚部は細く、坏部下位に は稜がみられる。体上部は 直線的に開く。 外面はヘラケズリ、内面 はヘラミガキ。	小礫(1mm以 下)を含む。	両面とも明赤褐 色	良好	両面とも赤 彩 (脚内面を 除く)。
SX-18 -5	SX18-28	土師器	埴	全 体 の 60% の残存	10.0	12.6	15.0 (体中部)		少し厚手で、体部は中位 で大きく張る。口縁部は短 く直線的に開く。 両面ともヘラナデ (ヘラ ケズリ)が見られる。	小礫(1mm大 以下)を多く 含む。 白色粒が目 立つ。	両面とも橙色	良好	外面と内面 の口縁部が 赤彩。

第95表 遺構出土土器観察表(6)

※器種と計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器 種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
SX-18 -6	SX18-5	土師器	埴	底部から体下部				3.3	平底の底部で外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ。	小礫(1mm大以下)を含む。	外面は明赤褐色 内面は橙色	良好	
SX-18 -7	SX18- 4. 22	土師器	高坏	脚裾部片					裾部はやや大きく広がる。 外面は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラケズリ。	白色粒(1mm大以下)を多く含む。	両面とも橙色	良好	
SX-19 -1	SX19-18	土師器	高坏	脚部片				13.4 脚 裾 部 口径	裾部は大きく開き、柱状部は丸みをもって立ち上がる。 外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリタン。	緻密	両面とも橙色	良好	
SX-19 -2	SX19-54	土師器	高坏	脚部片 裾部欠損					裾部は大きく開くと考えられる。柱状部は細くやや丸みをもって立ち上がる。 外面は縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラナデ。	緻密	両面ともいぶい 橙色	良好	
SX-19 -3	SX19- 1. 31	土師器	甕	胴上部から 口縁部片	(14.0)				やや小型で、胴部は丸みをもって立ち上がり、外反(少し厚手)。 外面胴部は縦方向のヘラケズリ、内面は横方向のヘラナデ。	緻密	両面とも暗褐色	良好	
SX-19 -4	SX19-14	土師器	壺	底部から体下部				(5.2)	胴部は丸みをもって開いて立ち上がる。 胴部はヘラミガキ、内面はヘラナデ。	緻密	両面とも浅橙色	良好	
SX-19 -5	SX19-15	土師器	(甕)	底部から体下部				(5.0)	小型で体部は丸みを帯びて開いて立ち上がる。 底部は焼成後の穿孔がある。甕に転用。	白色粒(1mm大以下)を多く含む。	両面ともいぶい 橙色	良好	
SX-21 -1	SX21-82	土師器	甕	胴上部から 口縁部片	(18.8)				「く」の字口縁で外面の胴上部から頸部まで刷毛目調整。 内面は横方向のヘラナデ、外面は口縁部に粘土接合痕がわずかに残る。	小礫(2mm以下)を多く含む。 酸化鉄も目立つ。	外面は赤褐色 内面は明褐色	良好	
SX-21 -2	SX21-44	弥生土器	甕	頸部から口縁部片					頸部は長く、口縁部はやや外反、口唇部は上下からの指押圧を加える。 外面はヘラミガキ、内面はユビナデ。	小礫(2mm以下)を多く含む。	両面とも明黄褐色	良好	
SX-21 -3	SX21- 1. 17 ~ 19. 21.23.26. 28.30.52. 55 ~ 57. 84.85	弥生土器	甕	底部と口縁部欠損			22.9	(6.6)	やや大型で底部は厚く、胴部は球状、頸部は短い。 口縁部は外反すると考えられる。 胴部外面はヘラナデ、内面は横方向のヘラミガキ。	緻密	両面ともいぶい 橙色	良好	
SX-21 -4	SX21-12	弥生土器	台付甕	脚と甕の接合部付近					外面は縦方向のヘラケズリ、坏部内面はヘラナデ。	緻密	両面ともいぶい 橙色	良好	
SX-21 -5	SX21-41	弥生土器	台付甕	脚上部から甕最下部					脚部は丸みをもって立ち上がる。 脚外面と坏部内面はヘラミガキ、脚内面はヘラナデ。	緻密	両面ともいぶい 橙色	良好	
SX-21 -6	SX21-82	弥生土器	鉢	口唇部欠損				(8.2)	底部は厚く、体部は直線的に大きく開き、口縁部は複合口縁である。 体下部外面はヘラケズリ、他は両面ともヘラミガキ。	小礫(1mm大以下)を含む。 白色粒(1mm大以下)を多量に含む。	外面は明褐色 内面は橙色	良好	
SX-21 -7	SX21- 1. 84	弥生土器	壺	底部から胴下部				4.8	小型で胴下部はやや開いて直線的に立ち上がる。 外面はヘラケズリ(下端)とヘラミガキ、内面はヘラナデ。	緻密	両面ともいぶい 橙色	良好	
SX-21 -8	SX21-82	弥生土器	甕	底部から胴下部片				5.3	小型で、胴下位は直立きみに立ち上がる。 両面ともヘラナデ。	緻密	両面ともいぶい 橙色	良好	

第96表 溝等出土土器観察表

※計測値の()は推定

遺物番号	遺物注記 番号	種 別	器種	遺存度	計 測 値 (cm)				器形及び整形の特徴	胎 土	色 調 (外・内)	焼 成	備 考
					口径	器高	最大径	底径					
その他 -20	J7-a-19	土師器	高台 付埴	全体の1/2強 の残存	13.6	6.0		7.2 高台口 径	高台の断面は細い台形状、 体部は直線的に開く、やや 大型である。 内面は丁寧なヘラミガキ。 底部は回転糸切り離し。	緻密	外面は黒色と橙 色と明黄褐色	良好	内面は黒色 処理。
SD-21 -1	SD21-1	土師器	甕	口縁部片 1/10	(15.9)				「く」の字状に少し短く 開く口縁部をもつ。 両面ともユビによるヨコ ナデ。	緻密 白色粒(1mm 以下)を少量 含む。	外面は黒色 内面はにぶい赤 褐色、一部暗赤 灰色	良好	
SD-21 -2	SD21-1	土師器	甕	底部片1/10 の残存				(5.6)	胴下部は少し開いて立ち 上がる。 外面はヘラケズリ、内面 はヘラミガキ。	緻密(小礫 1mm以下を 少量含む)。	外面は暗赤褐 色 内面はにぶい黄 橙色	良好	
SD-21 -3	SD21-1	土師器	甕	底部片1/8の 残存				(6.3)	胴下部の立ち上がりは急 である。 外面はヘラケズリ、内面 はユビナデ。	小礫(2mm以 下)を含む。	外面は褐灰色 とにぶい黄褐色 内面もにぶい黄 褐色	普通	

5. 掘立柱建物跡（第189～191図、第97表）

3 棟分検出し、SB-01と02は、SX-04遺構内に約14m の距離をおいて東西方向に配置されている。内容等については、7. その他の遺構と遺物（SX-04）で櫻井敦史氏が詳述しているので参照されたい。

SX-03は、1 間×1 間でK 9 -16～26付近に位置する。機能時期等は不明であるが、詳述は第97表を参照されたい。出土遺物は、SB-01から高台付塚と土錘（第265図12）が検出されただけである。

第97表 掘立柱建物跡一覧表

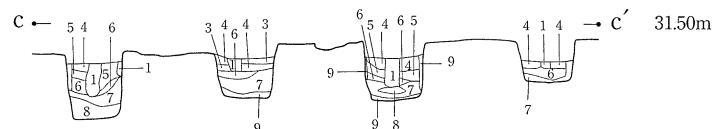
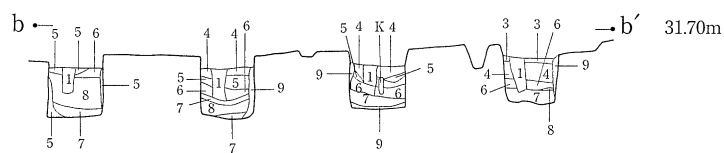
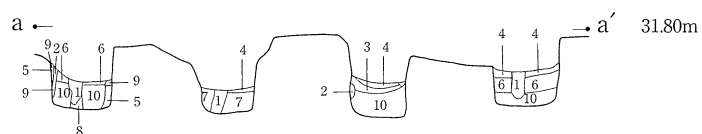
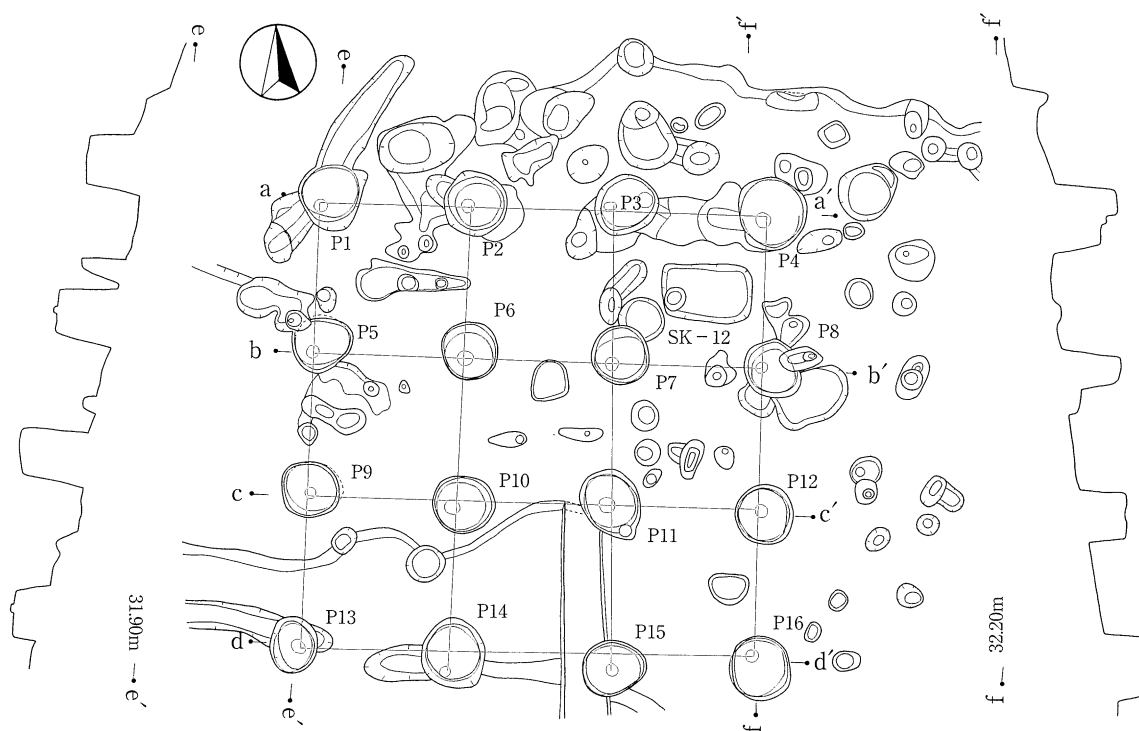
単位 m

遺構名	規 模 など	柱 間 寸 法 など	出 土 遺 物	備 考
SB- 1	3間×3間、総柱建物 位置は、I11-19付近	P1～P4=4,68m、P1～P13=4,72m P13～P16=4,80m、P4～P16=4,68m 柱掘方は円形。 梁間4.80m 桁行5.60m	土師器高台付塚 1 土錘 1	主軸方位 N-6° 30'-E。各柱穴間寸法1,5m。 立替は無い。P14～P15=1,78m で少し広い。 SK-12が北東側内部に存在する。
SB-02	3間×3間、総柱建物 位置は、I11-01付近	P1～P4=4,8m、P1～P13=5,0m P13～P16=4,8m、P4～P16=4,8m 柱痕跡はSB-01より太い。 梁間4.80m 桁行4.80m		主軸方位は N-7° 30'-E。各柱穴間寸法 1,5m 北側と東側の小溝は雨降ち溝の可能性があ る。
SB-03	1間×1間 K9-16、K9-26付近	P1～P2=3,30m、P2～P4=2,80m P2～P4=2,60m、P1～P3=2,65m 深さ P1=70cm、P2=60cm、P3=60cm P4=63cm 梁間2.80m 桁行2.80m		主軸方位はN-22°-W。 SI-86と96と重複 SI-97と近接 P1～P2の間隔が他より広い。

SB-02
a-a'
1 黒褐色土を地層とし全体にブロック状に山砂を混合する。中間層がやや山砂多く底は明灰褐色山砂層。
2 暗黒色～暗灰褐色とブロック状の山砂の混合土。
3 明黒色～暗灰褐色。ブロック状の白粘土と染み状山砂は全体に混合する。
4 明黒褐色土を地層とし暗褐色土塊と灰白色山砂をブロック状に混合。白色粘土粒と褐色粒を多く含む。
5 黒色土。褐色ブロックと山砂を全体に混合。
6 上層の各層に比較して黒色土主体。白色粘土、褐色粒がめだつ。
7 やや褐色の強い山砂主体層。
8 暗灰褐色と白色粘土のブロック。
9 黒色土。（下層に比してやや褐色）
10 明灰褐色土。山砂を含み、締まり強い。
11 褐色土の強い山砂。
12 黒色土。
13 灰褐色土。山砂主体で粒状に白色粘土と褐色粒を含む。

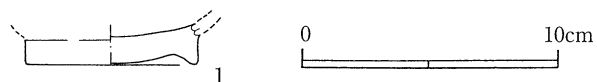
SB-02
b-b'
1 黒褐色土を地層とし全体にブロック状に山砂を混合する。中間層が山砂多く底は明灰褐色山砂層。
2 明黒色～明灰褐色とブロック状の山砂の混合土。
3 明黒色～明灰褐色。ブロック状の白粘土と染み状。山砂は全体に混合する。
4 明黒褐色土を地層とし暗褐色土塊と、灰白色山砂をブロック状に混合。白色粘土粒と褐色粒を多く含む。
5 黒色土。褐色ブロックと山砂を全体に混合する。
6 上層の各層に比較して黒色土主体、白色粘土、褐色粒がめだつ。
7 やや褐色の強い山砂主体層。
15 暗灰褐色土～明黒色土。ブロック状白色粘土と山砂を全体に混合。
16 上層に対して白色粘土を多く含む。
17 白粘土（山砂多い）。
18 灰白色砂。（褐色土を少し含む）
19 明黒褐色土に白粘土と灰色砂をブロック状に含む。
20 18に似るが白色粘土を含む。
21 灰白色砂を含む。白色粘土と明黒褐色土も含む。やや締まる。

SB-02
d-d'
22 明黒褐色土。山砂と白粘土を含む。
23 明黒褐色土（ローム粒含む）。
24 23と似ている。白粘土粒と黒褐色土を含む。
25 明灰褐色土。山砂と白粘土及び明黒褐色土を含む。
26 黒褐色土（白色粘土含む）。
27 山砂のブロック。
28 褐色土。白粘土と明灰褐色砂の混合。（全体に粒状）
29 明灰褐色砂。（白粘土粒と褐色土粒の混合）
30 黒褐色土（やや褐色強い。白粘土ブロックを含む）。
31 上層より山砂多い。
32 明灰褐色砂（黒色土を少し含む）。
33 明黒褐色土（白粘土粒と明灰褐色砂を含む）。
34 クリーム色土（明灰褐色砂が多い。白粘土ブロック含む）。
35 明灰褐色砂（オレンジ色を帯びる）。
36 明黒褐色土（クリーム山砂と白粘土粒全体に含む）。
37 黒褐色土。
38 明灰褐色砂（白粘土粒と明黒褐色土粒を含む）。
39 明黒褐色土（クリーム山砂を含む）。
40 明灰褐色砂（白粘土は38と比べ少ない）。
41 クリーム砂（明黒褐色土ブロックを含む）

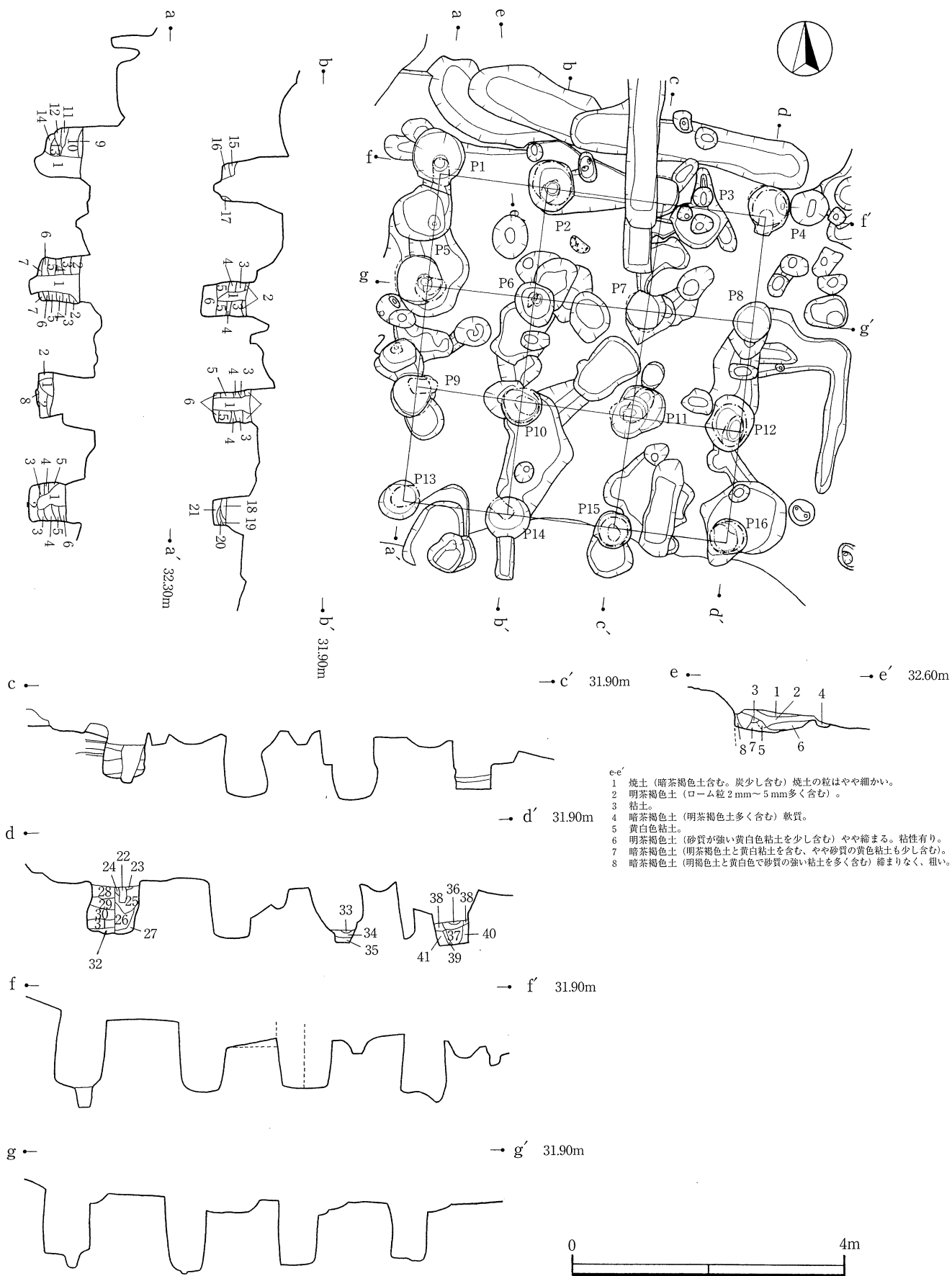


- 1 暗褐色土。黄褐色土塊と白色粘土粒を少量含む。
- 2 暗褐色土。灰白砂粒と白色粘土粒を含む。
- 3 暗褐色土。2に似る。暗く、焼土粒を多く含む。
- 4 暗褐色土。黄褐色土塊と白色粘土塊を含む。
- 5 暗褐色土。4に似る。白色粘土塊を多く含む。
- 6 灰色粘土。暗褐色土塊。黄褐色土塊を含む。
- 7 灰色粘土。硬質。黄灰色砂を多く含む。
- 8 灰色粘土。硬質。暗褐色を少量含む。
- 9 灰色砂。酸化鉄粒と白色粘土粒を含む。地山層。
- 10 灰白色粘土。暗褐色土塊を含む。

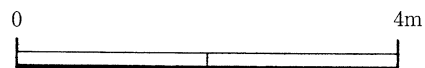
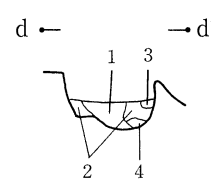
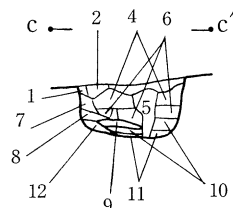
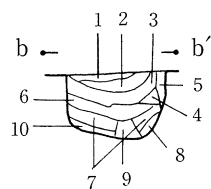
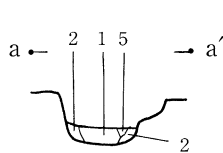
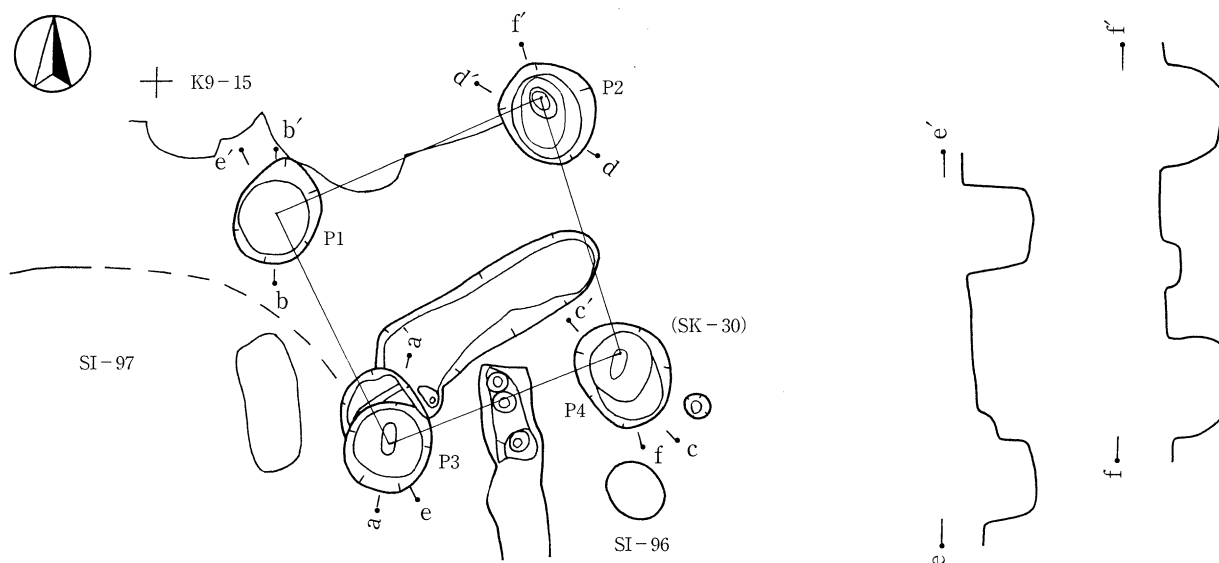
0 3m



第189図 01号掘立柱建物跡 (SB-01) 遺構・遺物実測図



第190図 02号掘立柱建物跡（SB-02）遺構実測図



a-a'

- 1 暗褐色。有機質性強い。縮り弱い。板状柱痕。ローム粒を若干含む。
- 2 暗褐色。ローム粒とロームブロックやや多く含む。やや縮る。
- 3 ロームブロック。

b-b'

- 1 暗褐色。ローム粒とロームブロックやや多く含む。縮まりなし、粒細かい。
- 2 暗褐色。ローム粒少なく、ロームブロック多い。焼土粒含む。
- 3 暗褐色。最も有機質性強い。ローム粒少量含む。黒い。
- 4 暗褐色。ローム粒とロームブロック少量含む。黒い。
- 5 褐色。掘りすぎ。
- 6 褐色。ローム粒とロームブロック多量に含む。
- 7 褐色。ローム粒少量含む。ロームブロック多量に含む。
- 8 褐色。ロームブロック。
- 9 暗褐色。ロームブロック。ローム粒中に黒色土を混入し、やや黒ずむ。
- 10 黒褐色。ローム粒少量含む。極めて有機質性強い。

c-c'

- 1 褐色。ロームブロック。
- 2 暗褐色。有機質性やや強い。ロームブロック2〜3ヶ含む。縮まり弱い。
- 3 暗褐色。有機質性やや強い。2層よりローム粒とロームブロックやや多い。縮まり弱い。
- 4 暗褐色。有機質性やや強い。ローム粒少量含む。やや縮まる。
- 5 黒褐色。有機質土。ロームブロック少量含むが、最も有機質性強い。縮まり弱い。
- 6 暗褐色。よごれたローム粒。ロームブロックを主体とし、やや褐色味強い。
- 7 黒褐色。縮まりの弱い有機質土。
- 8 黒褐色。ローム粒少量含む。やや縮まる。黒味強い。
- 9 暗褐色。6層に似る。色調やや有機質性強く6層より暗い。
- 10 黒褐色。6層より明るい。ローム粒とロームブロック多量に含む。
- 11 黒褐色。有機質土。ロームブロック2〜3ヶ含む。縮まる。
- 12 黒褐色。有機質土。ローム等ほとんど含まず縮まる。粘性強い。

d-d'

- 1 暗褐色。有機質性強い。縮まり弱い。板状柱痕。ローム粒若干含む。
- 2 暗褐色。ローム粒。ロームブロックやや多く含む。やや縮まる。
- 3 黒褐色。有機質土中にローム粒若干含む。
- 4 褐色。ローム粒とロームブロック多量に含む。褐色味強い。

第191図 03号掘立柱建物跡（SB-03）遺構実測図

6. 方形周溝墓と古墳（第192～223図、第98、99表）

古墳時代前期の方形周溝墓5基、古墳時代中期から後期の円墳9基が検出されている。方形周溝墓は主に台地中央から東側に、中期から後期の円墳は台地縁辺部に位置している。規模、内容については第98、99表方形周溝墓、古墳等一覧表を参照されたい。（SX-02と03は未掘）

第98表 方形周溝墓、古墳等一覧表(1)

()は推定

名称	挿図番号	墳形 (台部形)	規 模 (m)			周 壕 (m)		出土遺物	その他、埋葬施設など
			外	内	盛土高	幅など	深さ		
SX-01	第192～196図	台形 (富士浅間塚)	19.0×16.0 (墳丘) 36.0×37.0	25.0×25.0	4.5	〈西側溝〉 長さ 22.5 幅 7.3 〈北側溝〉 長さ 22.6 幅 3.9 〈東側溝〉 長さ (11.0) 幅 5.5	0.4 0.7 0.4	埴 1. 壺 2. 甕 1 (富士浅間塚関連 はかわらけ 2) 第194、199図	墳丘(塚盛土)主軸方位は N-7°-W 溝 区 画 内 主 軸 方 位 N-16°-W 位置J8-56付近 南側の溝が不明確である が、4隅が切れる形を示す。 台上部は、未調査。 近世以降に富士浅間塚と して利用され、再構築さ れている。
SX-02	第197図	方形三段 (三山塚)	15.0×14.0		比高 3.8				古墳を利用か。 北側中央に参道用の出張 りがある。 位置M10-67付近 主軸方位はN-3°-E
SX-03	第198図	〃	13.0×13.0	11.0×	比高 2.4	1.6～0.7			古墳を利用か。 位置はE8-01付近。 主軸方位はN-17°-E 墳丘は東側と西側の斜面 がやや内側に窪んでいる。
SX-05	第200図	円形	13.0×	11.0×		1.6～0.7	0.5	土師器坏 1	周壕は南側ほど深い。南 西側の1/2弱の残存。 位置はL11-93付近 SI-24. 26などを切る。 SI-13は墳丘下
SX-06	第201図	〃				0.82	0.2		周壕は南側の1/4位の残存 位置はL11-22付近 SI-27、29、57などを切る。
SX-07	第202～204図	方形	18.1×15.7	15.0×11.9		2.0～1.1	0.7	壺 2、埴 1、甕 2、甕 1 (甕 転 用?) 第199図	主軸方位はN-35°-E 墳丘はやや南北が長い。 位置はI9-08付近 SI65A. 66. 69. 70. 71. 79. 81などと重複
SX-08	第205図	円形	14.6×	12.5×		1.8～0.5	0.5	壺3(2点は弥生)、 高坏6(坏部3、脚 部3) 第205図	北側1/2弱の残存 位置はH10-04付近
SX-09	第206～209図	円形	12.3×	8.9×	1.1	1.7～1.0	0.22	器台1. 鉢1. 埴1. 台付甕1、砥石3 第209図	北東が欠損 3/4弱の残 存 位置はK9-05付近、重複 遺構は多い
SX-10	第210図	方形	17.6×	13.5×		2.8～0.8	0.58	埴3. 甕1. 高坏1 第211図	主軸方位はN-18°-W 東側が欠損 2/3残存 位置はK8-38付近
SX-11	第212、213図	方形	14.5×	11.9×		2.2～0.9	1.00	壺4(底部穿孔4) 埴 1 第214図	主軸方位はN-8°-W 東側は未調査。1/2弱の 調査 周壕底部は少し凹凸があ る。 位置はL8-06付近
SX-12	第215図	方形	7.3×7.2			1.04～0.42	0.42		主軸方位はN-3°-W 位置はK7-40付近 南西側周壕内に土坑
SX-13	第216図	円形	(26.0)	(19.0)		5.26～3.80	0.56	甕2(1). 埴1 砥石1 第218図	南東側1/3強くらいの残 存 位置はJ6-56付近

第99表 方形周溝墓、古墳等一覧表(2)

()は推定

名称	挿図番号	墳形 (台部形)	規 模 (m)			周 壕 (m)		出土遺物	その他、埋葬施設など
			外	内	盛土高	幅など	深さ		
SX-16	第219図	円形	12.2	9.8		2.2~1.0	0.6	坏2、壺1(短頸壺)、埴1、甕1 第219図	南東側1/2弱の残存 位置はF7-57付近 SI-150、151などを切る。 SX-11の北側に位置する。
SX-17	第220図	円形	16.5	12.0		3.5~0.8	0.4	高坏(脚部)1 第220図	南東側1/2弱の残存 位置はI8-01付近
SX-18	第221図	円形	15.2×14.7	12.2×11.9		1.9~0.9	6.7	鎌1、甕2、埴2、 高坏3 第221図	位置はH8-51付近 SI-179、180、181などを 切る。
SX-19	第222図	円形	17.8×17.3	15.0×14.9		2.0~0.75	0.4	甕1、甗1、壺1、 高坏2 第222図	位置はG9-01付近 SI-174、195、209などを 切る。

SX-01は、台地中央部東寄りに位置し、近世以降富士浅間塚として再利用されている。元は古墳時代前期後半頃の方形周溝墓と考えられ、周溝の残存は悪いが四隅が途切れる形態と考えられる。周溝外側の大きさが37.0m×36.0mを測る大型である。中央墳丘部は現状保存されるため未調査である。主体部は確認していない。出土遺物は、埴1、壺2、甕1が北側と西側の周溝より検出されている。

SX-02、03は、本調査地区から外れているが、墳丘測量を実施した。台地の東側と西側端部に位置し、方形3段で近世以降出羽三山塚に利用されていたが、古墳を再利用した可能性がある。

SX-05、06はやや小型の円墳と考えられ、台地東側縁辺部に約4mの距離を置いて隣接する。溝の検出状況は悪く、また、東側斜面部の周溝は検出されていない。墳丘と主体部も検出されていない。出土遺物はSX-05より6世紀代の土師器坏(須恵器蓋坏の模倣坏)片が出土している。

SX-07は、方形周溝墓とみられ、SX-01の南東側に近接する。溝は四周する。出土遺物は、埴1、壺2、甕2、甗1で周溝内より検出されている。

SX-08は、円墳で、台地の南西側縁辺部に立地し、南側斜面部は周溝が残存しない。墳丘と主体部は検出されていない。出土遺物は、壺1、高坏6(坏部3、脚部3)で、北側の周溝内より検出されている。

SX-09は、台地北東側縁辺部に位置し、円墳と思われるが斜面部の周溝は残存しない。多くの弥生期の住居を切り、SX-12の方形周溝墓も切られている。墳丘が1.1mとわずかに残る。主体部は検出されていない。出土遺物は、器台1、鉢(坏)1、壺1、台付甕1、砥石3で2の壺が周溝内より検出している。

SX-10は、台地東側縁辺部に立地し、SX-01の東側に隣接し、更に東側斜面部にSX-11が隣接する。方形周溝墓で周溝の残存は不良で、東側傾斜面では検出されていない。出土遺物は、北側の周溝内より埴3、甕1、高坏1が出土した。

SX-11も方形周溝墓で、東側斜面部に位置し、東側の約1/3は調査区外である。比較的周溝は良く残る。出土遺物は、埴1、(壺)4ですべて底部穿孔土器である。1の埴は北西側隅周溝内からの出土である。

SX-12は方形周溝墓で、台地北東側に立地する。主体部は検出されていない。方形周溝墓5基中最も小型で、SX-09に切られている。出土遺物は特に認められていない。

SX-13は、台地の北東端部に位置する円墳で、北側の周溝は検出されていない。周溝の幅は、比較

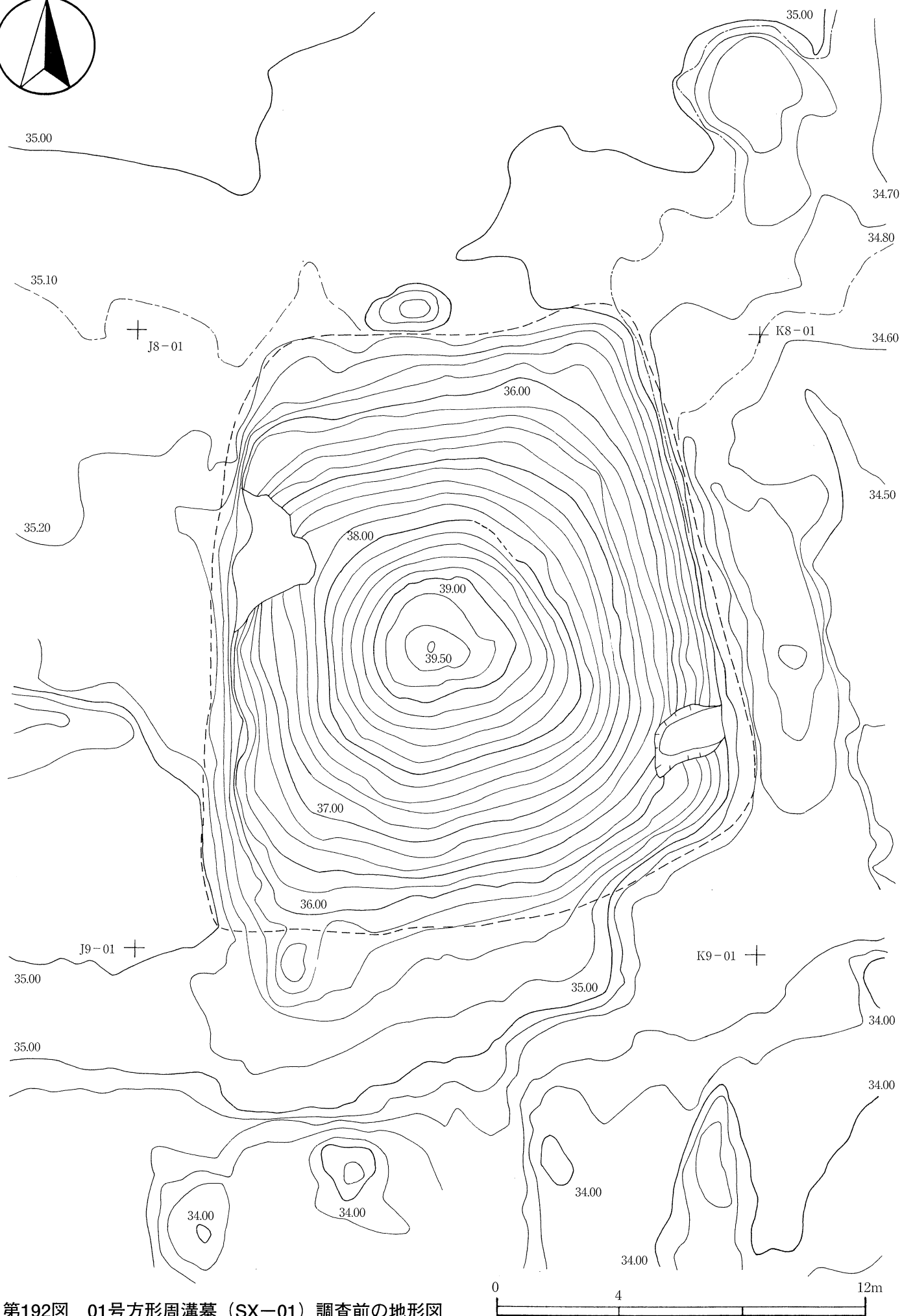
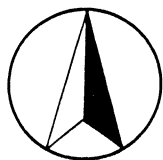
的広い。墳丘と主体部は検出されていない。出土遺物は、南側周溝より甕2、埴1、砥石1がある。

SX-16は、やや小型の円墳で、台地北側縁辺部に立地し、周溝の残存は不良で、北側斜面部は検出されていない。また、墳丘と主体部も検出されていない。出土遺物は周溝南西部よりまとまって、坏2、壺1、埴1、甕1がある。

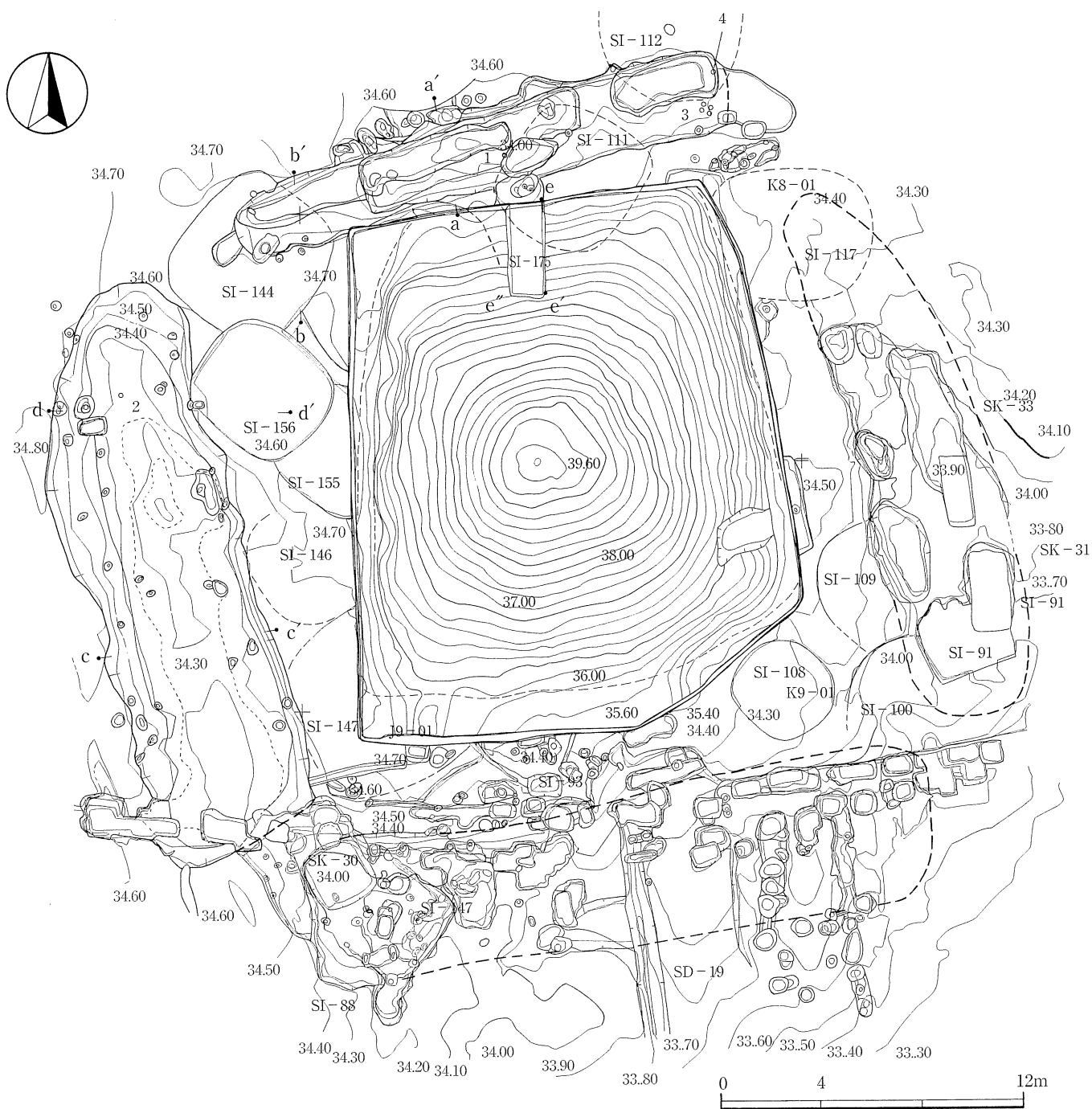
SX-17は、台地北側縁辺部に立地し、SX-16が東側で接している。円墳で周溝の残存状態は不良である。北側斜面部の周溝は検出されていない。西側ほど周溝の規模（幅、深さ）が大きい。また、墳丘と主体部は検出されず、出土遺物は、高坏脚部を1点検出したのみである。

SX-18も北側縁辺部に立地し、円墳とみられる。SX-17が北東側に約10m 離れて存在する。また、SX-19とは西側に約2m ほどしか離れていない。周溝は全周するが、北西側の斜面部ほど浅くなる。墳丘と主体部は検出されていない。出土遺物は、埴2、高坏3、甕2、鎌1で、周溝内からの出土である。

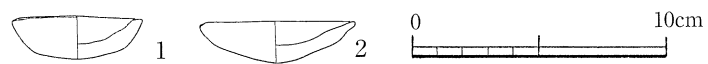
SX-19は最も西側の台地縁辺部に所在し、円墳とみられる。周溝は全周するが、西側の斜面部ほど浅くなる。墳丘と主体部は検出されていない。出土遺物は、高坏2（脚部片）、鉢1、甕1、甗1（埴の転用）で周溝からの検出である。



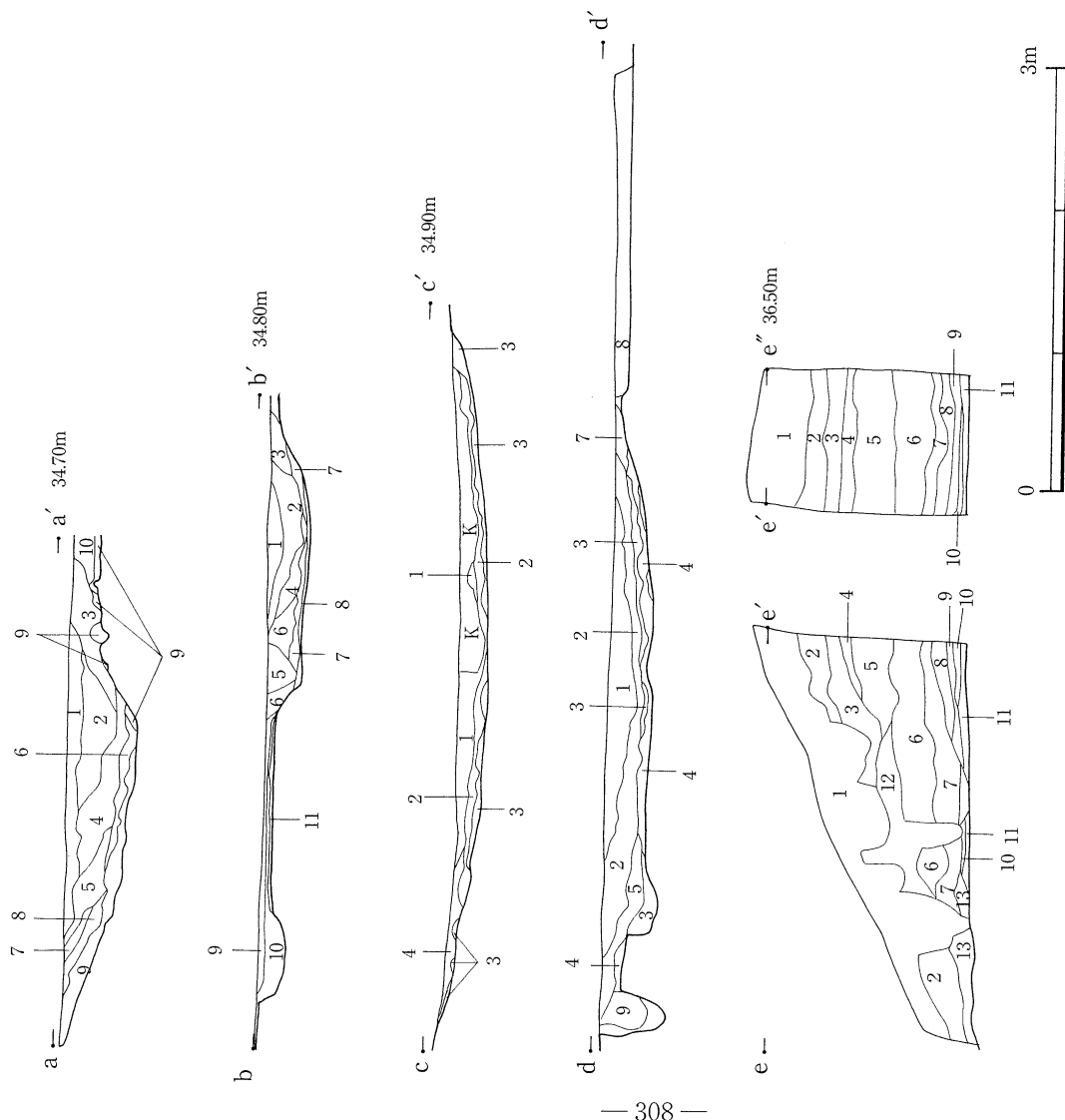
第192図 01号方形周溝墓 (SX-01) 調査前の地形図



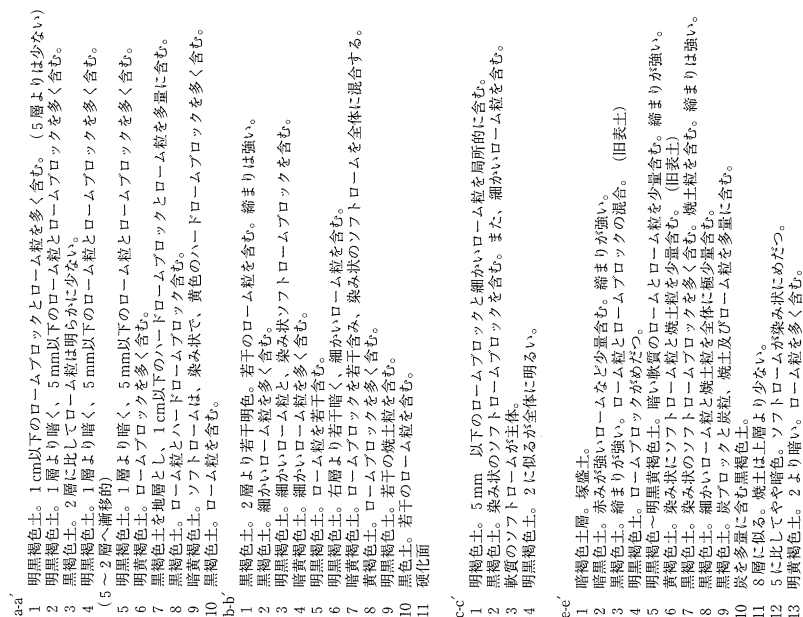
第193図 01号 方形周溝墓 (SX-01) 遺構全体図



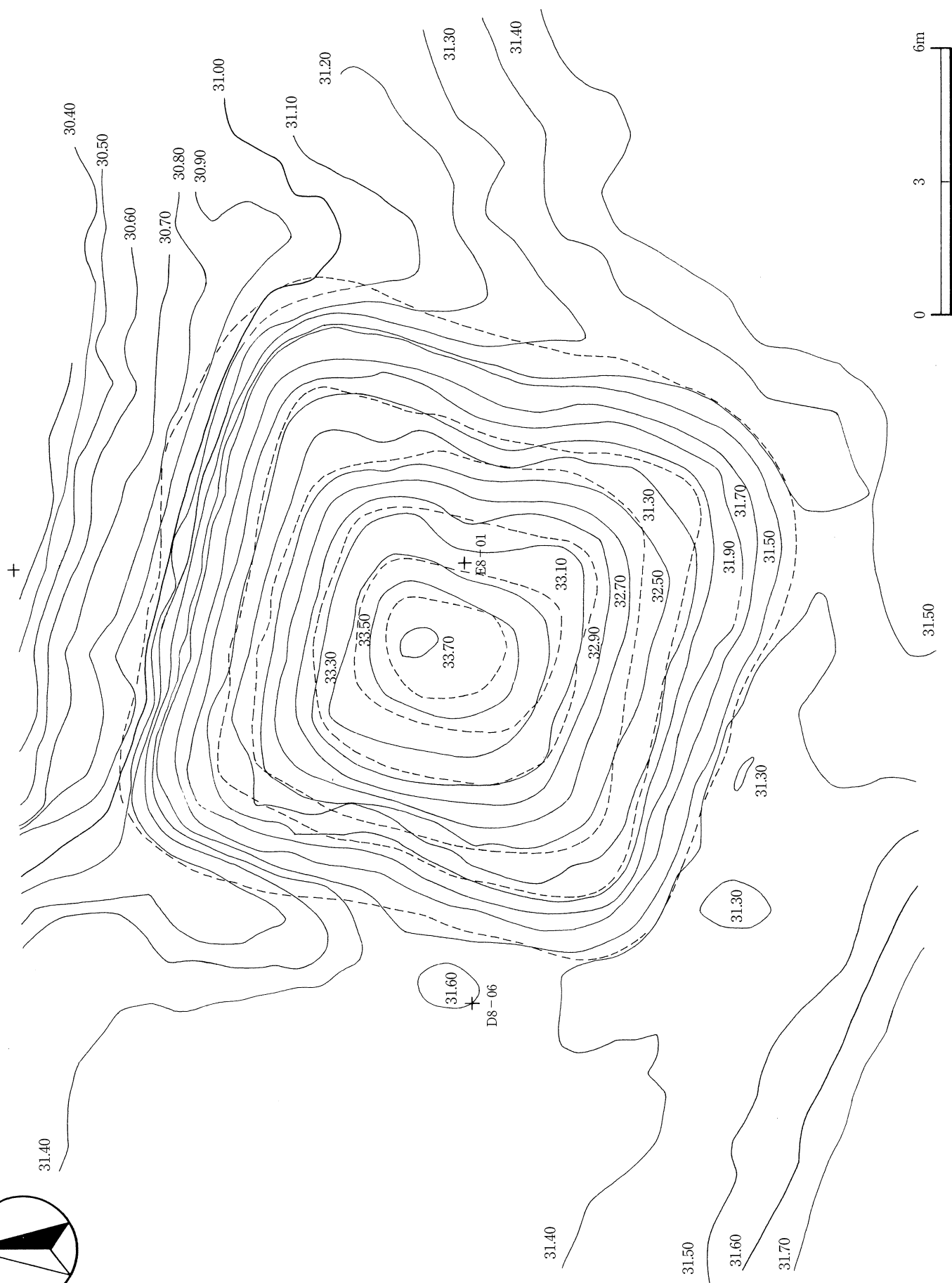
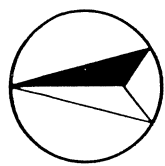
第194図 01号 方形周溝墓 (SX-01・浅間塚) 出土遺物実測図



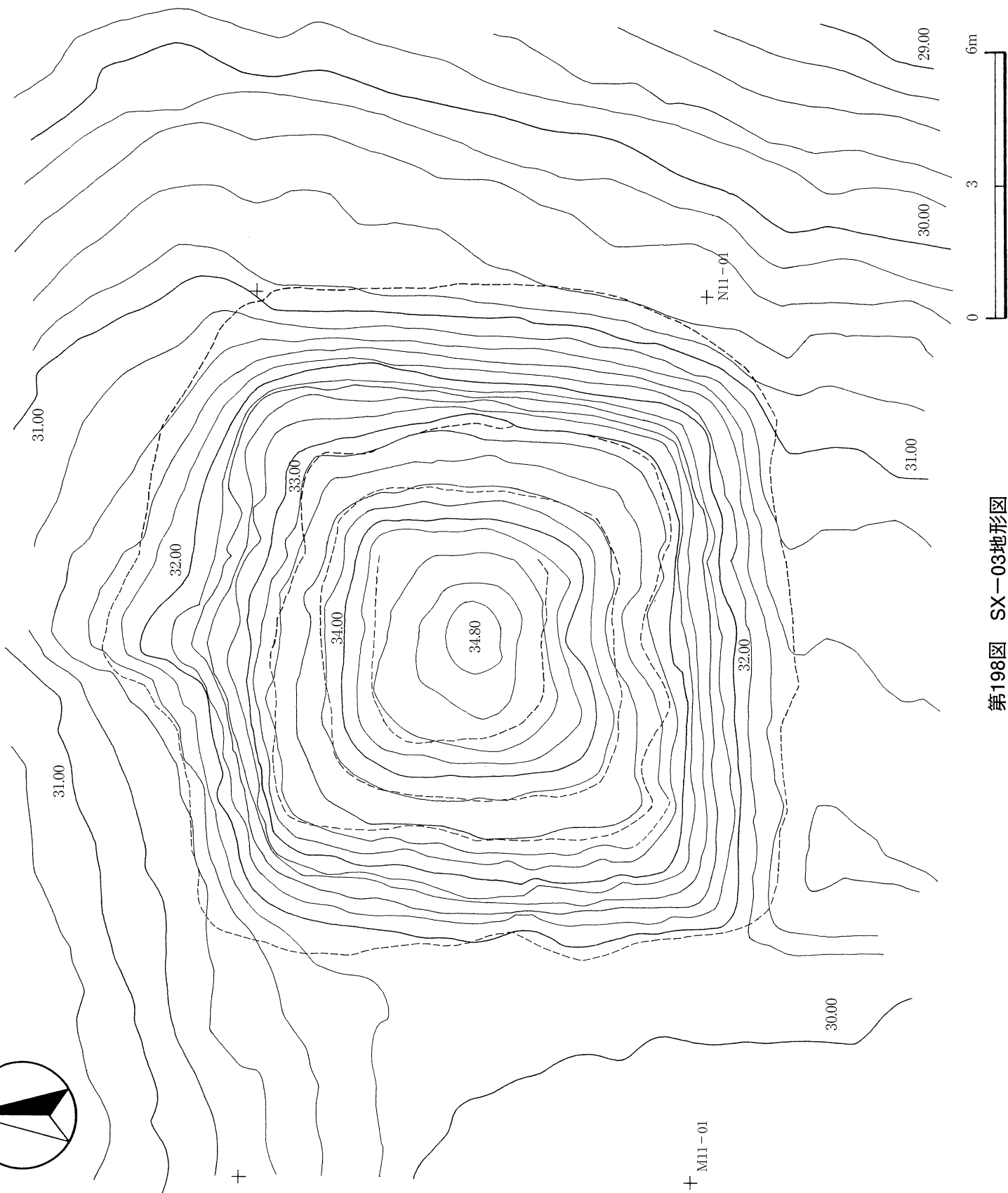
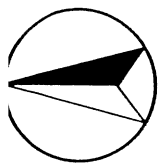
第195図 01号方形固溝墓(SX-01) 土層セクシヨﾝ図



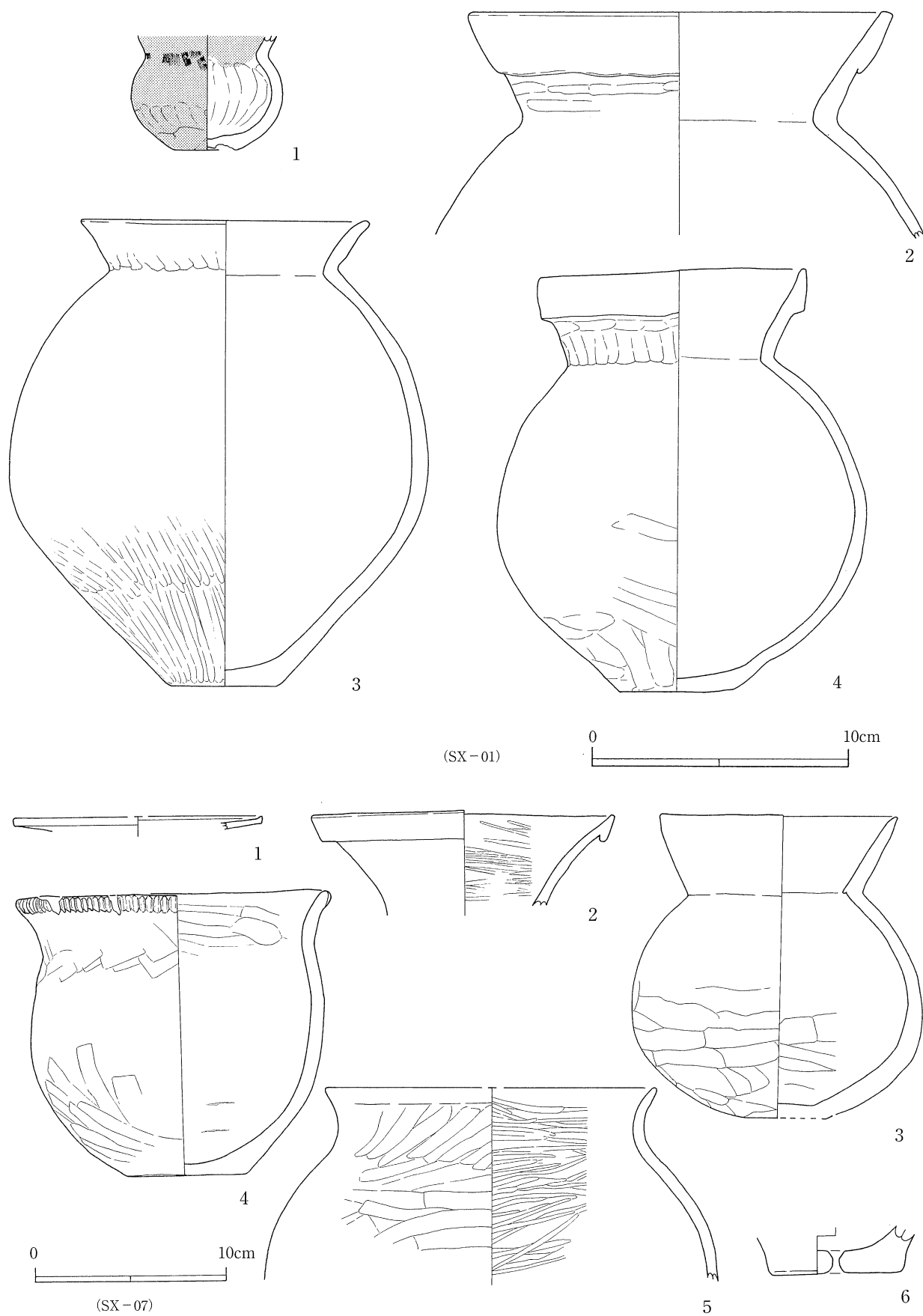
第196图 01号方形周溝墓 (SX-01) 遺物出土状況実測図 (No4壺)



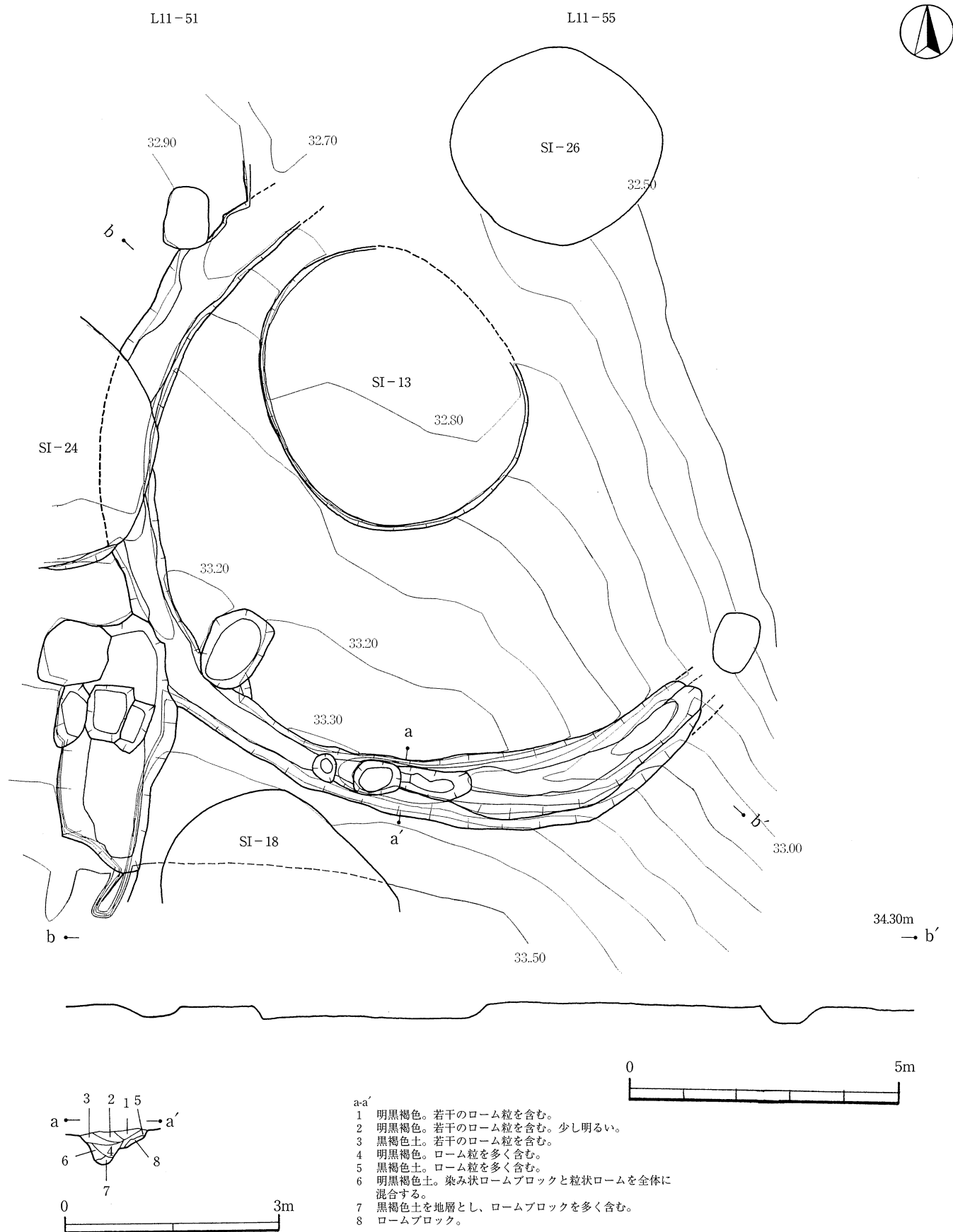
第198图 SX-03地形图



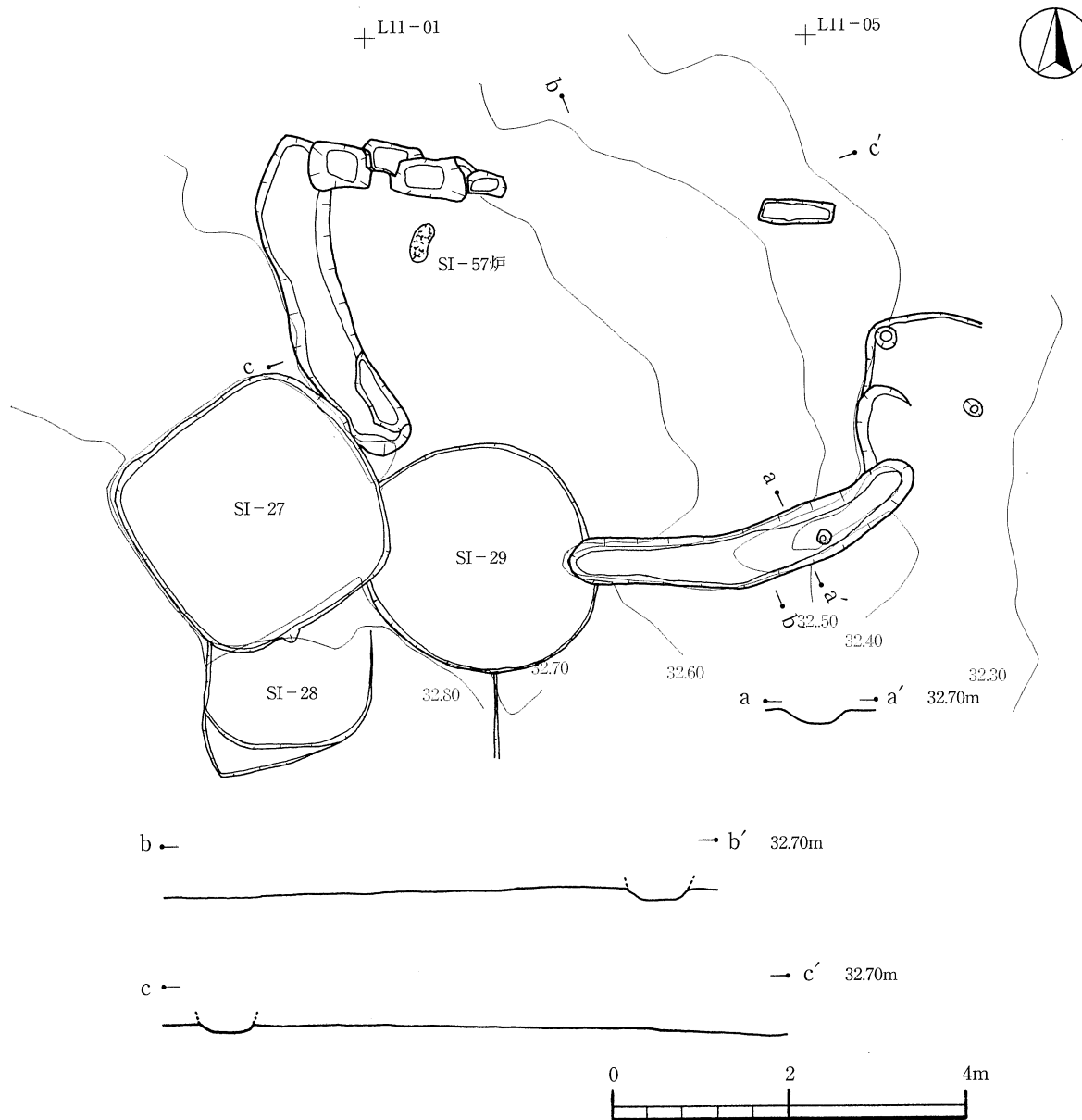
第198图 SX-03地形图



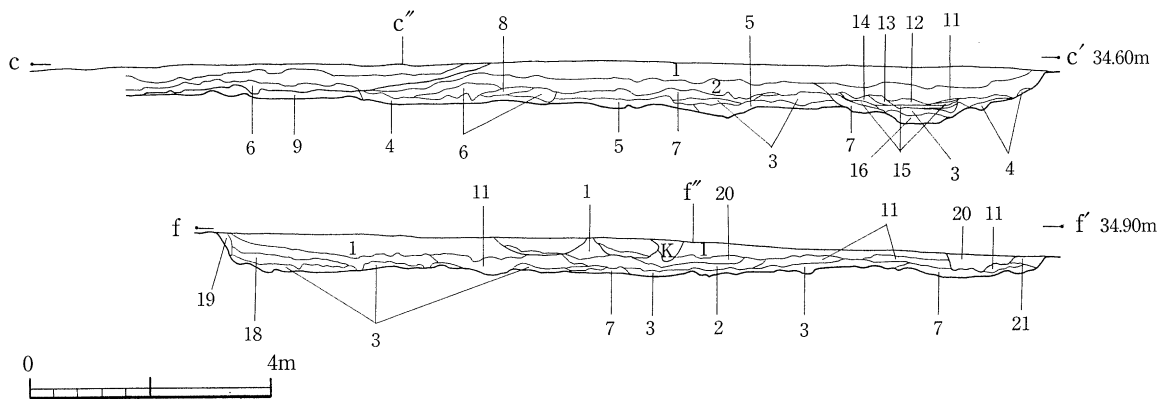
第199図 01号方形周溝墓 (SX-01) ・ 07号方形周溝墓 (SX-07) 出土遺物実測図



第200図 05号古墳 (SX-05) 遺構実測図



第201図 06号古墳 (SX-06) 遺構実測図



第203図 07号方形周溝墓（SX-07）土層セクション図（c-c'、f-f'）

a-a'

- 1 黒褐色土。ローム粒を全体に含む。
- 2 明黒褐色土。ローム粒（1cm以下）を全体に含む。
- 3 黒褐色土。ローム粒は少ない。
- 4 明黒褐色土。ローム粒少ない。
- 5 ハードロームの軟質ブロック。

b-b'

- 1 黒褐色土。軟質。根が非常に多い。最も暗色。細かいローム粒が多い。
- 2 黒褐色土。3層に比して粒状のソフトロームが少ない。
- 3 明黒褐色土。ローム粒を多量に混合する。
- 4 ロームブロック。5cm以下の大小ブロックが多い。
- 5 ローム主体。軟質。
- 6 黒褐色土。2層より暗色。ローム粒が多い。
- 7 暗黄褐色土。軟質。
- 8 黒褐色土。染み状のロームブロックとローム粒が多く含まれる。
- 9 黄褐色土。軟質。
- 10 明黒褐色土。2層に比して色調は比較的均一。
- 11 漸移的（10～12）やや暗い。
- 12 明黒褐色土。2cm以下のロームブロックとローム粒を多量に含む。
- 13 ロームブロック主体。（5cm大以下の大小ブロックと小ブロックが多い）

c-c'

- 1 黒褐色土。若干細かいローム粒と局部的に1cm粒状ロームを含む。締まりあり。
- 2 黒褐色土。（1層よりも明色）1cm以下のローム粒を含む。
- 3 明黒褐色～暗褐色土。ローム粒を多量に含む。2cm以下のロームブロックも局部的に混合する。
- 4 ハードロームを主体とするブロック状で軟質。黒色土が混じる。
- 5 4層に似るが黒色土が少ない。
- 6 3層に似るが、ハードロームブロック大小とソフトの染み状のロームブロックが多く含まれる。
- 7 焼土粒を含む。3層に似る。
- 8 明黒褐色土。ロームブロック2cm大以下を多量に含む。（3層より暗い）
- 9 ハードローム主体層。
- 10 2層と似るが、やや明るい。
- 11 12層に似る。細かいローム粒が多い。
- 12 2層に似るが、ロームブロック2cm大を局部的に混合する。
- 13 明黒褐色土。ハードローム大小ブロックを多く含む。
- 14 暗黄褐色土。ローム粒とロームブロックを多く含む。軟質。
- 15 黒色土。締まりあり、若干のロームを含む。
- 16 暗黄褐色土。軟質。ローム粒を含む。
- 17 暗黄褐色土。ローム粒とロームブロックを多く含む。軟質。

d-d'

- 1 細かいローム粒を含む。
- 2 細かいローム粒を多く含む。
- 3 明黒褐色土。5層より明るい。ローム粒が多い。
- 4 黒褐色土。上下層よりも暗色。ローム粒は下層より少ない。
- 5 4に似る。細かいローム粒が多い。
- 6 褐色土。ソフトロームが入る。
- 7 暗褐色土。粒状のロームを少量含む。
- 8 7に似る。粒状のロームを含む。7より多い。
- 9 明黒褐色土。2層と5層に比して、細かいローム粒が多い。大小ロームブロックを局部的に含む。

e-e'

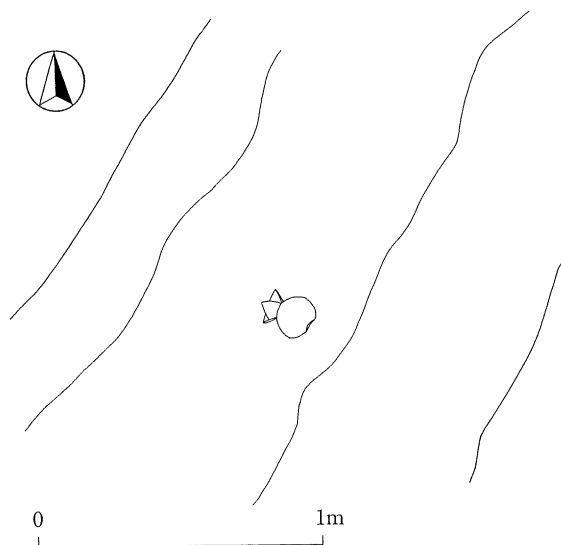
- 1 黒褐色土。ローム粒を多量に含む。
- 2 1層に似るが明るい。
- 3 明黒褐色土。ソフトロームの染み状ブロックを含む。
- 4 明黒褐色土。下層に似る。ローム粒は上の2層より少ない。全体に下層より明るい。
- 5 明黒褐色土。（最も明るい）ローム粒を多量に混合する。
- 6 ロームブロック。
- 7 軟質のロームブロック。
- 8 黒褐色土。最も暗色。ローム粒は、上の2層より多い。
- 9 明黒褐色土。2cm以下のロームブロックを局部的に混合する。また、ソフトローム染み状ブロックを部分的に含む。細かいローム粒は、他層より少ない。
- 10 暗褐色土。他層より締まりなし。ローム粒を多量に含む。（黒色土を全体に混合する。）ロームブロックは少ない。
- 11 暗黒褐色土。10cm大を最大として、ロームブロックを多量に含む。黒色粒混じる。

f-f'

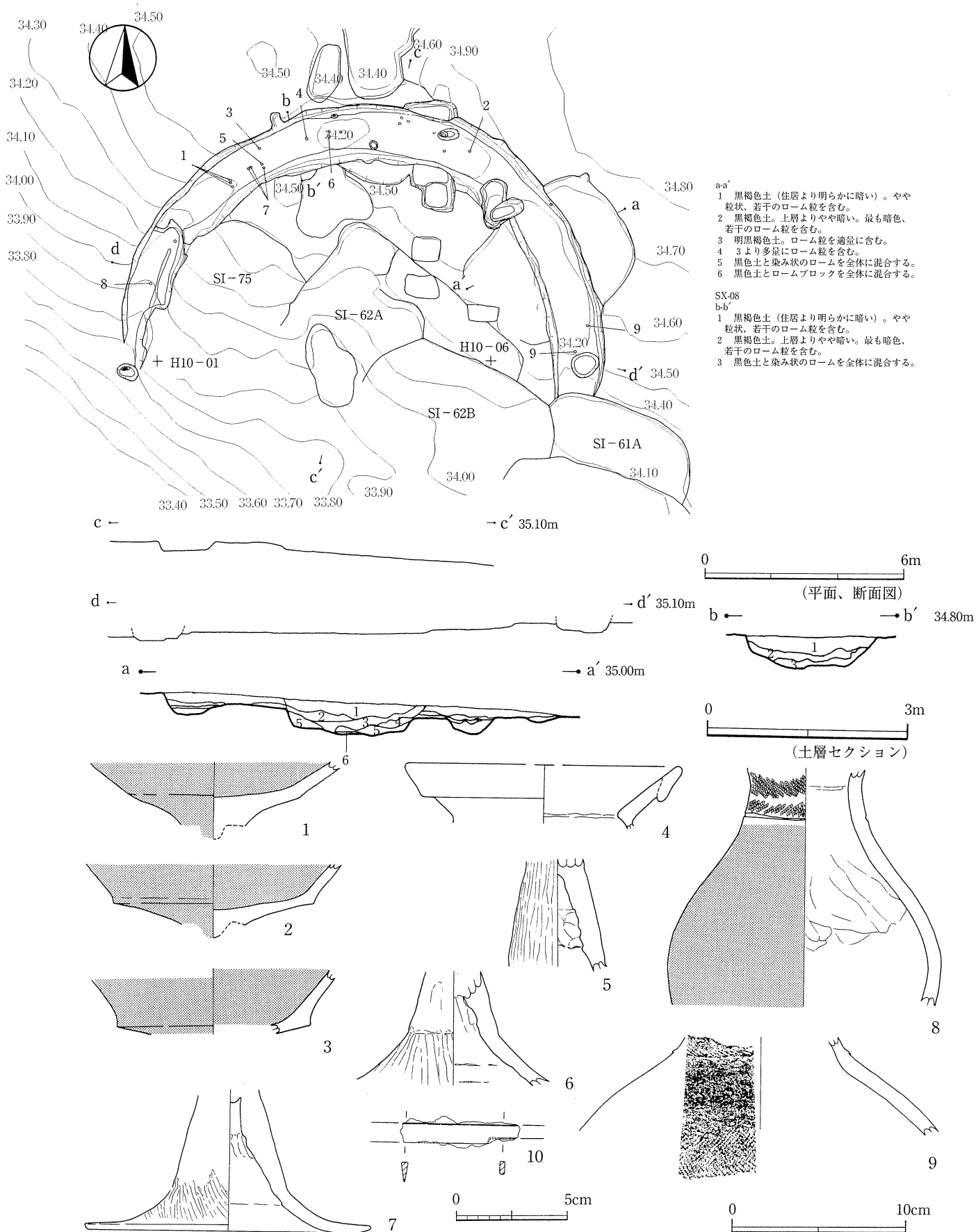
- 1 黒褐色土。細かいローム粒を多量に含む。
- 2 明黒褐色土。上層に比して染み状のソフトロームブロックと局部的な、大小ブロックが多い。ローム粒は1層以上に多い。
- 3 ハードローム大小ブロックと、染み状ソフトロームブロック及び黒色土を全体に混合する。
- 7 ソフトロームにハードロームのブロックが混合する。
- 18 明黒褐色土。上層に似る。染み状のソフトロームブロックが多い。全体に明色。
- 19 暗黄褐色土。染み状のソフトロームブロックを含む。
- 20 根によるカクランが、激しい。ローム粒など基本的には1層に似る。
- 21 明黒褐色土。ロームブロック（硬質）とソフトロームの染み状ブロックが多い。

g-g'

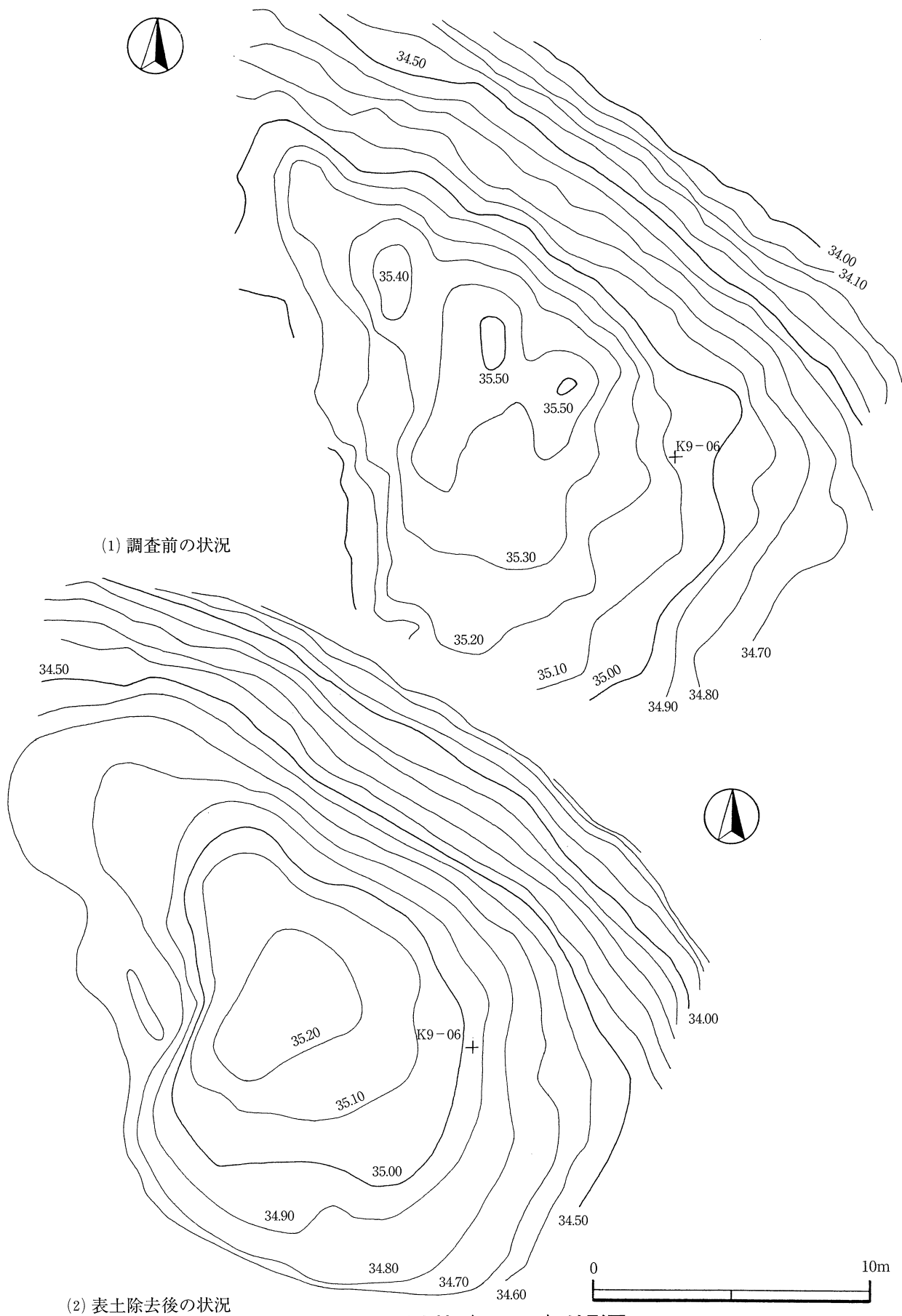
- 1 黒褐色土。細かいローム粒を多量に含む。
- 2 明黒褐色土。上層に比して染み状のソフトロームブロックと局部的な大小ブロックが多い。ローム粒は1層以上に多い。
- 3 ハードロームブロックと、染み状ソフトローム及び黒色土を全体に混合する。
- 23 1層に似る。ローム粒（1cm大）を含む。
- 24 黒褐色土。染み状ソフトロームを若干含む、ローム粒は1層と2層より少ない。
- 25 明黒褐色～褐色土。染み状に細かいソフトローム粒を多量に含む。
- 26 黒褐色土。ローム粒を多量に含むが、1層と2ソフトロームより明らかに少ない。
- 27 2層よりやや暗い。1層より明るい。細かいローム粒を多量に含む。

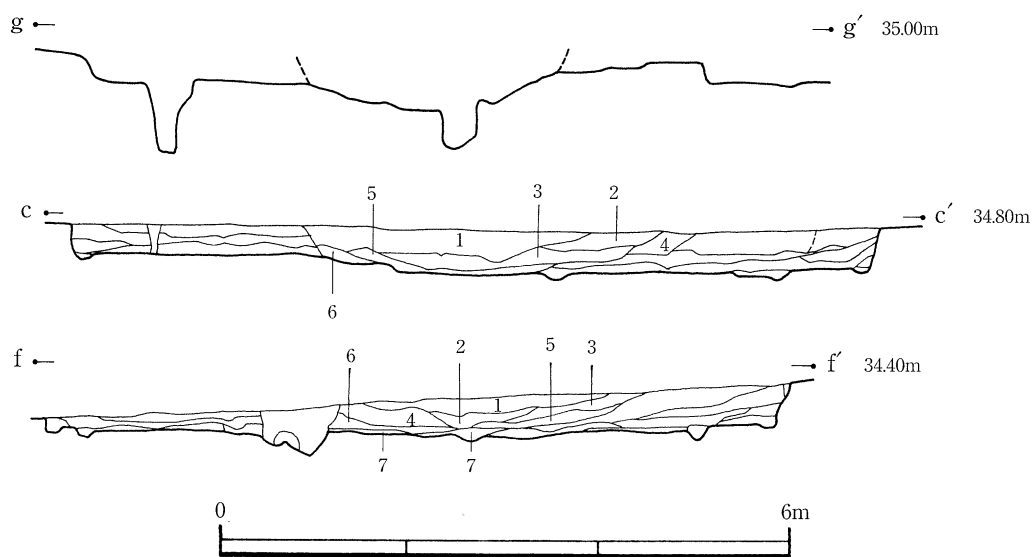
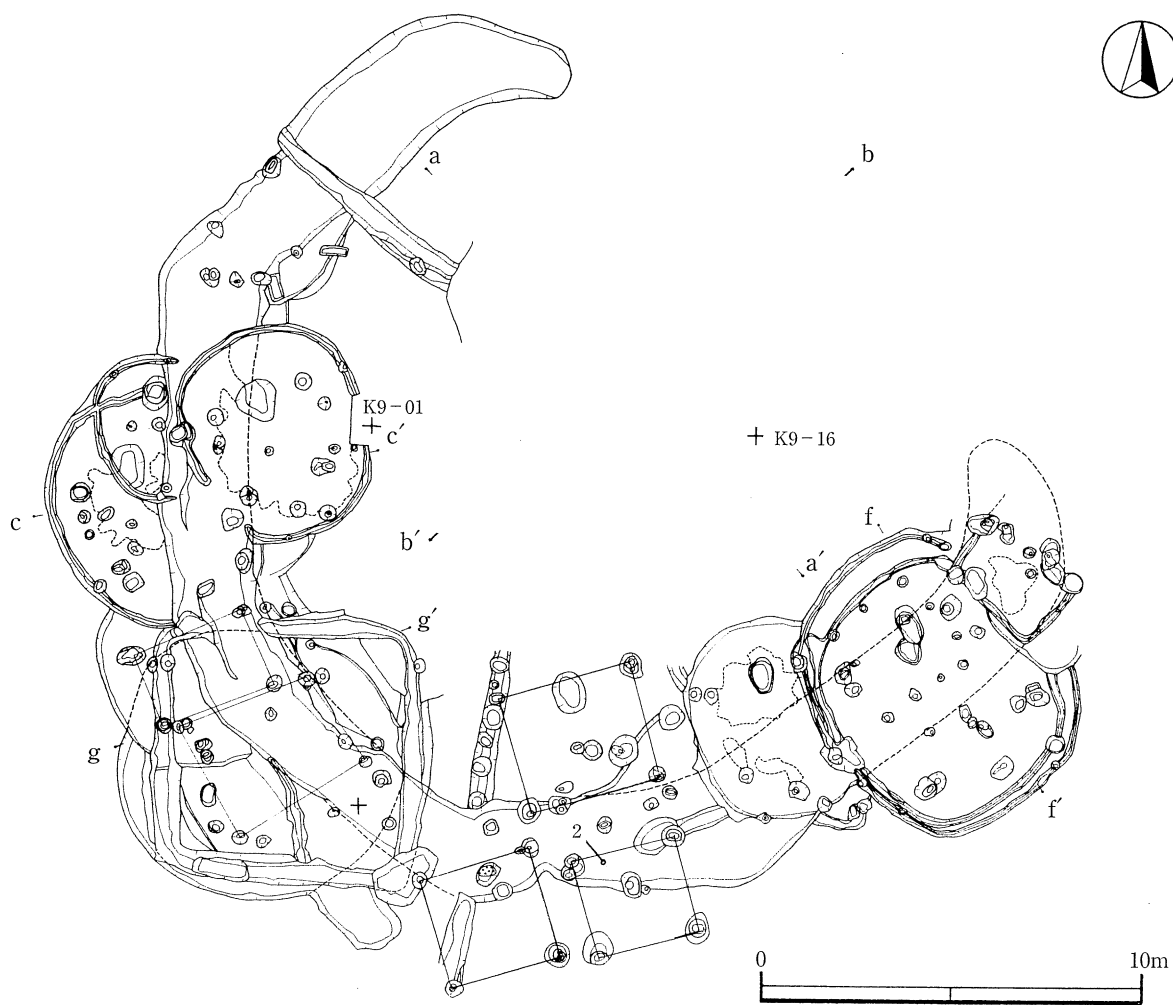


第204図 07号方形周溝墓（SX-07）遺物出土状況実測図（No3 埴）



第205図 08号古墳 (SX-08) 遺構・遺物実測図

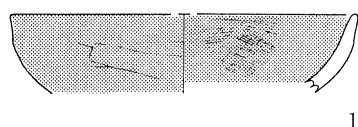




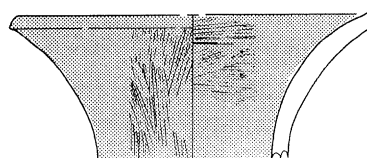
第207図 09号古墳 (SX-09) 遺構実測図

a-a'

- 1 明黒褐色土。根を多量に含む層。色調は、7.10層に似る。軟質。
- 2 明黒褐色土。たたきしめたように硬い層。細かいローム粒を含む。1層よりやや明るい。
- 3 2層よりやや暗く軟質。
- 4 10層よりやや暗く、漸移的。
- 5 やや暗色。締まりはない。細かいローム粒多い。
- 6 明黒褐色土。たたきしめたように硬い層。細かいローム粒。
- 7 明黒褐色土。あまり締まりのないものの均質土。5 mm以下のローム粒と小ブロックを全体に疎らに混合する。
- 8 明黒褐色土。根を多量に含む層。
- 9 ゴミ穴。
- 10 明黒褐色土。あまり締まりのないものの均質土。5 mm以下のローム粒と小ブロックを全体に疎らに混合する。
- 11 7層に比して、やや暗い。染み状にロームを疎らに混合する。
- 12 11層に似る。ローム粒めだたない。
- 13 黄褐色土。旧表土。7.10層同様、5 mm以下のローム粒と小ブロックを全体に含む。締まりあり。
- 14 明黒褐色土。7.10層に似る。やや暗い。ロームブロックを含む。
- 15 上層より明るいロームやや疎ら。
- 16 暗黄褐色土。黒色土と染み状のソフトロームを全体に混合する。1 cm以下のハードローム小ブロックも多量に含む。
- 17 黄褐色土。細かいローム粒を多く含む。(1 cm以下)
- 18 明黄褐色土。2 cm以下。ローム粒とロームブロック多く含む。締まりあり。
- 19 黒褐色土。ローム粒若干。焼土若干。ローム粒も細かく含む。
- 20 明黄褐色土。上下層と同じ。ローム粒とロームブロック1 cm以下多く含む。
- 21 黒褐色土。ロームブロック多少2 cm以下局所的に含む。締まり弱い。
- 22 暗黄褐色土。染み状ソフト。ロームブロック2 cm以下大小多く含む。
- 23 黒褐色土。軟質。ローム粒を少量含む。
- 24 暗黄褐色土。染み状ソフトとロームブロック2 cm以下を大小多く含む。
- 25 黄褐色土。2 cm以下のハード小ブロックとローム粒を多量に含む。
- 26 黒褐色土。細かいロームを全体に含む。
- 27 明黒褐色土。ローム大ブロック主体。染み状ソフトと焼土混じり。1 cm以下のローム粒も含む。締まりあり。
- 28 黒褐色土。焼土粒とローム粒を極少量含む。
- 29 純焼土に近い。



1



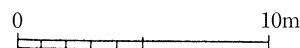
2



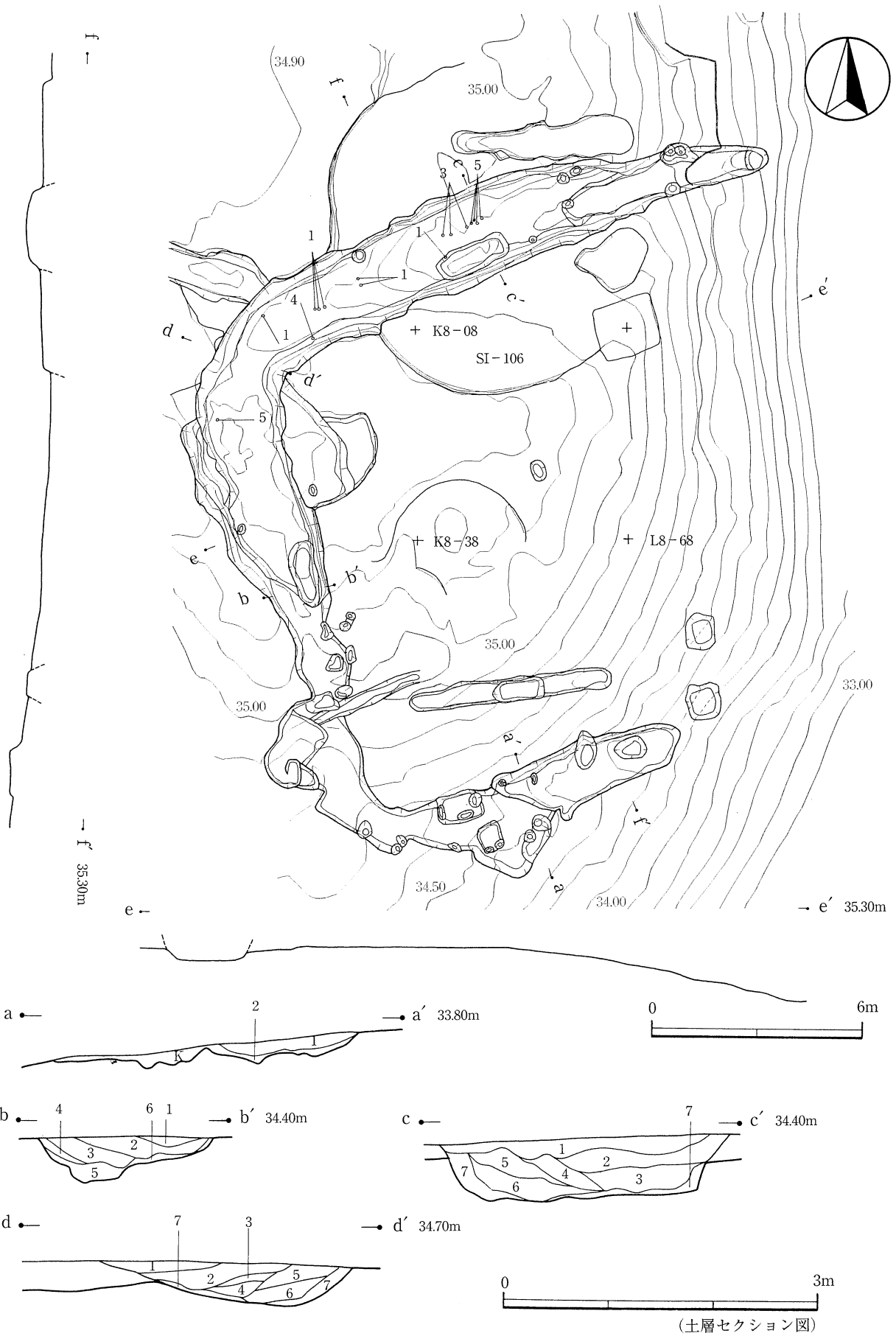
3



4



第209図 09号古墳 (SX-09) 出土遺物実測図



第210図 10号方形周溝墓 (SX-10) 遺構実測図

a-a'

- 1 明黒褐色土。2 cm大以下のロームブロックとローム粒を多量に含む。
- 2 ロームブロック（軟質）。黒色混じり。
- K カクラン（ロームブロック）。

b-b'

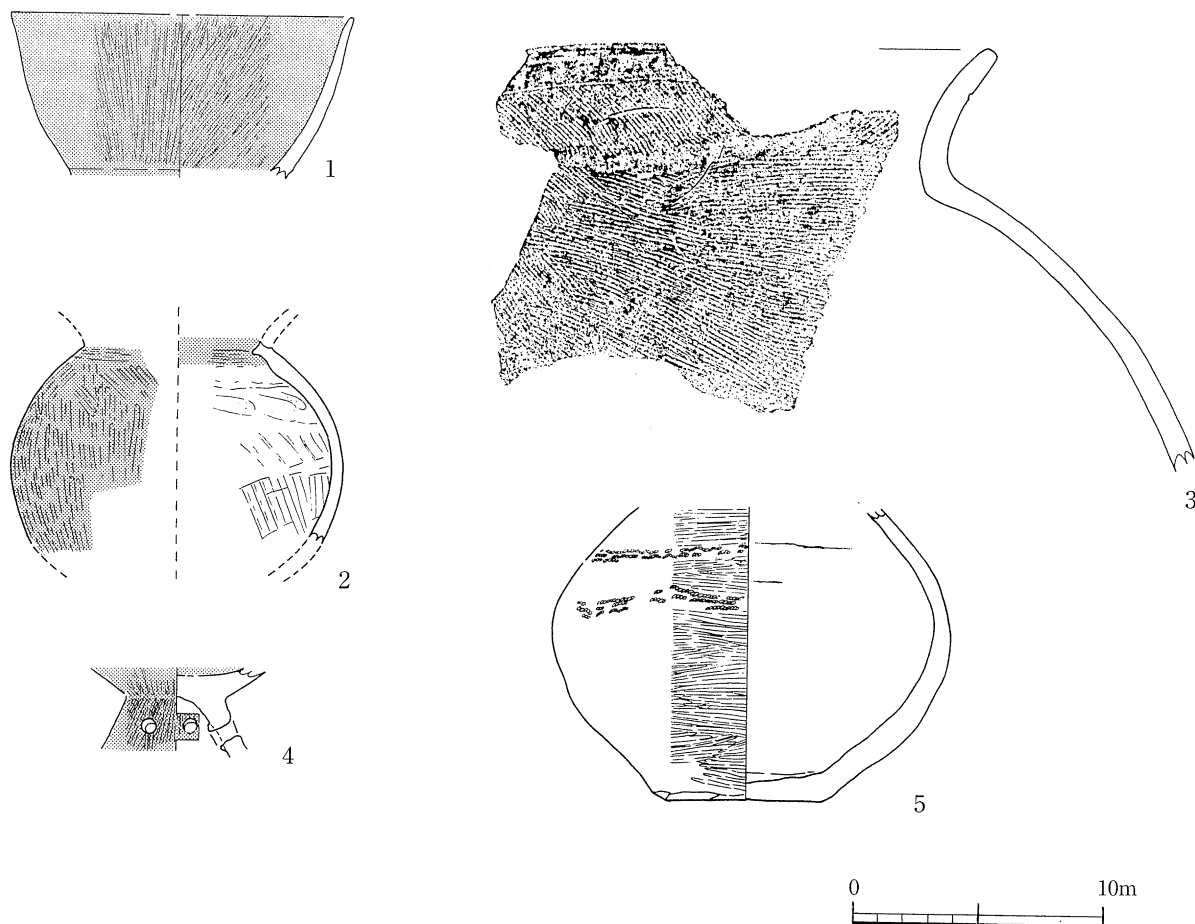
- 1 明黒褐色土。ローム粒多い。ただし下層より少ない。
- 2 黒褐色土。1 cm大以下のローム粒とロームブロックを多量に含む。
- 3 明黒褐色土。1 cm大以下のローム粒とロームブロックを多量に含む。
- 4 明黒褐色土。若干のローム粒と染み状ロームブロックを含む。
- 5 ロームブロックを多量に含む（軟質）。
- 6 ロームブロック（軟質）。

c-c'

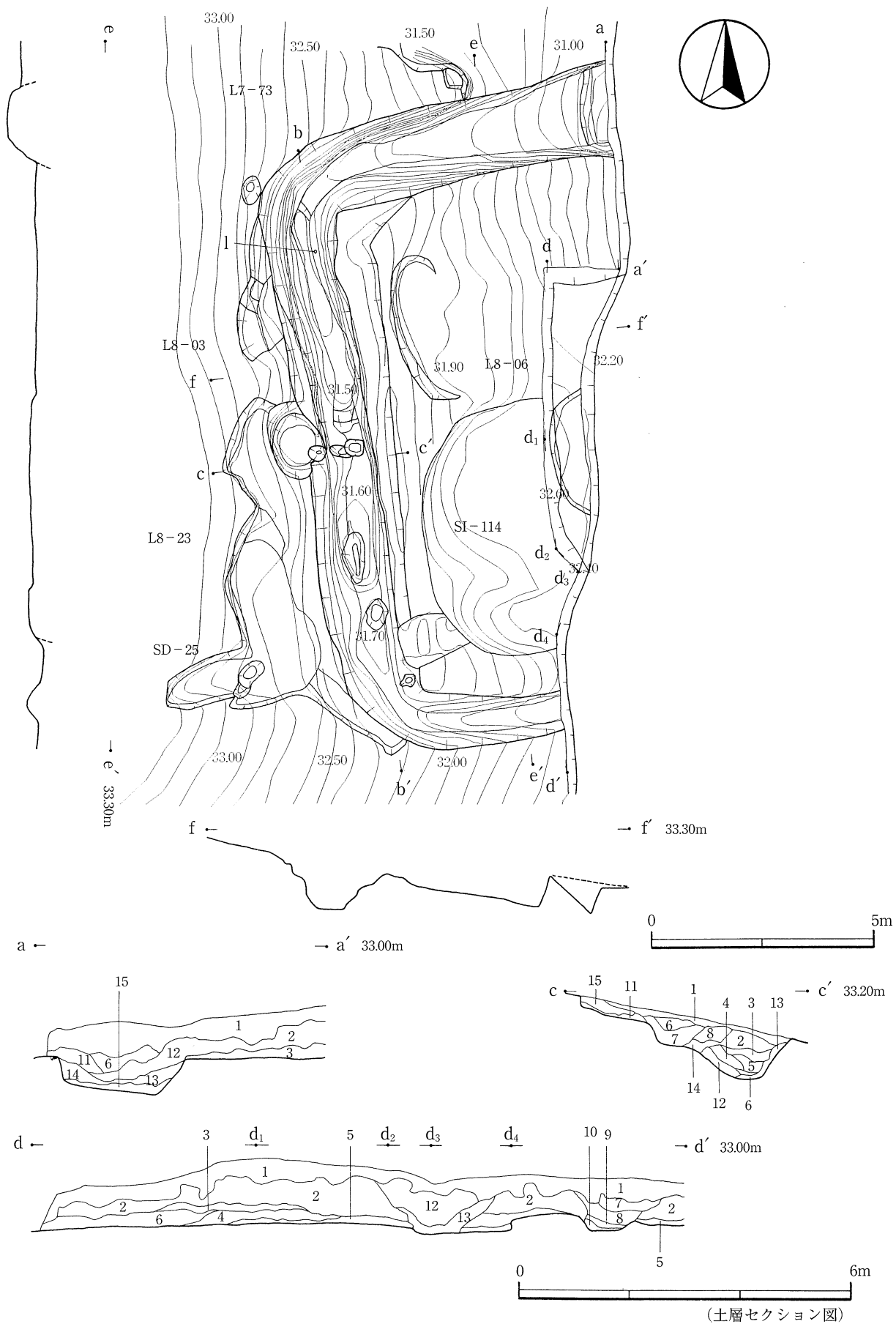
- 1 明黒褐色土。（やや灰色ぎみ）ローム粒多い。ただし下層に比して少ない。またローム小ブロックはあまり見られない。
- 2 明黒褐色土。3層に比してローム粒とローム小ブロック少ない。ただしローム粒は多量である。1層よりわずかに茶色。
- 3 黒褐色土。（最も暗色）1 cm大以下の小ブロックローム粒を多く、若干の焼土粒も含む。
- 4 茶褐色土。3 cm大以下のロームブロックとローム粒を多量に含む（暗い）。
- 5 茶褐色土。3 cm大以下のロームブロックとローム粒を含む。
- 6 茶褐色土。3 cm大以下のロームブロックとローム粒を多量に含む（明るい）。
- 7 明黒褐色土。左層（7）に比してやや暗い。ハードロームブロック混じり（ロームブロックは3 cm大で上層より大きい）。

d-d'

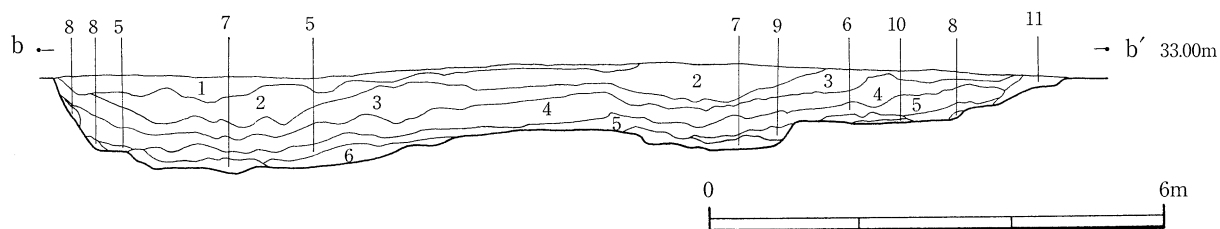
- 1 明黒褐色土。ローム粒と染み状ソフトローム混じり。
- 2 黒褐色土。ローム粒を多量に含む。
- 3 黒褐色土を地層とし、染み状ロームとローム粒を多量に含む。とくに染み状ソフトロームが多い。
- 4 黒褐色土。最も暗色でローム粒とローム小ブロック混じり。
- 5 やや暗色の茶褐色土。
- 6 茶褐色土。染み状に黒色と褐色を混合。ローム粒を多量に含む。
- 7 茶褐色土。ローム混じり。色調は比較的均一。



第211図 10号方形周溝墓（SX-10）出土遺物実測図



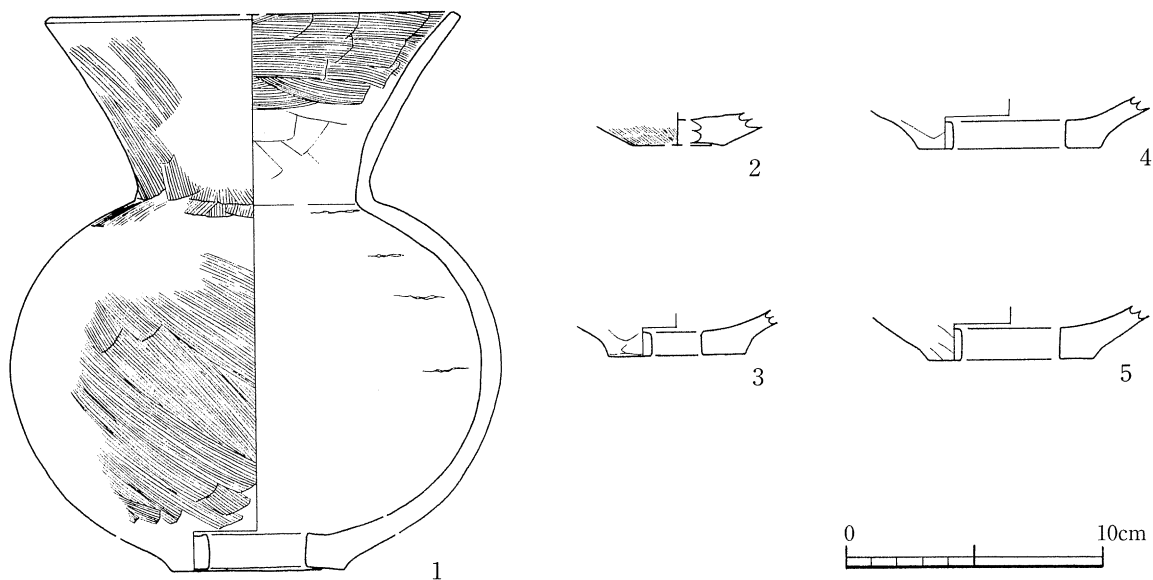
第212図 11号方形周溝墓 (SX-11) 遺構実測図



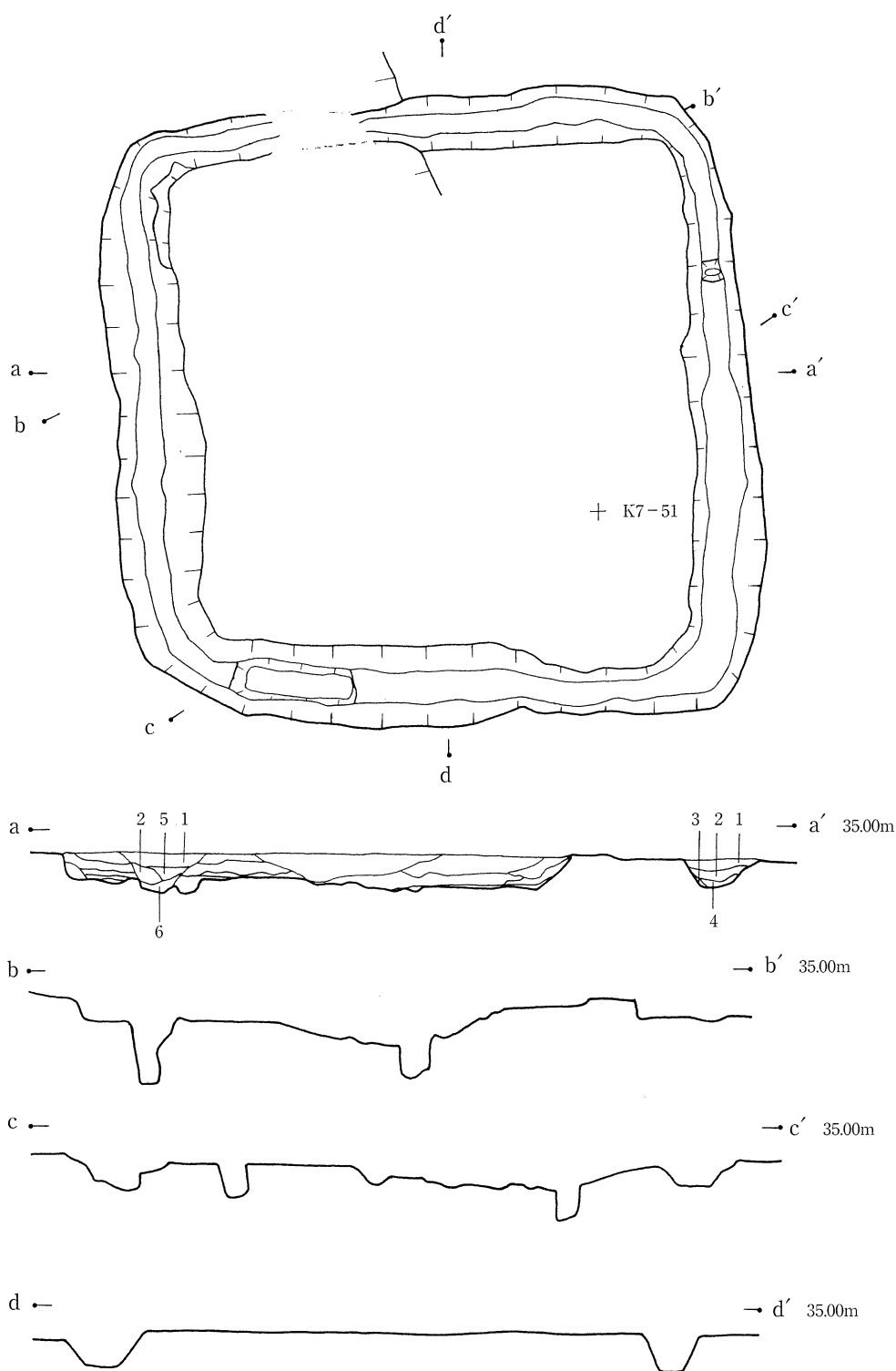
第213図 11号方形周溝墓 (SX-11) 土層セクション (b-b') 実測図

- b-b' c-c'
- 1 表土。明黒褐色土。やや明灰色。
 - 2 明黒褐色土。軟質。暗褐色土塊を少量含む。
 - 3 暗褐色土。ロームを全体に含む。
 - 4 暗黄褐色土。やや明るい。山砂とロームを多く含む。
 - 5 黒褐色土。均質土。ローム粒と粘土粒を少量含む。
 - 6 軟質のロームブロック。
 - 7 山砂のブロック。
 - 8 軟質の山砂。
 - 9 黒褐色土。山砂粒を多く含む。
 - 10 硬質のロームブロック。
 - 11 ソフトローム。
 - 12 暗黄褐色土。明るい。ローム粒を多く含む。
 - 13 暗黄褐色土。軟質のローム土塊を含む。
 - 14 明黒褐色土。軟質のローム土塊を多く含む。
 - 15 明黒褐色土。ローム粒とローム土塊を含む。

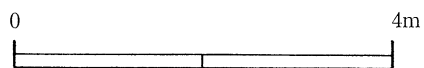
- a-a' d-d'
- 1 表土。
 - 2 明黒褐色土。軟質。暗褐色土塊を少量含む。
 - 3 褐色土。全体にソフトロームを均質に含む。
 - 4 明黒褐色土。2に似るが暗い。
 - 5 明黒褐色土。暗い。粘土と山砂の粒を多く含む。
 - 6 黒褐色土。ローム、山砂、粘土の粒を少量含む。
 - 7 明黒褐色土。明るく、山砂と粘土の粒を多く含む。軟質。
 - 8 明黒褐色土。7に似るが、含まれる粒が多い。
 - 9 明黒褐色土。粘性があり、山砂と粘土粒を全体に含む。
 - 10 黒褐色土。少し粘性。山砂と粘土粒を多く含む。
 - 11 明黒褐色土。軟質。
 - 12 明黒褐色土。山砂粒を多く含む。
 - 13 明黒褐色土。12より暗い。ロームと山砂と粘土粒を含む。
 - 14 黒褐色土。更に暗い。ロームと山砂と粘土粒を含む。
 - 15 茶褐色土。明るい。ロームと山砂と粘土粒を含む。



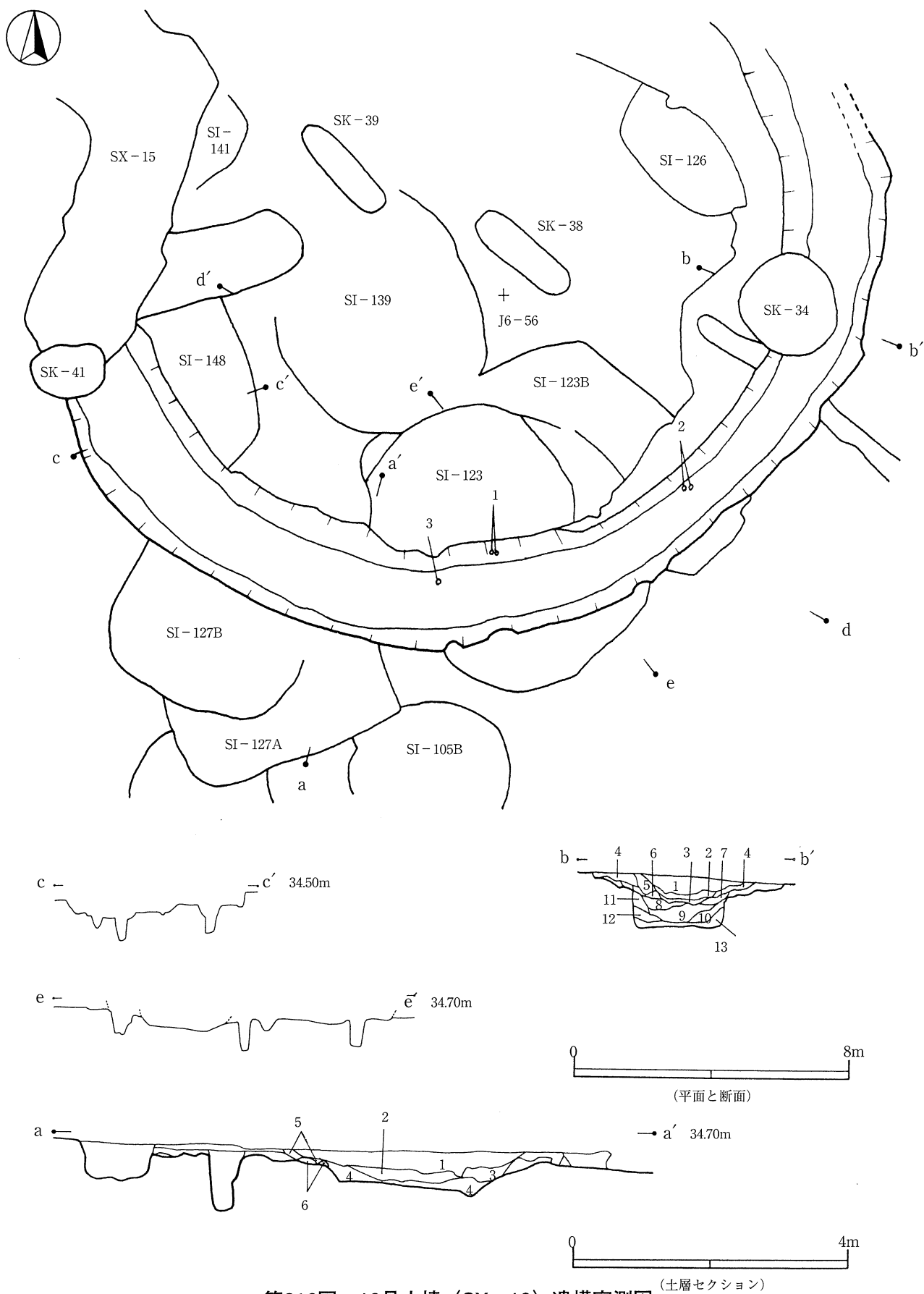
第214図 11号方形周溝墓 (SX-11) 出土遺物実測図



- a-a'
- 1 黒褐色土。締まりあり。ローム粒を若干含む。
 - 2 明黒褐色土。5 mm以下のローム粒とロームブロック層。染み状にロームも含む。
 - 3 黒褐色土。ローム粒多い。
 - 4 ロームの大小ブロック（軟質）。ただし、締まりはある。
 - 5 明黒褐色土。締まりあり。ローム粒とローム小ブロックを若干含む。上層に似る。若干明るい。
 - 6 黒褐色土。締まりなし。1 cm以下の大小ロームブロックとローム粒を多く含む。ただし、上層より少ない。



第215図 12号方形周溝墓 (SX-12) 遺構実測図



第216図 13号古墳 (SX-13) 遺構実測図

b-b'

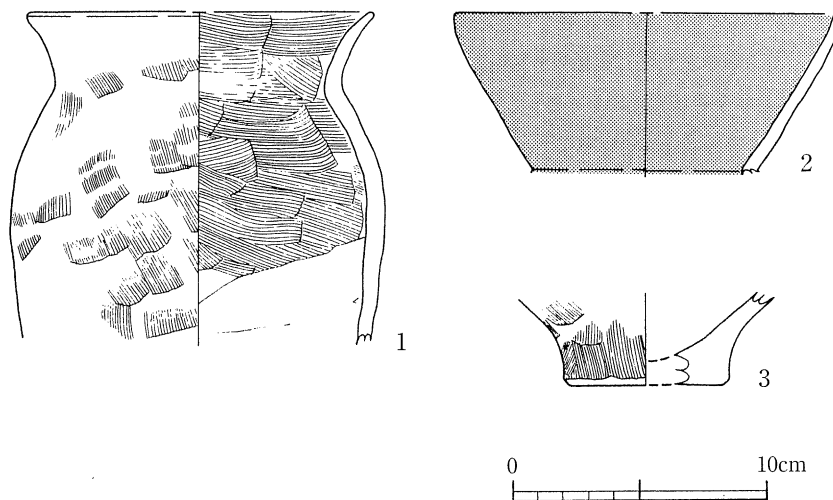
- 1 明黒褐色土。
- 2 明黒褐色土。少し硬質。
- 3 黒褐色土。最も暗色。1 cm以下のローム粒、ロームブロックを含む。
- 4 明黒褐色土。1層に似る。ローム粒を多く含む。
- 5 明黒褐色土。1層～3層に比して、明らかに明色。下層よりやや暗く、土質は同じ。
- 6 明黒褐色土。上下層に比して明るい。全体に1 cm以下のローム粒とロームブロックを含む。
- 7 9層よりやや明るい。基本的9層と同質。
- 8 9層よりやや暗い。基本的9層と同質。
- 9 明黒褐色土。7層～13層は漸移的、3 cm以下のハードロームを多く含む。ローム粒は少ない。締りよい。
- 10 9層に似る。やや明るい。
- 11 明黒褐色土。2 cm以下ハードロームを一部に含む。
- 12 暗黒褐色土。下層よりやや暗く、締まりなし。若干の焼土粒と3 cm以下のロームブロックを多く含む。
- 13 暗黒褐色土。粒状の黒色土とロームを全体に混合する。3 cm以下のハードロームを多く含む、締まりあり。

d-d'

- 1 暗褐色土。ローム粒含む。赤色スコリア少量混じる。
- 2 茶褐色土。ロームブロック多く含む。暗褐色土含む。混合層。
- 3 赤色スコリアやや多い。2層に似る。
- 4 赤色スコリアやや多い。3層より少し明るい。
- 5 2層よりやや暗い。スコリア粒少量含む。
- 6 黄褐色土。茶褐色土少し含む。

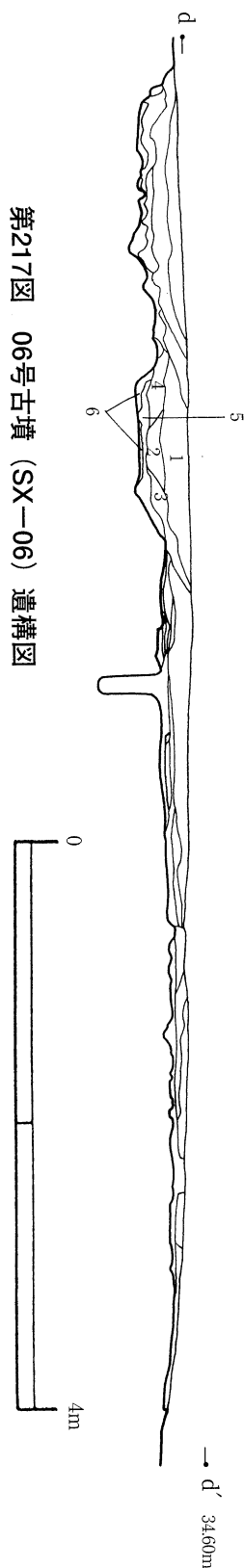
a-a'

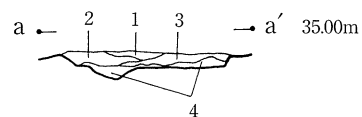
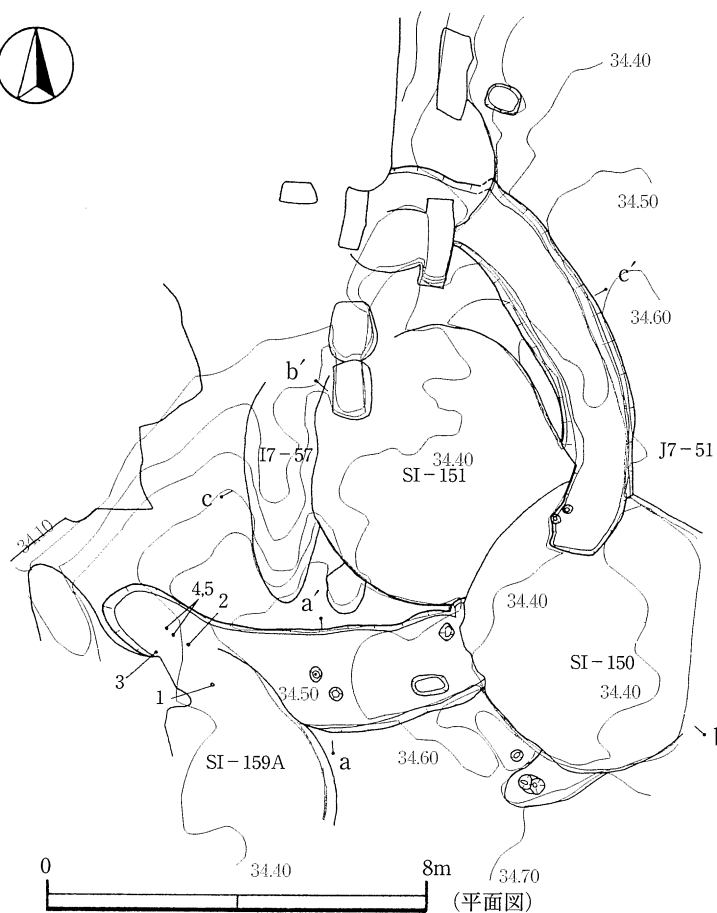
- 1 暗褐色土。（ローム粒1 mm～5 mm含む。赤色スコリア含む。）軟質。
- 2 茶褐色土。ロームブロック多く含む。暗褐色土含む。混合層。
- 3 茶褐色土。ロームブロック赤色スコリア含む。
- 4 茶褐色土。黒褐色土とローム粒を全体に多く含む。
- 5 暗褐色土。ロームブロックを含む。
- 6 暗褐色土。ロームブロック混入。



第218図 13号古墳 (SX-13) 出土遺物実測図

第217図 06号古墳 (SX-06) 遺構図



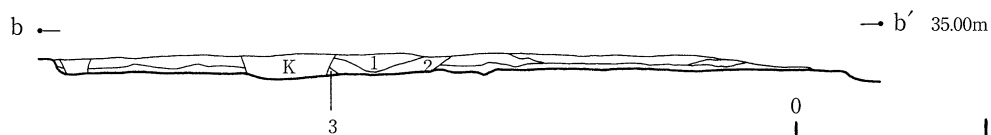


a-a'

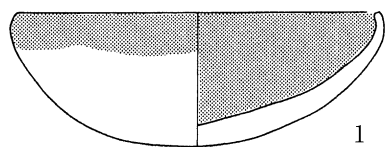
- 1 黒褐色土。細かいローム粒多い。染み状ソフトローム部分的。
- 2 明黒褐色土。細かいローム粒を疎らに含む。締まりあり。
- 3 明黒褐色土。細かいローム粒と染み状ソフトローム多い。
- 4 ソフトロームブロック状混合。掘り過ぎ。

b-b'

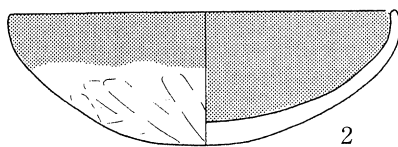
- 1 黒褐色土。ローム粒若干。締まりなし。
- 2 明黒褐色土。染み状のソフトブロック。ローム粒多い。



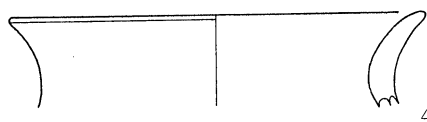
(土層セクション図と断面図)



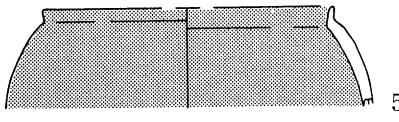
1



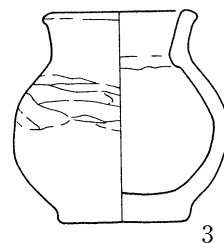
2



4



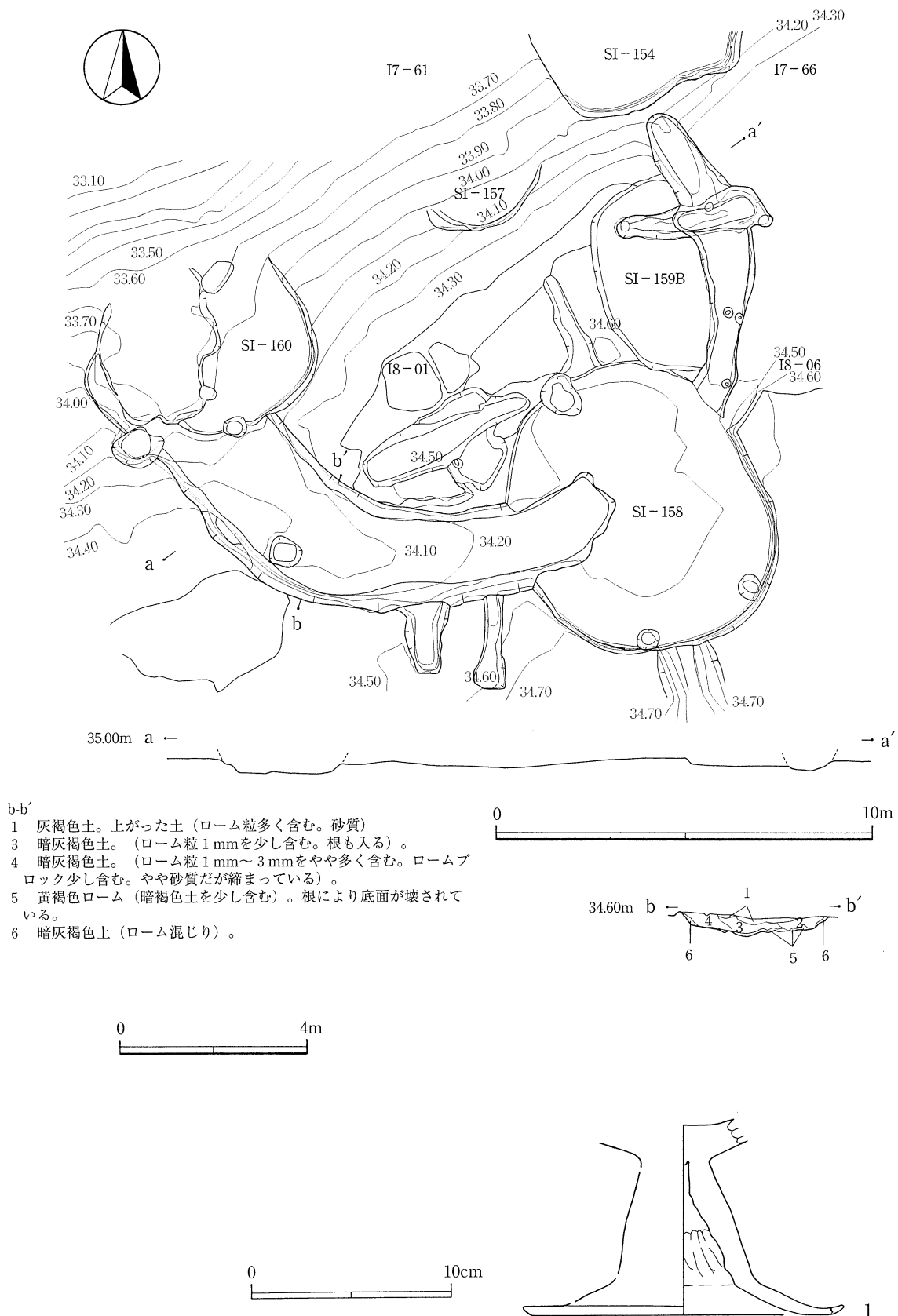
5



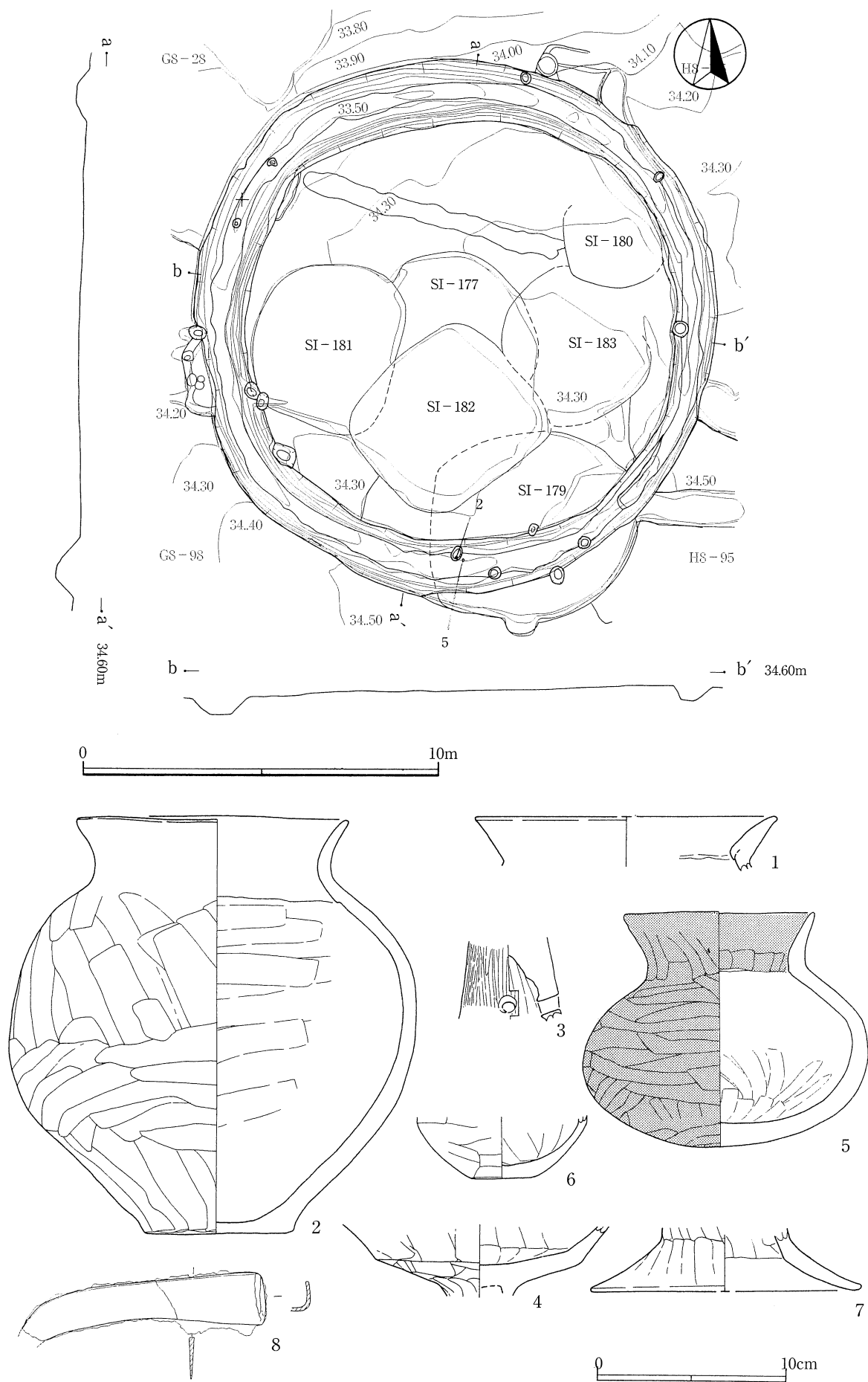
3



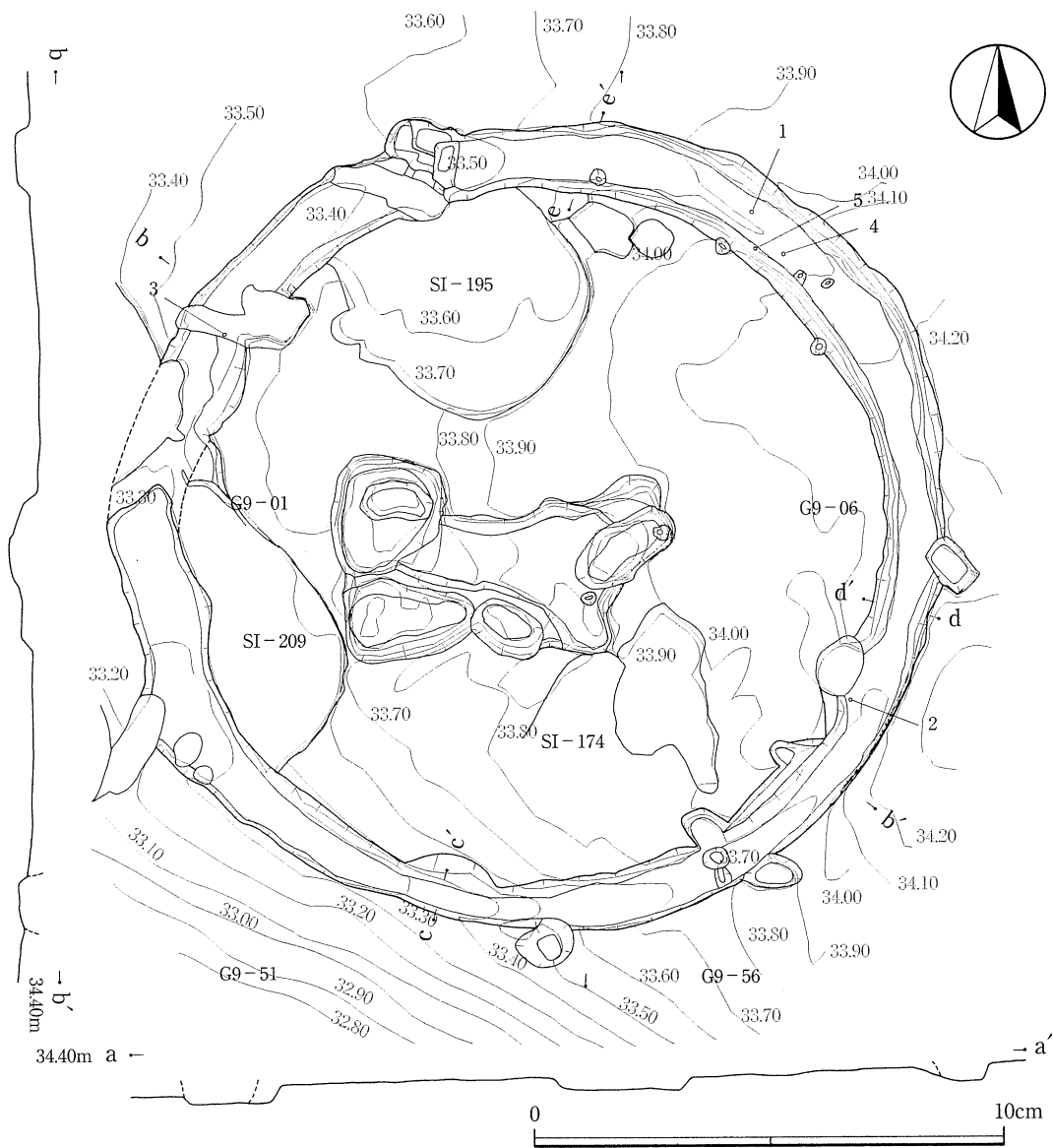
第219図 16号古墳 (SX-06) 遺構・遺物実測図



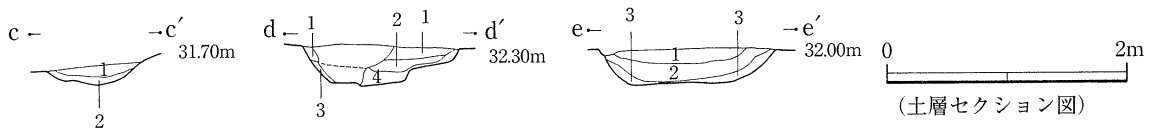
第220図 17号古墳 (SX-17) 遺構・遺物実測図



第221図 18号古墳 (SX-18) 遺構・遺物実測図



(平面図)



(土層セクション図)

b-b'

- 1 暗褐色土。不均一に多量のローム粒を含み、部分的に褐色味強い。
- 2 茶褐色土。1より褐色味強い。多量のローム粒に有機質土が少量混ざる。

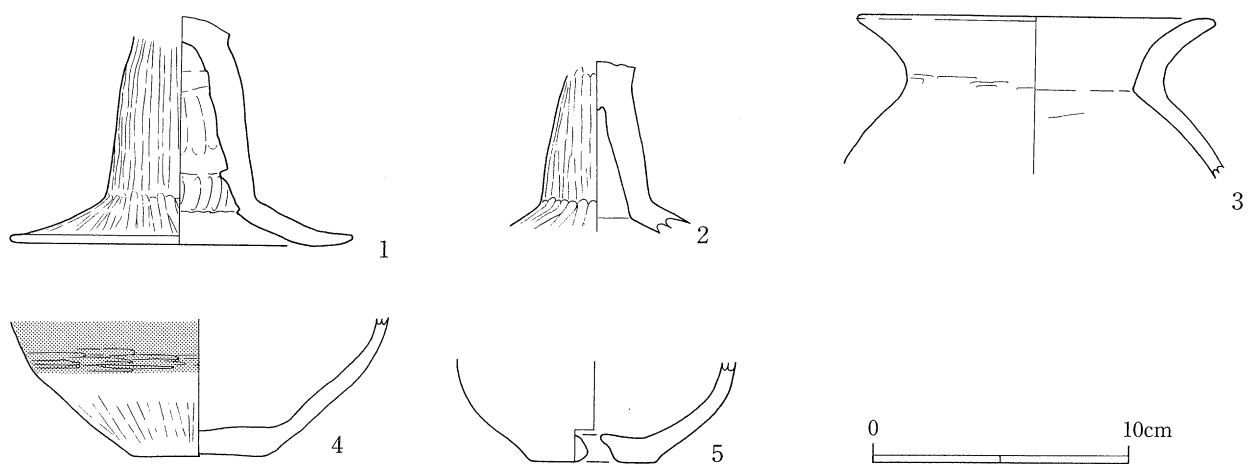
c-c'

- 1 黒褐色土。有機質性強い。
- 2 黒褐色土。有機質性強い。不均一にローム粒を含み、部分的に褐色味帯びる。
- 3 茶褐色土。褐色味強い。ローム粒を多量含む。
- 4 茶褐色土。褐色味強い。ローム粒を多量含む。

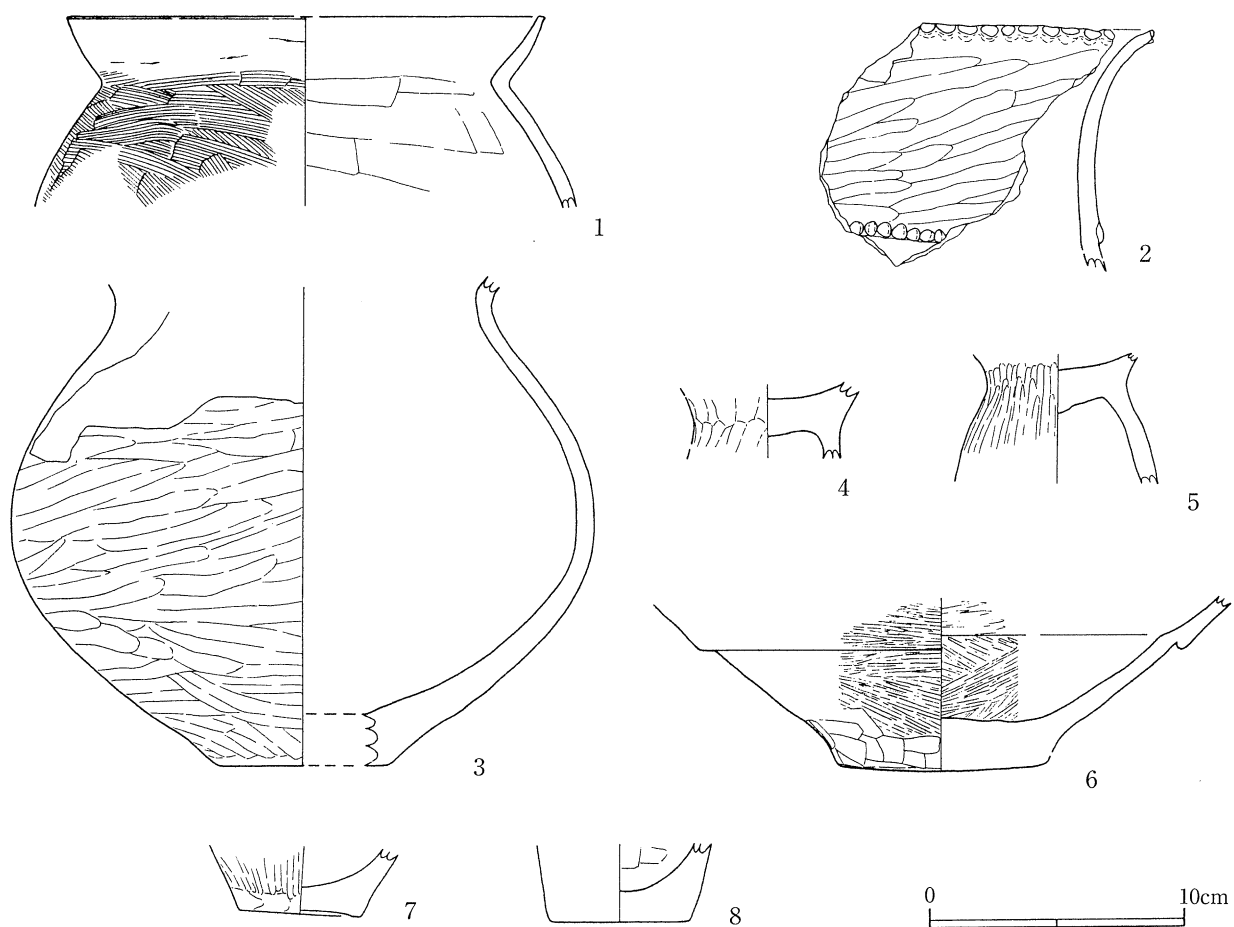
d-d'

- 1 暗褐色土。ローム粒を不均一に含む。焼土粒が微量に散る。
- 2 暗褐色土。1よりやや褐色味強い。ローム粒を不均一に含み、1mm～1cm大のロームブロックが散る。
- 3 茶褐色土。褐色味強い。ローム粒はきわめて多い。有機質土も部分的に混在する。

第222図 19号古墳 (SX-19) 遺構実測図



第223图 19号古墳 (SX-19) 出土遺物実測図



第224图 SX-21遺構出土遺物実測図

7. その他の遺構と遺物（第224～234図 第100表）

機能や性格が特殊であったり、不明な例を掲載した。SX-04は、南側斜面を掘削して平坦な整地面を造り、総柱の掘立柱建物跡2棟や炉跡、土坑などから構成される。SX-14Aは、東側斜面に立地し、Aは北側に位置し、東側の谷に向かって、20～30cmの段差で3段の落ち込みが認められる。形体は細長い円弧を描いている。出土遺物は弥生土器の甕類と平安時代の内黒碗がある。SX-14Bは不整円形状の堅穴遺構で、内部にピットや焼土などは検出されていない。床面は比較的平坦である。出土遺物は弥生土器の甕3点である。SX-15は細長く曲がって深く、焼土と貝を検出した土坑で（溝状でもある）、北側斜面部に立地する。SX-21は大型で南側斜面部に立地し、床面は少し凹凸があり、炉跡や硬質な床面は検出されなかった。出土遺物は弥生時代後期の甕(5)・高坏1、鉢1、台付甕1である。なお、各々の詳細については下表第100表や各項を参照されたい。

第100表 その他の遺構一覧表

() は推定

No	遺構名	挿図番号	旧番号	グリッド名	形体、大きさなど	深 さ	出土遺物	そ の 他
1	SX-04	第225～228図	SX-04	I11 J11	7-(1) 参照 斜面部を水平に掘削し、 平坦面に2棟の掘立柱 と土坑、炉などを配置 する生産施設		土師質土器1 坏5、碗1、鉢 1 須恵器・高台付 坏1 甕1、布目瓦2 線刻土器（器形 不明）1 砥石2、刀子1	SB-01、02 SI-08 SK-08、09、10、11、12、 26 SK-06 時期は、11世紀初頭頃
2	SX-14A	第229・230図	SX-14A	L7-54付近	西側より東側に向かっ て3段の落ち込みが見 られる。	1段目 30cm 2段目 21cm	甕2（底部2、 弥生） 碗1（平安）	覆土は自然堆積 時期は弥生時代後期
3	SX-14B	第229・230図	SX-14B	L7-66付近	堅穴状の落ち込み 不整円形 2.68m×3.16m	43cm	甕3（弥生後）	覆土は自然堆積 時期は10世紀前半頃
4	SX-15	第231・232図	SX-15	J6-21付近	7-(3) 参照 折れ曲がった溝状の土 坑 北側斜面上部に位置す る。 3期以上の切り合いが ある。 炉は炭も含み、5ヶ所 認められ、他に焼土も 存在する。 壁の立ち上がりの一部 は、オーバーハングす る。		坏2、碗1、高 台付坏1	SI-141を切る。 時期は10世紀末～11世紀 初
5	SX-21	第224・233図	SX-21	G10-01付近	(方形) 下部（南西側）は斜面 地のため、削平され、 全体の1／3程度の残 存の可能性がある。 長軸11.2m 立ち上がりの北側中央 がやや突出する。(2 m)		甕(5)、高坏 1、鉢1、台付 甕1 すべて北側床面 中央付近出土。	床は凹凸が激しい。 主軸方位はN-35°-E 堅穴住居の可能性もある が機能は不明。 時期は弥生時代後期

(1) 切り土整地遺構 (SX-04) (第225～228図、図版 9～11、40)

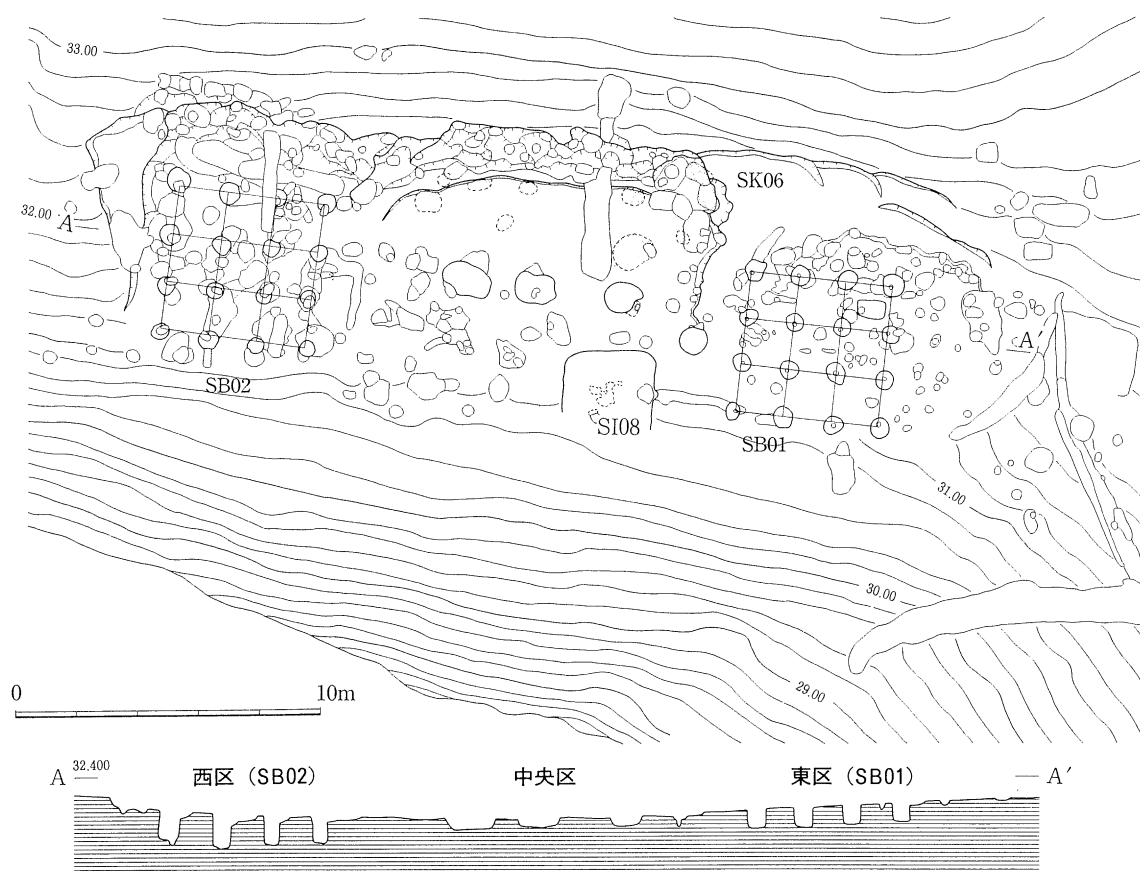
調査区南西の開析谷に面する斜面では、古代末期の切り土整地遺構 (SX-04) が検出された。

SX-04の平坦面は、全体として東西にのびる長方形を呈する。東西約29m、南北約8.7m、面積約252m²を測り、台地側に面した掘形の最深部は、上端の確認面から約1.5mに達する。西区・中央区・東区からなる三つの方形ブロックに分けることができ、掘立柱建物跡2棟 (SB-01・02)、竪穴建物跡1基 (SI-08)、炉10基 (SK-06ほか9基) 土坑5基 (SK-08・09・10・11・12) などの遺構群が整然と配置されていた。

西区平坦面は東西約7.5m、南北約8.5m、面積約63.75m²を測る。SB-02の建造を意識した小区画で、掘形はローム層および常総粘土層を掘り抜き、砂質シルト層上面まで達している。

中央区平坦面は東西約10.5m、南北約8.5m、面積約89.25m²を測る。SK-06～11を配置する小区画で、炉が10基 (SK-06ほか) 検出されている。標高は東・西両区画より若干低く、掘形も砂質シルト層に達するが、その上に常総粘土主体のローム混じり粘性土で、厚さ10cm程度の舗装を施している。上記の土坑群は、すべてこの舗装上面から掘り込まれていた。ただし南斜面付近の舗装土の遺存状況が悪いため、竪穴建物跡との新旧関係はつかめなかった。遺構配置の状況から、SI-08も土坑群と同一の文化面をなすものと考えられるが、確定はできない。

東区平坦面は東西約11m、南北約9m、面積約99m²を測るが、東端の整地範囲は明瞭でなく、全体に若干傾斜する。SB-01の造立およびSK-12を掘り込むための小区画であり、他の区画に比べ若干高く、掘形も常総粘土層中で止まっている。



第225図 SX-04遺構全体図 (大村 直「釜神遺跡」『市原市文化財センター年報』平成4年度、所収 より転載)

これら整地空間の利用時期は、出土遺物により大別Ⅱ期に分けることができる。Ⅰ期が最盛期で、SI-08出土の土師器より、10世紀後半と推定する。炉を除くすべての遺構群がこの時期に構築、使用されたものと考えられるが、遺構全体の性格は不明といわざるを得ない。中世前期には切り土整形地に掘立柱建物を建造することは普通に行われているので（1）、立地としては古代から中世への過渡期として、より中世的な事例と捉えられよう。また、整然と柱間のそろった3間×3間の掘立柱建物は、仏堂建築などを彷彿とさせるが、本遺跡から宗教色を示す遺物の出土は見られなかった。

Ⅱ期は、SK-06出土の小皿より、11世紀と推定する。前期建物が廃絶した後、中央区において炉群が構築されたものと考えられ、整地全面にⅠ期建物のもと思われる壁材が散布していた。炉の存在から、何らかの生産に関わる空間であったと推定できる。

出土遺物（SX-04、第228図）

3～7、9、11はⅠ期に属する10世紀の土師器であり、SI-08出土遺物と同時期である。

2、10、12～16は台地上からの流れ込みと思われる。

1と8は11世紀の小皿で、Ⅱ期に属する。SK-06出土遺物と同時期に考えているが、よりカワラケに近い傾向があるため、これらより若干新しい可能性がある。1は体部外面が若干屈曲する。西上総に分布する13世紀のカワラケ（2）に顕著なスタイルである。8は椀状の皿と思われ、底部は厚く柱状を呈する。双方とも見込みに指頭ナデは施していない。

なお、中央区を中心に、建物の壁材と思われる寸蒔入り粘土塊が35,860g採取された（写真図版130～133）。これとは別に、各遺構覆土中からも出土しているが、SB-01・02からは検出されなかったため、これら両建物の建築部材であった可能性がある。しかし両遺構が所在する東・西区では散布が薄くなるので、断定は難しい。ほとんどの壁材は、平坦面（壁面）を一面しか持たないため、漆喰状に貼り込まれた粘土が剝落したものと思われる。

掘立柱建物跡（SB-01・02）

SX-04中央区を挟む形で、東（SB-01）・西（SB-02）両区に配置される。双方とも総柱で、柱間寸法は東西、南北とも等間であり、全体で心々間約4.7mの方形建物となる。それぞれ建て替えは認められない。SB-01の方位は南北を基準にしてN-6°30'-Eである。柱掘形はほぼ円形で、径65cm、柱痕跡15cm程度を測る。SB-02は、東西、南北辺とも約4.8m、方位はN-7°30'-Eであり、SB-01とほぼ同規模同方向で柱筋をそろえる。この2棟の柱掘形の埋土には、土坑、竪穴建物の覆土や、中央区を中心として各区から多量に検出された壁材、焼土粒が認められないことから、ともに当初から建てられていたものと判断される。ただし、SB-02は、柱がすべて抜き取られており、SB-01とは廃絶段階の状況を異にする。

竪穴建物跡（SI-08）

東西辺で約3.1mを測る。カマドは確認できず、中央部床面が焼けて赤化していた。

出土遺物（SI-08、第208図）

土師器と須恵器が出土しているが、須恵器は11を除き、台地上からの流れ込みである。土師器は椀・皿・高脚付杯からなり、10世紀後半で、Ⅰ期に属する。

1は皿で、2に比べ底径が大きい。2の体部は、SX-04-1やSK-06-3・5で見られるような屈曲がまだ施されず、若干端反り気味に立ち上がり、口縁を薄く仕上げる。4と7は内面に黒色処理

が施されている。11は8～9世紀の須恵器大甕で、建物内に持ち込まれており、何らかの作業台として転用されていたものと思われる。

炉 (SK-06ほか)

中央区北東隅で検出されたSK-06は、半地下式の竪形炉で、三時期以上の焼成面が重複している。それぞれは径1m程度の炉状を呈し、焼土、灰、繊維質の炭化物が多量に堆積していた。うち1基からは、口径9.0から9.5cm前後の完形の土師質土器小皿が5点まとまって出土している。その上部構造については明確な痕跡を残していなかった。燃料材については植物珪酸体分析から、タケ亜科や栽培種のイネ属が使用されたことが推定されているが、炭化層の洗い出しによって種実などはまったく検出されなかった。いかなる用途を持った遺構であるか、不明といわざるを得ない状況である。

なお、その他の炉9基については、明確な堀込みを持たず、出土遺物もなかった。

出土遺物 (SK-06、第228図)

1～6はSK-06から出土した土師質土器の皿である。11世紀のもので、Ⅱ期に属する。

1は底部の厚い小皿で、体部は若干内弯気味に大きく開く。2は1と類似するが、口縁部を若干上方に立ち上げている。3と5は体部に屈曲を持つ点でSX-04-1と類似するが、やや不明瞭であることから、これより若干古い可能性がある。4は体部が端反り気味に立ち上がるタイプで、灯明皿として利用されている。6はやや底径が大きく、他の小皿5点とくらべ大ぶりの器形となる。

壁材片は、SK-06覆土中から3,000g出土しているが、二次的に焼けた痕跡は認められない。

土坑 (SK-08・09・10・11・12)

中央区からSK-09・10・11の3基が、掘立柱建物の柱筋にあわせた配置で検出された。すべて断面皿状の楕円形を呈し、SK-09・10の長軸は64cm、SK-11は83cmを測る。

東区との境界からはSK-08が検出された。円形のプランで、径46cmを測る。ここからはSI-08とほぼ同時期の土器片が出土した。

SK-12は、東区SB-01の柱間から検出された。東西辺48cm×南北辺28cmを測る長方形土坑で、長軸がSB-01の柱筋と平行しているので、SB01に付随する施設の可能性がある。

出土遺物 (SK-09、第228図)

SK-09から砂岩塊が出土した。部分的に灰白色のかかった明黄褐色で、7.4gを量る。非常にもろく、使用痕もない。

壁材片は、SK-08から600g、SK-09から2,100g、SK-10から1,400g、SK-11から340g、計4,440g出土している。

※ 掘立柱建物跡以降の各遺構の記述は、大部分を下記文献から引用した。併せて参照されたい。

《引用文献》 大村 直「釜神遺跡」(『市原市文化財センター年報』平成4年度)

また、SX-04およびSK-06出土の土師質土器小皿については、(財)千葉市文化財センター 梁瀬裕一氏からご教示賜った。

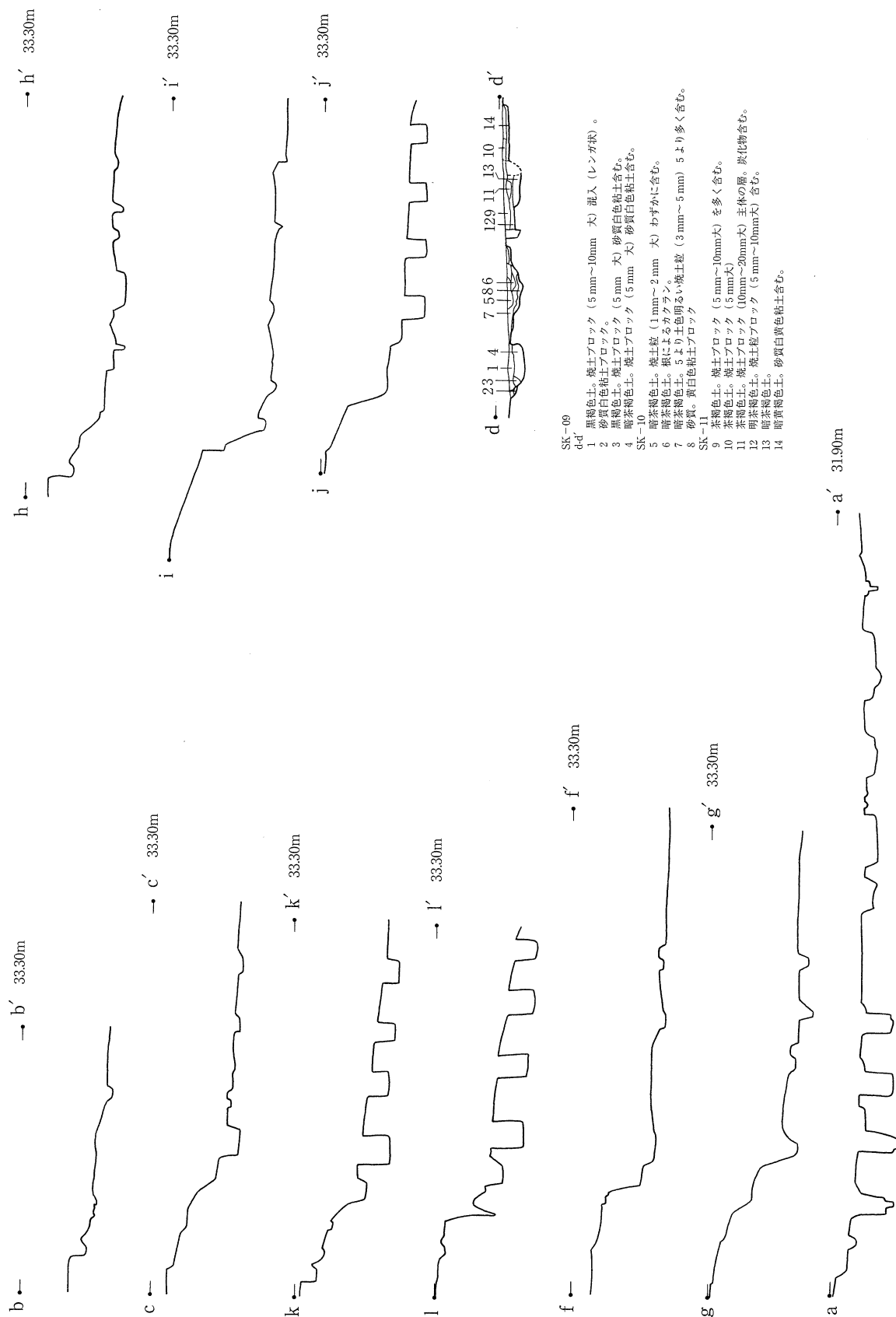
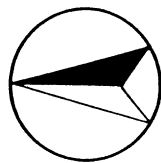
《註釈》

(1)『篠本城跡・城山遺跡』財団法人東総文化財センター発掘調査報告書 第21集

(2)笹生 衛『君津市外箕輪遺跡・八幡神社古墳発掘調査報告書』千葉県文化財センター調査報告第180集



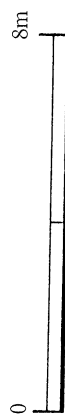
第226图 SX-04遺構平面图



SK-09

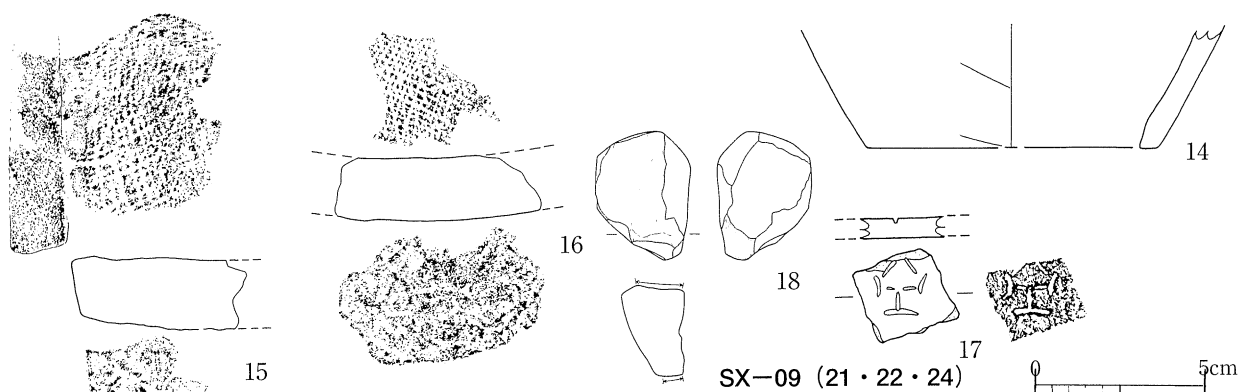
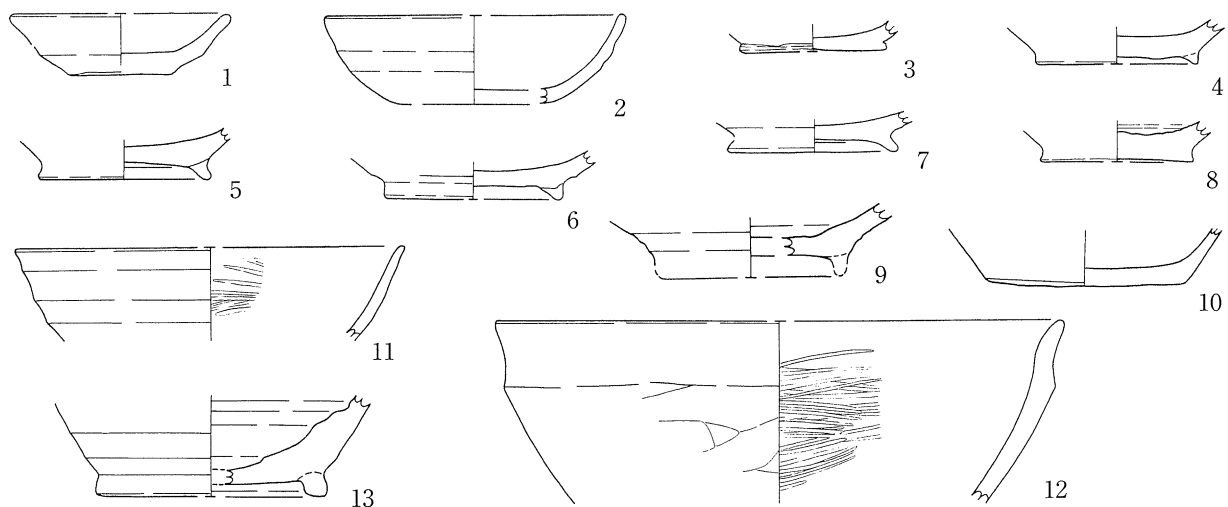
d-d'

- 1 黒褐色土。焼土ブロック (5 mm~10mm 大) 混入 (レンガ状)。
 - 2 砂質白黄色粘土ブロック。
 - 3 黒褐色土。焼土ブロック (5 mm 大) 砂質白黄色粘土含む。
 - 4 暗茶褐色土。焼土ブロック (5 mm 大) 砂質白黄色粘土含む。
- SK-10
- 5 暗茶褐色土。焼土粒 (1 mm~2 mm 大) わずかに含む。
 - 6 暗茶褐色土。根によるかクラン。
 - 7 暗茶褐色土。5より土色明るい焼土粒 (3 mm~5 mm) 5より多く含む。
 - 8 砂質。黄白色粘土ブロック
- SK-11
- 9 茶褐色土。焼土ブロック (5 mm~10mm大) を多く含む。
 - 10 茶褐色土。焼土ブロック (5 mm大)
 - 11 茶褐色土。焼土ブロック (10mm~20mm大) 主体の層。炭化物含む。
 - 12 暗茶褐色土。焼土粒ブロック (5 mm~10mm大) 含む。
 - 13 暗茶褐色土。
 - 14 暗黄褐色土。砂質白黄色粘土含む。

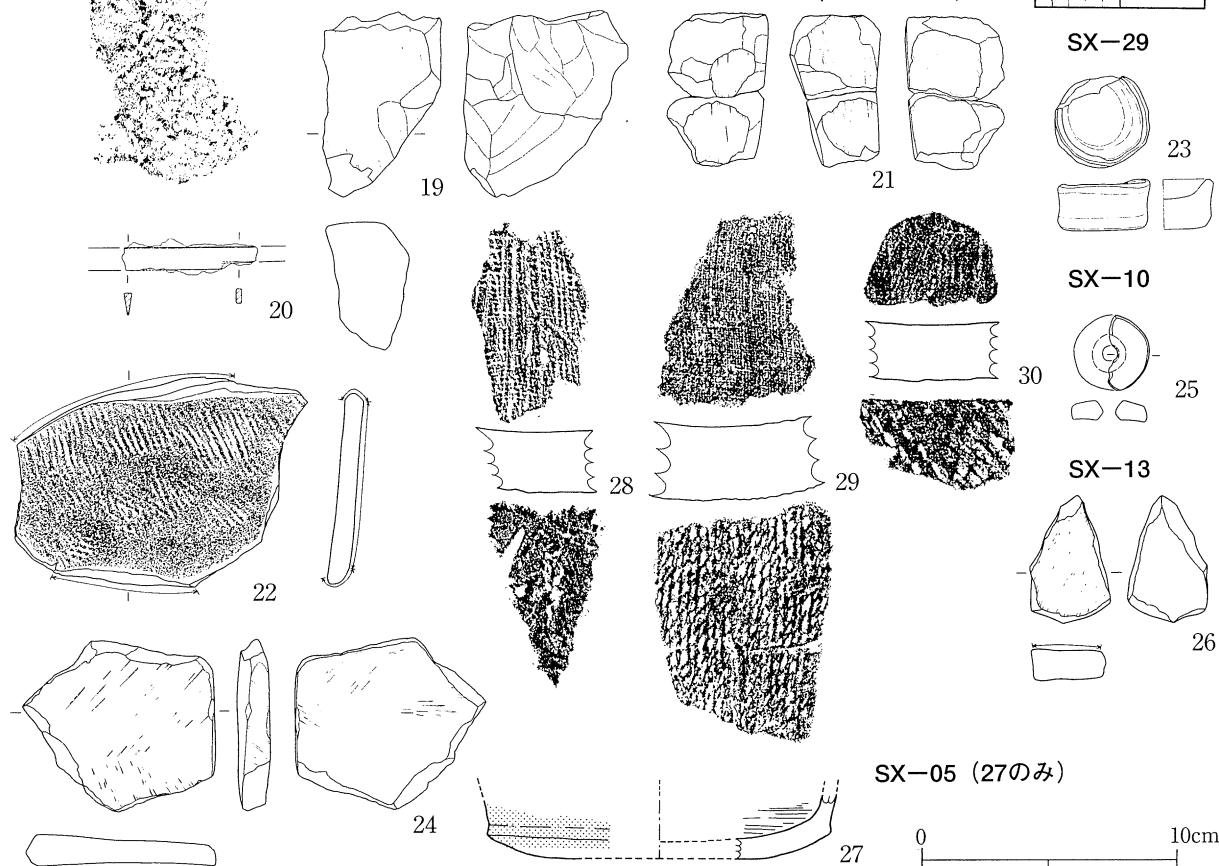
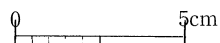


第227図 SX-04遺構土層セクション図及び断面図 (SX-04, SK-09, 10, 11)

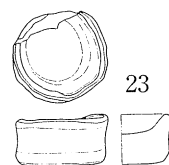
SX-04 (1~20・28~30)



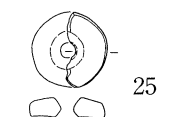
SX-09 (21・22・24)



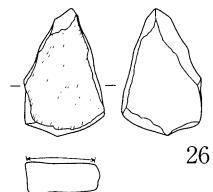
SX-29



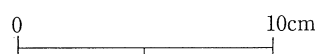
SX-10



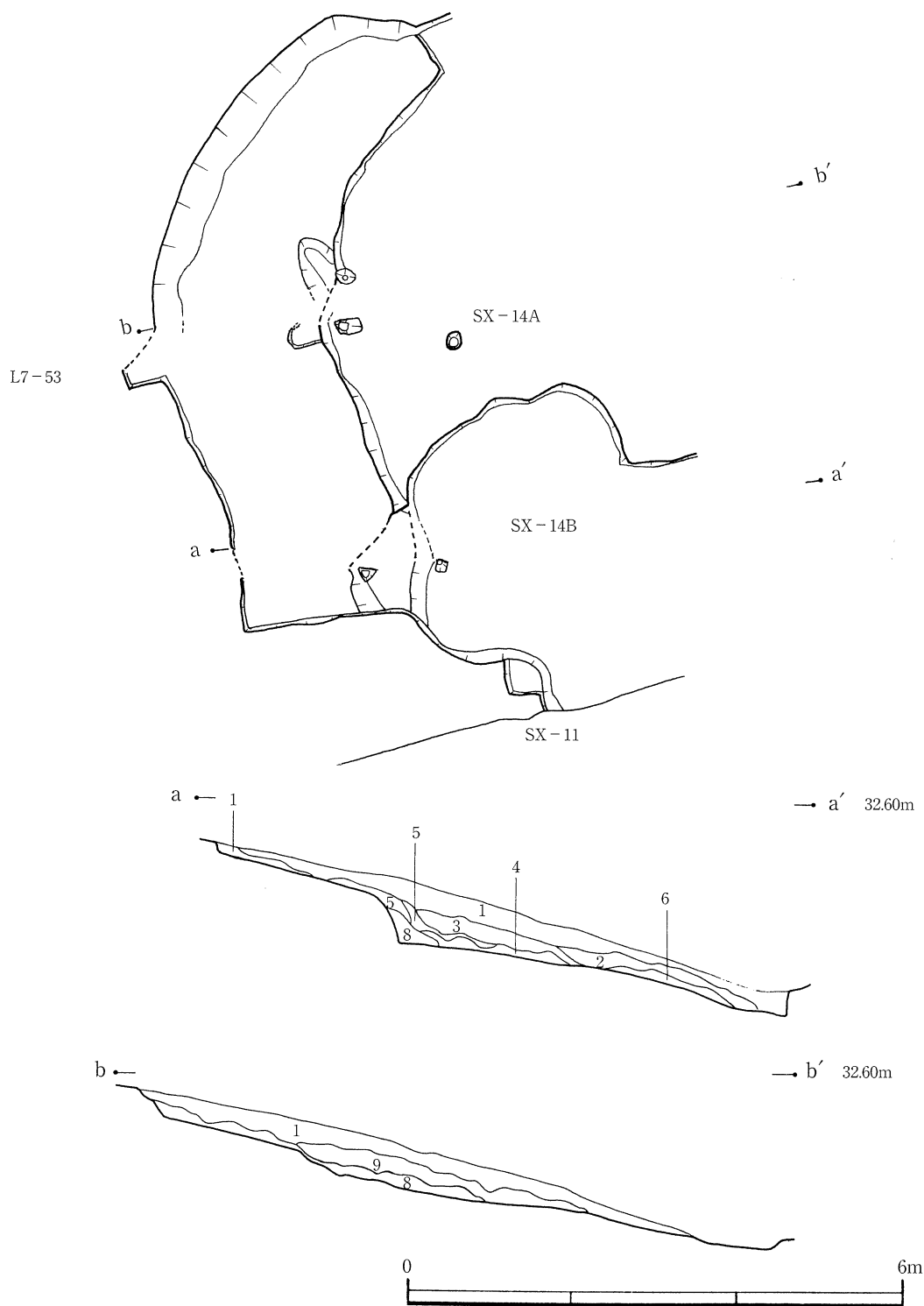
SX-13



SX-05 (27のみ)



第228図 SX-04、05、09、10、13、29遺構出土遺物実測図



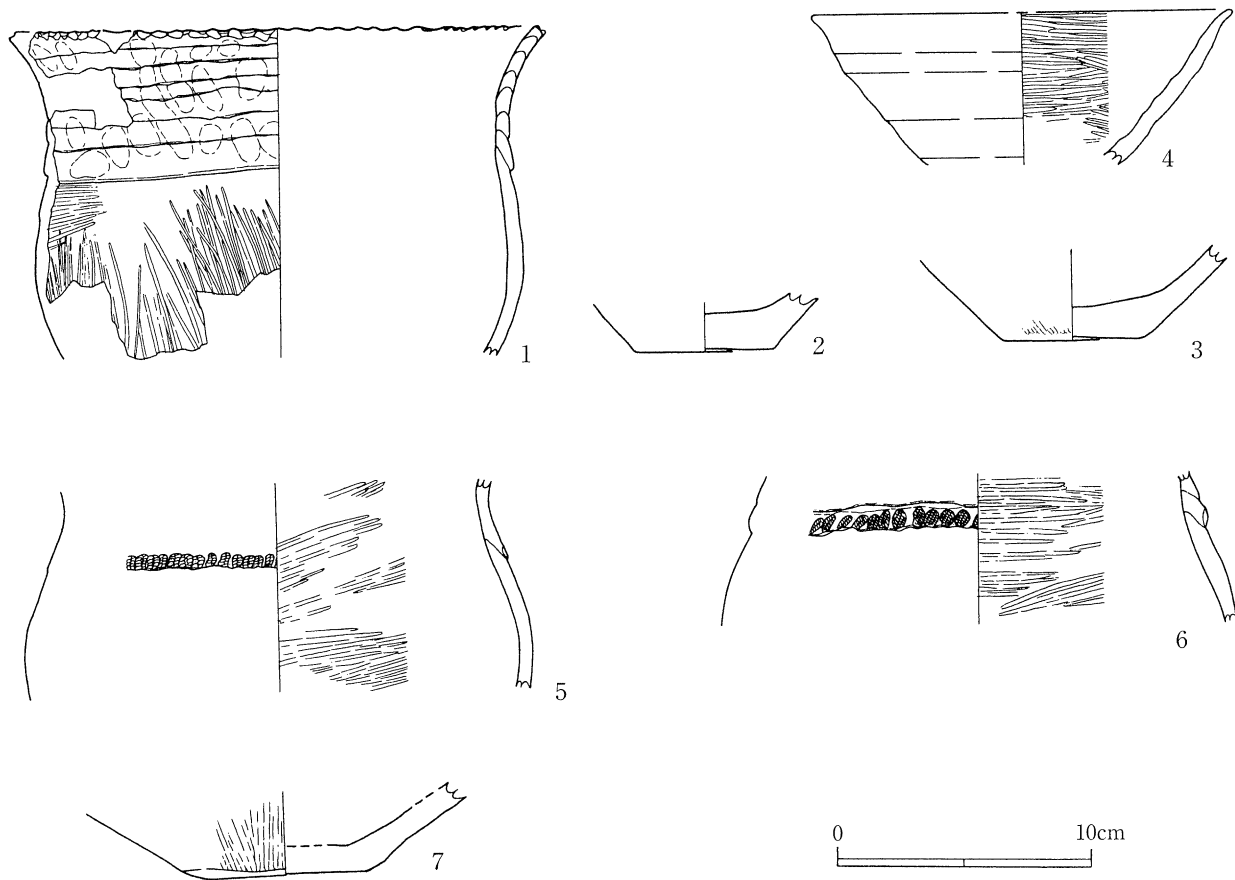
a-a'

- 1 黒褐色土。ローム粒を極少量含む。
- 2 明黄褐色土。軟質の褐色土塊を含む。
- 3 明黒褐色土。軟質の褐色土塊を多く含む。
- 4 黄褐色土。ソフトロームを全体に含む。
- 5 明黄褐色土。粘土を含む。
- 6 暗黄褐色土。ソフトロームを含む。
- 7 黄褐色土。ソフトロームを多く含む。
- 8 粘土。

b-b'

- 1 黒褐色土。ローム粒を含む。
- 8 粘土。
- 9 暗黄褐色土。軟質の褐色土塊を多く含む。

第229図 SX-14A・B遺構実測図



第230図 SX-14A・B遺構出土遺物実測図

(3) **SX-15** (第231～232図) J6-51グリッド

概 要 遺構は、標高34m程の台地平坦部から北方向に傾斜する緩斜面に、等高線方向に対し直交して位置する。遺構北側が調査区外になるため、全掘していないが、遺構は北側に向けて開口しているものとみられる。平面的には、溝状に細長く、ほぼ中央で屈曲する形状を呈する。遺構を覆う天井部及び天井部の崩落土は認められないが、遺構ほぼ中央部にトンネル構造を持つ部位が確認できる。遺構の底面は、概ね粘土層直下にある砂層中につくられている。遺構底面及び覆土中層には、炉と考えられる焼け面を8カ所、そのほかに、貝ブロックが2地点、炭層9地点を検出している。遺構覆土中には、炭化物、焼土粒、などが認められる。

また、貝ブロックについては第7-(5)章に詳細を述べ、炉については、サンプリングした灰を資料として、燃料材推定の目的で、植物珪酸体の分析を実施している(付編参照)。

形 状 平面形は、溝状に細長く、北側から7mの地点で、北から124°の角度で西方向に屈曲する。遺構確認面におけるプランは、南側でその幅が2.2m程で安定しているのに対し、北側では、不定形を呈し、炉A・B、炭層が検出された周辺では、最大幅4.3mを測る。遺構底面での全長は、北側から7.01mの地点で屈曲し、更に南に5.52mを測る。

断面形は北側、南側で微妙に形状が異なる。北側においては、幅広の上位から、中位にかけて急激にその幅を狭め、下位まではそのまま垂下するか、幅を広げて底面に至る。南側においては、上位から中位までの形状は、北側と大きな違いは認められない。しかし、下位では、北側で底面に相当する部位がテラス状を呈し、その底面東側が、更に下方へ掘り込まれている。従って、遺構を俯瞰すると、テラス状の面が底面のように見えるが、実際には、南側に向かうほど、底面が遺構東側面下に潜り込む形状を呈する。遺構底面は、ほぼ平坦である。標高は30.50m～31.18mであり、高低差は0.68m、傾斜角は3.6°～4.0°を測る。壁面は、炉の周辺以外での被熱は認められず、壁材としての粘土の貼り付け等は確認できない。

炉 A～Hとした8カ所の明確な焼け面を持つ地点が検出されている。これらについては、堆積焼土ではなく、明確な焼け面が確認できることを基準として、炉として扱うこととする(調査時には7カ所を炉として認識しているが、整理作業において1カ所、H炉を追加している)。A・C・H炉については、覆土中層に位置するためか、その他の炉に比べ焼け面は明確ではない。また、各炉の切り合い状況からは、それぞれが単独に、または一連のものとして機能したかは不明である。

A 炉 遺構北側の西側面寄りに位置する。不定楕円形を呈し、長径120cm×短径67cmを測る。レベルは、遺構全体の覆土の中位から下位ほどに位置する。断面図によると、遺構覆土を掘り込んだ最下位にあたる。直上には、焼土、炭化物を含む層があり、厚さは4cmを測る。直下には炭層があり、さらに下方には、53cmの間層を挟んでB炉が位置する。また、A炉に接する遺構西側面は、上方で斜方向に掘り込まれており、炉に伴う構造である可能性がある。

B 炉 遺構北側の西側面寄りに位置する。不定形を呈し、長径118cm×短径48cm、厚さ4cmを測る。平面図及び断面図によると、焼け面は、遺構底面を10cmほど掘り込んだ窪みの底面直上に位置する。また、周りにある2方向の地山が掘り残されており、炉の周辺に何らかの

構造物を伴っていた可能性がある。遺構底部は砂層を掘り込んでいる。間層を挟んで B 炉の上方に A 炉が位置する。

- C 炉** 遺構北側、調査区境界に接して位置する。長楕円形を呈し、長径86cm×短径43cm、厚さ10cmを測る。遺構覆土下位の、底面から50cmほど上方に位置する。
- D 炉** 遺構北側、C 炉より下方約40cm、やや南側で検出した。楕円形を呈し、長径37cm×短径31cmを測る。断面図によると、焼け面の直下に炭層が存在する。この炭層は、焼け面の中心より半径24cm～60cmの範囲に広がり、炭と焼土が認められる。焼け面の下方は、周囲の遺構底面からは10cmほど掘り込まれている。この地点の遺構底面は、砂層には達しておらず、粘土質のシルト層までの掘り込みで止まっている。しかし、焼け面と遺構底面との間には砂層が堆積する。
- E 炉** 遺構ほぼ中央、屈曲部位の遺構底面に位置する。不整形を呈し、長径68cm×短径63cmを測る。遺構底面が砂層に達しており、焼け面は砂層上に位置する。これに伴う掘り込みは認められない。周囲の状況として、やや北側に設定されたセクションに天井部の存在を想定しうる両壁からの張り出しが認められることから、焼け面は、トンネル状になった内側に位置するとみられる。断面図から、焼け面と天井部までの高さは86cm～90cmを想定する。E 炉とは垂直方向には重ならないが、この天井部の崩落土下に炭層を伴ったH炉が認められる。
- F 炉** 遺構屈曲部より南側、トンネル状の内側に位置する。平面形は不確定ながら、楕円形を呈するとみられ、直径34cm程を想定する。焼け面は、砂層まで達する遺構底面から、10cmほどの間層を挟んだレベルにある。直上に厚さ2cmほどの炭層が検出されている。また、焼け面の上層覆土は、自然堆積と考えられるが、33cm上方に炭層が、厚さ1cm～2cmで認められる。天井部はドーム型を呈するが、直下の土が、崩落土と考えられる粘土ブロックであることから、旧形状を保っていない可能性がある。炉から遺存する天井部までは50cmを測る。
- G 炉** 遺構屈曲部より南側、トンネル部のほぼ中央に位置し、7基の炉の中では一番南側にあたる。不確定ながら、楕円形を呈すると見られ、直径32cmを想定する。焼け面は、砂層に達する遺構底面から、5cmほどの間層を挟んだレベルにあり、直上には、炭層が検出されている。炭はブロック状ではなく、細かな粒状を呈し、この層に囲まれた状態で灰が検出されている。また、2層に分かれる間層の上方14cmには、貝ブロックが検出されている。周囲の状況としては、焼け面から66cm上方に天井部が認められるが、旧形状を保っていないとみられる。
- H 炉** 遺構の屈曲部、トンネル状を成す部分の北側開口部付近に位置する。平面形状は不明。断面図から、直径は50cm～60cmを想定する。レベルは、天井部崩落土の直下、遺構底部から63cm上方となる。このことは、トンネル状の内部に土がかなり堆積してからの燃焼を示すものと考えられる。焼け面の直上には炭層が5cm程の厚さで堆積する。

貝 層 貝層は2地点で出土している。

貝ブロック A 遺構北側の、炉 A・B、炭層が検出された地点、遺構が外側に広がる、中央からやや南寄りに位置する。平面形は不定楕円形で、長径134cm×短径38～86cm、厚さは最大で

6.5cmを測る。キサゴ主体の純貝層である。断面図からは、貝層は遺構覆土の中位に位置し、遺構埋没中途段階での掘込みに伴うとみられる。また、貝層の上下層は、ハードロームブロックを主体とした層であり、人為的な埋め戻し、もしくは投棄を想定する。

貝ブロックB 遺構屈曲部の南側、トンネル部の内側に位置する。平面形は長楕円形で長径50cm×短径24cm、厚さは最大で2.5cmを測る。破碎貝を含む混貝土層である。断面図では、貝層は遺構覆土の下層上位に位置し、下方には厚さ14cmの間層を挟んでG炉とした焼け面が存在する。貝層より上方の覆土は、小径のローム粒、粘土粒を多く含む均質な土で、自然堆積を想定する。周辺のトンネル部は、幅58.5cm、高さ70cmを測る。

トンネル部 遺構の屈曲部を中心にして位置する。直線的な長さは2.35～3.00mを測るが、この規模で機能したものか、天井部が遺存部位よりも、南北方向へ伸びるものなのかは、明確に判断し得ない。断面形は、地山が崩落しやすいこともあって、原型をとどめているとは考えにくい。セクションB-B'-B"では、上層に若干の崩落土が認められるのみであるため、ある程度、形状を保っていると考えられる。これによると、底面は下方にやや丸みを持って膨らみ、側壁は直線的に立ち上がる。天井部は水平ではなく、三角形の頂点状もしくはドーム状を呈すると見られる。このトンネル状を成す範囲には、炉と判断した、明確な焼け面を持つ部位が4カ所検出されている。このうち、3カ所は遺構底面直上もしくは、第一埋没土である砂層の上位に位置し、1カ所はトンネル部が3/4ほど埋没した上に位置する。

遺物 実測可能遺物は4点である。1・2は遺構北側覆土中位以下の出土である。3・4は覆土中の出土である。

時期 遺構の時期は、遺構に伴うと見られる遺物が少量であるため、確定的ではないが、覆土中位以下出土の遺物から、10世紀後半から11世紀頃を想定する。

その他 本遺構については、炉とした焼け面が検出されていることから、“加熱により、熱変化を起こして、何らかの製品を作製する”という意味に於いては、窯構造を持つとはいえる。具体的な使用目的については言及するに至らない。

当初は、遺構の形状から、登り窯状の炭窯である可能性を検討した。他事例から(参考文献)、遺構の立地、傾斜に対する掘り込みの様子、底面の形状及び傾斜角度、断面形状等で共通項は認められる。しかし、底部及び壁面の被熱が部分的であり、諸施設(煙道、排水溝、焚き口)の認定が積極的に行える材料に乏しいことなどから、現時点では、本遺構を炭窯とするには至らない。

他に、釜神遺跡調査区内の検出遺構中、当該期の遺構はSK-06のみである。SK-06は、やはり掘り込み内に被熱部位が認められ、また、遺構及び周辺覆土内に、スサを含んだ炉壁状の遺物が少なからず出土していることから、炉もしくは窯としての機能が想定される。この遺構との関連性も否定できない。

結果として、SX-15とした遺構は、今回の報告内では性格付けはできなかった。しかしながら、G炉内からサンプリングした灰の植物珪酸体分析の結果によると、栽培種のイネ属の植物体(葉部、籾)の検出から、おき火の可能性が指摘されており(付編参照)、遺構の性格を解明する糸口となる可能性がある。月並みではあるが、今後の類例の検出を待つ事としたい。

(参考文献)

大道 和人 「木炭窯の形態からみた古代鉄製産の系譜と展開に関する予察」

『紀要』第8号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1995.3

増田 孝彦 「丹後地域の木炭窯の検討」『京都府埋蔵文化財論集』第4集

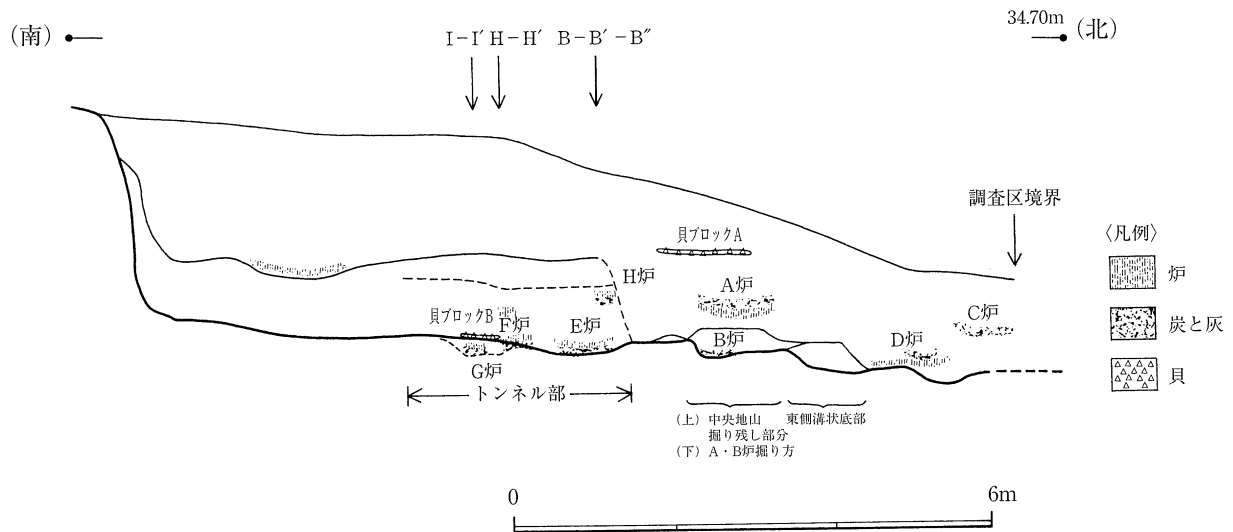
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2001

増田 孝彦ほか 「黒部遺跡平成6・7年度調査概要」京都府遺跡調査概報 第71冊

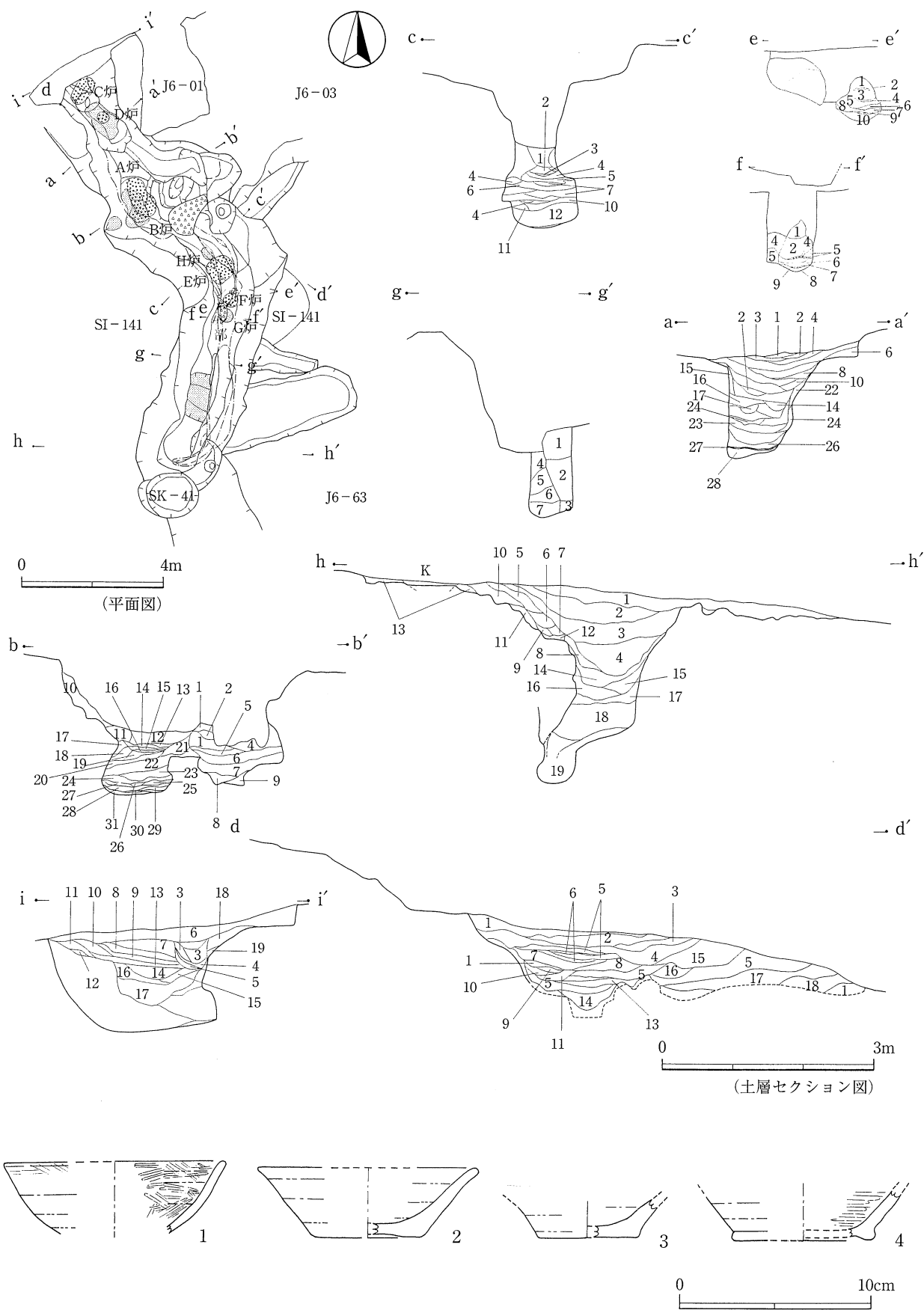
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1996

増田 孝彦ほか 『遠所遺跡』京都府遺跡調査報告書 第21冊

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997



第231図 SX-15投影図



第232図 SX-15遺構実測図と遺物実測図

SX-15

b-b'

- 1 暗褐色土。有機質土ブロック混じる。締まりあり。
- 2 黒褐色土。締まりなし。ローム粒散る。
- 3 暗褐色土。2に比して土質軟かい。
- 4 黒褐色土。6に比して締まりゆるい。有機質土に褐色土ブロック多量に混じる。
- 5 暗褐色土。有機質性強い。締まり弱い。ローム粒混じる。
- 6 茶褐色土。有機質土散る。炭化粒も若干散る。
- 7 茶褐色土。6に比して締まり強い。ローム粒全体に散る。炭化粒混じる。
- 8 茶褐色土。7に比して明るい。7よりもなお締まりあり。ローム粒が7より多く、全面に散る。焼土粒炭化粒若干散る。
- 9 暗褐色土。8に比して締まりゆるい。黒色味強い。シルト粒少量混じる。
- 10 暗褐色土。ローム粒混じる。11に比して締り弱い。
- 11 暗茶褐色土。硬質。
- 12 暗茶褐色土。11に比して黒色味強く、炭化粒、焼土粒が若干散る。
- 13 暗茶褐色土。炭化粒若干混じる。12より明るい。
- 14 黒褐色土。1cm～2cm大のロームブロック混じる。焼土粒、炭化粒が少量混じる。締まり弱い。
- 15 焦土面。多量の焼土層に黒褐色土が少し混じる。下方に炭化粒が堆積。
- 16 炭化面。多量の炭化層に焼土粒が混じる。
- 17 黒褐色土。2cm～3cm大のロームブロックが多量に混じる。締まり弱い。
- 18 黒褐色土。17より黒色味強い。ロームブロック焼土粒混じる。
- 19 茶褐色土。5mm～1cmの焼土粒及び炭化粒が若干混じる。
- 20 暗褐色土。黒色味強い。焼土粒炭化粒が多く混じる。19に比して締まり弱い。
- 21 茶褐色土。有機質土混じる。焼土粒きわめて若干混じる。
- 22 茶褐色土。19より明るい。直下面に炭化層あり。その上に焼土粒散る。
- 23 茶褐色土。22より褐色強い。締まりあり、きわめて若干の焼土粒及び炭化粒混じる。
- 24 茶褐色土。23より締まり弱い。炭化粒が少量混じる。
- 25 茶褐色土。黄色味がかる。締まり強い。焼土層。
- 26 暗褐色土。粘土粒混じる。焼土粒と炭化粒混じる。直下焼土層あり、上下に炭化粒若干散る。
- 27 26と同じ。
- 28 暗褐色土。26より黒色味強い。焼土粒と炭化粒若干混じる。シルトが薄く散る。
- 29 暗褐色土。締まり弱い。炭化粒若干混じる。
- 30 焼土。若干の炭化粒混じる。
- 31 炭化層である焼土粒及び若干の焼土面が全面に散る。

c-c'

- 1 黒色土。粘土粒を全体に均等に混合する。
- 2 ハードロームと黒色土のブロック。
- 3 川砂状の堆積。
- 4 黒色土。軟質。粘土粒状小ブロックが全体に均等に混合する。
- 5 黒褐色土。(炭まじり層下面にやけ面焼土層)
- 6 山砂。軟質。ほぼ単一層。粘土粒状、小ブロックを全体に近郷に混合する。
- 7 山砂と黒色土の混合。軟質。粘土粒状小ブロックを全体に均等に混合する。
- 8 山砂に少量の黒色土の混合。軟質。粘土粒状小ブロックを全体に均等に混合する。
- 9 山砂に黒色土を含む。軟質。粘土粒状小ブロックを全体に均等に混合する。
- 10 山砂に黒色土を多く含む。軟質。粘土粒状小ブロックを全体に均等に混合する。
- 11 クリーム粘土かたまり。
- 12 暗茶褐色土。軟質のクリームブロック(山砂粒)と全体に地山下層の砂及び黒色土を混合する。

i-i'

- 1 暗茶褐色土。多くのローム粒を不均正に含み部分的に褐色味強い。
- 2 暗褐色土。有機質性強い。ローム粒を不均正に含む。1mm～3mm大のロームブロック散る。
- 3 暗茶褐色土。1より褐色味強い。多くのローム粒を均等に含む。
- 4 暗褐色土。色調は2に地階がやや褐色味強く、明るさにばらつきが見られる。1mm～1cm大のロームブロック微量散る。
- 5 暗褐色土。ローム粒および砂粒を不均正に含み、部分的に褐色味強くなる。
- 6 暗褐色土。多くのローム粒を不均正に含む。2mm～5mmのロームブロック少々散る。
- 7 暗茶褐色土。褐色味強い。1mm～3mm大の焼土ブロック微量散る。
- 8 暗茶褐色土。色調は7よりやや暗い。褐色味やや強く均等にローム粒を含む。
- 9 暗茶褐色土。8より褐色味強く色調は7に近い。多量のローム粒を不均正に含む。
- 10 暗褐色土。多くのローム粒を不均正に含み、部分敵に褐色味強い。
- 11 暗褐色土。有機質性強いが、多くのローム粒を不均正に含み、部分的に明るい。
- 12 暗褐色土。11よりやや褐色味強い。
- 13 暗茶褐色土。やや有機質性強く部分的に暗い。多くのローム粒を不均正に含む。
- 14 暗褐色土。13よりやや褐色味強い。
- 15 暗褐色土。16より有機質性強い。1mm～5mm大のロームブロック散る。
- 16 暗褐色土。14より有機質性強い。多くのローム粒を不均正に含む。
- 17 暗灰褐色土。砂粒、粘土質土、ローム粒などが、不均正に混じりあう。1mm～1cm大のロームブロック多く含む。
- 18 暗褐色土。やや赤味をおびるが有機質性強い。1mm～8mm大のロームブロック微量散る。ややしり弱い。
- 19 暗褐色土。18よりやや褐色味強い。ローム粒を均等に含む。

h-h'

- 1 黒褐色土。1mm～3mm大のローム粒が少量散る。1cm大の焼土粒一個含む。締まりやや弱い。
- 2 暗褐色土。多量のローム粒を不均等に含む。3mmから2cm大のロームブロック多く散る。3に比べ褐色味強い。
- 3 暗褐色土。多量のローム粒を均等に含む。1mmから3cm大のロームブロック多く散る。焼土粒微量含む。
- 4 暗褐色土。色調は3とほぼ同じ多量のローム微粒子を均等に含む。2mmから3cm大のロームブロックがまばらに散る。
- 5 暗褐色土。有機質性強い。ローム粒及び1mm～5mm大のロームブロック均等に散る。土器片一片含む。
- 6 暗茶褐色土。ローム粒多量に含む。5mmから3cm大のロームブロック多く含む。褐色味強い。
- 7 暗褐色土。ローム粒を多量かつ均等に含み、5に比べ褐色味強い。
- 8 暗褐色土。多量のローム粒を均等に含む。14より有機質性強い。1mmから4cm大のロームブロック多く散る。
- 9 暗褐色土。ローム微粒子を多量かつ均等に含むが、7に比べ有機質性強い。色調は5層に似る。
- 10 暗茶褐色土。多量のローム粒子を均等に含む。3mm～1cm大のロームブロックが多く散る。5より褐色味強い。
- 11 黄茶褐色土。ローム粒子及び3cm～5cm大のロームブロックを多量に含む。褐色味非常に強い。
- 12 暗茶褐色土。多量のローム粒子が有機質土に混じる。褐色味強いが6よりやや暗い。
- 13 暗茶褐色土。ローム微粒子を多量かつ均等に含む。
- 14 暗茶褐色土。多量のローム粒を不均等に含む。4に比べ褐色味強い。2mmから1cm大のロームブロック多量に散る。
- 15 暗茶褐色土。多量のローム粒を不均等に含む。14に比してやや褐色味が強い。1mmから8mm大のロームブロックを多量に含む。
- 16 茶褐色土。多量のローム粒及び1mm～5mm大のロームブロックを不均等に含む。締まりはやや弱い。褐色味が強い。
- 17 暗褐色土。多量のローム粒を含むが有機性強い。3cm大のロームブロックを不均等に含む。締りは弱い。
- 18 明茶褐色土。多量のロームブロック(2mm～3cm)を含み、締まりはない。
- 19 明茶褐色土。多量のロームブロック(3mm前後)を含み、締まりはない。

g-g'

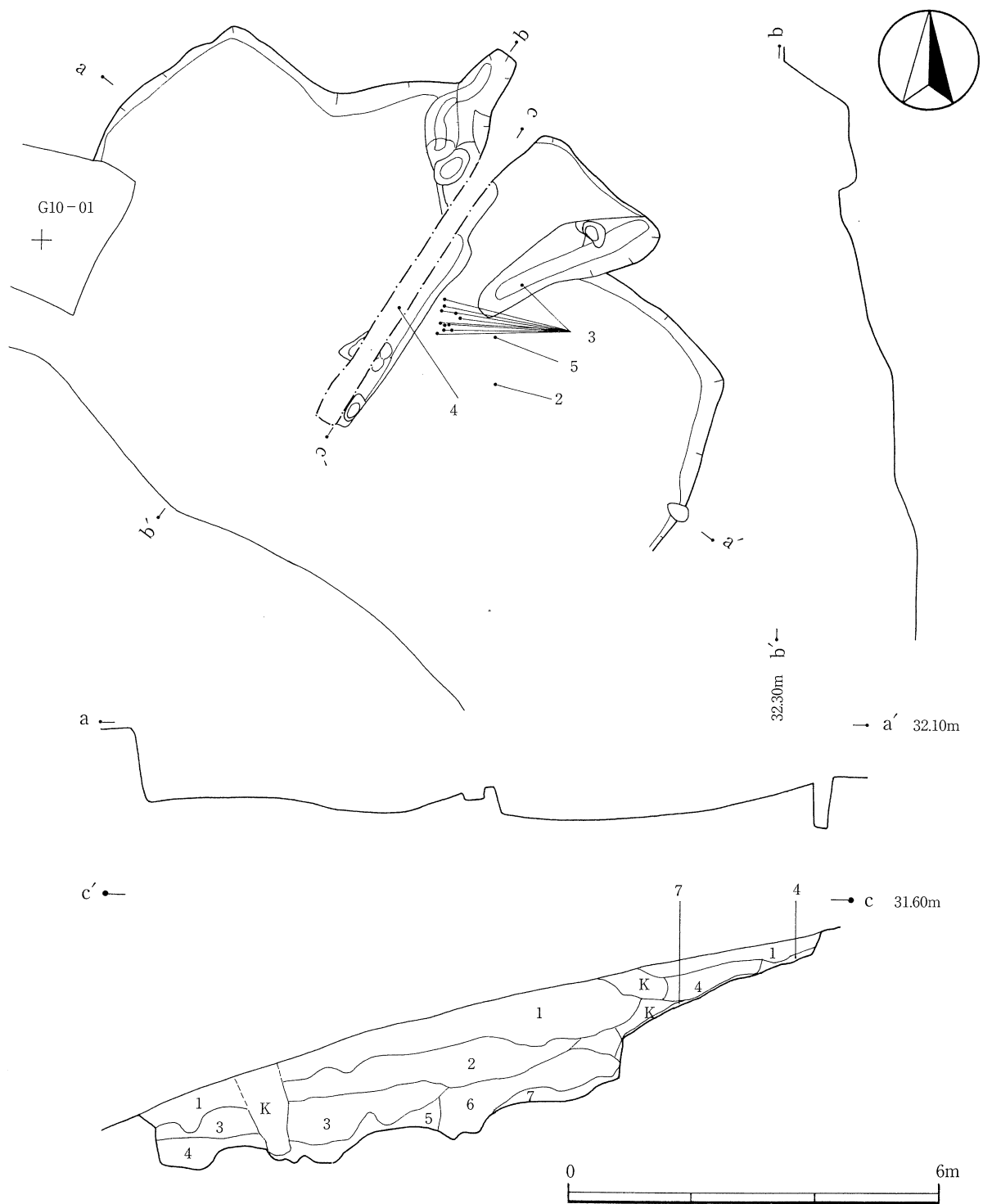
- 1 ハードローム。
- 2 クリーム粘土(暗褐色に近い)。やや暗い。
- 3 砂
- 4 最も明色。ロームのみ。ハードローム状で軟質。
- 5 下層に似るが軟質。
- 6 暗い。ハード大ブロック。ブロックは20cm大以下の締まり有り。

f-f'

- 1 貝殻状に剥落している(天井か)。
- 2 ロームブロックと粘土ブロック(3cm大以下)。明黒褐色塊を含む。
- 3 2層に比べてやや暗色ローム。粘土が小さい。
- 4 貝層(キサコ)。
- 5 2層に比べてやや暗色ローム。ローム、粘土粒が混じる。
- 6 明黒褐色土。細かいローム粒とクリーム粘土粒を主体として含む。
- 7 灰。炭。
- 8 焼土混じり層。焼け面。
- 9 茶褐色の砂状。

a-a'

- 1 暗茶褐色土。ローム粒及び砂粒含む。
- 2 茶褐色土。ローム粒及び3mm大のロームブロック多量に含む。褐色味強い。砂粒散る。
- 3 茶褐色土。色調は2より暗い。ローム粒を不均正に多量含む。
- 4 暗褐色土。やや褐色味強い。ローム粒および1mm～3mm大のロームブロックが散る。
- 5 茶褐色土。4より褐色味強い。ローム粒多量に含む。有機質土不均正に混じる。2mm～1cm大のロームブロック散る。
- 6 茶褐色土。5にくらべやや赤みを帯びる。ローム粒均等に含む。ロームブロック(1cm・4cm)1つつつあり。
- 7 黒褐色土。ローム粒及び1mm～5mm大のロームブロック散る。
- 8 暗褐色土。ローム粒多量に含む。1mm～2cm大のロームブロック散る。
- 9 黒褐色土。ローム粒及び1mm～3cm大のロームブロック散る。7より有機質性強い。
- 10 暗褐色土。ローム粒多く含む。1mm～5mm大のロームブロック散る。7よりやや褐色味強い。
- 11 暗褐色土。多量のローム粒を不均正に含む。2mm～9mm大のロームブロックを多く含む。
- 12 茶褐色土。15より有機質性強い。有機質土少量混じる。
- 13 暗褐色土。ローム粒多く含む。1mm～5mm大のロームブロック多量含む。
- 14 暗茶褐色土。ローム粒多く含む。1mm～5mm大のロームブロック多量含む。13より褐色味強い。
- 15 茶褐色土。褐色味非常に強い。締まりやや弱く有機質土をまばらに含む。
- 16 暗茶褐色土。ローム粒を不均正ではあるが多量に含む。1mm～5mm大のロームブロックを多量含む。14より褐色味強い。
- 17 茶褐色土。ローム粒を多量に含む。1mm～5mm大のロームブロック散る。16より褐色味強い。
- 18 暗茶褐色土。ローム粒を多量ではあるが、不均正に含む。1mm～9mm大のロームブロック多量及び2mm大の有機質土ブロック散る。色調は16に近い。
- 19 暗褐色土。有機質性強い。ローム粒を不均正であるが多く含む。1mm～1cm大のロームブロック多く散る。
- 20 暗茶褐色土。褐色味強いがやや白味をおびる。ローム粒を不均正であるが多量に含む。1mm～3cm大のロームブロック散る。
- 21 暗茶褐色土。ローム粒を不均正に多く含む。1mm～3mm大のロームブロック散る。
- 22 暗褐色土。やや赤味をおびる。ローム粒を多く含む。部分的に褐色味強い。
- 23 暗茶褐色土。ローム粒多量に含み、褐色味強いがやや黄色味おびる。1mm～1cm大のロームブロック散る。
- 24 茶褐色土。ローム粒多く含み、褐色味強い。
- 25 暗茶褐色土。色調は、23に近いが、やや暗い。1mm～1cm大のロームブロック散る。砂粒若干含む。
- 26 暗茶褐色土。色調は25に地階が部分的に褐色味強い。焼土ブロック2個含む。
- 27 赤黒褐色土。炭化土および焼土が混じりあう。
- 28 黄褐色土。砂層。



c-c'

- 1 表土。
- 2 黄褐色土。暗褐色土と砂質の黄灰色土を含む。
- 3 黄褐色土。2に似る。ソフトロームを含む。
- 4 茶褐色土。明るい。暗褐色土を含む。
- 5 褐色土。ソフトロームのブロックを含む。
- 6 黄褐色土。灰褐色土と暗褐色土を含む。
- 7 軟質のローム土塊。

第233図 SX-21遺構実測図

(5) 自然遺物 (第234、235図、第101、102表)

分析の方法

釜神遺跡では4ヶ所の遺構から貝層が検出されている。貝層は、ブロックないし層位ごとに採取されており、これらのサンプルについて10mm・4mm・1mmメッシュの試験用フルイを用いて、水洗選別を行った。

貝類組成の特徴

SK-14

2層・3層ともに二枚貝綱のみが出土しており、組成的には同様の傾向を示している。ハマグリとシオフキガイが主体種であり、遺構全体ではハマグリが63%、シオフキガイが32%を占める。ハマグリ of 殻高は、2層では34mm～74mmまでの広範囲に分布するが、60mm前後にピークが認められる。3層では20～24mmの個体が混じるものの、全体としては40mm～64mmの範囲に分布が集中し、50mm前後にピークが認められる。

SK-34

最も小規模な貝層である。巻貝2種、二枚貝3種が同定された。最小個体数による出現率ではイボキサゴが92%を占めており、見かけ上は主体種と捉えられるが、試料数も少なく、貝層全体としてはこの種が選択的に採取されたことは示さない。

SK-35

ほぼイボキサゴの単一種で構成される。

SX-15

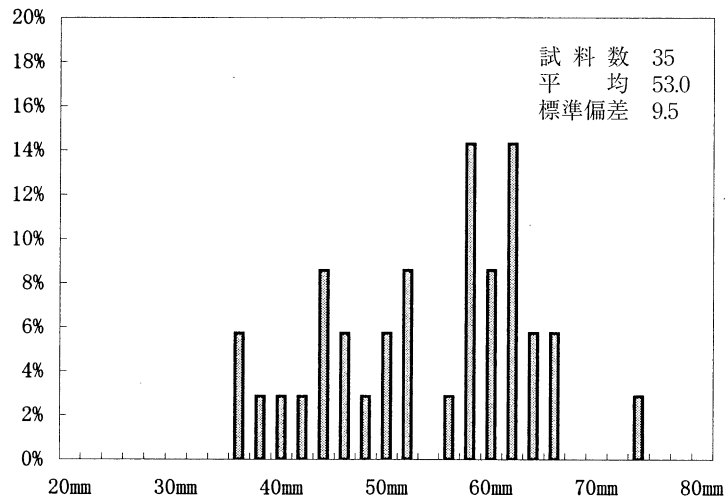
貝ブロックA・Bともにイボキサゴがほぼ100%を占める。わずかに含まれるウミニナやアラムシロガイ、二枚貝の幼貝は、イボキサゴを捕獲する際の混入種と考えられ、採取方法に起因するものと考えられる。フジツボや小礫が含まれる点についても、同様の理由によるものであろうか。

なお、わずかに含まれたハマグリのうち、殻高を計測できたのは2点(右殻)のみであり、その計測値は54～58mmの範囲である。

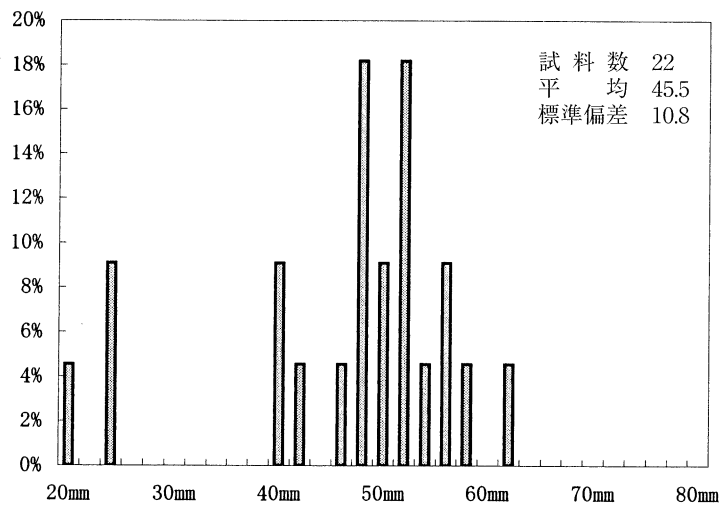
貝層の時期

出土遺物は、SK-34より弥生後期の甕下半部が検出され、SX-13の周溝に上部が切られている。SX-15は、SX-13の周溝を切り、土師器杯が4点見られ、10世紀末～11世紀初頭頃の時期と考えられている。SK-14・15とSK-35からは、時期を推定できる遺物は認められていないが、覆土出土の小片から、少なくとも弥生時代後期以降の所産である。

SK-14-2



SK-14-3



第234図 ハマグリ殻高分布図 (SK-14)

第101表 貝サンプル内容物組成

遺構No.	層位	総重量 (g)	フルイ水洗後 残留物重量 (g)	土壌重量 (g)	混土率 (%)	貝殻 破碎率 (%)	貝殻 (g)	フジツボ 点 (g)	カシバン 類 点 (g)	炭化物 (g)	土 器 点 (g)	礫 点 (g)
SK-14	2	3,240	2,750	490	15.1%	20.5%	2,187.0			0.2	1(+)	57(0.5)
	3	1,930	1,160	770	39.9%	19.9%	929.1			0.6	7(0.1)	18(0.6)
	計	5,170	3,910	1,260	24.4%	20.3%	3,116.1			0.8	8(0.1)	75(1.1)
SK-34	14	700	160	540	77.1%	60.1%	63.8			(+)	23(3.9)	53(2.8)
SK-35	4	825	728	98	11.9%	3.7%	700.9					6(+)
SX-15	ブロックA	8,400	6,170	2,230	26.5%	14.0%	5,309.2	42(0.9)	2(0.1)	1.0	12(8.0)	168(11.5)
	ブロックB	1,720	630	1,090	63.4%	7.6%	581.9	3(+)		(+)	1(+)	183(13.4)
	計	10,120	6,800	3,320	32.8%	13.4%	5,891.1	45(0.9)		1.0	13(8.0)	351(24.9)

第102表 軟体動物検出数一覧

遺構 No.	層位	腹足綱			二枚貝綱				幼 貝			穿孔貝		
		イボキサゴ	ウミニナ	アラムシロガイ	アサリ	カガミガイ	ハマグリ	シオフキガイ	イボキサゴ	マガキ	ハマグリ	シオフキガイ	ハマグリ	シオフキガイ
					L R	L R	L R	L R		L R	L R	L R	L R	L R
SK-14	2				4 1	3 4	91 89	31 34						
	3				2	1 1	44 40	34 24						
	計				6 1	4 5	135 129	65 58						
SK-34	14	76	1		4 5		1	2 6						
SK-35	4	950		3				1	10		1			
SX-15	ブロックA	9,281	25	21			5 8			1 3	30 21	10 5	2*	1* 1
	ブロックB	950	1	6			1 5	1			1 1			
	計	10,231	26	27			6 13	1		1 3	31 22	10 2	2*	1* 1

*は幼貝

出土軟体動物種名一覧

軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

腹足綱 Class Gastropoda

原始腹足目 Order Archaeogastropoda

ニシキウズガイ科 Family Trochidae

イボキサゴ *Umbonium moniliferum*

中腹足目 Order Mesogastropoda

ウミニナ科 Family Potamididae

ウミニナ *Batillaria multiformis*

新腹足目 Order Neogastropoda

ムシロガイ科 Family Nassariidae

アラムシロガイ *Hinia festiva*

二枚貝綱 Class Bivalvia

翼形目 Order Pteriomorpha

イタボガキ科 Family Ostreidae

マガキ *Crassostrea gigas*

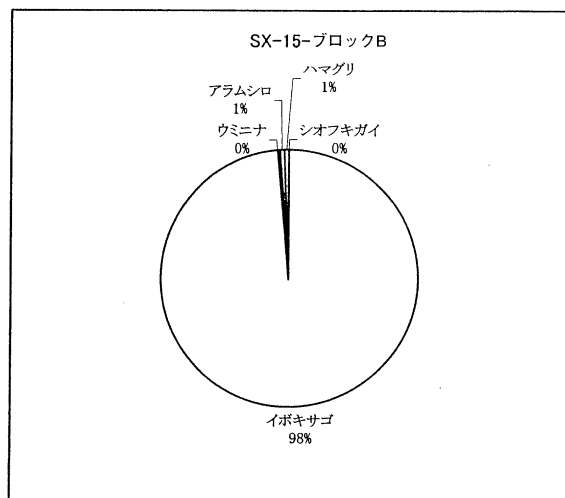
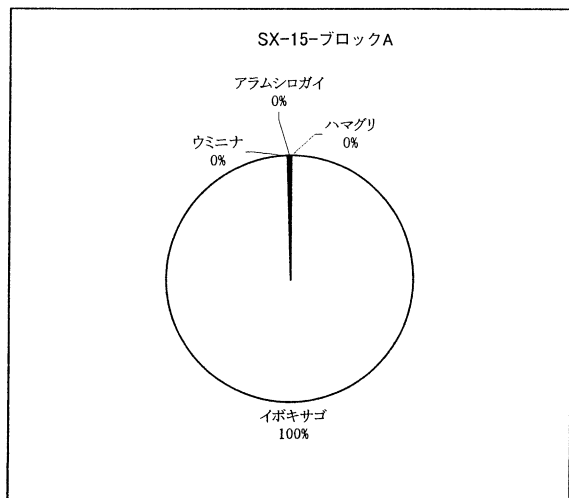
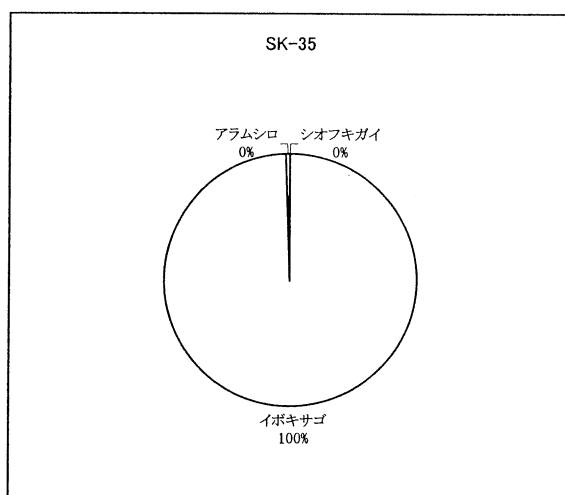
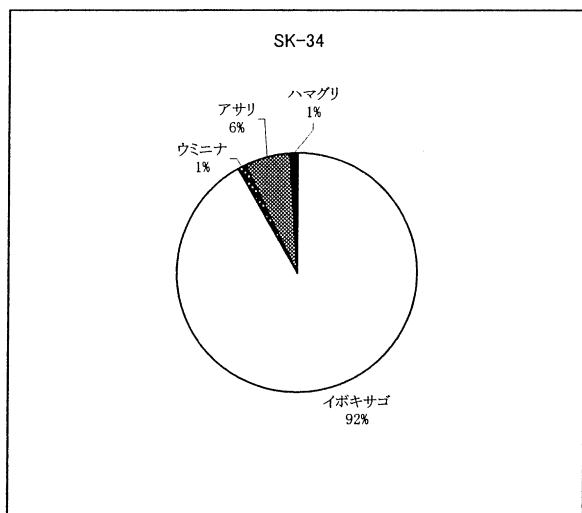
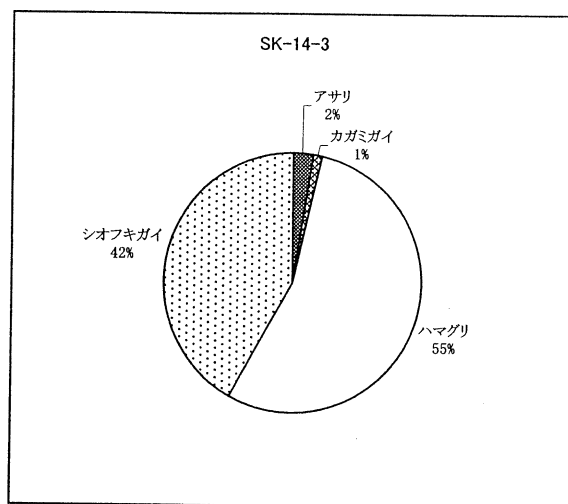
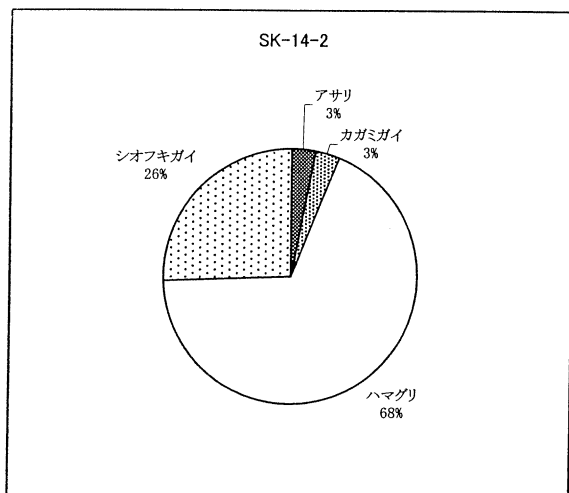
異歯目 Order Heterodonta

マルスダレガイ科 Family Veneridae

アサリ *Ruditapes philippinarum*カガミガイ *Dosinorbis japonicus*ハマグリ *Meretrix lusoria*

バカガイ科 Family Mactriidae

シオフキガイ *Mactra veneriformis*



第235図 貝類組成図 (SX-14、34、35・SK-15)

(6) 金属製品等

青銅製品・鉄製品

SI-70-7 銅製釧? 帯状の両端を欠損しているものの、原形をほぼ想定できる。一端が切れる環状を呈し、外径は3.9cm、幅1.1cm、穿孔部は ϕ 2mm、重量5.8gを測る。穿孔は環状の切れる端部に1ヶ所認められるのみで、対をなす部位には、欠損ヶ所はあるものの、穿孔の痕跡は全く認められない。

SI-81-3 鎌。 カマド内火床面付近から出土している。基部から刃部の一部が遺存する。現存長11.7cm、刃部幅2.7cm、重量48.9gを測る。

SI-83-1 絞具。 8C後半頃? 75.8g カマド火床面付近。完形。全長6.7cm、幅3.8cm～5.7cm、軸金は刺金側が5mm、軸側は幅16mm、厚さ5.2mm、軸金の穿孔部は ϕ 6mm、重量は75.1gを測る。不明瞭ではあるが、刺金の先端部は平坦に整形されている。軸金、刺金共に断面形状は明瞭ではない。軸金の穿孔部は円形を呈する。

SI-87-7 不明品。棒状の部位の両端部が板状を呈し、板状部位には2ヶ所ずつ ϕ 3.6mmの穿孔部が認められる。全長は11.2cm、棒状部5mm $\times$ 7mm、板状部5.3cm $\times$ 2.0cm $\times$ 2.2mm、重量は30.4gを測る。

SI-87-8 刀子。 刃部中央部のみ遺存。現存長4.45cm、幅0.9cm、厚さ4.9mm、重量15gを測る。

SI-87-9 鉄鏃。 茎部が遺存。現存長3.5cm、幅8.9mm、厚さ3.0mm、重量12gを測る。

SI-110-7 U字型鋤先。 床面から出土している。完形。全長13.2cm、幅10.5cm、刃部の厚さ9mm、耳部長1.4cm、刃部長4.9cm、耳部端から刃部の溝までの長さ、つまり木製部に装着の際に接触する奥行きの長さは8.95cm、溝は5～8mm、重量は178.1gを測る。

SI-129-24 青銅製釧? 現存長2.3cm、幅0.7cm、厚さ2mm、重量0.5gを測る。若干の反りを持った板状製品であり、環状を呈すると見られる。小口面は一方を欠損する。復元値は内径4.0～4.3cmを測る。

SI-150-8 板状青銅製品。 現存長1.55mm、厚さ1mm、穿孔部 ϕ 1.5mm、重量0.7gを測る。原形は不明。

SI-190-4 鎌。 床面からやや浮いたレベルから出土している。鎌と見られるが、基部を欠損している。一部に紐状の繊維が遺存している。現存長8.8cm、幅2.2cm、厚さ2.0mm、重量30.7gを測る。

SI-195-7・8・9 不明品。 SI-195からの出土であるが、遺構の重複関係から、SX-199に伴う遺物と考えられる。

SX-08 刀子。 刃部から茎部の一部が遺存。片関であるが形状は不明。現存長5.4cm、幅0.9cm、厚さ3mm、重量18gを測る。

SX-18-8 鎌。 刃部先端を欠損する。現存長13.0cm、刃部幅2.2cm、厚さ3mm、重量46.9gを測る。

第265図3 鉄鏃。 遺構外の出土である。直径3.3cm、幅1.55cm、厚さ1.5mm、重量2.9gを測る。

第265図4 刀子。 遺構外の出土である。完形。片関。長さ9.3cm、幅1.06cm、厚さ2mm、重量12.7gを測る。茎部に木質の遺存部位が、刃部に布状の繊維束が僅かに認められる。

ガラス玉

SI-129-22 ガラス玉 完形。色調は紺。表面は滑らかであるが、気泡が多く認められる。 $\phi 0.3\text{mm}$ ほどの比較的大きな気泡も少量認められる。孔は直線的に穿たれているが、両端部において僅かに広がる。直径 3.9mm 、高さ 2.1mm 、孔 $\phi 1.4\text{mm}$ を測る。

8. 土坑（第152、153、236～257図、第103表）

50基検出され、機能は陷穴や土壇墓など、時期は縄文時代から近世と幅広く様々であるが、機能や時期が判明した土坑は少ない。主な内容や大きさについては、第103表を参照されたい。このうち、SK-06は土坑がいくつか切り合っていると考えられ、SX-04の一部ともみられ、7.その他の遺構と遺物（SX-04）中で櫻井敦史氏が詳述している。また、SX-04関連では、SK-08～12も含まれている。SK-12はSB-01の掘立柱建物跡内に存在する。貝が出土した土坑はSK-34と35で、10.自然遺物で鶴岡英一氏が分析している。焼土のある土坑はSK-04、（SK-06）、SK-44と少ない（SK-18は焼土が東側に隣接するが、関連性は不明である）。底部にピットのみられる土坑は、SK-04、05、（06）、07、09、10、12、19、20、27～29、30、33、35、36、38、48、49で、陷穴はSK-27、（32）、柱穴の可能性のある例がSK-45、48、49、土壇墓がSK-19、24、31、33、39である。埋め戻しの可能性がある土坑は、SK-19、24、31、33、39である。覆土に粘土粒を含む例は、SK-07、24、焼土粒を含む例は、SK-08、19、26、34、44である。

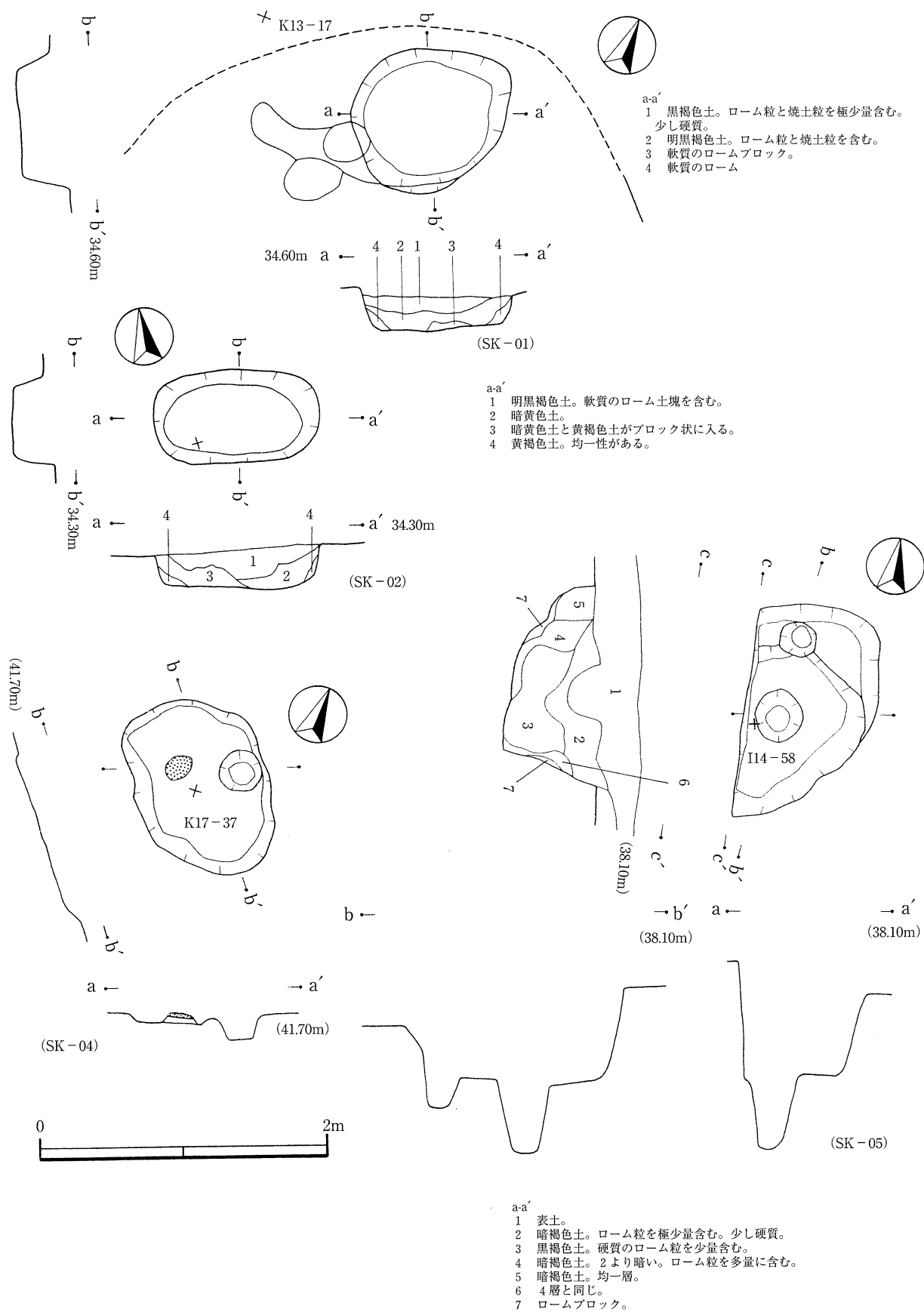
出土遺物は、SK-02が足高台付坏と高台付碗、SK-03が高台付碗、（SK-06がかわらけ6点）、SK-07が甕2、SK-08が碗2、SK-12がかわらけ1、SK-15が須恵器甕片1、SK-18も須恵器甕片1、SK-19が石斧1、SK-21が土器片錘1、SK-24がかわらけ1、SK-34が甕1、SK-42が高坏1、SK-50より弥生土器甕3、壺1、鉢2他である。

土壇墓の時期については、出土遺物より、SK-19は弥生後期、SK-24は平安時代後期と考えらるが、他については不明である。

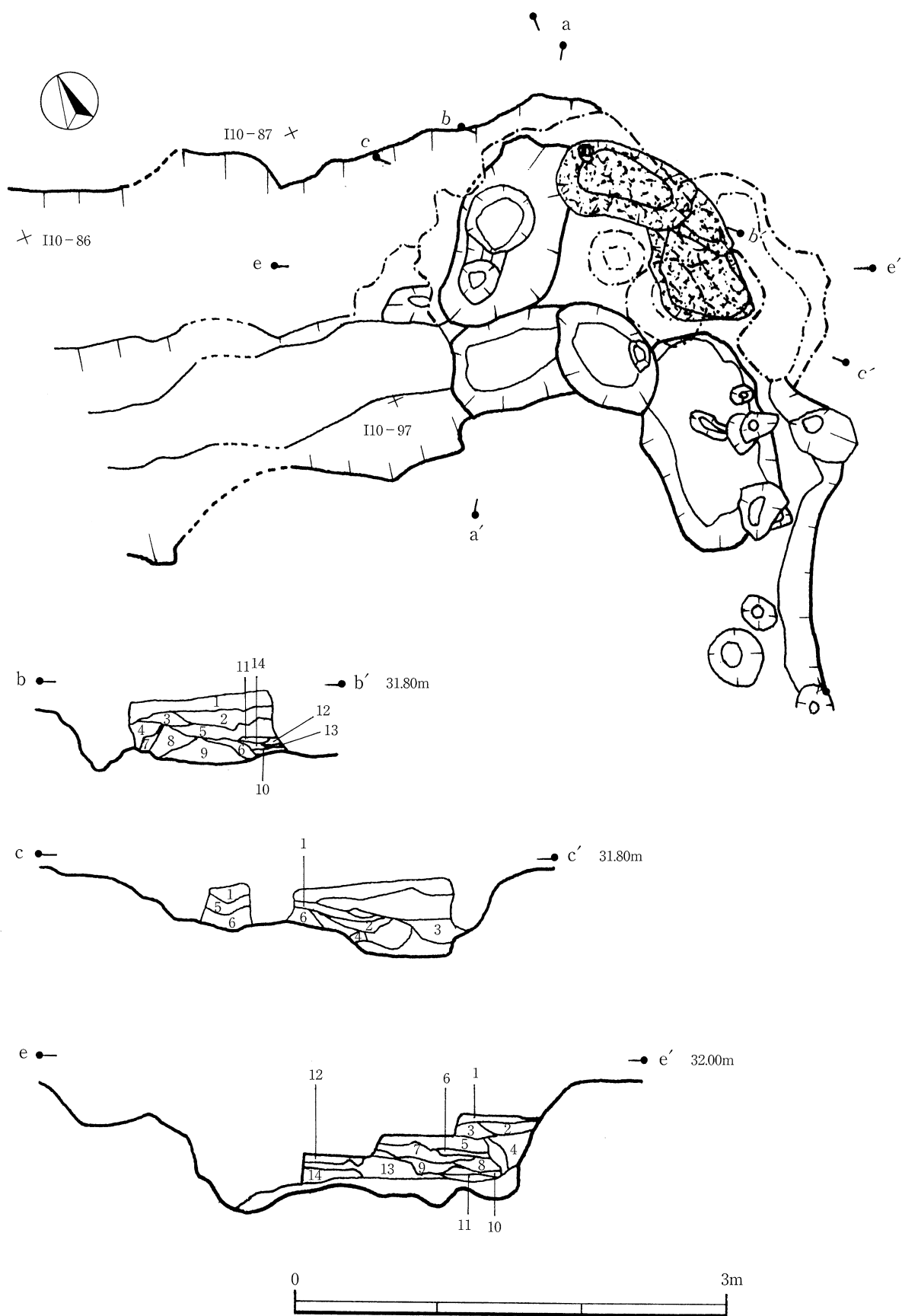
第103表 土坑一覧表

() は推定、単位 m

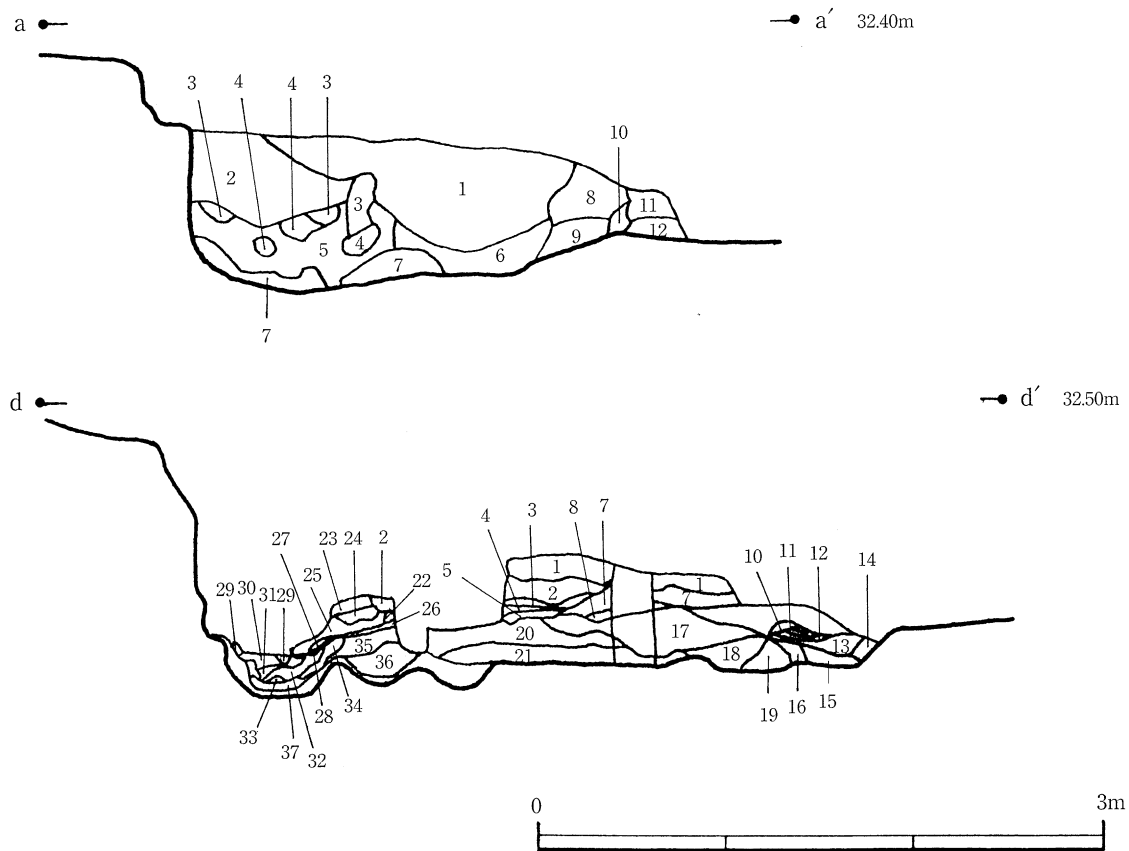
番号	土坑 名称	挿図 番号	旧土坑 番号	規模			主軸方向	用途	その他	主要グリッド
				上端	下端	深さ				
1	SK-01	第236図	SK-01	1.14×1.00	0.93×0.83	0.33	N-40°-E		不整円形	K13-17
2	SK-02	第236図	SK-02	1.15×0.66	0.96×0.49	0.31	N-80°-W		長円形 足高台付坏、高台付塊	k13-14
3	SK-03	第243図	SK-03	2.46×1.77	0.72×0.56	1.90	N-31°-E		不整長円形 高台付塊	L15-43
4	SK-04	第236図	SK-04	1.29×0.92	1.16×0.77	0.08	N-52°-W		不整長円形、底部に焼土。東側にビット1本	k17-37
5	SK-05	第236図	SK-05	1.48×0.90	1.00×0.68	0.83	N-5°-E		不整円形 (西側は未調査) ビット2本	I14-58
6	SK-06	第237図	SK-06	—	—	—	—		炉を3基もつ。SX-04内 かわらけ6点出土、土坑の集合体	I0-88
7	SK-07	第244図	SK-07	3.35×1.17	3.16×0.89	0.27	N-87°-E		長方形 南側東にビット1本。覆土に粘土粒を含む。甕2	k2-26
8	SK-08	第243図	SK-08	1.12×0.90	0.73×0.64	0.65	N-80°-W		不整円形 覆土最上部に焼土塊を含む。塊1	I17-17
9	SK-09	第242図	SK-09	0.97×0.78	0.73×0.42	0.53	N-80°-E		不整長円形 西側にビット等がある。砂岩出土。	I11-06
10	SK-10	第242図	SK-10	1.03×0.98	0.55×0.42	0.38	N-90°-E		不整長方形 北側の立ち上がり3段。底部に細長いビット。	I11-04
11	SK-11	第242図	SK-11	1.25×0.79	1.05×0.49	0.36	N-64°-W		不整長円形 北側と南側の外側に小ビット2本ずつ存在。	I11-03
12	SK-12	第242図	SK-12	0.73×0.57	0.62×0.36	0.18	N-80°-W		隅円長方形 南西側隅に浅いビット有り。かわらけ1	I11-10
13	SK-13	第244図	SK-13	0.84×0.66	0.72×0.56	0.80	N-88°-E		不整長円形 SD-02に近接。	H12-74
14	SK-14	第244図	SK-14	0.41×0.34	0.18×0.12	0.46	N-80°-W		不整円形 ビット状である。	k13-70
15	SK-15	第245図	SK-15	0.86×0.74	0.66×0.51	0.45	N-80°-E		長円形 須恵器甕1	J12-29
16	SK-16	第245図	SK-16	0.64×0.72	0.60×0.45	0.37	N-3°-W		不整円形	J12-69
17	SK-17	第245図	SK-17	1.11×0.84	0.76×0.55	0.36	N-4°-W		不整長円形	J12-89
18	SK-18	第245図	SK-18	0.83×0.74	0.69×0.61	0.15	N-76°-E		円形 東側に焼土ビット(炉?)が隣接、須恵器甕片1	J13-08
19	SK-19	第246図	SK-19	2.39×0.59	2.28×0.43	0.56	N-31°-E	土墳墓	隅円長方形、木棺痕有り、覆土上部に焼土粒を多く含む。石斧1	K10-17
				2.37×0.74	0.97×0.69	0.98	木棺痕		北側内部にビット1本有り。	
20	SK-20	第246図	SK-20	2.78×1.13	2.21×0.66	0.40	N-35°-E		不整長円形 北側立ち上がりは2段。縄文土器出土。	K10-79
21	SK-21	第245図	SK-21	2.92×1.53	2.78×1.12	0.46	N-50°-E		不整瓢箪形 北側と南側に分かれ南側が深い。土器鉢1	k10-60
22	SK-22	第245図	SK-22	1.62×0.87	1.23×0.66	1.11	N-40°-W		不整長円形 底部は隅円方形。	K10-68
23	SK-23	第245図	SK-23	0.88×0.83	0.96×0.74	0.40	N-13°-E		円形	K10-56
24	SK-24	第245図	SK-24	1.09×1.05	0.73×0.64	0.45	N-58°-E	(土墳墓)	不整円形 覆土に粘土を含む。埋め戻し。かわらけ1	L11-17
25	SK-25	第247図	SK-25	1.62×0.85	1.19×0.64	0.82	N-53°-E		長円形	k10-38
26	SK-26	第247図	SK-26	0.77×0.81	0.56×0.58	0.37	N-10°-E		円形 底部付近に焼土粒がみられる。	J11-24
27	SK-27	第248図	SK-27	1.52×0.64	1.54×0.39	0.52	N-41°-E	陥穴	不整長円形 底部にビット3本。北側はオーバーハング。	J10-30
28	SK-28	第248図	SK-28	1.87×1.14	1.30×0.53	0.86	N-83°-E		不整隅円長方形 底部東側に小ビット1本。外側もある。	I9-24
29	SK-29	第248図	SK-29	2.68×1.68	2.10×1.40	0.27	N-13°-E		不整長円形 南側ほど深い。ビット2本有り。	J9-38
30	SK-30	第249図	SK-30	2.55×2.43	2.34×2.05	0.93	N-30°-W		隅円方形 底部は平坦。床の南西側に小ビット有り。	J9-32
31	SK-31	第251図	SK-31	3.61×1.67	3.14×1.48	1.32	N-1°-W	土墳墓	隅円長方形 木棺痕有り。	K8-74
				3.14×0.77	2.94×0.55	0.78	木棺痕			
32	SK-32	第250図	SK-32	1.20×0.68	0.96×0.44	0.56	N-85°-E	(陥穴)	長円形 底部中央にビット2本有り。	J7-23
33	SK-33	第250図	SK-33	2.90×1.23	2.69×1.03	0.22	N-8°-W	(土墳墓)	長方形 中央寄りに小ビット1本有り。	K8-53
34	SK-34	第252図	SK-34	2.39×2.16	2.06×1.80	0.89	N-8°-W		円形 上部はSX-13に切られる。下層に少量の焼土粒を含む。貝も検出。甕1	J6-48
35	SK-35	第252図	SK-35	2.48×1.24	2.27×0.99	0.30	N-36°-W		不整長円形 小ビット2本。東側に貝がみられる。	L7-21
36	SK-36	第253図	SK-36	2.26×1.44	2.12×1.17	0.08	N-90°-E		不整長円形 底部にビット7本。南西外側に1本。	K7-75
37	SK-37	第253図	SK-37	2.50×0.74	2.31×0.48	0.42	N-43°-W		長円形	S6-34
38	SK-38	第253図	SK-38	2.59×2.43	1.55×0.49	0.36	N-49°-W		長円形 底部西側が2段で、ビット1本も存在する。	J6-46
39	SK-39	第254図	SK-39	2.81×1.80	2.25×1.27	0.87	N-87°-W	(土墳墓)	不整隅円長方形 上部立ち上がりは段がある。埋め戻し。	I7-44
40	SK-40	第255図	SK-40	1.53×1.39	1.17×1.14	0.42	N-36°-W		胴張り隅円長方形 北側と南側は2段	I6-60
41	SK-41	第254図	SK-41	1.68×1.27	1.21×0.96	0.79	N-90°-E		不整円形	J6-02
42	SK-42	第255図	SK-42	2.37×0.63	2.29×0.29	0.21	N-60°-E		不整長円形 北側と南側は2段の立ち上がり、高坏1	I8-01
43	SK-43	第255図	SK-43	2.74×1.27	2.53×0.99	0.43	N-67°-W		隅円長方形	G9-19
44	SK-44	第256図	SK-44	3.05×1.56	2.75×1.27	0.35	N-60°-E		胴張り隅円長方形 北側に焼土がある。覆土下層にも焼土有り。	G8-37
45	SK-45	第254図	SK-45	1.13×0.84	0.85×0.63	0.96	N-29°-W	(柱穴)	不整隅円長方形 中央にビット有り。	G8-17
46	SK-46	第256図	SK-46	2.87×1.73	2.76×1.56	0.21	N-80°-W		不整隅円長方形 外側の南に小ビット3本有り。	G8-46
47	SK-47	第257図	SK-47	2.28×1.47	1.07×0.60	0.86			不整長円形 底部は細長い。	F8-21
48	SK-48	第257図	SK-48	1.24×0.97	1.03×0.75	0.57		(柱穴)		F8-37
49	SK-49	第257図	SK-49	1.21×0.82	0.96×0.69	0.44	N-43°-W	(柱穴)	不整長円形 中央にビット有り。	F8-36
50	SK-50	第152図	SI-168	4.58×4.32	1.25×0.98	0.68	—		不整円形 弥生土器、甕(9)、壺3、鉢1	H7-76



第236図 01、02、04、05号土坑 (SK-01、02、04、05) 実測図



第237图 06号土坑 (SK-06) 实测图



SK-06

a-a'

- 1 暗茶褐色土。若干焼土粒混入。粘性としりみり欠く。
- 2 暗茶褐色土。1より明るい。粘土粒混入。
- 3 粘土ブロック。(茶色)
- 4 粘土ブロック。(クリーム色)
- 5 暗茶褐色土。粘土粒含む。粘性有り。
- 6 暗茶褐色土。粘性ややあり。しりみり欠く。粘土ブロック。
- 7 暗茶褐色土。粘土(クリーム色)混合層。
- 8 暗茶褐色土。若干の焼土粒混入。粘性しりみり欠く(11より明るい)。
- 9 暗茶褐色土。粘性やや有り。
- 10 粘土ブロック。(クリーム色)
- 11 暗茶褐色土。若干焼土粒混入。粘性しりみり欠く(1と類似)。

SK-06

b-b'

- 1 暗茶褐色土(黄白色粘土粒を多く含む。)焼土粒少し含む。ややしりまる。
- 2 暗茶褐色土(黄褐色土粒を少し含む)。
- 3 暗茶褐色土(黄白粘土。やや暗褐色の土を含む)。
- 4 暗茶褐色土(黄白粘土。やや暗褐色の土を含む。)焼土粒多く含む。
- 5 明茶褐色土(黄白粘土。黒褐色土粒を含む)。
- 6 黄白砂質土(白色粘土少し含む。明褐色土を含む)。
- 7 暗褐色土(明褐色土少し含む)ややしりまる。
- 8 暗褐色土(明褐色土7より多く含む)ややしりまる。
- 9 明褐色土(黄白粘土。黄白砂を少し含む)しりまっている。
- 10 黄白粘土(明褐色土を少し含む)。
- 11 暗褐色土(焼土ブロック層)。
- 12 暗褐色土(焼土細粒を多く含む)。
- 13 炭
- 14 暗褐色土(炭粒を少し含む。焼土粒を少し含む)。

第238図 06号土坑(SK-06)土層セクション実測図

SK-06

e-e'

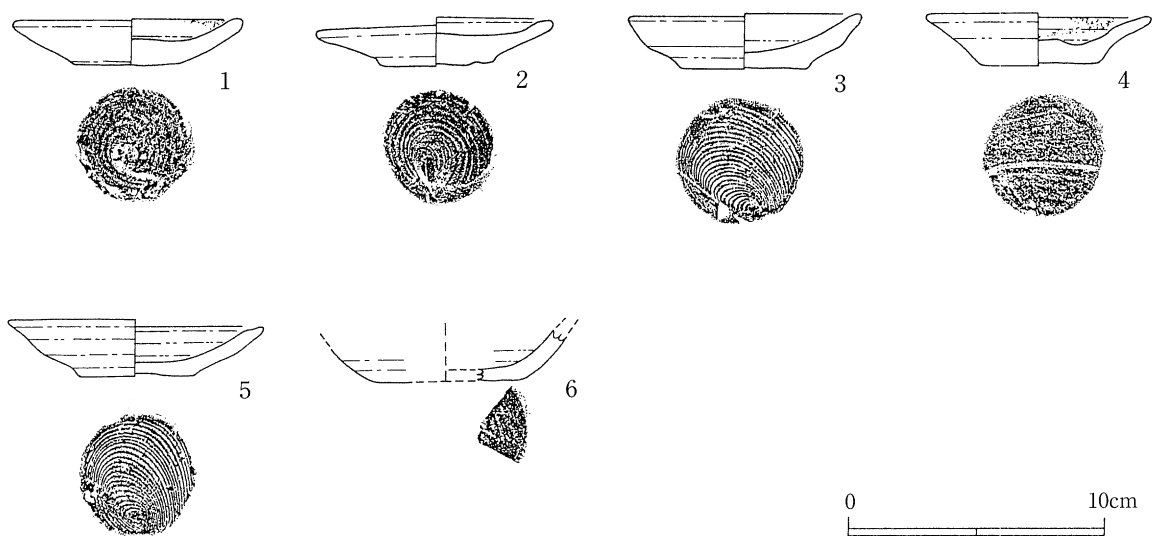
- 1 明黒褐色土。黄色状土塊を全体に混合。焼土なし。
- 2 明黄褐色土（黄色）粘土。黒色粒混じり。
- 3 明黒褐色土。粘性とし砂を少量含む。焼土なし。
- 4 明黒褐色土。黄色粘土のブロック混じり。焼土なし。
- 5 黄色～明灰褐色土。山砂。粘性。若干の炭粒と焼土粒を混合する。
- 6 暗灰褐色土～暗褐色土。粘土質土。
- 7 焼土ブロックを多量に含む（特に下層）。炭とし砂を全体に混合する。
- 8 焼土ブロックを多く含む。暗灰褐色土。
- 9 炭とし灰層。若干の焼土を含む。
- 10 焼土。炭とし砂。焼土を粒状に混合する（堆積層）。
- 11 焼土。
- 12 暗灰褐色土。黄色が強い。若干の焼土と炭粒を含む。
- 13 山砂層。ただし、暗灰褐色土～明灰褐色土を、染み状に混合する。焼土なし。
- 14 暗灰褐色土層。黄色が強い。若干の焼土と炭を含む。

d-d'

- 1 暗灰褐色土層。同色層の中では、最も明白色（明灰褐色）粘土（山砂）を粒状とし小ブロックで多量に含む。焼土は、ほとんどなし。
- 2 17層に似る。
- 3 明灰褐色土層。ブロック状。20層に似る。ただし焼土粒混じり。
- 4 焼土層。
- 5 灰で焼土。
- 6 炭層。
- 7 明黒褐色土層。焼土なし。粒白色粘土（山砂）を染み状にし小ブロックで混合。
- 8 黒褐色土。焼土なし。
- 9 暗灰褐色土。17層に似るが、焼土（粒状）が多い。
- 10 炭層（粒状のブロック）。
- 11 焼土層。
- 12 炭層。
- 13 暗灰褐色土層。焼土なし。粒状の山砂が多い。
- 14 暗灰褐色土層。焼土なし。
- 15 暗灰褐色土層。焼土多し。
- 16 炭層。
- 17 焼土ブロック（2 cm以下）を多量に含む。黒色土をブロック状に混合。暗灰褐色土層。
- 18 焼土ブロックを若干含む。山砂をブロック状に含む。
- 19 地山。明灰褐色土。
- 20 明灰褐色土層。ただし地山ではない。全体に暗灰褐色土がブロック状に混合。
- 21 暗灰褐色土層。炭層は、いづれも粒状灰混じり。
- 22 山砂。
- 23 明黄褐色土。黒黄色土を、ブロック状に含む。
- 24 焼土ブロック（2 cm以下）を多量に含む。黒色土をブロック状に混合。焼土含まない。
- 25 24に似るが、焼土ブロックと炭及び灰が多い。
- 26 炭層。
- 27 炭層。
- 28 24に似る（明灰白土。焼土化されている）。
- 29 焼土ブロック。
- 30 炭を多く含む。焼土ブロックを含む。
- 31 炭層。
- 32 24に似る。明黄白土。
- 33 明灰褐色土。
- 34 暗灰褐色土（やや粗い。）。
- 35 明灰褐色土層。ただし地山ではない。全体に明灰褐色土とブロック状に混合。
- 36 20に似るがやや密である。

c-c'

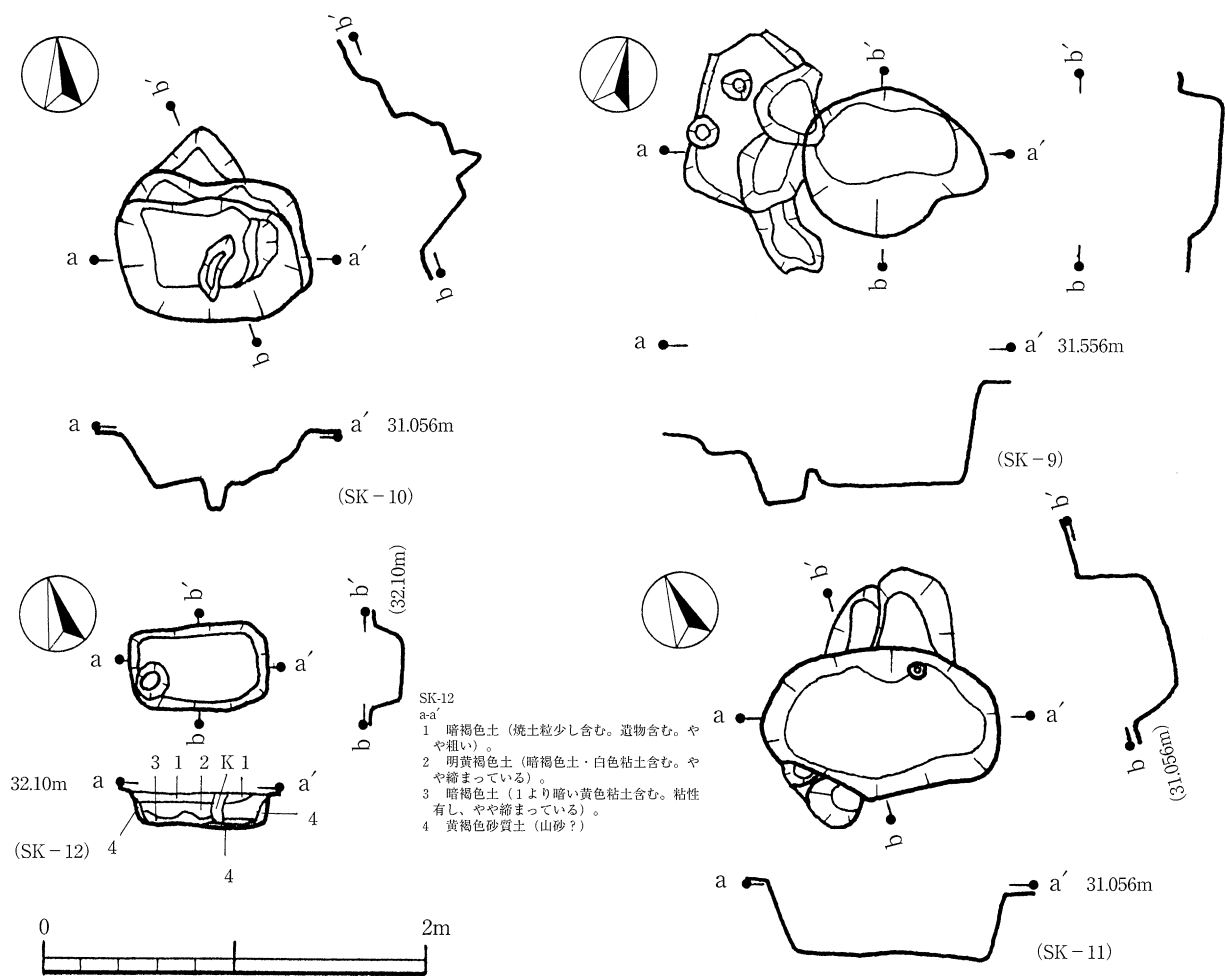
- 1 焼土ブロック層。ただし、暗灰褐色層を地層とし、焼土は混じり。
- 2 炭灰層。
- 3 明黒褐色土。山砂、ローム粒を多く含む。
- 4 炭灰混じりの黄色土。
- 5 暗灰褐色土層。粒状の山砂、焼土粒を多く含む。
- 6 明灰褐色土層。山砂と粘土を多く含む。



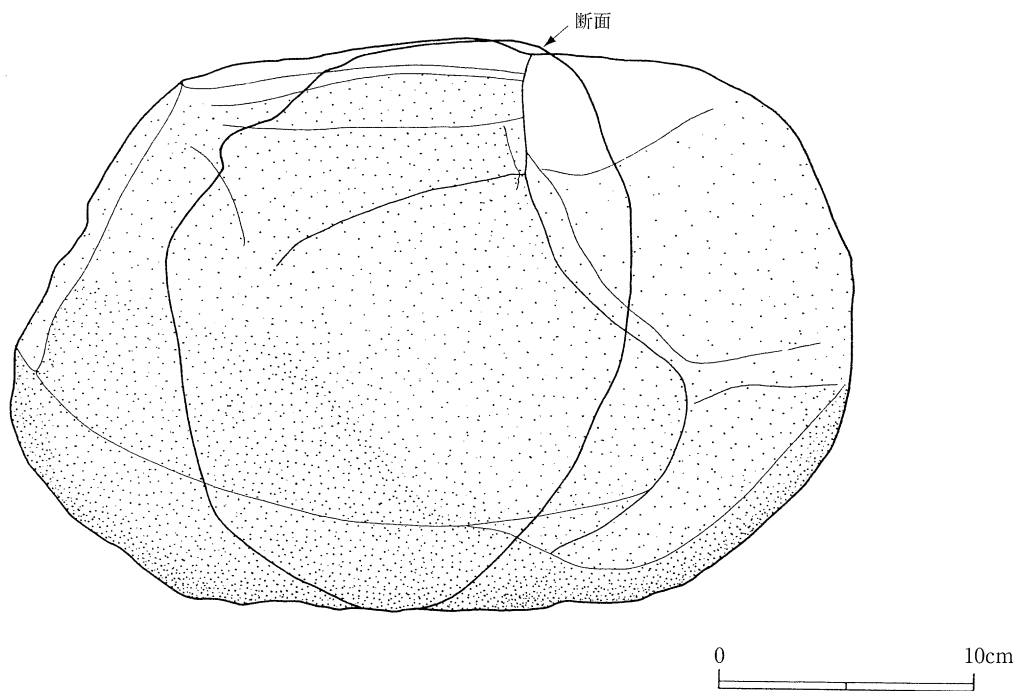
第239图 06号土坑 (SK-06) 出土遺物実測図



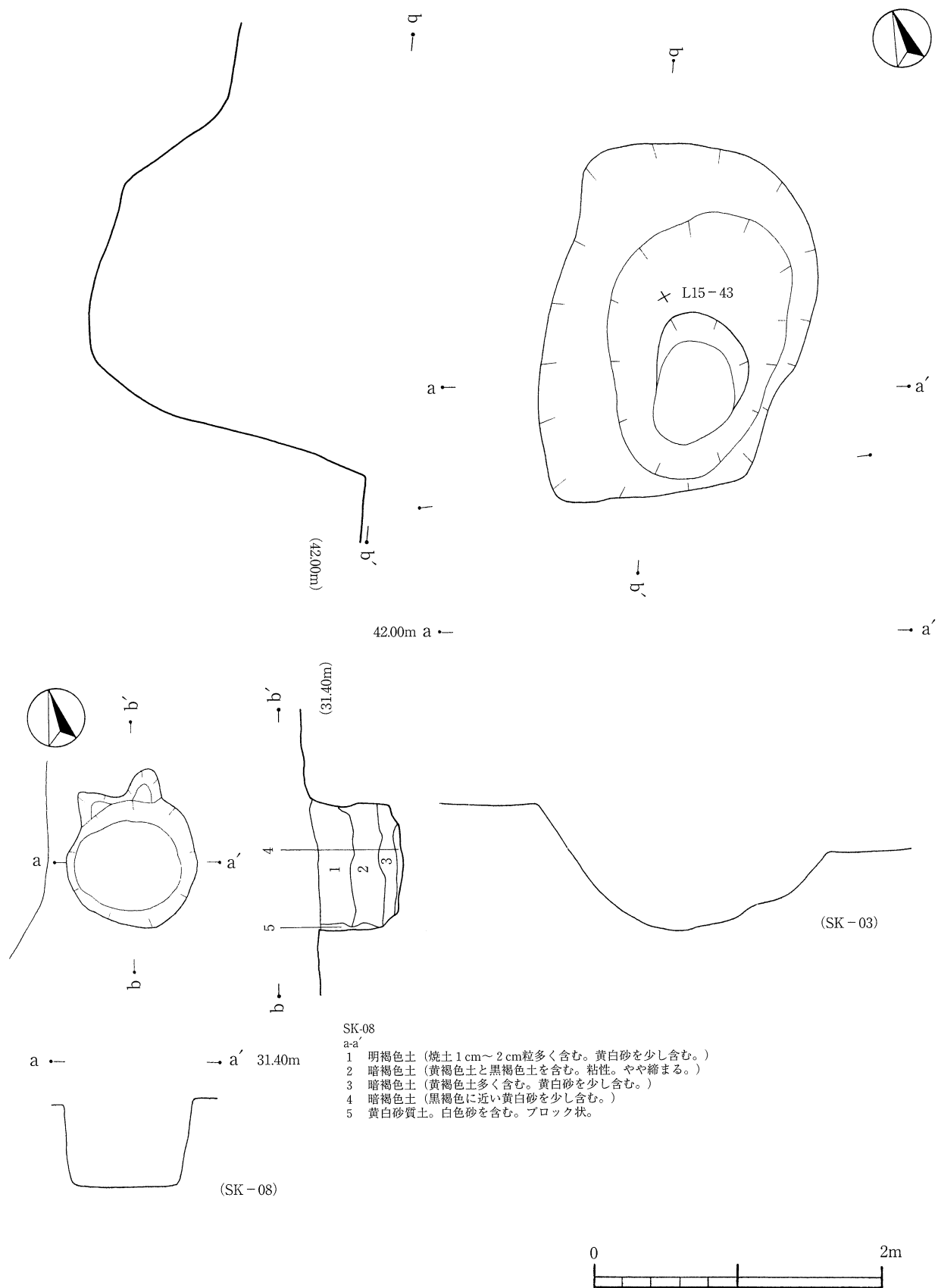
第240图 07号土坑 (SK-07) 出土遺物実測図



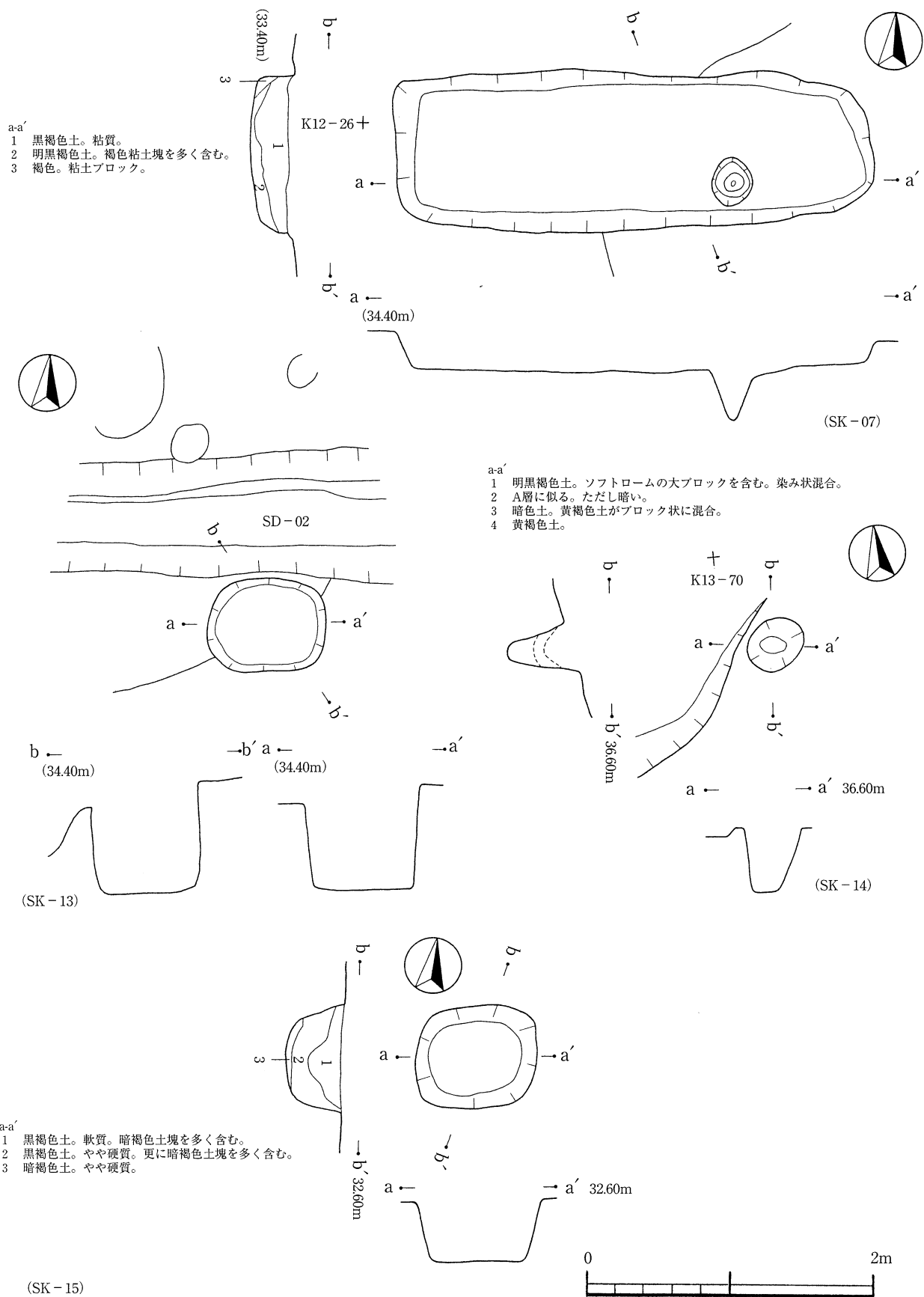
第241図 09～12号土坑（SK-09～12）実測図



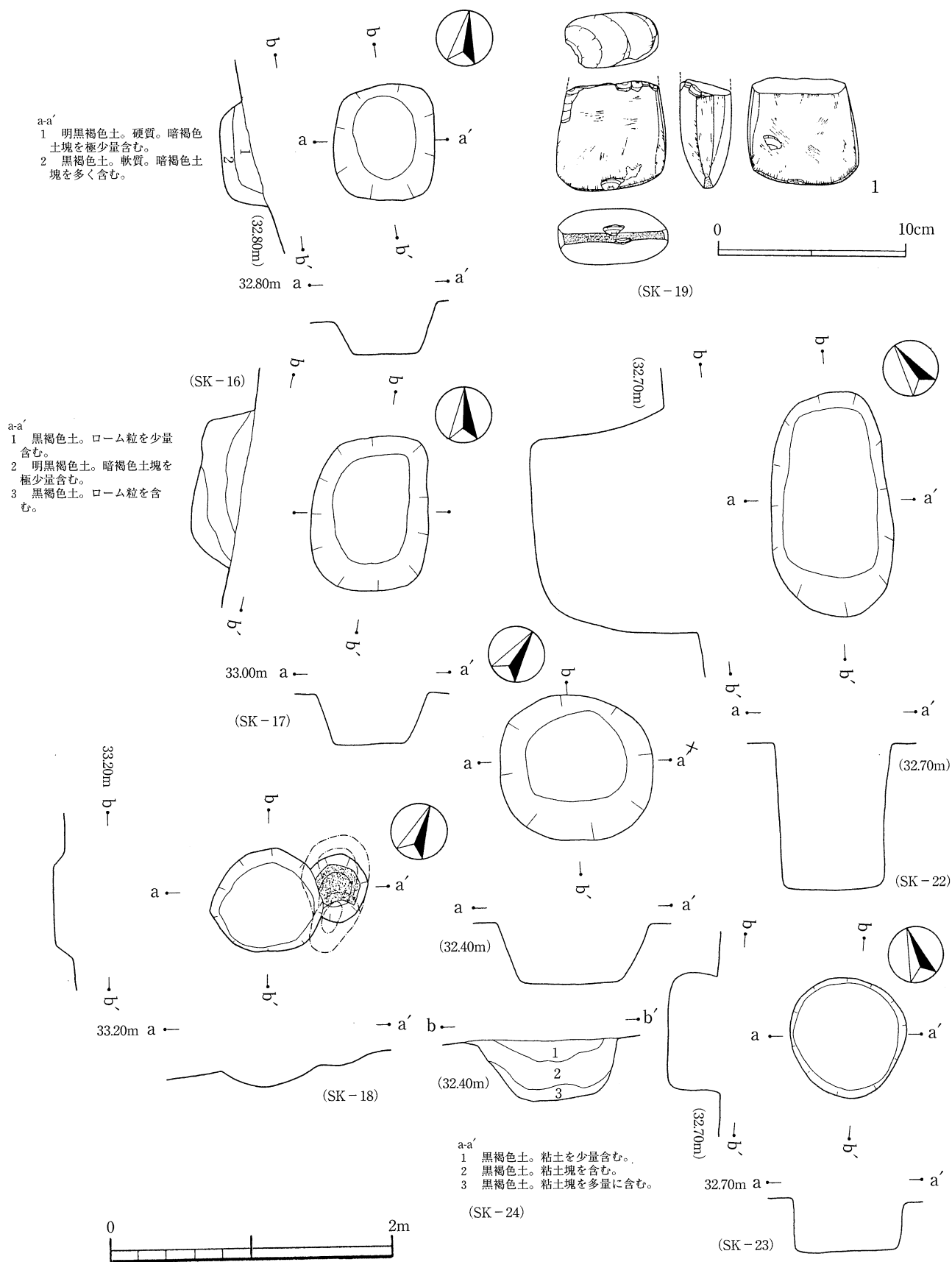
第242図 09号土坑（SK-09）出土遺物実測図



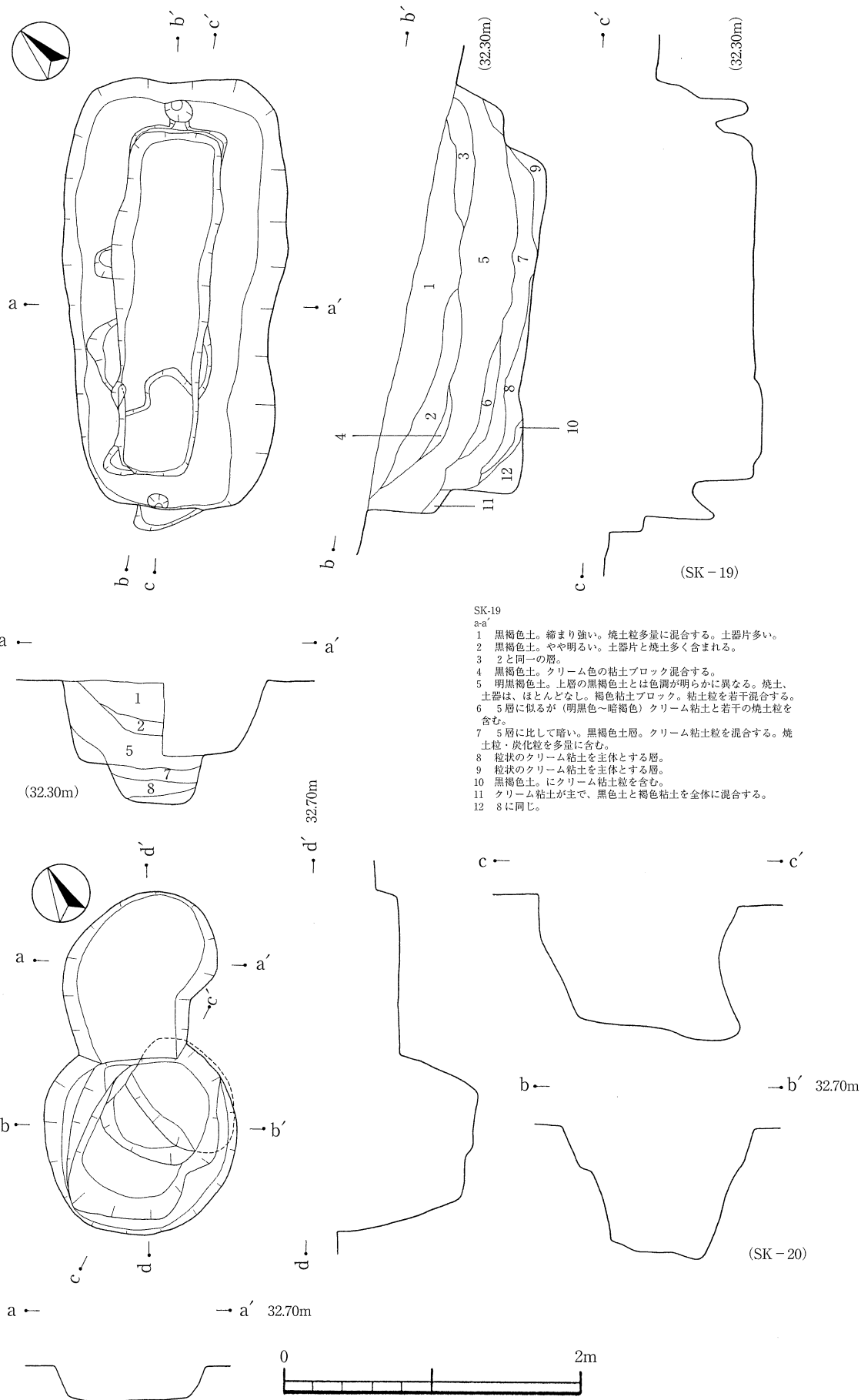
第243図 03、08号土坑 (SK-03、08) 実測図



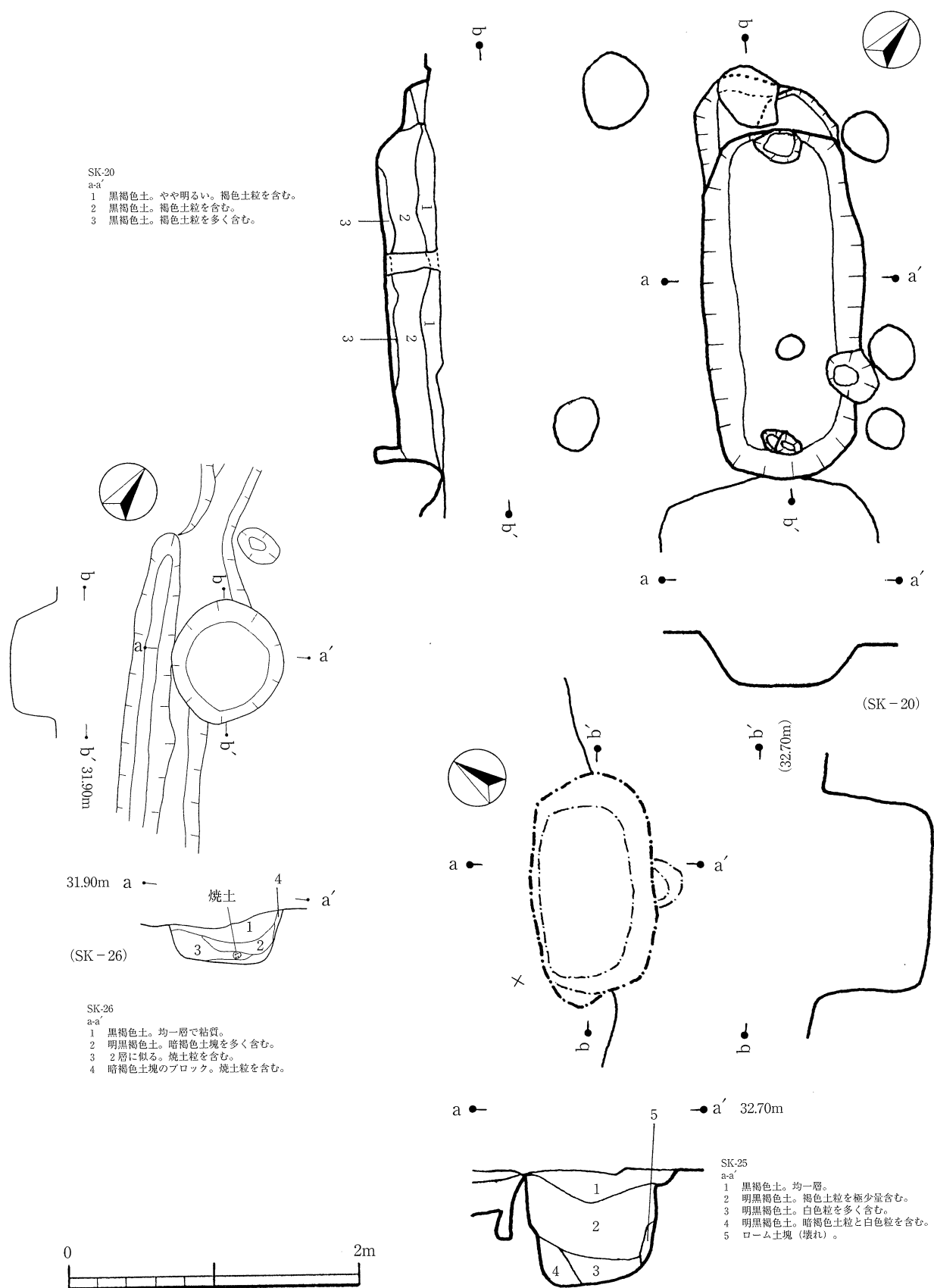
第244図 07、13～15号土坑 (SK-07、13～15) 実測図



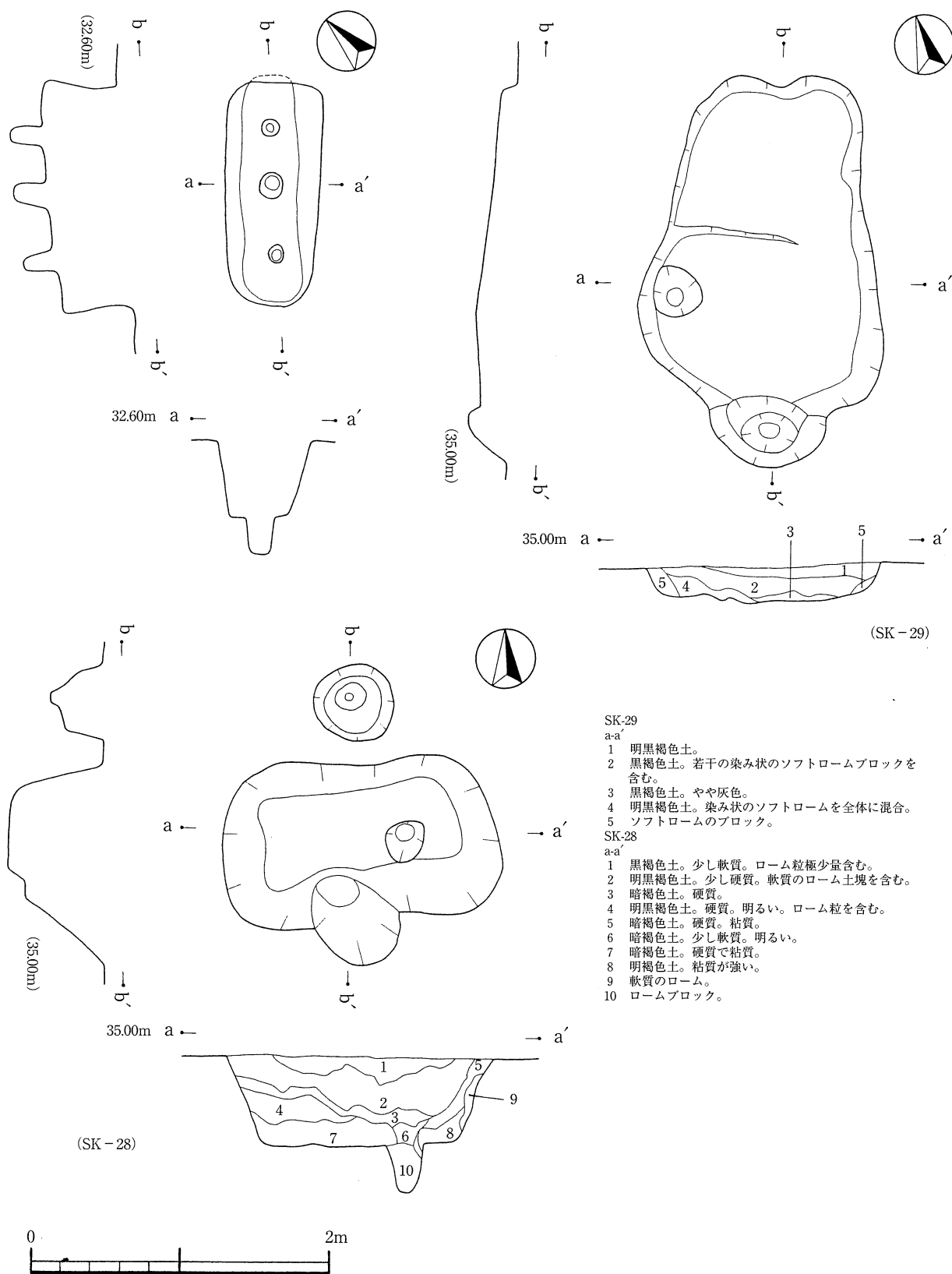
第245図 16～18、21～24号土坑 (SK-16～18、21～24) 実測図
19号土坑 (SK-19) 出土遺物実測図



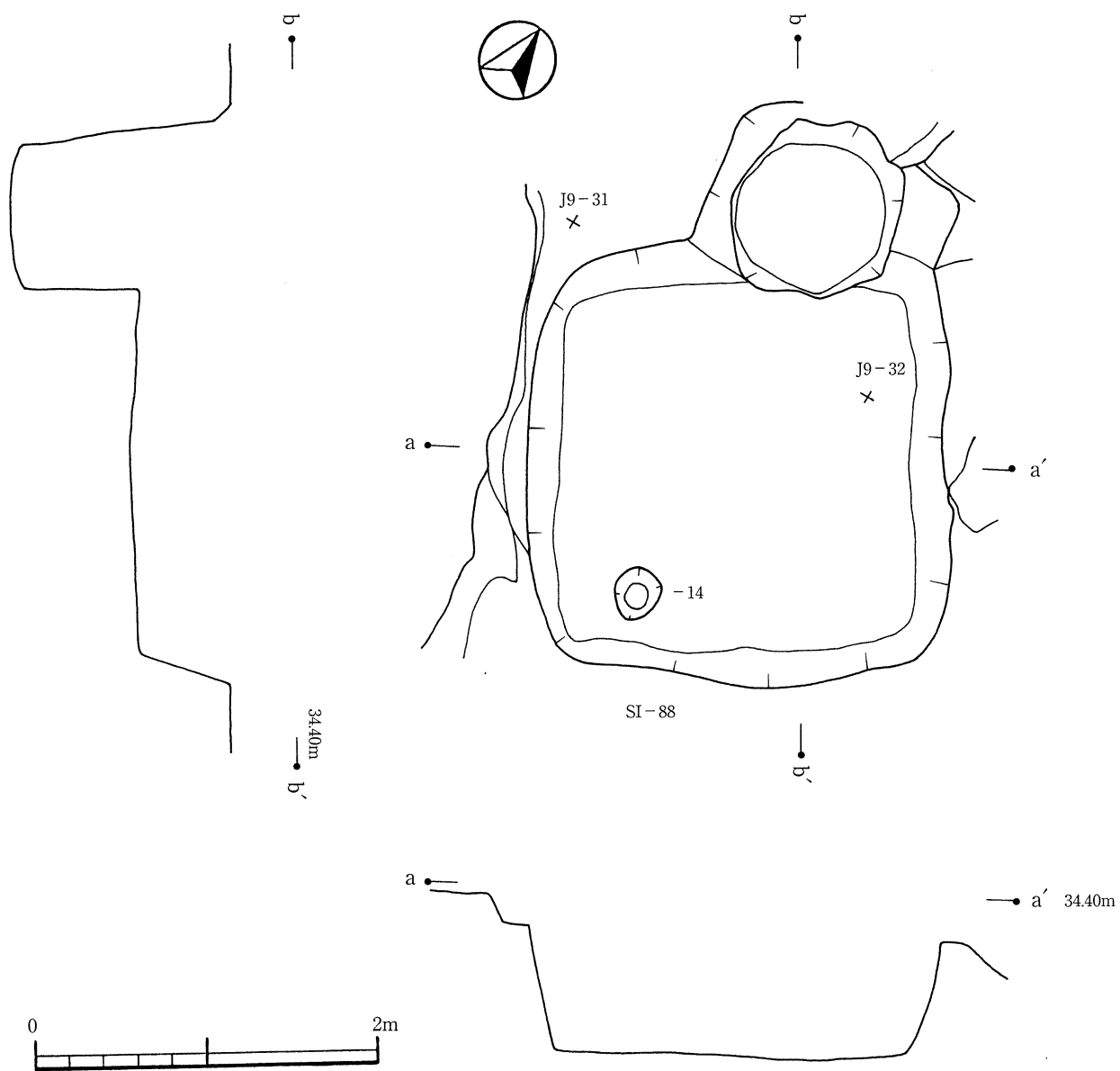
第246図 19、20号土坑 (SK-19、20) 実測図



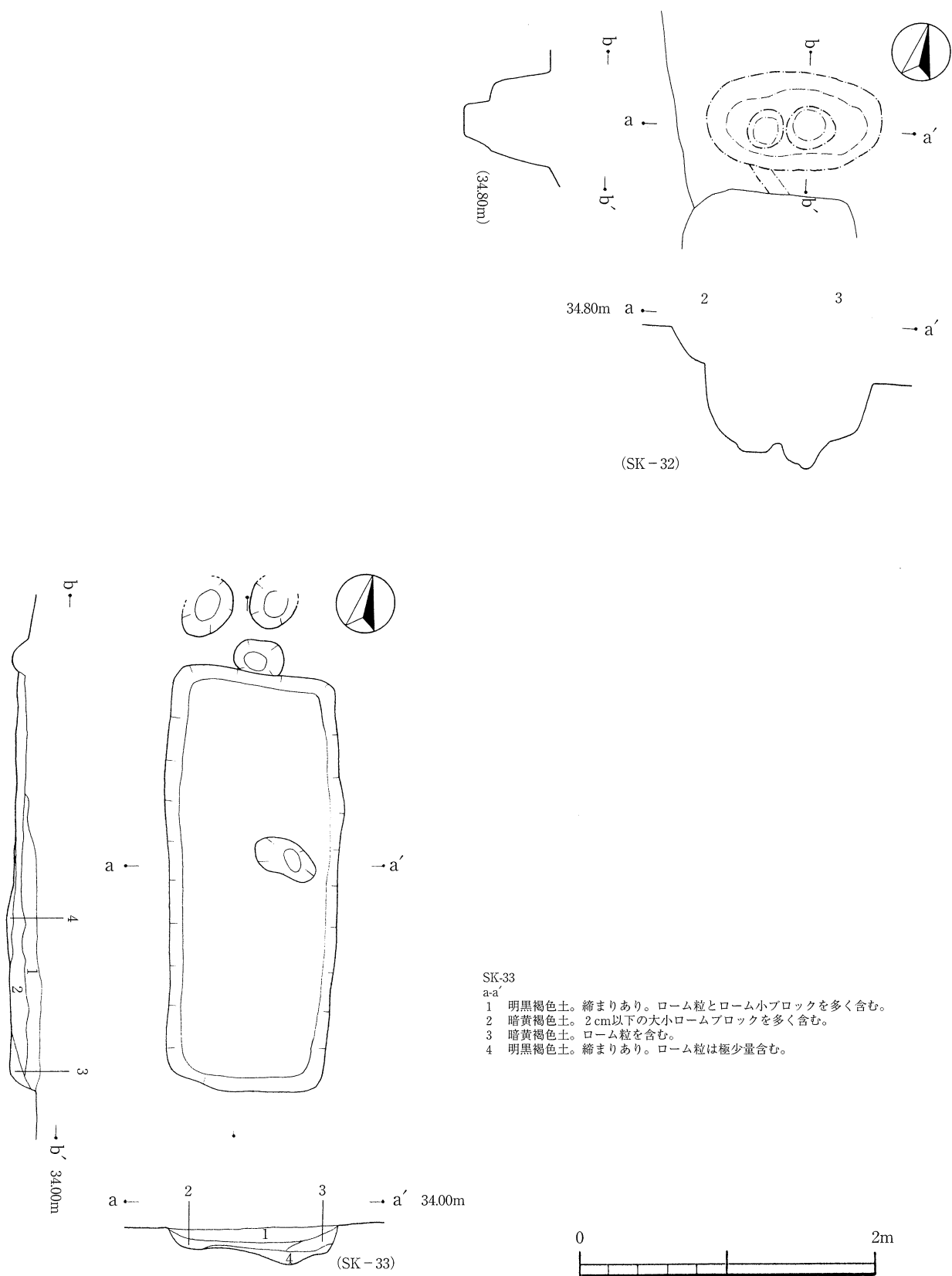
第247図 20、25、26号土坑（SK-20、25、26）実測図



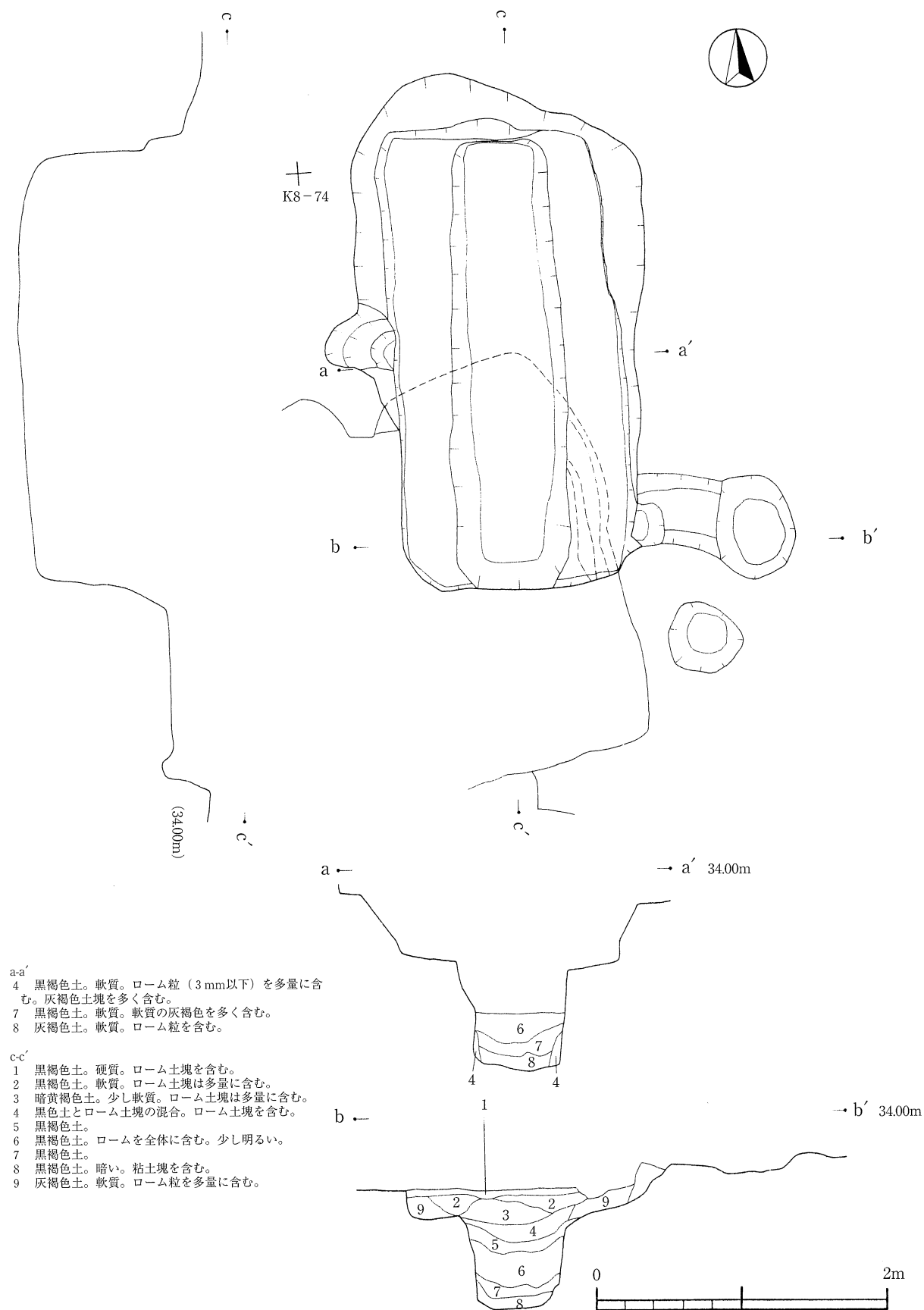
第248図 27～29号土坑 (SK-27～29) 実測図



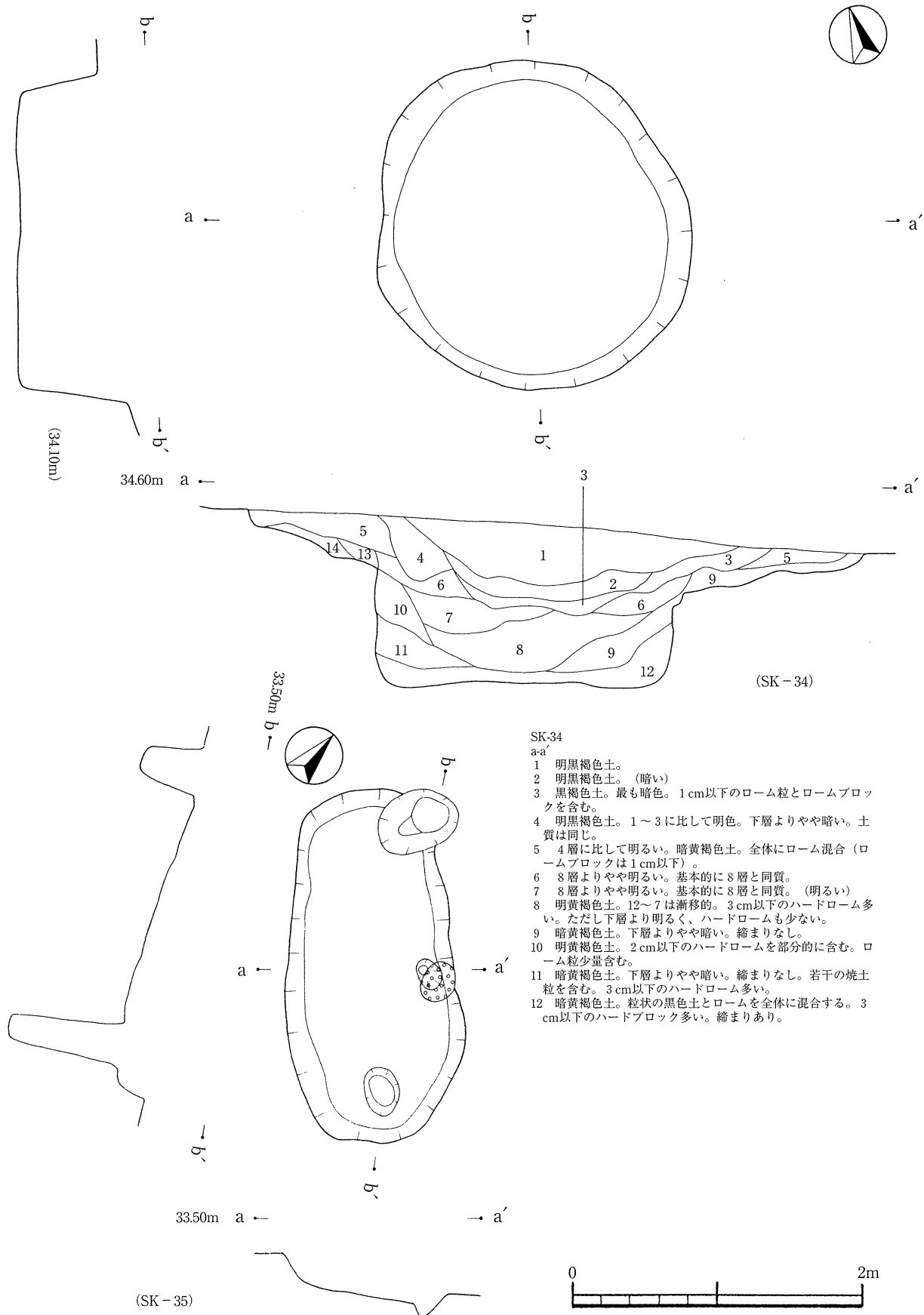
第249图 30号土坑 (SK-30) 实测图



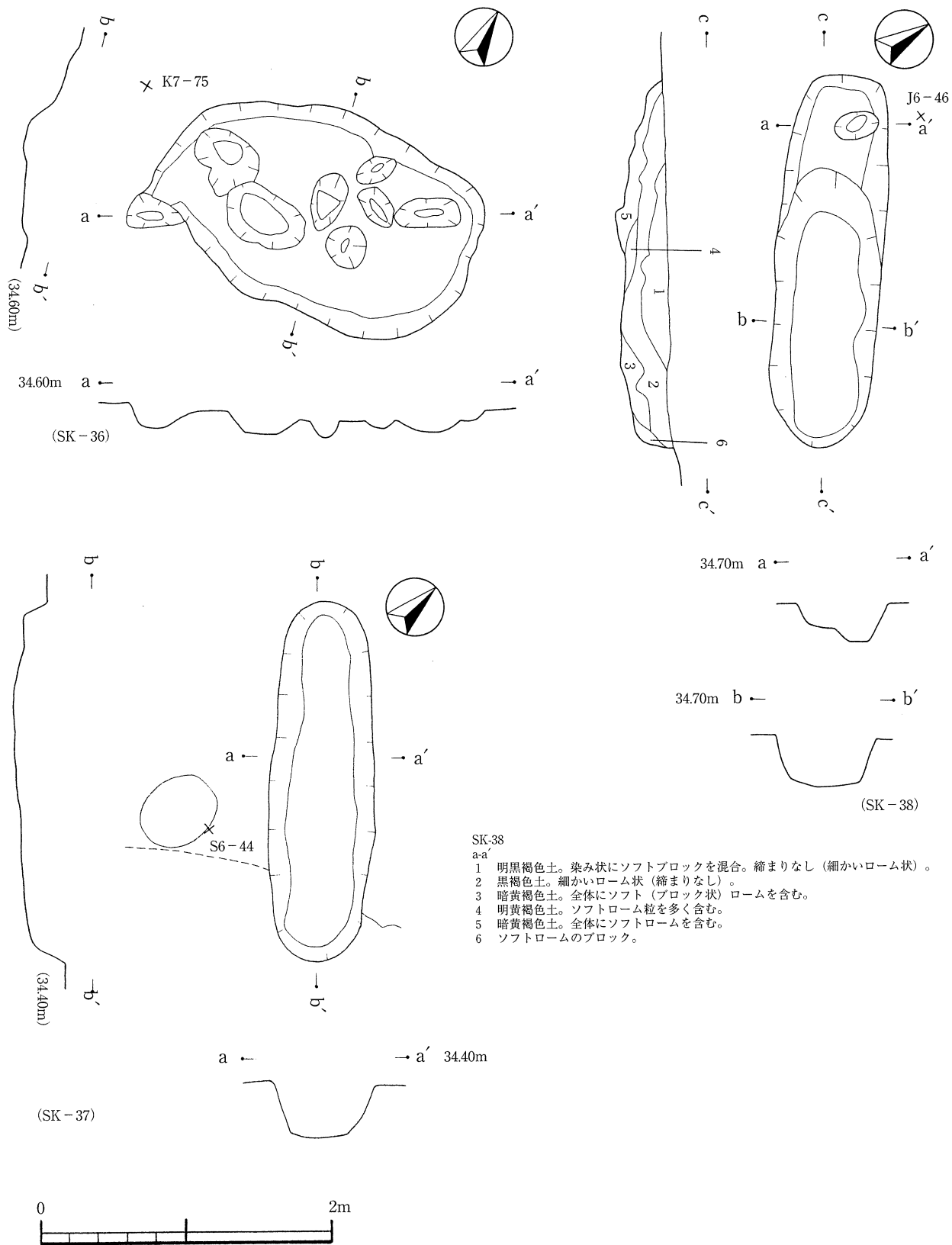
第250図 32、33号土坑（SK-32、33）実測図

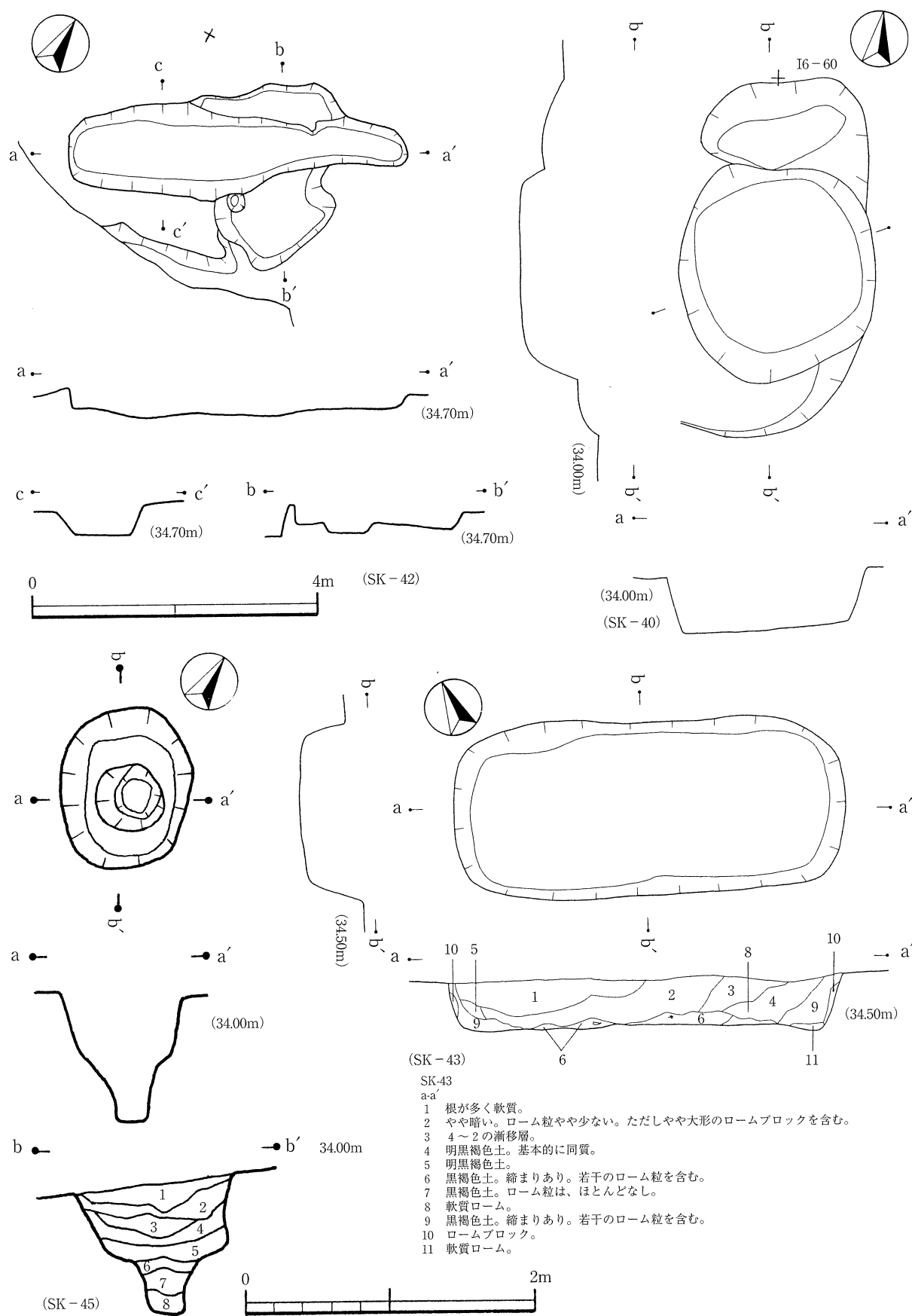


第251図 31号土坑 (SK-31) 実測図



第252図 34、35号土坑 (SK-34、35) 実測図





第255図 40、42、43、45号土坑 (SK-40、42、43、45) 実測図

SK-45

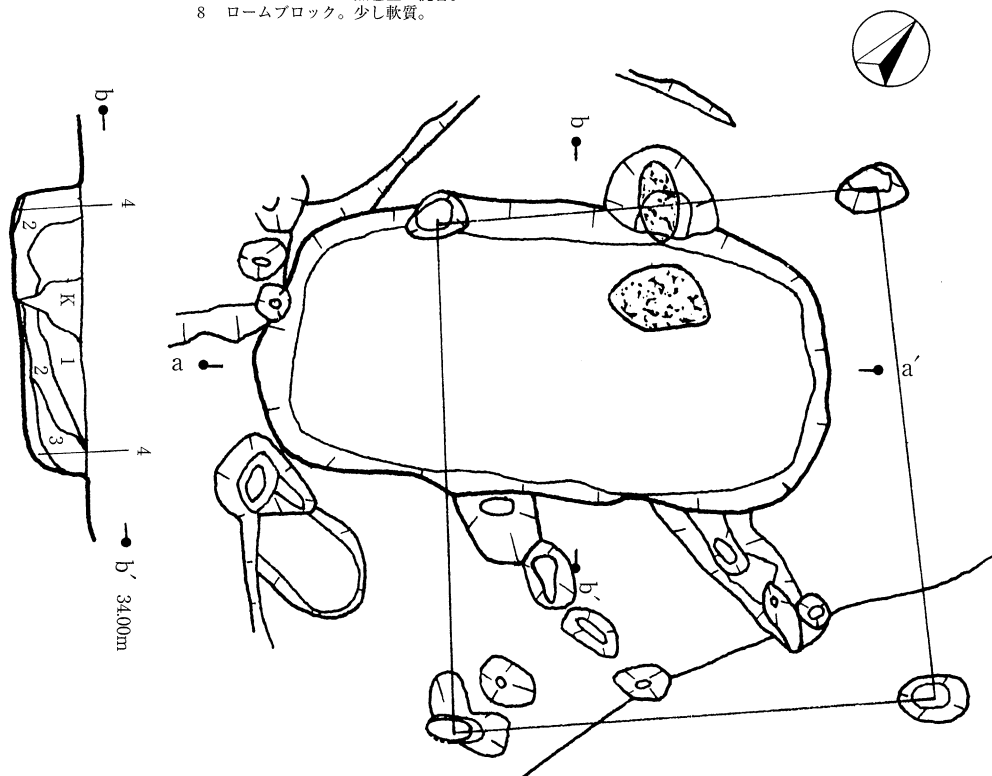
a-a'

- 1 明黒褐色土。ロームブロックを多く含む。軟質。
- 2 黒褐色土。ローム粒を含む。
- 3 明黒褐色土。ロームブロックを多く含む。硬質。
- 4 黒色土とロームのブロック
- 5 黒褐色土。硬質。
- 6 ロームブロック。軟質。
- 7 ロームブロックと黒色土の混合。
- 8 ロームブロック。少し軟質。

SK-44

a-a'

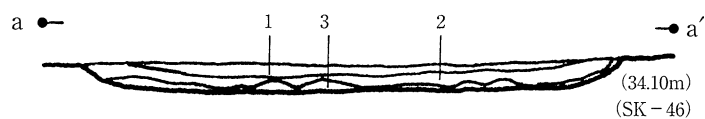
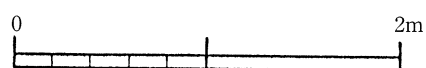
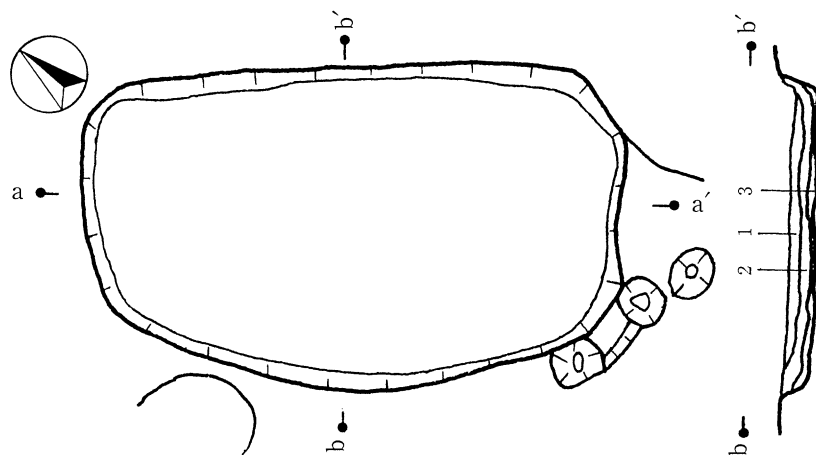
- 1 暗黒褐色土。少し硬質。
ローム粒を多く含む。
- 2 黒褐色土。少し硬質。
ローム土塊を少量含む。
- 3 黒褐色土。ローム粒と
焼土粒を含む。
- 4 暗黄褐色土。軟質の褐色
土塊を含む。



SK-46

a-a'

- 1 黒褐色土。ローム粒を部分的に多く含む。
1mm~3mm大のロームブロック散る。
- 2 暗褐色土。1よりやや褐色味強い。ローム
粒部分的に多く含む。1mm~3mmのローム
ブロック散る。焼土粒少量含む。
- 3 茶褐色土。褐色味強いが、部分的に有機質
性強くなる。



第256図 44、46号土坑 (SK-44、46) 実測図

SK-47

a-a'

- 1 褐色土（微細なローム粒含む）。
- 2 褐色土（1層よりやや暗い。暗褐色土少量含む。ローム粒含む。やや締まる）。
- 3 褐色土（1層に近い色を呈し、黄褐色土を含む。やや締まり。少し粘性を有す）。
- 4 褐色土（黄褐色土。ロームと混じりの層）。
- 5 明褐色土（褐色土をやや多く含むが、粘性を有し、締まっている）。
- 6 明褐色土（褐色土。明褐色土の塊との混じり）。
- 7 明褐色土（褐色土を少し含む。締まっており、ネバつような粘性有り。粘土層であると思われる）。

b

b' 32.00m

32.00m

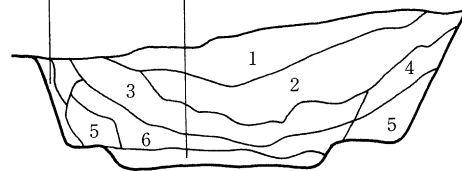
a

b

b'

a'

(SK-47)



33.00m a

a'

b

b' 33.00m

(SK-49)

c

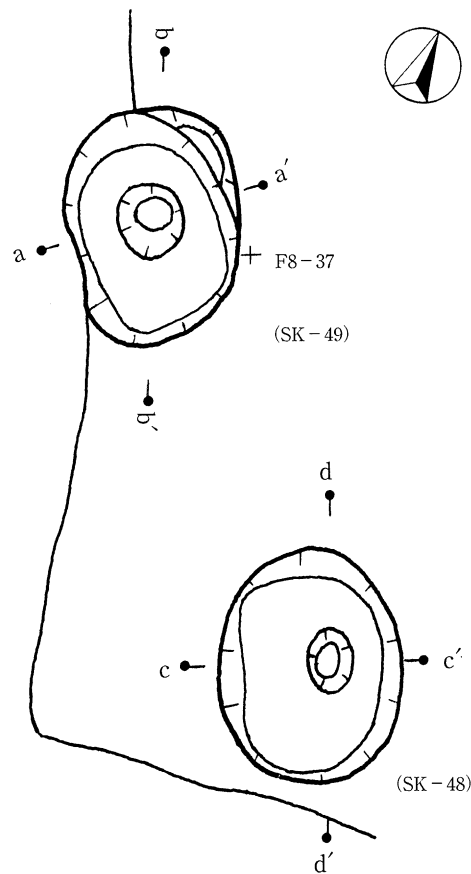
c' 33.30m

d

d'

(33.30m)

(SK-48)



第257図 47～49号土坑 (SK-47～49) 実測図

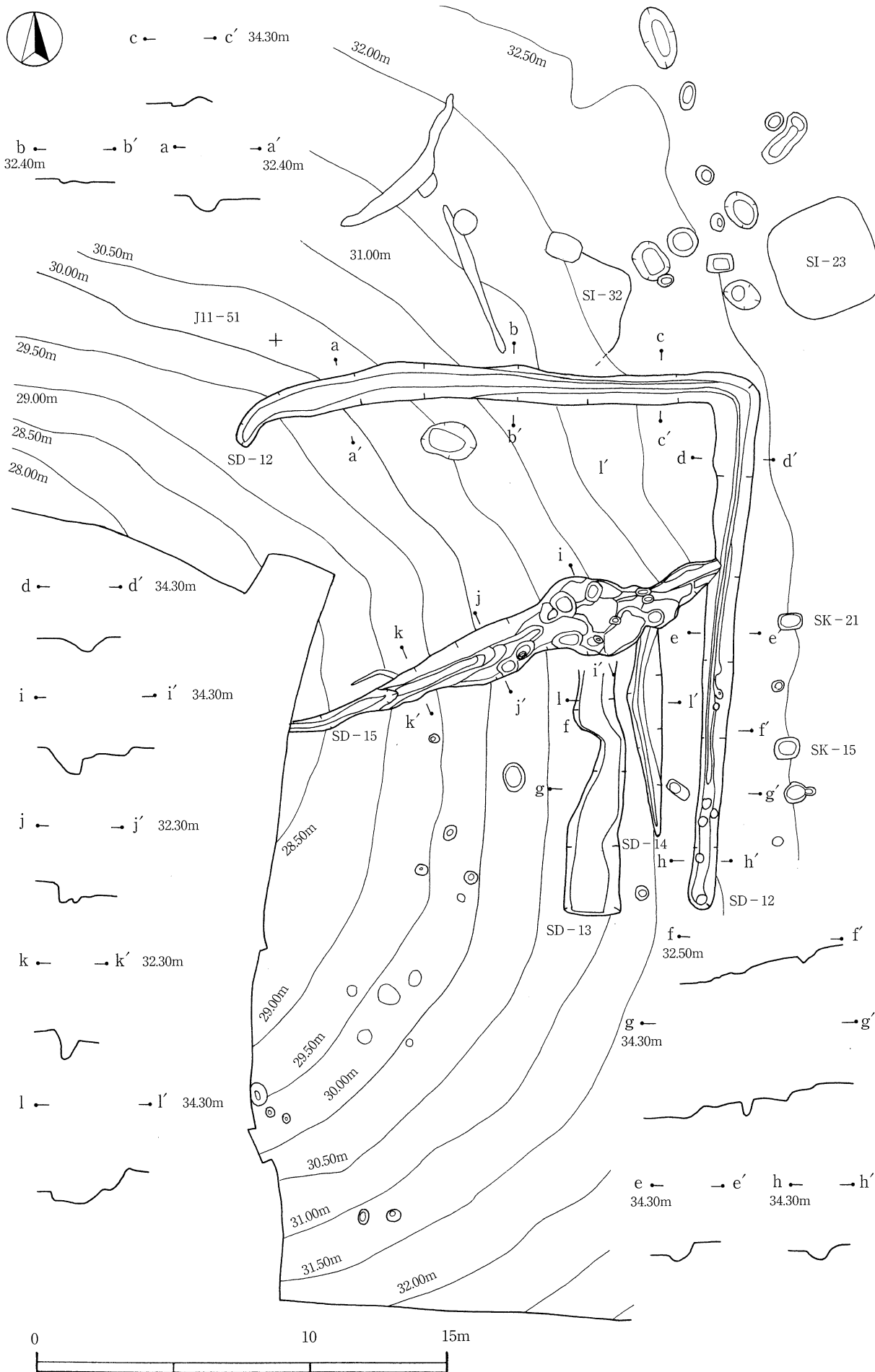
9. 溝状遺構（第258～263図、第104表）

21ヶ所検出され、規模・内容などは第104表のとおりである。出土遺物は少なく、SD-01で内耳鍋片、SD-03～05で須恵器長頸壺片、甕片、布目瓦片、SD-11でロクロ坏、SD-15で高台付碗片2、坏片、SD-20で土器片錘、布目瓦片、SD-21で甕片3、ロクロ坏1、SD-25で高台付碗片1が出土している。これらが遺構の時期を直接示す資料ではないが、少なくとも上限資料として扱えられる。

第104表 溝状構一覧表

単位m ()は推定

No. 第 図	名称	幅 (上端)	深さ (最大)	内 容 な ど	No. 第 図	名称	幅 (上端)	深さ (最大)	内 容 な ど
No.1 第258図	SD-01	1.10m	0.45m	L13付近。19.5m確認。断面は広いU字形。主軸方位はN-84°-W。斜面地に位置し、やや曲がりながら斜面と並行する。東側は途切れる。台地を横断する形体である。内耳鍋片1第264図13	No.13 第259図	SD-13	1.90m	0.55m	J12-36付近。長さ9.4m確認。断面は逆台形。幅広く、少し折れ曲がる。ほぼ斜面に並行。
No.2 第258図	SD-02	1.20m	0.35m	L12付近。30.5m確認。断面はU字形。主軸方位はN-83°-E。斜面地上部に位置し、ほぼ並行する。西側は途切れる。SI-09やSI20などを切る。台地を横断する形体である。	No.14 第259図	SD-14	1.30m	0.80m	J12-17付近。長さ7.68mを確認。断面はU字形。斜面と並行する。SD-15と接する。主軸方向はほぼ真北を示す(底部は少し弧を描く)。
No.3 第258図	SD-03	0.80m	0.35m	K15付近。4.5m確認。断面はU字形。主軸方位はN-76°-W。斜面に位置し、並行する。(台地を横断)。SD-04に切られる。SI-05と接する。	No.15 第259図	SD-15	3.00m	1.10m	J11付近。長さ16.5m確認。断面は深い部分ではU字形。底部はやや凹凸がある。主軸方位はN-68°-E。西側と東側は細い。道跡か。高台付碗2、坏1第264図15,16,20
No.4 第258図	SD-04	1.00m	0.50m	L15付近。17.0m確認。断面は逆台形。斜面部に位置し、斜面と並行(台地を横断)。やや曲がる。東側と西側共に未調査地区に入る。SD-05に切られる。須恵器長頸壺片1(SD-3～5出土)第264図21	No.15 第261図	SD-18 (西側)	0.60m	0.20m	K9付近。長さ5.5m確認。断面はU字形。SI-43でSD-18とSD-19に分かれる。本来は同一と考えられる。台地上部で横断する方向である。
No.5 第258図	SD-05	1.50m	0.20m	K15付近。18.0m確認。断面は逆台形。斜面部に位置し、弧状を描きながら斜面と並行する。SK-03に切られ、SD-04を切る。須恵器長頸壺片1、布目瓦1(SD-3～5出土)第264図10、19		SD-19 (東側)	0.70m 0.60m (東側)	0.30m 0.30m (東側)	K9付近。長さ14.1m確認。SD-18と連結すると考えられる。東側は谷に降りてゆくが、新しい土坑に切れ不明となる。主軸方位はN-78°-E。SI-83を切る。
No.6 第258図	SD-06	1.40m	0.30m	K14付近。SD-07と連結し、コの字状に区画される可能性がある。西側溝(2.8m確認)、南側(8.0m確認)。西側と南側は攪乱土坑により切られて分かれる。断面はU字形。南側溝の主軸方位はN-79°-E。斜面部に立地し、南側溝は斜面と並行。西側溝は斜面と並行。30°折れる。	No.16 第261図	SD-20	1.70m	0.40m	I8～J10付近。長さ49m確認。断面はU字形。北側は幅と深さ大きい。SX-07付近で北側からの溝は細くなり、やや曲がる。別の溝の可能性もある。主軸方向はN-20°-W。SX-07, SI-34, 49, 53, 58などを切る。土器片1、布目瓦1第264図18,19
No.7 第258図	SD-07	1.70m	0.35m	K14付近。6.5m確認。断面はU字形。主軸方位はN-4°-W。斜面と直行する。SI-10と近接する。	No.17 第261図	SD-21 SD-22	1.70m	0.70m	K9付近からL8付近。長さは28m確認。断面は逆台形かU字形。東側は幅広く、直角に区画する溝。主軸方位は北側溝でN-83°-E。(甕3点出土、坏1第264図1～3,22)
No.8 第258図	SD-08	0.85m	0.50m	L13付近。6.1m確認。断面はU字形。主軸方位はN-80°-W。斜面と並行。SD-01の南東側に0.9mの間隔を置いて存在する。	No.18 第261図	SD-23	1.50m	0.60m	k7付近。東側はL8-01と交差する。22.5mの長さを確認。断面は逆台形。西側は幅広く、台地上部に横断する様に位置する。SX-10, SI-106などと重複。主軸方位はN-81°-W。
No.9 第258図	SD-09			L13付近。7.5m確認。断面はU字形。主軸方位はN-2°-W。斜面は並行するが少し曲がっている。SD-10に切られる。SD-11と接する。東側は未掘で西側は途切れる。	No.19 第261図	SD-24	1.20m	0.70m	L8付近。長さ3.6m確認。SD-25と接すると考えられる。(SX-11と重複) 斜面に直行する。断面はU字形。
No.10 第258図	SD-10	0.80m	0.80m	L13付近。10.9m確認。断面はU字形。主軸方位はN-74°-W。東側は未掘で西側は途切れる。やや蛇行している。SD-09, 11を切っている。	No.20 第261図	SD-25	1.70m	0.30m	L8付近。長さ9.0m確認。東側は深い。主軸方位はN-78-E。高台付碗1(第264図23)
No.11 第258図	SD-11	1.00m	0.30m	L13付近。3.1m確認。断面はU字形。SD-10に切られる。少し弧状である。主軸方位はN-15°-W。斜面に並行している。坏1(ロクロ)第264図14	No.21 第263図	SD-26 北側	1.00m	0.30m	F7～F8付近。25mの長さを確認。断面は逆台形。斜面地でやや弧状を描いて北側に降りてゆく。SI-200, 201, 203Bなどと重複。排水溝か。
No.12 第259図	SD-12	北側溝 1.45m 東側溝 1.60m	0.55m 0.60m	J11付近。東側溝と繋がり、直角に曲がる。北側溝は19.5m確認。西側端部は南に少し折れる。斜面に対して斜めに入る。断面はU字形。区画溝と考えられる。東側溝も19.5m確認。斜面に並行し、上端に位置する。主軸方位はN-4°-E。また、SD-15と接している。区画溝と考えられる。		南西側 SD-27	1.90m	0.50m	F9付近。長さ17.5mを確認。断面は浅い逆台形。SI-198と近接。主軸方位はN-83°-E。斜面地を斜めに走る。道跡か
						南東側 SD-28	1.50m	0.20m	F9-G9付近。長さ13.5m確認。断面はU字形。斜面地と並行する。南西側溝と連続すると考えられる。主軸方位は、N-70°-Wを示す。



第259図 12~15号溝状遺構 (SD-12~15) 実測図

10. その他の出土遺物等（第264～266図 第105～109表） ※一部遺構も含む

第105表 石器等 計測表(1)

() は推定

No.	挿図 番号	区分	遺物番号	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	欠損	備 考
1	第97図 3	磨石	SI100-26	凝灰質砂岩	11.95	6.6	1.8	215.7	小齡片	
2	第183図 5	〃	SI210-2	〃	9.7	5.4	1.7	113.6	〃	
3	第37図 3	〃	SI29-19	〃	6.15	4.75	2.2	94	〃	
4	第158図26	〃	SI158-178	〃	6.3	3.55	2.15	57.9	〃	
5	第265図13	〃	J10-a-2	〃	5.7	2.95	1.55	94.8	〃	
6	第158図27	〃	SI158-272	〃	12.5	11.1	2.55	5.34	〃	
7	第265図14	〃	I10-a-1	凝灰岩	5.3	4.5	2	61.4	〃	
8	第124図	〃	SI129-184	凝灰質砂岩	5.65	2.75	1.65	35.1	〃	
9	第265図15	〃	SX13-7	〃	4.9	3.2	1.25	25.6	〃	
10	第228図26	〃	SX13-7	〃	5.5	3.25	1.45	30.7	〃	(石皿)
11	第124図	〃	SI129-28	〃	6.3	4.9	1.15	46	〃	
12	第33図 5	石皿	SI21-64	〃	6.15	4.9	4.25	179	〃	
13	第228図18	磨石	SX04-16	〃	5.05	3.75	2.5	66.8	〃	(石皿)
14	第61図 3	〃	SI84-79	軽石	2	4.35	1.9	18.3	〃	
15	第228図19	〃	SX04-31	凝灰岩	7.1	6.35	2.95	211.3	〃	
16	第265図16	〃	SD20B-2	〃	3.15	4.9	1.6	31.5	砥石	
17	第228図21	〃	SX09-2	〃	復元	復元	復元	35.3	〃	18と19は同一個体
18	第228図21	〃	SX09-2	〃	6.1	3.8	3.5	54.3	〃	
19	第180図 5	〃	SI206A貯-括	凝灰質砂岩	5.55	3.7	2.8	94	〃	砥石
20	第265図17	〃	11I-b-3	凝灰岩	4	2.65	1.9	28.6	〃	砥石
21	第90図 2	〃	SI89-2	〃	6.4	5.3	1.15	57.8	〃	穿孔がある
22	第265図18	砥石(瓦)	J9-24-7		6.25	4.6	2	48.5	〃	瓦を砥石に利用
23	第63図 4	〃 (〃)	SI61C-14		6.9	5.6	2.4	84.3	〃	瓦を砥に転用、4本の条線が一部に入る
24	第228図24	〃 (須恵器)	SX-09-1		6.7	7.55	1.35	56.5	〃	須恵器を砥石に利用
25	第265図19	砥石(瓦)	表採		7.95	5.85	1.95	79.6	小片	瓦を砥石に利用
26	第228図22	砥石(須恵器)	SX09-13		8.25	10.35	0.85	95.6	〃	須恵器を砥石に利用
27	第105図 6	〃	SI110-6		9.9	8.05	1.1	136.7	〃	〃
28	第126図 8	浮子	SI133-23	軽石	9.9	8.1	4.55	68.5	〃	
29	第124図20	〃	SI129-211	〃	5.9	5.35	4.15	30.4	〃	
30	第137図 7	〃	SI151-59	〃	7	4.7	4.4	24.3	〃	
31	第124図21	〃	SI129-228	〃	4.2	3.6	1.7	4.5	〃	
32	第116図10	〃	SI121-2	〃	3.9	4.1	4	40.8	〃	
33	第266図 1	〃	SI106-2	〃	5.75	5.8	4.45	17.7	〃	
34	第92図 4	磨石	SI98-36	〃	6.7	6.85	5.2	259.9	〃	
35	第266図 2	石皿	SI129-32	凝灰質砂岩	14.2	13	7.05	1.023	〃	
36	第35図 4	磨石	SI27-42	砂岩	6.4	6.1	4.4	205.5	有	
37	第71図22	敲石	SI69-197	チャート	7.65	6.75	4.4	289	有	敲石
38	第266図 3	〃	J17-65	〃	11.2	6	4.2	366	完形	敲石
39	第116図10	磨石	SI122-84	砂岩	10.1	4.85	1.35	96.5	完形	
40	第112図14	敲石	SI116-70	〃	10.55	5.8	4.85	393	〃	敲石
41	第266図 4	〃	SX10-180	〃	8.85	4.05	1.75	90.1	完形	敲石
42	第266図 5	〃	SX09-2	珪質泥岩	6.1	3.9	4	109.1	有	
43	第266図 8	磨石	SX01-72	安土岩	5.4	5.75	3.35	158.2	完形	
44	第15図12	〃	SI02-2	流紋岩	5.6	5.6	3.45	162	完形	
45	第266図 6	〃	SX09-2	輝石安土岩	9.2	6.6	2.25	222.3	有	凹石
46	第110図20	磨石	SI115-380	閃緑岩	11.3	7.8	2.8	398	完形	石斧を磨石にしている
47	第266図 7	石皿	K3-3	デイサイト	14.4	7.4	3.1	278	破片	
48	第23図13	〃	SI110-69	閃緑岩	10.5	7.05	4.8	445	破片	
49	第266図 9	磨石	J17-b-1	砂岩	3.5	7.3	3.1	92	〃	石棒?
50	第266図10	石斧	SX01-80	砂岩	6.6	4.3	1.4	56.1	完形	

第106表 石器等 計測表(2)

() は推定

No.	挿図 番号	区分	遺物番号	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	欠損	備 考
51	第266図11	石斧	I08-C-33	ひすい輝石 (白雲母岩?)	4.7	4.25	2.1	73.2	上部欠損	
52	第245図1	〃	SK15-5	角閃石	5.8	5.9	2.75	185.5	上部欠損	
53	第162図25	〃	SI182-2-	(蛇紋岩)	3.8	1.2	0.8	6.9	完形	
54	第71図19	〃	SI69-170	凝灰質砂岩	7.3	2.15	1.7	42.6	上部欠損	
55	第71図20	〃	SI69-170	角閃石	8.25	2.1	1.6	52.1	完形	
56	第71図21	〃	SI69-171	安山岩	6.3	3.65	1.5	49.5	〃	
57	第113図5	石斧	SI118-2	砂岩	4.6	3.85	1.1	33.3	上部欠損	
58	第49図16	紡錘車	SI43-60	蛇紋岩	4.00	3.95	1.95	47.5	完形	
59	第185図6	〃	SI211-35	滑石	4.55	4.45	1.35	35.5	〃	
60	第177図3	勾玉	SI203B-23	蛇紋岩	3.40	1.75	0.80	1.0	〃	
61	第180図6	石製品	SI206A貯-括	頁岩	—	2.00	0.90	9.7	一部欠損	

第107表 石鏃 計測表

() は推定

No.	挿図 番号	区分	遺物番号	石 材	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	欠損	備 考
1	第121図9	凹基無茎鏃	SI127A-2	黒曜石	2.9	2.2	0.45	1.3	有	
2	第124図23	〃	SI129-5	〃	2.5	1.6	0.35	1.0	完形	
3	第265図2	凹基無茎鏃	SX01-49	〃	2.7	1.7	0.4	1.3	〃	
4	第174図4	〃	SI198-6	珪質頁岩	2.6	1.9	0.4	1.1	〃	
5	第265図1	平基無茎鏃	SX09-50A	〃	1.55	1.35	0.4	0.5	〃	
6	第67図5	〃	SI66-113	黒曜石	2.6	2.3	0.6	3.4	〃	

その他の遺物では、石鏃が6点出土し、すべて遺構には伴わないが、平基無茎鏃が2点、凹基無茎鏃が4点である。石質は黒曜石が4点、珪質頁岩が2点である。他の石器は、磨石が28点（住居跡出土は15点）、敲石は5点（住居跡出土は2点）、石皿が4点、浮子は6点、石斧は8点（住居跡出土は5点、3点はSI-69）、また、石製紡錘車が2点（蛇紋岩と滑石製）、蛇紋岩製の勾玉1点（SI-203B）、さらに、平安時代以降で須恵器甕片や瓦片を砥石に再利用する例が認められる。

カマド使用の土製支脚は6点出土している。布目瓦片は11点検出され、男瓦1点（SI-110）と女瓦（10点）で一部に環元焰もみられる。

土器片鏃は、加曽利E式の深鉢を転用した例が1点（第265図-6）、弥生（後期）の例が4点認められる。土鏃は、土玉状の例がSI-197で10点、他に1点（SX-19）、管玉状が1点（SB-01）出土している。

第265図-5は、縄文時代の蓋形土器とみられ、保存状態は悪いが、円形で半環状の把手が付くと考えられる。中期後半頃の所産であろうか。

弥生時代中期初頭のいわゆる須和田式の土器片が数点みられる。（第265図7～10）鉢縄文とヘラ描き次線及び刺突文の組み合わせで、特に7は突帯に刻目が入り、内側は重四角文がヘラにより描かれている。

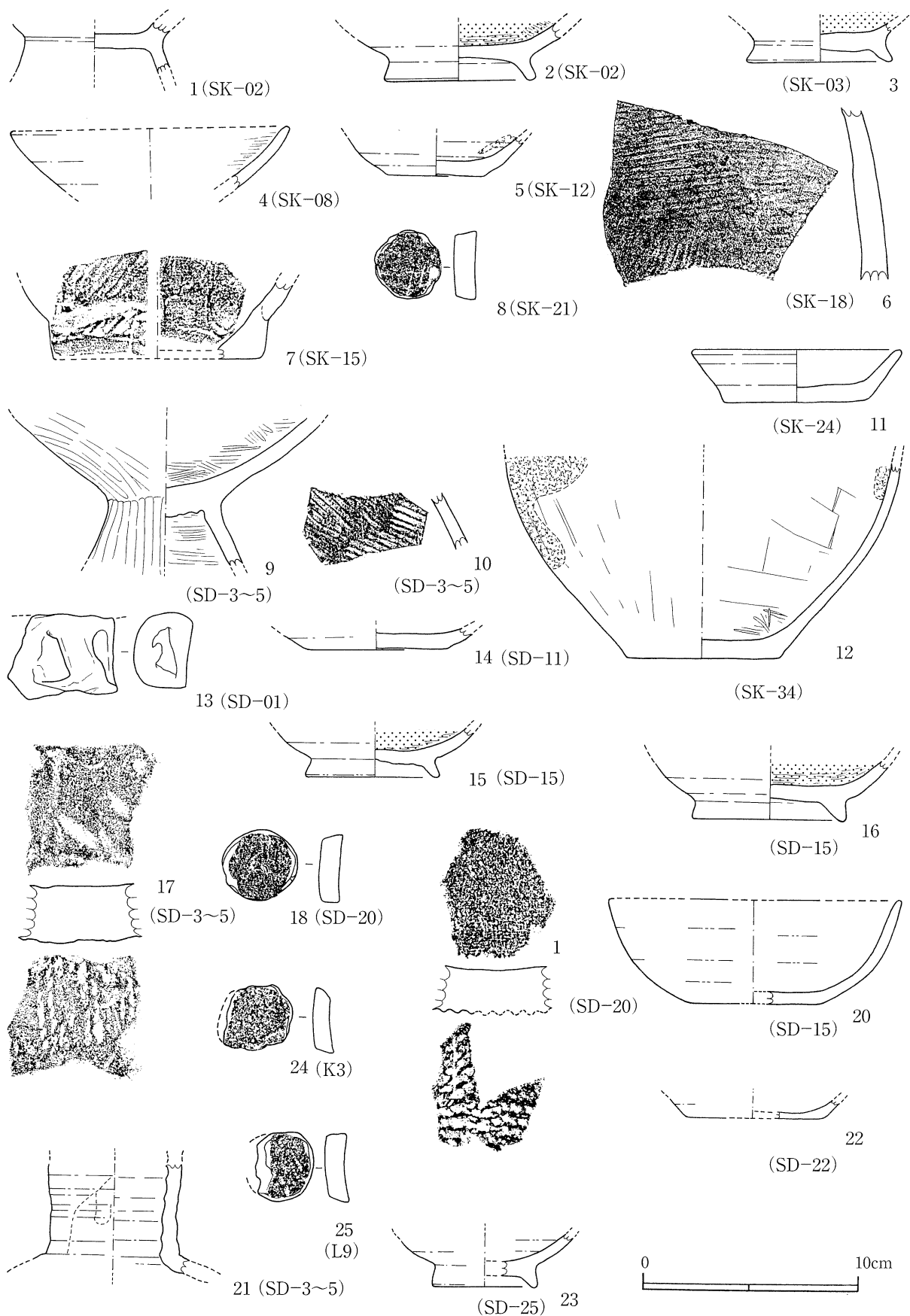
第108表 土製支脚一覧表

() 推定

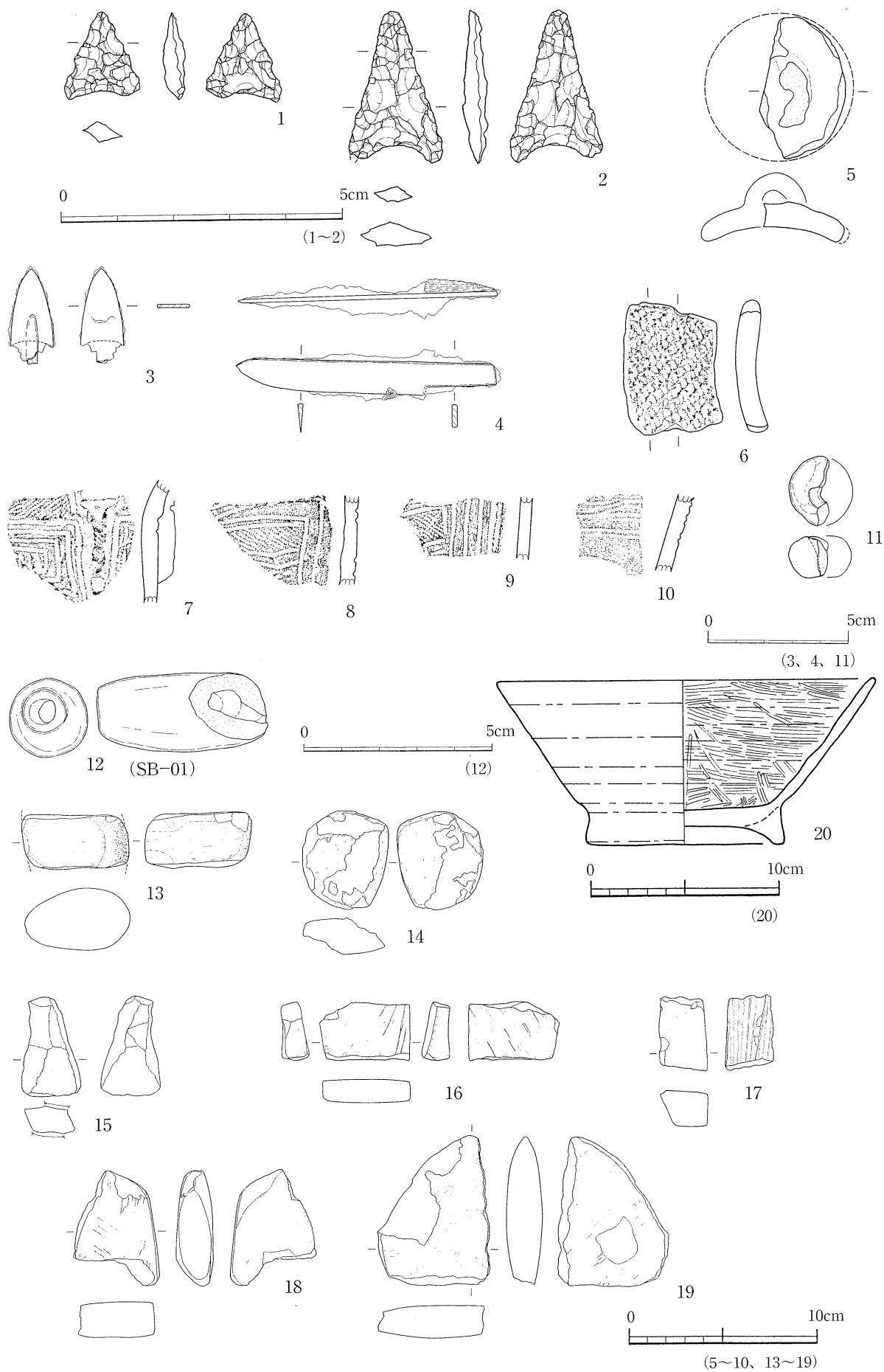
番号	挿図 番号	出土遺構等	形体	残存状態	胎 土	色 調	その他の内容
1	第47図12	SI-4 2	方柱形	下部欠損	緻密	灰黄色、浅黄橙色	上端部 長袖4,0cm×短袖3,7cm
2	第57図7	SI-53	〃	〃	砂粒が多い	にぶい橙色、にぶい褐色	〃 〃 5,3cm× 〃5,2cm
3	第57図8	SI-54	(円柱形)	下端のみ1/2弱の残存	緻密	橙色、黄橙色	
4	第88図6	SI-87	(方柱形)	小片	〃	にぶい褐色	焼成状態が大変不良
5	第149図 14	SI-162	(〃)	上部小片	スサ入りで砂粒も多く含む	橙色	〃
6	第185図7	SI-211	円柱形	ほぼ完形	緻密	橙色、にぶい橙色	〃 長さ15,3cm、最大径9,4cm

第109表 瓦、観察表

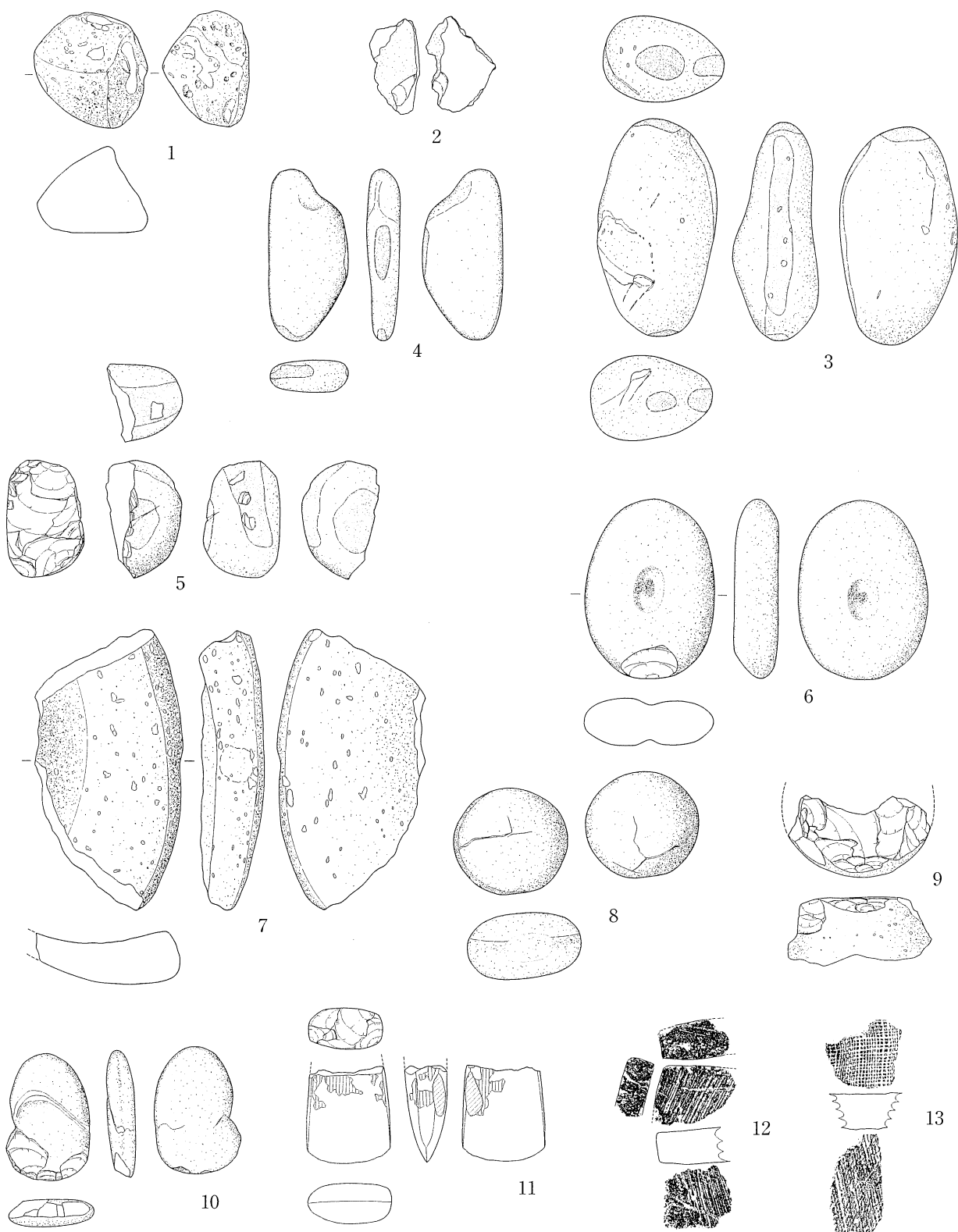
挿図 番号	種別	出土位置 遺存状態	度目 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	形体・技法等の特徴
第228図 29	女瓦	SX-04-17 ㊹	厚さ 2,75	緻密	良好 環元焰	褐灰色 明褐色 にぶい黄 橙色	凹面は布目。凸面は縄目。 一部は酸化している。
第228図 28	女瓦	SX-04-28 ㊸	厚さ 2,4	緻密	少し不良 酸化焰	橙色	凹面は布目。凸面は（縄目）。
第228図 30	女瓦	SX-04-17 ㊹	厚さ 2,5	緻密	良好 環元焰	黒褐色 褐灰色	凹面は布目。凸面は縄目。
第228図 15	女瓦	SX-04-11 南面包含層32	厚さ 2,65	小砂粒を多く混入する	良好 酸化焰	明褐色	凹面は布目。凸面は縄目。側面は1ヶ所は残り、ヘラケズリ。
第228図 16	女瓦	SX-04-12-5 南面包層	厚さ 2,50	〃	良好 酸化焰	明褐色	凹面は布目。凸面は不明
第87図 7	女瓦	SI-86-7-1	厚さ 1,75	緻密	やや不良 酸化焰	にぶい黄橙色 明黄褐色	凹面は布目。凸面縄目
第105図 5	男瓦	SI-110-5-22	厚さ 2,35	酸化鉄5mm以下を 少量含む。小礫3mm 以下を極少量含む。	酸化焰	橙色黄橙色	凹面は布目で指ナデ整形。凸面はヘラケズリ後、指ナデ整形 凹面に幕骨痕残る。2面残り、ヘラケズリ。
第266図 13	女瓦	K13-06-1	厚さ 1,8	緻密 わずかに金雲母が入る	酸化焰	橙色	凹面は布目。凸面は縄目
第266図 12	女瓦	表採	厚さ 1,8	小礫1mm以下を少 量含む。	やや不良 酸化焰	にぶい褐色 一部橙色	凹面は布目。凸面は縄目（やや摩耗）。側面が残り、ヘラケズリ痕がみられる。（面取り2ヶ所）
第264図 17	女瓦	SD-3~5-1	厚さ 2,8	緻密	やや不良 酸化焰	にぶい黄橙色 橙色	凹面は布目（少し摩耗）。幕骨痕がわずかに残る。凸面は縄目
第264図 19	女瓦	SD-20B-2	厚さ 2,2	白色粒1mm以下を 含む	普通 環元焰	灰色 灰オリーブ色	凹面は布目（少し摩耗）。凸面は荒い縄目。



第264図 土坑・溝状遺構 (SK-02、03、08、12、18、21、15、24B、42、34)
(SD-01、11、15、3~5、20B、22、34、35) 及びグリッド出土遺物実測図



第265図 その他の出土遺物(1)



第266図 その他の出土遺物(2)

Ⅲ 自然科学分析調査報告

1. 台地部分の古植生、遺構の燃料材・用途の分析（第110～116表、第267～271図）

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

釜神遺跡（千葉県市原市字浅井小向所在）は、養老川の沖積地に面した下総台地上の縁に位置する。本遺跡の発掘調査の結果、弥生時代・古墳時代・平安時代の住居跡、方形周溝墓などの遺構群が検出されている。

今回、財団法人市原市文化財センターより当社に対して、本遺跡周辺の古植生復元燃料材の種類、遺構の用途等を検討するため、自然科学分析が要望された。そこで、次のような分析方法や調査課題を設定した。

(1) 弥生時代～平安時代の古植生推定

SX-09・SX-01・調査区東谷部包含層を対象とし、弥生時代～平安時代にかけての古植生を推定する目的で、植物珪酸体分析を行う。植物遺体を用いた古環境解析には、花粉分析がよく用いられる。しかし、花粉化石の性質から分析対象は低地の堆積物が主である。本遺跡は台地上に立地するため花粉分析に不適である。一方、植物珪酸体は風成堆積物中でも多く残存していることが期待されるため、台地上の植生を考える上で有効である。

(2) 住居跡内の炉・カマドの燃料材推定

弥生時代～平安時代の住居跡内の炉とカマドを対象とし、当時燃料材に使われていたイネ科植物を推定する目的で植物珪酸体分析を行う。燃料材を推定する場合、イネ科起源の組織片が多く含まれていることが知られている（佐瀬，1982；大越，1985）。このため、イネ科の組織片にも注目する。

(3) 古墳時代前期の住居跡貯蔵穴の内容物推定

古墳時代前期の住居跡貯蔵穴（SI-127A）を対象として、当時貯蔵された作物の痕跡について検討する目的で植物珪酸体分析を行う。作物等の植物体は、火災などで炭化しないかぎり台地上では分解してしまう場合が多い。このため、風化に強い植物珪酸体から貯蔵穴内の内容物を推定する。

(4) 古代末～中世の工房跡の燃料材推定

古代末～中世の工房跡（SX-04）は、遺物が出土しておらず炉の用途や生産物など、詳細が不明である。工房跡の炉について、燃料材を推定する目的で炭化物同定（材・種実）および植物珪酸体分析を行う。また、上記同様イネ科の組織片に注目する。

(5) 平安時代後期後半の用途不明遺構の燃料材推定

平安時代後期後半の工房跡（SX-15）と考えられているが、遺物等の情報に乏しく用途が不明である。そこで、本遺構でも炉を対象として、燃料材を推定する目的で炭化物の同定（種実）および植物珪酸体分析を行う。また、上記同様イネ科の組織片にも注目する。

(6) 古墳時代中期円墳周溝内より出土した甕の機能・用途について

円墳周溝内から甕（SX-18）が出土した。しかし、人骨などは確認されていない。温暖多湿、排水良好、土壌酸度が酸性のような土壌では有機物が分解されやすく、水溶性の成分は土壌中を下方へ流亡してしまう。すなわち、動植物体などが長い年月にわたり土壌中でその形状を保つことは稀で、埋

葬された遺体、人骨なども同様に拡散、流亡してしまうことが多い。しかし、その成分が残留していることもある。そこで、甕（SX-18）が埋葬に関係する遺物であるかどうか検討する目的で、甕内の土壌について、骨の成分であるリン酸およびカルシウム分析を行う。

1. 試料

今回分析対象とした試料ならびに分析項目を第110表に示す。なお、試料番号4については炭化材同定を当初行う予定であったが、同定に耐えるような試料が検出されなかったことから、試料番号31と併せて種実同定を行った。植物珪酸体分析については29点、種実同定については2式の分析を行った。なお、リン・カルシウム分析は3点行った。

2. 分析方法

(1) 植物珪酸体分析

試料約5gの土壌について、過酸化水素水と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、重液分離（ポリタングステン酸ナトリウム：比重2.5）を順に行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。これを、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。同定の際には近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にする。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために、植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、短細胞珪酸体が200個未満、機動細胞珪酸体が100個未満の試料については、組成が歪曲する恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず、出現した種類を+で示す。

(2) 種実遺体分析

今回の試料は極度に炭化しているため、一般的に行われているような水洗選別法を用いると溶解する恐れがあった。そこで、土壌試料150gを風乾させてたあと、双眼実体顕微鏡下で観察し、鏡下にて見いだされた大型植物遺体について同定した。なお、同定にあたっては電子顕微鏡像を参考にし、写真撮影もあわせて行った。

(3) リン・カルシウム分析

測定方法は、土壤標準分析・測定法委員会（1986）、土壤養分測定法委員会（1981）、京都大学農学部農芸化学教室（1957）などを参考にした。

試料を風乾後、軽く粉碎して2.00mmの篩を通過させる（風乾細土試料）。風乾細土試料の水分を加熱減量法（105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00gをケルダール分解フラスコに秤とり、はじめに硝酸約5mlを加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸約10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、水で100mlに定容して、ろ過する。ろ液の一定量の試験管に採取し、リン酸発

第110表 分析試料一覧

試料 番号	地点	時代性・用途等	土 質	分析項目		
				植 物 珪 酸 体	リ ン ・ カ ル	種 実 遺 体
1	SI-65	弥生時代後期住居跡 炉	10YR6/2 灰黄褐色 シルト混じり砂	○		
2	SI-91	平安時代住居跡 カマド	7.5YR4/4 褐色 細粒砂	○		
3	SI-69	弥生時代中期住居跡 炉	7.5YR4/4 褐色 細粒砂	○		
4	SX-04	平安時代工房跡 炉 L	7.5YR3/2 黒褐色 細粒砂	○		○
5	SX-04	平安時代工房跡 炉 L(底面下山砂層)	10YR6/6 明黄褐色 細粒砂	○		
6	SX-04	平安時代工房跡 炉 G(断面 C 9層覆土)	7.5YR3/2 黒褐色 砂混じりシルト	○		
7	SX-04	平安時代工房跡 炉 G(断面 C 12層)	7.5YR4/4 褐色 細粒砂	○		
8	SI-86	平安時代住居跡 カマド	7.5YR3/4 暗褐色 砂質シルト	○		
9	SI-39	古墳時代後期住居跡 カマド	7.5YR4/6 褐色 砂質シルト	○		
10	SI-162	古墳時代後期住居跡 カマド	7.5YR3/4 暗褐色 砂質シルト	○		
11	SI-177	弥生時代後期住居跡 炉	5 YR3/4 暗赤褐色 砂質シルト	○		
12	SI-182	弥生時代末期住居跡 炉	2.5YR3/4 暗赤褐色 砂質シルト	○		
13	SX-18	古墳時代中期円墳 周溝内出土甕内	10YR2/2 黒褐色 砂混じりシルト		○	
14	SX-18	古墳時代中期円墳 周溝内出土甕外覆土	10YR2/2 黒褐色 砂混じりシルト		○	
15	SX-18	古墳時代中期円墳 周溝底面地山ローム	10YR4/6 褐色 砂混じりシルト		○	
16	SI-127A	古墳時代前期住居跡貯蔵穴 A層	7.5YR3/4 暗褐色 砂混じりシルト	○		
17	SI-127A	古墳時代前期住居跡貯蔵穴 B層	7.5YR3/3 暗褐色 砂混じりシルト	○		
18	SI-127A	古墳時代前期住居跡貯蔵穴 C層	7.5YR3/3 暗褐色 砂混じりシルト	○		
19	SI-127A	古墳時代前期住居跡貯蔵穴 D層	7.5YR4/4 褐色 砂混じりシルト	○		
20	SI-127A	古墳時代前期住居跡貯蔵穴 E層	7.5YR4/4 褐色 砂混じりシルト	○		
21	SI-127A	古墳時代前期住居跡貯蔵穴 G層(土器内)	7.5YR3/4 暗褐色 砂混じりシルト	○		
22	SI-115A	弥生時代後期住居跡 炉	7.5YR3/4 暗褐色 砂質シルト	○		
23	SX-09	古墳時代中期円墳周溝覆土炉	7.5YR3/3 暗褐色 砂質シルト	○		
24	SX-01	江戸浅間塚旧表土(C層)	7.5YR3/3 暗褐色 砂混じりシルト	○		
25	SX-01	古墳時代前期方形周溝墓旧表土(E面)	7.5YR3/3 暗褐色 砂混じりシルト	○		
26	調査区東	谷部包含層 1層	7.5YR3/3 暗褐色 砂質シルト	○		
27	調査区東	谷部包含層 3層	7.5YR3/3 暗褐色 砂質シルト	○		
28	調査区東	谷部包含層 5層	7.5YR3/3 暗褐色 砂混じりシルト	○		
29	調査区東	谷部包含層 7層	7.5Y3/4 暗褐色 砂混じり粘土質シルト	○		
30	調査区東	谷部包含層 9層	7.5Y3/4 暗褐色 砂混じり粘土質シルト	○		
31	SX-15	平安時代工房跡 炉G(断面D)	10YR3/2 黒褐色 シルト質砂	○		○
32	SX-15	平安時代工房跡 理土(断面C)	7.5YR4/4 褐色 砂質シルト	○		

色液を加えて分光光度計によりリン酸 (P_2O_5) 濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム (CaO) 濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン含量 (P_2O_5mg/g) とカルシウム含量 ($CaOmg/g$) を求める。

3. 弥生時代～平安時代の古植生推定

(1) 結果

結果を第111表と第267図に示す。イネ科起源の植物珪酸体は、短細胞・機動細胞珪酸体ともに良好に検出される。

SX-01、SX-09の堆積物（試料番号23～25）、調査区東谷部包含層（試料番号26～30）では、植物珪酸体組成に大きな変化が認められない。ネザサ節を含むタケ亜科が多産し、ウシクサ族・イチゴツナギ亜科などが随伴する。また、栽培種のイネ属も試料番号23を除いて検出される。

(2) 考察

調査区東の谷部包含層と周溝墓構築前後の堆積物は、弥生時代～平安時代にかけて堆積したと考えられる。植物珪酸体の組成は著しい差異が認められず、ネザサ節などのタケ亜科が多産する。これより、弥生時代～平安時代にかけてタケ亜科が生育していたと考えられる。台地の縁に立地する本遺跡の周辺は、森林があまり発達せず開けていた可能性がある。また、多くの遺構・遺物等が検出され、生活の場として利用されていたと推測されることから、人為的に周囲の植生を切り開き、開けた空間が広範囲にわたって存在していたことも考えられる。これらのことから、人間が生活していた台地の縁辺部では開けた場所が存在し、ネザサ節を含むタケ亜科・シバ属などのイネ科植物が生育していたと推定される。

一方、SX-09（試料番号23）を除いて、栽培種のイネ属が少量ではあるが検出される。また、後述するが谷部の調査において、ほぼ同時期の層準からイネ属珪酸体が増加する。これより、弥生時代～平安時代にかけて周囲で稲作が営まれていたと考えられる。弥生時代～古墳時代の水田址は、木更津市の芝野遺跡（神野ほか，1992）などいくつか見つかっている。また、イネは胚乳を食用とする他、粃や藁も生活に利用される。したがって、粃や藁が遺跡内に持ち込まれて使われていた可能性がある。

4. 住居跡内の炉・カマドの燃料材推定

(1) 結果

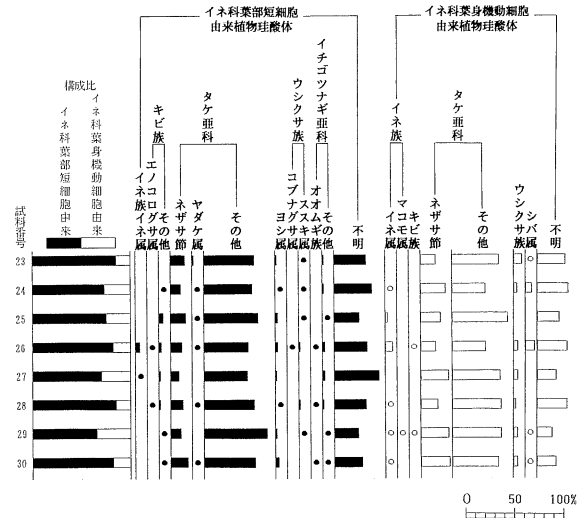
結果を第112表と第268図に示す。イネ科植物起源の植物珪酸体は、試料番号3を除いて、短細胞・機動細胞珪酸体が良好に検出される。

SI-65炉（試料番号1）とSI-86カマド（試料番号8）の植物珪酸体組成は、栽培種のイネ属が優占し、タケ亜科・キビ族を僅かに伴う。特にSI-86カマドでイネ属の組織片が多く検出される。

それ以外のSI-91カマド（試料番号2）・SI-69炉（試料番号3）・SI-39カマド（試料番号9）・SI-162カマド（試料番号10）・SI-177炉（試料番号11）・SI-182炉（試料番号12）・SI-115A 炉（試料番号22）では、ネザサ節を含むタケ亜科が多産し、キビ族・ウシクサ族・イチゴツナギ亜科などを伴う。組織片も少数認められる。また、栽培種のイネ属も試料番号2・3・9・22で検出される。

第111表 植物珪酸体分析結果 (1)

種 類 (Taxa)	試料番号	23	24	25	26	27	28	29	30
イネ科葉部短細胞珪酸体		-	-	-	18	1	-	-	-
イネ族イネ属		-	-	-	2	-	2	-	-
キビ族エノコログサ属		-	2	13	10	3	8	2	4
キビ族(その他)		-	-	-	2	-	2	-	1
タケ亜科ネザサ節	100	35	52	57	18	74	26	83	
タケ亜科ヤダケ属	8	1	2	-	-	-	-	-	
タケ亜科(その他)	351	154	190	216	101	297	158	242	
ヨシ属	8	1	7	10	3	4	3	14	
ウシクサ族コフナグサ属	-	-	-	1	-	-	-	-	
ウシクサ族ススキ属	4	3	1	5	-	7	2	-	
イチゴツナギ亜科オムギ族	-	-	-	1	-	1	-	1	
イチゴツナギ亜科(その他)	8	4	1	12	4	8	1	2	
不明キビ型	62	30	21	35	29	54	10	21	
不明ヒゲシバ型	13	3	3	8	4	16	7	5	
不明タンク型	151	89	63	119	74	124	43	106	
イネ科葉身機動細胞珪酸体		-	-	-	-	-	-	-	-
イネ族イネ属		-	1	2	8	-	1	1	1
イネ族マコモ属		-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族		-	-	1	-	-	-	-	-
タケ亜科ネザサ節	18	29	23	16	29	18	38	30	
タケ亜科(その他)	60	40	65	37	50	55	68	49	
ウシクサ族	10	3	-	4	4	2	6	4	
シバ属	-	7	-	10	-	-	1	1	
不明	35	36	25	32	20	33	21	20	
合 計		705	320	353	496	237	597	252	479
イネ科葉部短細胞珪酸体		124	116	115	108	103	109	137	105
イネ科葉身機動細胞珪酸体		829	436	468	604	340	706	389	584
検 出 個 数									
組 織 片									
イネ属短細胞列		-	1	-	2	1	-	-	-
ネザサ節短細胞列		-	-	-	-	1	-	-	-
タケ亜科短細胞列		-	-	-	1	1	-	-	-
キビ型短細胞列		-	-	-	1	-	-	-	-

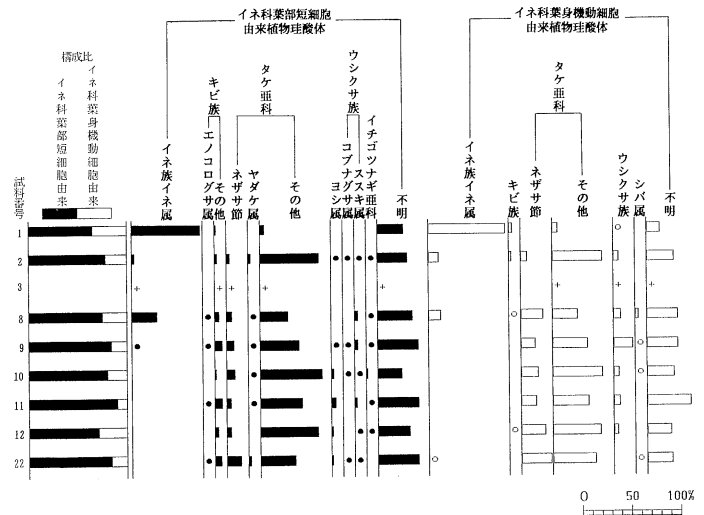


第267図 植物珪酸体組成 (1)

出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体のそれぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、●○は1%未満を示す。

第112表 植物珪酸体分析結果 (2)

種 類 (Taxa)	試料番号	1	2	3	8	9	10	11	12	22
イネ科葉部短細胞珪酸体		-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ族イネ属	148	10	1	89	2	-	-	-	-	-
キビ族エノコログサ属	-	-	-	2	1	-	1	-	1	-
キビ族(その他)	3	9	2	14	39	6	62	8	32	
タケ亜科ネザサ節	-	14	1	17	38	33	32	11	78	
タケ亜科ヤダケ属	-	-	-	1	4	3	1	-	9	
タケ亜科(その他)	8	262	16	100	208	261	387	146	196	
ヨシ属	-	1	-	-	4	8	32	3	8	
ウシクサ族コフナグサ属	-	-	-	-	3	1	-	-	1	
ウシクサ族ススキ属	-	4	-	11	16	1	17	1	5	
イチゴツナギ亜科	-	2	-	2	1	5	3	1	-	
不明キビ型	42	40	5	49	124	24	184	31	80	
不明ヒゲシバ型	4	21	6	5	19	10	64	16	15	
不明タンク型	9	73	11	73	77	66	129	34	130	
イネ科葉身機動細胞珪酸体		-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ族イネ属	91	13	-	14	-	-	-	-	1	
キビ族	4	3	-	1	-	-	-	1	-	
タケ亜科ネザサ節	-	7	-	26	14	18	15	24	32	
タケ亜科(その他)	6	62	16	30	36	53	37	48	46	
ウシクサ族	1	6	7	8	19	5	6	4	-	
シバ属	-	-	-	3	1	1	-	-	1	
不明	15	34	21	36	32	28	45	24	27	
合 計		214	446	42	363	536	418	912	251	555
イネ科葉部短細胞珪酸体		117	125	44	118	102	105	103	101	107
イネ科葉身機動細胞珪酸体		331	571	86	481	638	523	1015	352	662
検 出 個 数										
組 織 片										
イネ属短細胞列	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ属機動細胞列	1	-	1	-	40	-	-	-	-	-
イネ属短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ネザサ節短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ型短細胞列	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タンク型短細胞列	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明機動細胞列	-	2	-	-	1	4	-	-	-	-



第268図 植物珪酸体組成 (2)

出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体のそれぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、●○は1%未満、+は短細胞珪酸体で200個未満、機動細胞珪酸体で100個未満の試料について検出された種類を示す。

(2) 考察

今回分析を行った9試料のうち、弥生時代後期のSI-65炉（試料番号1）と平安時代のSI86カマド（試料番号8）で栽培種のイネ属が多く検出された。とくに、試料番号8では、葉部に形成される短細胞珪酸体を含む組織片が多く検出された。

そのため、弥生時代後期住居跡のSI-65炉・平安時代住居跡のSI-86カマドは、栽培種のイネ属が燃料材に使用されたと考えられる。ところで、神奈川県慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡では、弥生時代の住居跡の炉からイネ属に由来する燃料材が推定されている（パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993）。また、東京都の恵比寿遺跡では近世の土坑であるが、イネ属の葉部が燃えてできた灰が検出されている（恵比寿・三田遺跡調査会, 1993）。このことから、栽培種のイネ属は、食用とするだけでなく、藁や籾なども古くから人々の生活に利用されてきたと考えられる。このため、今回の結果から当時の生活に稲藁が燃料材として利用されたとする情報が得られたことは、植物利用を考える上で興味深い結果であるといえる。

一方、弥生時代中期のSI-69炉（試料番号3）、弥生時代後期のSI-177炉（試料番号11）・SI-182炉（試料番号12）・SI-115A 炉（試料番号13）、古墳時代後期のSI-39のカマド（試料番号9）・SI-162カマド（試料番号10）、平安時代のSI-91カマド（試料番号2）の7試料では、ネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科が多く検出された。また、これらの中には、わずかであるが組織片も認められた。この点を考慮すれば、タケ亜科などもイネ属と同様に燃料材に利用された可能性がある。ただし、この組成は前述のイネ科植生と類似しており、住居址の埋積に伴って周辺から混入したイネ科植物に由来している可能性もある。このため、本遺構の埋積過程や考古学的所見を合わせて、改めて検討する必要がある。

5. 古墳時代前期の貯蔵穴の内容物推定

(1) 結果

結果を第113表と第269図に示す。イネ科起源の植物珪酸体は、試料番号19で機動細胞珪酸体の検出が少ない。それ以外の試料では、短細胞・機動細胞珪酸体が良好に検出される。

SI-127A貯蔵穴覆土（試料番号16～21）の植物珪酸体組成は、著しい変化が認められず、ネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科が優占し、ウシクサ族・イチゴツナギ亜科・シバ属などを伴う。また、組織片は検出されない。

(2) 考察

古墳時代前期の住居跡（SI-127A）貯蔵穴覆土において、イネ科植物の植物珪酸体が多く検出された。覆土（試料番号21～16）の植物珪酸体組成は、ネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科が多産し、ウシクサ族・イチゴツナギ亜科・シバ属が随伴した。また、珪酸体の組織片は認められない。このことから、貯蔵穴内に稲藁などのイネ科作物があったと判断できない。この組成は、周辺のイネ科植生と同様の組成であることから、貯蔵穴が埋積する時に周辺から流入したと考えられる。

6. 古代末～中世の工房跡の燃料材推定

(1) 結果

・植物珪酸体

結果を第114表と第270図に示す。イネ科起源の植物珪酸体は、試料番号5で検出されないが、それ以外で短細胞・機動細胞珪酸体とも良好に検出される。

SX-04工房跡炉Lの試料番号4と試料番号5では、植物珪酸体組成が異なる。試料番号4では、ネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科が優占し、ウシクサ族・イチゴツナギ亜科・シバ属・ヨシ属・キビ族や栽培種のイネ属などを伴う。また、ネザサ節の組織片も検出される。しかし、試料番号5では、植物珪酸体が全く検出されない。

炉Gの試料番号6・7では、植物珪酸体組成に大きな変化が認められない。ネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科が優占し、ウシクサ族・イチゴツナギ亜科・シバ属・ヨシ属・キビ族などを伴う。イネ科の組織片は検出されない。また、栽培種のイネ属が試料番号7のみ検出される。

・種実遺体

SX-04工房跡炉L（試料番号4）では、種実遺体は検出されなかった。

(2) 考察

平安時代のSX-04工房跡炉L・炉Gにおいて、イネ科植物が燃料材に利用された可能性について検討した。炉L（試料番号4・5）は、植物珪酸体組成が異なり、試料番号4でネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科が多産し、組織片が少数認められた。しかし、比較試料の試料番号5では、植物珪酸体が全く検出されなかった。また、試料番号4で種実の洗い出しを試みたが、全く検出されなかった。

一方、炉G（試料番号7）は、対比試料の覆土（試料番号6）と組成がほぼ同様である。ただし、試料番号6では、栽培種のイネ属が検出されなかった。また、炉L（試料番号4）ともほぼ同様で、ネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科が多産した。

上記のとおりSX-04の炉Lと炉Gでは、大きな差異が認められない。このことから、本遺構が埋積する過程において周辺からタケ亜科が混入したと考えられる。なお、イネ属が検出されることや炉Lで僅かに組織片が認められることは、燃料材にタケ亜科やイネ属が利用されたことを反映している可能性がある。

7. 平安時代後期の用途不明遺構の燃料材推定

(1) 結果

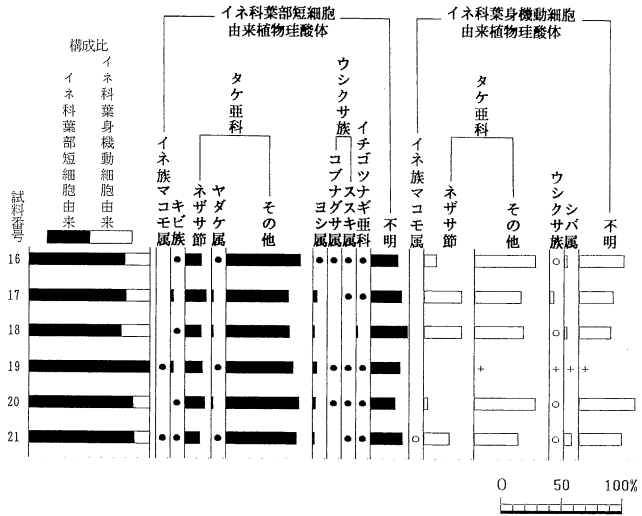
・植物珪酸体

結果を第115表と第271図に示す。イネ科起源の植物珪酸体は、短細胞・機動細胞珪酸体がともに良好に検出される。

SX-15炉G（試料番号31）とSX-15埋土（試料番号32）の植物珪酸体組成には、差異が認められる。炉G（試料番号31）は、栽培種のイネ属が優占し、タケ亜科・ウシクサ族・キビ族などを伴う。また、イネ属の穎珪酸体や組織片も多く検出される。しかし、埋土（試料番号32）では、ネザサ節を含むタケ亜科が多産し、ウシクサ族・イチゴツナギ亜科や栽培種のイネ属などを伴う。

第113表 植物珪酸体分析結果 (3)

種 類 (Taxa)	試料番号	16	17	18	19	20	21
イネ科葉部短細胞珪酸体							
イネ族マコモ属	-	-	-	2	6	-	2
イネ族	3	8	3	6	2	-	6
タケ亜科ネザサ節	61	74	45	50	102	83	4
タケ亜科ヤダケ属	3	6	5	1	9	-	-
タケ亜科(その他)	238	219	177	203	393	402	8
ヨシ属	3	12	4	12	10	-	-
ウシクサ族コブナグサ属	1	-	-	1	2	-	-
ウシクサ族ススキ属	3	2	-	2	3	2	-
イチゴツナギ亜科	1	2	5	1	5	6	-
不明キビ型	16	18	16	12	25	30	-
不明ヒゲシバ型	16	3	17	8	15	15	-
不明ダンチク型	53	87	68	68	90	132	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体							
イネ族マコモ属	-	-	-	-	-	1	-
イネ族	10	33	34	-	3	21	-
タケ亜科ネザサ節	61	41	43	1	52	37	-
タケ亜科(その他)	1	3	1	1	1	1	-
ウシクサ族	2	-	2	-	-	6	-
シバ属	38	30	28	2	47	36	-
不明	-	-	-	-	-	-	-
合 計							
イネ科葉部短細胞珪酸体	388	431	340	366	656	690	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体	102	107	108	6	103	102	-
検 出 個 数	490	538	448	371	759	792	-

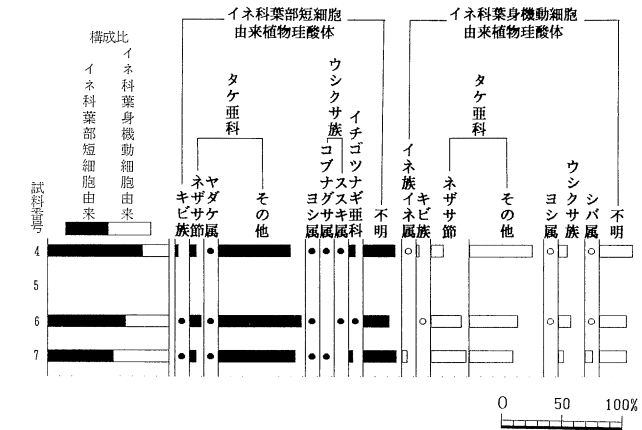


第269図 植物珪酸体組成 (3)

出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体のそれぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、●○は1%未満、+は短細胞珪酸体で200個未満、機動細胞珪酸体で100個未満の試料について検出された種類を示す。

第114表 植物珪酸体分析結果 (4)

種 類 (Taxa)	試料番号	4	5	6	7
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族	9	-	1	1	-
タケ亜科ネザサ節	21	-	21	12	-
タケ亜科ヤダケ属	3	-	1	1	-
タケ亜科(その他)	228	-	163	146	-
ヨシ属	3	-	1	1	-
ウシクサ族コブナグサ属	1	-	1	-	-
ウシクサ族ススキ属	1	-	1	-	-
イチゴツナギ	18	-	1	8	-
不明キビ型	17	-	13	5	-
不明ヒゲシバ型	10	-	3	3	-
不明ダンチク型	74	-	34	55	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	1	-	-	7	-
イネ族	2	-	1	-	-
タケ亜科ネザサ節	11	-	34	59	-
タケ亜科(その他)	58	-	53	71	-
ヨシ属	1	-	1	-	-
ウシクサ族	8	-	14	7	-
シバ属	1	-	1	12	-
不明	30	-	30	44	-
合 計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	386	0	239	233	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体	112	0	134	200	-
検 出 個 数	498	0	373	433	-
組 織 片					
ネザサ節機動細胞列	1	-	-	-	-
不明機動細胞列	1	-	-	-	-

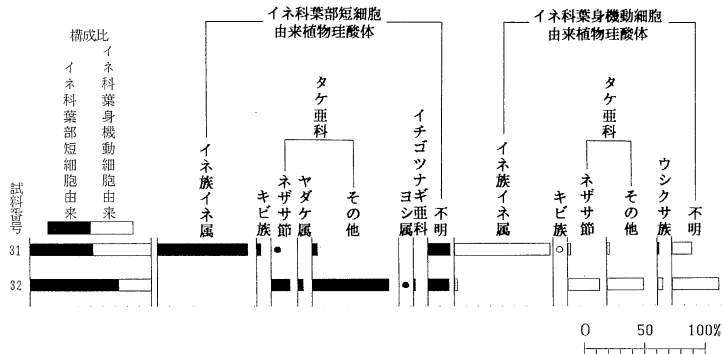


第270図 植物珪酸体組成 (4)

出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体のそれぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、●○は1%未満を示す。

第115表 植物珪酸体分析結果 (5)

種 類 (Taxa)	試料番号	31	32
イネ科葉部短細胞珪酸体			
イネ族イネ属	156	-	-
イネ族	7	-	-
タケ亜科ネザサ節	1	41	-
タケ亜科ヤダケ属	-	10	-
タケ亜科(その他)	9	173	-
ヨシ属	-	2	-
イチゴツナギ亜科	-	3	-
不明キビ型	26	15	-
不明ヒゲシバ型	2	2	-
不明ダンチク型	11	29	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体			
イネ族イネ属	151	2	-
イネ族	1	-	-
タケ亜科ネザサ節	4	27	-
タケ亜科(その他)	3	31	-
ウシクサ族	2	4	-
不明	31	39	-
合 計			
イネ科葉部短細胞珪酸体	212	275	-
イネ科葉身機動細胞珪酸体	192	103	-
検 出 個 数	404	378	-
組 織 片			
イネ属珪酸体	86	-	-
イネ属短細胞列	50	-	-



第271図 植物珪酸体組成 (5)

出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体のそれぞれの総数を基数として百分率で算出する。なお、●○は1%未満を示す。

・種実遺体

SX-15炉 G（試料番号31）の種実遺体は、イネの胚乳・イネの粃・イネの葉部が検出される。

(2) 考察

平安時代後期の用途不明遺構 SX15では、イネ科植物の植物珪酸体が多く検出された。炉 G（試料番号31）では、栽培種のイネ属が高率に検出され、葉部珪酸体列や粃に形成される穎珪酸体も多く検出された。また、種実分析の結果、イネの胚乳が炭化したものやイネの粃が検出された。対比試料の埋土（試料番号32）では、イネ属が少数検出され、ネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科が多く検出された。炉 G でイネの植物体の多くの部位が検出されたことは、先に推定した周辺のイネ科植生とは明らかに違い、また対比試料の埋土と比較しても大きく組成が異なる。これより、炉 G には、イネ属の植物体（葉部、粃）が燃えてできた灰が残留している可能性が高い。なお、先に述べた慶応義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡の例では、弥生時代住居路の路から稲粃由来の珪酸体が検出され、稲粃の燃焼時の性質からおき火の存在が指摘されている（パリノ・サーヴェイ株式会社，1993）。今回の場合でも、そのような可能性があり、今後とも調査事例を増やして検討したい。

8. 円墳周溝内出土甕の内容物推定

(1) 結果

リン・カルシウム分析の結果を第116表に示す。

リン酸：甕内土の含量は $3.34\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ の値を示し、地山土の含量（ $1.62\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ ）に比較して2倍以上の高い値が認められる。また、周溝土に対してもやや高い傾向である。

カルシウム：甕内土の含量は 9.31CaOmg/g の値を示し、地山土（ 2.59CaOmg/g ）はもちろん、周溝土よりもかなり高い値が認められる。

第116表 SX18のリン・カルシウムの分析結果表

試料番号	試料名	リン酸含量	カルシウム含量	土色・土性
		$\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$	CaOmg/g	
13	甕内土	3.34	9.31	黒褐色（10YR2/2）・L
14	周溝土	3.02	5.89	黒褐色（10YR2/2）・L
15	地山土	1.62	2.59	褐色（10YR4/6）・L

注1) リン酸、カルシウムの単位は、ともに乾土1gあたりのmgで表示。

2) 土色の判定は、マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

3) 土性の判定は、土壤調査ハンドブック記載の野外土性の判定法（ペドロジスト懇談改編，1984）による。L…壤土（ある程度砂を感じ、ねばり気もある。砂と粘土を同じくらいに感じられる。）

(2) 考察

土壤に通常含有されるリン酸含量、いわゆる天然賦存量については、次のような調査例がある。Bowen (1983) の調査では中央値が $2.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、Bolt・Bruggenwert (1980) では $1.0\sim 2.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ とされる。川崎ほか (1991) の調査によると、わが国でリン酸含量の比較的高い黒ボク土の平均値が未耕地で $2.1\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 、既耕地で $5.5\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ とされる。また、天野ほか (1991) によるとリン酸の天然賦存量は $2.7\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 以下とされる。なお、各調査例の記載単位が異なるため、ここではすべて $\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ で示した。

これらの事例から推定される土壤中の天然賦存量は、最高でも $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ と考えられる。言い換えれば、この値を著しく越える土壤では外的要因（おそらく人為的影響によるもの）によるリン酸成分の著しい富化が指摘できる。本分析試料では $3.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ を越える試料が甕内土と周溝土に認められ、外的要因による富化が推定される。しかし、甕内土と周溝土に認められる富化の差が極僅かであること、さらにこれまでの分析事例などで人骨の痕跡としてあきらかに把握できた含量が $6.0\text{P}_2\text{O}_5\text{mg/g}$ 前後（バリノ・サーヴェイ株式会社、未発表）であることを考えると、甕内だけにリン成分の高い内容物が遺存していた可能性は低い。

一方、カルシウム含量も甕内で高い。しかし、カルシウムの土坑内での挙動は、リンよりも拡散的である。また、土壤中のカルシウム含量は普通 $1\sim 50\text{CaOmg/g}$ とされており（藤貫，1979）、天然賦存量の含量幅がリン酸よりも大きいために土壤本来の含量と外的要因で富化された含量の区別をすることがリンよりも難しい。この点を考慮するとカルシウム含量の富化を指摘するのは難しい。以上のことから、土坑や甕内に遺体が埋納されたことを積極的に支持することは難しい。今後、同様な事例について調査する場合、土器内外について空間的な試料採取を行う必要がある。

9. まとめ

今回、弥生時代～平安時代の遺構や堆積物を対象として、古植生推定や燃料材・用途に関する調査を行った。

植物珪酸体の産状をみると、弥生時代～平安時代にかけて、本遺跡周辺には、ネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科のササ類が多く生育していたと推定される。このような環境は、遺跡が台地縁辺部に位置し、各時代にわたって集落が形成されているなどの影響を受けたことに由来する可能性がある。また、栽培種のイネ属が検出されることから、弥生時代以降、周辺で稲作が営まれていたと考えられる。

燃料材については、弥生時代後期住居跡の SI-65 炉や平安時代住居跡カマド SI-86 においてイネ属が検出されることから、弥生時代後期以降、炉・カマドでイナワラなどが燃料材の一部に使用されたことがわかった。

古墳時代前期貯蔵穴（SI-127A）内では、稲粃などの痕跡が認められず、イネ科作物などが貯蔵されていたとは考えにくい。

平安時代の工房跡（SX-04）の炉からは、周辺植生と同様のネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科が検出された。これらは遺構埋積時に周辺からもたらされたものと考えられる。ただし、わずかであるがイネ属が検出されること、ネザサ節の組織片が検出されることから、タケ亜科・イネ属が燃料材と

して使用された可能性も現段階で否定はできない。

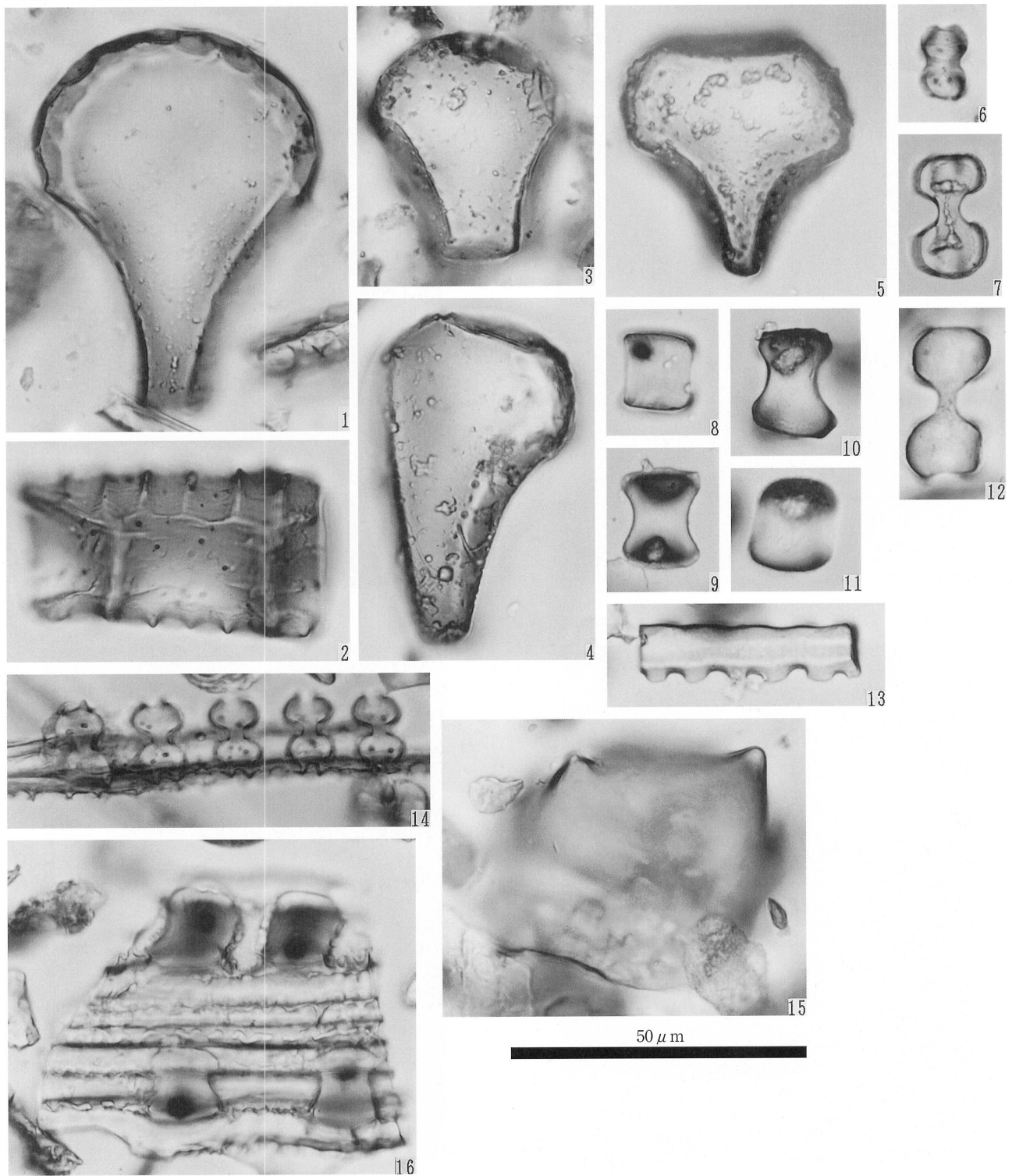
平安時代の不明遺構（SX-15）の炉からは、イネ属の植物体（葉部、胚乳、粃）やそれらの由来する珪酸体が検出された。炉内でこれらが燃料材として利用されたと考えられる。

埋甕（SX-18）内は埋土のリン酸・カルシウム含量と、これまでの研究事例などから考えると、人体埋葬等を直接裏付けることは難しい。

<引用文献>

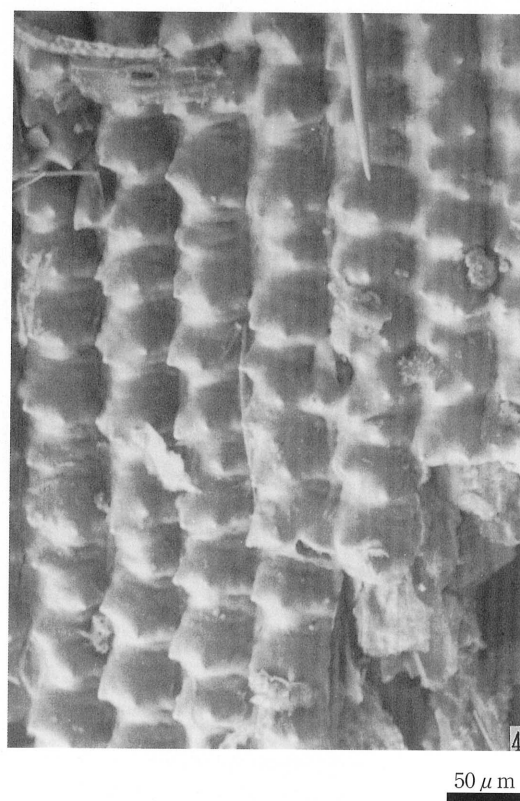
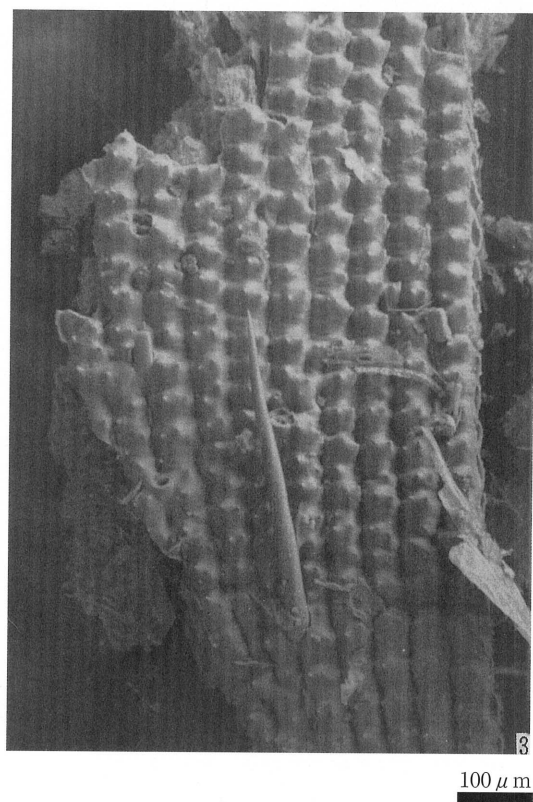
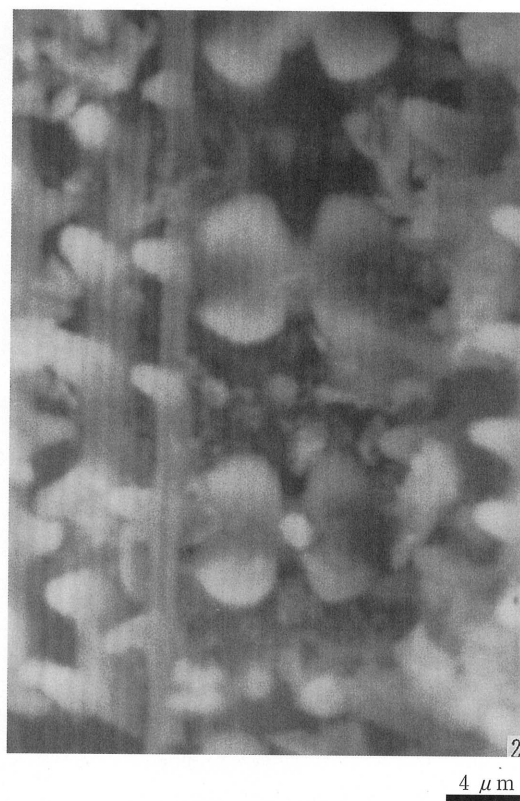
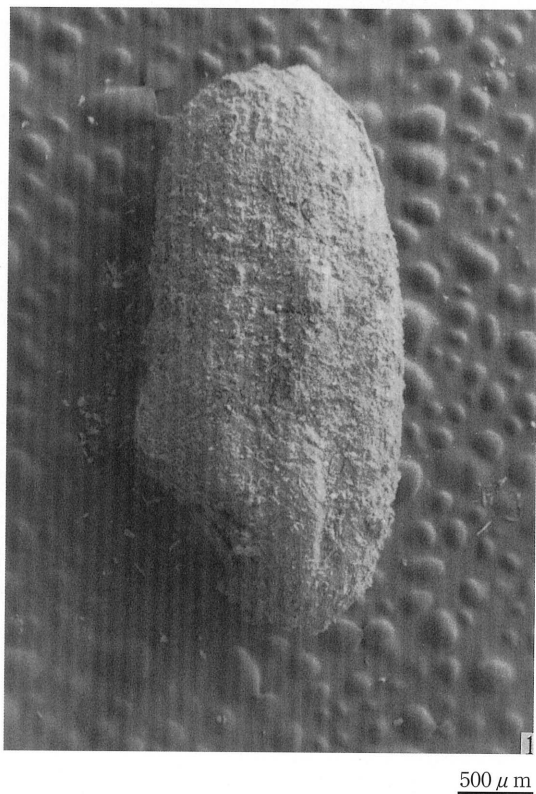
- 天野洋司・太田 健・草場 敬・中井 信（1991）中部日本以北の土壌型別蓄積リンの形態別計量。農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, p.28-36.
- Bowen, H. J. M. (1983) 環境無機化学－元素の循環と生化学－. 浅見輝男・茅野充男訳、297p., 博友社 [Bowen, H. J. M. (1979) Environmental Chemistry of Elements].
- Bolt, G. H.・Bruggenwert, M. G. M. (1980) 土壌の化学。岩田進午・三輪容太郎・井上隆弘・陽 捷行訳, 309p., 学会出版センター [Bolt, G. H. and Bruggenwert, M. G. M. (1976) SOILCHEMISTRY], p.235-236.
- 土壌標準分析・測定法委員会編（1986）土壌標準分析・測定法・354p., 博友社.
- 土壌養分測定法委員会編（1981）土壌養分分析法. 440p., 養賢堂.
- 恵比寿・三田遺跡調査会（1993）「恵比寿 一旧サッポロビール恵比寿工場地区発掘調査報告書－」. 527p., 恵比寿・三田遺跡調査会.
- 藤貫 正（1979）カルシウム・地質調査所化学分析法. 52:57-61, 地質調査所.
- 神野 信・加藤修司・沖松信隆（1992）木更津市芝野遺跡における水田跡について. 研究連絡誌34, p.30-37., 千葉県文化財センター.
- 川崎 弘・吉田 滯・井上恒久（1991）九州地域の土壌型別蓄積リンの形態別計量. 農林水産省農林水産技術会議事務局編「土壌蓄積リンの再生循環利用技術の開発」, 149p.:p.23-27.
- 近藤錬三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p.31-64.
- 京都大学農学部農芸化学教室編（1957）農芸化学実験書 第1巻. 411p., 産業図書.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修（1967）新版標準土色帖.
- 大越昌子（1985）プラント・オパール分析. 平賀遺跡群発掘調査報告書, p.803-815, 平賀遺跡調査会.
- バリノ・サーヴェイ株式会社（1993）遺跡とその周辺の環境と歴史.「慶應義塾湘南藤沢キャンパス内遺跡」, 第1巻 総論, p.285-370, 慶応義塾.
- ペドロジスト懇談会（1984）野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壌調査ハンドブック」, 156p.:p.39-40, 博友社.
- 佐瀬 隆（1982）古墳時代住居址の炉に関する焼土について－植物起源粒子の植物珪酸体から見て－. p.303-308, 多摩ニュータウン遺跡, 東京都埋蔵文化財センター調査報告書（第2集）.

図版 1 植物珪酸体



- | | |
|-----------------------------|--------------------------|
| 1. イネ属機動細胞珪酸体 (試料番号31) | 2. ネザサ節機動細胞珪酸体 (試料番号 6) |
| 3. タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料番号16) | 4. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (試料番号23) |
| 5. シバ属機動細胞珪酸体 (試料番号 7) | 6. イネ属短細胞珪酸体 (試料番号27) |
| 7. キビ族短細胞珪酸体 (試料番号 2) | 8. ネザサ節短細胞珪酸体 (試料番号10) |
| 9. ヤダケ属短細胞珪酸体 (試料番号18) | 10. タケ亜科短細胞珪酸体 (試料番号19) |
| 11. ヨシ属短細胞珪酸体 (試料番号19) | 12. ススキ属短細胞珪酸体 (試料番号 8) |
| 13. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (試料番号26) | 14. イネ属短細胞珪酸体列 (試料番号31) |
| 15. イネ属穎珪酸体 (試料番号31) | 16. ネザサ節短細胞珪酸体列 (試料番号27) |

図版 2 植物遺体の電子顕微鏡写真



1. イネの胚乳 (試料番号31) 2. イネ属短細胞珪酸体列 (試料番号31)
3. イネ粳の穎珪酸体列 (試料番号31) 4. イネ粳の穎珪酸体列 (試料番号31)

2. 谷部分の古環境(第117、118、119表、第272～283図)

はじめに

前項では釜神遺跡の台地上について古植生などの分析を行ったが、本項では周辺の低地(谷)についての古環境の分析を行っており、釜神遺跡と密接な関係があるため、その成果を記載する。

今回の分析対象地は、釜神遺跡西側に存在する養老川支流高坂川が形成する幅約150mの小谷出口付近東側部分で、標高は約18～20m、釜神遺跡の存在する台地とは約15mの比高をもつ(第272図)。この付近は小字で「後谷」と呼ばれており、遺跡としては浅井小向後谷遺跡である。

今回の報告は、以前に当該箇所にトレンチ等を設定した際の分析結果である。

1. 試料

試料を採取した地点はLトレンチと第1トレンチ～第3トレンチである(第273図)。その中で第2トレンチについては微高地上の堆積物であり、分析目的を考慮して、分析調査対象から除外した。層名は、第1トレンチ・第3トレンチともLトレンチ調査の際の層相を参考にした。とくに第3トレンチとLトレンチは重機により深掘りした結果、泥炭層が認められ、材・葉などの植物遺体が検出されたことから、これらも採取した。Lトレンチ、第1トレンチ、第3トレンチの模式柱状図を第274図に示す。各トレンチから採取した試料は、分析目的等を考慮して各分析項目毎に選択する。分析を行った試料の採取層準については、第274図にまとめて記す。

2. 方法

(1) 放射性炭素年代測定

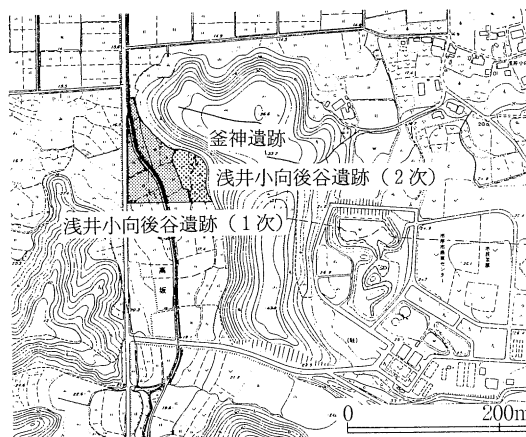
測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

(2) テフラ分析

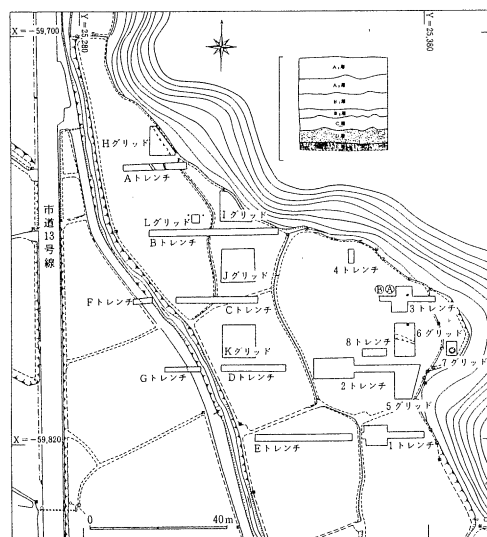
試料に水を加え、小型超音波洗浄装置により分散、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより泥分を除去する。得られた砂分を実体顕微鏡および偏光顕微鏡下で観察し、テフラの本質物質である軽石、スコリア、火山ガラスの産状を調べる。

(3) 珪藻分析

試料を湿重で約7g秤量し、過酸化水素水、塩酸の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下、乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、プレパラートを作製する。



第272図 浅井小向後谷遺跡の位置 (1 : 10,000)



第273図 トレンチの位置図

検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでプレパラートの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（珪藻化石の少ない試料はこの限りではない）。

種の同定は、K. Krammer and Lange-Bertalot (1986, 1988, 1991a, b) などを用いる。なお、珪藻の生態性の解説を表117に示す。また、産出した珪藻遺骸が現地性か異地性か判断する目安として、完形殻の出現率を求めて考察の際に考慮する。同定結果は、産出種をアルファベット順に並べた一覧表で示す。

堆積環境の解析にあたっては、塩分濃度に対する適応性から産出種を海水－汽水－淡水生種に分類し、淡水生種については更に塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応性について生態区分する。そして、産出個数全体を基数として、2.0%以上を分類群について、主要珪藻化石の層位分布図を作成する。環境解析にあたっては、安藤（1990）、伊藤・堀内（1991）の環境指標種群を参考とする。

（4）花粉分析

試料約10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（Taxa）について同定・計数する。

結果は、各種類毎の一覧表として示す。また、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出して図示する。

（5）植物珪酸体分析

試料約5 g について、過酸化水素と塩酸による有機物と鉄分の除去、超音波処理による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム（比重2.5）による重液分離を順に行い、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。なお、同定には近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にした。

結果は、検出された植物珪酸体の種類と個数を一覧表で示す。また、各種類の出現傾向から、生育していたイネ科植物を検討するために植物珪酸体組成図を作成する。出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数として百分率で算出する。

（6）樹種同定

剃刀の刃を用いて、試料の木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラル（抱水クロラル・アラビアゴム粉末・グリセリン・蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとした。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

第117表 珪藻の生態性

塩分濃度に対する区分		塩分濃度に対する適応性		生 育 環 境 (例)
海水生種： 強塩生種 (Polyhalobous)	塩分濃度40.0パーミル以上に出現するもの	強中塩生強 (α -Mesohalobous) 弱中塩生強 (β -Mesohalobous)		低緯度熱帯海域、塩水湖など
	海産性種、塩分濃度40.0～30.0パーミルに出現するもの			一般海域 (ex 大陸棚及び大陸棚以深の海域)
汽水生種： 中塩生種 (Mesohalobous)	塩分濃度30.0～0.5パーミルに出現するもの	塩分濃度0.5パーミル以下に出現するもの		河口・内湾・沿岸・塩水湖・潟など
	出現するもの			一般陸水域(ex 湖沼・池・河川・沼沢地・泉)
淡水生種：貧塩生種 (Oligohalobous)	塩分・pH・流水に対する適応性			
塩 分 に る 対 適 す 性	貧塩－好塩性種 (Halophilous)	少量の塩分がある方がよく生育するもの		高塩類域 (塩水遡上域・温泉・耕作土壌)
	貧塩－不定性種 (Indifferent)	少量の塩分があってもこれによく耐えることができるもの		一般陸水域 (湖沼・池・沼・河川・沼沢地など)
	貧塩－嫌塩性種 (Halophobous)	少量の塩分にも耐えることのできないもの		湿原・湿地・沼沢地
	広域塩性種 (Euryhalinous)	低濃度から高濃度まで広い範囲の塩分濃度に適応して出現するもの		一般淡水～汽水域
	真酸性種 (Acidobiontic)	pH7.0以下に出現、特にpH5.5以下の酸性水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・火口湖 (酸性水域)
pH に 対 す る 適 応 性	好酸性種 (Acidophilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以下の水域で最もよく生育するもの		湿原・湿地・沼沢地
	pH－不定性種 (Indifferent)	pH7.0付近の中性水域で最もよく生育するもの		一般陸水域(ex 湖沼・池沼・河川)
	好アルカリ性種 (Alkaliphilous)	pH7.0付近に出現、pH7.0以上の水域で最もよく生育するもの		
	真アルカリ性種 (Alkalibiontic)	pH8.5以上のアルカリ性水域で最もよく生育するもの		アルカリ性水域
	真上水性種 (Limobiontic)	止水域にのみ出現するもの		流水の少ない湖沼・池沼
流 水 に 対 す る 適 応 性	好止水性種 (Limnophilous)	止水域に特徴的であるが、流水にも出現するもの		湖沼・池沼・流れの穏やかな川
	流水不定性種 (Indifferent)	止水域にも流水域にも普通に出現するもの		河川・川・湖沼
	好流水性種 (Rheophilous)	流水域に特徴的であるが、止水域にも出現するもの		河川・川・小川・上流域
	真流水性種 (Rheobiontic)	流水域にのみ出現するもの		河川・川・流れの速い川・溪流・上流域
	好気性種 (Aerophilous)	好気的環境 (Aerial habitats) 水域以外の常に大気に曝された特殊な環境に生育する珪藻の一群で多少の湿り気と光さえあれば、土壌表層中のコケの表面に生育可能特に、土壌中に生育する陸生珪藻を土壌珪藻という		- 土壌表層中や土壌に生えたコケに付着 - 木の根元や幹に生えたコケに付着 - 濡れた岩の表面やそれに生えたコケに付着 - 滝の飛沫で湿ったコケや石垣・岩上のコケに付着 - 洞窟入口や内部の照明の当たった所に生えたコケに付着

註 塩分に対する区分は Lowe (1974)、pH と流水に対する区分は Hustedt (1937-38) による。

(7) 葉同定

葉が含まれる試料は、水酸化ナトリウム水溶液に浸して土壌を泥化させたあと、水浴中で静かにはがして抽出した。双眼実体顕微鏡下で種類を同定し、ほう酸水溶液中に浸した。

3. 各分析の成果

(1) 放射性の炭素年代測定

結果を第118表に示す。

第118表 L トレンチにおける放射性炭素年代測定結果

試料	年代値 (1950よりの年数)	CodeNo.
F 層中の木材	3470±100y.B.P. 1520B.C.	Gak-18657
F 層 (試料番号16)	3380±90y.B.P. 1610B.C.	Gak-18658
I 層 (試料番号19)	6480±140y.B.P. 4350B.C.	Gak-18659

(2) テフラ分析

処理後に得られた砂分中には、中量のスコリアと少量の軽石が認められた。スコリアは、最大径約 1.2mm、黒色～灰黒色を呈し発泡の不良なものが多く、これに褐色で発泡のやや良好なものと黒色で発泡のやや良好なものが少量混在する。軽石は、最大径約 3 mm、灰白色～灰褐色を呈し、発泡は不良～やや不良である。これらスコリアの特徴、およびスコリアと軽石が混在することから、試料中に認められたスコリアと軽石は A. D. 1707 年 (宝永 4 年) に富士山より噴出した富士宝永テフラ (F-Ho) に由来する。

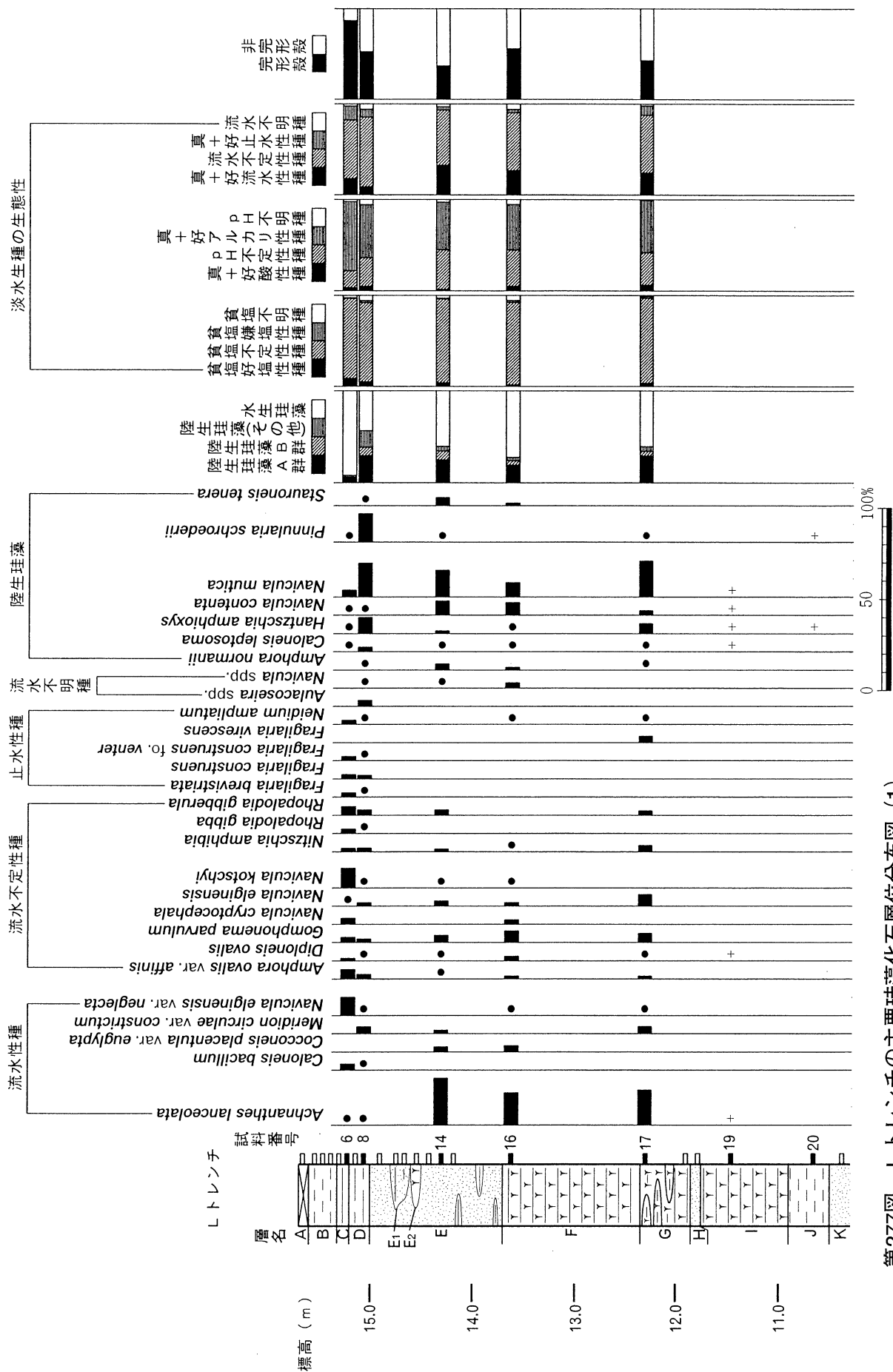
試料中には F-Ho に由来しない碎屑物も多く含まれることから、F-Ho が降灰後にある程度の攪乱を受けた堆積物であると考えられる。しかし、その採取層準は、降灰層準をおおよそ示すと考えて良い。したがって、A 層は F-Ho 降灰以降の堆積層であると考えられる。

(3) 珪藻分析

結果を第275～277図に示す。珪藻化石は、L トレンチのJ 層・I 層で31個体以下と少ないが、それ以外の試料で豊富に産出する。産出種の多くは淡水生種で構成され、産出分類群数は合計32属259種類である。完形殻の出現率は、L トレンチの試料番号14・17が40%以下であるが、それ以外の各試料が60%～90%である。以下に各トレンチ毎に珪藻化石群集の特徴を述べる。

・第1 トレンチ

淡水生種の生態性のうち、塩分と水素イオン濃度については、いずれの試料も貧塩不定性種、真・好カルカリ性種が優占する。流水に対しては試料番号 4 と試料番号 3 の間を境として、下位では流水不定性種、上位では真・好止水性種が優占する。E 層・D 層の特徴的な種は、流水不定性の *Gomphonema parvulum* が 5～10%、好流水性の *Navicula elginensis* var. *neglecta* が 5%前後、好流水性で中～下流性河川指標种群 (安藤, 1990) の *Achnanthes lanceolata* が 3%前後、陸上の好気的環境に耐



性のある陸生珪藻の A 群（伊藤・堀内，1991）の *Navicula mutica* が 5～10% 産出する。一方、C 層は上部と下部で珪藻化石群集に違いが認められる。上部（試料番号 3・2）では、好止水性の *Fragilaria brevistriata*、*F. construens*、*F. construens* fo. *venter* が 20～40% と優占する。これに対して、下部（試料番号 4）では、下位の D 層の群集に近似する。なお、本試料からは汽水生種の *Diploneis pseudovalis* が低率ながら産出する。

• 第 3 トレンチ

淡水生種の生態性の特徴は、塩分に対しては貧塩－不定性種、pH に対しては真・好カルカリ性種と pH 不定性種が優占あるいは多産する。流水に対しては、試料により違いが認められ、試料番号 5・6 では好流水性種、試料番号 1 では真・好止水性種、それ以外の試料では流水不定性種が多産する。また、下位の試料番号 7 では、陸生珪藻が全体の 5 割を占める。

産出種の特徴は、試料番号 7 では陸生珪藻の A 群の *Navicula mutica* が約 20% 産出し、これに付随して同じく陸生珪藻の A 群の *Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta* が 5% 前後、水生珪藻では中～下流性河川指標種群の *Achnanthes lanceolata* が約 7%、流水不定性の *Gomphonema parvulum* が約 5% 産出する。試料番号 5・6 では、中～下流性河川指標種群の *Achnanthes lanceolata* が 25～40% と優占し、流水不定性の *Gomphonema parvulum* が 15～20% 産出する。D 層相当の試料番号 3・4 では、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、*Navicula kotschyi*、*N. veneta*、*Achnanthes exigua*、*A. hungarica* が数%～10% 産出する。C 層は、1 トレンチの場合と同様に同一層内で珪藻化石群集に違いが認められる。上位の試料番号 1 では、好止水性の *Fragilaria brevistriata*、*F. construens*、*F. construens* fo. *venter* が約 20% と優占する。これに対して、下位の試料番号 2 では、下位の D 層の群集に近似し *Gomphonema parvulum* 等の流水不定性種が多産する。また、汽水付着性種の *Nitzschia constricta* var. *subconstricta*、*N. levidensis* var. *victoriae* を低率ながら伴う。

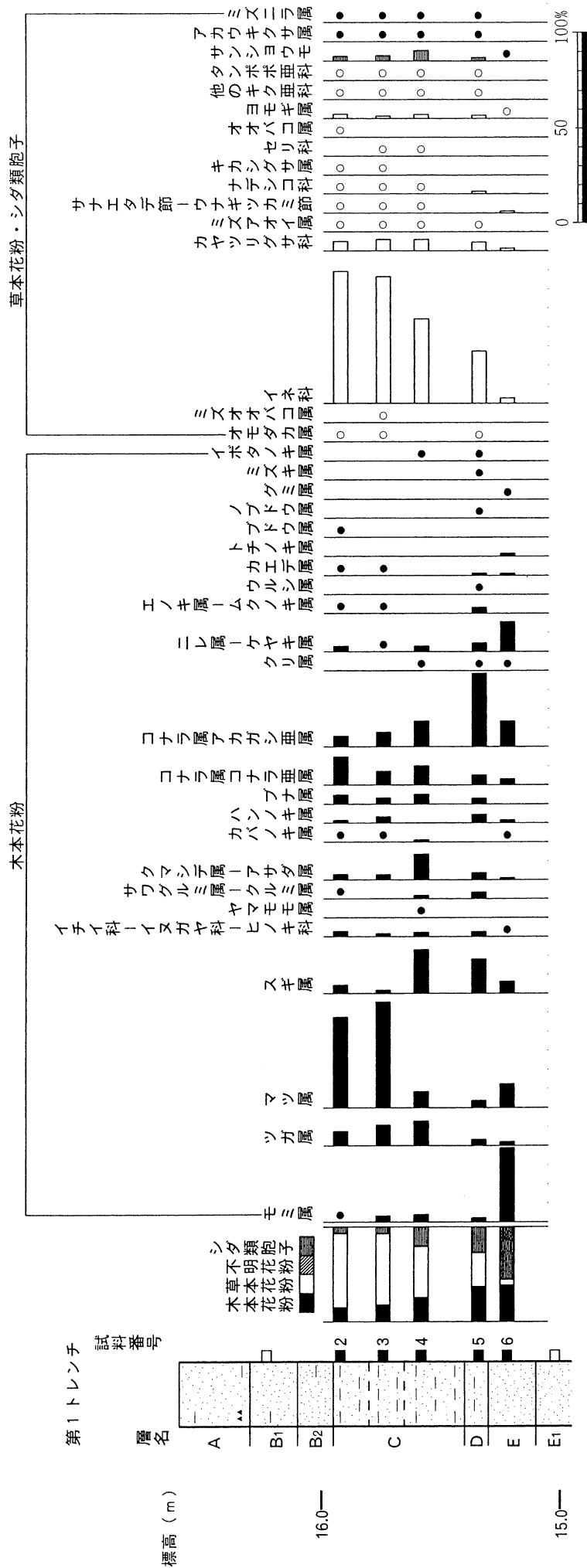
• L トレンチ

化石が豊富に産出する試料における淡水生種の生態性は、塩分に対しては貧塩－不定性種、pH に対しては真・好アルカリ性種と pH 不定性種で特徴づけられる。流水に対しては、層位により違いが認められ、E 層～G 層では真・好流水性種と流水不定性種が多産するが、C 層・D 層では流水不定性種が多産する。

E 層～G 層の試料番号 14～17 は、中～下流性河川指標種群の *Achnanthes lanceolata* が 20～25% と優占する。これに付随して、流水不定性の *Gomphonema parvulum*、沼沢湿地付着生種群の *Navicula elginensis* 等が産出する。また、陸生珪藻の A 群の *Navicula mutica* も 10～20% 産出する点も特徴である。D 層では、陸生珪藻の A 群の *Navicula mutica*、*Hantzschia amphioxys*、未区分陸生珪藻の *Pinnularia schroederii* が 10～20% と多産し、水生珪藻では、流水不定性の *Amphora ovalis* var. *affinis*、*Rhopalodia gibberula* が低率ながら産出する。C 層は、好流水性の *Navicula elginensis neglecta*、流水不定性種の *Navicula kotschyi* がそれぞれ 10%、同じく流水不定性の *Amphora ovalis* var. *affinis*、*Rhopalodia gibberula* が約 5% 産出する。

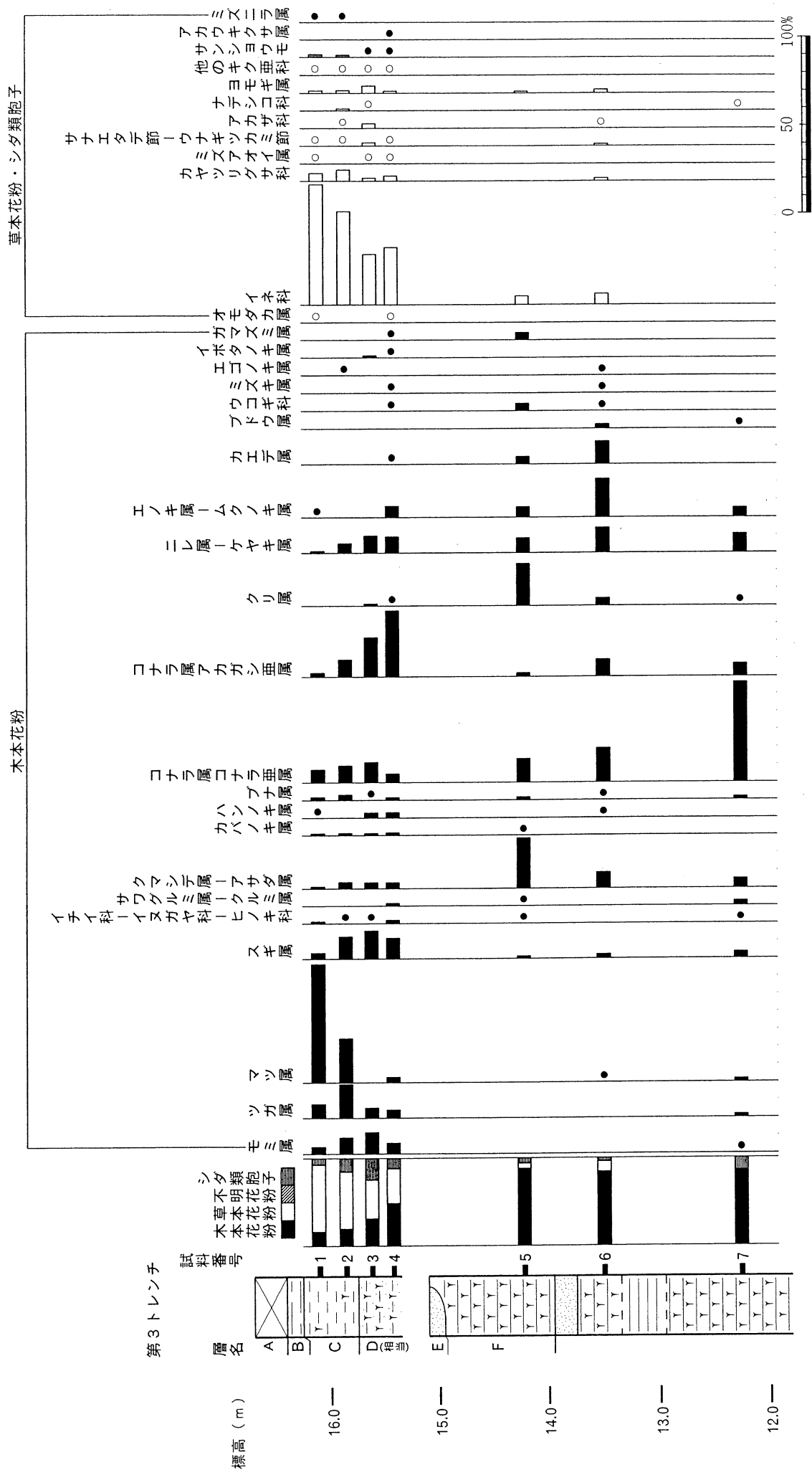
(4) 花粉分析

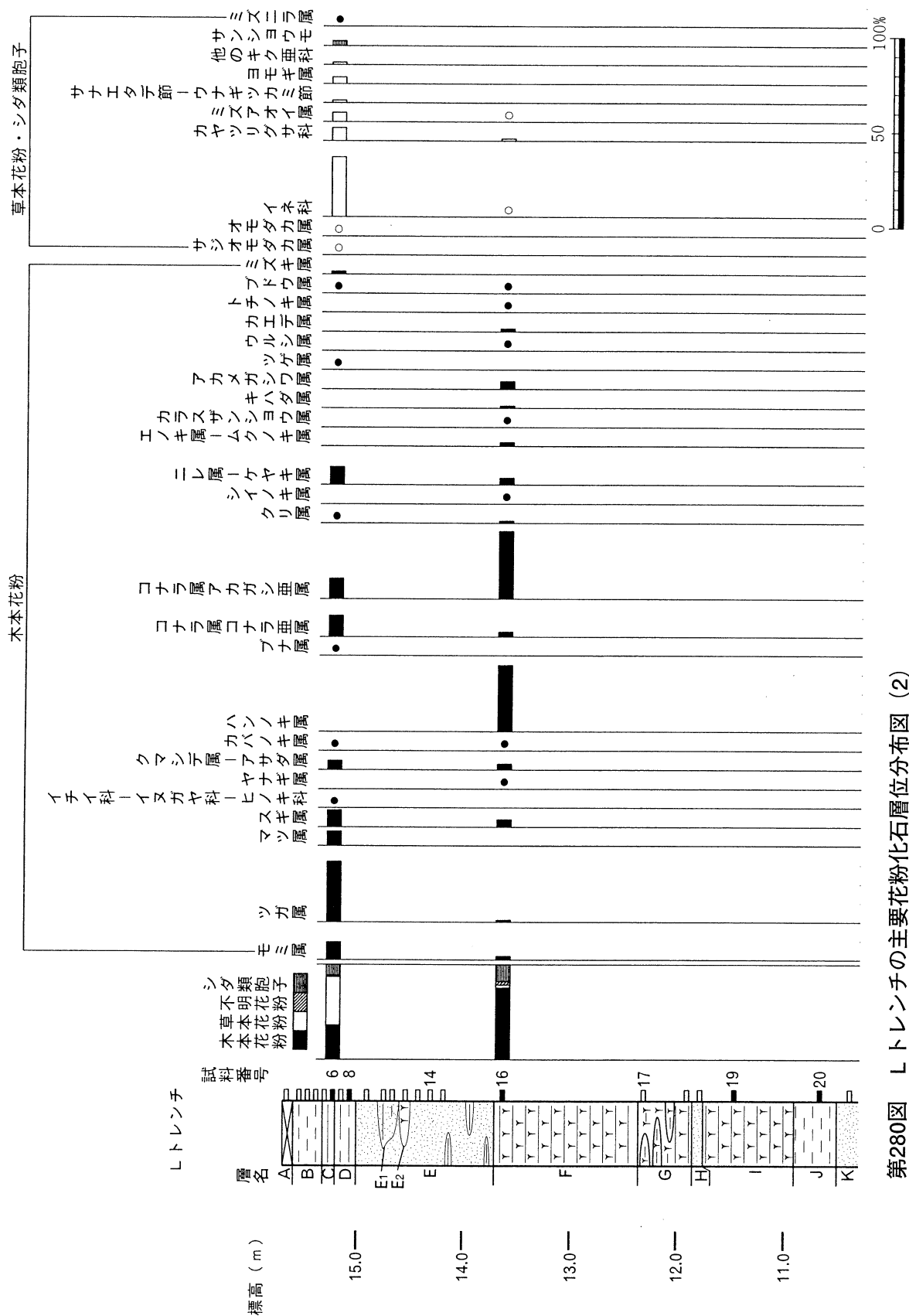
結果を第 278～280 図に示す。以下に各地点毎の結果について記す。



第1トレンチの主要花粉化石層位分布図 (2)

出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。





出現率は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。

• 第1トレンチ

試料番号6の構成比をみると、木本花粉の割合が高い組成を示す。木本花粉ではモミ属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属が比較的多くみられるが、草本花粉は少ない。試料番号5～4は、草本花粉の種類数・個体数共に増加する。草本花粉・シダ類胞子はイネ科の割合が高く、ミズアオイ属、サンショウモ、アカウキクサ属などの水生植物もみられる。木本花粉ではスギ属、コナラ属アカガシ亜属の割合が比較的高い。試料番号3～2は、草本花粉がさらに増加し、特にイネ科の割合が高くなる。木本花粉はマツ属が急増し、優占する。

• 第3トレンチ

試料番号7～5の構成比をみると、木本花粉の割合が高い。木本花粉は、試料番号7でコナラ属コナラ亜属、試料番号6でコナラ属コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属、エノキ属ームクノキ属、カエデ属、試料番号5で、クマシデ属ーアサダ属、コナラ属コナラ亜属、クリ属が多く検出される。試料によって組成が散逸しており、種類ごとの増減といった傾向がとらえにくい。

試料番号4～3は、草本花粉の種類数・個体数共に増加する。草本花粉・シダ類胞子はイネ科の割合が高く、ミズアオイ属、サンショウモ、アカウキクサ属などの水生植物もみられる。木本花粉ではスギ属、コナラ属アカガシ亜属の割合が比較的高い。試料番号2・1は草本花粉がさらに増加し、特にイネ科の割合が高い。木本花粉はマツ属が急増し、上部で優占する。

• Lトレンチ

試料番号6・16から良好に検出されるが、他からはほとんど検出されない。試料番号16では草本花粉がほとんど検出されず、木本花粉の割合が高い。木本花粉は、ハンノキ属とコナラ属アカガシ亜属が多産する。試料番号6では木本花粉より草本花粉の割合が高い。木本花粉はツガ属が高率で、マツ属、スギ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属も比較的多い。草本花粉はイネ科の割合が高く、イネ属も多数含まれる。その他、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属など水生植物の花粉化石もわずかに検出される。

(5) 植物珪酸体

結果を第281～283図に示す。以下に、各地点の産状を述べる。

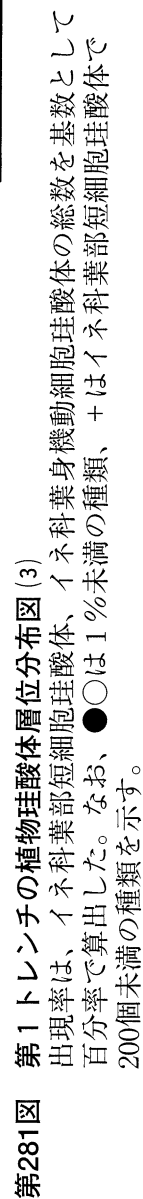
• 第1トレンチ

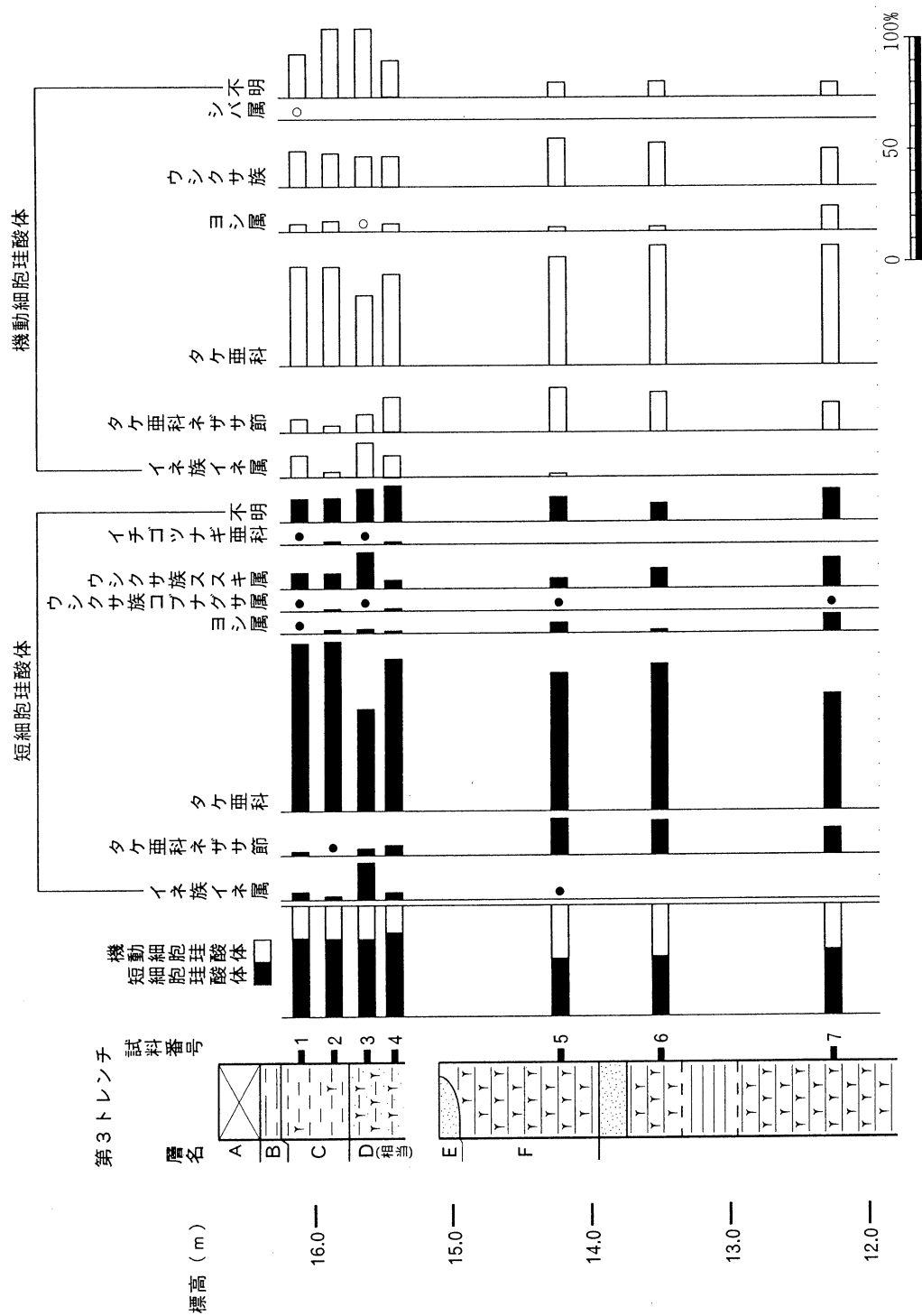
植物珪酸体は、試料番号6で短細胞珪酸体の検出個数が少なかったものの、良好に検出される。試料番号6ではタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。また、栽培植物のイネ属の機動細胞珪酸体がわずかに検出される。試料番号5では検出される種類に変化は認められない。タケ亜科とともに、イネ属機動細胞珪酸体も高い出現率を示す。試料番号4～2でも同様な種類が検出され、その中ではタケ亜科の割合が高い。イネ属は、上位に向けて増加する傾向が認められる。なお、試料番号6～4では、近藤・ピアスン(1981)の樹木起源珪酸体第Ⅳグループもわずかに検出される。

• 第3トレンチ

各試料から植物珪酸体が検出されるものの、試料番号7～5では保存状態は悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

試料番号7～5の植物珪酸体組成は類似しており、タケ亜科が優占し、ウシクサ族、ヨシ属などを





第282図 第3トレンチの植物珪酸体層位分布図 (3)

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。

伴う。また、試料番号5でイネ属がわずかに認められる。試料番号4～1でも、下位と同様にタケ亜科が優占する組成が認められるものの、イネ属の出現率が高くなる。イネ属は、試料番号3で出現率がさらに高くなるが、試料番号2で低くなり、試料番号1で再び高くなる。なお、試料番号3～1では、前述の樹木起源珪酸体第IVグループもわずかに検出される。

・Lトレンチ

植物珪酸体は、いずれの試料からも検出される。保存状態は、試料番号6・8が良好であるが、試料番号16・19・20が表面に多数の小孔（溶食痕）が認められるものが多い。

試料番号20～16ではタケ亜科が優占し、キビ族、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などを伴う。試料番号8ではタケ亜科が減少し、栽培植物のイネ属が出現する。試料番号6では試料番号8と同様な組成であり、タケ亜科が優占し、キビ族、ウシクサ族などが伴う。また、イネ属の葉部や外穎に形成される植物珪酸体も認められる。

(6) 樹種同定

第3トレンチの出土材は、E層から検出されたものはムクノキ、F層から検出されたものはカエデ属（W-1）、チドリノキ（W-2）にそれぞれ同定された。また、Lトレンチから検出された木材は、いずれもコナラ属コナラ亜属であった。以下に解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.） ブナ科

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火災状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。

・ムクノキ（*Aphananthe aspera* (Thunb.) Planchon） ニレ科ムクノキ属

散孔材で横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性Ⅱ型、1～4細胞幅、1～20細胞高。柔組織は周囲状およびターミナル状。

・チドリノキ（*Acer carpinifolium* Sieb. et Zucc.） カエデ科カエデ属

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～10細胞幅、1～100細胞高を越える。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

・カエデ属（*Acer* sp.） カエデ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～20細胞高。細胞壁の厚さが異なる2種類の木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

上記のチドリノキを除くカエデ属と考えられるが、種類の特定には至らなかった。

(7) 葉同定

第3トレンチF層から出土した葉は、コナラ属アカガシ亜属とカヤに同定された。以下に形態的特徴を記す。

- ・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

葉の破片が検出された。針形、偏平で、長さ4 mm、幅1.5mm程度。先端部は鋭く尖る。裏面は、中肋の両側に白色の気孔が帯状に何列も分布する。

- ・アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* sp.) ブナ科コナラ属

葉は断片で検出されるが、推定される全体の大きさは7~10cm程度。長楕円形で革質。表面に光沢がある。葉の裏面は無毛。鋸歯が存在する。

4. 考察

(1) 堆積環境の変遷

F層より下位の層準では、中~下流性河川指標種群の一種である *Achnanthes lanceolata* が優占する試料が多い。このことから、本層が堆積する頃は流水の影響を頻繁に受ける環境であったと考えられる。また、陸生珪藻が多く含まれる層位もあることから、谷斜面からの土壌の流入も多くあったと推定される。これらのことから、約3500年前以前の谷内の状況は、流水の影響を受ける不安定な状況で、谷斜面や谷内に生育していた木本類が流されてきて厚く堆積し、木本質の泥炭層が形成されていったと推定される。なお、LトレンチのI層・J層については、花粉化石・珪藻化石の保存が悪く、堆積環境の変遷を推定することは難しい。ただし、陸生珪藻が多産する傾向が認められることから、これらの堆積物は台地上の腐植層（いわゆる黒ボク土）が流れ込んだ可能性もある。Lトレンチは、第1トレンチと比較して谷の奥にあたることから、より谷斜面や台地上の影響を受けやすいものと考えられる。

E層は、Lトレンチで流水指標種が優占するが、第1トレンチで複数の堆積環境を指標する種群が混合するいわゆる混合群集の特徴が認められる。混合群集から構成される堆積物は、珪藻化石の現地性がきわめて低い。これらのことから、E層が堆積した時期は、各地点とも流水や氾濫の影響を強く受けるような環境が推定される。このような特徴は、ラミナがみられる砂層である点からも調和的である。

D層は、地点により環境が異なっていたと考えられる。Lトレンチでは、陸生珪藻が多産することから、しばしば乾燥することもある湿地のような場所で堆積したことが推測される。これに対して、第1トレンチ・第3トレンチは、E層と同様な混合群集であることから、氾濫の影響を受ける不安定な環境であったと予測される。混合群集の中に富栄養水域に生育する種が多く認められることから、水質的にはE層よりも富栄養であった可能性がある。

C層もLトレンチと第1トレンチ・第3トレンチとの間で組成が異なる。Lトレンチでは、沼沢湿地のような環境が推測される。一方、第1トレンチと第3トレンチでは、下部と上部で珪藻化石群集が異なっている。下部はD層と同様な群集を示すことから、氾濫の影響を受ける不安定な堆積環境が推定される。上部になると好止水性種が優占することから、これらの種群の生育に適した沼沢地~池沼のような止水域へと変化したと推定される。特に、富栄養水域に多く認められる種が多い傾向にあることから、水質的に富栄養であったと考えられる。

以上のことから、谷の奥にあたるLトレンチと、谷の出口に近い第1トレンチ・第3トレンチでは、堆積状況が違うと考えられる。F層よりも以深では、分析調査地点ともに谷奥から流れる水の影響を

受けていたと考えられる。E層よりも上位でも、Lトレンチでは引き続き局地性の高い群集組成を示すため、谷内の水域環境の影響下にあったものと推定される。これに対し、第1トレンチ・第3トレンチでは混合群集からなる組成を示す。このような群集は、沖積低地などによくみられることから(堀内ほか, 1996)、集水域の大きな養老川の氾濫の影響を受けた堆積層と考えられる。再び両方の環境が近似してくるのは、C層の上部である。C層の上部は、他の微化石の成果により、近世以降の堆積物と考えられる。また、土層断面観察から水田耕土の可能性がある。このことから、C層上部の水域変化は人為的な水田開発などの影響によることを示唆しているように思われる。

(2) 当時の植生変遷

今回得られた植物化石群集は、調査地点が小谷の縁辺部という立地環境から、谷内から谷斜面にかけて分布する局地的な植生を反映していると思われる。ただし、風媒花の本木花粉など広域性を反映している可能性が高いものも含まれることから、このことも考慮して、それぞれの変化に着目した考察を行う。

F層よりも下位の層準では、本木花粉が多く、草本花粉がほとんどみられない。また、堆積物中に木材片や本木起源の葉などが検出されることから、泥炭の由来は本木質であると考えられる。このことから、得られた化石群集は、当時の谷斜面や谷内に生育していたものに由来し、局地性が高いと推定される。各層位ごとに組成が変化するのは、谷内に流れ込んだ際に反映される局地的な林分の差異によるためであり、周辺の大きな植生変化につながるものでないと思われる。当時の谷内や谷斜面を構成していた種類として、カヤ、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、ナラ・カシ類、クリ、ニレ属-ケヤキ属、ムクノキなどのエノキ属-ムクノキ属、チドリノキなどのカエデ類などが生育していたとみられる。これらはいずれも渓谷や湿地に林を形成する種類であることから、当時の谷内は草本類が少なく、森林によって覆われていたと思われる。また、植物珪酸体でタケ亜科が多産することから、台地上や斜面部などにはタケ類も多く生育していたと思われる。なお、本層準は、 ^{14}C 年代測定の結果から、約6500~3500年前のものとみられる。この時期の古植生を広域的に考えると、ナラ類を主とする暖温帯林であったと考えられている(辻, 1989; 辻ほか, 1983など)。これらの調査は、集水域が広い大きな低地で行われており、広域的な植生変化をとらえているため、今回のような局地的な植物化石の組成と異なっている。一方、E層よりも上位の組成は、村田川流域等の花粉化石群集組成に近い。これは、堆積環境の項でも述べているように、堆積物が養老川の影響を受けるようになり、より広域的な植生を反映するようになったためと考えられる。

E層は、モミ属、アカガシ亜属などの花粉化石が比較的多い。モミ属の多産は、いわゆる「弥生の小海退」の時期にみられる傾向であり、その理由としては気候の冷涼・多雨化などがあげられている(那須, 1989)。また、村田川流域など南関東の花粉分析の結果では、スギやカシ類も併せて増大するが(辻ほか, 1983; パリノ・サーヴェイ株式会社, 1988; 1989)、今回の結果でも比較的多く検出されている。これらのことから、当時の植生は、モミ属、ツガ属、スギ属などの温帯性針葉樹や、カシ類が周囲の植生のなかでも増加してきたと推定される。既存の花粉分析結果の時代性等から考えると、E層は縄文時代後期~晩期頃に相当するものとみられる。

D層も、E層と同じくモミ属・ツガ属・スギ属など針葉樹の花粉化石が比較的多いことから、森林植生に大きな変化がなかったと思われる。E層と異なるのは、草本類の増大と水生植物ならびに栽培

植物のイネ属の出現である。イネ属の出現から、周辺での稲作が考えられる。また、草本類の種類数・個体数の増大は、人為的に林を切り開いて、開けた草地が拡大したためと考えられる。草本類ではイネ科が主要な種類であったと考えられるが、その種類構成としては、植物珪酸体で多く検出されるタケ類をはじめ、ウシクサ族（ススキなど）などがあげられる。村田川流域の調査では、ハンノキ属が急減し、代わりにイネ科が急増する組成が得られており、この変化の理由として低地での水田開発を指摘している（辻ほか, 1983）。本地点でも同様な変化があったものと推定される。なお、D層は木本花粉化石の組成などからすると、時代的には弥生時代～古代にあたると思われる。

C層では、D層よりもイネ科をはじめとする草本類の割合が顕著になり、開けた草地がさらに増大したと思われる。また、マツ属の増加がみられ、特に上部で顕著になる。これは、人類の植生干渉によるとみられるマツの植林や二次林の急増が起きているためと思われる。関東地方でのマツ属は、古代末頃から増加をはじめ、近世以降になると急増すると考えられている（辻ほか, 1986など）。また、A層からはF-Hoが検出されている。これらのことから、C層の時代性は古代末～近世に相当するといえる。

(3) 栽培植物の消長

イネ属の植物珪酸体は、D層およびC層から検出された。それよりも深い層位でも検出されているが、割合が少ない点や層位的関係などから、後代からの落ち込みによる可能性が高いと思われる。現在の水田耕土におけるイネ属の出現率としては、近藤（1988）の調査例があり、イナワラ堆肥連用（8年間、500kg/10a/年）の水田土壌表層ではイネ属機動細胞珪酸体の出現率は16%を示すとされている。この結果を参考にすると、第1トレンチでやや高い値を示すものの、全体としてやや低い。今回のような沖積低地では、碎屑物等と挙動をともにし、集水域から流れ込んだ植物珪酸体も多いと考えられる。第1トレンチ・第3トレンチなどでは、珪藻化石が混合群集を示しており、その可能性は高いといえる。また、F層の結果を考慮するとイネ属が検出される以前から、タケ亜科が多く生育していた状況がうかがわれる。タケ亜科の植物珪酸体はこれまでの研究から他のイネ科植物と比較して風化に強く、また生産量が多い（近藤, 1982；杉山・藤原, 1986）。したがって、今回のような相対表示の方法では、集水域からもたらされた珪酸体やタケ亜科の植物珪酸体により、イネ属が過小に評価されている可能性がある。

C層とD層については、イネ属の植物珪酸体が認められる点、森林が開かれて草地が拡大した傾向が確認される点、水田雑草として普通に見られる水生植物が多産する点などから水田耕作土である可能性が高いといえる。各層の時代観は、花粉化石の生層序を参考にすると、D層が弥生時代～古代に、C層が古代末～近世にあたると思われる。本遺跡に隣接する台地上にある釜神遺跡では、古墳時代のカマド内からイネの灰が検出されている。また、近隣の分目要害遺跡の古墳時代の泥炭層からは、ウリ類などの種子とともに稲穂が多量に出土している。これらのことから、D層とC層は当時の水田耕土である可能性があり、釜神遺跡等の集落の生産域として機能していた可能性がある。

5. まとめ

各分析の成果をもとに、各堆積層毎の古環境について述べる（第119表）。

F層より下位の層準は、流水環境で堆積したと考えられる。その際、陸域（後背の台地）からの流

第119表 古環境変遷概念図

層名	時代観	堆積環境		古植生		関連する遺跡
		L トレンチ (谷奥)	第1・2 トレンチ (谷出口)	木本類	谷内の草本類	
C	近世	湿地～沼沢地	沼沢地～湿地	マツの二次林、植林の急増	草本植生の増大 谷内での稲作 水生植物（サンショウモ・アカウキクサ属・ミズアオイ属など）が生育（水田にともなう雑草）	分目要害遺跡（分目要害城郭跡）は水田として利用される。
	古代末～中世			人間の植生干渉によるマツ林の増加		
D	弥生時代～古代？	やや乾燥化する。	養老川の影響が強い氾濫性の堆積物	スギ、ツガ、モミ、カシ類の増加（気候の冷涼多雨化が影響する）	谷の周囲が開かれて、イネ科をはじめとする草本類が生育谷内での稲作が行われる。 水生植物（サンショウモ・アカウキクサ属・ミズアオイ属など）が生育（水田にともなう雑草？）	分目要害遺跡（分目要害城郭跡）では、粃・スモモ・モモ・メロン類などの栽培植物が検出。 釜神遺跡では、古墳時代のカマドからイネの灰が検出。 分目要害遺跡（分目要害城郭跡）の低地部での稲作の可能性が指摘される。
E	縄文時代後期～晩期？	流水域			未発達	分目要害遺跡（分目要害城郭跡）の低地では、木本質泥炭層が厚く堆積する。 カシを中心とする木本類が泥炭層から多く検出。
Fより下	約3500年前～	流水域 谷斜面からの木本類の崩壊により泥炭層が作られる。		谷斜面を中心にシテ類・ハンノキ・ナラ・カシ類・クリ・ニレ属・ケヤキ属・ムクノキ・カエデ類などの渓谷林 タケ類も多く生育	未発達	

れ込みも相当量あったと推測される。この時期、谷内に堆積した泥炭層は谷斜面からもたらされた木本類に由来すると考えられる。当時の谷内は渓谷林や湿地林に覆われ、谷内には草本類が少なかったと思われる。谷の埋積初期に木本質の泥炭層が堆積する傾向は、近接する分目要害遺跡でも同様にみられる。これら2箇所の結果を総合すると、当時の谷内や谷斜面を構成していたものとしては、カヤ、クマシデ属ーアサダ属、ハンノキ属、ナラ・カシ類、クリ、ニレ属ーケヤキ属、エノキ属ームクノキ属、カエデ類、などがあげられる。

E層は砂層であることから、河川の影響を強く受けた時期に形成されたと考えられる。D～F層にかけては、いわゆる「弥生の小海退」と呼ばれる時期に相当するが、この時期は冷涼・多雨化したと考えられている（那須，1989）。E層での砂層の堆積は、このような気候変化による堆積物の供給量の増加などに起因する可能性がある。谷の出口付近は、養老川の影響を強く受けていたが、谷奥については影響が少なかったものと思われる。また、当時の植生は、モミ属、ツガ属、スギ属などの温帯性針葉樹やカシ類が周囲の植生の中でも増加してきたものと推定される。

D層は、谷奥で比較的乾燥した状況下にあったことが示唆され、谷の埋積が進んだと推測される。一方、谷の出口付近では、E層と同様に養老川の氾濫の影響を強く受けていたと考えられる。この時期になると、周辺が開かれてイネ科（タケ類、ウシクサ族など）を中心とした草地が広がり、併せて稲作が行われるようになったと推測される。釜神遺跡で検出されたイネの灰や、分目要害遺跡で検出

された多量の稲藁などとほぼ同時期であるとみられることから、低地が生産域として利用されていたことが示唆される。また、分目要害遺跡で検出されるモモヤスモモ、ウリ類なども栽培されていたと考えられる。

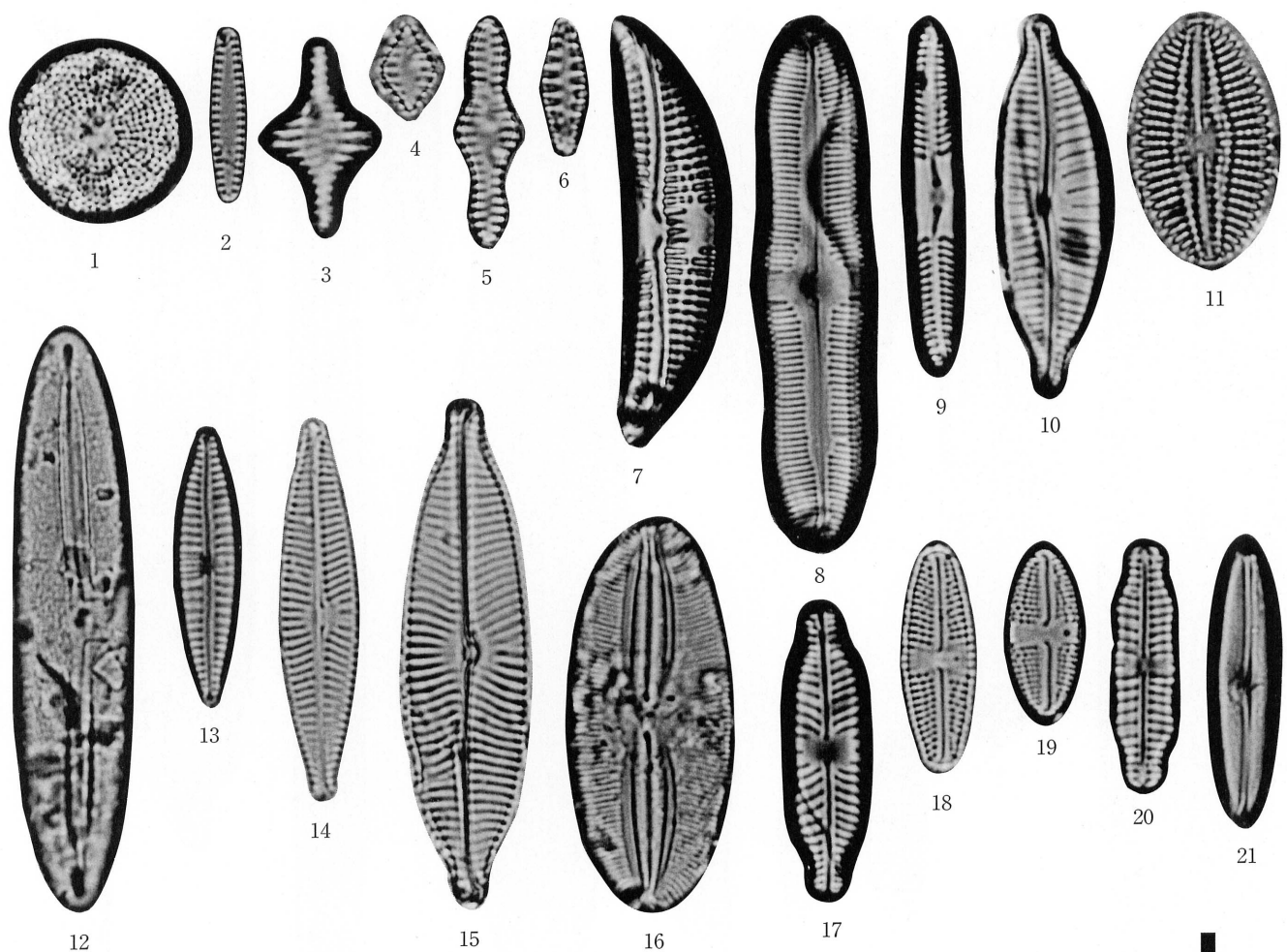
C層は、D層よりも人為的な影響を強く受けて開けた草地がさらに増大したと思われる。また、C層ではマツ属の植林・二次林が増加したとみられるが、特に上部では急増している。この急増する層準にほぼ併せて、谷内の奥と出口付近が沼沢地化する。マツ属の急増時期を近世以降とすると、この沼沢地化は水田等の人為的な開発による可能性が高いと推測される。

<引用文献>

- Asai, K. & Watanabe, T. (1995) Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10, 35-47.
- 安藤一男 (1990) 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. *東北地理*, 42, p. 73-88.
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫 (1996) 珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について. *日本文化財科学会 第13回大会研究発表要旨集*, p. 62-63.
- Hustedt, F. (1937-1938) Systematische und ökologische Untersuchungen über die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra Nach dem Material der Deutschen limnologischen Sunda-Expedition. Teil I ~ III, Band. 15, p. 131-506, Band. 16, p. 1-155, 274-394.
- Hustedt, F. (1959) Die Kieselalgen. Deutschlands, Oesterreich und der Schweiz unter Berücksichtigung der übrigen Länder Europas sowie der angrenzenden Meeresgebiete. Teil. 2. Kryptogamen-Flora von Deutschland, Oesterreich und der Schweiz. Band. VII., 845p., OTTO KOELTZ SCIENCE PUBLISHERS.
- 伊藤良水・堀内誠示 (1991) 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. *珪藻学会誌*, 6, p. 23-45.
- 近藤鍊三 (1982) Plantopal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和56年度科学研究費 (一般研究C) 研究成果報告書. 32p.
- 近藤鍊三・ピアスン友子 (1981) 樹木葉のケイ酸体に関する研究 (第2報) 双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について, 帯広畜産大学研究報告, 12, p. 217-229.
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986) 植物珪酸体分析, その特性と応用. *第四紀研究*, 25, p. 31-64.
- 近藤鍊三 (1988) 十二遺跡の植物珪酸体分析. 銚師屋遺跡群十二遺跡一長野県北佐久郡御代田町十二遺跡発掘調査報告書. p. 377-383, 御代田町教育委員会.
- 小杉正人 (1988) 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用. *第四紀研究*, 27, p. 1-20.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. Band 2/2 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnantheaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.
- Krammer, K. (1992) PINNULARIA, eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p. 1-353. BERLIN・STUTTGART.
- Lowe, R. L. (1974) Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms. 334p. In Environmental Monitoring Ser. EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U. S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.
- 那須孝悌 (1989) 活動の舞台: 概論. 永井昌文・那須孝悌・金関 恕・佐原 真編, 「弥生文化の研究 1 弥生人とその環境」, p. 119-130, 雄山閣.
- パリオ・サーヴェイ株式会社 (1988) 浜野川遺跡群の確認調査にともなう花粉分析報告. 「千葉市浜野川遺跡群 (低湿

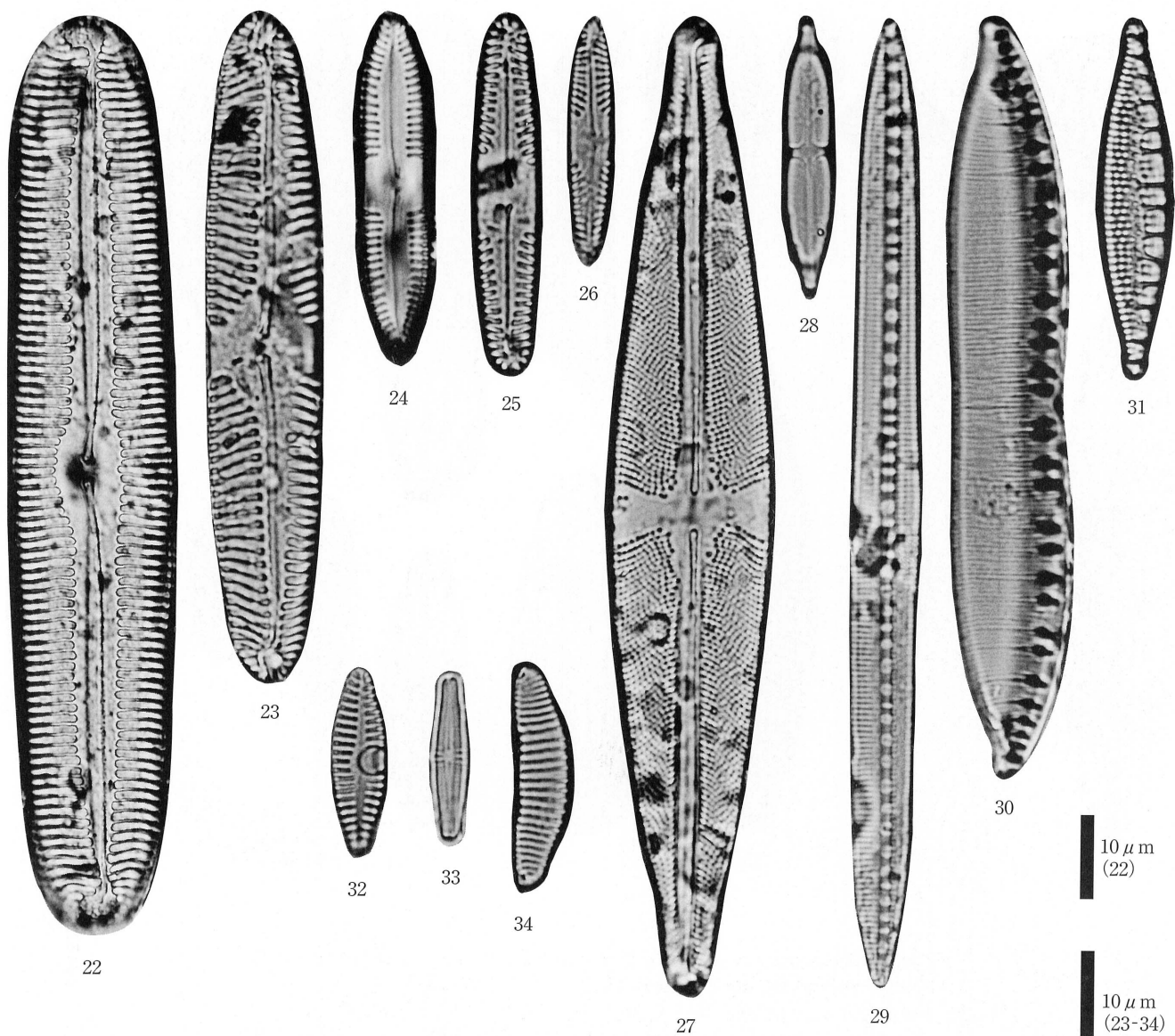
- 地における遺跡確認調査)』, p.122-131, 財団法人千葉県文化財センター.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1989) 千葉県浜野川神門遺跡の堆積物に関する諸分析. 「千葉県浜野川神門遺跡 (低湿地貝塚の発掘調査)」, p.88-127, 財団法人千葉県文化財センター.
- 杉山真二・藤原宏志 (1986) 機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定—古環境推定の基礎資料として—. 考古学と自然科学, 19, p.69-84.
- 辻 誠一郎・南木睦彦・小池裕子 (1983) 縄文時代以降の植生変化と農耕 —村田川流域を例として—. 第四紀研究, 22, p.251-266.
- 辻 誠一郎 (1989) 植物と気候. 永井昌文・那須孝悌・金関 恕・佐原 眞編「弥生文化の研究 1 弥生人とその環境」, p.160-173, 雄山閣.

図版3 珪藻化石(1)



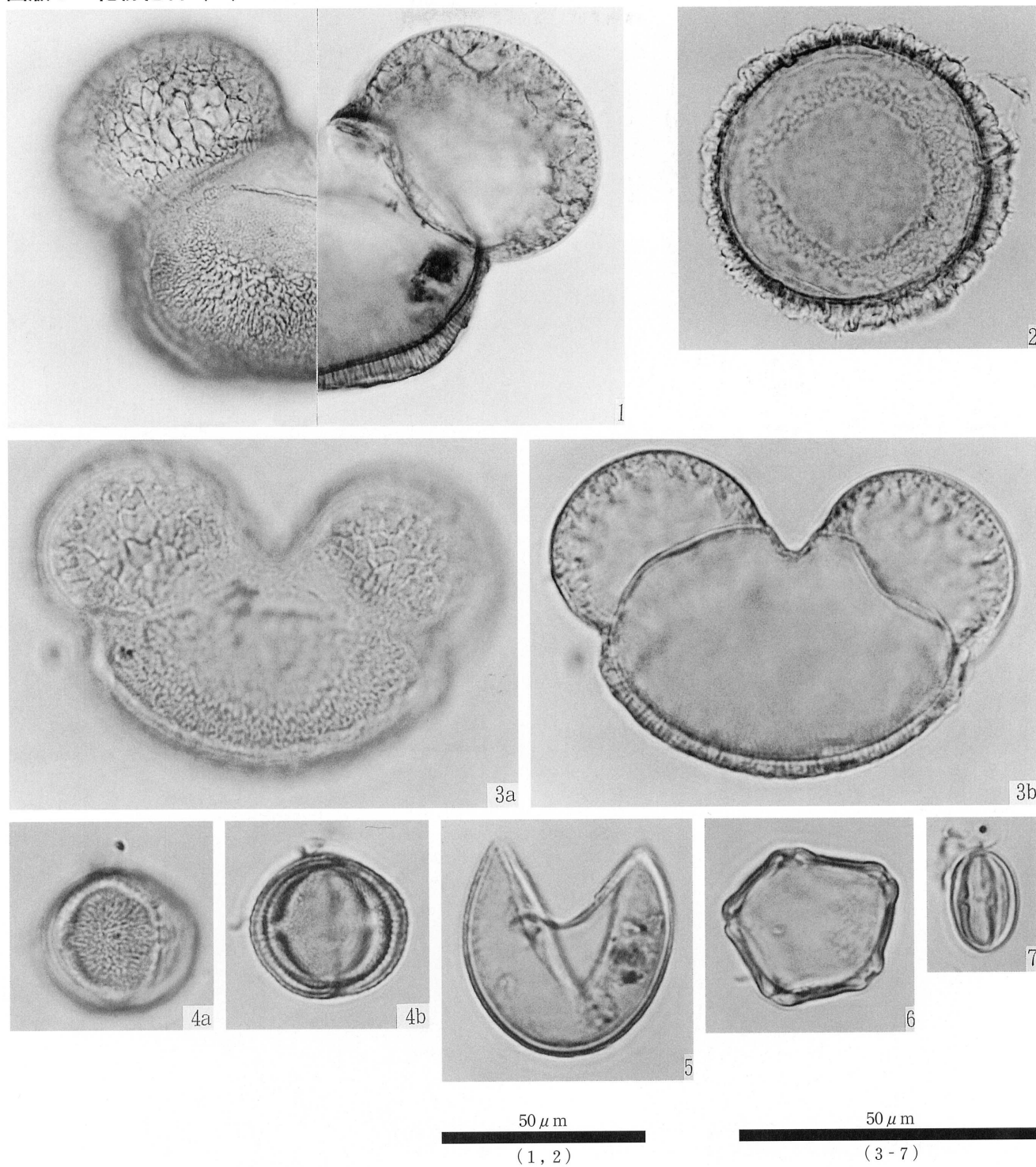
1. *Orthoseira roeseana* (Rabh.) O'Meara (第3トレンチ; 試料番号7)
2. *Fragilaria brevistriata* Grunow (第3トレンチ; 試料番号1)
3. *Fragilaria construens* (Ehr.) Grunow (第3トレンチ; 試料番号1)
4. *Fragilaria construens* fo. *venter* (Ehr.) Hustedt (第3トレンチ; 試料番号1)
5. *Fragilaria construens* var. *triundulata* Reichelt (第3トレンチ; 試料番号1)
6. *Fragilaria pinnata* Ehrenberg (第3トレンチ; 試料番号1)
7. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) V. Heurck (第3トレンチ; 試料番号7)
8. *Caloneis silicula* (Ehr.) Cleve (第3トレンチ; 試料番号2)
9. *Caloneis leptosoma* Krammer & Lange-Bertalot (第3トレンチ; 試料番号7)
10. *Cymbella naviculiformis* Auerswald (第3トレンチ; 試料番号2)
11. *Diploneis ovalis* (Hilse) Cleve (第3トレンチ; 試料番号2)
12. *Frustulia weinholdii* Hustedt (第3トレンチ; 試料番号7)
13. *Gomphonema parvulum* Kuetzing (第3トレンチ; 試料番号3)
14. *Navicula cryptocephala* Kuetzing (第3トレンチ; 試料番号6)
15. *Navicula viridula* var. *rostellata* (Kuetz.) Cleve (第3トレンチ; 試料番号4)
16. *Navicula pygmaea* Kuetzing (第3トレンチ; 試料番号4)
17. *Navicula elginensis* (Greg.) Ralfs (第3トレンチ; 試料番号7)
18. *Navicula mutica* Kuetzing (第3トレンチ; 試料番号3)
19. *Navicula mutica* Kuetzing (第3トレンチ; 試料番号7)
20. *Navicula ignota* Krasske (第3トレンチ; 試料番号7)
21. *Neidium alpinum* Hustedt (第3トレンチ; 試料番号7)

図版 4 珪藻化石 (2)



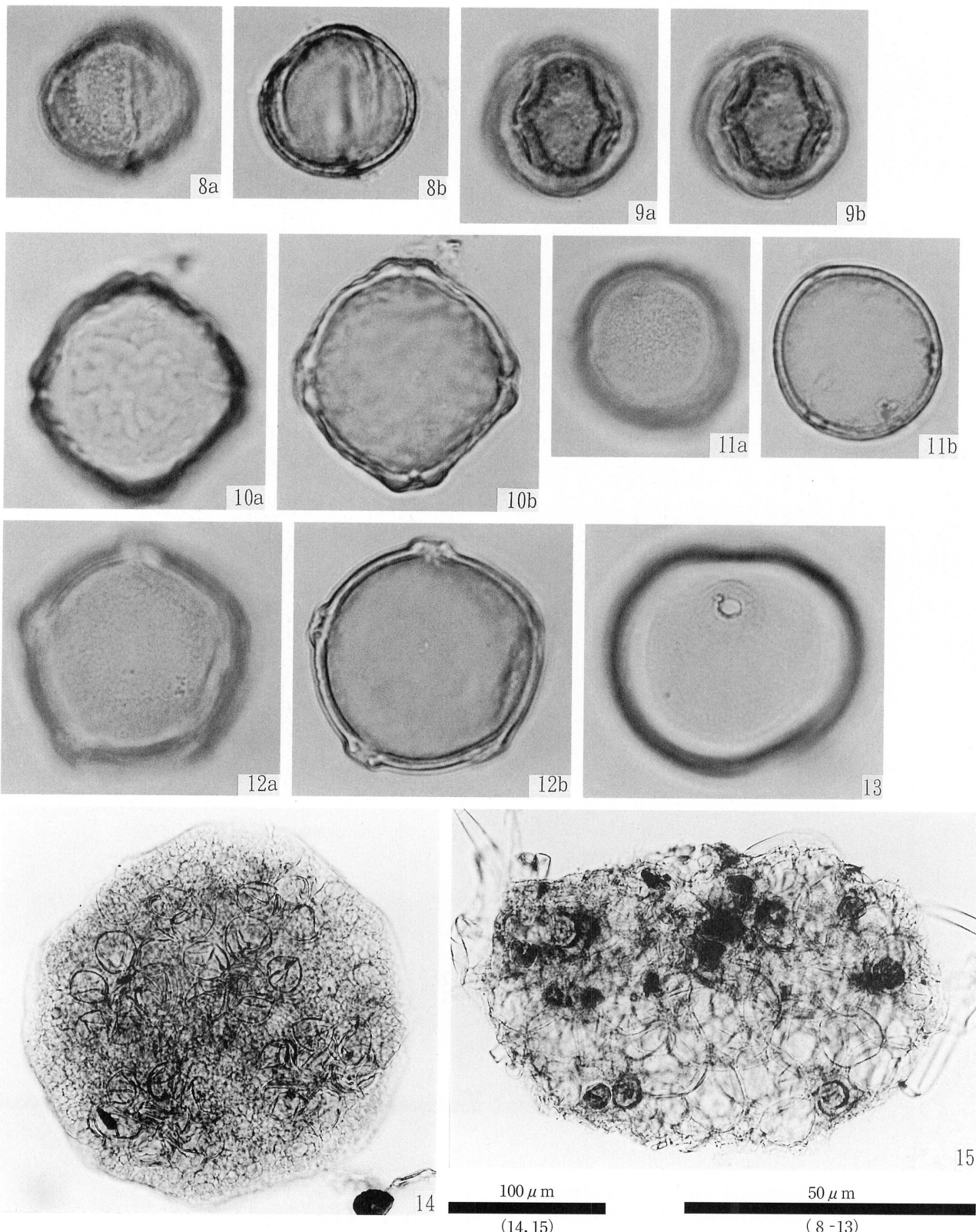
22. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg (第3トレンチ; 試料番号2)
23. *Pinnularia gibba* Ehrenberg (第3トレンチ; 試料番号2)
24. *Pinnularia schroederii* (Hust.) Krammer (第3トレンチ; 試料番号2)
25. *Pinnularia subcapitata* Gregory (第3トレンチ; 試料番号7)
26. *Pinnularia silvatica* Petersen (第3トレンチ; 試料番号7)
27. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (第3トレンチ; 試料番号2)
28. *Stauroneis tenera* Hustedt (第3トレンチ; 試料番号7)
29. *Bacillaria paradoxa* Gmelin (第3トレンチ; 試料番号6)
30. *Nitzschia palustris* Hustedt (第3トレンチ; 試料番号5)
31. *Nitzschia sinuata* var. *delognei* (Grun.) Lange-Bertalot (第3トレンチ; 試料番号4)
32. *Achnanthes lanceolata* (Breb.) Grunow (第3トレンチ; 試料番号3)
33. *Achnanthes minutissima* Kuetzing (第3トレンチ; 試料番号2)
34. *Eunotia pectinalis* var. *minor* (Kuetz.) Rabenhorst (第3トレンチ; 試料番号4)

図版 5 花粉化石 (1)



- | | |
|------------------------|--------------------------|
| 1. モミ属 (第1トレンチ; 試料番号2) | 2. ツガ属 (第1トレンチ; 試料番号2) |
| 3. マツ属 (第1トレンチ; 試料番号2) | 4. ヨモギ属 (第1トレンチ; 試料番号2) |
| 5. スギ属 (第3トレンチ; 試料番号4) | 6. ハンノキ属 (第3トレンチ; 試料番号4) |
| 7. クリ属 (第3トレンチ; 試料番号4) | |

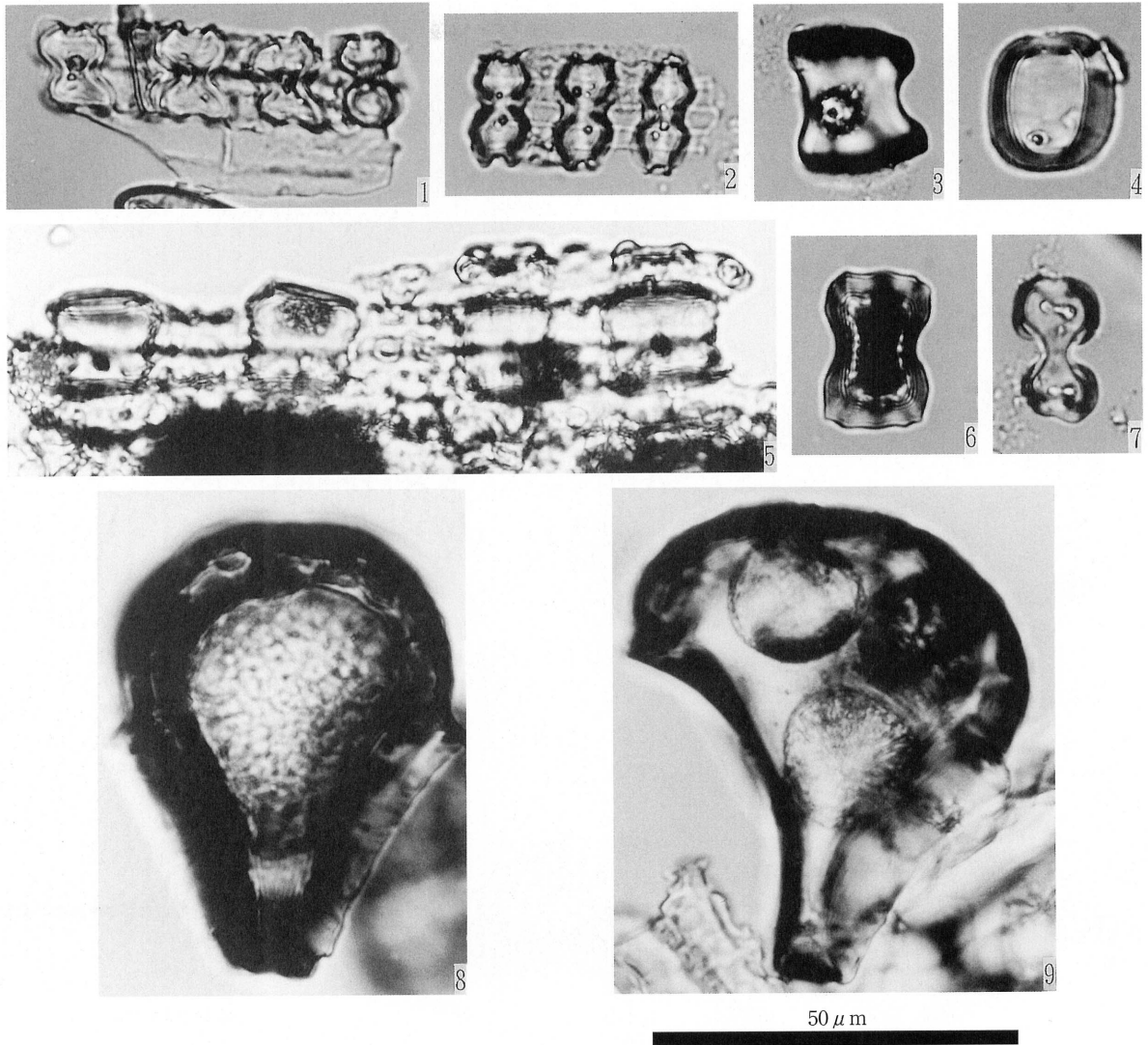
図版6 花粉化石 (2)



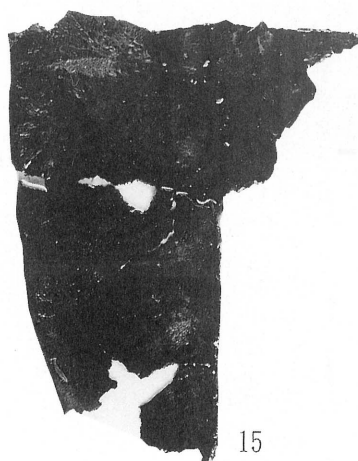
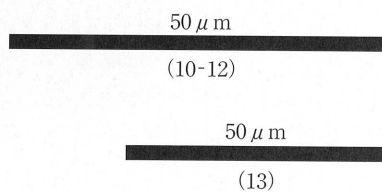
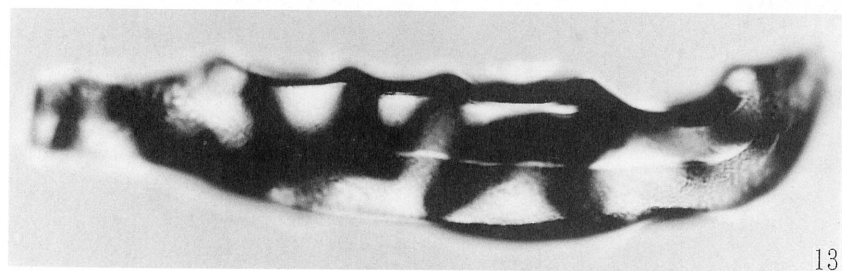
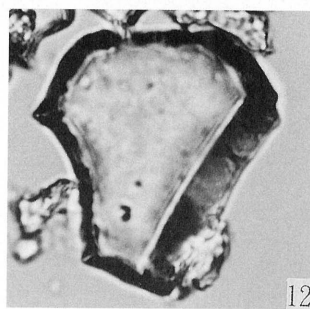
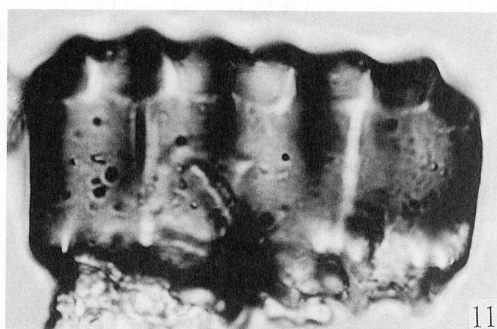
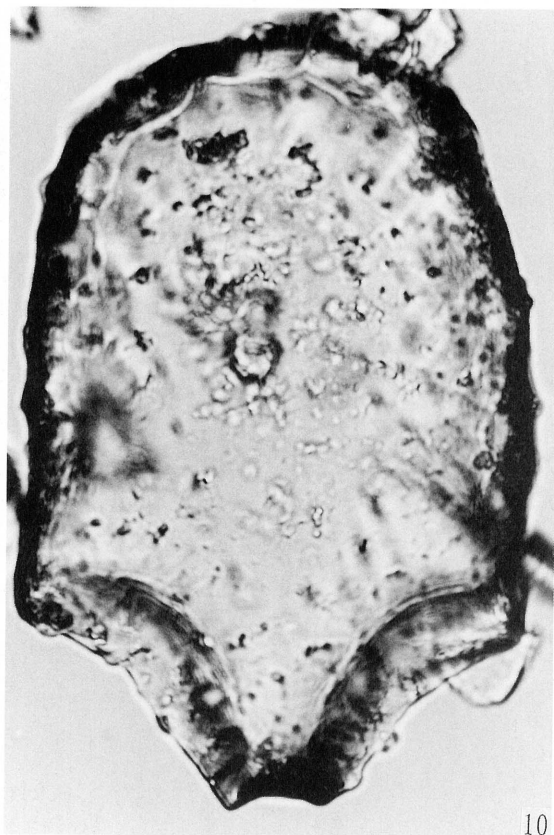
8. コナラ属コナラ亜属 (第3トレンチ; 試料番号5)
 10. ニレ属一ケヤキ属 (第3トレンチ; 試料番号4)
 12. クマシデ属アサダ属 (第3トレンチ; 試料番号4)
 14. サンショウモ (第1トレンチ; 試料番号2)

9. コナラ属アカガシ亜属 (第3トレンチ; 試料番号4)
 11. エノキ属ムクノキ属 (第3トレンチ; 試料番号5)
 13. イネ科 (第1トレンチ; 試料番号2)
 15. アカウキクサ属 (第1トレンチ; 試料番号2)

図版 7 植物珪酸体 (1)



- | | |
|-------------------------------|---------------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (第1トレンチ; 試料番号3) | 2. イネ属短細胞列 (第1トレンチ; 試料番号3) |
| 3. ネザサ節短細胞珪酸体 (第3トレンチ; 試料番号7) | 4. ヨシ属短細胞珪酸体 (第1トレンチ; 試料番号4) |
| 5. ネザサ節短細胞列 (第1トレンチ; 試料番号2) | 6. コブナグサ属短細胞珪酸体 (第3トレンチ; 試料番号7) |
| 7. ススキ属短細胞珪酸体 (第3トレンチ; 試料番号7) | 8. イネ属機動細胞珪酸体 (第1トレンチ; 試料番号2) |
| 9. イネ属機動細胞珪酸体 (第3トレンチ; 試料番号3) | |



10. ヨシ属機動細胞珪酸体 (第3トレンチ; 試料番号7)

12. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (第3トレンチ; 試料番号7)

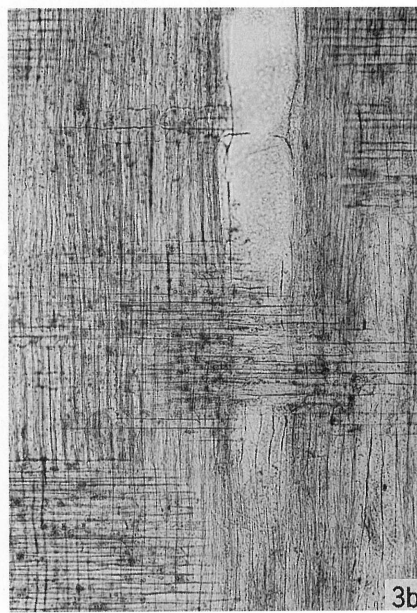
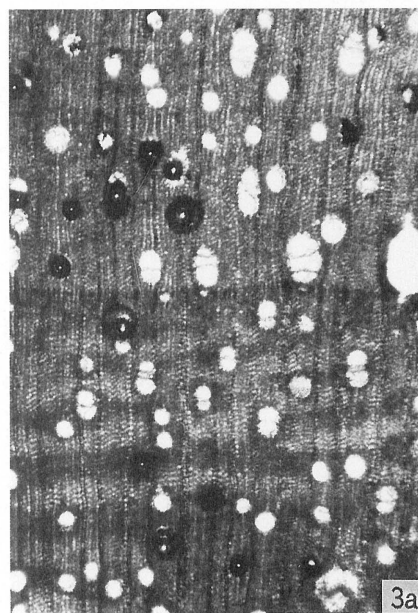
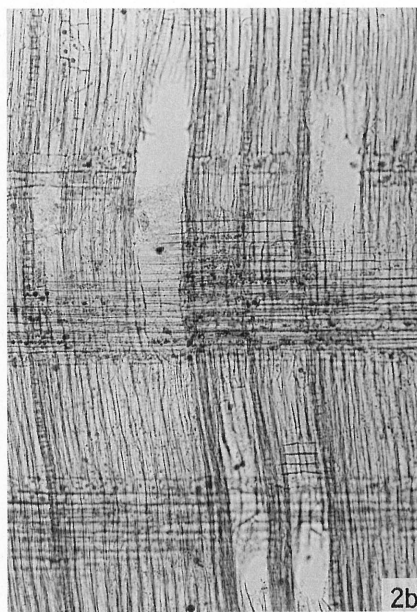
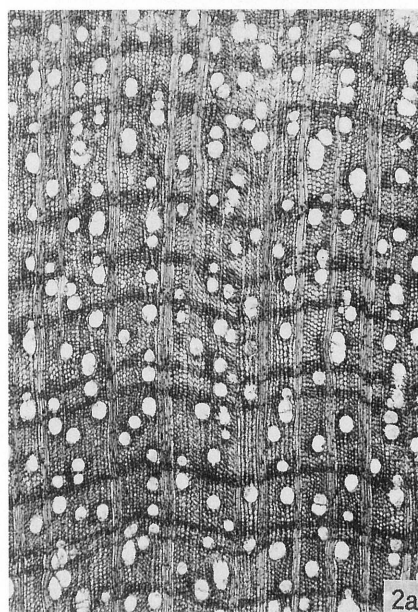
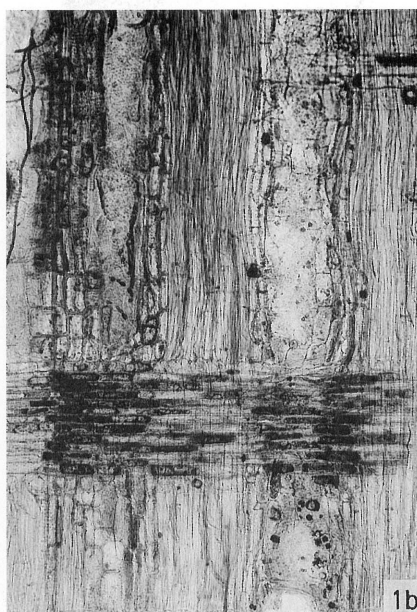
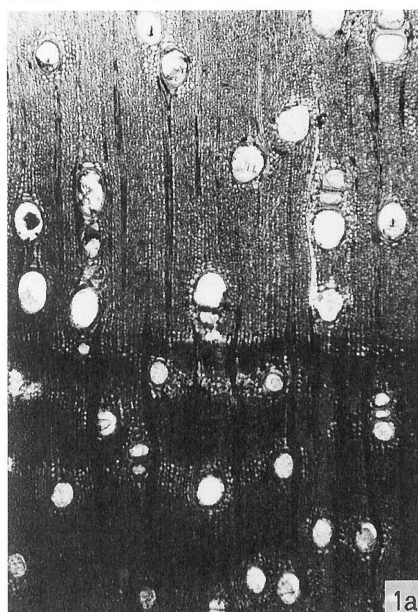
14. カヤ (第3トレンチF層中出土)

11. ネザサ節機動細胞珪酸体 (第1トレンチ; 試料番号5)

13. 樹木珪酸体Ⅳ型 (第1トレンチ; 試料番号5)

15. コナラ属アカガシ亜属 (第3トレンチF層中出土)

図版9 木材



1. ムクノキ (E層出土材)

2. チドリノキ (W-2)

3. カエデ属 (W-1)

a : 木口、b : 柁目、c : 板目

3. 甕・壺・鉢の胎土材料（第284～286図・第120～124表）

藤根 久・今村美智子（パレオ・ラボ）

はじめに

釜神遺跡は、市原市浅井小向地内の姉崎台地北東隅（市原Ⅱ段丘面）に位置する弥生時代から平安時代にかけての遺跡である。調査では、弥生時代中期後半あるいは後期の竪穴建物跡などが検出されている。ここでは、これら竪穴建物跡から出土した土器を対象として、これら胎土を構成する粘土や砂粒等について特徴を記載した。

土器胎土は、粘土と砂粒などの混和材から構成されるが、その様子は肉眼観察によりある程度識別されるものの、粘土の種類やミクロ的な構成物は顕微鏡観察によらなければならない。最近では、胎土中に含まれる珪藻化石や骨針化石などの記載により、粘土の種類について知ることができ、混和材の種類も砂粒のほか火山灰や灰質物などが混入されていることが分かってきた（車崎ほか、1996）。

こうした土器胎土の材料を調べることは、土器の形態や文様とともに土器の構成要素として重要な事柄と考えられ、土器材料の種類ほか、材料から見た製作技法や土器の製作地の情報などについても知ることができる。

1. 方法と記載

ここでは、土器の薄片を作成し偏光顕微鏡による観察による方法を行った。土器試料は、甕12試料、壺14試料、鉢4試料の合計30試料を対象とした（第120表）。土器は、次の手順に従って偏光顕微鏡観察用の薄片（プレパラート）を作成した。なお、試料は、面積約6 cm²程度（2×3 cm）を使用した。

(1) 試料は、始めに岩石カッターなどで整形し、恒温乾燥機により乾燥した。全体にエポキシ系樹脂を含浸させ固化処理を行った。これをスライドガラスに接着した後、精密岩石薄片作製機を用いて平面を作成し、同様にしてその平面の固化処理を行った。

(2) さらに、研磨機およびガラス板を用いて研磨し、平面を作成した後スライドガラスに接着した。

(3) その後、精密岩石薄片作製機を用いて切断し、ガラス板などを用いて研磨し、厚さ0.02mm前後の薄片を作成した。仕上げとして、研磨剤を含ませた布板上で琢磨し、コーティング剤を塗布した。

各薄片試料は、偏光顕微鏡下300倍で分類群ごとに同定・計数する。同定・計数は、100μm 格子目盛を用いて任意の位置における約50μm（0.05mm）以上の鉱物や複合鉱物類（岩石片）あるいは微化石類（50μm 前後）を対象とし、微化石類と石英・長石類以外の粒子が約100個以上になるまで行った。また、この計数とは別に薄片全面について、微化石類（放散虫化石、珪藻化石、骨針化石、孢子化石）や大型粒子などの特徴についても観察・記載した。

なお、土器薄片作成の際に作成した切断面について、実体顕微鏡による観察も行った。

2. 分類群の記載

細礫～砂サイズ以下の粒子を偏光顕微鏡により同定する場合、粒子が細粒であるため同定が困難である場合が多い。特に、岩石片については、岩石片中に含まれる鉱物数がきわめて少ないため、岩石名を決定することが事実上不可能である場合が多い。ここでは岩石名を付けず、岩石片を構成する鉱

物や構造的な特徴に基づいて分類した（菱田ほか、1993）。なお、胎土の特徴を抽出するために、鉱物や岩石片以外の生物起源の粒子（微化石類）も同時に計数した。ここで採用した各分類群の記載とその特徴などは以下の通りである。なお、各鉱物の光学的性質についてはその記述を省略する。

[放散虫化石]

放散虫は、放射仮足類に属する海生浮遊性原生動物で、その骨格は硫酸ストロンチウムまたは珪酸からなる。放散虫化石は、海生浮遊生珪藻化石とともに外洋性堆積物中によく見られる。

[骨針化石]

海綿動物の骨格を形成する小さな珪質、石灰質の骨片で、細い管状や針状などを呈する。海綿動物は、多くは海産であるが、淡水産としても日本において23種ほどが知られ、湖や池あるいは川の水底に横たわる木や貝殻などに付着して生育する。

[珪藻化石]

珪酸質の殻をもつ微小な藻類で、その大きさは10～数百 μm 程度である。珪藻は海水域から淡水域に広く分布し、個々の種類によって特定の生息環境をもつ。最近では、小杉（1988）や安藤（1990）によって環境指標種群が設定され、具体的な環境復原が行われている。ここでは、種あるいは属が同定できるものについて珪藻化石（海水種）・珪藻化石（汽水種）・珪藻化石（淡水種）と分類し、同定できないものは珪藻化石（?）とした。なお、各胎土中の珪藻化石の詳細については、計数外の特徴とともに記載した。

[植物珪酸体化石]

植物の細胞組織を充填する非晶質含水珪酸体であり、大きさは種類によっても異なり、主に約10～50 μm 前後である。一般的にプラント・オパールとも呼ばれ、イネ科草本、スゲ、シダ、トクサ、コケ類などに存在することが知られている。ファン型や垂鈴型あるいは棒状などがあるが、ここでは大型のファン型と棒状を対象とした。

[孢子化石]

孢子状粒子は、珪酸質と思われる直径10～30 μm 程度の小型の無色透明の球状粒子である。これらは、水成堆積物中で多く見られるが、土壌中にも含まれる。

[石英・長石類]

石英あるいは長石類は、いずれも無色透明の鉱物である。長石類のうち後述する双晶などのように光学的に特徴をもたないものは石英と区別するのが困難である場合が多く一括して扱う。なお、石英・長石類（雲母）は、黄色などの細粒雲母類が包含される石英または長石類である。

[長石類]

長石は大きく斜長石とカリ長石に分類される。斜長石は、双晶（主として平行な縞）を示すものと累帯構造（同心円状の縞）を示すものに細分される（これらの縞は組成の違いを反映している）。カリ長石は、細かい葉片状の結晶を含むもの（パーサイト構造）と格子状構造（微斜長石構造）を示すものに分類される。また、ミルメカイトは斜長石と虫食い状石英との連晶（微文象構造という）である。累帯構造を示す斜長石は、火山岩中の結晶（斑晶）の斜長石にみられることが多い。パーサイト構造を示すカリ長石はカコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い深成岩や低温でできた泥質・砂質の変成岩などに産する。

ミルメカイトあるいは文象岩は火成岩が固結する過程の晩期に生じると考えられている。これら以外の斜長石は、火成岩、堆積岩、変成岩に普通に産する。

[雲母類]

一般的には黒雲母が多く、黒色から暗褐色で風化すると金色から白色になる。形は板状で、へき開（規則正しい割れ目）にそって板状には剥がれ易い。薄片上では長柱状や層状に見える場合が多い。カコウ岩などの $\text{SiO}_2\%$ の多い火成岩に普遍的に産し、泥質、砂質の変成岩および堆積岩にも含まれる。なお、雲母類のみが複合した粒子を複合雲母類とした。

[輝石類]

主として斜方輝石と単斜輝石とがある。斜方輝石（主に紫蘇輝石）は、肉眼的にビールびんのような淡褐色および淡緑色などの色を呈し、形は長柱状である。 $\text{SiO}_2\%$ が少ない深成岩、 $\text{SiO}_2\%$ が中間あるいは少ない火山岩、ホルンフェルスなどのような高温で生じた変成岩に産する。単斜輝石（主に普通輝石）は、肉眼的に緑色から淡緑色を呈し、柱状である。主として $\text{SiO}_2\%$ が中間から少ない火山岩によく見られ、 $\text{SiO}_2\%$ の最も少ない火成岩や変成岩中にも含まれる。

[角閃石類]

主として普通角閃石であり、色は黒色から黒緑色で、薄片上では黄色から緑褐色などである。形は細長く平たい長柱状である。閃緑岩のような $\text{SiO}_2\%$ が中間的な深成岩をはじめ火成岩や変成岩などに産する。

[ガラス・軽石型ガラス]

透明の非結晶の物質で、電球のガラス破片のような薄くて湾曲したガラス（バブル・ウォール型）や小さな泡をたくさんもつガラス（軽石型ガラス）などがある。主に火山の噴火により噴出された噴出物と考える。

[発泡斑晶質]

発泡斑晶質は、下記の様な斑晶質ではあるが石器状のガラス質の部分が上記の軽石質ガラスのように発泡しているものをいう。

[斑晶質・完晶質]

斑晶質は斑晶（鉱物の結晶）状の部分と石基状のガラス質の部分が明瞭に確認できるもの、完晶質は、ほとんどが結晶からなり石基の部分が見られないか、ごくわずかのものをいう。これらの斑晶質、完晶質の粒子は主として玄武岩、安山岩、デイサイト、流紋岩などの火山岩類を起源とする可能性が高い。

[凝灰岩質]

凝灰岩質は、ガラスや鉱物、火山岩片などの火山碎屑物などから構成され、非晶質でモザイクな文様構造を示す。起源となる火山により鉱物組成は変わる。

[複合鉱物類]

構成する鉱物が石英あるいは長石以外に重鉱物を伴う粒子で、雲母類を伴う粒子は複合鉱物類（含雲母類）、輝石類を伴う粒子を複合鉱物類（含輝石類）、角閃石類を伴う粒子を複合鉱物類（角閃石類）とした。

[複合石英類]

複合石英類は石英の集合している粒子で、基質(マトリックス)の部分をもたないものである。個々の石英粒子の粒径は粗粒から細粒まで様々である。ここでは、便宜的に個々の石英粒子の粒径が約0.01mm未満のものを微細、0.01~0.05mmのものを小型、0.05~0.1mmのものを中型、0.1mm以上のものを大型と分類した。また、等粒で小型の長石あるいは石英が複合した粒子は、複合石英類(等粒)として分類した。この複合石英類(等粒)は、ホルンフェルスなどで見られる粒子と考える。

[砂岩質・泥岩質]

石英、長石類、岩片類などの粒子が集合し、それらの間に基質の部分をもつもので、含まれる粒子の大きさが約0.06mm以上のものを砂岩質とし、約0.06mm未満のものを泥岩質とする。

[不透明・不明]

下方ポーラーのみ、直交ポーラーのいずれにおいても不透明なものや変質して鉱物あるいは岩石片として同定不可能な粒子を不明とする。

3. 各胎土の特徴および計数の結果

胎土中の粒子組成は、任意の位置での粒子を分類群別に計数した(第121表)。また、計数されない微化石類や鉱物・岩石片を記載するために、プレパラート全面を精査・観察した。以下では、粒度分布や0.1mm前後以上の鉱物・岩石片の砂粒組成あるいは計数も含めた微化石類などの記載を示す。なお、不等号は、概略の量比を示し、二重不等号は極端に多い場合を示す。

No. 1: 250~700 μ mが多い(最大粒径1.5mm)。軽石型ガラス(斜方輝石・斜長石(双晶))>斜長石(双晶)>斑晶質(ガラス付着)>斜方輝石、角閃石類、凝灰岩質、石英・長石類、完晶質(ガラス付着)、発泡斑晶質(スコリア質)、単斜輝石、複合石英類(微細)、放散虫化石(2個体)、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属)、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

No. 2: 80~250 μ mが多い(最大粒径350 μ m)。細粒胎土。石英・長石類>単斜輝石、斜方輝石、複合石英類(微細)、斜長石(双晶)、凝灰岩質、角閃石類、放散虫化石(3個体)、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、*Thalassiosira* 属、*Stephanopxis* 属、不明種)、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

No. 3: 100~600 μ mが多い(最大粒径1.0mm)。石英・長石類>複合石英類(微細)>軽石型ガラス>カリ長石(パーサイト)、斜長石(双晶)、凝灰岩質、角閃石類、単斜輝石、斜方輝石、雲母類、複合石英類、斑晶質、放散虫化石(17個体)、珪藻化石(海水種 *Coscinodiscus* 属、*Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、*Thalassiosira* 属、*Actinocyclus* 属、淡水種 *Pinnularia* 属)、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

No. 4: 80~320 μ mが多い(最大粒径850 μ m)。石英・長石類>複合石英類(微細)>軽石型ガラス、発泡斑晶質(スコリア質)、ガラス、放散虫化石(10個体)、珪藻化石(外洋指標種群 *Thalassionema nitzschioides*、海水泥質干潟指標種群 *Nitzschia granulata*、海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、*Stephanopxis* 属、不明種)、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

No. 5: 50 μ m~1mmが多い(最大粒径1.7mm)。軽石型ガラス(単斜輝石・斜長石(双晶))・角閃石類>石英・長石類>斜長石(双晶)>斑晶質、角閃石類、発泡斑晶質(スコリア質)、複合石英類

(微細)、雲母類、凝灰岩質、斑晶質、斜方輝石、放散虫化石（5 個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属多い、淡水種 *Synedra ulna*、*Pinnularia* 属、不明種）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

No. 6：100～500 μm が多い（最大粒径900 μm ）。石英・長石類＞複合石英類（微細）＞砂岩質＞斜長石（双晶）＞雲母類、角閃石類（ガラス付着）、斜方輝石、斑晶質、完晶質、凝灰岩質、斜長石（累帯）、複合石英類、単斜輝石（ガラス付着）、放散虫化石（5 個体）、珪藻化石（外洋指標種群 *Coscinodiscus marginatus*、海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、*Thalassiosira* 属、*Stephanopxis* 属）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 7：50～700 μm が多い（最大粒径1.4mm）。石英・長石類＞砂岩質＞複合石英類（微細）＞斑晶質＞斜方輝石、角閃石類、ガラス、凝灰岩質、完晶質、軽石型ガラス、カリ長石（パーサイト）、単斜輝石（ガラス付着）、斜長石（累帯）、放散虫化石（7 個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、淡水種 *Pinnularia* 属、*Cymbella* 属、*Epithemia* 属、*Diploneis* 属、不明種）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 8：70～400 μm が多い（最大粒径700 μm ）。石英・長石類（一部ガラス付着）＞複合石英類（微細）＞斜長石（双晶）＞砂岩質＞斑晶質、ガラス、軽石型ガラス、斜方輝石、単斜輝石（ガラス付着）、角閃石類、凝灰岩質、斜長石（累帯）、放散虫化石（7 個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、汽水種 *Hydrosera triquetra*）、骨針化石多産、植物珪酸体化石

No.9：100～600 μm が多い（最大粒径3.3mm）。石英・長石類＞複合石英類（微細）＞ガラス、角閃石類、複合石英類、カリ長石（パーサイト）、単斜輝石、斜長石（双晶）、黒褐色粒子（褐鉄鉱質）、放散虫化石（2 個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属）、骨針化石多い、植物珪酸体化石

No. 10：110～700 μm が多い（最大粒径3.9mm）。石英・長石類＞複合石英類（微細）＞角閃石類、ガラス、砂岩質、斜長石（累帯）、軽石型ガラス、凝灰岩質、完晶質、放散虫化石（5 個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属）、骨針化石多い、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 11：100～700 μm が多い（最大粒径1.5mm）。軽石型ガラス（斜長石（双晶）・角閃石類）＞斜長石（双晶）＞石英・長石類＞複合石英類（微細）、斑晶質、角閃石類、凝灰岩質、斜長石（累帯）、雲母類、放散虫化石（4 個体）、珪藻化石（内湾指標種群 *Melosira sulcata*、海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、不明種多産）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石（ヨシ属含む）

No. 12：50～700 μm が多い（最大粒径1.5mm）。石英・長石類＞軽石型ガラス（斜長石（双晶）・角閃石類）＞斜長石（双晶）、斑晶質、複合石英類（微細）、角閃石類、不透明鉱物、放散虫化石（9 個体）、珪藻化石（内湾指標種群 *Melosira sulcata*、海水種 *Arachonoidiscus ehrenbergii*、*Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、不明種）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 13：50～900 μm が多い（最大粒径1.3mm）。軽石型ガラス（斜長石（双晶）・角閃石類）＞斜長石（双晶）＞石英・長石類、斑晶質、完晶質、角閃石類、ガラス、複合石英類（微細）、角閃石類、斜長石（累帯）、凝灰岩質、放散虫化石（3 個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属）、骨針化石多産、植物珪酸体化石

No. 14：80～600 μm が多い（最大粒径2.3mm）。軽石型ガラス（斜長石（双晶）・角閃石類）＞角閃

石類>斜長石（双晶）>石英・長石類、発泡斑晶質、斜方輝石、ガラス、完晶質、凝灰岩質、複合石英類（微細）、放散虫化石（6個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属多産、*Actinocyclus* 属、*Stephanopxis* 属、不明種）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 15：50～200 μ m が多い（最大粒径650 μ m）。細粒胎土。石英・長石類>複合石英類（微細）、角閃石類、複合石英類、ガラス、斑晶質、斜長石（累帯）、カリ長石（パーサイト）、斜長石（双晶）、放散虫化石（7個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、汽水種 *Achnanthes brevipes*、淡水種 *Synedra ulna*、*Pinnularia* 属、陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys* 密集）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 16：70～500 μ m が多い（最大粒径1.2mm）。石英・長石類>複合石英類（微細）>砂岩質、斜長石（双晶）、カリ長石（パーサイト）、複合石英類、斜方輝石、角閃石類、単斜輝石、斑晶質、完晶質、ガラス、凝灰岩質、軽石型ガラス、雲母類、放散虫化石（5個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 17：100～700 μ m が多い（最大粒径1.7mm）。斜長石（双晶）>軽石型ガラス（斜長石（双晶）・角閃石類）>斜長石（累帯）>角閃石類>石英・長石類、雲母類、複合石英類（微細）、放散虫化石（8個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属多い、*Thalassiosira* 属、淡水種 *Synedra ulna*、不明種）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石、植物遺体含む

No. 18：100～800 μ m が多い（最大粒径1.7mm）。斜長石（双晶）>軽石型ガラス（斜長石（双晶）・角閃石類）>石英・長石類>角閃石類、複合鉱物類（雲母類）、雲母類、凝灰岩質、放散虫化石（6個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属多い、淡水種 *Pinnularia* 属、*Diploneis* 属、*Cymbella* 属、不明種）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 19：70～800 μ m が多い（最大粒径2.1mm）。複合石英類（微細）>石英・長石類>斜長石（双晶）>砂岩質、単斜輝石、軽石型ガラス、凝灰岩質、斑晶質、角閃石類、放散虫化石（12個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 20：90～500 μ m が多い（最大粒径1.0mm）。石英・長石類>複合石英類（微細）>砂岩質、軽石型ガラス、斑晶質、角閃石類、斜長石（累帯）、単斜輝石、凝灰岩質、カリ長石（パーサイト）、放散虫化石（4個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、*Stephanopxis* 属）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 21：100～700 μ m が多い（最大粒径1.4mm）。石英・長石類>軽石型ガラス（斜長石（双晶）・角閃石類）>斜長石（双晶）>雲母類、単斜輝石、斜方輝石、角閃石類、斑晶質、凝灰岩質、複合石英類（微細）、放散虫化石（6個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属多い、*Arachonodiscus ehrenbergii*、不明種）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 22：100 μ m～1.0mm が多い（最大粒径2.7mm）。石英・長石類>軽石型ガラス（斜長石（双晶）・角閃石類）>角閃石類>単斜輝石、複合石英類（微細）、斑晶質、放散虫化石（6個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属）、骨針化石多産、孢子化石、植物珪酸体化石

No. 23：90～800 μ m が多い（最大粒径1.9mm）。石英・長石類>複合石英類（微細）>複合石英類>砂岩質、斜長石（双晶）、ガラス、斑晶質、発泡斑晶質、凝灰岩質、角閃石類、単斜輝石、放散虫化石（7個体）、珪藻化石（海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、*Actinocyclus* 属、*Stephanopxis* 属、

不明種)、骨針化石多産、植物珪酸体化石

No. 24: 150 μ m~1.2mm が多い (最大粒径2.2mm)。石英・長石類>複合石英類 (微細) >斑晶質>斜長石 (双晶)、複合石英類、凝灰岩質、ガラス、軽石型ガラス、紋象岩、発泡斑晶質、斜長石 (累帯)、単斜輝石、放散虫化石 (8 個体)、珪藻化石 (海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、*Actinocyclus* 属、内湾指標種群 *Melosira sulcata*、不明種)、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

No. 25: 300~800 μ m が多い (最大粒径1.7mm)。斑晶質>斜長石 (双晶)、単斜輝石、石英・長石類、ガラス、凝灰岩質、斜長石 (累帯)、発泡斑晶質、砂岩質、複合石英類 (微細)、軽石型ガラス、放散虫化石 (11個体)、珪藻化石 (海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属多産、*Stephanopsis* 属、不明種)、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

No. 26: 150 μ m~1.2mm が多い (最大粒径1.9mm)。軽石型ガラス (斜長石 (双晶)・角閃石類) > 石英・長石類>斜長石 (双晶)、発泡斑晶質、斑晶質、角閃石類、単斜輝石、凝灰岩質、斜長石 (累帯)、放散虫化石 (101個体)、珪藻化石 (海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属多産、*Actinocyclus* 属、*Thalassiosira* 属、不明種)、骨針化石多産、植物珪酸体化石

No. 27: 500 μ m~1mm が多い (最大粒径3.2mm)。斜長石 (双晶) > 軽石型ガラス (斑晶質含む) > 斜長石 (累帯)、斑晶質、角閃石類、単斜輝石、複合石英類 (微細)、放散虫化石 (8 個体)、珪藻化石 (海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*、不明種)、骨針化石多い、胞子化石、植物珪酸体化石

No. 28: 100~700 μ m が多い (最大粒径1.9mm)。石英・長石類>複合石英類 (微細)、ガラス、砂岩質、斜長石 (双晶)、凝灰岩質、放散虫化石 (6 個体)、珪藻化石 (海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属多い、沼沢湿地付着生指標種群 *Cymbella aspera*、淡水種 *Pinnularia* 属多い、*Cymbella* 属、*Diploneis ovalis*、不明種)、骨針化石多い、胞子化石、植物珪酸体化石多産

No. 29: 120~700 μ m が多い (最大粒径1.9mm)。石英・長石類>複合石英類 (微細)、砂岩質、斑晶質、発泡斑晶質、ガラス、複合石英類、単斜輝石、放散虫化石 (9 個体)、珪藻化石 (海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属、内湾指標種群 *Melosira sulcata*、陸域指標種群 *Hantzschia amphioxys*、不明種)、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

No. 30: 120 μ m~1.0mm が多い (最大粒径1.6mm)。軽石型ガラス (斜長石 (双晶)) > 複合石英類 (微細)、石英・長石類、角閃石類、斑晶質、斜長石 (双晶)、ガラス、砂岩質、凝灰岩質、単斜輝石、放散虫化石 (5 個体)、珪藻化石 (海水種 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属)、骨針化石多産、胞子化石、植物珪酸体化石

4. 微化石による材料粘土の分類

検討した胎土中には、その薄片全面の観察から、珪藻化石や骨針化石などが検出された。これら微化石類の大きさは、珪藻化石が10~数100 μ m (実際観察される珪藻化石は大きいもので150 μ m 程度)、放散虫化石が数百 μ m、骨針化石が10~100 μ m 前後である (植物珪酸体化石が10~50 μ m 前後)。一方、碎屑性堆積物の粒度は、粘土が約3.9 μ m 以下、シルトが約3.9~62.5 μ m、砂が62.5 μ m~2mm である (地学団体研究会・地学事典編集委員会編、1981)。このことから、植物珪酸体化石を除いた微化石類は土器胎土の材料となる粘土中に含まれるものと考えられ、その粘土の起源を知るのに有効な指標に

なると考える。なお、植物珪酸体化石は、堆積物中に含まれていること、製作場では灰質が多く混入する可能性が高いなど、他の微化石類のように粘土の起源を指標する可能性は低いと思われる。

検討した土器胎土は、微化石類により1)外洋成粘土を用いた胎土、2)干潟成粘土を用いた胎土、3)淡水成粘土を用いた胎土、などであることが分かった。

1)外洋成粘土を用いた胎土 (No. 1・2・6, 8~14, 16, 29~27, 29・30; 22胎土)

これら胎土中には、放散虫化石が特徴的に含まれ、海水種珪藻化石の *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属や *Actinocyclus* 属あるいは *Thalassiosira* 属などが含まれていた。また、一部の胎土中には、外洋指標種群の *Thalassionema nitzschioides* など含まれていた。

2)干潟成粘土を用いた胎土 (No. 4)

これらの胎土中には、海水泥質干潟指標種群 *Nitzschia granulata* や内湾指標種群 *Melosira sulcata* などが含まれていた。なお、放散虫化石や海水種珪藻化石なども多く含まれていた。

3)淡水成粘土を用いた胎土 (No. 3・5・7・15・17・18・28)

これらの胎土中には、淡水種珪藻化石が特徴的に多く含まれていた。なお、放散虫化石や海水種珪藻化石なども多く含まれていた。

全体的に海綿動物の骨格の一部である骨針化石が多く含まれていた。これらの骨針化石は、白色の針状物として肉眼で確認される場合が多い。

遺跡が立地する台地は、下総層群の上泉層および清川層、新期段丘堆積層の市原Ⅱ段丘堆積層から構成される(徳橋ほか、1984)。遺跡が立地する台地の東側地域の地質調査では、褐色軽石層(御岳第1テフラ; 約8.0~9.5万年前)を挟んだ灰白色粘土層(常総粘土)が約1.5m程度堆積している状況が観察された。なお、この白色粘土層は、約1m程度の砂礫層により不整合に覆われ、上位には新期ローム層が堆積している(第285図)。この常総粘土の珪藻分析を行なったところ、少ないものの海水種珪藻化石 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属あるいは *Stephanopxis* 属などが検出され、テフラの上位粘土層中には淡水種珪藻化石 *Pinnularia* 属も含まれ、また骨針化石が多く含まれていた。なお、下位層の清川層中にも粘土層あるいは有機質粘土が見られたが、これらの粘土層中には沼沢湿地付着生指標種群などの淡水種珪藻化石が特徴的に多く含まれ、沼沢湿地環境で堆積した粘土質堆積物であることが分かった。

検討した土器胎土において見られた海水種珪藻化石 *Coscinodiscus* 属/*Thalassiosira* 属や *Stephanopxis* 属などを含み、骨針化石を多く含む粘土は、この常総粘土である可能性が高い。

5. 砂粒組成による分類

ここで設定した複合鉱物類は、構成する鉱物種や構造的特徴から設定した分類群であるが、地域を特徴づける源岩とは直接対比できない。このため、各胎土中の鉱物、岩石粒子の岩石学的特徴は、地質学的状況に一義的に対応しない。

ここでは、比較的大型の砂粒について起源岩石の推定を行った（第124表）。岩石の推定は、泥岩質や砂岩質あるいは複合石英類（微細）が堆積岩類、複合石英類（大型）や複合鉍物類（含輝石類・含角閃石類・含雲母類）が深成岩類、凝灰岩質が凝灰岩類、斑晶質や完晶質が火山岩類、ガラスがテフラ（火山噴出物）、軽石型ガラスが軽石質テフラである。

砂粒成分の分類は、最も多く出現する分類群（第1出現群）と次いで多く出現する分類群（第2出現群）の組合せに従った（第122表）。

対象とした土器胎土は、テフラを主体として堆積岩類などから構成される Fc 群が10胎土、堆積岩類を主体としてテフラなどから構成される Cf 群が6胎土、堆積岩類を主体として火山岩類などからなる Cd 群が6胎土、テフラを主体として凝灰岩類などから構成される Fe 群が2胎土、堆積岩類を主体として深成岩類などからなる Cb 群が2胎土、テフラを主体として火山岩類などから構成される Fd 群が2胎土、火山岩類を主体として堆積岩類などから構成される Dc 群が1胎土、堆積岩類を主体として凝灰岩類などからなる Ce 群が1胎土であった。このうち軽石型テフラを特徴的に多く含む胎土（Fc 群の一部・Cf 群の一部・Fe 群・Fd 群）は16胎土であった。

なお、実体顕微鏡による切断面の観察では、軽石を特徴的に多く含む P0タイプが9胎土、少ないものの軽石を含む P1タイプが8胎土、風化軽石を含む P2タイプが2胎土、明褐色粒子を特徴的に含む Rタイプが3胎土、その他が8胎土であった。

6. 考察

検討した弥生時代の甕・壺・鉢の胎土材料は、材料粘土においては放散虫化石や海水種珪藻化石を含むような外洋成粘土、干潟指標種群の珪藻化石を含む干潟成粘土、淡水種珪藻化石を含む淡水成粘土であり、いずれの胎土も放散虫化石や多量の骨針化石が含まれていた。

一方、胎土中の砂粒組成では、Fc 群が10胎土、Cf 群が6胎土、Cd 群が6胎土、Fe 群が2胎土、Cb 群が2胎土、Fd 群が2胎土、Dc 群が1胎土、Ce 群が1胎土であった。このうち軽石型テフラを特徴的に多く含む胎土は16胎土であり、軽石質テフラを含む土器は合計24胎土に及んだ。

粘土では、放散虫化石を含むような外洋成粘土を用いた胎土が多く見られたが、これ以外の淡水成粘土などにおいても放散虫化石が普遍的に含まれていた。なお、同市武士遺跡の在地とされる縄文土器においても同様の外洋成粘土が利用され、周辺遺跡における土器の粘土材料として普遍的に利用されたことが予想された（藤根・古橋、1998）。

遺跡周辺では、ローム層下に第四紀更新統の常総粘土、下総層群清川層あるいはその下位層の上泉層が堆積する（徳橋・遠藤、1984）。

実際に遺跡周辺において相当する粘土質堆積物を採取し検討した結果、常総粘土では少ないものの海水種あるいは淡水種の珪藻化石が含まれ、かつ骨針化石が多く含まれていた。また、清川層の粘土質堆積物では沼沢湿地指標種群などの珪藻化石が多く含まれていた。例えば、No. 14や No. 25あるいは No. 26の以外の胎土では、骨針化石を多く含み海水種珪藻化石や淡水種珪藻化石を僅かに含む胎土であるが、この常総粘土の特徴に類似している。なお、ここで検討した珪藻分析用のプレパラートは、珪藻などの細粒部を検討するために作成したものであるが、放散虫化石と思われる破片が僅かに見られた。

Fc 群や Cf 群の砂粒組成は、軽石型ガラスを特徴的に多く含み、同時に含まれる斜長石や角閃石類などの鉱物類は、その周辺にガラスが付着するものが多く、これら軽石に付随する粒子と考えられることから、混和材としてこれらのテフラ層を混入した可能性が高い。東海地域では、弥生後期パレススタイル土器の 3 分の 1 程度では、砂粒物が少ない一方、火山ガラスが多量に含まれる胎土があり、混和材として火山ガラスを混入した可能性が予想された（車崎ほか、1996；藤根、1998）。

ここで示した軽石を特徴的に多く含む土器は、器壁が厚いものの明らかに軽いと実感できる土器であり、土器の軽量化を狙って材料を選定したことも考えられる。

No. 14 の胎土中には、軽石の他角閃石類が特徴的に多く含まれていたが、これら特徴は阿蘇 4 テフラ（Aso-4）の特徴に類似している。なお、土器中に含まれるこれらテフラは、焼成によりガラスや鉱物に変化するため、ガラスなどの屈折率を測定してテフラを同定することは不可能である。

こうした粘土あるいは砂粒の違いは、利用した材料（地層）が異なることを示しているが、製作人や製作地の違いを反映しているものと予想される。検討した胎土では放散虫化石を含む外洋成粘土で軽石質テフラを特徴的に含む Fc 群の組成を示す胎土が多く見られたが、これらの土器は同一人により製作された土器である可能性も予想される。特に No. 11 や No. 12 あるいは No. 13 などは、白色軽石の混入する様子が肉眼的にも良く類似していることから、同一製作人による土器のように思われる。同様の類似した土器は、明褐色粒子を特徴的に含む No. 16 と No. 20 と No. 23、風化軽石を特徴的に含む No. 2 と No. 4、Cd 群の砂粒組成を示す No. 28 と No. 29 などである（図版 3・4・5）。

7. おわりに

釜神遺跡から出土した弥生時代の土器材料は、放散虫化石や骨針化石あるいは軽石テフラを普遍的に含む特徴的な材料であることが理解された。土器焼成の際、これら軽石型テフラは熱を受けているため、いずれの地層中に含まれるテフラであるかは特定できないが、放散虫化石や骨針化石を含むなど下総層群が分布するこの地域周辺の特徴であることは問題ないように思われる。

ただし、より具体的に利用した粘土層や混和材については、周辺地域の地層を詳細に調べ、粘土の堆積環境やテフラの分布状況など検討すべき課題と考える。

なお、胎土材料の類似性は、同一製作人により製作された土器を示す可能性があることから、考古学的な検討と合わせて検討すべきである。

<引用文献>

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用．東北地理，42, 2, 73-88.

地学団体研究会・地学事典編集委員会編（1981）『増補改訂 地学事典』，平凡社，1612p.

菱田 量・車崎正彦・松本 完・藤根 久（1993）岩石学的方法に基づく胎土分析について—弥生時代後期の土器を例にして—。日本文化財科学会第10回大会研究発表要旨集，34-35.

藤根 久（1998）東海地域（伊勢—三河湾周辺）の弥生および古墳土器の材料．第6回東海考古学フォーラム岐阜大会、土器・墓が語る、108-117.

藤根 久・古橋美智子（1998）付章6 武士遺跡出土縄文土器の材料分析．市原市武士遺跡2（第三分冊），千葉県水道局・財団法人千葉県文化財センター、1747-1768.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用．第四紀研究，27, 1-20.

車崎正彦・松本 完・藤根 久・菱田 量・古橋美智子（1996）(39)土器胎土の材料—粘土の起源を心中に—。日本考古学協会第62回大会研究発表要旨、153-156.

徳橋秀一・遠藤秀典（1984）姉崎地域の地質．地域地質研究報告（5万分の1図幅），地質調査所，136p.

第120表 土器試料と胎土の肉眼および実体顕微鏡による観察※第286図に対応

整理No	遺構番号	遺物No	器種	時期	肉眼による観察					実体顕微鏡による切断面の観察				
					色相	明度	彩度	色	最大粒径	中黒層の有無	軽石	骨針化石	粒子の特徴	タイプ分け
1	SI-005	2	甕	弥生後期	7.5YR	7/4		にぶい橙	2mm	なし	多量	有り	黒色粒子・黄色軽石多い	P0
2	SI-010	1	甕	弥生後期	7.5YR	5/6		明褐	1mm	やや有り	(多量)		黄色粒子 (風化軽石?) 多い	P2
3	SI-014	1.7	甕	弥生後期	7.5YR	7/3		にぶい橙	1.5mm	なし	有り	有り	砂粒多く・黄色軽石含む	P1
4	SI-018	7	鉢	弥生後期	10YR	4/1		褐灰	2mm	黒色	(多量)		黄色粒子 (風化軽石?) 多い	P2
5	SI-021	33	甕	弥生後期	10YR	6/4		にぶい黄橙	1mm	幅広く有り	多量	少量	白色軽石・黒色鉱物多い	P0
6	SI-069	87.133	甕	宮ノ台	5YR	7/3		にぶい橙	500 μ m前後	幅狭く有り		少量	細粒砂多い	—
7	SI-069	5	甕	宮ノ台	7.5YR	7/4		にぶい橙	500 μ m前後	なし			砂粒多い	—
8	SI-069	41	甕	宮ノ台	10YR	4/2		灰黄褐	木目細かい	なし		有り	細粒質胎土、骨針化石含む	—
9	SI-069	92	甕	宮ノ台	7.5YR	6/3		にぶい褐	3mm	幅狭く有り	少し	有り	骨針化石目立つ	—
10	SI-069	113	甕	宮ノ台	7.5YR	6/3		にぶい褐	2mm	内側2/3黒色		有り	骨針化石目立つ	—
11	SI-070	69	甕	弥生後期	7.5YR	6/6		橙	1mm	有り	多量	少量	白色軽石多い	P0
12	SI-076	36	鉢	弥生後期	10YR	7/3		にぶい黄橙	2mm	なし		有り	白色軽石・黒色鉱物多い	P0
13	SI-076	36	甕	弥生後期	7.5YR	7/4		にぶい橙	500 μ m前後	なし		有り	白色軽石・黒色鉱物多い	P0
14	SI-077	42	甕	弥生後期	19YR	7/4		にぶい黄橙	2mm	なし			白色軽石・黒色鉱物多い	P0
15	SI-078	36	甕	弥生後期	5YR	7/4		にぶい橙	木目細かい	濃く有り			細粒質胎土	—
16	SI-106	63	甕	弥生後期	10YR	7/4		にぶい黄橙	あまり粗くない	幅狭く有り		有り	明褐色粒子多い	R
17	SI-108	12	甕?	弥生後期	10YR	7/3		にぶい黄橙	1.5mm	幅広く有り	有り		白色軽石・黒色鉱物多い	P1
18	SI-114	1.15	甕	弥生後期	5YR	5/6		明赤褐	1.5mm	なし			黒色鉱物多い、黄色軽石	P1
19	SI-115B	263	鉢	弥生後期	7.5YR	6/4		にぶい橙	1mm	幅狭く有り		有り	黒色鉱物、骨針化石目立つ	P1
20	SI-115B	422.432	甕	弥生後期	10YR	8/4		浅黄橙	2mm	なし		有り	明褐色粒子多い	R
21	SI-121	20	甕	弥生後期	10YR	7/4		にぶい黄橙	500 μ m前後	なし	有り	有り	黒色鉱物、骨針化石目立つ	P1
22	SI-132	32	甕	弥生後期	10YR	5/3		にぶい黄褐	2mm	内側2/3黒色		有り	大型白色軽石、黒色鉱物多い	P0
23	SI-133	12.13	甕	弥生後期	10YR	7/4		にぶい黄橙	1mm前後	なし			明褐色粒子多い、骨針化石含む	R
24	SI-150	24	甕	弥生後期	10YR	7/4		にぶい黄橙	2mm	なし		有り	粗粒砂多い	—
25	SI-150	18	甕	弥生後期	5YR	6/6		橙	2.5mm	なし			大型砂粒・黒色粒子多い、	—
26	SI-159	90	甕	弥生後期	2.5YR	8/3		淡黄	1.5mm	なし		有り	白色軽石多い、黒色鉱物目立つ	P0
27	SI-161	16	甕	弥生後期	10YR	6/4		にぶい黄橙	3mm	淡色有り			大型白色軽石・黒色鉱物多い	P0
28	SI-173	1	甕	弥生後期	10YR	6/4		にぶい黄橙	1mm	有り		有り	大型砂粒多い、黄色軽石含む	P1
29	SI-177	27	甕	弥生後期	7.5YR	7/3		にぶい橙	1.5mm	幅広く有り			大型砂粒多い、黒色粒子目立つ	P1
30	SI-209	31	鉢	弥生後期	10YR	6/4		にぶい黄橙	1mm	なし	有り	有り	細粒質胎土、骨針化石含む	P1

第121表 土器胎土中の粒子組成一覽表

分 類 群		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
微化石類																																
放射虫化石																																
骨針化石	8	59	60	46	28	10	9	6	2	4	7	2	4	8	28	45	20	10	29	73	20	3	5	30	45	199	19	17	55	36	22	
珪藻化石 (海水種)	-	4	6	4	2	-	2	1	-	-	-	2	-	5	4	2	1	-	-	4	-	4	1	4	2	68	15	-	13	-	1	
珪藻化石 (淡水種)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
珪藻化石 (?)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
胞子化石	-	72	5	10	36	-	10	-	-	-	2	-	-	1	5	9	1	7	1	8	1	5	-	9	4	-	2	59	3	1	-	
植物珪藻体化石	16	158	46	63	86	37	14	1	16	5	25	9	4	6	111	76	17	36	80	97	25	29	60	57	90	8	12	230	94	5	5	
鉱物類																																
石英・長石類	61	95	77	77	62	135	116	115	116	125	55	107	76	22	128	129	79	63	99	121	71	139	121	93	29	23	42	114	100	85	-	
石英・長石類 (含雲母類)	3	11	26	17	9	15	10	23	23	10	7	12	9	2	6	16	5	1	23	11	10	10	10	18	8	4	2	2	10	7	6	
斜長石 (双晶)	9	7	5	14	7	17	15	4	8	8	11	22	14	7	8	10	24	42	8	9	9	5	12	5	13	5	32	11	8	5	5	
斜長石 (紫帯)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-	1	6	-	-	1	-	-	-	2	1	1	-	1	-	
カリ長石 (バースサイト)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	1	1	-	-	-	-	1	
カリ長石 (微斜長石)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
雲母類	-	8	10	13	7	15	7	13	13	4	1	8	4	-	5	11	5	4	7	1	3	3	5	5	-	-	-	-	3	11	14	21
単斜輝石	2	-	-	2	-	-	-	1	3	-	1	-	1	-	1	4	1	1	-	1	5	1	-	3	3	3	-	1	1	-	1	-
斜方輝石	2	4	2	-	6	3	6	3	1	1	1	1	-	-	11	6	4	4	1	4	4	7	2	2	2	3	5	5	5	4	3	
角閃石類	3	7	4	7	13	14	5	15	6	6	20	27	14	51	22	15	15	27	7	8	15	21	16	15	-	13	3	11	13	4	3	
ガラス質	1	26	16	24	29	5	13	6	6	17	10	15	20	6	33	25	19	18	9	17	9	14	13	19	5	47	30	30	30	16	16	
濁ガラス	12	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	-	-	-	1	-	1	-	-	1	1	3	4	2	1	1	1	1	1	-	1	
複合鉱物類																																
軽石型ガラス	52	-	8	3	13	-	-	-	3	-	1	47	25	51	27	-	-	12	17	1	5	36	5	-	-	1	37	16	4	2	25	
発泡珪晶質	6	-	1	-	6	-	-	-	-	-	-	14	3	3	13	-	-	2	6	-	1	7	16	-	-	3	2	2	-	-	1	-
珪晶質	11	-	-	2	1	1	3	1	1	-	-	-	1	1	-	1	2	2	-	2	-	1	1	3	3	29	-	2	3	2	1	-
完晶質	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	13	-	6	-	1	-	
凝灰岩質	-	2	-	-	-	-	-	1	2	1	1	2	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
複合雲母類	-	1	-	-	1	-	1	1	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2	
複合鉱物類 (含雲母類)	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-
複合鉱物類 (含輝石類)	1	-	-	-	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	7	1	-	-	
複合鉱物類 (含角閃石類)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	2	-	-	-
複合石英類 (大型)	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	1	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	2	-	-	-
複合石英類 (中型)	-	1	1	1	2	1	1	-	-	1	1	-	-	-	-	-	1	-	1	-	1	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
複合石英類 (小型)	5	29	12	13	7	16	14	12	11	32	13	6	5	-	16	21	12	7	10	16	7	14	20	9	9	-	5	9	8	8	8	-
複合石英類 (微細)	1	4	-	-	-	2	2	1	-	-	5	1	-	-	3	-	2	1	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	1	-	-	1
複合石英類 (等粒)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
砂岩質	1	3	7	5	-	8	5	4	17	5	2	2	-	-	-	-	7	2	-	18	12	1	5	6	15	7	-	3	13	7	5	5
泥岩質	1	8	29	13	9	16	27	16	24	18	5	4	2	-	6	10	5	1	25	22	12	16	10	18	7	-	4	4	12	12	12	-
その他																																
不透明	2	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	3	1	3	-	-	3	-	-	1	2	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-
不明	-	3	-	-	-	-	4	1	6	1	2	-	2	1	1	1	-	-	-	1	-	-	-	1	2	7	-	1	1	3	1	-
総ポイント数																																
	198	500	321	315	327	303	269	239	249	251	223	256	210	166	392	386	235	249	329	418	242	297	332	321	510	186	201	593	348	230	-	-

第122表 土器胎土中の砂粒分類

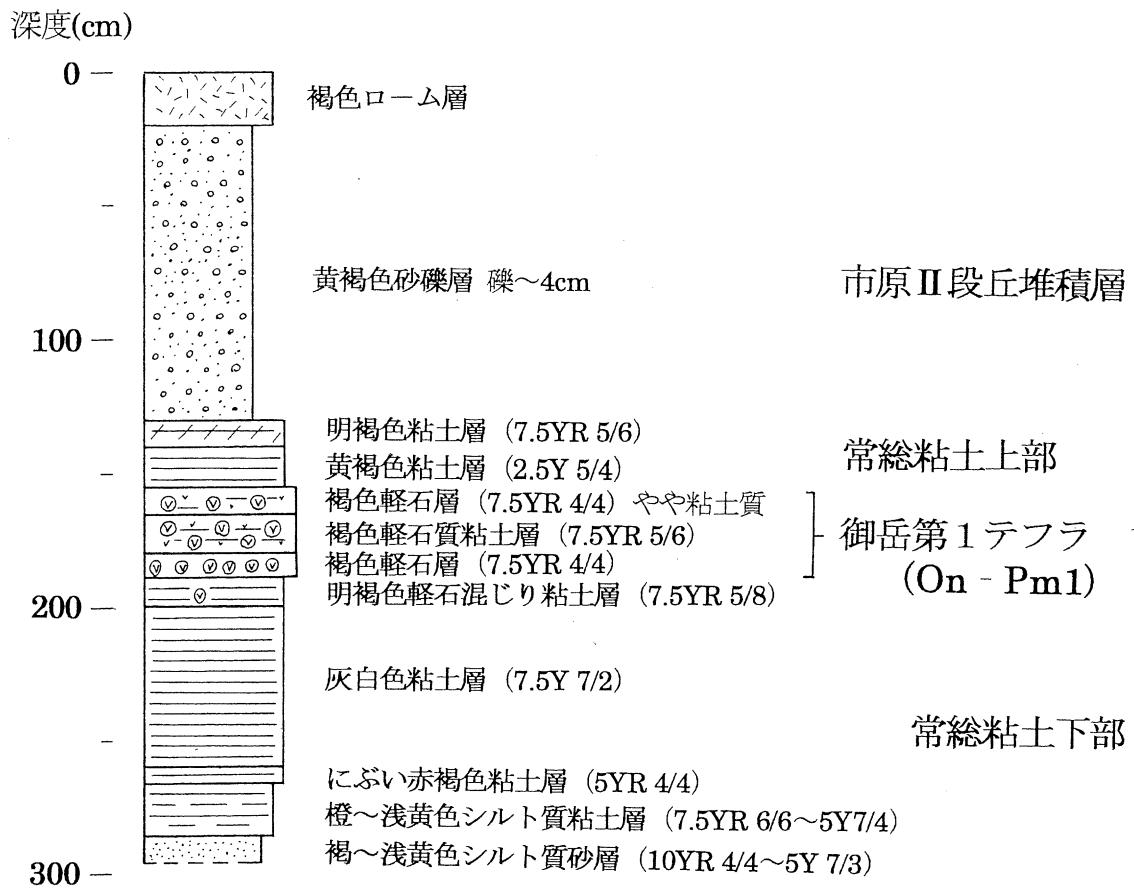
			第1出現群					
			A	B	C	D	E	F
			片岩類	深成岩類	堆積岩類	火山岩類	凝灰岩類	テフラ
第2出現群	a	片岩類	—	B a	C a	D a	E a	F a
	b	深成岩類	A b	—	C b	D b	E b	F b
	c	堆積岩類	A c	B c	—	D c	E c	F c
	d	火山岩類	A d	B d	C d	—	E d	F d
	e	凝灰岩類	A e	B e	C e	D e	—	F e
	f	テフラ	A f	B f	C f	D f	E f	—

第123表 分析用土器一覧表 ※第286図に対応する

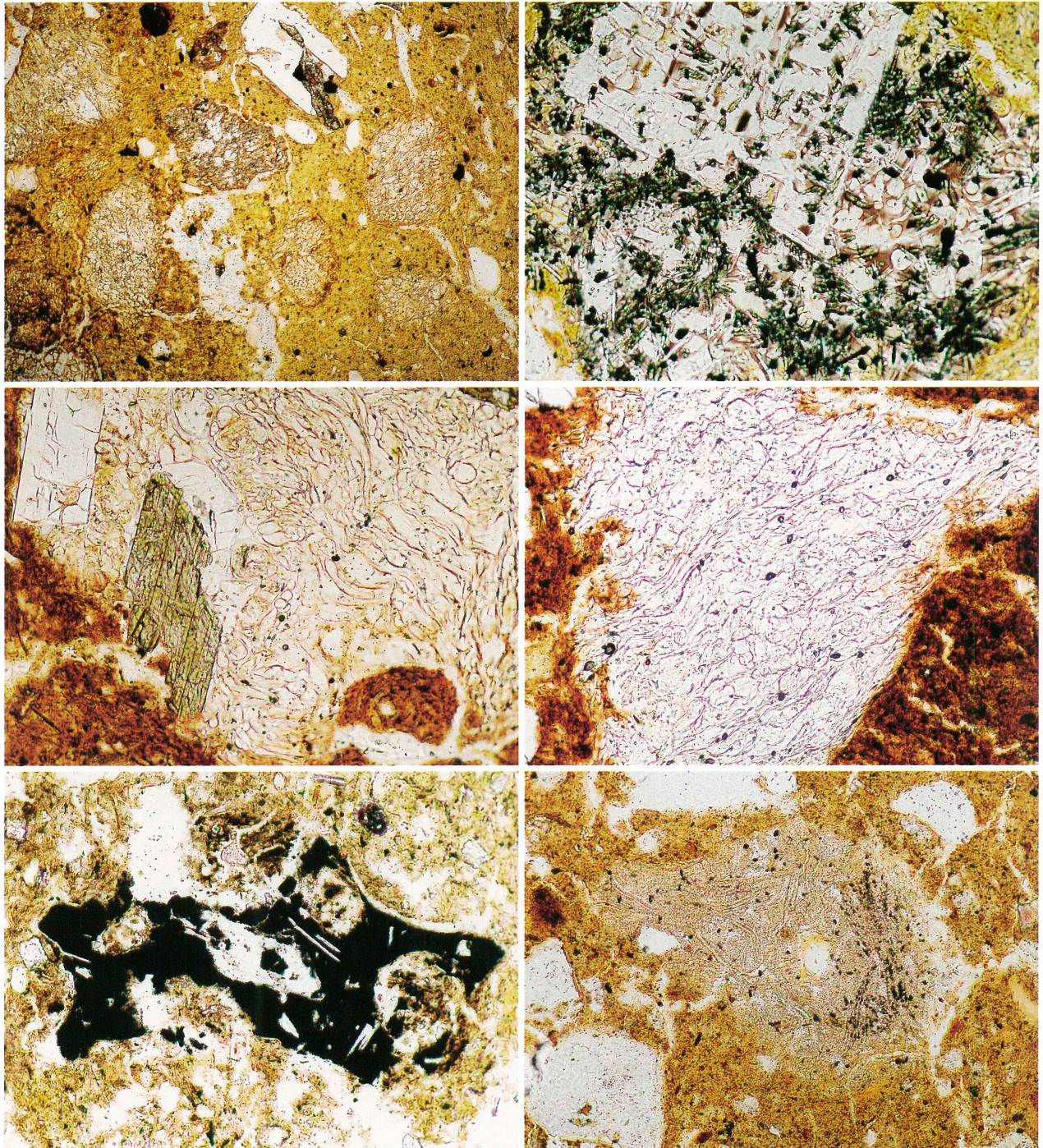
整理 No.	遺構 番号	遺物 番号	遺物の 種類	時 期	備 考
1	SI-005	2	壺	弥生後期	
2	SI-010	1	甕	弥生後期	
3	SI-014	1.7	甕	弥生後期	
4	SI-018	7	鉢	弥生後期	
5	SI-021	33	壺	弥生後期	
6	SI-069	87.133	壺	宮ノ台	
7	SI-069	5	甕	宮ノ台	
8	SI-069	41	甕	宮ノ台	
9	SI-069	92	甕	宮ノ台	
10	SI-069	113	甕	宮ノ台	
11	SI-070	69	壺	弥生後期	
12	SI-076	36	鉢	弥生後期	
13	SI-076	36	壺	弥生後期	
14	SI-077	42	壺	弥生後期	
15	SI-078	36	甕	弥生後期	
16	SI-106	63	壺	弥生後期	
17	SI-108	12	壺 ?	弥生後期	
18	SI-114	1.15	壺	弥生後期	
19	SI-115B	263	鉢	弥生後期	
20	SI-115B	422.432	甕	弥生後期	
21	SI-121	20	壺	弥生後期	
22	SI-132	32	壺	弥生後期	
23	SI-133	12.13	壺	弥生後期	
24	SI-150	24	甕	弥生後期	
25	SI-150	18	甕	弥生後期	
26	SI-159	90	壺	弥生後期	
27	SI-161	16	壺	弥生後期	
28	SI-173	1	甕	弥生後期	
29	SI-177	27	甕	弥生後期	
30	SI-209	31	鉢	弥生後期	

第124表 甕・壺・鉢胎土の粘土および砂粒の特徴 ※第286図に対応する。

整理No	遺構	遺物No	器種	時期	粘土の特徴		砂粒の特徴		その他	砂粒の分類
					堆積環境	散在化石	骨針化石	その他	砂粒組成(細度順)は高率、[]は稀	
1	SI-005	2	甕	弥生後期	外洋成	2個体	多産	甕石質テフラ、凝灰岩類、火山岩類、堆積岩類	発泡珪晶質含む	P0 ※
2	SI-010	1	甕	弥生後期	外洋成	2個体	多産	[堆積岩類、凝灰岩類、テフラ]	細粒胎土	P2 ※
3	SI-014	1,7	甕	弥生後期	淡水成	17個体	多産	堆積岩類>軽石質テフラ>凝灰岩類、[深成岩類、火山岩類]		P1 ○
4	SI-018	7	鉢	弥生後期	干潟成	10個体	多産	堆積岩類>軽石質テフラ、凝灰岩類	発泡珪晶質含む	P2 ◎
5	SI-021	33	甕	弥生後期	淡水成	5個体	多産	甕石質テフラ>堆積岩類>凝灰岩類、火山岩類	発泡珪晶質含む	P0 ○
6	SI-069	87,133	甕	宮ノ台	外洋成	6個体	多産	堆積岩類>火山岩類>テフラ、凝灰岩類、深成岩類		— ※
7	SI-069	5	甕	宮ノ台	淡水成	7個体	多産	堆積岩類>火山岩類>テフラ、凝灰岩類、[深成岩類]	発泡珪晶質含む	— ○
8	SI-069	41	甕	宮ノ台	外洋成	7個体	多産	堆積岩類>テフラ>凝灰岩類、軽石質テフラ、火山岩類		— ※
9	SI-069	92	甕	宮ノ台	外洋成	2個体	多い	堆積岩類>深成岩類、テフラ、凝灰岩類	黒褐色粒子多い	— ※
10	SI-069	113	甕	宮ノ台	外洋成	5個体	多い	堆積岩類>テフラ>凝灰岩類、火山岩類、深成岩類、[軽石質テフラ]		— ※
11	SI-070	69	甕	弥生後期	外洋成	4個体	多産	軽石質テフラ>堆積岩類>凝灰岩類、火山岩類	ヨシ属植物珪酸体化石含む	P0 ※
12	SI-076	36	鉢	弥生後期	外洋成	9個体	多産	軽石質テフラ>堆積岩類、火山岩類、[凝灰岩類]		P0 ※
13	SI-076	36	甕	弥生後期	外洋成	2個体	多産	軽石質テフラ>堆積岩類、火山岩類、凝灰岩類		P0 ※
14	SI-077	42	甕	弥生後期	外洋成	6個体	多産	軽石質テフラ>火山岩類、堆積岩類、凝灰岩類	発泡珪晶質含む	P0 ※
15	SI-078	36	甕	弥生後期	淡水成	7個体	多産	テフラ>堆積岩類、火山岩類	細粒胎土	— ○
16	SI-106	63	甕	弥生後期	外洋成	5個体	多産	堆積岩類>テフラ、火山岩類、軽石質テフラ、凝灰岩類		R ※
17	SI-108	12	甕?	弥生後期	淡水成	8個体	多産	軽石質テフラ>堆積岩類、火山岩類、凝灰岩類	植物遺体含む	P1 ○
18	SI-114	1,15	甕	弥生後期	淡水成	6個体	多産	軽石質テフラ>堆積岩類、凝灰岩類、深成岩類		P1 ○
19	SI-115B	263	鉢	弥生後期	外洋成	12個体	多産	堆積岩類>軽石質テフラ、火山岩類、凝灰岩類		P1 ※
20	SI-115B	422,432	甕	弥生後期	外洋成	4個体	多産	堆積岩類>火山岩類、凝灰岩類、軽石質ガラス		R ※
21	SI-121	20	甕	弥生後期	外洋成	6個体	多産	軽石質テフラ>堆積岩類、火山岩類、凝灰岩類		P1 ※
22	SI-132	32	甕	弥生後期	外洋成	6個体	多産	軽石質テフラ>堆積岩類、火山岩類		P0 ※
23	SI-133	12,13	甕	弥生後期	外洋成	7個体	多産	堆積岩類>深成岩類>火山岩類、テフラ、凝灰岩類	発泡珪晶質含む	R ※
24	SI-150	24	甕	弥生後期	外洋成	8個体	多産	堆積岩類>火山岩類>深成岩類、テフラ、凝灰岩類、[軽石質テフラ]	発泡珪晶質含む	— ※
25	SI-150	18	甕	弥生後期	外洋成	11個体	多産	火山岩類、[軽石質テフラ]	発泡珪晶質含む	— ※
26	SI-159	90	甕	弥生後期	外洋成	101個体	多産	軽石質テフラ>凝灰岩類、火山岩類	発泡珪晶質含む	P0 ※
27	SI-161	16	甕	弥生後期	外洋成	8個体	多い	堆積岩類>テフラ>火山岩類、堆積岩類	陸域指標種珪酸化石	P0 ※
28	SI-173	1	甕	弥生後期	淡水成	6個体	多い	堆積岩類>火山岩類、凝灰岩類、テフラ、[軽石質テフラ]		P1 ○
29	SI-177	27	甕	弥生後期	外洋成	9個体	多産	堆積岩類>火山岩類、テフラ、深成岩類、[軽石質テフラ]	発泡珪晶質含む	P1 ※
30	SI-209	31	鉢	弥生後期	外洋成	5個体	多い	軽石質テフラ>堆積岩類、火山岩類、凝灰岩類		P1 ※

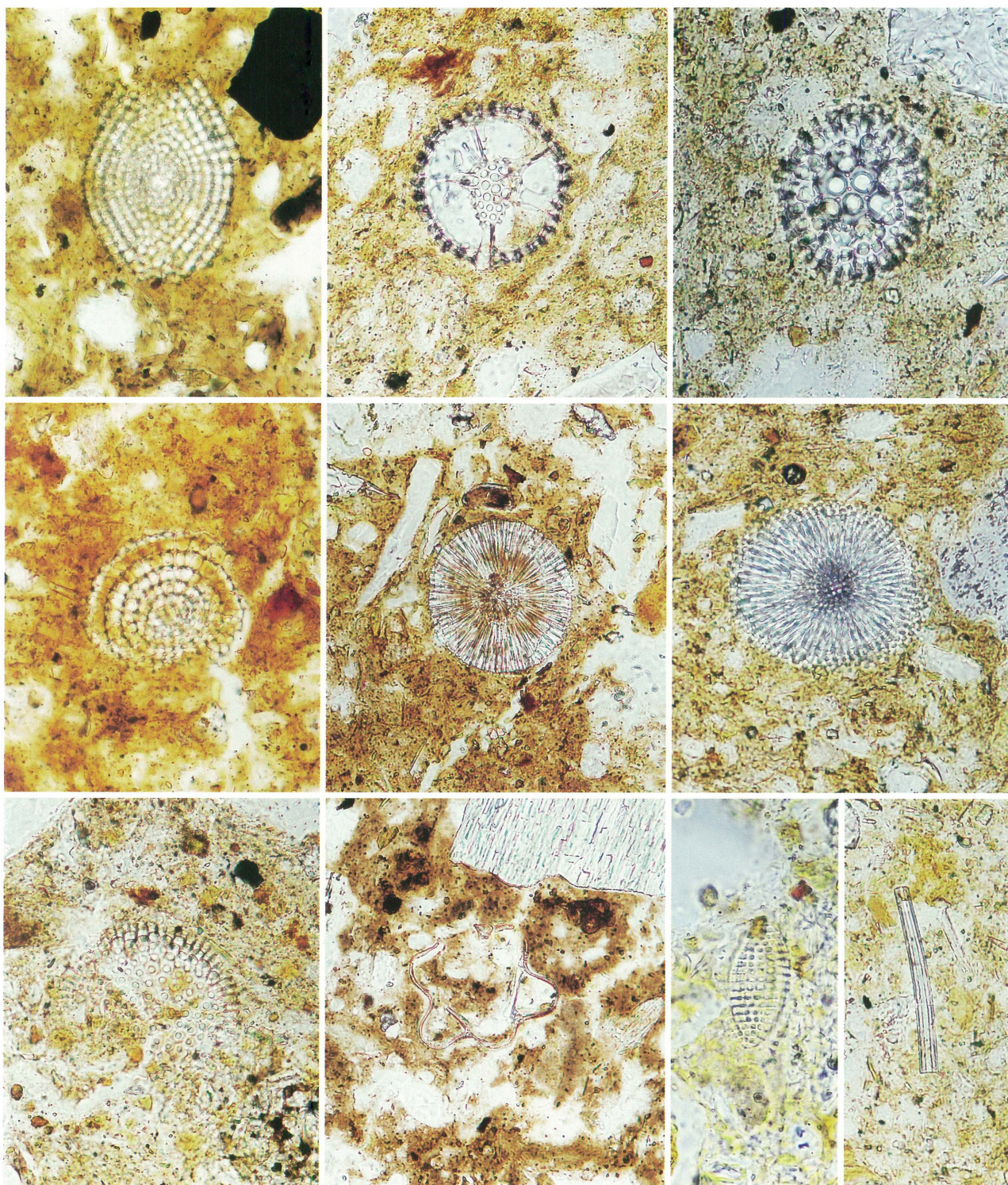


第285図 遺跡付近の地質柱状図 (同台地の東側地域)



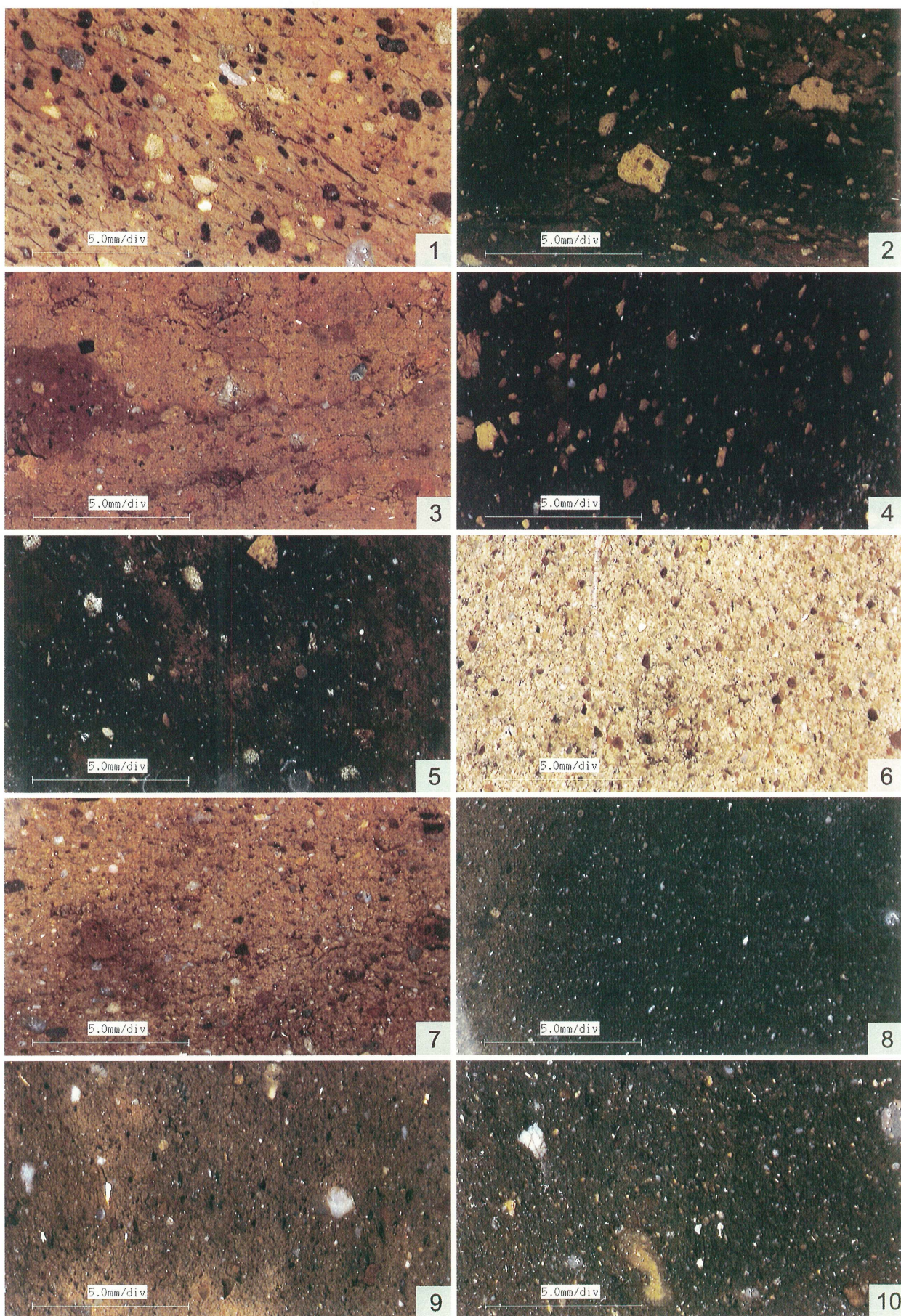
図版1. 土器胎土中の粒子顕微鏡写真（スケール：No. 1 は1ミリ、他は100ミクロン）

- | | |
|-------------------------|-------------------|
| 1. 胎土の状況写真（軽石型ガラス）No. 1 | 2. ガラス付着斑晶質 No. 1 |
| 3. 軽石型ガラス（含角閃石類）No. 5 | 4. 軽石型ガラス No. 11 |
| 5. 発泡斑晶質（スコリア）No. 4 | 6. 凝灰岩質 No. 9 |

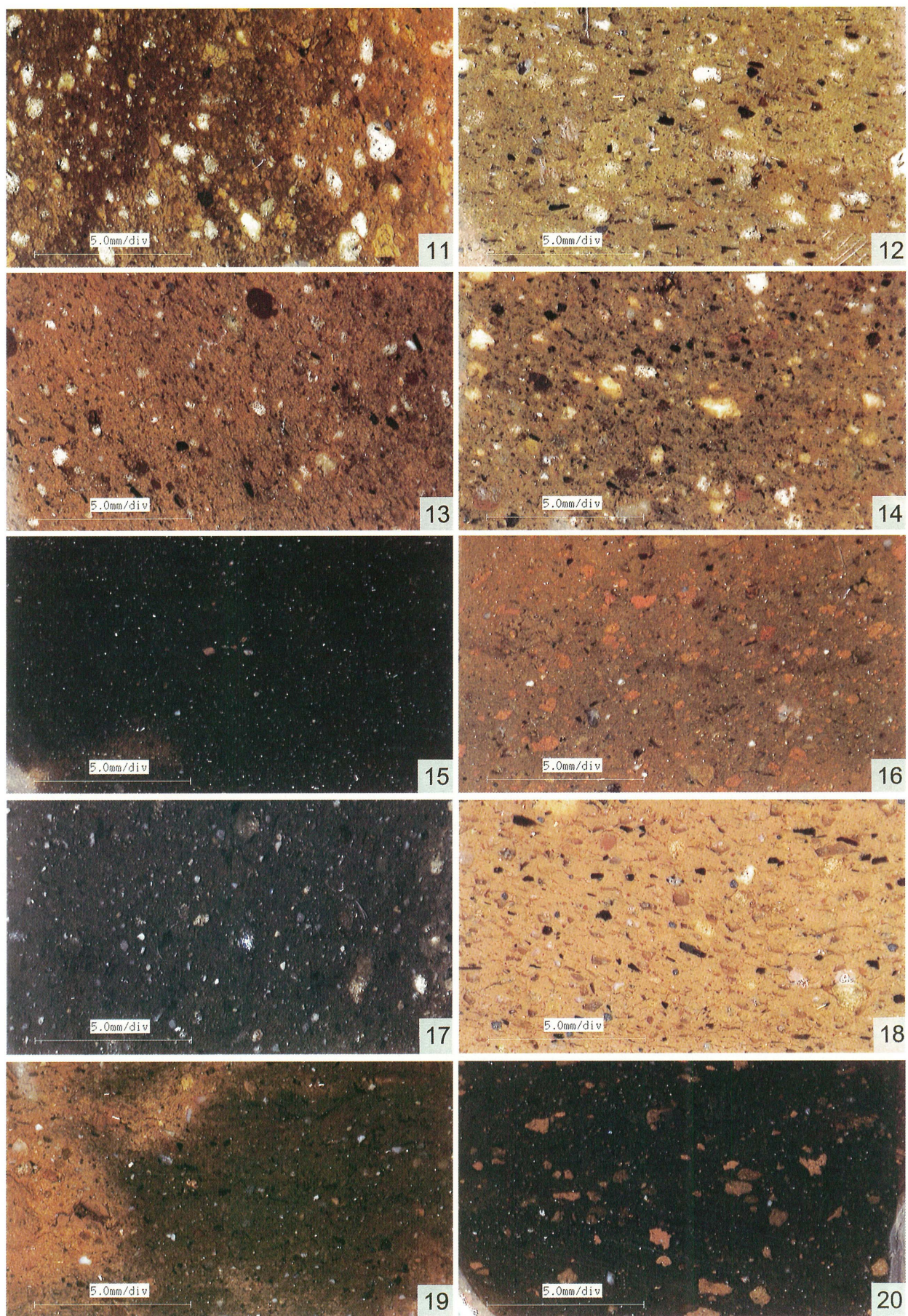


図版 2. 土器胎土中の粒子顕微鏡写真 (スケール: No. 9 は40ミクロン、他は100ミクロン)

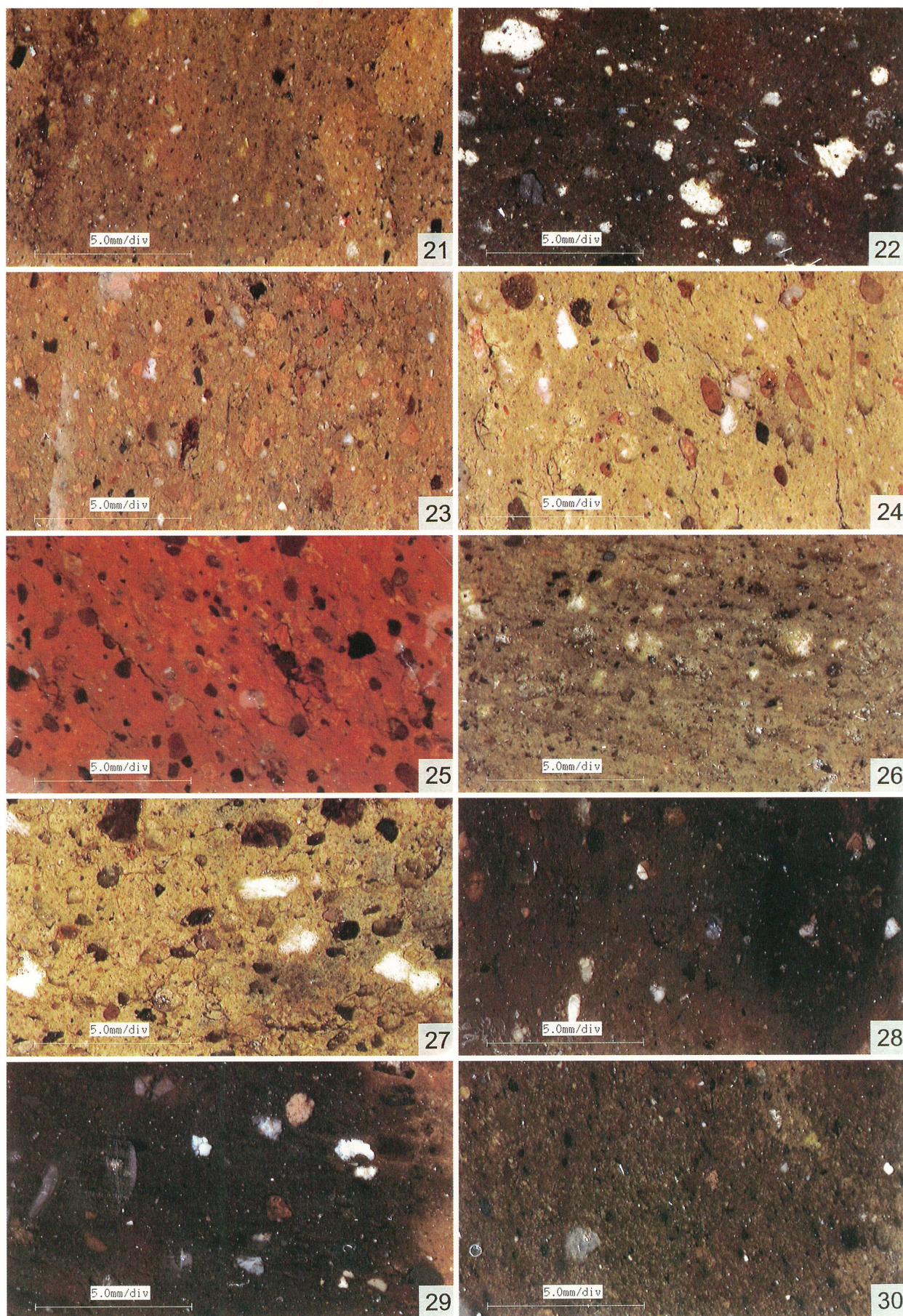
- | | | |
|--|---|-----------------|
| 1. 放散虫化石 No. 8 | 2. 放散虫化石 No. 27 | 3. 放散虫化石 No. 26 |
| 4. 放散虫化石 No. 3 | 5. 放散虫化石 No. 7 | 6. 放散虫化石 No. 23 |
| 7. 珩藻化石 (外洋指標種 <i>Coscinodiscus marginatus</i>) No. 6 | 8. 珩藻化石 (汽水種 <i>Hydrosera triquetra</i>) No. 8 | |
| 9. 珩藻化石 (海水泥質干潟種 <i>Nitzschia granulata</i>) No. 4 | 10. 骨針化石 No. 28 | |



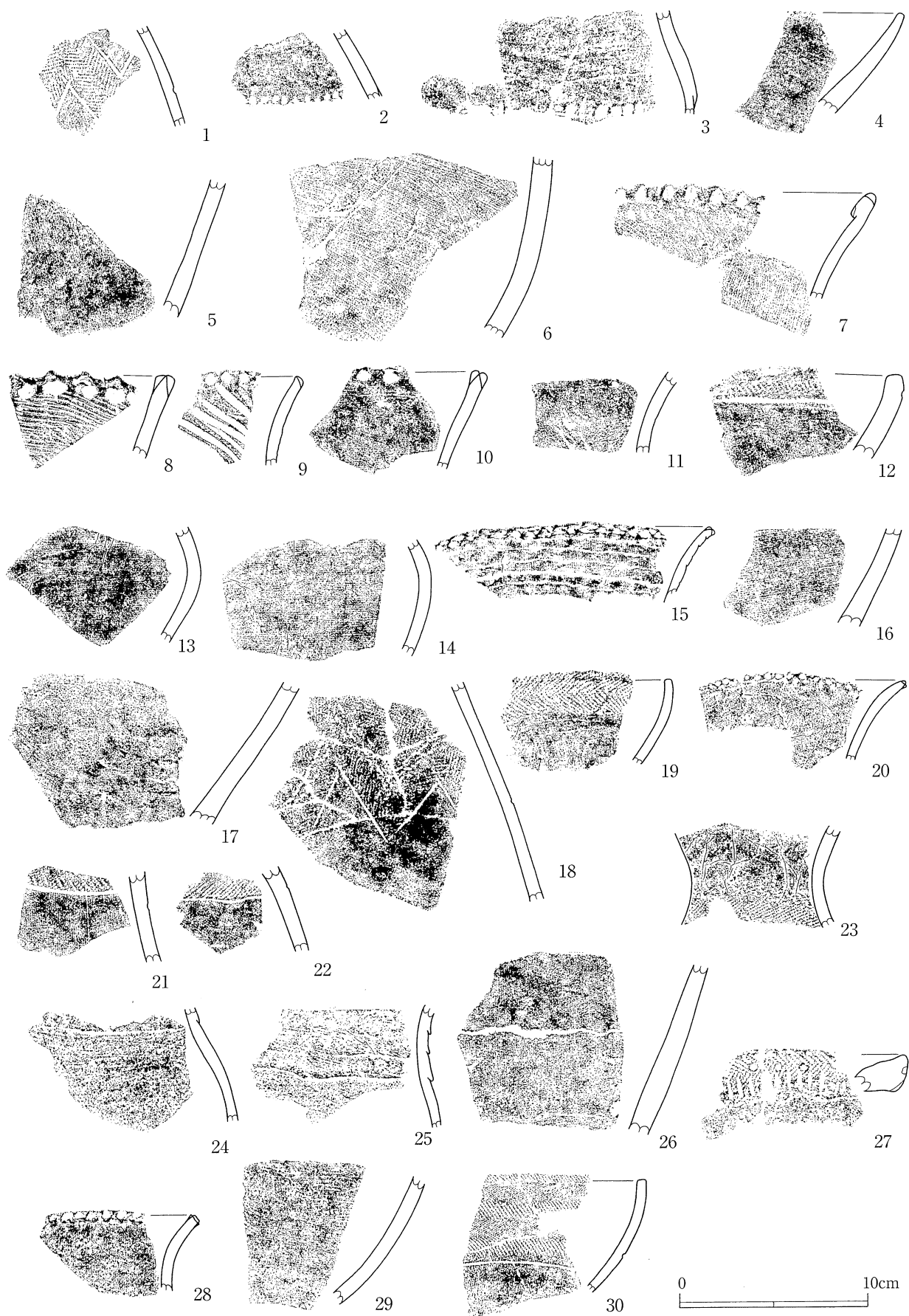
図版 3. 切断面のマイクロスコップ写真（番号は試料番号に対応する）



図版 4. 切断面のマイクロスコープ写真 (番号は試料番号に対応する)



図版 5. 切断面のマイクロスコープ写真（番号は試料番号に対応する）



第286図 胎土資料土器片実測図（第115、116表に対応する）

Ⅳ まとめ

釜神遺跡は、18,000m²の本調査を実施し、主な遺構は、弥生時代中期末から平安時代の竪穴住居跡257軒（建替を含む）、古墳時代前期の方形周溝墓5基、中期から後期初頭の円墳9基、縄文時代から近世にいたる土坑50基（SI-168を土坑とした）、平安時代から近世にいたる溝状遺構26条、平安時代と思われる掘立柱建物跡3棟などである。

当項では釜神遺跡から検出された遺構や遺物について簡単にまとめてみたい。

旧石器については、宇井義典氏にお願いした。遺構は検出されず、すべて、後世の遺構覆土からの出土であるが、ナイフ形石器3点、角錐状石器2点、エンドスクレイパー2点、ピエス・エスキュー4点、石刃2点などであり、立川ロームVI層からⅢ層の段階である。

縄文土器については、平成10、11年に当遺跡の整理を担当した蜂屋孝之氏が執筆され、早期撚糸文系から晩期にいたる土器片が検出されているが、特に遺構は認められていない。縄文土器片は掲載した資料以外に多く出土しているが、代表的な例を取り上げている。全体として早期撚糸文系と条痕文系が多いが、特に希少で注目される例が、早期前葉の花輪台式（39）や早期後葉の打越式（103～110）などが少量認められる。

弥生時代中期末の須和田式の壺片も少量認められ、再埋葬の可能性も伺えるが、これらは縄文時代も含めて、弥生時代中期末様以降の多数の遺構群に切られて消滅したとみられる。

次に弥生時代中期末から平安時代にいたる257軒について概要を記したい。先ず、時期区分については、多くの先学の研究成果があるが^(註1)、弥生時代から古墳時代前期は大村直氏、菊地健一氏、陣内康光氏などの編年、古墳時代中期から後期は小沢洋氏、木對和紀氏の編年を参考に行いたい。

I期、弥生時代中期、宮ノ台式を一括した。主に末様と考えられる。甕は鉢状で口径に最大径をもつ。文様はヘラ描き羽状文、刷毛目、ヘラナデなど、口縁部はユビやヘラによる波状。また、口縁部に粘土紐接合痕を残す例もある。壺は胴部が小さくやや張り、頸部は細長く口縁部に向かって外反する。文様は、櫛描文や斜縄文を沈線で区画し、舌状文などを描く。SI-（52）、（62A）、69A、69B、（73）、（80）、105A、（123B）、144、（151）、184の11軒でいずれも末期と考えられる。

Ⅱa期は後期久ヶ原式で宮ノ台式の形をひきつぎ、口径が最大径の甕が主体で、胴部が球状にちかくなる例と鉢状に口縁部まで開く例があり、また、口縁部に粘土紐接合痕をもつ例と無い例、胴部上位に刻目、口縁部と頸部に刻目を施す例がある。口唇部は波状。壺は頸部が細く胴部は張り、口縁部は短い複合口縁で下端に刻目、口縁部と頸部には沈線で区画された斜縄文や羽状縄文及び結節文が施される。また、この時期は大型鉢や小型鉢、広口壺なども出現する。SI-13、31、57、（64）、74、77、79、（90）、97、（100）、106、107、114、121A、（122A）、132B、125、129、133、134、（140）、143、155、157、158、160、165、（170）、177、181、188、（190）、204、213、216の35軒である。また、甕の形体や竪穴の切り合いなどから更に2時期に分けられる。

Ⅱb期も久ヶ原式で甕の胴部中央が球状となり、頸部は曲線的に口縁部へ移行する。頸部の粘土紐接合痕や口唇部の波状はⅡa期と同様に各種がみられる。壺も胴部が強く張る傾向にあり、文様も多様である。無頸壺や鉢の種類と量が豊富で、高坏は無文の例がある。文様のある素口縁壺は最終段階とみられる。SI-（01）、（02）、（05）、（09）、（26）、46、（56）、（65A）、（67AB）、（68）、70、（75）、

(76)、(78)、(93)、(98)、108、(115B)、116、120、122B、124、123C、(128)、132A、135、139、145、(148)、150、153、159A、169、174、(175)、179、183、(186)、(191)、192A、(199)、195、202、203A、(205)、(212) の47軒でこの時期も各器形の組み合わせや形体、竪穴の切り合い関係から更に3時期に分けられる。

Ⅱc期も久ヶ原式で、甕の胴部の張りが弱くなり、やや下位に最大径を持ち、口頸から口縁部は少し短くなり、口縁部の外反も少ない傾向にある。壺は大型の例が一部に残り、鉢は小型化と文様の衰退がみられる。高坏は坏部が碗状の例が出現する。SI-16、17、18、21、27、36、49、99A、104、117、127B、131、141、152、164、(166A)、(173)、193、196、198、208、210の22軒であり、この時期もⅡb期とⅢ期寄りの更に3時期にも分けられる可能性がある。

Ⅲa期は鴨居上ノ台式で、甕の胴部は球状かそれに近くなり、頸部は短く外反する。頸部の粘土紐接合痕はヘラナデやユビナデにより消されるなどほとんど見られなくなる。しかし、胴上部には段が残り、刻目が存在する例はある。壺は短い複合口縁をもち、頸部は細い例や逆ハの字状に開く例があり、文様は結節文や斜縄文が施される。鉢は前段階からの大型や小型の例が存在する。また、台付甕にわずかに刷毛目を残す例や粘土紐接合痕を明瞭に残す例がある。SI-10、28、29、35、47、50、61A、66A、71、138、169、172、180、182、185、187、(194) の17軒で、次のⅢb期との間に1期存在する様であるが、当項ではⅢa期で一括した。

Ⅲb期も鴨居上ノ台式で、弥生末期と考えられる。甕の胴部は球状で、口縁部はやや丸みがあるがくの字状にちかくなる。口唇部の刻目はほとんどみられなくなるが、頸部の粘土接合痕は明瞭に残る例がある。台付甕や小型鉢も存在し、高坏は脚部穿孔で坏部下位に稜をもつ例がみられる。SI-06、33、62B、72、171A、(206B) の6軒とみられる。

Ⅳ期は古墳時代前期の五領式で、くの字状口縁で球状の胴部をもつ甕が主体で、外面と内面の一部に刷毛目調整痕が残る。壺は口径が小さく外反する例がある。高坏は脚部に穿孔、坏下位に稜をもつ例が増える。また、甕ではやや長胴化した例もあり、新旧2時期に更に分けられる。SI-04、25、41、59、127A、176の6軒である。また、少量の破片のみであるが五領式の可能性がある住居跡はSI-102、118A・B、126である。

Ⅴ期は古墳時代中期の和泉式で、甕は刷毛目無しのやや長胴化した例が主体で、埴は体部と口縁部の径や割合が等しい例や体部が張り出す例がある。高坏は坏部に稜をもつ。SI-37、163、189、197、201、203B、211、213、214、215の10軒である。また坏は平底と丸底が有り、器高は比較的高い。

Ⅵ期は古墳時代後期の鬼高式とみられ、器高が低い碗状の坏や須恵器模倣坏の器高の低い例などがみられる。甕は球形や長胴の例、甗や鉢など、高坏は長脚でやや広く浅い坏をもつ例がある。SI-39、53、54、65B、88、162、206A の7軒である。

Ⅶ期は(奈良末)～平安時代前期(8世紀末～9世紀中)で坏は箱型や少し丸みをもって開く小振りの坏で手持ちヘラケズリがなされる例や両面に丁寧なヘラミガキがなされる例。器高は低く底部切り離しはヘラによる例。一部にロクロ回転糸切り離しの底部をもつ例もある。甕、甗、台付甕があり、須恵器は坏、蓋坏、長頸壺、甕がある。SI-07、11、42、43、45、84A、(84B)、86、87の9軒である。なお、当期は、少なくとも更に3期に分けられる。

Ⅷ期は、平安時代中様(9世紀後半から10世紀前半)のより幅がある時期を設定した。坏は一部に

手持ちや回転ヘラケズリの底部切り離しが残る。器高の低い皿状の例や開く体部をもつ例も存在する。高台付埴がみられ、内面は黒色処理される。須恵器甕などが残る一方、灰釉陶器の埴もみられる。10世紀に入ると小振りで開きぎみの坏や大型で開く体部をもつ坏がみられ、足高高台付埴や高台付の内面黒色処理の坏（埴）が存在する。甕は大小の長胴の形体である。SI-03、30、32、(38)、(58)、60、83、85、91、95、103、110の12軒である。当期も、少なくとも3期に更に分けられる。

IX期は、10世紀第4四半紀頃～11世紀初頭頃でSI-08が相当し、いわゆる土師質土器（坏）でかわらけを彷彿させる小形で浅い坏であり、足高高台もみられる。

以上12期に区分した。この他に詳細が不明で組み入れなかった住居がある。そのうち久ヶ原式はSI-19、20、22、23、24、64、67B、82、92、94、96、99B、101、105B、109、192B、203B、鴨居上ノ台式が、SI-14、15、66B、194、207、五領式がSI-51と171B、平安期がSI-44と89を考えている。

各時期区分の他編年との対応については、I期が君津編年（諸墨他1996）のO期、陣内編年O期、IIa期は、君津編年のI～II期、大村編年のTB Ia～Ib前半、陣内編年の1～2期、田中編年のI～IIa期、IIb期は、君津編年のIIIの前半期、大村編年のTB Ib末頃、陣内編年の4期、田中編年のIV期、IIIa期は、君津編年のIV～V期、大村編年のTB IIa～IIb前半、陣内編年の5～6期、田中編年のVa～Vb期、IIIb期は、君津編年のVI期、大村編年のTB IIb後半、陣内編年の7期、加藤編年の草刈I期後半、IV期が君津編年のVIIa～VIII期、大村編年のTE Ia～TE II後半、陣内編年の8以降、加藤編年の草刈II～III、V期は、加藤編年の和泉式以降、小澤編年の2a期、3～4期、木對編年の一部1a～2a期。VI期は、木對編年の5期、VII期以降は年代で表現した^(註2)。

墳墓については、5基の方形周溝墓と9基の円墳を調査した。この時期の研究については、近年、加藤・田中（祐）氏などの労作^(註3)があるが、出現期は「方形周溝墓や墳丘墓」としての理解の沼澤氏や大村氏などと、「古墳」とする田中新史、白井、加藤、小澤氏などの説に分かれるが、当項では大村氏の説で方形周溝墓（と墳丘墓）として扱ってゆく。当地域の出現期では蛇谷遺跡の方形周溝墓と神門古墳群、小田部古墳に代表される墳丘墓が存在する。円墳の普及定着は大厩浅間様に代表されるように草刈III期（五領III式）頃と言われている。釜神遺跡は墳丘のある墳墓はSX-09のみで和泉式期以降で、主体部も検出されていない。出土遺物は周溝から検出された土器類のみである。したがって、残存状況は良好とはいえないが、これらの土器類からおよその時期を割り出すとSX-01は加藤編年のII～III式、SX-07が加藤編年III～（和泉）式、SX-10は五領II末、加藤編年III、SX-11が五領II式（底部焼成前穿孔土器）と考えられる。また、SX-01は主軸長37mの主墳的な墳墓であり、四隅が切れる形態とも考えられる。また、SX-12は最も小型で長軸7.3mを測る。これら墳墓から出土した土器については、墳丘内、周溝内^(註4)ともに遺構に伴う土器の見極めが困難とも言われており、本項では客観的な事実のみを述べることにとどめる。

次の和泉式以降では、SX-08が和泉II式、SX-09は和泉I式、加藤編年和泉式、SX-13は和泉式、小澤編年（1期～2期頃）、SX-16が和泉から鬼高式（木對編年の2b'期、小澤編年の5期）、SX-17は和泉II式（小澤編年の3期）、SX-18は鬼高式初頭、SX-19が和泉式末期～鬼高式初頭（小澤編年の4～5期）、SX-05と06は直接関連する出土遺物は無いが、形体や立地、互いに近接している点などから和泉末～鬼高初頭頃と推定している。

SX-04は、出土遺物より10世紀後半頃から11世紀初め頃の時期と考えられ、南側斜面を切り込んで

平坦面を造り、東西2棟の総柱掘立柱建物を配置し、中央に土坑や炉を置いている。詳細は櫻井氏が記述しており、2時期に分けられるが、機能、性格等は不明である。しかし、穴澤義功氏によれば、出土した壁材は雑な作りであり、焼成温度は低く、内面に煤の付く例がある点などからカマドの可能性が伺えると言われる。また、炉内からは灰が多く、竹や稲科の燃料を燃やしており、木炭が出ている点などから「麻蒸し」の施設ではないかと想定され、建物は作業小屋兼倉庫ではないかとも可能性を指摘されている。

SX-15は10世紀後半頃の土師器坏が出土しているが、同様に機能等は不明である。北見氏によれば、炭窯の可能性もあるが結論は出来ないとして、8基検出した炉内の灰などの分析によると、「置き火」の痕跡も伺えるようである。

貝類の出土した遺構は、SX-15とSK-14、34、35である。分析は鶴岡氏にお願いした。SK-14は、弥生後期の所産と考えられるが、ハマグリとシオフキガイが主体である。SK-34、35はいずれもイボキサゴが主であるが、時期が不明。SX-15は平安時代後期後葉の所産で、やはり、イボキサゴが100%にちかい数値で同定されている。

出土遺物で注目される例が銅釧である。SI-70と129より検出され、弥生後期の所産とみられる。

また、ガラス小玉がSI-129より1点のみであるが検出されている。

鉄製品では、鋤先がSI-110、刀子はSX-08、22、87の3点、鉄鏃はSI-87より、鎌はSX-18とSI-81、190より、また、絞具とみられる例がSI-83と87などから検出されている。

土坑は、50基が検出され、土壇墓が5基、木棺痕の有る例は、SK-19と31で、出土遺物はSK-19より石斧、SK-24よりかわらけが1点出土している。いずれも時期を推定できるだけであるが、この他には特に認められない。また、陥穴は2基（SK-27がAb類、SK-32がBc類）のみである。他は機能性格ともに不明である。

自然科学分析結果では、古植生は弥生時代から平安時代にかけてネザサ節・ヤダケ属を含むタケ亜科の笹類が多く生育し、周辺低地では弥生時代以降稲作が営まれていた可能性が伺われた。弥生時代の炉や平安時代のカマドの灰を調べた結果、一部の調査ではあるが燃料材として稲の植物体を使用されている点が注目される。また、西側谷面（後谷遺跡）での古環境は、E層が「弥生の小海退」と呼ばれる時期、D層が稲作の開始時期と推定されており、谷の出口付近は養老川の影響を受けているが、谷内部ではD層ではイネ科を中心とした草地在り、併せて稲作が行われるようになったとされている。

弥生土器の胎土分析については、放散虫化石や骨針化石、あるいは軽石テフラを普遍的に含み、釜神遺跡の立地する台地周辺の下層（下総層群）が土器材料確保にあたって密接な関連をもつことを伺わせた。しかし、詳細な層位については確認されていない。また、土器の軽量化のために軽石を胎土に使用した可能性も推定された。

遺跡の遺構変遷を全体図からみると、I期（宮ノ台式末葉）では、台地北側中央付近に竪穴住居跡が認められ、IIa期（弥生時代後期初め頃）では北側台地全体に広がる。IIb期で最も多く存在し、IIc期がやや減少する。IIIa期では更に減少し、比較的南側に片寄る傾向があり、IIIb期はより少ないが同様の傾向が認められる。古墳時代前期では東側を中心として台地全体にまばらに存在するが前期の方形周溝墓と重複する例があり、竪穴住居が古く、その後に墳墓が造られたと考えている。中期

は（一部後期初頭まで入る例もある）、台地縁辺部に9基の円墳が築造される。また、竪穴住居跡は台地上に散在するが、一部は台地西端部に集中する点が注目される。後期では台地中央付近に存在する。奈良末葉から平安時代前葉（8世紀末～9世紀中頃）は東側縁辺部と南側に存在し、平安時代中葉（9世紀後葉から10世紀前半）でも同様の傾向が伺える。10世紀末から11世紀はじめ頃には、南側と北側の斜面を利用して生産的な施設が営まれている。このように一部時期の不確定な遺構も多いが、概略的に遺構の時期別立地関係を推定した。

以上のように簡単にまとめとして特徴などを追ってきたが、本書全体として文章説明の少なさが目立つ内容になってしまった。これは編集者の責に負うところ大である。

しかし、刊行までこぎつけることが出来たのも、現場発掘者である大村氏や地道に整理作業をされて来られた小出、北見、櫻井の各氏や前任者の高橋、蜂屋氏の努力の賜であり、文面を借りてお礼を申し上げたい。また、大村氏の日頃の研究姿勢にはその成果と相まって頭の下がる思いであり、敬意を表します。

なお、整理作業に尽力された小出紳夫氏には、平成13年10月15日に急逝されました。末筆ながら、ご冥福をお祈りいたします。

- 註1 ①大村直、菊地健一 「久ヶ原式と弥生町式—南関東における弥生時代後期の諸様相（予報）」『史館』第16号 1984、史館同人 P97～113
②大村直 「3. 東京湾東岸における土器編年と集落の動態」『シンポジウム2、東日本における古墳出現過程の再検討』1993 日本考古学協会新潟大会実行委員会 P401～407
③大村直 「Ⅳ考察」『下鈴野遺跡』1987 （財）市原市文化財センター P181～200
④大村直 「戸張一番割遺跡の甕形」『史館』第25号 1994 史館同人 P23～52
⑤菊地健一 「一つの甕から—弥生時代後期から古墳時代はじめにかけての叩き甕について—」『史館』第22号 1990 史館同人 P24～90
⑥陣内康光 「千葉県市原市周辺の後期弥生土器、土器編年と東海系土器」『東海系土器の移動からみた東日本における後期弥生土器』1991 P147～152
⑦共同研究 「君津地方における弥生後期—古墳前期の諸様相」『君津郡市文化財センター研究紀要Ⅶ』1996
⑧松本 完 「南関東における後期弥生土器の編年と地域性」1993『翔古論聚—久保哲三先生論文集』久保哲三先生追悼論文集刊行会 真陽社
⑨田中清美 「唐崎台遺跡の竪穴住居跡等の編年試案」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』1993
⑩小沢洋 「房総の古墳中期土器とその周辺」『東国土器研究』第5号 1999 東国土器研究会
⑪木對和紀 「竪穴住居の耐久年数からみた房総における古墳時代須恵器の出現と終焉—椎津茶ノ木遺跡を中心として—」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』P249～324 1993 （財）市原市文化財センター
⑫加藤修司 「第1章 土器編年案」『房総における前期古墳の展開—重要遺跡確認調査の成果と課題4—』2001 （財）千葉県文化財センター P13～42

註2 奈良時代以降の土器編年については、次の編年を参照した。

- ①田所真 「1 市原市坊作遺跡（旧市原郡）」『房総における歴史時代土器の研究』1987 房総歴史考古学研究会 P9～38
②浅利幸一 「2 市原市稲荷台遺跡（旧市原郡）」『房総における歴史時代土器の研究』1987 房総歴史考古学研究会 P39～46
③笹生衛 「房総における中世的土器様相の成立過程—房総における古代から中世初期の土器様相—」『史館』第21号 1989 史館同人 P81～108

註3 註1の⑩

註4 周辺には、養老川対岸の右岸に、出現期の神門古墳群、蛇谷方形周溝墓、左岸には大型の定型化した前方後円

墳と言われる今富塚山古墳などが所在し、いわゆる前期古墳を含めた幅広い墳墓変遷の比較検討が必要である。

註5 大村直 「(3)土壙」『下鈴野遺跡』 1987 (財)市原市文化財センター P28～31

なお、この分類を更に「新生荻原野遺跡」で追加し、今回も1類(Bc類)追加した。下表第118表参照。

註6 高橋康男氏ご教示

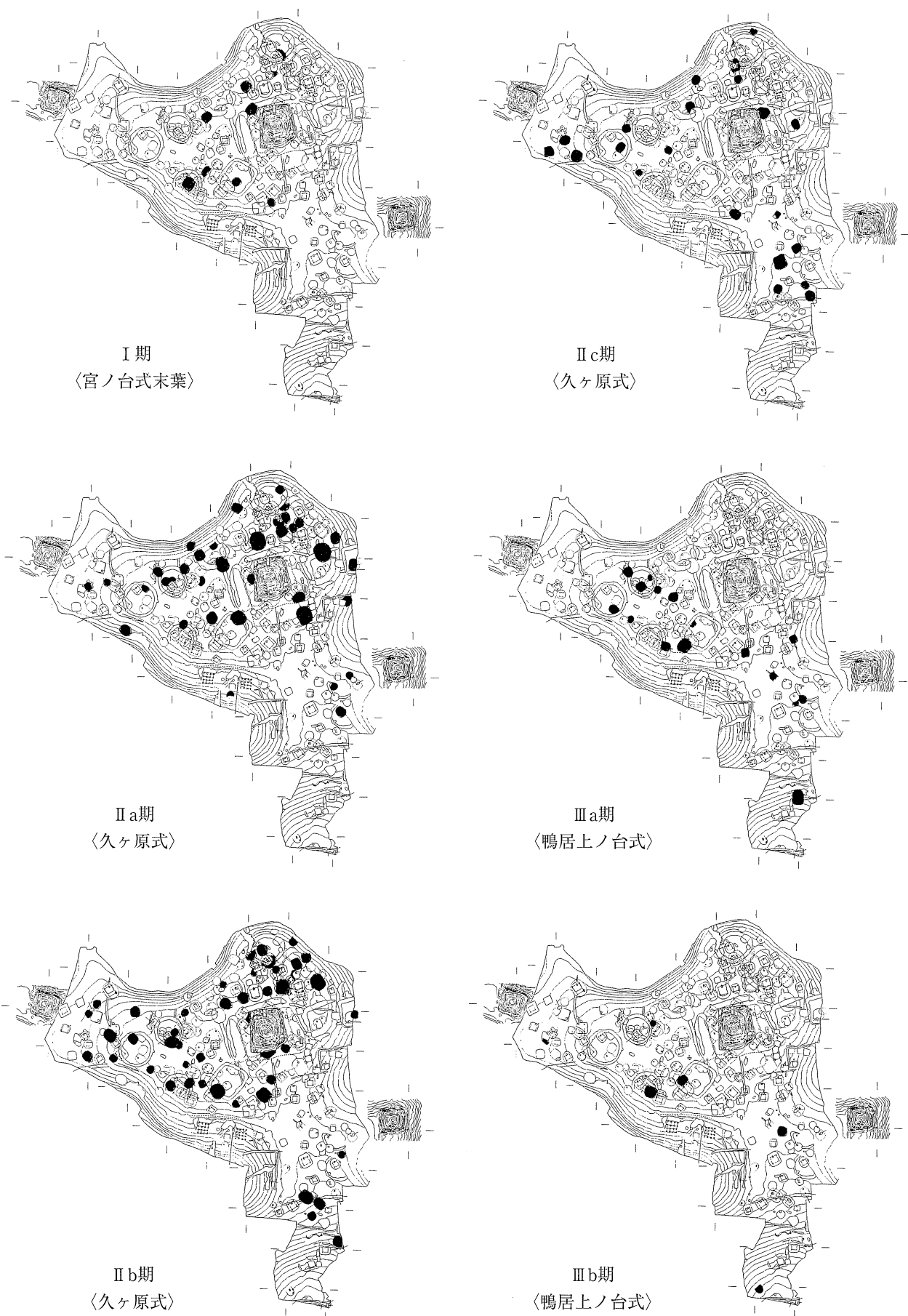
高橋康男、蜂屋孝之 「市原市西国吉遺跡」 1999 (財)市原市文化財センター P22他。

工樂善通 「6-1 阿島式・須和田式土器のなかま」 『弥生文化の研究4』 1987 雄山閣出版 P143～150

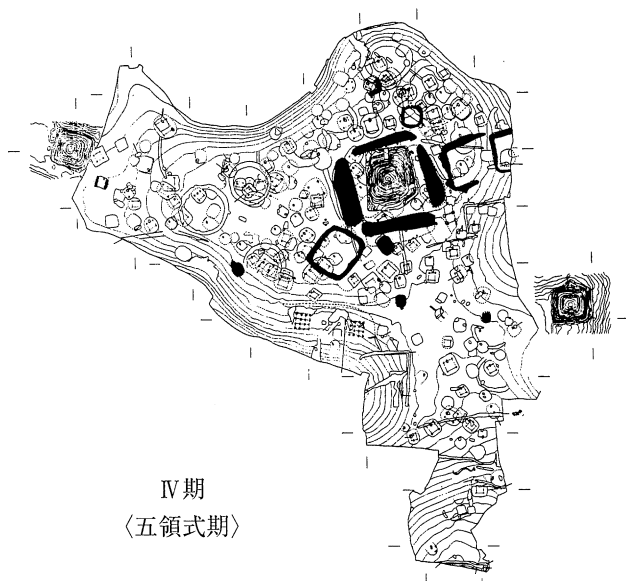
第125表

陥し穴の分類 (大村分類)

Aa 類	平面形体がほぼ長方形を呈する例。
Ab 類	底面に柱穴状のピットをもつ例 (2本以上)
Ac 類	〃 (1本)
B (a) 類	平面形態が楕円形を呈する例。
Bb 類	底面に柱穴状のピットをもつ例 (1本)。
Bc 類	〃 (2本以上)。今回追加
C 類	平面形態がほぼ円形を呈する例。
Da1類	底面が幅狭の溝状を呈し、深さがほぼ一定の例。
Da2類	〃 、中央部が深くなる例。
Da3類	〃 、両端が袋状になる例。
Db1類	底面がやや幅広の溝状を呈し、深さがほぼ一定の例。
Db2類	〃 、中央部が深くなる例。
Db3類	〃 、両端が袋状になる例。
De1類	底面が幅狭の溝状を呈し、屈曲する例。
De1類	底面がやや幅広の溝状を呈し、屈曲する例。



第287図 時期別変遷図(1)



第288図 時期別変遷図(2)

